K. Takenouchi
April 1939

Komiya, Toyotaka
Natsume Sōseki

夏目漱石



序

漱石は、五十になつた年の春、手帳に「○Life　露西亞の小説を讀んで自分と同じ事が書いてあるのに驚ろく。さうして只クリチカルの瞬間にうまく逃れたと逃れないとの相違である。といふ筋」と書きつけた。この「露西亞の小説」といふのが、必しも當時漱石が讀んだドストイェフスキの小説を、意味する筈のものではなかつたのかも知れないが、ともかく漱石が、さういふ筋の小説をいつかは書いて見たいと思つたほど、自分の生活が「露西亞の小説」の主人公と似てゐるのに驚いたといふ事は、注目に値ひする。さう言へば『道草』の健三の生活など、どこを一つ截り取つて來ても、すべて「クリチカルの瞬間」だつたと言つて可いのである。私の『夏目漱石』は、漱石のこの述懷を、まづライト・モーティフとする。

然し傳記に必要な事は、冷靜な客觀的な態度である。ライト・モーティフはなんでも、そのライト・モーティフに沿うて展開される漱石の生活は、科學的な、細緻な、精到な、私のない、敍

述を持たなければならない。無論私はそれを念願とした。然し何を言ふにも、漱石は私の敬愛する先生であつた。不愉快であればさぞ不愉快だつたらうと思ひ、苦しければさぞ苦しかつたらうと思ひ、自然私は、私の感情を漱石のその時その時の心持の中に移入し過ぎて、敍述の筆の調子に狂ひを來たす事を、屢經驗しない譯に行かなかつた。是は後に、原稿を讀み直す際に、特に注意して書き改められたが、それでもこの『夏目漱石』は、その點でムラのある、冷熱の調子のよくとれてゐない、讀みづらいものになつてゐはしないかと思ふ。然しそれは今の所、私には是以上どうしやうもない。ただ私は、私が漱石を敬愛するのあまり、此所で傳記記者の根本の心構へを取り外づし、贔屓の引き倒しをしたり、或は自分が漱石になつた氣で、漱石を描きながら、實は自分の我を人に押しつけてゐるといふやうな事が、ないやうにと念じるのみである。

ゲーテは、自分の書く一切の作品は、自分の死によつて閉ぢられる、大きな懺悔録（コンフエッシオーン）の、斷片であるに過ぎないと言つてゐる。漱石は、別にさういふ事は言はなかつた。然し漱石のすべての作品は、事實その通りのものであつた。勿論漱石は、何を書いても、その時その時の漱石を、その中に打ち込んでゐないものはない。その點で漱石のどの作品も、必ず漱石の刻印を擔つてゐる。然しその時その時の漱石は、所詮はその時その時の漱石で、漱石の全貌は、漱石が死んで初めて、我我の眼の前に現はれるのである。その點で漱石のどの作品も、漱石の次の作品の爲の踏臺にな

つてゐたのだと言ふ事が出來る。棺を蓋うて後名定まるといふが、漱石は別な意味で、棺を蓋はなければ名を定める事の出來ない作家だつたのである。

從つて私が此所で努めなければならなかつた事は、その漱石の動的な生活を、動的に把握し、動的に敍述する點にあつた。もつとも一面から言へば、漱石の生活態度は、殆んど生れながらに決定されてゐた。漱石は『文學論』の中で、天才と天才でないものとを區別するものは、その生活に「核」があるかないかであると言つてゐる。漱石が自分を天才であると思つてゐたかどうかは問題であるとしても、ともかく漱石の生活には、子供の時から、はつきりした「核」があつた。然もこの「核」は、漱石が現實に觸れる事深刻であればあるほど、次第に脫皮し、次第に成長して行つた。その意味で漱石の生活の「核」の脫皮と成長とを跡づける事は、漱石の人生觀・藝術觀の脫皮と成長とを跡づける事である。それが此所で十分成就されてゐるかどうかは、私には分からない。蟹は自分の甲羅に似せて穴を掘ると言はれる。私は、私自身の下根と未熟とが、漱石を自分に似せた穴に掘つてしまひはしなかつたかを、惧れる。

是を書き上げるに就いて、私はいろんな人の御世話を蒙つた。私は中に、一一出所を書いて、それらの人人に負ふ所を明らかにしたが、然し引用の都合上、或は不知不識のうちに、出所を明記する事を怠つた場合も、或はあるかも知れない。是は切に寬容を祈りたい。ただ緣の下の力持

として、私の爲にいろんな材料を集め、いろんな調査をしてくれたのみならず、最後に原稿に眼を通し、引用文の出入その他に丁寧な注意を向けてくれた岩波書店の長田幹雄君の好意に對しては、中で何所でも觸れやうがなかつた。此所に特記して、謝意を表したいと思ふ。

小宮豐隆

昭和十三年四月二十日

目次

一　系圖

『坊つちやん』の中に坊つちやんが、「……是でも元は旗本だ。旗本の元は淸和源氏で、多田の滿仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ。只智慧のない所が惜しい丈だ。……」と、いきまく所が書いてある。旗本の中に「夏目」といふのがあつて、それが淸和源氏で、多田の滿仲の後裔ではないまでも、滿仲の弟の、從五位上下野守多田滿快の流れを汲んだ家であるといふ事は、『諸家系圖纂』だの『寬政重修諸家譜』だのに眼を通した事のある人なら、恐らく誰でも知つてゐる。漱石の家は、「夏目」は同じ「夏目」でも、旗本ではなく、名主であつた。然し本家に傳はる夏目家系圖によると、漱石の家の「夏目」も亦旗本の「夏目」と同じやうに、多田の滿快から八代目で、賴朝から功によつて信濃國夏目村の地頭職に補せられたといふ、二柳三郎大夫國忠の二男、夏目左近將監國平を祖とするといふ事になつてゐる。『坊つちやん』の中のこの一節は、漱石が嘗て何かの機會にうちの者から聽かされた家の系圖が、遠いこだまのやうに響き

出たものではないかと思ふ。

もつとも旗本の「夏目」は、夏目左近將監國平の何代目かが三河に移り、又その何代目かが家康に仕へてゐる。漱石の家の「夏目」は、相當長い間、信州の夏目邑に住んでゐて、左近將監から十代目の、夏目彌次右衛門信貞の時、信貞の仕へてゐた小笠原持長が家督爭ひを始め、その爲め小笠原の家中は二つに割れてしまつたが、持長方は甲州の武田家へ內通してゐるといふ事が露顯したので、信貞は甲斐國八代郡に遁れて蟄居、後に「跡部上總介」の推擧で、信玄の曾祖父武田信昌に仕へ、軍功によつて、八代郡夏目原邑を領するに至つたといふ事になつてゐる。然るに信貞から五代目の、彌三郎信賴は、天正十年(西暦一五八二)武田勝賴が天目山で沒落した爲に、武藏國埼玉郡岩槻邑に隱れたが、程なく召し出されて岩槻の城主太田十郎氏房に仕へ、天正十八年(一五九〇)の小田原合戰の際には、岩槻城の留守を守つた。小田原が落城するに及んで、信賴は岩槻領の寺塚邑に隱れたが、後再び召出されて、岩槻の新城主高力河內守淸長に祿三百五十石で仕へ、子の權三郎氏正の時には、淸長の子、土佐守正長の近習馬廻役に加へられ、二百石加增されて、祿五百五十石を食むに至つた。然しその氏正は、後に病氣の爲に致仕し、豐島郡に引き籠り、「野士」として邑事を掌つた。その子が夏目四兵衛直情で、豐島郡牛籠村に住み、將軍綱吉の時分、元祿十五年(一七〇二)四月、もと權八と言つたのを四兵衛と改めて、「名主役被仰付」

た、最初の人だつたのださうである。
太田亮の『姓氏家系大辭典』を見ると、諸國の「夏目」を列擧した中に、「甲斐の夏目氏　八代郡夏目原の名族也」と書いてある。是は何を典據としたものであるか、私には分からない。從つてこの「夏目」と漱石の家の「夏目」とが、果して同じものであるかどうかを明らかにする事が出來ない。ただ篠本二郎の『腕白時代の漱石』によると、篠本の伯父は篠本に、「夏目の祖先は、甲斐の信玄の有力なる旗本であつた」と話して聞かせたのださうである。漱石の家は、或はその「八代郡夏目原の名族」だつたのかも知れない。六孫王經基にその端を發する「由緒」の上から言へば、是が「名族」であつたとしても、少しも不都合はないからである。
もつともこの夏目家の系圖といふものが、どれだけ信用して可いのか、分からない。のみならず篠本二郎の伯父の言葉といふものも、どれだけ信用して可いのか、なほの事分からない。篠本の伯父は、「夏目の祖先は、甲斐の信玄の有力なる旗本であつたが、信玄の重臣某が德川家に內通せし時、共にあづかりて德川家の家臣となつたのだ。又余の家も信玄の旗本にて、勝賴天目山に生害せられし後、德川家に降りて家臣となつたのである以上、重臣の謀叛さへなければ武田家の運命も今少しは續きしならん」と、子供の篠本に話して聽かせ、それを篠本は漱石と喧嘩をする度毎に言ひ出して、漱石をへこませる唯一の切札にしてゐたといふが、是もほんとか出鱈目か、

はつきりした所は分からない。

武田家の重臣で武田家を裏切り、武田家滅亡の期を早めたといへば、恐らく穴山梅雪齋の事をさすものに違ひない。それでなければ小山田出羽守であるが、然し夏目家の系圖には、「跡部上總介」の名前は出て來ても、「穴山」もしくは「小山田」の名前は、出て來ない。勿論系圖にさういふ名前の出て來ない事が、必しも漱石の祖先と穴山梅雪齋だの小山田出羽守だのと關係がなかつた事を證明するものではないが、それにしても、もし漱石の祖先が甲州の「名族」であつたり、「有力なる旗本」であつたりしたのなら、勝頼が自刃した後、穴山梅雪齋は勢多の橋詰で田夫野人の手に倒され、小山田出羽守信茂も信濃の善光寺で刺し殺され、その他長坂釣閑齋・跡部越中守始め、勝頼の「有力な」家來が多勢「在々所々」で、「鵜鷹ノ餌ヲ打様ニ」打ち殺されたと書いてある『甲亂記』などには、殺されたにしろ殺されなかつたにしろ、どこかに「夏目」といふ名前が、一度くらゐは出て來さうなものである。然し「夏目」といふ名前は、この種の本の中には、殆んど出て來ない。のみならず夏目家の系圖には、「跡部上總介」の推擧で夏目信貞が武田信昌に仕へたやうな事になつてゐるが、例へば『甲州志』のやうなものを調べて見ても、「跡部上總介」などといふ名前は、何所にも出てゐないやうなのである。

こんな事は、言はば、どうでも可い事であつた。然しどうでもよくない事は、漱石が牛込の市

谷小學に通學してゐる時分、篠本二郎からこの裏切の事を言ひ出され、その爲め漱石は屢へこまなければならなかつたといふ事である。漱石は明治四十年（一九〇七）二月の『趣味』に掲載された談話筆記『僕の昔』の中で、「僕の家は武田信玄の苗裔（いへすち）だぜ。えらいだらう。處が一つえらくないことがあるんだ。何でも何代目かの人が、君に裏切りとかをしたといふことだ。」と言つてゐる。「武田信玄の苗裔（いへすち）」といふのは、必ず漱石の思ひ違ひか、筆記者の書き違ひかである。然し自分の遠い先祖の内に、「君に裏切り」をした者がゐたといふ事實の暴露は、恐らく小さい、正直な漱石の心を、ひどく傷け、その記憶が、古い古い惡夢の名殘かなぞのやうに、四十歳の漱石の頭の中に、ぼんやり動いてゐた爲に、自分の過去を物語る際に、それが不圖かういふ言葉となつて現はれたものに相違ないのである。然もかういふ話は、決してうちの者から話して聽かされる筈のものではなかつたとすれば、漱石は是を、恐らく篠本二郎の口から、さうして篠本は篠本の伯父の口から、聞かされたものに相違ないのである。然もそれが、確とした資料の上に立つた斷定でなかつたとすれば、漱石は架空の汚辱に惱まされた譯であつた。

　夏目家の傳へによると、夏目家は「江戸草分の名主」だといふ事になつてゐる。然るに系圖では、夏目四兵衞直情が元祿十五年（一七〇二）に、初めて「名主役被仰付」てゐる。元祿十五年に名主役仰せ付けられた者が、「草分の名主」である筈がない。もつとも『御府内備考』を見ると、

「馬場下横町」の部の「丁亥書上」の中には、「一舊家　名主小兵衛」とある。この小兵衛は漱石の祖父、夏目小兵衛直基である。既に文政十年（一八二七）の「書上」にわざわざ「舊家」と斷つてある以上、名主になつたのは元祿十五年でも、それで結構「江戸草分の名主」で通つてゐたものかとも思はれる。さう言へば『守貞漫稿』には、「愚按、江戸草創の時は、官に請て随意に地を賜ひし也。是を草分町人と云。今は其家存する者稀也。草創の人より他人に譲るに及んで、始て金祿を以てし、今に至る。草創町人の内より擇で名主を命じ、今に至り相續するあり。或は其家亡て新名主代之もあるべし。」と書いてある。漱石の祖先は、早く浪人して「武州豐島郡牛籠邑」に住んでゐたのだから、元より「草分町人」だつたのには違ひない。然も漱石の祖先は選まれて名主になつたらしいから、名主になつたのは元祿十五年でも、當然「江戸草分の名主」と稱して差支なかつたのかも知れない。

系圖によると、夏目四兵衛直情の子が、夏目四兵衛直晴である。是が吉宗の時分、享保十年（一七二五）十二月に父の家督を襲いで「名主役被仰付」てゐる。然るに享保十四年・享保十七年・享保十九年、三種の『萬世町鑑』を見ても、四兵衛といふ名前は、何所にも出て來ない。それが享保二十年（一七三五）六月の『萬世町鑑』に至つて、「寺社御支配町方門前地方角附」の部の「馬場下横町」の下に「名主　四兵衛」といふ名前が、初めて出て來るのである。七年後の寛保二年（一

七四二）七月の『萬世町鑑』に於いても同様である。この四兵衞が、恐らく四兵衞直晴の事なのだらうと思ふ。とすると、四兵衞は享保二十年（一七三五）に初めて名主になつたので、從つて「夏目」の家は「草分の名主」でもなんでもない事になるのであるが、然し其所の所は、やはりはつきり分からない。帝國圖書館所藏の、何年頃のものともはつきりしない町鑑の寫本（中に寛政、享和、天保などの年號がある）に、江戸草分の名主二十七人の姓名を列記したものがあるが、それには「夏目小兵衞」の名前は見當らない。「丁亥書上」の「舊家」といふのは、ただ「舊家」といふだけの事で、それが「草分」を意味するものではなかつたのかも知れない。――もつとも名主には、草分名主・古町名主・平名主・門前名主の、四等の名主があつた。是で見ると四兵衞直晴は、その一番下の「門前名主」といふのであつたらしいが、然し是も、四兵衞が以前からそれであつたのが、享保二十年の町鑑で、初めて登錄されたのだと、考へられない事もない。然し是も分からない。

四兵衞直晴は養子だつたやうである。然しこの四兵衞が何所から養子に來たのか、系圖では分からない。ただこの四兵衞直晴は隨分長命だつたらしく、名主になつてから凡そ五十年、安永二年（一七七三）に死んだ事になつてゐる。然もこの四兵衞直晴にも男の子がなかつた。それで「板倉周防守勝澄家臣臼井甚左衞門信秀」の次男、小兵衞直克が養はれてその跡を襲ぎ、家治の時代、

安永二年四月に「名主役被仰付」てゐる。

不思議な事は、夏目家の系圖も、夏目家の過去帳も、この小兵衞直克の時から、急にその精しさを增して來てゐる事である。殊に夏目家の過去帳には、最初に「釋祐壽」とあり、その下に「勢州鈴鹿郡三寺村／臼井／世名甚左衞門／倅小右衞門」と書いてあつて、その跡に大部分「臼井」一家の佛の名前が續くけれども、夏目四兵衞直情の釋名も夏目四兵衞直晴の釋名も、何所にも書いてない。のみならずそれまでは夏目の家の通り名は四兵衞であつたらしいのに對して、この直克以來はずつと小兵衞で通す事になつてゐる。漱石の父の如きは、通り名は元より、名のりまでも同樣の、小兵衞直克である。是は或はこの小兵衞直克に來て、夏目家の內容がすつかり入れ代るやうな、變動——例へば臼井家の者が名主の株を買つて、「夏目」といふ姓を冒したといふやうな事——があつたのではないかと思はれる。さういふ例がいくらもあつた事は、既に『守貞漫稿』にも書いてある。少くともこの小兵衞直克は、夏目家中興の祖のやうなものだつたには違ひないのである。——漱石の次兄榮之助は、「臼井」姓を襲ひ、然も子なくして若く世を去つた時に、遺言して自分の妻の弟にこの姓を襲がしめた。然も現實に「臼井」といふ家があつて、榮之助が其所に養子に行つてゐたのでなかつた事は、榮之助が東京にゐる間は、父の家に住んでゐたのでも知れる。是も恐らく、夏目家の過去帳を貫ぬく精神と同じ精神から、卽ち初代小兵衞直克が出

た「臼井」家を大事にするといふ精神から、生れて來たものであるに違ひない。すると夏目家には信濃の血と、甲斐の血と、伊勢の血と、いろんな血が流れ込んでゐた筈である。

もつとも夏目家では、この小兵衞直克の子の直道が二十八歳で死んで、恐らくその妻に、新たに養子を迎へてゐる。是が、「武州多摩郡中野邑名主堀江卯右衞門」の弟で、一同州內藤新宿名主高松善六」の甥に當り、その高松善六を實家として夏目家に來た、小兵衞直基である。然しこの小兵衞直基は、小兵衞直克の場合のやうに、自分の出た「堀江」もしくは「高松」をそれほど大事にはしなかつた。少くとも夏目家の過去帳には、その關係の名前があまり見當らない。從つて是は、純粹の養子だつたのだらうと想像される。是が漱石の祖父に當り、一代に身上を傾け悉したほどの道樂者で、雜司ケ谷鬼子母神の茗荷屋で、酒の上で頓死をしたと言はれてゐる人である。その子が、漱石の父にあたる、小兵衞直克であつた。系圖には「天保三年(一八三二)名主役見習被仰付」れ、天保十四年(一八四三)父が隱居して名を啓助と改めた跡を襲うて、家督相續するとともに「名主役被仰付」れたと書いてある。直克の父の直基は、文政四年(一八二一)の四月から「御鷹場內御場肝煎役相勤賜二人扶持」はる事になつたといふが、隱居してもその方はやめなかつたと見えて、直克がその跡を繼いだのは、父が六十九歲で死んだ、嘉永五年(一八五二)十二月の事であつた。

夏目家系圖の初めに「紋（井桁之内十六葉ノ菊）籬架菊」と書いてある。『諸家系圖纂』だの『寛政重修諸家譜』だのによると、夏目左近將監から脈をひいた旗本の「夏目」でも、紋所に「籬架菊（ませぎく）」を用ひてゐる。元來「籬架菊」の紋は、ほんとに籬架に菊をあしらつた、寫生風の圖案畫であつたのが、後になるほど文様化し、貞享の比には、既に「井桁に菊」の紋と同じものになつてゐたのだといふ。從つて系圖に「紋（井桁之内十六葉ノ菊）籬架菊」とあるのは、少しも不思議ではない。漱石は『硝子戸の中』に、「私の家の定紋が井桁に菊なので、夫にちなんだ菊に井戸を使つて、喜久井町としたといふ話は、父自身の口から聽いたのか、又は他（ほか）のものから教はつたのか、何しろ今でも私の耳に殘つてゐる。父は名主がなくなつてから、一時區長といふ役を勤めてゐたので、或はそんな自由も利いたかも知れない……」と書いてゐる。もつとも漱石のつけてゐた紋は、「菊に井桁」ではなくて、「菊菱」であつた。是は十六瓣の菊が、皇室の御紋章として、明治の初年に、一般に用ひる事を禁じられた爲である。

二　名主

『守貞漫稿』に、「名主　坊長を云也。京坂の年寄に同き職なれども、京坂は世職に非ず。江戸は世職にて無他職也。　名主幼若の時、後見人を付て事を掌る。　名主俗に役頭と云。一町中の役頭の意也。又宅を玄關と云。必ず玄關を構ふ故也。名主は門を構へず。門あれども長屋門と云。制に非ず。　京坂年寄は一町一人也。江戸名主は三五町一人置之。今世江戸町數一千六百四十一町、名主二百八十四にて掌之。此内三十人草創の者今に相續す。草創、江戸にてクサワケと云。京坂にて繩張町人と云。　名主は支配地に衆地主より役料を收めて費に供す。又此課金の外に、大小戸より訴訟等ある者は謝金を送るの類、皆役德と名付る。　又名主職を密に賣る者あり。陽には養子と稱し、其賃金を以てす。然りと雖も家名を絶せず。御用達町人も同也。　又名主は奉行所に出るに肩衣を著す。京坂年寄は上下を著し肩衣を許さず。又一刀を帶て役所の戸口に至り除之也。京坂亦許さず」とある。喜多村筠庭は、幕末の名主が、學問もなく、物の道理も辨へず、

纔間だか名主だか分からないやうな生活をしてゐる事を、ひどく慨嘆してゐる。然し江戸の一般の町人の水準に立つて名主を見ると、名主は相當收入もあり、また相當權力もあり、隨分派手な暮しをし、また隨分威張つてもゐたのだから、羨ましい身分だつたには違ひないのである。

漱石は『硝子戸の中』で、自分が生れるか生れないかの時分、自分の家に、軍用金を貸せと言つて、拔身を提げて這入つて來た、八人組の强盜の話を書いてゐる。漱石の父が小判を幾枚か列べたのに對して、强盜がどうしても動かうとしないので、漱石の母の口添で、到頭財布の中にあつた五十兩の金を、澁澁渡してしまつたといふのである。あとで漱石の母は、餘計な事を言ふといつて、父からひどく叱られたといふが、その頃の五十兩といへば、とにかく大金である。さういふ大金が財布の中に入れてあつたとすれば、當時いかに夏目の家が裕福であつたかが、ほぼ想像され得ると思ふ。漱石の父は、自分の父が蕩盡した身上を盛り返す爲に、非常につましく生活し、事實また見事にその一念を成し遂げたのだと言はれてゐる。それにしても、五十兩の金を財布の中に入れて、手近な所に置いてあるほどの裕福な身上が、漱石の父一代で築き上げられたとすれば、名主といふ役も、相當收入の多い役だつたに違ひない。殊に角の「小倉屋の半兵衛さん」は、その强盜から頭を斬られ斬られ、うちには金は一文もない、然し「裏の夏目さんには澤山あるから、あすこへ入らつしやい」と言ひ張つて、結局一文も出さなかつたといふが、是は一時遁

れの口實に過ぎなかつたのかも知れないし、また多少の反感が手傳つてゐたのかも知れないが、然し一般にあすこの家は裕福だと思はれてゐるのでなければ、いくら「小倉屋の半兵衛さん」でも、是ほどまでに强情には言ひ張らなかつた筈である。事實また『硝子戸の中』にも、自分の家には「靑山に田地があつて、其處から上つて來る米丈でも、家のものが食ふには不足がなかつたとか聞いた。現に今生き殘つてゐる三番目の兄などは、其米を舂く音を始終聞いたと云つてゐる。」と書いてある。

それのみではない。同じ『硝子戸の中』には、漱石の姉達が、夜半から起きて支度をして、下男を供につれて、猿若町へ芝居を見に行つてゐた時分の話が書かれてゐる。――「彼等は筑土を下りて、柿の木橫町から揚場へ出て、豫て其處の船宿にあつらへて置いた屋根船に乘」つて、大川へ出て、「流れを溯つて吾妻橋を通り拔けて、今戸の有明樓の傍に」著く。「其處から上つて芝居茶屋迄步いて、それから漸く」「小屋へ送られて行く」。設けの席は必ず高土間で、是は顏なり、髮飾なり、衣裝なりが、一般の人の眼によく著く便宜な場所だといふので、派手を好む人達が、爭つて手に入れたがる場所であつた。「幕の間には役者に隨いてゐる男が、何うぞ樂屋へお遊びに入らつしやいましと云つて案內に來る。すると姉達は此縮緬の模樣のある着物の上に袴を穿いた男の後に跟いて、田之助とか訥升とかいふ贔屓の役者の部屋へ行つて扇子に畫などを描いて貰

つて歸つてくる」。芝居がはねて歸りには、「元來た路を同じ船で揚場迄漕ぎ戻す。無要心だからと云つて、下男が又提灯を點けて迎に行く。宅へ着くのは今の時計で十二時位にはなるのだらう。だから夜半(よなか)から夜半(よなか)迄掛つて彼等は漸く芝居を見る事が出來たのである」。――是は何か歌麿の涼み船の錦繪を思ひ出させるやうな、豪奢な光景である。漱石自身でさへも、「斯んな華麗(はなやか)な話を聞くと、私は果してそれが自分の宅(うち)に起つた事か知らんと疑ひたくなる。何處か下町の富裕な町家の昔を語られたやうな氣もする。」と言つてゐる。

漱石の生れた翌年に明治になつて、社會に大變動が起り、古い社會制度のお蔭でぬくぬくと暮してゐた者は、殆んどすべて落伍者になつてしまつた。それでも漱石の父は、金は持つてゐたし、うちの者が食ひきれないほどの年貢米が上がる田地は持つてゐたし、一時は區長の役も勤めて、相應羽振の良い生活を續けてゐたやうであるが、然し或は人に騙されて投資したものが丸損となつたり、或は判を捺した金は拂はなければならなかつたり、或は上の子供が道樂者で、さんざ金を使はれたり、段段家運が衰退し、漱石の物心つく頃には、漱石をして、自分の家に關する記憶は、總じて「鄙びて」「何處かに薄ら寒い憐れな影を宿してゐる」と言はしめるほど、見すぼらしい狀態に陷つてゐたものらしい。それでもまだ漱石のうちには、漱石が十六七の時分までは、藏の中だの蟲干の折だのに、漱石がそれを見て樂しむ事の出來た畫が、五六十幅もあつた。まし

てその前――御一新の前ごろまでは、漱石の家は、漱石が信じられない位、豪勢な暮しをしてゐたのである。もつともそれが、漱石が、「私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家を呼んで、玄關々々と稱へてゐた。何ういふ意味か解らなかつたが、今考へると、其時分の私には、式臺のついた嚴めしい玄關付の家は、町内にたつた一軒しかなかつたからだらうと思ふ。其式臺を上つた所に、突棒や、袖搦や刺股や、又古ぼけた馬上提灯などが、竝んで懸けてあつた昔なら、私でもまだ覺えてゐる。」と言つてゐる、その「玄關」だの「式臺」だの、或は「突棒」・「刺股」・「袖搦」・「馬上提灯」だのが、すべて生きて口を利いて、町人を脅やかしてゐた時分の事であつた事は、言ふまでもない。

天保十三年（一八四二）の『泰平御江戸鑑』を見ると、夏目小兵衛は「二十番組」の名主の筆頭に立つて、牛込馬場下横丁・同榎町・同天神町・同中里町・同大願寺門前・同誓閑寺門前・同西方寺門前・同來迎寺門前・同淨泉寺門前・同長久寺門前・竝に牛込榎町濟松寺持の高田馬場を支配してゐる。この小兵衛は、恐らく小兵衛直基だつたのに違ひない。然しその子、卽ち漱石の父、小兵衛直克の時といへども、その支配に變りはなかつた。江戸の名主の支配は、少ないのは一二ケ町から、多いのは二十三ケ町、寺社門前では四十餘ケ町に及んだのもあると言はれる。從つて是は、江戸第一の大きな名主とは言はれはしなかつたが、然し相當大きな、また顔の賣れてゐる、

名主なのである。名主は江戸町奉行の支配を受けて、江戸町年寄に隷屬し、その指圖に從つて公務を鞅掌する。町町の取締をはじめ、一切の事に責任を負ひ、町内の紛議を鎭め、不都合な行爲を戒め、時宜によつては是を奉行所へ突き出し、訴訟には裏書をしてやるなど、自分の「玄關」を執務所として行政權のみならず、ある程度の司法權や警察權をも握つてゐたのだから、役德もあれば、人からも畏敬され、殊に茶屋・料理屋・興行場などの人氣商賣では、名主はこわもてにもてたのださうである。名主には金二兩二分から三百兩まで、給料が幾通りもあつたといふが、夏目小兵衛はいくらもらつてゐたか分からない。然し旣に名主としての顏がある以上、こわもてでもなんでも、もてればそれだけ、名主は綺麗に金を使ふ必要もあつたらうと思ふ。例へば自分の娘達を芝居にやつて、その娘達が、茶屋の若い衆や、役者の男衆や、役者自身からさへもちやほやされる爲には、單なるこわもてだけではなく、それ相當の附け屆もしてあつた筈である。殊に漱石の父は、「若い時分には、一中節を習つたり、馴染の女に縮緬の積夜具をして遣つたり」したのだといふ。漱石の父は、後には落魄し、さうして隨分けちけちしてゐたとは言はれてゐても、嘗ては相當贅澤に、派手に、無分別に暮した事もあつたのである。またさういふ暮し方をさせられもしたのである。

三　出生

漱石は慶應三年(一八六七)正月五日に生れた。太陽暦にすると、二月九日の事である。この日は庚申の日に當り、庚申の日に生れた子供は大泥棒になる、然しそれをよける爲には名前に「金」の字をつけると可いといふ迷信があつたので、金之助と名づけられた。

漱石は是まで、小兵衞直克の四男だと信じられてゐた。然し夏目家の過去帳を見ると、漱石は四男ではなく五男である。漱石の三番目の兄、和三郎直矩と漱石との間には、一男・一女があつて、四男久吉は文久二年(一八六二)に生れて元治二年(一八六五)に、四歳で死んでゐる。三女ちかは元治元年(一八六四)に生れて慶應元年(一八六五)に、二歳で死んでゐる。從つて漱石は、後添の千枝が生んだ六人兄弟のうちの、一番末の子である。漱石の母は、漱石を生む時に、こんな年をして子供を生むのは恥づかしいと言つたといふが、慶應三年(一八六七)は千枝四十一の年であつた。漱石の一番上の兄の大一は、安政三年(一八五六)に生れてゐる。二番目の兄榮之助は、

安政五年（一八五八）に生れてゐる。三番目の兄和三郎直矩は安政六年（一八五九）に生れてゐる。

直克の先妻ことは、千駄谷の名主齋藤勘四郎の娘で、嘉永六年（一八五三）に二十九歳で死んで、あとに弘化三年（一八四六）に生れた佐和と、嘉永四年（一八五一）に生れたふさと、二人の女の子を殘した。佐和といふのは、『硝子戸の中』に現はれる、漱石の長姉澤の事である。ふさは同じく『硝子戸の中』に出て來る高田庄吉の妻で、『道草』には、比田の連合として描き出される。――千枝が直克の所へ片づいて來たのは、多分安政元年（一八五四）、直克四十一歳・千枝二十八歳の年の事だつたらうと思はれる。もつとも漱石の季兄、和三郎直矩に從へば、千枝は二十七歳の時、直克の所へ來たのだといふ。するとそれはその前年嘉永六年にあたるが、然しことの死んだのは、その年の十二月十五日の事である。從つてそれは嘉永六年ではあり得ない。然るに過去帳によれば千枝は明治十四年（一八八一）一月二十一日に死んで、五十三年四ケ月といふ事になつてゐるのである。明治十四年一月に死んで五十三年四ケ月だと言へば、文政十年（一八二七）九月か十月に生れたものに相違ない。二十七歳といふのは數へ年ではないのだらう。

『硝子戸の中』で漱石は、「私はつひぞ母の里へ伴れて行かれた覺えがないので、長い間母が何處から嫁に來たのか知らずに暮してゐた。自分から求めて訊きたがるやうな好奇心は更になかつた。それで其點も矢張ぼんやり霞んで見えるより外に仕方がないのだが、母が四谷大番町で生れ

たといふ話丈は確に聞いてゐた。宅は質屋であつたらしい。藏が幾戸前とかあつたのだと、かつて人から教へられたやうにも思ふが、何しろ其大番町といふ所を、此年になる迄今だに通つた事のない私のことだから、そんな細な點は丸で忘れてしまつた。たとひそれが事實であつたにせよ、私の今有つてゐる母の記念のなかに藏屋敷などは決して現れて來ないのである。大方其頃にはもう潰れて仕舞つたのだらう。」と言つてゐる。さうしてその質屋は、鍵屋といふのだといふ事になつてゐる。然し夏目鏡子が後に漱石の兄、和三郎直矩から聽いた所によれば、漱石の母は四谷の遊女屋の娘で、自分の姉の片づいてゐた先の、芝將監橋の高橋長左衞門の家を里として、夏目家に片づいて來た人なのださうである。さう言へば夏目家の過去帳にも、「高橋長左衞門妹　知惠」と、俗名が書いてある。

『漱石の思ひ出』に、漱石の姉の佐和が、父のきめた縁談に不服で、到頭其所に約束通り三日とか四日とかゐた上で、さつさと歸つて來て、自分の好きな男の所へ片づいて行つた。それが新宿仲町の伊豆橋といふ遊女屋で、その伊豆橋といふのは、漱石の「母の親類」だつたとあるが、この伊豆橋こそ漱石の母の里だつたのださうである。漱石の母の、一番上の姉が、この伊豆橋を繼いだ。二番目の姉が高橋長左衞門の所に片づいた。是は芝の將監橋の側に住んで、島津家の御用商人で炭屋をしてゐたと言はれる。過去帳を見ると佐和の上には、「福田庄兵衞妻」と書いてあ

る。從つて伊豆橋の姓は福田と言つてゐたのであらう。漱石の姉は、義理の從兄の所へ片づいて行つたわけである。

然もその伊豆橋には漱石は、漱石が後に養子にやられた鹽原夫婦と一緒に、暫らく住んでゐた事があるのである。是も『漱石の思ひ出』によると、漱石の姉婿に當る福田庄兵衞は、親たちの意見で堅氣の商賣をさせるといふので、日本橋の藥屋鰯屋に見習に出されてゐたが、後にはやはり親のあとをついで、伊豆橋に坐る事になつた、然し御一新後、遊女はすつかり自由な身體にしてやり、店を閉ぢてしまつたのださうであるが、その店を閉めたあと、建物の始末がつくまで、留守番に鹽原夫婦が漱石を連れて、其所に住み込むのである。『道草』の中で漱石は、「彼は自分の生命を兩斷しやうと試みた。すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が、却て自分を追掛けて來た。彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであつた。」さうして其行き詰まりには、大きな四角な家が建つてゐた。家には幅の廣い階子段のついた二階があつた。其二階の上も下も、健三の眼には同じやうに見えた。廊下で圍まれた中庭もまた眞四角であつた。／不思議な事に、其廣い宅(うち)には人が誰も住んでゐなかつた。それを淋しいとも思はずにゐられる程の幼い彼には、まだ家といふものゝ經驗と理解が缺けてゐた。／彼は幾つとなく續てゐる部屋だの、遠く迄眞直に見える廊下だのを、恰も天井の付いた町のやうに考へた。さうして人の通らない往來を

一人で歩く氣でそこいら中驅け廻つた。／彼は時々表二階へ上つて、細い格子の間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛を掛けたりした馬が何匹も續いて彼の眼の前を過ぎた。路を隔てた眞ん向ふには大きな唐金の佛樣があつた。其佛樣は胡坐をかいて蓮臺の上に坐つてゐた。太い錫杖を擔いでゐた、それから頭に笠を被つてゐた。」と書いてゐる。是は、言ふまでもなく、養父母に連れられてその伊豆橋に住んでゐた時の、漱石の記憶である。漱石は是が伊豆橋といふ遊女屋であつたといふ事を、後に誰かから言つて聽かされたかどうかも、分からない。まして是が自分の母の里であるといふ事などは、なほ更ら言つて聽かされる機會はなかつたらう。漱石は、なんにも知らずに、自分の母の生れた家に、暫らくの間生活してゐたのである。

四

養子

「私は兩親の晩年になつて出來た所謂末ツ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懷姙するのは面目ないと云つたとかいふ話が、今でも折々は繰り返されてゐる。／單に其爲ばかりでもあるまいが、私の兩親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてしまつた。其里といふのは、無論私の記憶に殘つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の賣買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。／私は其道具屋の我樂多と一所に、小さい笊の中に入れられて、每晩四谷の大通りの夜店に曝されてゐたのである。それを或晩私の姊が何かの序に其處を通り掛つた時見付けて、可哀想とでも思つたのだらう、懷へ入れて宅へ連れて來たが、私は其夜どうしても寢付かずに、とう〳〵一晩中泣き續けに泣いたとかいふので、姊は大いに父から叱られたさうである。」と、漱石は『硝子戶の中』に書いてゐる。この里子に出されたのが生後何ケ月の事で、取り戾されたのがいつの事で、その古道具屋といふのが誰であるか、

精しい事は分からない。ただその古道具屋といふのは、夏目家に勤めてゐた下女の、姉の片づいてゐた所だと言ひ傳へられてゐるのみである。然し漱石の兄、和三郎直矩の子供の時分からの友達であつたといふ水谷某のいふ所によると、漱石は佐々木吉藏なる者の世話で、源兵衛村の八百屋へ里子に出されたが、その八百屋が新宿の通りへ夜店を出し、漱石を籠に入れて地べたに置いてゐるのを、その吉藏が見て可哀相に思ひ、漱石の姉に話して實家に引き取るやうにしたのだといふ。然し是もどの程度に信用して可いか、分からない。ともかく、和三郎直矩によると、漱石は其所で三つの歳まで育てられたのださうである。

漱石がなぜ里子に出されたか。それはよくは分からない。然し漱石の母が「こんな年歯をして懐妊するのは面目ない」と言つたといふ以上、漱石の出生が、兩親から歡迎されてゐなかつた事だけは、確實であつた。既に言つたやうに、漱石には腹違ひの姉が二人あつた。同じ腹からでも、四人の兄と一人の姉とが生れてゐる。そのうち二人は、漱石の生れる前に亡くなつたとは言つても、劇しい渦を卷いて、あるはつきりした一つの方向へ向つて、刻刻に動きつつある、當時の社會情勢の中で、一人でも荷厄介が殖えるといふ事は、親にとつて、大變な重荷に感じられたのかも知れない。漱石が連れて歸られた夜、夜中泣き通した爲に、漱石の姉が父から散散叱られたといふのも、單に泣き聲がうるさかつた爲ばかりではなかつたのかも知れない。それだからこそ漱

石は、間もなく新宿二丁目の鹽原昌之助の所へ、また養子にやられるのである。同じ『硝子戸の中』で漱石は、「私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しぢき又ある家へ養子に遣られた。それは慥私の四つの歳であつたやうに思ふ。私は物心のつく八九歳迄其處で成長したが、やがて養家に妙なごた／＼が起つたため、再び實家へ戻る樣な仕儀となつた。」と書いてゐる。漱石のこの記憶に誤りがないとすれば、漱石は明治三年（一八七〇）に鹽原昌之助の許に養はれて行つた筈である。

然し後年復籍の問題で、漱石の父と鹽原昌之助との間にごたごたがあつた時、漱石の父が當局に願ひ出る爲に書いたらしい「手續書」の一節には、「右養父昌之助義ハ内藤新宿北町之住居ノ砌同人幼少ニテ勤向難相成夏目直克方へ引取四五ケ年養育及同丁舊名主爲相勤候緣合ヲ以明治二年十一月中右金之助三歳ノ砌養子ニ差出置候處同七年四月中昌之助義淺草區戸長勤役中日根里かつト申後家へ通合候ヨリ事起リ妻やすト不和ヲ生ジ直克媒人之廉ニ而引取其際金之助ハ八歳ニ而養母ノ手ヲ離レ不申引取置申候右ハ金之助ヲ四ケ年五ケ月昌之助方ニ於テ養育致候迄ニ有之其後十四ケ年間直克方ニ而養育致稽古事等仕込申候然ル處今般長男次男共病死致候ニ付而ハ長男ノ遺言モ有之候ニ付取戻シ家督相續爲致心體ニ有之候」とある。是によると漱石が養子に行つたのは、明治二年（一八六九）十一月で、漱石三歳の時の事である。然るに漱石復籍の話が成立して、いざ

籍を引きとらうとすると、漱石は戸籍面では鹽原昌之助の長男だといふ事になつてゐる。それでは復籍は不可能だといふので、正誤してもらふ事にして、金之助・昌之助・直克・竝に親類の田中重兵衞連署の上で、下谷區長に差し出した「戸籍正誤願」には、「明治元年十一月中私貳歳の砌」養子に行つたのだと書いてある。かうなると、どれを信用して可いか分からない。ただ「手續書」の方には、背景に養育料支拂の問題が搖曳してゐる。從つて其所には、漱石が鹽原の所に養育されてゐた期間が、なるべく短い事を希望する意志が、十分に動いてゐる。漱石が明治元年（一八六八）十一月「貳歳の砌」養はれて行つたといふのが、或は一番正しいのではないかと思ふ。水谷某も、明治元年の事だと言つてゐる。

鹽原昌之助は天保十年（一八三九）に生れたといふから、明治元年（一八六八）には年三十の筈であつた。安政三年（一八五六）の『江戸町鑑』を見ると、鹽原昌之助は、夏目小兵衞と同じ「貳拾番組」に屬する名主で、四谷大宗寺門前・同長安寺門前・同理性寺門前・同東長寺門前とを支配してゐる。所謂「門前名主」だつたらしい。和三郎直矩によると、鹽原の家は新宿二丁目で、大宗寺の裏手に當る所にあつたといふが、『道草』第三十八や第四十一に出て來る「高藪で蔽はれた小さな赤い門の家」といふのが、或はこの家の事をさすのではないかと思はれる。その後鹽原は頼まれて、新宿仲町の、大宗寺の眞向うの家に住んだ。是が前に言つた、伊豆橋といふ遊女屋で

ある。漱石は「路を隔てた眞ん向ふには大きな唐金の佛様があつた。其佛様は胡坐をかいて蓮臺の上に坐つてゐた。太い錫杖を擔いでゐた。それから頭に笠を被つてゐた。／健三は時々薄暗い土間へ下りて、其處からすぐ向側の石段を下りるために馬の通る往來を横切つた。彼は斯うしてよく佛様へ攀ぢ上つた。着物の襞へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まつたりして、後から肩に手が屆くか、又は笠に自分の頭が觸れると、其先はもう何うする事も出來ずにまた下りて來た。／…… 」と書いてゐるが、大宗寺の「門の内に妙門正元坊が造立する所の銅像の地藏尊」が安置してあり、是が「江戸六地藏の第二番目」であつた事は、既に『江戸名所圖會』にも載つてゐて、周知の事である。

和三郎直矩によると、その後鹽原昌之助は、夏目直克の取り立てで、淺草の戸長になつて、淺草諏訪町に越して行つた。是が明治四年頃の事だといふ。然し新宿の大宗寺に於ける漱石の行動や印象などから推すと、どうももう一二年後の事でありさうに思はれる。然し東京府の區制を改め、一小區毎に戸長一人・中戸長一人づつを置く事にしたのが、明治四年（一八七一）十一月の事であり、戸籍法を定めた上で、實地に「檢査編纂」に取りかかつたのが、明治五年（一八七二）二月の事であり、鹽原昌之助はそのどさくさを利用して、漱石を自分の長男として戸籍に登録したと言はれるのだから、鹽原昌之助が戸長として諏訪町に越して行つたのは、やはり明治四年の末

か、遲くとも明治五年の初め比だつたのだらう。『道草』第三十九に、―それから舞臺が急に變つた。淋しい田舍が突然彼の記憶から消えた。／すると表に櫺子窓の付いた小さな宅（うち）が朧氣に彼の前にあらはれた。門のない其宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。さうして右にも左にも折れ曲つてゐた。／彼の記憶がぼんやりしてゐるやうに、彼の家も始終薄暗かつた。彼は日光と其家とを連想する事が出來なかつた。／彼は其處で疱瘡をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、本疱瘡を誘ひ出したのだとかいふ話であつた。彼は暗い櫺子のうちで轉げ廻つた。總身の肉を所嫌はず搔き挘つて泣き叫んだ。」とある。この疱瘡は、後に『猫』の中に書かれて有名になつた、漱石の痘痕の元である。然し是がいつ何所での出來事であるか、はつきりした事は分からない。和三郎直矩の記憶によると、漱石の疱瘡は、多分漱石の四つ位の時だつたと思ふとある。然し漱石のこの記憶に誤りがないならば、是は漱石が一淋しい田舍一から一裏通りらしい町の中一に越して來た後、卽ち新宿から淺草へ越して來た後の事、從つて漱石の、五つか六つかくらゐの時の事でなければならない。

然るに『道草』第三十九には、いかにも諏訪町らしい、別な家の描寫がある。「門口から右へ折れると、他の界際傳ひに石段を三つ程上らなければならなかつた。そこからは幅三尺ばかりの路地で、拔けると廣くて賑やかな通りへ出た。左は廊下を曲つて、今度は反對に二三段下りる順

になつてゐた。すると其處に長方形の廣間があつた。廣間に沿うた土間も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。其上を白帆を懸けた船が何艘となく往つたり來たりした。河岸には柵を結つた中へ薪が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地は、だら〳〵下りに水際迄續いた。石垣の隙間からは蟛蜞がよく鋏を出した。」とあるのが、それである。鹽原昌之助は淺草諏訪町へ來て、一旦その「裏通りらしい町の中」に住んだ上で、同じ諏訪町の内の、この「白帆を懸けた船」の見える家に、越して來たものであるらしい。漱石の記憶によると、この「白帆を懸けた船」の見える家は、「もとは大きな町人の所有」であつたのを、鹽原昌之助が借り受け、一時は廣間を西洋人に貸し、西洋人は其所で英語を敎へてゐた。その後西洋人はゐなくなつて、いつのまにか鹽原の家は「扱所」といふものに變つてゐたといふのだから、或は鹽原昌之助は、留守番を頼まれてゐた伊豆橋の家が賣れるか何かで、取り敢えず「裏通りらしい町の中」の家に越して行き、次いで「白帆を懸けた船」の見える家に移つたあとで、淺草の戸長に取り立てられたものかも知れない。「扱所」といふのは、說明するまでもなく、今日の區役所のやうなものである。『道草』第四十には、「扱所といふのは今の區役所の樣なものらしかつた。みんなが低い机を一列に竝べて事務を執つてゐた。テーブルや椅子が今日のやうに廣く用ひられない時分の事だつたので、疊の上に長く坐るのが、夫程不便でもなかつたのだらう、呼び出されるものも、

また自分から遣つて來るものも、悉く自分の下駄を土間へ脱ぎ捨てゝ掛り〳〵の机の前へ畏つた。

島田は此扱所の頭であつた。從つて彼の席は入口からずつと遠い一番奥の突當りに設けられた。其處から直角に折れ曲つて、河の見える櫺子窓の際迄に、人の數が何人ゐたか、机の數が幾脚あつたか、健三の記憶は慥にそれを彼に語り得なかつた。／島田の住居と扱所とは、もとより細長い一つ家を仕切た迄の事なので、彼は出勤と云はず退出と云はず、少からぬ便宜を有つてゐた。彼には天氣の好い時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す億劫を省く事が出來た。彼は自宅から緣側傳ひで勤めに出た。さうして同じ緣側を歩いて宅へ歸つて來た。」と書いてある。

かうして漱石は、戶長である養父とともに、暫らくの間、淺草に住んだ。さうして其所で小學校の生活を始めた。漱石が淺草壽町の戶田學校に、いつ上つたかは、精確には分からない。然し漱石が、その下等小學の八級と七級とを一度に卒業したのが、明治八年（一八七五）五月である所から考へると、入學は恐らくその前年、明治七年の後半期だつたらうと思はれる。もしさうだとすれば、それは漱石八歲の年の事である。然もその戶田學校が創立されたのは、明治七年であつた。東京市の小學校は、戶田學校と同じやうに、明治七年の創立といふのが最も多い。漱石は小學校の創立匆匆其所に入學した譯である。——然しそのうち漱石の養父母の間には、家庭的の不

和のごたごたが始まつた。その結果漱石は淺草の養家先から、牛込の實家へ引き取られた。

漱石の父の書いた「手續書」には、鹽原昌之助が明治七年(一八七四)四月中に日根里かつと通じ、その爲め妻やすと不和を生じたので、當時八歳になる漱石とともに、鹽原の妻やすを、自分の手許に引き取つたやうな事が書いてある。然し是には相當疑問がある。漱石の小學校時代の免狀で、今日殘つてゐるものを突き合せて見ると、漱石は明治八年五月に「第一大學區東京府管內第五中學區第八番小學」卽ち淺草壽町の戶田學校の「下等小學第八級第七級」を卒業し、同じ年の十一月同じ學校の「第六級第五級」を卒業し、明治九年(一八七六)五月同じ學校の「第四級」を卒業し、その年の十月になつて、初めて「第一大學區東京府管內第三中學區第四番小學」卽ち市谷柳町の市谷學校の「第三級」を卒業した事になつてゐるからである。交通の不便な當時、九つや十の子供が、牛込の馬場下から淺草の壽町まで、一年も二年も通學し續けたらうといふ事は、到底想像する事が出來ない。漱石が牛込の實家に引き取られたのは、もしくは養母とともに鹽原昌之助から引き離されたのは、明治九年五月と明治九年十月との間の事に相違ないのである。漱石の養父昌之助とかつとの關係は、或は明治七年四月中に始つたものかも知れない。それがいかに漱石の養母やすを狂亂せしめたかは、具に『道草』の中に描き出されてゐる。その爲めやすが出るの退くのと言つて、鹽原の家に出這入りが多かつたに違ひない事も、また十分想像する事が

出來る。然し漱石とやすとが漱石の父の方へ引き取られたのは、決して明治七年四月中の事ではない。恐らく漱石の父は、そのごたごたが長く續いてゐたのを好い事にして、二人を引き取つた時期をも、明治七年四月中の事に、繰り上げたのだらう。

漱石の復籍の話がまとまつて、雙方で交換する「爲取替一札之事」の下書の中には、「右は本人幼少より七ケ年間手前方に而養育致候に付」といふ一節が這入つてゐる。是は事實上の「爲取替一札之事」では、單に「右者手前方ニテ養育致候廉モ有之」とぼかされてしまつたが、然し既にその下書に「七ケ年間」とある以上、是は鹽原昌之助は無論の事、漱石の父によつても、一往は承認された事實であつた筈である。殊に明治二十一年（一八八八）一月に雙方で交換した、その「爲取替一札之事」では、養育料として、漱石の父から鹽原昌之助へ金貳百四拾圓を支拂ふ事を約束し、但金百七拾圓は卽金、あとの七拾圓は毎月參圓づつ無利息月賦で支拂ふといふ事になつてゐる。もし漱石一ケ月の養育料を、平均參圓內外と見積つたとすれば、金貳百四拾圓は凡そ七ケ年の養育料に該當する筈の額であつた。鹽原は、明治十年（一八七七）一月十三日に、自分が新築した、下谷西町四番地の家に越して行つてゐる。その前に鹽原は、同じ西町の三十五番地にも住んでゐたらしいが、諏訪町からいきなり此所に來たものか、それとも一度何所か外へ行つて置いて、そのあとで此所に來たものか、それは分からないにしても、ともかく鹽原は當時三十一歲

の日根里かつを、明治十年八月十一日に籍に入れてゐる。是なども考へやうによつては、漱石の父が、漱石とともにやすを引き取つたのが、その前年、即ち明治九年中の事であつた事を、仄かに指示するもののやうでもある。

『道草』第八に、「彼はたゞ想像の眼で、子供の時分見た其人の家と、其家の周圍とを、心のうちに思ひ浮べた。／其處には往來の片側に幅の廣い大きな堀が一丁も續いてゐた。水の變らない其堀の中は腐つた泥で不快に濁つてゐた。所々に蒼い色が湧いて厭な臭さへ彼の鼻を襲つた。彼はその汚ならしい一廓を――様のお屋敷といふ名で覺えてゐた。／堀の向ふ側には長屋がずつと竝んでゐた。其長屋には一軒に一つ位の割で四角な暗い窓が開けてあつた。石垣とすれ〳〵に建てられた此長屋が何處迄も續いてゐるので、お屋敷のなかは丸で見えなかつた。／此お屋敷と反對の側には小さな平家が疎らに竝んでゐた。古いのも新しいのもごちや〳〵に交つてゐた其町竝は無論不揃ひであつた。老人の齒のやうに所々が空いてゐた。その空いてゐる所を少し許り買つて島田は彼の住居を拵へたのである。／健三はそれが何時出來上つたか知らなかつた。然し彼が始めてそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであつた。四間しかない狹い家だつたけれども、木口抔は可成吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつた。六疊の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狹い庭に、大き過ぎる程立派な御影の石燈籠が据ゑてあつた。／綺麗好

きな島田は、自分で尻端折りをして、絶えず濡雑巾を縁側や柱へ掛けた。それから跣足になつて、南向の居間の前栽へ出て、草拶りをした。あるときは鍬を使つて、門口の泥溝を浚つた。其泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸つてゐた。」島田はまた此住居以外に粗末な貸家を一軒建てた。さうして雙方の家の間を通り抜けて裏へ出られるやうに三尺ほどの路を付けた。裏は野とも畠とも片のつかない濕地であつた。草を踏むとじく〳〵水が出た。一番凹んだ所などは始終浅い池のやうになつてゐた。島田は追々其處へも小さな貸家を建てる積でゐるらしかつた。然し其企ては何時迄も實現されなかつた。冬になると鴨が下りるから、今度は一つ捕つてやらう抔と云つてゐた。」とあるのは、その下谷西町四番地の、鹽原の家を描寫したものである。「――樣のお屋敷」といふのは、あの邊で「立花樣のお屋敷」と呼ばれてゐた一廓をさすのだらうと思ふ。

同じ『道草』によると、漱石の記憶は「白帆を懸けた船」の見える家から、急に、表に「門口に繩暖簾を下げた米屋だか味噌屋だか」のある、「見馴れない變な宅」に住んで、「お常とたつた二人ぎりになつて」毎日「茹でた大豆」ばかりを食つてゐる、自分の事に飛んでゐる。然もその「二人の生活は僅の間しか續かず、「彼は何時の間にか彼の實家へ引き取られてゐた。」といふのだから、漱石は或はその下谷西町の家には、住んだ事はなく、のみならず實家へ引き取られる前に、一時やすと二人きりで、どつか實家の近所に、一戸を構へてゐたものらしい。漱石が二十

三の年、明治二十二年（一八八九）六月三日に書いた、高等學校時代の作文『居移氣說』の中ででも、漱石は「余幼時從親移居于淺草。淺草之地肆廛櫛比紅塵埱勃。其所來往亦皆銅臭之兒。居四年余亦將化爲鄙吝之徒。居移氣一焉。既去寓于高田。地在都西。未能全絕車馬之音。門柳籬菊環堵蕭然。乃讀書賦詩悠然忘物我。居移氣二焉。」と言つて、自分が淺草からぢかに牛込に越して來たらしい旨を述べてゐる。是は元より證とするに足りないのかも知れないが、どうも漱石は西町の家には、住まなかつたやうである。（それにも拘はらず漱石に、西町の家の、相當精細な記憶が殘つてゐるのは、漱石は、實家に歸つたとは言つても、まだ離緣した譯ではなく、依然として鹽原姓を名のり、その家に出這入りしてゐた爲だらうと思ふ。漱石が既に高等學校の學生になつてゐた時、西町の鹽原の家を訪ね、たまたま門前の泥溝に掛けた小橋の上に立つて往來を眺めてゐた、後妻の連れ子である「お縫さん」に出會つて、「お縫さん」から會釋をされた所を、連れの學生から目擊され、「フラウ門に倚つて待つ」と言つてからかはれたといふ話は、『道草』第二十二に出てゐる）。殊にこの文章の中の「居四年」を精確な數と考へるとしても、鹽原の淺草に越して來たのを明治五年の事だつたとすれば、「居四年」で丁度明治九年になつて、計算はうまく合ふのである。

秋田雨雀の『五十年生活年譜』の中の「明治三十九年（一九〇六）二十四歲」の條下に、「私はこ

の年、自分より年長の箭田きぬと結婚した。箭田はその夫を日露戰爭で失つて、老母と二人で雜司ケ谷で貧困な生活をしてゐた。こゝの家は、舊い名主の家で、老母は夏目金之助（漱石）を九歳まで養子として育てゝゐたが、夫との離別によつて金之助を實家の夏目家にかへしたのであつた。この老母は、三多摩一の富豪といはれた榎戸源三の長女で、おなじ名主關係の小金井小次郎（近代の俠客）に背負さつて歩いたといふ面白い經歷を持つた女であつた。」といふ一節がある。漱石が九歳といへば明治八年（一八七五）の事である。然し是も、明治九年を九歳とする西洋流の數へ方からすれば、明治九年であつて構はない。事實やすは、西洋流も日本流もなく、明治九年、漱石九歳の時といふ風に覺えてゐたものかも分からない。

五　家庭

漱石は鹽原で隨分可愛がられてゐたやうである。鹽原昌之助が吝嗇な男である上に、やすが又それに輪をかけた吝嗇な女で、自分で下女に味噌汁をよそつてやつたり、飯櫃や御茶を入れた戸棚に錠を卸したり、たまに實家から漱石の父がたづねて來ても、蕎麥を取り寄せるだけで、時分どきが來ても、決して膳を出した事がなかつたといふ事は、『道草』の中に書かれてゐるが、外の事ではそれほど吝嗇な眞似をする夫婦でも、事漱石に關する限り、見違へるやうに寛大になつて、漱石を若様かなぞのやうに大事にした。例へば漱石は「大人さへあまり外國の服裝に親しみのない」時分に「小さい洋服を拵へて」もらつてゐる。「淺い鍋底の樣な形をしたフエルト」の帽子を買つてもらつてゐる。「外へ出る時は黃八丈の羽織を着せ」られ、「縮緬の着物を買ふために、わざ〳〵越後屋迄引つ張つて行」かれたりしてゐる。漱石は自分の「望む玩具」なら、なんでも買つてもらへた。中には、當時としては恐らく

非常にハイカラな、「寫し繪の道具も交つてゐた」。「尾の長い金魚をいくつも買つて」ももらつた。「武者繪、錦繪、二枚つゞき三枚つゞきの繪も」言ふがままに買つてもらつた。「銀で作つた」鼠が「珊瑚で拵へた」唐辛子を引いて行く所を目貫に刻んだ「短い脇差」を持つてもゐれば、丁度「自分の身體にあふ緋縅しの鎧と龍頭の兜さへ持つてゐた」。のみならず漱石は、寄席に連れて行かれたり、飲食店に連れて行かれたり、船に乗つて網打に連れて行かれたりしてゐる。「たとひ一錢でも二錢でも負けさせなければ物を買つた例のない」鹽原が、池の端の本屋で、漱石の爲に「董其昌の折手本」を買つてやり、「僅か五厘の釣錢を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かない」のを、當時の漱石が「如何にも見苦しくまた不愉快」に感じたといふ事は、『道草』第十六に出てゐる。なるほどそれは「見苦しくまた不愉快」な事だつたには違ひないが、然し是で鹽原は、單に著物や玩具の類のみではなく、かういふ方面でも漱石には、漱石の欲しいといふもの、もしくは漱石に必要と認められるものを、寛大に買つてやつてゐた事を想像する事が出來るのである。

然し鹽原が漱石を大事にする事は、かういふ、買つてあてがふ方面のみには止まらなかつた。漱石は、甘やかされるだけ甘やかされ、我儘のし放題に我儘をさせられた。從つて漱石は、或時は「扱所」の「書記の硯箱の中にある朱墨を弄つたり、小刀の鞘を拂つて見たり、他に蒼蠅がら

れるやうな惡戯を續けざまに」するかと思へば、また或時は「自分の好きなものが手に入らないと、往來でも道端でも構はずに、すぐ其處へ坐り込んで動かなかつ」たり、或時は「小僧の脊中から彼の髮の毛を力に任せて挘り取」るかと思へば、また或時は「神社に放し飼の鳩を何うしても宅へ持つて歸るのだと主張して已まなかつ」たりするといふやうな、手の著けられない「若樣」になつてしまつたのである。卽ち當時の漱石は、「養父母の寵を欲しいまゝに專有し得る狹い世界の中に起きたり寢たりする事より外に何にも知ら」ず、またさうする事がいけない事であるといふ事を、誰も漱石に敎へてやる者がゐなかつたから、「凡ての他人が、たゞ自分の命令を聞くために生きて」ゐるやうに見え、「云へば通るとばかり考へるやうになつ」てしまつたのである。

鹽原夫婦は　全力を盡して」漱石を、自分達の「專有物にしやうと力め」た。從つて彼等は、「自分達の愛情そのものゝ發現を目的として行動する事が出來ずに、たゞ健三の歡心を得るために親切を見せなければならなかつ」た。「御前の御父さんは誰だい」・「ぢや御前の御母さんは」・「ぢや御前の本當の御父さんと御母さんは」・「お前は何處で生れたの」・「健坊、御前本當は誰の子なの、隱さずにさう御云ひ」・「御前誰が一番好きだい。御父さん？御母さん？」――かういふ問が、「長火鉢の前で差向ひに坐り合ふ夜寒の宵などに」、鹽原夫婦から漱石に向かつて、ひつきりなしに問ひかけられた。彼等はかうして漱石の頭に、自分達がかけてやつた恩義をしかと叩き

込み、それによつて自分達と漱石との結合を、一層鞏固なものにし、漱石によつて提供される筈の、自分達への將來の報酬の保證を、一層確實にして置かうとするのである。

然もその事は、漱石の自由と天眞とを害ふのみならず、漱石の自由と天眞とへの、半ば無意識な憧れに、片意地な、曲りくねつた表現を與へる事になつた。「自分達の親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込まうとする彼等の努力」を、漱石は「なんでそんなに世話を燒くのだらう」と考へて、「蒼蠅がつた」。さうして「御父さんが」とか「御母さんが」とかいふ言葉が出るたびに、漱石は「己れ獨りの自由を欲しがつた」。「自分の買つて貰ふ玩具を喜んだり、錦繪を飽かず眺めたりする彼は、却てそれ等を買つてくれる人を嬉しがらなくなつた。少くとも兩つのものを綺麗に切り離して、純粹な樂みに耽りたい」がつた。漱石の持つて生れた天眞と自由を冀ふ心とは、彼等を批評するとともに、その批評に從つて、彼等に反抗し出した。漱石は「向ふの望むやうな返事をするのが厭で堪らな」くなると、「無言のまゝ棒のやうに立つてゐた」のださうである。——勿論子供の漱石は、頭の中ででも、また口へ出しても、それを批評する事が出來なかつた。然し子供の漱石は、本能的にそれを反撥した。この場合漱石の「無言のまゝ棒のやうに」突つ立つてゐる事が、無言の批評であり、無言の反抗であつた。

漱石は『道草』第四十二に、自分が高い緣側からころげ落ちて、腰をぬかした時の話を書いて

ゐる。一まだ立てないかい。立つて御覽」と養母が毎日催促するにも拘はらず、漱石は立てなかつた。然し漱石は「動けるやうになつてもわざと動か」ずにゐて、寐ながら養母の「やきもきする顔を見て」、「ひそかに喜ん」でゐたのださうである。のみならず漱石は、仕舞に立つて、一平生と何の異る所なく其處いら中歩き廻」ると、養母が嬉しがつたのはよかつたが、その「驚いて嬉しがりやうが、如何にも芝居じみた表情に充ちてゐたので」、「いつそ立たずにもう少し寐てゐればよかつたといふ氣になつた」のだといふ。同じ『道草』第四十二の中には、「或日一人の客と相對して坐つてゐた」養母が、「其席で話題に上つた甲といふ女を、傍で聽いてゐても聽きづらい程罵しつた。所が其客が歸つたあとで、甲が又偶然彼女を訪ねて來た。するとお常は甲に向つて、そらぐ〵しい御世辭を使ひ始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞めてゐた所だといふやうな不必要な嘘迄吐いた」ので、漱石が腹を立て、「あんな嘘を吐いてらあ」と言つたといふ話も書いてある。客の歸つたあとで、養母は大變に怒つて、「御前と一所にゐると顔から火の出るやうな思ひをしなくつちやならない」とも言つたといふが、それに對して漱石は、相手の一顔から早く火が出れば好い位に感じた」のださうである。——漱石は是を、健三の心が素直でなく、妙にひねくれて、片意地になつてしまつた事の由來として、『道草』の中に描き出してゐるが、それは一面から言へばさうであつたに違ひないとしても、然し一面から言へば、是は、それだけ漱

石に子供の時から、正しい事、自然な事、眞實な事を愛する心が、火のやうに燃えてゐた事を、證明するものであると言つて可いと思ふ。言へばなんでも通ると考へる事は、我儘でも、その奥には、自分の善いと思ふ事は、なんでも通して見せようとする、劇しい氣象も含まれてゐるのである。

然し鹽原の家にゐて、漱石を最も不愉快にし、少くとも養母と一緒にゐる事を、到底堪へ難く感ぜしめたものは、日根里かつを中心とする、鹽原夫婦の家庭的不和であつた。是は「手續書」によれば、明治七年四月中から始まつたらしいのだから、漱石八歳の時の事である。『道草』第四十三から第四十四へかけて、その事が描き出される。

漱石は子供だから、夫婦喧嘩がどうしてこんな夜毎に頻繁に起るのか、理解する事が出來なかつた。然し「彼はたゞそれを嫌つた」。「道徳も理非も持たない彼に、自然はたゞそれを嫌ふやうに教へた」。漱石はやがて養母から事實を話して聞かされる。然しその話によると、「彼女は世の中で一番の善人であ」り、反對に養父は「大變な惡ものであ」り、「然し最も惡いのはお藤さんであつた」。「あいつが」とか「あの女が」とか言ひながら、その「お藤さん」の惡口を言ふ時、養母は「口惜しくつて堪まらないといふ顔付をし」「眼から涙を流した」。「然しさうした劇烈な表情は却て健三の心持を惡くする丈で、外に何の效果もなかつた」。「彼奴(あいつ)は讐(かたき)だよ。御母さんにも

お前にも讐だよ。骨を粉にしても仇討をしなくつちや」と言つて、養母が「齒をぎり〳〵嚙」むに及んでは、漱石は「早く彼女の傍を離れたく」さへなつた。さうして漱石は、「始終自分の傍にゐて、朝から晩迄彼を味方にしたがるお常よりも、寧ろ島田の方を好いた」。從つて漱石は、その「島田」から「お藤さん」の子と一緒に汁粉屋に連れて行かれ、歸つて來て養母から、誰と一緒に行つたと詰問された時でも、「島田の注意に拘はらず、事實を有の儘に告げ」はしたが、然し「彼奴も一所なんだらう。本當を御云ひ。云へば御母さんが好いものを上げるから御云ひ。あの女も行つたんだらう。さうだらう」とか、「ぢや彼の子に御父さんが何と云つたい。彼の子の方に餘計口を利くかい、御前の方にかい」とか、「汁粉屋で御前を何方へ坐らせたい。右の方かい、左の方かい」とか、養母が疊みかけて質問しても、漱石は頑として口を緘んでゐたのみならず、心の中では相手を卑しみ、相手に愛想をつかし、ただただ不愉快の念のみを募らせて行くのである。

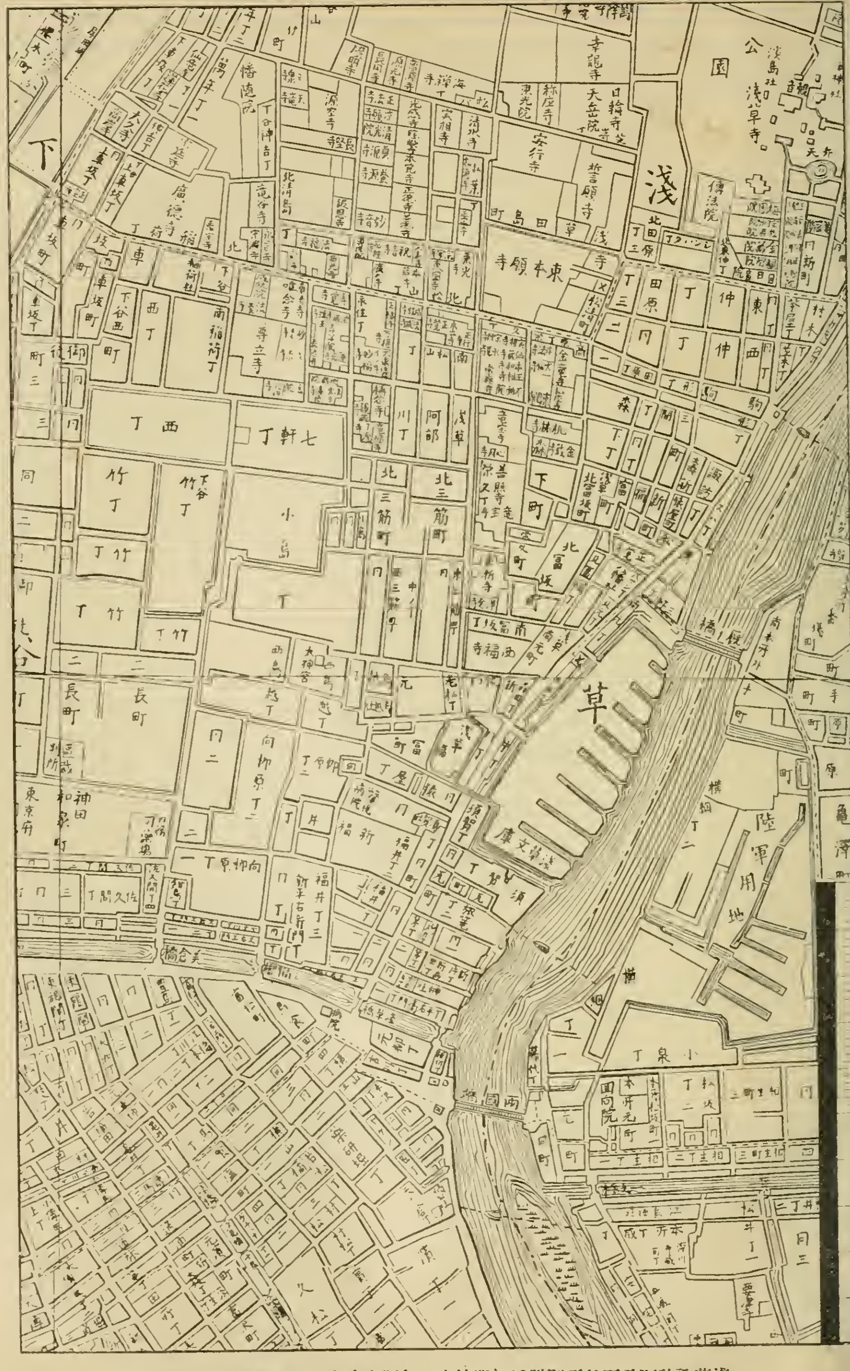
漱石が『道草』を書いたのは、大正四年（一九一五）、漱石四十九の年の事であつた。勿論是らの事件が、すべて明治七年（一八七四）の内に起つたものか、それとも明治七年・八年・九年と續いて起つたものか、それは審かではないが、然し少くとも是が『道草』を書く漱石にとつて、凡そ四十年以前の出來事であつた事は、爭はれない。その四十年前の記憶が、是ほどまざまざと漱石の記憶に殘つてゐるといふ事は、勿論漱石の記憶の好いのにもよるが、然し一面是らの事がい

かに漱石に強烈な印象を與へたかを物語るものに外ならない。『道草』では漱石は、「お常」だの「島田」だのを、「お常」その人もしくは「島田」その人として描き出すよりも、人間一般の醜を代表するものとしての、「お常」もしくは「島田」を描き出し、さうまでして「私」に終始しなければゐられない人間の淺ましさを、ある憫憐の情をもつて眺めてゐる。然し當時の、八つや九つの子供としての漱石にとつて、是は憫憐を寄せたり嘲笑を加へたりするほど、餘裕があり間隔がある問題ではなかつた。然も當時の漱石には「道徳も理非も」なかつたのだから、「其他の點について彼は全くの無我夢中であつた」にも拘はらず、是らの事だけは「何の理窟なしに」、漱石に本能的に、生理的に「不愉快」を感ぜしめ、往往にしてその「不愉快」を表現する、本能的な、生理的な身振に出でしめたものであらう。然も子供の漱石はそれさへ「無我夢中」で、どうすればこの「不愉快」に風を入れる事が出來るかなどといふ事は、少しも知らなかつたのだから、恐らくそれは漱石の頭の中の壁に、次第に深い印象を刻み付けて行くより仕方がなかつたのだらうと思ふ。

『硝子戸の中』で漱石は、「淺草から牛込へ遷された私は、生れた家へ歸つたとは氣が付かずに、自分の兩親をもと通り祖父母とのみ思つてゐた。さうして相變らず彼等を御爺さん、御婆さんと呼んで毫も怪しまなかつた。向ふでも急に今迄の習慣を改めるのが變だと考へたものか、私にさ

う呼ばれながら澄ました顏をしてゐた。／私は普通の末ッ子のやうに決して兩親から可愛がられなかつた。是は私の性質が素直でなかつた爲だの、久しく兩親に遠ざかつてゐた爲だの、色々の原因から來てゐた。とくに父からは寧ろ苛酷に取扱はれたといふ記憶がまだ私の頭に殘つてゐる。それだのに淺草から牛込へ移された當時の私は、何故か非常に嬉しかつた。さうして其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現れた。」と書いてゐるが、それは漱石がほんとの兩親の家に歸つた事を自然に感じたからには違ひなかつたとしても、それとともに自分が「何の理窟なしに」、本能的に、生理的に「不愉快」を感じなければならなかつた、鹽原夫婦の手許から、殊に養母やすの手から解放されたといふ歡びが、假令はつきりと意識に上つては來なかつたまでも、漱石を動かし、「誰の目にも付く位に著るしく」漱石を活活せしめたのに違ひないと思ふ。

漱石が古道具屋だか八百屋だかから連れて歸られなかつたとしたら、勿論漱石はどうなつてゐたか分からない。然しそれよりももつと深刻な意味で、もしこのまま漱石が鹽原夫婦の手許に置かれてゐたとしたら、なほの事漱石はどうなつてゐたか分からない。



淺草諏訪町及下谷西町附近（明治十一年內務省地理局實測東京全圖）



牛込喜久井町附近（明治十一年内務省地理局實測東京全圖）

六　實家

漱石の實家は、牛込馬場下にあつた。矢來の坂下から榎町の通りを眞直に行つて初めての十字路を左に柳町の電車の停留所の方へ折れ、少し行くと右に曲つて辨天橋を渡る狹い路がある。是を少し行つてだらだら坂の途中の右手にあるのが、漱石の晩年に住んでゐた、早稻田南町七番地の家（家は漱石の死後改築された）である。その漱石の家の前をなほ「四五町奧」へ、早稻田小學の前を通りぬけて行くと、馬場下の交番のある、坂の下へ出る。交番の裏手、今來た道と坂下の道とが出合ふ角の所に、昔「堀部安兵衞が高田の馬場で敵を討つ時に、此處へ立寄つて、枡酒を飮んで行つた」、その「安兵衞が口を着けた枡」を今でも保存してゐるといふ、「小倉屋といふ酒屋」がある。今では小倉屋の位置と向きとが、少し變つてゐるが、現在の小倉屋の斜裏手に土藏がある。是が漱石の生れた家の土藏である。その土藏と土藏に續く庭とは、現在は、すぐその傍の喜久井町一番地日下三成（但その入口は馬場下町三番地になつてゐる）の所有になつてゐる。

――『硝子戸の中』には、漱石が子供の時分、その小倉屋の娘のお北さんの、長唄の稽古を、よく聴いたといふ話が書いてある。「私は子供だから上手だか下手だか丸で解らなかつたけれども、私の宅の玄關から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行かうとすると、御北さんの聲が其所から能く聞こえたのである。春の日の午過などに、私はよく恍惚とした魂を、麗かな光に包みながら、御北さんの御浚ひを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土藏の白壁に身を靠たせて、佇立んでゐた事がある。其御蔭で私はとう／＼「旅の衣は篠懸の」などといふ文句を何時の間にか覺えてしまつた。」といふのが、それである。このお北さんの長唄は、漱石にとつて餘程印象が深かつたと見えて、漱石は『草枕』の中ででも、「小供の時分、門前に萬屋と云ふ酒屋があつて、そこに御倉さんと云ふ娘が居た。此御倉さんが、靜かな春の晝過ぎになると、必ず長唄の御浚ひをする。御浚が始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪餘りを前に控へて、三本の松が、客間の東側に並んで居る。此松は周り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、始めて趣のある恰好を形つくつてゐた。小供心に此松を見ると好い心持になる。松の下に黒くさびた鐵燈籠が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、わからず屋の頑固爺の樣にかたく坐つて居る。余は此燈籠を見詰めるのが大好きであつた。燈籠の前後には、苔深き地を抽いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顔に、獨り匂ふて獨り樂しんで居る。余は此草のなかに、纔かに膝を容る

るの席を見出して、じつと、しやがむのが此時分の癖であつた。此三本の松の下に、此燈籠を眺めて、此草の香を臭いで、さうして御倉さんの長唄を遠くから聞くのが、當時の日課であつた。」と書いてゐる。現在の所有者に訊くと、この三本の松は、もうとうに枯れてしまつたのださうである。

明治十一年（一八七八）六月に内務省地理局から發行された『實測東京全圖』で見ると、當時は牛込馬場下町は、早稲田北町・穴八幡・陸軍戸山學校・大久保余丁町などと一緒に、東京と郡部とを區劃する境目になつてゐて、その境目を一歩踏み出せば、もう田圃だらけの、早稲田・戸塚・源兵衞・諏訪・西大久保・東大久保などの村村であつた計りでなく、漱石の父が嘗てその門前町の名主をしてゐた、誓閑寺・西方寺・來迎寺などの裏手は、すぐ畑だか荒地だかになつて居り、三十人町・若松町・原町・榎町・矢來町などの中だの周圍だのにも、到る所、畑だか荒地だか分からないものが、澤山に散ばつてゐる。淺草から馬場下に遷されて、漱石が「町とは云ひ條、其の實小さな宿場としか思はれない位、小供の時の私には、寂れ切つて且淋しく見えた。」と感じたのは、當然だと言つて可いであらう。それでも「内藏造（くらづくり）の家が狹い町内に三四軒はあつた」のださうであるが、然し漱石の實家から「まづ町らしい町へ出やうとするには、何うしても人家のない茶畠とか、竹藪とか又は長い田圃路とかを通り拔けなければならなかつた。買物らしい買物

は大抵神樂坂迄出る例になつてゐたので、さうした必要に馴らされた私に、左したる苦痛のある筈もなかつたが、それでも矢來の坂を上つて酒井樣の火の見櫓を通り越して寺町へ出やうといふ、あの五六町の一筋道などになると、晝でも陰森として、大空が曇つたやうに始終薄暗かつた」のださうである。

『硝子戸の中』に數へあげてある所によると、漱石の實家の近所には、酒屋の小倉屋以外、「內藏造の家」の一軒である、藥種屋の近江屋といふのがあつた。それから棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋も一軒あつた。「廣い土間を屋根の下に圍ひ込んだやつちや場」もあつた。寄席も一軒あつた。寄席の隣には豆腐屋があつた。その「豆腐屋には油の臭の染み込んだ繩暖簾がかゝつてゐて門口を流れる下水の水が京都へでも行つたやうに綺麗だつた。其豆腐屋について曲ると半町程先に西閑寺といふ寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い竹藪で一面に掩はれてゐるので、中に何んなものがあるか通りからは全く見えなかつたが、其奥でする朝晩の御勤の鉦の音は、今でも私の耳に殘つてゐる。ことに霧の深い秋から木枯の吹く冬へ掛けて、カンカンと鳴る西閑寺の鉦の音は、何時でも私の心に悲くて冷たい或物を叩き込むやうに小さい私の氣分を寒くした。」とある。「西閑寺」は、正しくは「誓閑寺」であるが、この寺の鉦の音だの、門前の豆腐屋の水を替へる音だの、鍛冶屋の事だのは、『二百十日』の中に出て來る。——かういふ

風景の中に、更に、漱石が後に「半鐘と竝んで高き冬木哉」といふ句を作つた、「町の曲り角」に立つてゐる火の見の「梯子」と、その上の「古い半鐘」と、その「半鐘のすぐ下にあつた小さな一膳飯屋」とを點綴すると、いかにも御朱引外だか內だか分からない、「小さな宿場」らしい、漱石の住んでゐた町の全光景が、我我の眼の前に、髣髴として浮いて來る。漱石は『居移氣說』の中で、馬場下の自分の家のあたりの事を、「未能全絕車馬之音。門柳籬菊環堵蕭然。乃讀書賦詩悠然忘物我」と言つてゐるが、それはまつたくさうには違ひなかつたとしても、是は寧ろ靜か過ぎて淋しく、淋し過ぎて侘しい光景であつた。自分の家に關する漱石の記憶が、總じて「鄙びてゐる」上に「何處かに薄ら寒い憐れな影を宿してゐる」といふのも、一半はかういふ町の光景が與つて力があつたものに相違ない。

漱石の實家に引き取られて行つたのが、明治九年(一八七六)だつたとすると、當時漱石の父は六十三であり、漱石の母は五十であり、ともに漱石からお爺さん・お婆さんと呼ばれても、少しも不思議ではない年配であつた。旣に福田庄兵衞の所に片づいてゐた、漱石の一番上の姉佐和は三十一、二番目の姉ふさといへども二十六だつたのだから、もう自分の從兄にあたる、高田庄吉の所へ片づいてゐて、家にはゐなかつたに違ひない。然し一番上の兄大一は二十一、二番目の兄の榮之助は十九、三番目の兄和三郞は十八、三人ともうちにゐて、大一は或は旣に「まだ大學と

ならない前の開成校」に這入つてゐたのかも知れなかつたが、二番目の兄と三番目の兄とは、「今の高等商業學校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成學校卽ち今日の大學へ這入る組織になつてゐた」「南校」に這入つてゐたかゐなかつたか位の時分である。この時分の學資がどの位かかつたものか、精しい事は分からないが、然しそれだけでも漱石の父は、相當苦しかつたのではないかと思はれる。

殊に德川末期に生れて格別敎養を持たない者にとつて、大抵の場合、自分の子供は、人格ではなく、物品である。親が子供の爲に資本を下すのは、その子供が大きくなつてから利息をとり立て、自分の老後を左團扇で暮らさうといふ、期待から出發してゐる。その點から言つて鹽原夫婦が、漱石を偏愛し、漱石に金を惜しまず注ぎ込んで、事每に「御父さんが」・「御母さんが」を言ひ續け、漱石に自分達の恩を賣り附けようとしたのも、彼等から言へば、當然の事だつたらう。漱石の父といへども、その點では、全然鹽原と同樣であつた。のみならず漱石の父は、現在自分が資本を下しつつある、大きな三人の子供以外に、更に十やそこらの小さな子供を、事情已むを得ないとは言へ、引き取らなければならない事になつたのである。それは金のかかる厄介な代物を、然もそれは養子にやつてあるのだから、後になつてそれから利息を取り立てる見込のない代物を、餘計に脊負ひ込んだといふ事に外ならなかつた。實家に還されたてには、それを「誰の目

にも付く位に著るしく」歡んだ漱石も、さういふ父の心持から出る、無遠慮な、露骨な、苛酷な表現に出會つて、忽ちのうちに、その出鼻を挫かれなければならなかつた。『道草』第九十一には、かう書いてある。——

「實家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しに斯んな出來損ひが舞ひ込んで來たかといふ顏付をした父は、殆ど子としての待遇を彼に與へなかつた。今迄と打つて變つた父の此態度が、生の父に對する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に對してにこ〳〵してゐた父と、厄介物を背負ひ込んでからすぐ慳貪に調子を改めた父とを比較して一度は驚いた。次には愛想をつかした。然し彼はまだ悲觀する事を知らなかつた。發育に伴ふ彼の生氣は、いくら抑へ付けられても、下からむく〳〵と頭を擡げた。彼は遂に憂鬱にならずに濟んだ。

「子供を澤山有つてゐた彼の父は、毫も健三に依怙る氣がなかつた。今に世話にならうといふ下心のないのに、金を掛けるのは一錢でも惜しかつた。繫がる親子の緣で仕方なしに引き取つたやうなもの丶、飯を食はせる以外に、面倒を見て遣るのは、たゞ損になる丈であつた。

「其上肝心の本人は歸つて來ても籍は復らなかつた。いくら實家で丹精して育て上たにした所で、いざといふ時に、又伴れて行かれ丶ば夫迄であつた。

「「食はす丈は仕方がないから食はして遣る。然し其外の事は此方ぢや構へない。先方でするのが當然だ」

「父の理窟は斯うであつた。

「島田は又島田で自分に都合の宜い方からばかり事件の成行を觀望してゐた。

「「なに實家へ預けて置きさへすれば何うにかするだらう。其内健三が一人前になつて少しでも働けるやうになつたら、其時表沙汰にしてゞも此方へ奪還くつてしまへば夫迄だ

「健三は海にも住めなかつた。山にも居られなかつた。兩方から突き返されて、兩方の間をまごまごしてゐた。同時に海のものも食ひ、時には山のものにも手を出した。

「實父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧ろ物品であつた。たゞ實父が我樂多として彼を取り扱つたのに對して、養父には今に何かの役に立てゝ遣らうといふ目算がある丈であつた。

「「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」

「健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かの序に斯んな事を云つた。健三は驚いて逃げ歸つた。酷薄といふ感じが子供心に淡い恐ろしさを與へた。其時の彼は幾歳だつたか能く覺えてゐないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならないといふ

慾が、もう十分萌してゐる頃であつた。
「「給仕になんぞされては大變だ」
「彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸ひにして其言葉は徒勞に繰り返されなかつた。彼は何うか斯うか給仕にならずに濟んだ。」
——漱石の父は、陸軍に納める糧秣の會社をつくるとかいふ話にひつかかつて、自分の持つてゐた金のみならず、青山邊にあつた田地までも手放さなければならなくなつたのださうである。それがいつの事であつたかは、分からない。然し御一新以前の惰性で派手な附合は續いてゐたのだらうし、子供は大きくなつて、嫁にやつたり、學問させたりするので、相當金はかかつてゐたのだらうし、漱石の實家の內證が、さういふ詐欺に會はないまでも、そんなに樂でなかつたに違ひない事は、ほぼ想像され得る。然も漱石の父は、漱石の養母やすの方には、相當好意を持つてゐたらしいのだから、漱石の父は、或はやすに味方して、養父昌之助を懲らしめる爲に、一時漱石とやすとを自分の手許へ引き取つたのが、昌之助の新居移轉となり、新婦入籍となり、段段話がこじれ、結局は雙方睨み合ひの姿となつて、一方は籍を拔かうとし、一方は當人を取り戻さうとし、機會の來るのを待つてゐた結果、到頭漱石をして「海にも住めなかつた。山にも居られなかつた」と感ぜしめるに至つたものではなかつたのかとも思はれる。それは遽にどうともきめら

れないとしても、この漱石の「海にも住めなかつた。山にも居られなかつた」感じが亦、自分の實家に關する漱石の記憶に、「何處かに薄ら寒い憐れな影」を印する、他の一つの理由になつてゐさうな氣もする。其所にはなんの暖かなもの、心を樂しませるもの、心を落ちつかせるものが、ないからである。漱石は自分の生れたうちにゐて、孤兒に等しかつた。

然し後の漱石に就いて考へて見れば、漱石が「海にも住めなかつた。山にも居られなかつた」と感じて、孤獨に、自分一人の世界に生きなければならなかつたといふ事は、漱石の不幸であるよりも、寧ろ漱石の幸福であつた。漱石がどつちに馴染み、どつちの中に這入つてゐたとしても、其所では徳川末期の江戸の町人のトラディションが、濃厚に漱石を取り卷いたに違ひないからである。それでなくても漱石は、自分の姉の片づいてゐる高田のうちへ遊びに行つて、其所にごろごろしてゐる兄達から、その向ひの藝者屋へ引つぱつて行かれ、時時藝者と一緒にトランプをしたりなどしてゐる。漱石の周圍は道樂者の塊りであつた。漱石がかういふ周圍と一緒になつて、藝者とトランプばかりしてゐたら、さうしてうちの書畫骨董を盜み出すやうな事をしてゐたら、夏目漱石は綺麗に日本の歷史から、その姿を消してゐたに違ひないのである。

七　教育

漱石の子供の時分の教育制度がどういふ風であつたか、精しい事は分からない。

然し文部省の設けられたのが明治四年（一八七一）であり、學制の創定されたのが明治五年（一八七二）であり、「人々自ら其身を立て其産を治め其業を昌にし以て其生を遂るゆゑんのものは他なし身を脩め智を開き才藝を長ずるによるなり而て其身を脩め智を開き才藝を長ずるは學にあらざれば能はず是學校の設あるゆゑんにして日用常行言語書算を初め士官農商工百工技藝及び法律政治天文醫療等に至る迄凡人の營むところの事學あらざるはなし人能く其才のあるところに應じ勉勵して之に從事ししかして後初て生を治め産を興し業を昌にするを得べしされば學問は身を立るの財本ともいふべきものにして人たるもの誰か學ばずして可ならんや」といふ言葉をもつて始まり、「之に依て今般文部省に於て學制を定め追々規則をも改正し布告に及ぶべきにつき自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめん事を期す人の父兄たるも

の宜しく此意を體認し其愛育の情を厚くし其子弟をして必ず學に從事せしめざるべからざるものなり高上の學に至ては其人の才能に任かすといへども幼童の子弟は男女の別なく小學に從事せしめざるものは其父兄の越度たるべき事」といふ言葉と、「但從來沿襲の弊學問は士人以上の事とし國家の爲にすと唱ふるを以て學費及其衣食の用に至る迄多く官に依賴し之を給するに非ざれば學ざる事と思ひ一生を自棄するもの少からず是皆惑へるの甚しきもの也自今以後此等の弊を改め一般の人民他事を抛ち自ら奮て學に從事せしむべき樣心得べき事」といふ言葉とをもつて結んだ、學事奬勵に關する「被仰出書」の出たのが、明治五年（一八七二）七月であり、東京市に多くの小學校が創立されたのが、明治六年、殊に明治七年（一八七四）である。從つて漱石の教育は、この新しい教育制度の實施とともに、始められたと言つて可いであらう。當時漱石の養父は、恐らくまだ淺草の區長をしてゐた。區長の子として漱石は、明治七年戸田學校の創立とともに、或は眞つ先に其所に入學させられたものかも知れない。明治九年（一八七六）の『文部省第四年報』によると、戸田學校は授業料を要する學校で、「新築」の校舍を持ち、男教員が五人あり、生徒の數が男百四十六人、女七十七人で、政府から扶助金を三百九十四圓八十七錢配付されてゐた、市内でも屈指の學校だつたやうである。

明治五年の學制では、全國を八大學區に分ち、毎區に大學校一を置き、一大學區を三十二中學區に分ち、毎區に中學校一、即ち全國に二百五十六の中學校を置き、一中學區を二百十小學區に

分ち、毎區に小學校一、卽ち全國に五萬三千七百六十の小學校を置き、人口六百に對して小學校一を置くといふやうな、思ひ切つた理想的な案が立てられてゐたのださうである。然しそれが思ひ切つて理想的な案であつただけに、事實は、大學校なども東京に一つしか設けられなかつたのみならず、中學校さへも長い間東京に一つしかないといふやうな、憫れな狀態であつた。然し漱石の所に殘つてゐる免狀を見ると、或は第一大學區東京府管內第五中學區第八番小學(戸田學校)とか、或は第三中學區第四番小學(市谷學校)とか、或は第四中學區第二番小學(錦華學校)とか書いてある。當局では暫くの間はその大方針に從つて、少くとも小學校だけは、著著創設を急がうとしたものらしい。

明治六年(一八七三)五月の『改正小學教則』によると、當時小學校は上等・下等と分れ、各等一級から八級まであつて、毎級六ケ月で修了、下等八級に這入るのが六歳で、上等一級を卒へるのが十四歳だといふ事になつてゐる。漱石の免狀によると、漱石は明治八年の五月に戸田學校の下等小學第八級・第七級を、同じ年の十一月には同じ第六級・第五級を、明治九年の五月には同じ第四級を卒業してゐる。『教則』の規定に從へば、下等小學四級を卒業して三級になるのは、八歳半の時である。漱石は『教則』の規定通り六歳で入學したのではなかつたが、然し『教則』の規定を超えて、一年の間は、六ケ月毎に二級づつ卒業して行つたので、結局は『教則』で規定

してある年齢よりも、半歳しか遲れないで濟んだのであらう。六ケ月に二級づつ卒業して行つてゐるのは、恐らく漱石の成績が優秀だつたせゐに相違ない。是は勿論漱石の天稟もあつたには違ひないが、養父がその天稟を刺激する事に相當熱心に注意したせゐもあつたのではないかと思はれる。

漱石は『道草』の中で、「證書のうちには賞狀も二三枚交つてゐた。昇り龍と降り龍で丸い輪廓を取つた眞中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に斷つてあつた。／「書物も貰つた事があるんだがな」／彼は勸善訓蒙だの輿地誌略だのを抱いて喜びの餘り飛んで宅へ歸つた昔を思ひ出した。御褒美をもらふ前の晩夢に見た蒼い龍と白い虎の事も思ひ出した。是等の遠いものが、平生と違つて今の健三には甚だ近く見えた。」と書いてゐる。漱石の家に保存されてゐる、「學業優等ニ付賞與候事／東京府廳」とある賞狀は、明治十年五月八日の日附のある、市谷學校下等第三級卒業の折のものと、明治十一年四月二十九日市谷學校上等第八級卒業の折のものと、明治十一年十月二十四日錦華學校第二級後期卒業の折のものと、以上合計三枚である。そのうち明治十年五月の賞狀には、「書籍」といふ印が捺してある。明治五年の『小學教則』によると、『勸善訓蒙』は下等小學の第六級で教へる事になつて居り、『輿地誌略』は上等小學の第七級で教へる事になつてゐる。もしその教程が當時に於いても變更がなかつたとすれば、

漱石は『勸善訓蒙』を明治八年五月、戸田學校の下等小學第八級・第七級を卒業した時に、『輿地誌略』を明治十年五月、市谷學校の下等小學第二級を卒業した時にもらつた筈である。

漱石が、明治九年（一八七六）五月と明治九年十月との間に、戸田學校から市谷學校に轉校した事、從つて漱石が淺草の養家から牛込の實家へ引き取られたのは、それと時を同じくする筈でなければならないといふ事は、旣に述べた。然もこの學校が戸田學校に比べて、だいぶ落ちる學校であつたといふ事は、『文部省第四年報』に、この學校が、創立は同じ明治七年でも、また授業料をとる學校ではあつても、「舊民家」を校舍として用ひて居り、教師は男四人で、生徒の數は男八十二人・女三十八人で、扶助金を貳百拾貳圓四拾八錢五厘しか配付されてゐない旨が載つてゐるのでも、凡そ想像する事が出來る。篠本二郎が『腕白時代の夏目君』の中に、この學校の校舍その他の設備が不完全であつたのみならず、教師も六七十位の漢學者がゐるかと思へば、洋算などを教へる先生はまだ二十歳前後であるといふ風に、亂雜を極めてゐたと書いてゐるのは、懸値のない、ほんとの事だらうと思ふ。漱石は『永日小品』の中の『紀元節』で、「脊の低い、眼の大きい、瘠せた」「顎から頰へ掛けて、髯が爺汚(ぢゞむさ)く生えかゝつてゐ」て、その「ざら／＼した顎の觸る着物の襟が薄黑く垢附いて見え」た、然も「此の着物と、此の髯の不精に延びるのと、それから、嘗て小言を云つた事がないのとで」、みんなから馬鹿にされてゐた先生が、作文の題として「記元

節」とボールドに書いたのを、「後から三番目の机の中程にゐた小供」が、先生の教室を出て行つたあとで、自分の席を立つて行つて、「記元節の記の字へ棒を引いて、其の傍へ新しく紀と肉太に書いた」事を敍述し、「記を紀と直したものは自分である。明治四十二年の今日でも、それを思ひ出すと下等な心持がしてならない。さうして、あれが爺むさい福田先生でなくつて、みんなの怖がつてゐた校長先生であればよかつたと思はない事はない。」と書いてゐる。是は無論何所の小學校での出來事とも、はつきり書かれてはゐない。然し是は何か私には、市谷學校での出來事のやうな氣がしてならないのである。

戸田學校で漱石がどういふ人と知り合つたかは、まるで分からない。然し市谷學校で友達だつた人の名前で、今日分かつてゐるのは、篠本二郎・島崎柳塢・桑原喜市の三人である。篠本二郎に就いては、漱石の口からつひぞその名前を聞いた事がなかつたが、既に篠本二郎の方で『腕白時代の夏目君』や『五高時代の夏目君』の中で、はつきりさう言つてゐるのであるから、疑ふ餘地はない。桑原喜市は當時「キーちやん」と呼ばれてゐた子で(書簡第八四三號)、明治四十二年(一九〇九)の日記にも出て來れば、斷片にも出て來て、『永日小品』の中の、『儲口』の種の供給者である。『紀元節』の中に書かれた出來事も、或は漱石がこの「キーちやん」に會つた爲に思ひ出したものかも知れないとも想像される。『硝子戸の中』第三十一・第三十二に、漱石が子供

の時分、「喜いちやんといふ仲の好い友達」から、太田南畝の自筆本といふ『南畝莠言』を買つて、あとですぐ取り戻しに來られた話が書かれてゐるが、この「喜いちやん」も亦、必ず桑原喜市である。さうして漱石は其所に、「喜いちやんも私も漢學が好きだつたので、解りもしない癖に、能く文章の議論などをして面白がつた。」と書いてゐる。漱石が島崎柳塢に宛てた手紙は『續書簡集』（第一八四九號）に載つてゐる。その島崎柳塢が漱石その他の友人と一緒に、子供の時分廻覽雜誌をやつてゐた事は、今日まで柳塢の手許にその一冊が保存されてゐるので知れる。その中に漱石が、明治十一年（一八七八）二月十七日に書いた『正成論』が出てゐるといふ事は、既に決定版『漱石全集』（第十四卷第三百十五頁）の讀者には知れ亙つてゐる事であらう。「漢學が好きだつたので」、「能く文章の議論などをして面白がつた」と言つてゐるだけあつて、漱石のこの文章は、全部漢文口調である。のみならずその文章は簡潔で、達意で、豐富な語彙を十分に使ひこなしてゐる。是は既にその方面の下地が、相當出來てゐる事を證明するものである。殊に結句の「正成勤王ノ志ヲ抱キ利ノ爲メニ走ラズ害ノ爲メニ遁レズ膝ヲ汚吏貪士ノ前ニ屈セズ義ヲ蹈ミテ死ス嘆クニ堪フベケンヤ噫」は、養父母の恩の押し賣を厭ひ、養母の出鱈目を憎み、實父の冷酷に愛想をつかし、記元節を紀元節と訂正しなければゐられなかつた少年漱石と呼應して、後年の漱石の芽が、かなりはつきり萌え出した事を感ぜしめるものがあると思ふ。

漱石は明治十一年(一八七八)四月市谷學校の上等小學第八級を卒業した。然るに漱石の家に保存されてゐる免狀では、漱石は同じ年の十二月には、神田猿樂町の錦華學校「小學尋常科二級後期」を卒業してゐる。卽ちこの間に漱石は、また轉校してゐるのである。然しなぜ漱石が轉校したのか、その理由ははつきりとは分からない。

もつとも『文部省第四年報』で見ると、錦華學校の創立は明治六年で、校舍は新築で、男教員が十人居り、授業料をとる學校で、男生徒百九十一人・女生徒百四十八人を持ち、扶助金六百圓二十八錢を配付されてゐる。その上錦華學校には、當時名家の子弟が多く集つたと言はれてゐる。學校としての諸般の設備は、市谷學校のやうな學校よりも、遙に整つてゐたものに違ひない。それにしても明治十一年の四月に市谷學校の「上等小學第八級」を卒業したものが、同じ年の十二月に錦華學校の「小學尋常科二級後期」をどうして卒業し得るのであるか。當時の小學校は八年制である。「上等小學八級」卒業といへば、今日の四年級半を卒業した事になり、「小學尋常科二級後期」卒業といへば、今日の七年級を卒業した事になる。卽ち漱石は、まる二年分飛び越してゐるのである。——もつとも當時は學業優秀でありさへすれば、一年分飛び越したり、二年分飛び越したりする事は、それほど珍らしい事ではなかつた。現に漱石は戸田學校で、半期に二級づつ二度進級してゐる。明治十一年四月市谷學校上等第八級卒業の折にも賞狀をもらつてゐる。漱

石は學業優秀の故に、此所でもさういふ特典に浴したのかも知れない。

現在の錦華小學校で聽いて見ると、當時の錦華學校は六年制の小學校だつたのださうである。同時に松本亦太郎の記憶によると、松本亦太郎は高崎の小學校の上等小學八級を卒業した後、京都に行き、其所で中學に受驗して、中學三年後期に入學を許可されたが、高崎の小學校で上等小學八級といふのは殆んど最上級で、その上にただ一級位あつたのみだつた、從つて高崎では上等小學の上級といふものは事實なかつたのださうである。もしそれと同じやうな事が東京の小學校にもあつて、市谷學校なども上等小學は八級もしくは七級までしかなかつたのだとすれば、漱石が市谷學校の上等小學八級を卒業した後、なほもう少し小學教育を受ける爲に錦華學校へ這入つたといふ事も順當であるし、然も錦華學校が既に六年制の上に立つてゐたとすれば、漱石がそのまま其所の二級後期に入學したといふ事も、ごく順當な進み方であつたといふ事が出來る。然し是も精確な所は分からない。

さうして漱石の家に保存されてゐる小學校の免狀は、この明治十一年十月の「小學尋常科二級後期」卒業の免狀をもつて、最後とするのである。漱石が此所でなほ、尋常科一級の前期と後期とを卒業したものかどうかは、免狀がないから、はつきりとは分からない。然し明治四十二年（一九〇九）一月の『中學世界』に掲載された漱石の談話筆記『私の經過した學生時代』の中に、

「私は東京で生れ、東京で育てられた、謂はゞ純粋の江戸ツ子である。明瞭記憶して居らぬが、何でも十一二の頃小學の門(八級制度の頃)を卒へて、それから今の東京府立第一中學――その頃一ツ橋に在つた――に入つたのであるが、何時も遊ぶ方が主になつて、勉強と云ふ勉強はしなかつた。」とある所から見ると、漱石は此所を卒業したものかも知れない。ただ明治十一年といへば、漱石十二の年である。此所を卒業するとすると、それは十三の年でなければならない。然るに漱石は中學に這入つて二三年ゐて、二松學舍に移つたと言つてゐる。漱石が二松學舍にゐたのは、明治十四年(一八八一)、漱石十五の年の事である。漱石は或は錦華學校を卒業しないで、明治十二年(一八七九)には、もう中學に這入つてゐたのかも知れない。それが十分可能であつた事は、既に松本亦太郎の例によつて、明白である。

八　彷徨

明治三十九年(一九〇六)六月の『中學文藝』臨時增刊『名士の中學時代』に掲載された、漱石の談話筆記『落第』の中で、漱石は「其頃東京には中學と云ふものが一つしか無かつた。學校の名もよくは覺えて居ないが、今の高等商業の横邊りに在つて、僕の入つたのは十二三の頃か知ら。何でも今の中學生などよりは餘程小さかつた樣な氣がする。學校は正則と變則とに別れて居て、正則の方は一般の普通學をやり、變則の方では英語を重にやつた。其頃變則の方には今度京都の文科大學の學長になつた狩野だの、岡田良平なども居つて、僕は正則の方に居たのだが、柳谷卯三郎、中川小十郎なども一緒だつた。で大學豫備門(今の高等學校)へ入るには變則の方だと英語を餘計やつて居たから容易に入れたけれど、正則の方では英語をやらなかつたから卒業して後更に英語を勉強しなければ豫備門へは入れなかつたのである。面白くもないし、二三年で僕は此中學を止めて了つて、三島中洲先生の二松學舍へ轉じたのであるが、其時分此處に居て今知られて

居る人は京都大學の田島錦治、井上密などで、この間の戰爭に露西亞へ捕虜になつて行つた內務省の小城なども居つたと思ふ。」と言つてゐる。

明治十二年(一八七九)の『文部省年報』によると、當時東京府第一中學といふのは、神田表神保町にあつて、男教員十三名、生徒百五十二名を持つてゐた。是は明治十一年の創立である。然るに別に明治十二年の創立で、男教員七名、生徒八十九名を持つてゐた、東京府第二中學といふのが、麴町の內幸町にあつた。是は恐らく漱石が第一中學に這入つた後で創設されたものだらうと思ふ。それでなければ「其頃東京には中學と云ふものが一つしか無かつた」といふ漱石の言葉が、意味をなさない。然もこの言葉はまた、漱石の中學に這入つたのが、明治十三年ではなく、明治十二年であつた事を、傍證する。

中學校も亦小學校と同じやうに、明治五年の學制で始めてその規程が定められた。それは小學校と同じやうに上等・下等に分ち、毎等六級・三ケ年、下等中學は十四歳より十六歳まで、上等中學は十七歳より十九歳まで、その間に下等では國語學・算術・習字・地學・史學・外國語學・窮理學・畫學・古言學・幾何學・代數學・記簿法・博物學・化學・修身學・生理學・國體學・政體大意・國勢學大意・及奏樂(當分缺)の二十科を、上等では國語學・習字・外國語學・窮理學・罫畫・古言學・幾何學・代數學・記簿法・化學・修身學・測量學・經濟學・重學大意・動物學・植

物學・地質學・鑛山學・性理學大意・星學大意の二十科を敎へる筈になつてゐたやうである。然しそれとともに當局は、「當今中學ノ書器未ダ備ラズ此際在來ノ書ニヨリテ之ヲ敎フルモノ或ハ學業ノ順序ヲ踏マズシテ洋語ヲ敎ヘ又ハ醫術ヲ敎ルモノ通ジテ變則中學ト稱スベシ」と言つて、「變則中學」の存在を許可してゐる。是は當時の日本は、一切が渾沌としてゐて、假令中學の正則教科を、規定通り實施しようとしても、第一には適當な教師が少なく、第二には適當な教科書がなく、第三には必要な器具がなかつた爲に、寧ろそれを外國語で敎授する方が遙に便利だとされてゐた時代だつたからである。その上一般が外國語の習得を熱心に希望して已まなかつたので、當時は「正則」の中學校よりも「變則」の中學校を希望する者が遙に多かつたのだと言はれる。勿論明治も十二年にもなれば、「正則」中學も多少は體裁を整へて來てゐたには違ひない。然し明治十二年(一八七九)九月の『教育令』で『中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス』と定義され、明治十四年(一八八一)の『中學校教則大綱』で更に「中學校ハ高等ノ普通學科ヲ授クル所ニシテ中人以上ノ業務ニ就クガ爲メ又ハ高等ノ學校ニ入ルガ爲メニ必須ノ學科ヲ授クルモノトス」と細說された「正則」中學が、「變則」中學に比べて、單に大學豫備門の試驗を受ける事の難易のみならず、課程そのもの竝にその課程を取り扱ふ教師の心の方向に、既に相當の開きがあつたに違ひないといふ事は、誰の頭にもすぐ考へ浮べられる事である。

そんならなぜさういふ損な「正則」を、漱石は選んだのであるか。それは分からない。漱石には、大學にまでも行つた、兄があつた。假令なんにも知らない父が、漠然と「正則」の方を選ませようとしたとしても、兄が事情を知つてさへゐたら、利益の多い「變則」の方を、勸めた筈だとも考へられる。もつともこの時分は、一切が草創の時代で、學校の制度なども始終變り續けに代つてゐたのだから、大學にゐる兄でも、中學の「正則」が可いか「變則」が可いかは、或はよくは分からなかつたのかも知れない。それとも是は漱石の一存できめた事で、當時は漢學が好きで、「英語と來たら大嫌ひで手に取るのも厭な樣な氣がし」て、上の兄から英語を教へられても、碌に覺えようとしなかつたといふ漱石は、英語ばかりを主にして敎へる「變則」の方に、反感のやうなものを感じ、わざわざ「正則」を選んだものかも知れないとも思はれる。名前だけから言つても、「正則」といふ方が「變則」といふよりも、遙に堂堂としてゐたには違ひないのである。いづれにしても漱石は、ただ「何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならないといふ慾」に促がされて、漠然と第一中學に這入り、また漠然と「正則」を選み、選んでみて初めて、是は大變な失敗だつたと氣がついたものらしい。

「正則といふのは日本語許りで、普通學の總てを教授されたものであるが、その代り英語は更にやらなかつた。變則の方はこれと異つて、たゞ英語のみを教へるといふに止つてゐた。それで、

私は何れに居たかと云へば、此の正則の方であつたから、英語は些しも習はなかつたのである。英語を修めてゐぬから、當時の豫備門に入ることが六ケ敷い。これではつまらぬ、今まで自分の抱いてゐた、志望が達せられぬことになるから、是非廢さうといふ考を起したのであるが、却々親が承知して呉れぬ。そこで、據なく毎日々々辨當を吊して家は出るが、學校には往かずに、その儘途中で道草を食つて遊んで居た。その中に、親にも私が學校を退きたいといふ考が解つたのだらう、間もなく正則の方は退くことになつたといふわけである。」と、漱石は『私の經過した學生時代』の中で言つてゐる。漱石は恐らく「正則」に這入りさへすれば、日本語で普通學の總てを教授されるとともに、そのまま大學豫備門に這入つて行けるものだと思つてゐたのだらう。それが英語を修めてゐなければ大學豫備門に這入れない事が分かり、大學豫備門に這入らなければ、「今まで自分の抱いてゐた、志望が達せられぬことになるから」といふので、英語を少しも敎へてくれない「正則」をやめる氣になつたのだらう。――それにしても不思議なのは、それほど英語を習ひたがつてゐた漱石が、「正則」をやめたあとで、英語の勉強はしないで、二松學舍に這入つて、漢文の勉強をしてゐる事である。

漱石の家に保存されてゐる二松學舍の免狀は二枚ある。その一つには明治十四年(一八八一)七月の日附で「第三級第一課卒業」とあり、他の一つには明治十四年十一月の日附で「第二級第三

課卒業」とある。――二松學舍で聽くと、二松學舍では、當時第一級から第三級まであつて、級毎に第一課・第二課・第三課に分たれ、半期に一課づつ卒業する仕組になつてゐたのださうである。第三級第三課では日本外史・日本政記・十八史略・國史略・小學を、第二課では靖獻遺言・蒙求・文章軌範を、第一課では唐詩選・皇朝史略・古文眞寶・復文を、第二級第三課では孟子・史記・文章軌範・三體詩・論語を、第二課では論語・唐宋八家文・前後漢書を教授してゐたといふ。漱石は恐らくいきなり此所の第三級第一課に這入つて、少くとも第二級第三課を卒業するまでは止まつてゐたのだから、少くとも此所に一年は――十五の年一年はゐた筈である。(『落第』の中で漱石は、「學舍の如きは實に不完全なもので、講堂などの汚なさと來たら今の人には迚も想像出來ない程だつた。眞黑になつた腸(はらわた)の出た疊が敷いてあつて机などは更にない。其處へ順序もなく坐り込んで講義を聞くのであつたが、輪講の時などは恰度カルタでも取る樣な工合にしてやつたものである。輪講の順番を定めるには、竹筒の中へ細長い札の入つて居るのを振つて、生徒は其中から一本宛抜いてそれに書いてある番號で定めたものであるが、其番號は單に一二三とは書いてなくて、一東、二冬、三江、四支、五微、六魚、七虞、八齊、九佳、十灰と云つた樣に何處迄も漢學的であつた。中には一、二、三の數字を抜いて唯東、冬、江と韻許り書いてあるのもあつて、虞を取れば七番、微を取れば五番と云ふことが直に分るのだから、それで定めるのもあ

つた。講義は朝の六時か七時頃から始めるので、往昔の寺子屋を其儘、學校らしい處などはちつともなかつたが、其頃は又寄宿料等も極めて廉く——僕は家から通つて居たけれど——慥か一ケ月二圓位だつたと覺えて居る。」と言つてゐる)。もし漱石が、英語を教はらなければ大學豫備門に這入る事が出來ず、大學豫備門に這入る事が出來なければ「今まで自分の抱いてゐた、志望が達せられぬことになるから」といふ理由で、「正則」の方を無理にもやめたのだとすれば、當然英語を專念に勉強すべきであつた。それにも拘はらず漢文を專門に教へる二松學舍に這入つたのは、大きな矛盾であり、又大きな道草である。是は一體どうした事であるか。

同じ『落第』の中で、漱石は、當時の二松學舍の光景を語つたあとで、すぐそれに引き續いて、「元來僕は漢學が好で隨分興味を有つて漢籍は澤山讀んだものである。今は英文學などをやつて居るが、其頃は英語と來たら大嫌ひで手に取るのも厭な樣な氣がした。兄が英語をやつて居たから家では少し宛教へられたけれど、教へる兄は疳癪持、教はる僕は大嫌ひと來て居るから到底長く續く筈もなく、ナショナルの二位でお終ひになつて了つたが、考へて見ると漢籍許り讀んでこの文明開化の世の中に漢學者になつた處が仕方なし、別に之と云ふ目的があつた譯でもなかつたけれど、此儘で過ごすのは充らないと思ふ處から、兎に角大學へ入つて何か勉強しようと決心した。其頃地方には各縣に一つ宛位中學校があつて、之を卒業して來た者は殆んど無試驗で大學豫

備門へ入れたものであるが、東京には一つしか中學はなし、それに變則の方をやつた者は容易に入れたけれど、正則の方をやつたものだと更に英語をやらなければならないので、豫備門へ入るものは多く成立學舍、共立學舍、進文學舍、――之は坪内さんなどがやつて居たので本郷壹岐殿坂の上あたりにあつた――其他之に類する二三の豫備校で入學試驗の準備をしたものである。其處で僕も大いに發心して大學豫備門へ入る爲に成立學舍――駿河臺にあつたが、慥か今の曾我祐準の隣だつたと思ふ――へ入學して、殆んど一年許り一生懸命に英語を勉強した。ナショナルの二位しか讀めないのが急に上の級(くらす)へ入つて、頭からスウヰントンの萬國史などを讀んだので、初めの中は少しも分らなかつたが、其時は好な漢籍さへ一冊殘らず賣つて了ひ夢中になつて勉強したから、終にはだん／＼分る樣になつて、其年(明治十七年)の夏は運よく大學豫備門へ入ることが出來た。」と言つてゐる。また『私の經過した學生時代』の中では、漱石は、「私は正則の方を廢(よ)してから、暫く、約一年許りも麴町の二松學舍に通つて、漢學許り專門に習つてゐたが、英語の必要――英語を修めなければ靜止(ちつと)してゐられぬといふ必要が、日一日と迫つて來た。そこで前記の成立學舍に入ることにした。」と言つてゐる。思ふに漱石は、「何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならないといふ慾」の爲に、「正則」の中學に這入つたものの、それを卒業しても、英語を勉強するのでなければ上の學校へは這入れないといふ事が分かつたの

で、竟に其所を出てしまつたが、然し「英語と來たら大嫌ひで手に取るのも厭な樣な氣がし」てゐたので、丁度中學をやめたのを機會に、自分の好きな「漢學」を專門に勉强する氣で、二松學舍に這入つたものではないか。それとも是は、毎朝辨當を持つてうちは出かけるが、學校には行かずに、途中で道草を喰つて遊んでゐたといふ、その期間内の出來事と解釋すべきものであるか。然し漱石は談話の中で、中學をやめてから二松學舍に這入つたと言つてゐる。第一漱石の性分として、片方の問題が片づかないうちに、片方に手を出すといふやうな、さういふ意味での掛持をしようとも思はれない。

明治四十一年(一九〇八)九月の『文章世界』に掲載された、漱石の談話筆記『處女作追懷談』の中に、「私も十五六歲の頃は、漢書や小說などを讀んで文學といふものを面白く感じ、自分もやつて見ようといふ氣がした」といふ、一節がある。この希望と漱石の二松學舍入學との間には、相當密接な關係がありさうに思はれる。漱石は市谷學校に通つてゐる時分から、「喜いちやん」を相手に、漢文に關する議論をしてゐる。松本亦太郎は、小學時代に、既に『日本外史』だの『十八史略』だのを讀んだと言つてゐる。漱石がその時分、相當に漢文を讀んでゐたに違ひない事は、漱石の『正成論』によつても、想像する事が出來る。漱石は漢文が讀めもしたし、面白くも思つてゐたので、いつそこのまま文章を以つて身を立てようといふ氣になつて、二松學舍に這入つた

のかも知れない。然るに漱石がその事を長兄に話すと、長兄は「文學は職業にやならない、アッコンプリツシメントに過ぎないものだ」と言つて、寧ろ漱石を「叱つた」のださうである。その上ヨーロッパの文明が澎湃として押し寄せて來る當時の時勢と、從つて是から何をするにしても、一往は英語を修めるのでなければ、到底「長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出」る事が出來ないやうになつてゐた、當時の敎育組織の認識とは、どうしても漱石に英語を勉强しなければゐられなくしたものらしい。それで漱石は、思ひ切つて「手に取るのも厭な樣な氣が」してゐた英語の本を取り上げ、それを一所懸命勉强する決心をする。是は、少年漱石の中の、東洋か西洋か——西か東かの戰ひの第一聲である。

漱石は明治十七年(一八八四)の秋、卽ち漱石の十八年の年の秋、試驗を受けて大學豫備門に這入つた。その前漱石は成立學舍に「殆んど一年許り」這入つてゐたといふから、漱石が成立學舍に這入つたのは、明治十六年の秋ごろであつた筈である。漱石の二松學舍にゐたのが、例へば明治十五年の春ごろまでであつたとしても、漱石が二松學舍から成立學舍へ移る間には、凡そ一年半の月日が挾まつてゐる。この間漱石が何所で何をしてゐたか、まるで分からない。

然しもしこの間に漱石の心の中で、西か東かの戰ひが絕えず戰はれてゐたのだと假定すれば、一年半ぐらゐの月日は瞬く內にたつてしまひ得る。さうして明治十六年の(恐らくは秋の)成立學

舍入學をもつて、その問題は一往解決がつき、漱石は「好きな漢籍さへ一冊殘らず賣つて了ひ」、「一生懸命に英語を勉强」するのである。然し漱石は明治二十二年(一八八九)九月の『木屑錄』の初めに、「余兒時誦唐宋數千言。喜作爲文章。或極意彫琢。經旬而始成。或咄嗟衝口而發。自覺澹然有樸氣。竊謂古作者豈難臻哉。遂有意于以文立身。自是遊覽登臨必有記焉。其後二三年。開篋出所作文若干篇讀之。先以爲極意彫琢者。則頽隳纖佻。先以爲澹然有樸氣者。則骫骳艱澁。譬之人。一如妓女奄々無氣力。一如頑兒悍傲凌長者。皆不堪觀。焚稿扯紙。面發赤自失者久之。竊自嘆曰。古人讀萬卷書。又爲萬里遊。故其文雄峻博大。卓然有奇氣。今余選耎趦趄。徒守父母之鄕。足不出都門。而求其文之臻古人之域。豈不大過哉。因慨然欲曳屣遠遊。未能果志。而時勢一變。余挾蟹行書。上于鄕校。校課役々。不復暇講鳥迹之文。詞賦簡牘之類。空束之高閣。先之所謂纖佻骫骳者。亦將不得爲。又安望古作家哉」と書いてゐるやうに、「漢籍許り讀んでこの文明開化の世の中に漢學者になつた處が仕方」がないと感じて、英語を專心勉强しようと決心しはしたものの、決して英語を勉强し、英語に通達する事その事を、えらい事をしてゐるやうに思ひはしなかつた。漱石は、時勢がそれを要求するから、必要としてそれを勉强し、それに通達しようとするのであつて、從つてそれは飽くまで方便でしかないと考へるのである。もつともさういふ考へが熟して來たのは、寧ろ漱石が豫備門に這入つた後、高等中學の本科生になつてからの事であ

るが、ともかく漱石にとつて重要なのは、自己であり、自己の生活であり、自己の生活の表現であつた。漱石は英語英文に通達して、英文で大文章を書いて、西洋人を驚ろかしてやらうと思つたといふが、此所で「校課役々。不復暇講鳥迹之文」といひ、或は「先之所謂織佻觥觥者。亦将不得爲」といつてゐるのも、自分に暇がなくて文章を樂しむ事さへ出來ない事を嘆いてゐるのである。逆に言へば、漱石は、その必要を認めた爲に、自分の樂しみを暫く押へて、その必要な事を、一所懸命に習得し獲得しようとするのである。

もつとも漱石が、中學をやめたあとで、一時二松學舍に這入つたのには、漱石の母の死が、與つて力があつたのかも知れない。漱石は或はその爲め世の無常を感じ、「立派な人間になつて世間に出」ようとあくせくするよりも、自分の好きな事をして一生を暮す方が、遙に良い事であるといふやうな心持に、一時的にでも、なつたものかも知れない。漱石の母は、明治十四年（一八八一）一月二十一日、年五十三年四ケ月でなくなつた。即ち漱石が「正則」をやめて二松學舍に這入る年の一月二十一日の事である。

九　母

書簡第五二四號の中で漱石は、「世の中に何がつまらないつて、おとつさんになる程つまらないものはない。又おとつさんを持つより厄介な事はない。僕はおやぢで散々手コズツタ。不思議な事はおやぢが死んでも悲しくも何ともない。舊幕時代なら親不孝の罪を以て火あぶりにでもなる倅だね。」と言つてゐる。然し漱石は、母に對しては、隨分愛情を持つてゐたやうである。また漱石の記述によれば、漱石の母は、相當立破な人間でもあれば、漱石を愛してもゐたやうに見える。漱石は『硝子戸の中』第三十七と第三十八とを、卽ち『硝子戸の中』第一の「序語」に對する「結語」としての第三十九を除けば、『硝子戸の中』の最後の二章を、母の追憶に捧げたが、それは淡い哀愁と憧憬とに貫ぬかれた『硝子戸の中』の追憶小品の中で、最も美しいものの一つである。

其所で漱石は、「母の名は千枝といつた。私は今でも此千枝といふ言葉を懐かしいものゝ一つに

數へてゐる。だから私にはそれがたゞ私の母丈の名前で、決して外の女の名前であつてはならない様な氣がする。幸ひに私はまだ母以外の千枝といふ女に出會つた事がない。」「私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて裁縫をしてゐた。其眼鏡は鐵縁の古風なもので、球の大きさが直徑二寸以上もあつたやうに思はれる。母はそれを掛けた儘、すこし顋を襟元へ引き付けながら、私を凝と見る事が屢あつたが、老眼の性質を知らない其頃の私には、それがたゞ彼女の癖とのみ考へられた。私は此眼鏡と共に、何時でも母の背景になつてゐた一間の襖を想ひ出す。古びた張交の中に、生死事大無常迅速云々と書いた石摺なども鮮やかに眼に浮んで來る。／夏になると母は始終紺無地の絽の帷子を着て、幅の狭い黒繻子の帶を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に殘つてゐる母の姿は、何時でも此眞夏の服裝で頭の中に現れる丈なので、それから紺無地の絽の着物と幅の狭い黒繻子の帶を取り除くと、後に殘るものはたゞ彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁鼻へ出て、兄と碁を打つてゐた様子などは、彼等二人を組み合はせた圖柄として、私の胸に收めてある唯一の記念なのだが、其處でも彼女は矢張同じ帷子を着て、同じ帶を締めて坐つてゐるのである。」「悪戯で強情な私は、決して世間の末ツ子のやうに母から甘く取扱はれなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつて呉れたものは母だといふ強い親しみの心が、母に對する私の記憶の中には、何時でも籠つてゐる。愛憎を別にして考へて見ても、母はたしかに品位のある床

しい婦人に違なかつた。さうして父よりも賢こさうに誰の目にも見えた。氣六づかしい兄も母丈には畏敬の念を抱いてゐた。／「御母さんは何にも云はないけれども、何處かに怖いところがある」／私は母を評した兄の此言葉を、暗い遠くの方から明かに引張出してくる事が今でも出來る。／然しそれは水に融けて流れかゝつた字體を、屹となつて漸と元の形に返したやうな際どい私の記憶の斷片に過ぎない。其外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である。途切れ途切れに殘つてゐる彼女の面影をいくら丹念に拾ひ集めても、母の全體はとても髣髴する譯に行かない。其途切れ〳〵に殘つてゐる昔さへ、半以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは摑めない。／或時私は二階へ上つて、たつた一人で、晝寐をした事がある。其頃の私は晝寐をすると、よく變なものに襲はれがちであつた。私の親指が見る間に大きくなつて、何時迄經つても留らなかつたり、或は仰向に眺めてゐる天井が段々上から下りて來て、私の胸を抑へ付けたり、又は眼を開いて普段と變らない周圍を現に見てゐるのに、身體丈が睡魔の擒となつて、いくら藻搔いても、手足を動かす事が出來なかつたり、後で考へてさへ、夢だか正氣だか譯の分らない場合が多かつた。さうして其時も私は此變なものに襲はれたのである。／私は何時何處で犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金錢を多額に費消してしまつた。それを何の目的で何に遣つたのか、其邊も明瞭でないけれども、子供の私には到底償ふ譯に行かないので、氣の狹い私は寐ながら大變苦し

み出した。さうして仕舞に大きな聲を揚げて下にゐる母を呼んだのである。／二階の梯子段は、母の大眼鏡と離す事の出來ない、生死事大無常迅速云々と書いた石摺の張交にしてある襖の、すぐ後に附いてゐるので、母は私の聲を聞き付けると、すぐ二階へ上つて來て呉れた。私は其處に立つて私を眺めてゐる母に、私の苦しみを話して、何うかして下さいと頼んだ。母は其時微笑しながら、「心配しないで好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云つて呉れた。私は大變嬉しかつた。それで安心してまたすや〳〵寐てしまつた。／私は此出來事が、全部夢なのか、又半分丈本當なのか、今でも疑つてゐる。然し何うしても私は實際大きな聲を出して母に救ひを求め、母は又實際の姿を現して私に慰藉の言葉を與へて呉れたとしか考へられない。さうして其時の母の服裝は、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無地の絽の帷子に幅の狹い黑繻子の帶だつたのである。」と書いてゐる。

不思議に漱石は是に似た夢をよく見てゐる。明治三十八年（一九〇五）一月十五日野間眞綱に宛てても、漱石は「昔し大變な罪惡を冒して其後悉皆忘却して居たのを枕元の壁に掲示の樣に張りつけられて大閉口をした夢を見た。何でも其罪惡は人殺しか何かした事であつた。」と書いてゐる。私自身も亦早稻田のうちで、漱石自身の口から、それに似た夢の話を聽いた記憶がある。是は漱石が、正しく生きようとする上で、あまりに神經質になつてゐたせゐであつたのかも知れな

い。それとも是は漱石の醜いものを憎む心の強さが變形して、漱石が、絶えず何ものか――醜いもの、汚ないもの、罪と名づけてもいいやうなものに、始終追つかけられる氣がしてゐたせゐであつたのかも知れない。それは遽にきめられないとしても、漱石が屡かういふ夢の爲に苦しめられてゐた事は、事實である。

ストリンドベリは、愛しても愛しても、自分が欲する如くには、相手から酬いられる事のない苦惱を、最後に母の愛に縋る事によつて、救はれようとした。ストリンドベリにとつて、マドンナは、所詮自分の母であつた。漱石が此所で自分の苦惱の救ひ手として、自分の母を持つた事の歡びを、象徴的に解釋して、漱石の母への愛をストリンドベリのそれと同じやうなものに見做す事の可否は問題であるとしても、ともかく漱石が自分の母を思ひ出す度毎に、自分は自分の苦しい夢の救ひ手として母を持つたといふ記憶が、爾後の漱石の心持を寛ろげるものとして働いた事は、爭はれない。その事は漱石の、母に對する感情を、何か宗教的な感情に近いものにする。さうしてそれは、漱石の生活が、苦惱に曝されれば曝されるほど、ますますその色彩を濃厚にして行つたやうに見える。――漱石が、明治二十八年（一八九五）の十二月に「なき母の湯婆やさめて十二年」といふ句を作り、明治二十九年（一八九六）の一月に、母の墓に詣でて、「梅の花不肖なれども梅の花」といふ句を作つてゐるのも、勿論漱石の、母への愛情から來たものには違ひないが、

それとともに此所には漱石の、母の靈の前に誓ひを立ててでもゐるやうな、聖なる感情が動いてゐる事も、また見逃がす譯に行かない。

その母が、明治十四年（一八八一）一月二十一日に死んだのである。その事に就いて漱石は何事も語つてはゐないが、然し漱石がいろんな意味で打擊を受けたに違ひない事は、想像に餘りある。

勿論漱石は、當時十五の少年であつた。いくら漱石が愛に餓ゑてゐたとしても、またいくら漱石が母を敬愛し、その母から愛せられてゐる事を、沙漠の中のオアシスのやうに、難有く思つてゐたとしても、その母の死から大打擊を受け、憂鬱になり、厭世的な氣分の下に、世の中の事に興味をなくしてしまふには、漱石は餘りに若かつた。淺草から牛込に移されて、父の態度ががらりと變つたのに、一度は驚き、次には愛想をつかした健三が、それでも悲觀に陷らずに濟んだと同じやうに、「發育に伴ふ彼の生氣は、いくら抑へ付けられても、下からむく〳〵と頭を擡げ」て、「遂に憂鬱にならずに濟んだ」のに違ひなかつた。然し英語が修められない爲に大學豫備門に這入る事が困難であるといふ理由で中學をやめたものが、英語の修業とは正反對の二松學舍に這入つたといふ事は、結局英語の修業も斷念し、從つて大學豫備門に這入つて修業する事も斷念したといふ事を意味した筈である。もしさうだとすれば、それは結局漱石の母の死が漱石に打擊を與へ、人生の競爭場裏に立つて、人人と功名を爭ふ心のきほひを失はしめ、靜に引き籠つて、自分

の好きな事をして暮すといふやうな、退嬰的な態度をとらしめるに至つたのだとするより外、或は適切な解釋がないかも知れないとも思はれる。

もつとも漱石には、さういふ退嬰的、と言つては語弊があるが、世外に優游自適して、閑日月を樂しみたいといふ欲望が、子供の時分からあつた。例へば『思ひ出す事など』の中で漱石は、「小供のとき家に五六十幅の畫があつた。ある時は床の間の前で、ある時は藏の中で、又ある時は虫干の折に、余は交る〲それを見た。さうして懸物の前に獨り蹲踞まつて、默然と時を過すのを樂とした。……／畫のうちでは彩色を使つた南畫が一番面白かつた。惜い事に余の家の藏幅には其南畫が少なかつた。子供の事だから畫の巧拙などは無論分らう筈はなかつた。好き嫌ひと云つた所で、構圖の上に自分の氣に入つた天然の色と形が表はれてゐれば、夫で嬉しかつたのである。／……／或時、青くて丸い山を向ふに控へた、又的皪と春に照る梅を庭に植へた、又柴門の眞前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て——無論畫絹の上に——何うか生涯に一遍で好いから斯んな所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語つた。友人は余の眞面目な顏をしけ〲眺めて、君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるかと左も氣の毒さうに云つた。此友人は岩手のものであつた。余は成程と始めて自分の迂濶を愧づると共に、余の風流心に泥を塗つた友人の實際的なのを惡んだ。」と言つてゐる。この「友人」といふのは、恐らく太

田達人で、従つてこの事件は、明治十六年、漱石が成立學舍に這入つた以後の事だつたのに違ひない。然し漱石がかういふ「風流心」を、もつと小さい時分から持つてゐた事は、漱石が子供の時分、花のついた木瓜の枝で筆架を作り、それに二錢五厘の水筆を載せて喜んだといふ、『草枕』の記述を見ても分かる。また頻に文章を作つて樂しんだといふ、『木屑錄』の序を見ても分かる。勿論漱石は成立學舍に這入つてからは、出來る丈この「風流心」を奥に押し籠めて、專念英語の勉強に集中したのであるが、それでも漱石は、一方ではその「風流心」を恣に放つて、所謂「風流三昧」に日を送りたい希望を、決して棄てる事がなかつた。それが母の死によつて、假令一時的ではあつても、この「風流心」を放つて生きる事の方へ、漱石の心を傾かしめたものではないかといふのである。——もし問題をこの角度から攫むとすれば、是は西か東かの戰ひであるより前に、世間的なものと出世間的なものとの戰ひであつたと言ふべきであらうと思ふ。然しこの事は、はつきりとは分からない。

最後に漱石は、自分の母が遊女屋の娘であつたといふ事を、知つてゐたかどうか。——是は無論今日からは、はつきりした解答を與へる事は出來ない。然し漱石の書いたものから想像すると、どうも漱石はこの事を、死ぬまで知らずにゐたやうである。

勿論徳川時代の遊女屋に對する考へ方は、今日の遊女屋に對する考へ方とは、相當違つてゐる。

市井の考へ方では、歌舞伎の事に通じ遊女屋の事に通じてゐる事は、寧ろ誇りでさへあつた。その上當時の遊女屋の主人などといふものは、店の事は一切番頭任せで、義太夫の稽古をしたり茶の湯の稽古をしたり、もしくは物見遊山にその日その日を送るといふやうな、御大名暮しをしてゐたのださうである。從つて其所から嫁を迎へるといふ事は、それほど愧づべき事でもなんでもなかつた。それでもさういふ事は、恐らく名主としては世間體のいい事ではなかつた。漱石の母は、姉婿の高橋長左衛門の養女として、夏目家に片づいて來てゐる。それだけに夏目家では、漱石の母の里を、祕し隱しには隱さないまでも、必要もないのに誰にでも饒舌り散らす筈がなく、また必要な場合には、一往はその實家を、四谷大番町の鍵屋といふ質屋であるといふ事に、きめてあつたものらしい。是は或は吉原に於ける入谷の寮のやうなものか、それでなければ伊豆橋の近い親類のやうなもので、事實鍵屋といふ質屋は、四谷大番町にあつたものに違ひないが、然しもし漱石が其所を訪ねようといふやうな好奇心を起しでもしたら、恐らくその爲め虚構は暴露し、漱石は幻滅を感じなければならなかつたらう。然し幸に漱石は、さういふ好奇心を起さなかつた。それだから漱石は、「私はつひぞ母の里へ伴れて行かれた覺えがないので、長い間母が何處から嫁に來たのか知らずに暮してゐた。自分から求めて訊きたがるやうな好奇心は更になかつた。それで其點も矢張ぼんやり霞んで見えるより外に仕方がないのだが、母が四ツ谷大番町で生れたと

いふ話丈は確に聞いてゐた。宅は質屋であつたらしい。藏が幾戸前とかあつたのだと、かつて人から教へられたやうにも思ふが、何しろ其大番町といふ所を、此年になる迄今だに通つた事のない私のことだから、そんな細な點は丸で忘れてしまつた。たとひそれが事實であつたにせよ、私の今有つてゐる母の記念のなかに藏屋敷などは決して現れて來ないのである。大方其頃にはもう潰れて仕舞つたのだらう。」と書く事が出來たのである。

漱石は初め、自分の實の父母を、お爺さんお婆さんと呼ぶ事に馴らされてゐた。後にそれが實の父母であると教へられても、普通の末つ子が普通の父母に親しむやうには、實の父母に親しむ事が出來なかつた。そのうち漱石の母は死んでしまつた。のみならず漱石の生活は、寧ろ自分の周圍を批評し、其所から一日も早く拔け出す事を希望するやうな傾向をとり、事實また其所からはつきり突き拔けてしまつた。例へば兄の和三郎直矩から、實はお母さんの里は是是だと言つて聽かされるやうな、打ち融けた時間を、漱石は竟に持つ事が出來なかつたに違ひない。その上かういふ事實は、いくら兄弟の間柄だとは言つても、相手から追求されない限りは、不斷さう無闇に言つて聽かせる筈もないのである。

漱石の母がお嫁に來る前に御殿奉公をしてゐたといふ事は、和三郎直矩によつても證言されてゐる。是は恐らく事實と見做して可いに違ひない。なんでも明石の殿樣の所に、十年餘りも奉公

に上がつてゐたのださうである。漱石は「母が父の所へ嫁にくる迄御殿奉公をしてゐたといふ話も朧氣に覺えてゐるが、何處の大名の屋敷へ上つて、何の位長く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質さへ能く辨へない今の私には、たゞ淡い薫を殘して消えた香のやうなもので、殆ど取り留めようのない事實である。／然しさう云へば、私は錦繪に描いた御殿女中の羽織つてゐるやうな華美な總模樣の着物を宅の藏の中で見た事がある。紅絹裏を付けた其着物の表には、櫻だか梅だかが一面に染め出されて、所々に金絲や銀絲の刺繡も交つてゐた。是は恐らく當時の裲襠とかいふものなのだらう。然し母がそれを打ち掛けた姿は、今想像しても丸で眼に浮かばない。私の知つてゐる母は、常に大きな老眼鏡を掛けた御婆さんであつたから。それのみか私は此美しい裲襠が其後小搔卷に仕立直されて、其頃宅に出來た病人の上に載せられたのを見た位だから。」と書いてゐる。

一〇　大學豫備門

漱石の學校生活は、成立學舍入學を機として、初めて特定の方向を持つに至つた。漱石は子供の時から文學が好きで、出來る事なら文學をやりたい、少くとも文學を捨てたくないと思つてゐた。然も今自分が恃みとする漢詩文の世界から飛躍して、新しく英語修業の一念を發起する以上、それで文學がやれるかどうかは到底豫想する事が出來なかつた。從つて漱石の言ふやうに、漱石は初めの内は「別に之と云ふ目的があつた譯でもな」く、ただ漫然と大學豫備門に這入らうと志したに過ぎないと言つても可かつた。それでも漱石は、ともかく英語を勉强して大學に這入り、高等の教育を受けようとするのである。是は少くとも、是までの彷徨ではなかつた。

當時の成立學舍が、どんな學校で、どんな事を教へてゐたものか、精しい事は分からない。漱石は、談話筆記『私の經過した學生時代』の中で、「この成立學舍と云ふのは、駿河臺の今の曾我祐準さんの隣に在つたもので、校舍と云ふのは、それは隨分不潔な、殺風景極まるものであつた。

窓には戸がないから、冬の日などは寒い風がヒユウヒユウと吹き曝し、教場へは下駄を履いたまま上がるといふ風で、教師などは大抵大學生が學資を得るために、內職として勤めてゐるのが多かつた。／でも、當時此の塾舍の學生をして居た者で、目今有要な地位を得てゐる者が少くない。一寸例を擧げて言つて見ると、前の長崎高等商業學校長をしてゐた隈本有尙、故人の日高眞實、實業家の植村俊平、それから新渡戸博士諸氏などで、此の外にも未だあるだらう。隈本氏は其の頃、教師と生徒との中間位のところに居たやうに思ふ。又新渡戸博士は、旣に札幌農學校を濟して、大學選科に通ひながら、その間に來てゐたやうに覺えて居る。」と言つてゐる。また『滿韓ところ〲』の中には、佐藤友熊の事を敍して、「始めて彼を知つたのは駿河臺の成立學舍といふ汚ない學校で、其學校へは佐藤も余も豫備門に這入る準備の爲めに通學したのであるから餘程古い事になる。佐藤は其頃筒袖に、脛の出る袴を穿いて遣つて來た。余の如く東京に生れたものゝ眼には、此姿が頗る異樣に感ぜられた。丁度白虎隊の一人が、腹を切り損なつて、入學試驗を受に東京に出たとしか思はれなかつた。教場へは無論下駄を穿いた儘上つた。尤も是は佐藤許ぢやない。我等も悉く下駄の儘あがつた。上草履や素足で步く樣な學校ぢやないのだから仕方がない。床に穴が開いてゐて、氣を付けないと、緣の下へ落ちる拍子に、向脛を擢剝く丈が、普通の往來より惡い位のものである。／古い屋敷を其儘學校に用ひてゐるので玄關からが旣に教場であつた。

ある雨の降る日余は此玄關に上つて時間の來るのを待つてゐると、黑い桐油を着て饅頭笠を被つた郵便脚夫が門から這入つて來た。不思議な事に此郵便屋が鐵瓶を提げてゐる。しかも全くの素足である。足袋は無論の事、草鞋さへ穿いてゐない。さうして、普通なら玄關の前へ來て、郵便と大きな聲を出すべき所を、無言の儘すた〳〵敷臺から敎場の中へ這入つて來た。此郵便屋が卽ち佐藤であつたので大いに感心した。何故鐵瓶を提げてゐたものか其理由は今日迄遂に聞く機會がない。〳〵其後佐藤は成立學舍の寄宿へ這入つた。そこで賄征伐を遣つた時、何うした機勢か額に創をして、しばらくの間白布で頭を卷いてゐたが、それが、後鉢卷の樣に如何にも勇ましく見えた。賄に揶揄れたなと調戲つて苛い目に逢つたので今に其颯爽たる姿を覺えてゐる。」と書いてある。さういふものを通して、凡その光景を想像する事が出來るのみである。

この成立學舍で漱石が知り合ひになつた人人は、この佐藤友熊の外に、中川小十郎、太田達人、橋本左五郎などである。その太田達人の事は『硝子戶の中』に、橋本左五郎の事は『滿韓ところ〴〵』に書かれてゐる。——「橋本左五郎とは、明治十七年の頃、小石川の極樂水の傍で御寺の二階を借りて一所に自炊をしてゐた事がある。其時は間代を拂つて、隔日に牛肉を食つて、一等米を焚いて、夫で月々二圓で濟んだ。尤も牛肉は大きな鍋へ汁を一杯拵へて、其中に浮かして食つた。十錢の牛を七人で食ふのだから、斯うしなければ食ひ樣がなかつたのである。飯は釜

から杓(しやく)つて食つた。高い二階へ大きな釜を揚げるのは難義であつた。余は此處で橋本と一所に豫備門へ這入る準備をした。橋本は余よりも英語や數學に於て先輩であつた。入學試驗のとき代數が六づかしくつて途方に暮れたから、そつと隣席の橋本から敎へて貰つて、其御蔭でやつと入學した。所が敎へた方の橋本は見事に落第した。入學をした余もすぐ盲腸炎に罹つた。是は毎晩寺の門前へ賣に來る汁粉を、規則の如く毎晩食つたからである。汁粉屋は門前迄來た合圖に、屹度團扇をばた〳〵と鳴らした。其ばた〳〵云ふ音を聞くと、どうしても汁粉を食はずにはゐられなかつた。從つて、余は此汁粉屋の爺(おやぢ)の爲に盲腸炎にされたと同然である。」と、漱石は書いてゐる。——この御寺といふのは、橋本左五郎によると、新福寺といふ寺で、なんでも二階二た間ぶつ通しの、大分廣い部屋を借りてゐたのださうである。

此所に書いてあるやうに、漱石は既に大學豫備門に這入る前から、即ち成立學舍に這入つてゐる時分から、家を出て、自炊生活をしてゐる。豫備門に這入つて間もなく盲腸炎を患つたといふから、その當時は恐らく家に歸つてゐたに違ひないが、それでも漱石は、そのあと、神田猿樂町の末富屋といふのに、中村(當時柴野)是公だの橋本左五郎だのと一緒に下宿してゐる。またその後では、中村是公と一緒に、本所の江東義塾の敎師となり、其所の寄宿に住んでゐる。其所で漱石は急性のトラホームに罹り、それがなかなか癒らないので、家の者の勸めで、家から學校に通

ふやうになるのであるが、それまで漱石は、ずつと外にゐつづけるのである。是は一つには、牛込の奥から駿河臺だの一ツ橋だのに通學するのが不便であり、家にゐては十分勉強が出來ないといふ理由もあつたには違ひないが、然し重なる理由は漱石に、自分の家の空氣が、どうも面白くなく感じられた爲ではなかつたかと思はれる。

漱石の長兄大一は、漱石を愛した。さうして漱石に希望を持ち、自分が死ぬ時には、漱石に自分の跡を繼がしてくれと、遺言して死んだのださうである。漱石もこの兄を敬愛した。然し母は既に死んでしまひ、父は自分を愛してくれず、外の兄たちは道樂者で、うちの骨董品を盜み出しては道樂をするといふやうな狀態であり、たまたまうちにゐるかと思へば、或は藤八拳を打つて見たり、芝居の聲色を使つて見たり、親類の益さんをからかつて見たり、また退屈すると親類の高田へ押しかけて行つて、向ひの藝者家の藝者とトランプをして見たり、まるで七偏人か八笑人の寄り合ひのやうな生活が繰り返されてゐたのだから、漱石にとつて、自分のうちの空氣が決して快いものでなかつた事は、說明を要しない。それやこれやが重なつて、漱石はこの極樂水の下宿あたりから、なるべく外に出る方針をとつたものだらうと思ふ。

もつとも江東義塾の寄宿で眼を患つて以來、漱石は、ずつと自宅から通學してゐる。その意味で漱石の、自分のうちの空氣に對する反感は、それほど猛烈なものではなかつたのだとも考へら

れる。然し漱石がかうして自分のうちに歸つたのは、凡そ明治二十年(一八八七)ごろの事である。明治二十年には、長兄大一・次兄榮之助と相次いで死んでゐる。第一漱石が大學豫備門に這入つてから、既に三年を經過してゐる。漱石に對する父の態度も、相當變つて來てゐたに違ひない。勿論漱石には、いくら長兄の希望でも、自分の家を繼ぐ意志はなかつた。然し漱石の父にして見れば、長子の遺言もあり、次子をも次いで失ひ、三男の和三郎は學問が嫌ひだといふのだから、大學豫備門に這入つて、行く行くは大學に這入らうとしてゐる漱石の前途に囑望し、漱石に頼らうとする氣を起すのも、勝手な話ではあるが、自然でもあつた。從つて父は、漱石のトラホームを機會に、漱石をうちへ呼び寄せる事にしたものだらう。漱石から言へば、漱石は既に二十一歳の青年になつてゐる。假令自分のうちの空氣が愉快なものでなかつたとしても、それに亂されたり誘はれたりしないだけの心構へは、もう出來上がつてゐたに違ひない。

二　落第

『私の經過した學生時代』の中で、漱石は「始め豫備門の方の年數が四ケ年、大學の方が四ケ年、都合大學を出るまでには八年間を要することになつてゐたが、私の入學する前後はその規定は變じて、大學三年、豫備門五年と云ふことになつた。結局(つまり)總體の年數から云へば前と聊か變りはないが、豫備門丈けでいふと、一年年數が殖えたことになり、その豫備門五年をも亦二つに分ち、豫科三年、本科二年といふ順序でした。／それで、豫科三年修了者と、その頃の中學卒業生とを比べて見ると、實際は豫科の方が同じ普通學でも遙に進んでゐたやうに思はれた。卽ち豫科の方では動物、植物、その他のものでも大抵原書でやつてゐた位であるが、その時の豫科修了者は、中學卒業生と同程度といふことに見做されることになつた。だから中學卒業生は、英語專修科といふに一年入ると、直ぐ豫備門本科に入學することが出來たのである。規則改正の結果、つまり斯ういふことになつたので、豫科を經てゆく者より、中學を卒業して入つた者の方が二年だ

け利益(とく)をすることになる。／私などは中學を途中で廢して、二松學舍、成立學舍などに通ひ、それから豫科に入つたのであるから、非常に迂路(まはりみち)をしたことになる。其那事ではむしろ其儘中學を卒へて豫備門へ入つた方が、年數の上から云つても利益であつたが、私ばかりではない。私と同じやうな徑路をもつて進んだ人が澤山あつた。その人達は先づ損した方の組である。」と言つてゐる。

明治十七年(一八八四)十二月、即ち漱石が大學豫備門に這入つた年の第一學期の試驗の成績表を見ると、漱石の名前は、鹽原金之助として、第四級に出てゐて、それには『明治十七年十二月(第一學期)東京大學豫備門前本黌第一、二、三級及ヒ第四級生徒試業優劣表』と題してある。是は、明治十五年(一八八二)六月東京大學を綜合大學とするに就いて、醫學部豫科を廢し、その生徒を豫備門に編入した結果、醫學部豫科合併以前の豫備門を本黌と稱し、醫學部豫科を分黌と稱したのが、明治十七年六月豫備門の學科課程が改正され、年限が四ケ年と定められ、本黌・分黌の區別が撤廢される事になつた爲に、新規程による漱石の組だけは、單に「四級」であるが、上級生はそれぞれ「前本黌」・「前分黌」一級・二級・三級と呼ばれる事になつたからである。それがいつ本科二年豫科三年といふ風な五ケ年制度になつたか、はつきりとは分からない。然し明治十八年(一八八五)八月豫備門が東京大學の管轄を脫して文部省の直轄となり、東京法學校豫科の

生徒や東京外國語學校の佛獨兩語科の生徒を此所に轉屬させた後、明治十九年(一八八六)四月工科大學豫科の生徒をも豫備門に轉屬させるとともに、第一高等中學校と改稱し、七月舊豫備門生徒を高等中學校本科及豫科の各級に編入したとある。新制度は、恐らく明治十九年七月に始まつたものだらうと思ふ。然もそのどさくさの最中、漱石によれば、漱石の豫科「二級」の時、漱石は落第してゐるのである。

豫備門に這入つてから、漱石は碌に勉強しなかつたものらしい。『滿韓ところ〴〵』の中で漱石は、「其頃は大勢で猿樂町の末富屋といふ下宿に陣取つてゐた。此同勢は前後を通じると約十人近くあつたが、みんな揃ひも揃つた馬鹿の腕白で、勉強を輕蔑するのが自己の天職であるかの如くに心得てゐた。下讀抔は殆んど遣らずに、一學期から一學期へ辛うじて綱渡りをしてゐた。英語は教場で中てられた時に、分らない譯を好い加減に付ける丈であつた。數學は出來る迄塗板の前に立つてゐるのを常としてゐた。余の如きは毎々一時間ぶつ通しに立往生をしたものだ。みんなが代數書を抱へて今日も脚氣になるかなど云つては出掛た。／かう云ふ連中だから、大概は級の尻の方に塊まつて、何時でも雜然と陳列されてゐた。余の如きは、入學の當時こそ芳賀矢一の隣に坐つてゐたが、試驗のあるたんびに下落して、仕舞には土俵際からあまり遠くない所でやつと踏み應へてゐた。それでも、みんな得意であつた。級の上にゐるものを見て、なんだ點取がと

云つて威張つてゐた位である。さうして、稍ともすると、我々はポテンシャル・エナージーを養ふんだと云つて、無暗に牛肉を喰つて端艇を漕いだ。試驗が濟むと其晩から机を重ねて緣側の隅へ積み上げて、誰も勉強の出來ない樣な工夫をして、比較的廣くなつた座敷へ集つて腕押をやつた。岡野といふ男は何處からか、玩具の大砲を買つて來て、それをポン〱座敷の壁へ向つて發射した。壁には穴が澤山開いた。試驗の成績が出ると、一人では恐いからみんなを驅り催して揃つて見に行つた。すると恐く六十代で際どく引つ掛つてゐる。橋本は威勢の好い男だから、ある時詩を作つて連中一同に示した。韻も平仄もない長い詩であつたが、其中に、何ぞ憂へん席序下算の便と云ふ句が出て來たので、誰にも分らなくなつた。段々聞いて見ると席序下算の便とは、席順を上から勘定しないで、下から計算する方が早分りだと云ふ意味であつた。丸で御籤見た樣な文句である。我々はみんな此御籤に中つてひや〱してゐた。／其內下算にも上算にも丸で勘定に這入らないものが、ぽつ〱出來て來た。一人消え、二人消えるうちに橋本がゐた。是公がゐた。斯う云ふ自分もゐた。大連で是公に逢つて、此落第の話が出た時、是公は、やあ、あの時貴樣も落第したのかな。そいつは賴母しいやと大いに嬉しがるから、落第だつて、落第の質が違はあ。己のは名譽の負傷だと答へて置いた。」と書いてゐる。

然し太田達人によると、太田達人は、漱石の英語がよく出來るのには——解釋の力を持つてゐ

たのには、既に成立學舍の時代から感服してゐたのださうである。「ひとり英語ばかりでなく、漢籍の讀破力も恐ろしいもの」で、「その當時『虞初新誌』といふ雜誌が出てゐたが、全篇漢文で書いてある。それを成立學舍時代から樂に讀んでゐて、私にも面白いから讀めと云つて勸めたものです。」と、太田達人は語り續けてゐる。漱石は、碌に勉強しなかつたのかも知れないが、その不勉強は、ただのらくらと無意味な不勉強ではなかつたやうにも見える。もつとも太田達人の談話で見ても、また橋本左五郎の談話で見ても、當時漱石は、水泳もやれば、ボートも漕ぐ、乘馬の稽古もすれば、庭球もする、野球もやれば、寄席通ひもする。また松本亦太郎によれば、器械體操など、群を抜いて旨かつたといふから、遊ぶ事にかけては、まつたく「何でも遣りよつた」(太田達人)ものらしく、從つて漱石が「勉強を輕蔑するのが自己の天職であるかの如くに」振舞つてゐたといふ事も、決して誇張だの謙遜だのではなかつたに相違ないのである。明治十七年十二月の成績表を見ると、漱石は修身學七七・五、和漢文五九・〇、釋解六六・〇、文法作文七五・五、日本歴史七五・〇、支那歴史六八・〇、和漢作文七〇・五、代數學七八・九、幾何學八六・五、地文學七三・〇、體操七八・一、平均點七三・五で、七三・三の芳賀矢一の上に居り、一二十二番かに坐つてゐる。是が翌年あたりから、漱石の言つてゐるやうに、段段に低下して、到頭落第するまでになるのだらう。もつともこの落第は、あながち成績が惡かつたといふのではな

く、腹膜炎を患つて、學年試驗を受ける事が出來なかつた爲である。

談話筆記『落第』の中で、漱石は「豫備門は五年で、其中に豫科が三年本科が二年となつて居た。豫科では中學へ毛の生へた樣なことをするので、數學なども隨分澤山あり、生理學だの動植物鑛物など皆な英語の本でやつたものである。だから讀む方の力は今の人達より進んで居た樣に思はれるが、然し生徒の氣風に至つては實に亂暴なもので、それから見ると今の生徒は非常に溫順しい。皆な惡戲許りしてゐたものでストーヴ攻などと云つて、教室の教師の傍にあるストーヴへ薪を一杯くべ、ストーヴが眞赤になると共に漢學の先生などの眞面目な顏が熱いので矢張りストーヴの如く眞赤になるのを見て、クス〳〵笑つて喜んで居た。數學の先生がボールドに向つて一生懸命説明して居ると、後から白墨を以つて其背中へ怪しげな字や繪を描いたり、又授業の始まる前に悉く教室の窓を閉めて眞暗な處に靜まり返つて居て、入つて來る先生を驚かしたり、そんなこと許り嬉しがつて居た。豫科の方は三級、二級、一級となつて居て、最初の三級は平均點の六十五點も貰つてやつとこさ通るには通つたが、矢張り怠けて居るから何にも出來ない。恰度僕が二級の時に工部大學と外國語學校が豫備門へ合併したので、學校は非常にゴタ〳〵して隨分大騷ぎだつた。それがだんだん進歩して現今の高等學校になつたのであるが、僕は其時腹膜炎をやつて遂々二級の學年試驗を受けることが出來なかつた。追試驗を願つたけれど、合併の混雜

やなんかで忙しかつたと見え、教務係の人は少しも取合つて呉れないので、其處で僕は大いに考へたのである。學課の方はちつとも出來ないし、教務係の人が追試驗を受けさせて呉れないのも、忙しい爲もあらうが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立つた處で何事も出來ないから、先づ人の信用を得なければならない。信用を得るには何うしても勉強する必要がある。と、かう考へたので、今迄の樣にうつかりして居ては駄目だから、寧そ初めからやり直した方がいゝと思つて、友達などが待つて居て追試驗を受けろと切りに勸めるのも聞かず、自分から落第して再び二級を繰返すことにしたのである。」と言つてゐる。此所に「二級」とあるのは、無論本科二年・豫科三年の新規程になつてからの「二級」である。「工部大學」とあるのは、「工科大學豫科」の事をさすものに相違ない。然もその工科大學豫科が豫備門に合併されたのは、前にも言つたやうに、明治十九年(一八八六)四月の事であり、東京法學校豫科の生徒と東京外國語學校の佛獨兩語科の生徒が豫備門に合併されたのは、その前年、明治十八年八月の事であり、明治十九年七月には舊豫備門の生徒がそれぞれ、第一高等中學校の本科及豫科の各級に編入されたのである。漱石の落第は丁度この學校が「非常にゴタ／＼した」時期にぶつかつたのに外ならなかつた。——然もこの落第は、是までの漱石の生活に、一大轉回を與へる。

漱石は『落第』の中で、續けて言つてゐる。——「人間と云ふものは考へ直すと妙なもので、

眞面目になつて勉强すれば、今迄少しも分らなかつたものも瞭然と分る樣になる。前には出來なかつた數學なども非常に出來る樣になつて、一日親睦會の席上で誰は何科へ行くだらう誰は何科へ行くだらうと投票をした時に、僕は理科へ行く者として投票された位であつた。元來僕は訥辯で自分の思つて居ることが云へない性だから、英語などを譯しても分つて居乍らそれを云ふことが出來ない。けれども考へて見ると分つて居ることが云へないと云ふ譯はないのだから、何でも思ひ切つて云ふに限ると決心して、其後は拙くても構はずどし〳〵云ふ樣にすると、今迄は教場などで云へなかつたこともずん〳〵云ふことが出來る。こんな風に落第を機としていろんな改革をして勉强したのであるが、僕の一身にとつて此落第は非常に藥になつた樣に思はれる。若し其時落第せず、唯誤魔化して許り通つて來たら今頃は何んな者になつて居たか知れないと思ふ。」

――是までの漱石は、言はば、野育ちのままの――學校の出來がよくてもよくなくても、野育ちのままの漱石であつた。この落第を機として、漱石には反省が始まり、自分自身の自覺が始まり、自己と世界との關係の認識が開け始める。是までは夢中で、我武者羅で、自分の好きな事を勝手にして、一面はにかみやで、無口で、人前へ出ては碌な口の利けなかつた漱石は、俄然として覺め、自分の智慧と自分の意志とによつて自分を鍛錬し、自分のすべき事でさへあれば、どんな事でも敢然とそれを貫ぬく代り、自分のすべからざる事なら、どんな事でも、斷乎としてそれをし

まいとする、理性の光に照らされた、一人前の人間になり始めるのである。是は漱石の歳二十の年の事であつた。「自明治十九年至明治二十年」『第一高等中學校一覽』を見ると、明治二十年一月末の調査にかかる「生徒姓名」の中の「豫科第二級英)一之組」の首席に「鹽原金之助」の名前が出てゐる。さうしてこの首席は、その後ずつと高等學校を卒業するまで續く。

漱石は後年落第した學生を慰めるのに、よく、落第したつていいさ、落第の一遍ぐらゐは、した方が氣持がいいんだよなどといふやうな事を言つた。是はある種の人人には、漱石の氣取りとして、漱石が及落に超然として、細事にこせつかない事を誇示するものとして、映つたものらしい。事實は漱石にとつて落第は、是ほどの藥になつてゐるのである。それだから漱石は、自分の體驗を傾けて、敢て落第の一遍ぐらゐはした方が氣持がいいと言ひ得たのである。

三　江東義塾

『私の經過した學生時代』の中で、更に漱石は「丁度豫科の三年、十九歳頃のことであつたが、私の家は素より豐かな方ではなかつたので、一つには家から學資を仰がずに遣つて見ようといふ考へから、月五圓の月給で中村是公氏と共に私塾の教師をしながら豫科の方へ通つてゐたことがある。／これが私の教師となつた始めで、其私塾は江東義塾と云つて本所に在つた。或る有志の人達が協同して設けたものであるが、校舍はやはり今考へて見ても隨分不潔な方の部類であつた。／一ケ月五圓と云ふと誠に少額ではあるが、その頃はそれで不足なくやつて行けた。塾の寄宿舍に入つてゐたから、舍費即ち食糧費としては月二圓で濟み、豫備門の授業料といへば月僅に二十五錢（尤も一學期分宛前納することにはなつてゐたが）それに書物は大抵學校で貸し與へたから、格別その方には金も要らなかつた。先づ此の中から湯錢の少しも引き去れば、後の殘分は大抵小遣ひになつたので、五圓の金を貰ふと、直ぐその殘分丈けを中村是公氏の分と合せて置いて、一

所に出歩いては、多く食ふ方へ費して了つたものである。／時間も、江東義塾の方は午後二時間丈けであつたから、豫備門から歸つて來て教へることになつてゐた。だから、夜などは無論落附いて、自由に自分の勉强をすることも出來たので、何の苦痛も感ぜず、約一年許りもかうしてやつてゐたが、此の土地は非常に濕氣が多い爲め、遂ひ急性のトラホームを患つた。それが爲め、今も私の眼は丈夫ではない。親はそのトラホームを非常に心配して、「兎に角、そんな所なら無理に勤めてゐる必要もなからう」といふので、塾の方は退き、豫備門へは家から通ふことにしたが、間もなくその江東義塾は解散になつて了つたのである。」と言つてゐる。

漱石の落第が豫科二級の時であり、從つて明治十九年七月の事だつたとすると、漱石の「豫科三年」は、明治二十年(一八八七)九月から明治二十一年七月へかけての時の事だつた筈である。するとそれは漱石の、二十一から二十二へかけての時の事でなければならない。然るに漱石は此所で「十九歳頃のことであつた」と言つてゐる。然も漱石のこの時分の自分の年の數へ方を注意して見ると、明治元年をもつて一歳と數へる、西洋流の數へ方をしてゐるやうに見える。從つてその「十九歳頃」といふ漱石の記憶に重きを置いて、「豫科三年」の方を無視するとすると、是はどうしても明治十九年、卽ち漱石が落第した年の出來事でなければならない筈である。自ら進んで落第し、言はばスタートから出直さうと決心した漱石が、それとともに、うちから學資を仰が

ずに、自活しつつそれを遂行しようとするといふ事も、決して考へられない事でないどころではなく、寧ろ多分にありさうな事であると思はれる。とすれば、是も亦漱石二十歳の時の事だつたのである。

『永日小品』の中の『變化』の中には、「二人は二疊敷の二階に机を竝べてゐた。其の疊の色の赤黒く光つた樣子が有々と、二十餘年後の今日迄も、眼の底に殘つてゐる。部屋は北向で、高さ二尺に足らぬ小窓を前に、二人が肩と肩を喰つ附ける程窮屈な姿勢で下調をした。部屋の內が薄暗くなると、寒いのを思ひ切つて、窓障子を明け放つたものである。其の時窓の眞下の家の、竹格子の奧に若い娘がぼんやり立つてゐる事があつた。靜かな夕暮抔は其の娘の顏も姿も際立つて美しく見えた。折々はあゝ美しいなと思つて、しばらく見下してゐた事もあつた。けれども中村には何にも言はなかつた。中村も何にも言はなかつた。／女の顏は今は全く忘れて仕舞つた。たゞ大工か何かの娘らしかつたといふ感じ丈が殘つてゐる。無論長屋住居の貧しい暮しをしてゐたものゝ子である。我等二人の寢起する所も、屋根に一枚の瓦さへ見る事の出來ない古長屋の一部であつた。下には學僕と幹事を混ぜて十人許り寄宿してゐた。さうして吹き曝しの食堂で、下駄を穿いた儘、飯を食つた。食料は一箇月に二圓であつたが、其代り甚だ不味いものであつた。それでも、隔日に牛肉の汁を一度宛食はした。勿論肉の膏が少し浮いて、肉の香が箸に絡まつて

來る位な所であつた。それで塾生は幹事が狡猾で、旨いものを食はせなくつて不可んと頻に不平をこぼしてゐた。／中村と自分は此の私塾の教師であつた。二人とも月給を五圓づゝ貰つて、日に二時間ほど教へてゐた。自分は英語で地理書や幾何學を教へた。幾何の説明をやる時に、どうしても一所になるべき線が、一所にならないで困つた事がある。所が込み入つた圖を、太い線で書いてゐるうちに、其の線が二つ、黒板の上で重なり合つて一所になつて吳れたのは嬉しかつた。／二人は朝起きると、兩國橋を渡つて、一つ橋の豫備門に通學した。其の時分豫備門の月謝は二十五錢であつた。二人は二人の月給を机の上にごちや／＼に攪き交ぜて、其の內から二十五錢の月謝と、二圓の食料と、それから湯錢若干を引いて、あまる金を懷に入れて、蕎麥や汁粉や壽司を食ひ廻つて歩いた。共同財産が盡きると二人とも全く出なくなつた。／豫備門へ行く途中兩國橋の上で、貴樣の讀んでゐる西洋の小說のなかには美人が出て來るかと中村が聞いた事がある。自分はうん出て來ると答へた。然し其の小說は何の小說で、どんな美人が出て來たのか、今では一向覺えない。中村は其の時から小說抔を讀まない男であつた。／中村が端艇競爭のチャンピヨンになつて勝つた時、學校から若干の金を吳れて、その金で書籍を買つて、其の書籍へある教授が、これ／＼の記念に贈ると云ふ文句を書き添へた事がある。中村は其の時おれは書物なんか入らないから、何でも貴樣の好なものを買つてやると云つた。さうしてアーノルドの論文と沙翁の

ハムレツトを買つて呉れた。其の本は未だに持つてゐる。自分は其の時始めてハムレツトと云ふものを讀んで見た。些とも分らなかつた。」と書いてある。

漱石文庫所藏のアーノルドの『リテレヂュア・エンド・ドグマ』に "Imperial University Regatta／1889／Race for Mombusho Schools,／won by Dai-Ichi-Koto-Chugakko." と書き、その下に選手の名前を列記したあとで、最後に "Presented to Y. Shibano. Esq." と書いてある。柴野は中村是公の舊姓である。是が此所にある、漱石が是公から『ハムレツト』と一緒にもらつた、アーノルドの論文であるに違ひない。然し西暦千八百八十九年は明治二十二年で、明治二十二年には漱石は既に喜久井町に歸つてゐた筈である。從つて是は、漱石と是公とが江東義塾で教師をしてゐた時分の事ではなかつた。事實また漱石は明治二十二年の十二月の冬休みに、喜久井町の實家でこのアーノルドを讀んで（書簡第七號）ゐる。漱石の記憶が事實を混同したものかも知れない。もつとも漱石は此所で、行を改めてこの本の事を書いてはゐる。

極樂水の新福寺・猿樂町の末富屋を初めとして、この江東義塾などの漱石たちの生活で一番眼につく事は、漱石たちの生活が、自他の區別を撤して、自然で、自由な生活だつたといふ事である。御互に無遠慮に自己をさらけ出しながら、御互に傷つけられたと感じる事がなく、一切の事を平等に許し合つて、眞實と眞實とで觸れ合つて生きてゐたといふ事である。是は一つは時代の

せゐもあつたには違ひない。然し一つは漱石の中に、慣習だの儀禮だのを超越して、平等に、自由に、天眞に、無遠慮に、裸になつて附き合ふ事を要求する心が、強く動いて居り、同時に相手の平等で、自由で、天眞で、無遠慮で、赤裸裸な魂を、十分にアップレシェートする事の出來る心があつたからでなければならない。それは青春とともに消え易いものであつたのかも知れないが、然し漱石は、明治四十三年（一九一〇）七月三日、漱石四十四の七月に於いても、戸川秋骨に宛てて、「……然る處御批評のなかに漱石は付合ひにくひ男と有之。是も貴意を諒し候へども甚だ心細く候。小生から申せば大兄は小生に對しあまりに慇懃過ぎて付合にくく候。是を兩方で撤回してもつと無遠慮になつたらもつと御互が樂になるだらうと存候。小生は御評を拜見せぬ前より常にさう考へ居候處あれを見て愈思ひ當り候樣な心持に候。私はいつでも無遠慮になれる男に候。大兄はみんなから淡泊な人と評されて居らるゝ紳士に候。御相談の上是から交際法を變化して見たらどうだらうかと存候。貴意如何。……」と書いてさへもゐるのである。それは單に、この手紙一本のみには止まらない。一度でも後の漱石に眞に觸れようとした事のあるほどの者なら、いかに漱石が、節度は守つてゐても、相互の魂を直下に觸れ合せようとし、もしくは觸れ合せる事に妙を得てゐたかを、多かれ少なかれ經驗しなかつたものは、ないに違ひないと思ふ。外廓に眩惑されずに、內部の核心に觸れて生きるといふ事は、漱石に既にこの時分から顯著であつたと言

つて可いのである。

然も漱石は、江東義塾での生活を「一年許り」續けた後、「急性トラホーム」にかかり、「親はそのトラホームを非常に心配して」、家に歸れといふので、この生活に別れて、家に歸り、ずつと家から通學する事になつたと言つてゐる。是は必ず明治二十年(一八八七)の事だらうと思ふ。

三　復籍

漱石の知つてゐる、漱石の兄は三人あつた。一人は大一と言つて、明治二十年(一八八七)三月二十一日、行年三十一歳二ケ月で亡くなつた。一人は榮之助と言ひ、臼井家を襲いでゐたが、是も同じ年、明治二十年六月二十一日、行年二十八歳八ケ月で亡くなつた。三番目の兄和三郎直矩は、漱石の死後ずつと長く生きてゐたが、昭和六年(一九三一)八月九日に、行年七十三歳で亡くなつた。

夏目家系圖に、恐らく漱石の父直克の手蹟で、長男大一に就いて、「慶應元年二月十八日兩町奉行鍋島内匠頭池田播磨守勤役中渡之上町年寄館市右衛門方におゐて名主役見習被仰付明治二年三月十日迄五ケ年勤役及年齢十三歳ヨリ見習相勤其後　御一新同年三月十一日より牛込村戸長相勤其後辭職及翌三年小石川牛天神下住文部教授伊藤保義方へ龍越英學起業同四年試驗ノ上文部省南校へ語學通勤同五年文部省第一番中學校へ入修行致同十二年二月二十五日金四拾圓ニ而警視廳へ

飜譯懸り被召出夫より同十四年一月二十日陸軍省被召出金四拾五圓月俸賜其餘辭令表之通明治十七年一月三日家督相續致し陸軍省勤役中明治二十年三月二十一日病死同月二十七日葬式」と書き、次男臼井榮之助直則に就いては、「右ハ十七歳之砌秋田縣電信局詰拜命罷越明治十四年十二月中歸京及東京同局勤中明治十六年八月中岡山縣同局拜命罷越同縣下内山下士族片岡機長女かつヲ妻に貰受同人方同居及同局相勤居り候處長崎縣同局詰被仰付罷越同所ニ而脚氣症相煩岡山縣下へ立戻り居り候内明治十七年十月中歸京被仰付父方同居中同十九年八月中牛込津久戸町へ別宅及木挽町二丁目電信局勤役中病氣に罹り明治二十年六月二十一日病死同二十三日葬式……行年二十八年八ケ月妻勝女ハ實父片岡機方へ送り遣與候樣直則申置候ニ付旅費金貳拾貳圓爲持勝弟龜太郎ニ送リ遣就而ハ臼井家督相續ハ右龜太郎ヲ養子跡相續爲致申候」と書いてある。――明治二十五年(一八九二)の夏休に、漱石は子規と一緒に東京を立ち、京都だの堺だのを見物したあとで、漱石は岡山に止まり、子規は松山に歸り、漱石は後に子規のあとを追うて松山に遊びに行つたが、この時漱石の岡山行の目的は、兄榮之助の妻君であつた、かつに關する要件の爲であつたらしい。ともかく漱石はその時岡山市内山下百三十八番邸の片岡機の所に泊つてゐたのである。さうして其所で、明治二十五年の大洪水に遭遇するのである。――

『僕の昔』の中で漱石は、「兄哥は三人あつた。一番上のは當時の大學で化學を研究してゐたが

死んだ。二番目のは随分振つた道樂ものだつた。唐棧の着物なんか着て藝者買やら吉原通ひにさんざん使つてこれも死んだ。三番目のが今、無事で牛込にゐる。然し馬場下の家にではない。馬場下の家は他人の所有になつてから久しいものだ。／僕はこんなづぼらな、呑氣な兄等の中に育つたのだ。又從兄にも通人がゐた。全體にソワ〳〵と八笑人か七變人のより合ひの宅見たよに、一日芝居の假聲を使ふやつもあれば、素人落語もやるといふ有様だ。僕は一番上の兄に監督せられてゐた。」と言つてゐる。『硝子戸の中』第三十六の中には、「私の長兄はまだ大學とならない前の開成校にゐたのだが、肺を患つて中途で退學してしまつた。私とは大分年齒が違ふので、兄弟としての親しみよりも、大人對子供としての關係の方が、深く私の頭に浸み込んでゐる。ことに怒られた時は左右した感じが強く私を刺戟したやうに思ふ。／兄は色の白い鼻筋の通つた美しい男であつた。然し顔だちから云つても、表情から見ても、何處かに峻しい相を具へてゐて、無暗に近寄れないと云つた風の逼つた心持を他に與へた。／……／學校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しく構へてゐたから、父や母も多少彼に氣を置く様子が見えた。其上病氣の所爲でもあらうが、常に陰氣臭い顔をして、宅にばかり引込んでゐた。／それが何時となく融けて來て、人柄が自と柔らかになつたと思ふと、彼は能く古渡唐棧の着物に角帶などを締めて、夕方から宅を外にし始めた。時々は紫色で龜甲型を一面に摺つた龜清の團扇などが茶の間に放り出

される樣になつた。それ丈ならまだ好いが、彼は長火鉢の前へ坐つた儘、しきりに假聲を遣ひ出した。しかし宅のものは別段それに頓着する樣子も見えなかつた。私は無論平氣であつた。假聲と同時に藤八拳も始まつた。然し此方は相手が要るので、さう毎晩は繰返されなかつたが、何しろ變に無器用な手を上げたり下げたりして、熱心に遣つてゐた。相手は重に三番目の兄が勤めてゐた樣である。私は眞面目な顏をして、たゞ傍觀してゐるに過ぎなかつた。」と書いてある。

大一がかういふ風に變つて來たのは、いつごろからの事であるか、まるで分からない。然しこの事と漱石たちの母の死との間には、何か關係がありさうな氣がする。もしさうだとすれば、それは明治十四年一月以後、卽ち大一が陸軍省に出だして、月給四十五圓をもらひ出してから後の事でなければならない。然しそれも精確な事は分からない。ただ分かつてゐる事は、この兄が漱石を大變に可愛がり、漱石の前途に囑望してゐたといふ事だけである。

もつとも漱石も、この兄を愛してゐたやうである。愛するといふよりも畏敬してゐたと言つた方が、或はもつと適切であるのかも知れない。夏目孝の『三田附近と漱石』によると、漱石のこの兄は、美男の若樣扱ひをされ、漱石がそれにくつついて行くと、いつでもお供扱ひにされるので、漱石は大に不平を言つてゐたといふが、さういふ事はともかく、漱石が兄たちのうちで、兄がかう言つた、兄があゝ言つたと言つて、その言葉を覺え、その言葉に敬意を拂つてゐるのは、

この兄一人だけだと言つて可いのである。「文學は職業にやならない、アッコンプリッシメントに過ぎないものだ」と言つて、文學をやらうとする「十五六歲」の漱石を思ひとまらせたのも、この兄であつた。漱石が、自分の母を語るに際して、「御母さんは何にも云はないけれども、何處かに怖いところがある」といふ言葉を引用し、自分の母が「父よりも賢こさうに誰の目にも見え」、畏敬すべきものを持つてゐた事の證據にしてゐるのも、この兄であつた。漱石に英語の手ほどきをしてやつたのも、亦この兄である。この兄は、時勢に對する相當確かな見通しを持つてゐたのみならず、いろんな事物に對してひと見識持つてゐた人間だつたのに違ひない。

その兄が、まだ若く死んだ。母に次いで愛したその兄が、母に次いで死んだ。漱石は恐らく悲しくもあり、寂しくも感じた事だらうと思ふ。然し漱石よりももつと悲しく、もつと寂しかつたのは、父の直克だつたに違ひなかつた。次男さへも、まる三月を隔てて、同じ年の六月に死んでしまつたのである。さうしてあとに殘つたものは、學問の嫌ひな、三男の和三郎直矩だけだつたのである。直克が、既に大學豫備門に這入つて相當の年月を經てゐる、學問が好きでもあれば、學問が出來もする漱石を、長男の遺言と稱して、鹽原家から取り戻さうと考へ始めたのも、人情の自然であつたと言つて可いのかも知れない。漱石が江東義塾にゐて急性トラホームに罹つたのを、父が非常に心配し、何も無理にそんな所に勤めてゐる必要はないと言つて、自分の家に歸ら

せたのも、恐らく明治二十年(一八八七)三月、大一が死んだあとの事だつたらうと思ふ。『道草』第百の中で、漱石は「彼の二番目の兄が病死する前後の事」を書いてゐるが、是で見ると漱石は、少くとも「彼の二番目の兄が病死する前後」の「一二箇月」並びにその死後暫らくの間は、その二番目の兄の妻君や三番目の兄などと、一つ屋根の下で生活してゐたもののやうである。然も「彼の二番目の兄が病死」したのは、明治二十年六月二十一日の事だつた。

漱石を鹽原家から取戻すといふ談判が、何日ごろから開始されたものかは、分からない。然し雙方の話し合ひが出來て「爲取替一札之事」と題する同文の契約書を交換した日附が、「明治二十一年一月」となつてゐる所から想像すると、恐らくその前年、卽ち明治二十年の秋か、或はもつと早く夏ごろから、話が進められたのかも知れない。さうしてその理由とする所は、「手續書」にある通り、漱石の養父母、鹽原昌之助と妻やすとの間に不和を生じ、昌之助とやすとは別居する事になつた爲に、漱石の父は二人を引き取つて世話をした。是は明治七年の事である。從つて鹽原が漱石を養育したのは、ほんの「四ケ年五ケ月」で、直克は是に反して「其後十四ケ年」漱石を養育して來てゐる。然るに今度長男次男ともに病死をしたに就いて、「長男之遺言も有之候に付」取戻して家督相續をさせたいといふ點にあつた。なほ夏目家に保存されてゐる他の書類には、「一戸籍面ハ金之助長男〔ニ〕取拵戸主〔ト〕致置同人印形等ハ昌之助手元〔ニ〕差置右金之助名義以多分

之借財ヲ懐シ既〔ニ〕本所荒井町森田周助ヨリ金之助所持家屋ヲ低當ニ差入金百圓借受期日過候而も返濟不致裁判に相成右ハ外ヨリ借替返金及候趣右同様之始末多ク有之趣相聞申候就中長男之名義ヲ以右様借財相嵩候〔一字不明〕爾後金之助ニ濟方爲致候心體ニ相聞末々難義及候義必定ニ有之候間今般離縁致シ實家に引取申度願」と書いてある所をもつて見ると、前の「手續書」だけでは、理由が薄弱だと考へられたので、漱石を實家に取り戻しても可い、寧ろ取り戻すのが當り前である積極的な理由として、更にかういふ理由が追加されたものだらうと思ふ。――鹽原が漱石を自分の長男として屆け出たのは、それによつて鹽原が、自分と漱石との關係を截つても截れないものにしようとした爲だつたのに相違ない。自分の家屋を漱石の名義にした上、それを抵當に漱石の名義で金を借り入れたのでも、一時の遣り繰りの都合で、何もそれを漱石に拂はせるつもりの計略でもなんでもなかつたのだらう。然し漱石の父の方でそれを取上げて問題にするとすれば、自分の一時の都合でさうしたのだとだけでは、有力な反證にはなり得ないのだから、鹽原から言へば、この理由は、或は表立つては一言もない理由であつたのかも知れない。

結局この話は、漱石の父の思ひ通りになつた。さうして明治二十一年（一八八八）の一月の日附で、「幼少より七ケ年間貴殿方ニ而養育被致候廉ヲ以右料トシテ金貳百四拾圓ニ而御示談仕候然ル上ハ金之助本籍ト引替當金百七拾圓御渡可申殘金七拾圓ハ當金ノ翌年より金三圓宛三十日限リ

無利足月賦ヲ以差入可申候」といふ本文の上に、「但シ戸主金之助名前を以借財有之候共私方ニ於テ悉皆仕拂及同人エ一切苦勞相掛ケ申間鋪候事」と書き添へた「爲取替一札之事」が、雙方の間に交換された。同時に「下谷區下谷西町四番地／實父牛込區喜久井町平民夏目直克四男／養父鹽原昌之助／鹽原金之助／慶應三年一月生／右私儀は牛込區喜久井町一番地夏目直克四男有之候處明治五壬申戸籍御改正之際養父昌之助儀誤テ同人長男ニ書上相成候ヲ是迄不心附其儘打過候段何共不調法至極奉恐入候全書誤候義ニ付何卒別格之譯ヲ以肩書朱書之通正誤被成下置候樣奉願上候也／明治二十一年一月」といふ「戸籍正誤願」が、鹽原金之助・鹽原昌之助・夏目直克・竝に親類の田中重兵衛連署の上で、下谷區長岡本盆道宛に差し出された。明治二十一年一月二十八日には、漱石の季兄、和三郎直矩が鹽原金之助の事を、「右ハ今般雙方示談ノ上離緣致シ〔二三字不明〕私方へ復籍爲致候間別紙送籍證相添」へて、牛込區長三淵隆衡に屆出に及んでゐる。是は、和三郎直矩が明治二十年八月に、大一の家督を相續し、夏目家の戸主になつてゐたからである。——大一が遺言して、漱石をして家督相續せしめたいと希望したのは、事實であつたのかも知れない。然し既に明治二十年八月に、和三郎直矩が家督相續してゐる以上、「手續書」の中の、「長男之遺言モ有之候ニ付」漱石に家督相續させたいからとあるのは、單なる口實だつたのに違ひないのである。もつとも漱石の父は、漱石の意志の如何にかかはらず、漱石を夏目家の家督にしたい

かつたのかも知れない。

かうして漱石は、長い間冒してゐた鹽原姓から、夏目姓へ復つた。同時に漱石は、鹽原昌之助へ宛てて、「明治二十一年一月」の日附で、「今般私義貴家御離縁に相成因て養育料として金貳百四拾圓實父ゟ御受取之上私本姓に復し申候就ては互に不實不人情に相成らざる樣致度存候也」といふ一札を書いた。是を種に鹽原が、後にうるさく漱石の所に出入りするのみならず、人を賴んで談判に來させたりする一條は、『道草』の中に描き出されてゐる。然もこの一札を漱石が相手から強要されて書いたらしい事は、漱石のうちに保存されてゐる、漱石の父が鹽原昌之助・同かつに宛てて書いた、手紙の寫しに、「以手紙申入候然ハ先般示談ノ上金之助養育金貳百四拾圓定内金百七拾圓差遣シ殘金七拾圓月賦ニ差遣シ可申一札取爲替離縁ニ相成本人實家復籍致候然ル上ハ拙者ヱ無沙汰ニ致シ金之助不服ナル扱人ヲ以テ本人ヨリ別段一札ヲ爲差出候趣承リ右ハ意外之取計存意不相叶候間示（ママ）後交際出入等一切御斷及候右之趣和三郎金之助へも申聞且亦親戚一同ヱ其旨通知致候條此段申入候也」とあるのから、想像する事が出來る。「四月三十日」とあるのは、恐らく明治二十一年四月三十日の事である。

四　英文學科

漱石が、十五六歳のころまで漢書や小說の類を讀んで、文學といふものを面白く感じ、自分もそれをやつて見ようといふ氣になつて、長兄に話した所、長兄は寧ろ叱るやうにしてそれを思ひ止まらせたといふ事、さうして漱石が一念發起して英語を勉强し出し、無事大學豫備門に入學するに至つたといふ事などは、既に述べた。大學豫備門に這入つてから、殊に一度落第してから、漱石は、その日その日の自分の仕事を忠實に果たして行つてはゐたが、然し大學に這入つて何を專攻するかに就いては、初めの內は、それほどはつきりした目的を持つ事が出來なかつたやうである。是は、それまで漠然と文學をやりたいと思つてゐたものが、文學は職業にはならないと言はれた爲に、思ひ切つてその中に飛び込んで行くほどの自信も持つ事が出來ず、さればと言つて、その外に自分にどういふ職業が適してゐるといふ見極めをつける事も出來なかつた爲に、漱石は途方に暮れるやうな心持になつてゐたせゐではなかつたかと思ふ。然し途方に暮れてゐるゐない

に拘はらず、ともかく自分の專門をきめなければならない日が、漱石には、日一日と近づいて來た。それは、漱石が大學豫備門に這入つてゐるうちに、豫備門が第一高等中學校となり、それが豫科三年・本科二年と分たれ、本科に入學する際には、何科・何科と、はつきり自分の志望學科をきめなければならない制度になつてゐたからである。

談話筆記『處女作追懷談』の中で、漱石は「然しよく考へて見るに、自分は何か趣味を持つた職業に從事して見たい。それと同時にその仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。何故といふのに、困つたことには自分はどうも變物である。當時變物の意義はよく知らなかつた。然し變物を以て自ら任じてゐたと見えて、迚も一々此方から世の中に度を合せて行くことは出來ない。何か己を曲げずして趣味を持つた、世の中に缺くべからざる仕事がありさうなものだ。――と、その時分私の眼に映つたのは、今も駿河臺に病院を持つて居る佐々木博士の養子だとかいふ、佐々木東洋といふ人だ。あの人は誰もよく知つて居る變人だが、世間はあの人を必要として居る。而もあの人は己を曲ぐることなくして立派にやつて行く。それから井上達也といふ眼科の醫者が矢張駿河臺に居たが、その人も丁度東洋さんのやうな變人で、而も世間から必要とせられて居た。そこで私は自分もどうかあんな風にえらくなつてやつて行きたいものと思つたのである。ところが私は醫者は嫌ひだ。どうか醫者でなくて何か好い仕事がありさうなものと考へて日を送つて居

るうちに、ふと建築のことに思ひ當つた。建築ならば衣食住の一つで世の中になくて叶はぬのみか、同時に立派な美術である。趣味があると共に必要なものである。で、私はいよ〳〵それにしようと決めた。／ところが丁度その時分(高等學校)の同級生に、米山保三郎といふ友人が居た。それこそ眞性變物で、常に宇宙がどうの、人生がどうのと、大きなことばかり言つて居る。ある日此男が訪ねて來て、例の如く色々哲學者の名前を聞かされた揚句の果に君は何になると尋ねるから、實はかうかうだと話すと、彼は一も二もなくそれを却けてしまつた。其時かれは日本でどんなに腕を揮つたつて、セント・ポールズの大寺院のやうな建築を天下後世に殘すことは出來ないぢやないかとか何とか言つて、盛んなる大議論を吐いた。そしてそれよりもまだ文學の方が生命があると言つた。元來自分の考は此男の說よりも、ずつと實際的である。食べるといふことを基點として出立した考である。所が米山の說を聞いて見ると、何だか空々漠々とはしてゐるが、大きい事は大きいに違ない。衣食問題などは丸で眼中に置いてゐない。自分はこれに敬服した。さう言はれて見ると成程又さうでもあると、其晩卽席に自說を撤回して、又文學者になる事に一決した。隨分呑氣なものである。　然し漢文科や國文科の方はやりたくない。そこで愈英文科を志望學科と定めた。」と言つてゐる。

殆んど同じやうな事を言つてゐる『落第』の中には、「……自ら落第して二級を繰返し、そして

一級へ移つたのであるが、一級になるともう專門に依つてやるものも違ふので、僕は二部の佛蘭西語を擇んだ。二部は工科で僕は又建築科を擇んだ……」とある。「一級」とあるのは、第一高等中學校豫科三年の事で、「二級」とあるのは、その二年の事である筈である。從つて漱石が愈英文學科を專攻する事に肚をきめて、第一高等中學校の本科一年に這入つたのは、漱石が夏目姓に復歸した年、卽ち明治二十一年(一八八八)の九月の事であつた。――漱石は、當時の自分が米山保三郎の說に聽いて、「又文學者になる事に一決した」事を、「隨分呑氣なものである」と言つて笑つてゐるが、然しもともと漱石は文學がやりたくてたまらないのを、長兄の一言で思ひ止まつてゐた際である。自分で言ひたくてうづうづしてゐながら、敢て言ひ得なかつた事を、米山がずばりと言つてくれたので、漱石は恐らく歡び勇んで、その說に聽く事にしたのだらうと思ふ。長兄の一言は、それほど漱石に、大きな影響があつた。勿論漱石は、その長兄の一言に、徹頭徹尾心服してゐたのではなかつたが、文學では飯が喰へないと言はれれば、それでも喰つて見せるとは言へなかつた。その限りに於いて漱石は、長兄の言葉を尤もであると思はざるを得なかつた。その魔術の環を、米山が解いてくれたのである。漱石が「其晩卽席に自說を撤回して、又文學者になる事に一決した」のも、當然であつた。

昭和十年(一九三五)十二月七日『東京朝日』の夕刊に掲載された狩野亨吉の談話筆記『漱石と

自分』の中に、「夏目君と同期、卽ち明治二十六年の卒業の中にはいろ〳〵面白い人がゐた。松本文三郎・松本亦太郎さんなどの様に有名にならなかつたが米山保三郎といつて、哲學を出て後に數學をやつた人がある。丁度田邊元さんのやうな學問をしたのだが、世界第一と言ふ意氣組を持つてゐて頗る變つた男であつた。この變り者の米山が夏目君のことを「あの男は普段默つてゐるがいざと言ふ時相談すれば必ず事を處理する力を持つてゐる」と言つて感心してゐた。自分はこの米山と親しかつたが、松本亦太郎君も大變仲よしであつた。米山は奇人であるが、研究すべき奇人であると思つてゐる。若くて死んでしまつたので、後年友人達が話して、彼の傳記を夏目君が書き、その遺稿は自分が見ることになつてゐたが、傳記は出來ずに終り、手帳の中には世に出す程まとまつたものもなかつた。」といふ一節がある。明治二十二年(一八八九)九月の『木屑錄』の中に、漱石は「大愚山人。余同窓之友也。賦性恬澹。讀書談禪之外。無他嗜好。一日寄書曰。閑居無事。就禪刹讀佛書。時與童兒。遊園捉蟬。其高逸如此。山人甞語余曰。深夜結跏。萬籟盡死。不覺身入于冥漠也。余庸俗。傭見露地白牛。不顧無根瑞草。視之山人。有愧多矣。」と書いてゐる。「大愚山人」とは米山の別號である。明治三十年(一八九七)六月八日、米山の訃を聞いて、漱石は齋藤阿具に宛てて、「米山の不幸返す〳〵氣の毒の至に存候文科の一英才を失ひ候事痛恨の極に御座候同人如きは文科大學あつてより文科大學閉づるまでまたとあるまじき大怪物に御

座候蟄龍未だ雲雨を起さずして逝く碌々の徒或は之を以て轍鮒に比せん殘念」と書いた。『猫』の中の苦沙彌先生は、彼の爲に「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士噫」といふ、墓銘を撰んでゐる。「天然居士」といふのは、米山が今北洪川の會下に參じて、洪川から授けられた、居士號である。明治四十二年(一九〇九)四月七日の漱石の日記には、「米山熊次郎氏に天然居士の寫眞を持たしてやる。／空間を研究せる天然居士の肖像に題す／空に消ゆる鐸の響や春の塔／と書いた。」と書いてある。

我我はこれらの記述の中から、「何だか空々漠々とはしてゐるが、大きい事は大きい」といふ米山保三郎の一面を、髣髴する事が出來るやうに思ふ。その米山がいかに漱石を敬愛してゐたかは、狩野亨吉の言葉が證明する。然し二人の友情は、米山の早世によつて、ほんの僅かな間しか結ばれなかつた。明治二十六年(一八九三)大學の哲學科を卒業して大學院に入學し、『空間論』といふ題目の下に研究を續けてゐた米山は、明治二十九年(一八九六)アメリカに留學した松本亦太郎と、翌年ドイツで落合ふ約束をしながら、その翌年チフスに罹つて、果敢なく死んでしまふのである。然し漱石の「空に消ゆる鐸の響や春の塔」の句が示してゐるやうに、米山の記憶は、高い、果敢ない、寂びた、美しいものとして、いつまでも漱石の頭の中に殘つた。『こゝろ』の中のKは、或は多少この米山の面影を傳へてゐるものではないかとさへも思はれる。漱石の一生に就いて言

へば、漱石をして漱石たらしめるのに、與つて力のあつた人、漱石を文學者たらしめるのに與つて力のあつた最初の人は、米山であつたと言ふ事も出來るのである。

一五　「變物」

漱石は自分の專攻の學科を選擇するに就いて、第一に自分は「趣味」のある職業に從事したい、第二に自分は「變物」だから、世の中と調子を合はせる事が出來ない、從つて自分は自分を曲げる事なしに、世の中の方で自分を必要とする職業を採り上げる必要があるといふので、建築科に這入る事にしたと言つてゐる。是は結局撤囘され、漱石は英文學を修める事になつたが、然しそれは漱石が、自分を曲げて世の中に調子を合せようとする職業に、鞍替へしたといふ事を意味しなかつた。反對に漱石は、衣食の問題は第二として、まづ子供の時分からの希望であつた文學をやる事にきめ、「變物」でもなんでも、ともかく自分の「趣味」を貫ぬかうとするのである。

もつとも漱石は當時、「變物の意義はよく知らなかつた」のだと言つてゐる。「然し變物を以て自ら任じてゐたと見えて、迚も一々此方から世の中に度を合せて行くことは出來ない」から、「何か己を出げずして趣味を持つた、世の中に缺くべからざる仕事がありさうなものだ」と考へ、あ

れかこれかと物色したと言つてゐる。然し「變物」といふのは、決して初めから自分で名のり出る筈のものではなかつた。寧ろ周圍の者からさう呼ばれ始め、それが度重なるにつれて、自分も或はさうかも知れないと思ひ、結局はそれをもつて自ら任ずるやうな事にもなるのが、「變物」である。從つてその「變物」が善いか惡いかといふ事は、さういふ事を言ひ出す「周圍」が善いか惡いかによつて、きまる筈でなければならない。そんなら漱石をして當時「變物を以て自ら任じ」しめた、「周圍の者」、もしくは漱石が「迚も一々此方から世の中に度を合せて行くことは出來ない」と感ぜしめた、その「世の中」とは、一體どんなものだつたのか。

然し漱石の成立學舍以來の友人には、漱石を敬愛しこそすれ、漱石を「變物」として遇し、その爲に漱石を非難したり輕蔑したりするやうなものは、一人もゐなかつた。少くとも今日、當時の漱石の思ひ出を語つてゐるあらゆる文獻は、漱石の人となりの美しさを、もしくは漱石の學問の優秀さを、褒め稱へてゐるものばかりである。とすると、漱石を「變物」として遇した「周圍の者」、もしくは「世の中」とは、具體的には、更に內容を制限されて、漱石の親兄弟を初め、漱石のいとこ、はとこを籠めた、漱石の身內の者を意味する筈でなければならない。漱石が高等中學の本科一年に是から這入らうとする時分、卽ち漱石の二十一二の時分といへば、漱石はまだ全然實社會の空氣には觸れてゐない時分だからである。

そんなら漱石の身内の者が、漱石を「變物」と名づけた根據は、何所にあつたか。――それは結局漱石の身内の者が、自分たちの感じ考へ行動する如くに、漱石が感じ考へ行動しなかつたといふ點から來てゐるのに過ぎない。然し漱石の身内の者の、感じ考へ行動する事が、必しも正しいといふ事が出來なかつたとすれば、それらの身内の者の如くに、感じ考へ行動しなかつた漱石が、必しも正しくなかつたと言ふ事が出來ないのは、いふまでもない事である。さうして問題は、どつちの數が多いかといふ點ではなく、どつちが正しいかといふ點にあつた。

漱石が十七八の時分まで「大變な羞恥屋(はにかみや)で通つてゐた」といふ事は、『硝子戸の中』第十七の中に書かれてゐる。「大變な羞恥屋」である事が「變物」の一部を形成し得る事は、考へ得られない事ではない。然しそれは結局「羞恥屋」であつて、「變物」ではないのである。然し例へば漱石は、子供の時分に、自分の養母が不必要な嘘をついて、相手に御世辭をいふのを不愉快に感じ、「あんな嘘を吐いてらあ」と言つて、その場で養母の面皮を剝いでゐる。普通の子供は、恐らくそんな事には氣がつかない。ついても、長上を怖れたり庇つたりして、面皮を剝ぐやうな事はしない。是は養母から言へば、漱石を「變物」と見做す十分な理由になるものであるのかも知れなかつた。然し是は事實は、漱石が正しかつた爲で、漱石が「變物」であつた爲でもなんでもない。また例へば漱石は養父から、養父の相手である女の娘と一緒に汁粉屋に連れて行かれ、あとで誰

と汁粉屋に行つたのだと養母に訊かれて、養父からは口どめされてゐたにも拘はらず、誰と行つたといふ事を正直に答へはしたが、然しその先き養母が、女も一緒だつたのだらうとか、お前をどつちに坐らせたかとか、嫉妬に驅られて、自分の醜體を暴露する質問をかけるのには、反感を懷いて、頑として口を開かなかつた。また例へばその養母が、實に口ぎたなく養父を罵り、養父の相手を罵り、あいつは私の讐だよ、骨を粉にしても仇討をしなくつちやあなどと言ひ出すと、漱石はその淺ましさに呆れて仕舞ひ、早くこの女の傍から離れてしまひたくなり、寧ろさういふ事に就いて、自分に何も言はないでゐる養父の方に、好意を持ち同情を寄せたいやうな氣持になつたといふ。かういふ事も、養母から言へば、漱石を「變物」と見做すのに、十分な理由になるものであつたのに違ひない。然し是も漱石が子供の時から、倫理的に敏感であつた事を證明するものではあつても、漱石が「變物」である事を證明するものではなかつた。

勿論是は漱石の見識から來たものではなかつた。それが見識であり得るには、當時の漱石は餘りに幼なかつた。ただ漱石の中には、正しいものを愛する本能のやうなものがあつて、正しいものと正しからざるものとを、快・不快として漱石の頭に反射し、それに從つて漱石は、言はば反射的に諸種の反應を呈したに過ぎないのである。『硝子戸の中』には、漱石が子供の時分、喜いちやんなる者から二十五錢で『南畝莠言』を買ひ取り、あとでそれを取り戻しに來られて、今ま

で好いものを安く買つて、うまい事をしたといふやうな、ぼんやり感じてゐた不德義な行爲を、急に摘發されたやうな氣になつて不愉快を感じ、譯も分からない不機嫌の中に、金を受取らずに、その本を相手にくれてやる所が書いてある。『紀元節』の中には、作文の題として先生がボールドに書いた「記元節」の「記」の字を、先生のゐない間に、子供の漱石が「紀」となほす所が書いてある。――漱石が段段大きくなり、反省を持ち、認識を加へるに從つて、自分が正しくて自分の身内の者が間違つてゐる事を、はつきり判斷する事が出來るやうになり、智慧と見識とによつて、人人を批評し、その批評に從つて人人に反應したには違ひないが、それとても漱石は身内の者と同じやうに感じ考へ行動しないといふだけで、漱石が「變物」である事の證據にはならないのである。

漱石の身内の者は、それが在來の慣習に叶ふものであるかないかによつて、自分たちの言動を規定しようとする人人であつた。殊に漱石の身内の者は、江戸末期の町人の道德と慣習とを、無反省・無批評に受け繼いで、それによつて感じ考へ行動する事が無上の善で、それに反する事は無上の惡であると信じ切つて生きてゐた人人であつた。然るに漱石は子供の時分から、自然な事、正直な事、正しい事を、何よりも愛するやうに、生みつけられて來てゐるのである。御世辭や御體裁は嫌ひであつた。自分の事は棚に上げて、自分だけ涼しい顏をしてゐる事が嫌ひであつた。

自分一人が好い兒になる事を恥づべき事と考へた。その代り人が間違つた事をしてゐれば、一一それを訂正しなければ氣が濟まなかつた。それだけに漱石はこの「世の中」に觸れて、事毎に惱まされ、傷つけられ、安き心は得られなかつたに違ひない。然も彼等は、自分達の如くに感じ考へ行動しないが故に、漱石を「變物」と呼んで、是が非でも自分達の如くに感じ考へ行動せしめようとするのである。

「當時變物の意義」を「よく知らなかつた」漱石は、「世の中」から「變物」と言はれる度に、きつと淋しい氣がしたのだらうと思ふ。いくら自分の方が正しいとは思つても、身内の者から根本的な點で孤立してゐなければならないといふ事は、淋しい事に違ひなかつたからである。それでも漱石は、その淋しさの爲に「己を曲げ」るには、餘りに熱烈な正義感情を持つてゐた。その感情の爲に、漱石は、身内の者から「變物」と言はれてもなんでも、自分が安んじてあるいて行かれる道の方を、あるき續けようと決心する。それは「變物」をもつて自任し、身内の者から離れる事である。漱石は明治二十二年(一八八九)九月の『木屑錄』の最後に、『自嘲書木屑錄後』と題する、「白眼甘期與世疎。狂愚亦懶買嘉譽。爲譏時輩背時勢。欲罵古人讀古書。才似老駘駑且駿。識如秋蜺薄兼虛。唯贏一片烟霞癖。品水評山臥草廬。」といふ詩を添へてゐるが、この詩は漱石の當時の心持を、最も鮮明に表現する。此所には無論氣を負つて、時流に反抗しようとする概が

示される。然しそれとともに此所には、何かその事を非常に寂しい事に感じてゐるものが、底の方にちらついてゐる。ただ漱石は、この一筋に繋がる事を、自分の無上命令として受けとつて、淋しくてもなんでも、その一筋を一人であるいて行かうとするのである。

『道草』第百の中に、「それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生から自分の持つてゐる兩蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、「是を今に御前に遣らう」と殆ど口癖のやうに云つてゐた。時計を所有した經驗のない若い健三は、欲しくて堪まらない其裝飾品が、何時になつたら自分の帶に卷き付けられるのだらうかと想像して、暗に未來の得意を豫算に組み込みながら、一二箇月を暮した。／病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなつた人の記念(かたみ)とも見るべき此品物は、不幸にして質に入れてあつた。無論健三にはそれを受出す力がなかつた。彼は義姉(あね)から所有權丈を讓り渡されたと同樣で、肝心の時計には手も觸れる事が出來ずに幾日かを過した。／或日皆(みん)なが一つ所に落合つた。すると其席上で比田が問題の時計を懷中から出した。時計は見違へる樣に磨かれて光つてゐた。新しい紐に珊瑚樹の珠が裝飾として付け加へられた。彼はそれを勿體らしく兄の前に置いた。／「それでは是は貴方に上げることにしますから」／傍にゐた姉も殆ど比田と同じやうな口上を述べた。／「どうも色々御手數を掛けまして、有難う。ぢや頂戴します」／兄は禮を云

つてそれを受取つた。／健三は默つて三人の様子を見てゐた。三人は殆ど彼の其處にゐる事さへ眼中に置いてゐなかつた。仕舞迄一言も發しなかつた彼は、腹の中で甚だしい侮辱を受けたやうな心持がした。然し彼等は平氣であつた。彼等の仕打を仇敵の如く憎んだ健三も、何故彼等がそんな面中がましい事をしたのか、何うしても考へ出せなかつた。／彼は自分の權利も主張しなかつた。又說明も求めなかつた。たゞ無言のうちに愛想を盡かした。さうして親身の兄や姉に對して愛想を盡かす事が、彼等に取つて一番非道い刑罰に違なからうと判斷した。」と書いてある。

漱石の二番目の兄が死んだのは、前にも言つたやうに、明治二十年（一八八七）六月二十一日の事だつた。從つてこの事件は、その後あまり時日の經過しない時分に起つた事件だつた筈である。漱石の兄や姉や、姉の連れ合ひである「比田」が、どういふ氣持でかういふ事をしたのかは、元より今日から說明のしやうもない。然し彼等は或は、病人の言つた事も、病人の妻君が病人の死後みんなの前で言明した事も、忘れてしまつてゐたのかも知れない。忘れてしまはないまでも、その時その言明に不服だつたとすれば、その言明を無視したといふ事もあり得る。それとも彼等は、質に這入つてゐて、漱石に請け出す事の出來ない時計は、當然漱石の手に入るべきものではないと思つてゐたのかも分からない。然し漱石から言へば、死んだ兄の遺言同樣の言葉を、忘却するのは不誠實であり、無視するのは橫著であつた。また假令漱石にそれを請け出す金がなかつ

たとしても、漱石以外の人間にそれを譲り渡す際には、少くとも一往漱石の諒解を得るのが、當然である。漱石がそれを「面中がましい」處置として、「甚だしい侮辱を受けたやうな心持」になつたのには、無理がない。無論彼等は、彼等の感じ方・考へ方に從つて、當然の事を當然に行つたまでだつたらう。然し漱石から言へば、彼等の頭がそれほど事理に昏いだらうとは、自分から推して、想像の出來ない事であつた。それだから漱石は、敢て「自分の權利も主張」せず、また「說明も求め」ず、ただ彼等に對して「無言のうちに愛想を盡かし」、「親身の兄や姉に對して愛想を盡かす事」が、この際「彼等に取つて一番非道い刑罰に違なからうと判斷」するのである。

然しこの判斷を漱石は、決して口外しなかつた。從つて漱石の身內の者は、漱石の內面を知りやうがなかつた。假令知つたとしても、彼等は丁度『道草』のお住のやうに、「そんな事をまだ覺えてゐらつしやるんですか。貴夫も隨分執念深いわね。御兄いさんが御聽きになつたら嘸御驚きなさるでせう」といふやうな、挨拶をしかしなかつたに違ひなかつた。然も漱石から言へば、この事は、漱石が彼等に愛想をつかす理由のうちの、一つに過ぎないのである。それまでの間に、旣に澤山の、愛想をつかすに足る事件が、重なつてゐるのである。

『道草』第三十六に、「兄は最初の妻を離別した。次の妻に死なれた。其二度目の妻が病氣の時、彼は大して心配の樣子もなく能く出步いた。病症が惡阻だから大丈夫といふ安心もあるらしく見

えたが、容體が險惡になつて後も、彼は依然として其態度を改める樣子がなかつたので、人はそれを氣に入らない妻に對する仕打とも解釋した。健三も或は左右（さう）だらうと思つた。／三度目の妻を迎へる時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。然し弟には一言の相談もしなかつた。それがため我の強い健三の、兄に對する不平が、罪もない義姉（あね）の方に迄影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭だと主張して、氣の弱い兄を苦しめた。／「なんて捌けない人だらう」／陰で批評の口に上る斯うした言葉は、彼を反省させるよりも却て頑固（かたくな）にした。……」と書いてある。漱石の兄が三度目の妻を迎へたのは、明治二十五年（一八九二）四月の事であり、從つてこの事件は、少しく後の事に屬する。然し此所にも漱石と身內の者との間の、感じ方・考へ方の相違が、歷然と現はれる。

漱石は此所で、「弟には一言の相談もしなかつた」爲に、「我の強い健三」が、「兄に對する不平」を「罪もない義姉（あね）の方に」洩したやうな事を言つてゐる。さうして「習俗（コンヴェンション）を重んずるために學問をしたやうな惡い結果に陷つて自ら知らなかつた彼には、とかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊があつた。彼は慚愧の眼をもつて當時の自分を回顧した。」とつけ加へてゐる。五十に近づいた漱石が、當時を反省して、其所に厭ふべき私を發見し、慚愧に堪へない感じを懷くのには、無理がない。然し當時漱石を動かしてかういふ言動に出でしめたものは、寧ろ死んだ嫂

に對する同情――その嫂の容態が險惡になつて後も、なほ依然として、「大して心配の樣子もなく能く出歩いた」「兄に對する」道義的批評――だつたのに違ひない。漱石が死んだ嫂をいかに敬愛してゐたかは、(明治二十四年(一八九一)八月三日、漱石が子規に宛てて、「節操の毅然たるは申すに不及性情の公平正直なる胸懷の洒々落々として細事に頓着せざる抔生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ候位鬚髯鬖々たる生悟りのえせ居士はとても及ばぬ事小生自から慚愧仕候事幾回なるを知らず」と書いてゐるのでも知れる。さういふ嫂の容態が日日險惡であるにも拘はらず、よく出あるいたのみか、その嫂の一周忌が來もしないうちに、自分の好きな女を指名して娶るといふ事が、漱石にはどうしても許せないやうに感じられたに違ひないのである。――それは『道草』を書いてゐる漱石から言へば、正に健三の「とかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊」の一つで、思ひ上がつた正義呼ばはりに過ぎなかつたのに違ひない。然し少くとも當時の漱石が立つてゐた段階に於いては、是が正しい事で、漱石はかうより外言動する事は出來なかつたのだらうと思ふ。その意味で是は、或は漱石の未熟を示すものであつたのかも知れないが、然し漱石の感じ方・考へ方が間違つてゐるのだと言ふ事は出來ない。然も漱石の「周圍の者」は、是を「なんて捌けない人だらう」といふ陰口によつて、漱石が自分たちの如くに感じ考へ行動しない事を、非難してゐるのである。

淺草から牛込へ移された漱石は、「何故か非常に嬉し」がり、「さうして其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現れた」。是は漱石が、養家では下にも置かないやうに可愛がられはするものの、妙に恩を賣らうとする態度がそれにくつついて廻り、何か土蜘蛛の絲のやうなもので十重二十重に圍まれて行く不愉快を、直覺的に經驗してゐたのが、牛込へ移されて、同じく直覺的に、此所には自由と自然と愛とがあつて自分を迎へてくれる――少くとも土蜘蛛の絲の圍ひの中から自分は救ひ出されたのだといふ、放たれた感じを受けたせゐに違ひない。假令その水は荒く、その水は冷たかつたとしても、ともかく魚が水に放たれた感じである。それがいかにもいぢらしかつたと見えて、實家の下女が、ある晩そつと漱石の枕元に來て、「貴君(あなた)が御爺さん御婆さんだと思つてゐらつしやる方は、本當はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。先刻(さつき)ね、大方その所(せ)爲(ゐ)であんなに此方(こつち)の宅(うち)が好なんだらう、妙なものだな、と云つて二人で話してゐらしつたのを私が聞いたから、そつと貴君に教へて上げるんですよ。誰にも話しちや不可(いけ)ませんよ。よござんすか」と教へ、それに對して漱石は、その親切を非常に嬉しく思つたといふ事は、『硝子戸の中』に出てゐるが、それほど純粋な愛と純粋な親切とに餓ゑてゐた漱石は、恐らく冥冥のうちに、さういふものが此所では十分得られるに違ひないといふ豫想のやうなものをも持つて、實家に歸つて來たのではないかとも思ふ。然し事實はその期待を裏切つた。父は「とくに」漱石を「苛酷に取

扱」つた。「たしかに品位のある床しい婦人」であり、漱石は別に「甘く取扱はれ」はしなかつたが、然し「宅中で一番私を可愛がつて吳れたものは母だといふ強い親しみの心」を持つてゐたといふその母は、早く死んでしまつた。兄たちの多くは「道樂者」で、家の中は七偏人か八笑人の寄り合ひのやうなものに過ぎなかつた。漱石がさういふ周圍に包まれて、純粹な愛と、純粹な親切とに饑ゑつつも、なほ且つさういふ周圍と調子を合せる事によつて、さういふものを得ようとしなかつたのは、當然すぎるほど、當然な事であつた。然も漱石にとつてそれが當然であればあるほど、漱石の周圍が、漱石を「變物」として遇するのも、亦當然の事であつたのかも知れない。——勢ひ漱石は、箇人主義にならざるを得なかつた。

明治二十三年(一八九〇)の第三回內國勸業博覽會を見物する爲め岡山から上京し、臼井龜太郎とともに、漱石のうちに半月許り泊つてゐた光藤龜吉は、漱石のうちの玄關を這入つて右側の六疊の部屋——漱石に宛てがはれてゐた部屋に、漱石と外に連の二人と、都合四人で寐起きしたといふが、その時漱石が、端で三人ががやがや言つてゐる中で勉强してゐるのを見て氣の毒に思ひ、邪魔なら外へ出ても可いがどうしようと相談すると、漱石が、いくらはたで騷いでゐても、氣にさへかけなければ、一寸も邪魔にはならないから、遠慮するには及ばないと言つたといふので、感心したが、然し自分たちが厄介になつてゐる間に、漱石が一度も父や兄と話をしてゐる所を見

かけた事がなかつたのを、實に妙に感じたと言つてゐる。

正岡子規は、明治二十二年（一八八九）の『筆まかせ』の中に、「近頃我高等中學校に道德會ともいふべきものを起す人あり。余にもすゝめられたれど、余は之に應ぜざりき。漱石も亦異說を唱へたり。「余は今、道德の標準なる者を有せず、故に事物に就て善惡を定むること能はず。然るに今道德會を立て道德を矯正せんといふは、果して何を標準として是非を知るや。余が今日の擧動は其瞬間の感情によりて起る者なり。擧動の善惡も其瞬間の感情によりて定むる者なり。されば昨日の標準は今日の標準にあらず」と。余の說も略々これに同じ」と書いてゐる。明治二十二年（一八八九）五月のころ、校長木下廣次の後援の下に國家主義を標榜する學生の結社が生れたといふ事は、漱石の講演『私の個人主義』の中に見えてゐる。それとこの道德會と同じものかどうかは分からないが、漱石は、過去の道德をそのまま自分の生活の標準とする事が出來ず、さればと言つて、自分自身の生活の標準とするに適切な、新しい道德を樹立する事も出來ず、中途半端な立場にゐて、どうする事も出來ない自分の現在の狀態を正直に告白して、その道德會への入會を拒絶する理由とするのである。家庭の中で箇人主義にならざるを得なかつた漱石は、此所でも亦箇人主義にならざるを得なかつた。

漱石は家庭に於いて、父や兄を、自分の模範とする事が出來なかつた。社會に於いても、當時

漱石が模範とするに足ると思ふやうな人間は、例へば佐々木東洋だの井上達也だののやうなのは別として、あまりゐなかつたに違ひない。然も當時、漱石の身内の者によつて、もしくは一般世間の人人によつて、自分たちの行爲を規定するものとして遵奉されてゐた、道德や慣習を、漱石は、彼らと同じやうに、無反省に無批評に遵奉する事が出來なかつた。漱石の衷なる純粹なもの、自然なもの、正しいもの、さうして愛に充ちたものは、それらの多くのものを、虛僞とし、技巧とし、打算とし、不正とし、不親切として、嫌惡と彈劾とを伴ふ事なしには、平氣で眺めてゐる事が出來なかつた。然し漱石は、まだ若かつた。從つて漱石は、自分の感じ考へ行動する事の方が、遙に善い事であると考へてゐても、それを振り翳して、それらの道德や慣習に、堂堂と宣戰を布告しうるほど、自分の人生觀が熟し、自分の道德が確立してゐるといふ、自信を持つ事が出來なかつた。殊に日一日と自分が成長し、日一日と自分の人生に對するパースペクティヴが展けて行く事を感じつつあつた漱石にとつては、およそ固定した標準を立てて、自分自身のみならず、一般人間の思想・感情・行爲を規定するといふ事その事が、人間への恐るべき壓制であり、冒瀆であるやうにも考へられたのである。「變物を以て自ら任じてゐた」漱石は、自分の事は自分ではつきり處理する事が出來ても、苟くも他人へ働らきかけようとする場合は、自分は、自分の現在抱懷してゐる思想と感情とによつて、ものの是非善惡を判斷するが、然しそれを他人へ押しつ

ける事は出來ない。それほど自分には確とした道德の標準が立つてゐるのではないとしか、答へる事が出來なかつたのである。

勿論この事は漱石に、自分の現在の意見を自分の意見として守り徹す、勇氣がなかつた事を意味しない。それは例へば『私の個人主義』の中の、漱石がその會の發會式の時にしたといふ、演說に就いて考へて見ても、分かる。ただ漱石は、自分の中にいろんな心がある事を知つてゐた爲に、さうしてそのいろんな心が、交互に時時に自分の心の主權者となつて、どれ一つが最上で永遠に値ひするものであると、はつきりきめるわけには行かない事を知つてゐた爲に、多くの人人のやうに、さもさも自分がそれに徹底してゐるらしく、自分の主義はかうだと、強く主張する事を欲しなかつたまでである。從つてこの事は漱石が、反省に富み、謙遜であり、無闇に逆上したり、思ひ上がつたりする事がなかつたのだといふ事を、意味するものに外ならなかつた。同時にこの事は、家庭の中で育て上げられた漱石の世界觀が、外に向かつてそのまま働らき出たものに外ならなかつた。

松本亦太郎によると、當時の高等學校の學生は、歐化主義と國粹主義と二派が對立してゐたといふよりも、一般に西洋文化の水準の高い事を知つて、それを出來るだけ攝取しようとする心に燃えてゐた者計りだと言つてよかつたのださうである。森有禮のやうな歐化主義者が文部大臣を

してゐた上に、廟堂の方針がどんな無理をしても、早く西洋と同じ線の上で同じ歩調をとるやうになりたいといふ點にあつたのだから、是が亦恐らく當時の天下の大勢だつたのに違ひない。然しその廟堂の方針に反對して國粹主義を振り翳す者が、天下にあつたと同じやうに、當時の高等學校にも國粹主義を振り翳して、一般の風潮を堰き止めようと試みた者もあつたといふが、然し是は大抵は、頭の惡い、學業の成績の劣等な學生計りだつたのださうである。然し明治二十一年(一八八八)八月木下廣次が敎諭兼敎頭となり、翌明治二十二年(一八八九)五月敎頭をやめて校長になつてからは、木下は寧ろ國粹主義的な精神を學生の間に導き入れる事に肩を入れ、從つてさういふ會合が學生の間に盛大に組織されたものだといふ。然も高等學校の學生の頭腦の程度では、多くの場合、感激の熱に浮かされて、主義主張が感情的に取り扱はれ、自分の分を超えて、自分では事實實行してゐない事でも、平氣に他人に強ひようとし、無反省と無知の泥足で、無闇に他人の領分へ踏み込み勝ちなものである。然し自分の心をよく知つてゐる、從つて自分の分といふものをよく承知してゐる漱石には、それが出來なかつた。出來ないから漱石は、その理由を説明して、自分は自分の道を一人であるかうとする。然し漱石の箇人主義は、普通箇人主義の名の下に理解され易い、私利・私慾から出立するものではなくて、自分で納得の出來ない事には決して容喙しない、また自分で自分に要求する事を欲しない事を、決して他人に要求しないといふ主義

に外ならなかつた。

漱石は『私の個人主義』の中で、自分の箇人主義は「黨派心がなくつて理非がある主義なのです。朋黨を結び團隊を作つて、權力や金力のために盲動しないといふ事なのです。夫だから其裏面には人に知られない淋しさも潜んでゐるのです。既に黨派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行く丈で、さうして是と同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばら〳〵にならなければなりません。其所が淋しいのです。」と言つてゐる。是は勿論四十八の漱石によつて説明された、漱石の箇人主義であるから、元より當時の漱石の箇人主義と同じものであると言ふ事は出來ないが、然し少くともその方向に於いては、明治二十二年（一八八九）の漱石の箇人主義と大正三年（一九一四）の漱石の箇人主義とは、同じものであつたと言つて可いと思ふ。否、その「淋しさ」に於いては、當時の漱石は若かつただけに、一層淋しい氣がしてゐたのではなかつたかと思はれる。

子規が漱石のこの意見に徹頭徹尾同意したといふ事は、その意味に於いて、漱石にとつて、嬉しい事だつたに違ひないのである。身内の者からは常に「變物」扱ひにされた漱石は、此所で自分の意見に共鳴する相手を見出す事が出來たのみならず、その相手は自分に十分の敬愛を捧げてくれたからである。

一六　正岡子規

漱石が子規と知り合ひになつたといふ事は、藝術家漱石にとつて、殆んど運命的な事だつたと言つて可かつた。漱石が子規と知り合ひにならなかつたら、漱石は或は文學研究家として、一箇の學究として、その一生を終始してゐたかも知れない。勿論漱石の藝術は、子規の刺激がなくても、自分自身を爆發させる機會を、いつかは持つたには違ひない。然し漱石に文章を書かせ、俳句をつくらせ、『倫敦消息』を書かせ、その因縁から『ホトトギス』に『猫』を書かせ、『幻影の盾』を書かせ、『坊つちやん』を書かせ、結局漱石をして小説家たらしめるに至つた原動力が子規であつた事を考へれば、藝術家漱石の一生に於いて、子規が勤めた役割は、重大な――或は米山保三郎の役割よりももつと重大なものだつたと、言つて可いかも知れないと思ふ。その子規と漱石との交際は、明治二十二年(一八八九)一月から始まつた。子規は『木屑錄』の跋で「余知吾兄久矣。而與吾兄交者。則始于今年一月也。余初來東都。求友數年。未得一人。及知吾兄。乃竊有

所期。而其至辱知己。而憶前日。其所得于吾兄。甚過前所期矣。於是乎余始得一益友。其喜可知也。」と言つてゐる。

正岡常規といふ名前は、既に『明治十七年十二月（第一學期）東京大學豫備門前本黌第一・二・三級及ヒ第四級生徒試業優劣表』の中の第四級（英學生徒）の部の中に、平均點七〇・二として、掲げられてゐる。漱石と子規とは、相當早くから、顏見知の間柄だつたのに相違ない。それが急に親しくなつたのは、明治四十一年（一九〇八）九月の『ホトトギス』に掲載された、談話筆記『正岡子規』の中にあるやうに、「二人で寄席の話をした時、先生大いに寄席通を以て任じて居る。ところが僕も寄席の事を知つてゐたので、話すに足るとでも思つたのであらう。それから大いに近よつて來た。」からである。漱石が、若い時分によく寄席通ひをしてゐた事は、『硝子戸の中』にも書かれてゐる。その他、その事は漱石自身の談話の中にもあり、橋本左五郎の談話の中にもある。子規が亦頻に寄席通ひをしてゐた事は、子規の當時の日記の中に、或は圓朝、或は明學、或は圓太郎、或は梅枝と、いろいろ寄席藝人の批評が書いてあるので、想像する事が出來る。二人ともよく「日本橋の瀨戸物町にある伊勢本といふ寄席へ講釋を聽きに行つた」事が、二人を近づける始まりになつたのだといふ噂さへある。二人の間に寄席の話が交はされるきつかけは、或はさういふ事からでも來てゐるのかも知れない。

もつとも子規の日記『筆まかせ』によると、子規が米山保三郎と知り合ひになつたのは、明治十九年(一八八六)の事だつたらしい。菊池謙二郎と知り合ひになつたのも、少くとも明治二十年(一八八七)以前の事である。その米山も菊池も、漱石とは親しかつた。漱石と子規との關係は、或はさういふ仲介を通しても、多少準備されてゐたのではないかとも思はれる。然もその子規は『木屑錄』の跋に、更に語をついで、「余知吾兄長于英文也久。而見吾兄漢文。則始于此木屑錄也。余與吾兄入校也。共學鴃舌蟹文。而吾兄嶄然現頭角。話蠻語猶邦語。余以爲長于西者概短于東。吾兄亦當不知和漢之學矣。而今及見此詩文。則知吾兄天稟之才矣。其能詩文者。則其才之用耳。不必問文字之自他。與學問之東西也。如吾兄者。千萬年一人焉耳。而余幸得接咳嗽。豈不可敬而愛之哉」と書いてゐる。是は或は明治十九年(一八八六)漱石が落第して心を入れかへた後の事であつたのかも知れないが、ともかく子規は、英語のよく出來る人として、以前から漱石に注意してゐたのである。さう言へば、明治十九年に第一高等中學校豫科二年に這入り、漱石と同じクラスになつたといふ松本亦太郎も、漱石がどういふ理由からか知らないが、毎日必ず海苔卷を竹の皮に包んだ辨當を持つて來てゐた事と、器機體操が旨かつた事と、兵式體操の折に鐵砲を取り扱ふのが器用だつた事と、數學の問題の解き方が上手だつた事とともに、英語に熟達してゐた事に、特に注意を牽かれたのださうである。

松波仁一郎の『夏目漱石と私』によると、高等學校時代は、漱石と子規と松波と三人が揃つて英語がよく出來て、頻に教師をいぢめたのださうである。さう言へば子規の『筆まかせ』には、明治二十二年(一八八九)二月五日『英語會』第一回私會のプログラムが載せてあつて、それには最初に"'Self-reliance.' Written and read by T. Masaoka, 1st year Lit." といふのがあり、三番目に"'The Death of my Brother.'' K. Natsume, 1st year Lit." といふのがある。子規も、恐らく相當には英語が出來てゐたのだらう。然し子規はいくら己惚て見ても、英語では到底漱石の敵ではないと思はざるを得なかつた。從つて子規は、自分でも書いてゐるやうに、漱石は英語は出來ても、和漢の文章には通じてゐないに違ひないと想像し、私かに自ら恃みにしてゐたのである。それが『木屑錄』を讀んで見ると、漱石は漢文に巧みであるのみならず、漢詩さへも作つてゐる。その漢詩は盛唐の風のある、立破な詩である。子規は更に驚嘆し、吾兄の如きは千萬年に一人のみと言ひ、幸ひに咳嗽に接することを得、豈之を敬して愛せざるべけんやと、言はざるを得なくなつた。――もつとも是には、若若しい感激とそれを表現する漢文流の誇張とがあつて、子規が漱石の「天稟の才」に驚嘆して、事實「千萬年に一人のみ」と感じた譯ではなかつたには違ひないが、然し、ともかく子規が漱石に驚嘆してゐた事は、子規が『筆まかせ』の中に、漱石の言葉を記錄し、漱石の書簡を記錄し、もしくは漱石の『木屑錄』のある部分を引用し

て、それに最大級の讃辭を添へてゐるのでも分かる。明治二十二年の『筆まかせ』の中には、自分の友人十九名の姓を書き列べ、その上に「愛友」・「良友」・「少友」・「酒友」などと、いろんな形容詞を冠してゐるが、漱石の上には「畏友」とかいてある。さうして米山保三郎は「高友」であり、菊池謙二郎は「嚴友」であり、山川信次郎は「賢友」であつた。

この關係は、漱石の方から言つても、ほぼ同樣だつたものらしい。漱石は『正岡子規』の中で、「彼は僕などより早熟で、いやに哲學などを振り廻すものだから、僕などは恐れを爲してゐた。僕はさういふ方に少しも發達せず、まるでわからん處へ持つて來て、彼はハルトマンの哲學書か何かを持ち込み、大分振り廻してゐた。尤も厚い獨逸書で、外國にゐる加藤恒忠氏に送つて貰つたもので、ろくに讀めもせぬものを頻りにひつくりかへしてゐた。幼稚な正岡が其を振り廻すのに恐れを爲してゐた程、こちらは愈〻幼稚なものであつた。」と言つてゐる。是は漱石が四十二になつてから、二十年も昔の事を回顧するのだから、自然フモリスティッシュに響くのであるが、然し當時年少氣鋭な二人は、恐らく天下語るに足るもの君と我のみと言つた氣持で、互に許し合つてゐたものだらうと思はれる。現に漱石はそれに續いて、「妙に氣位の高かつた男で、僕なども一緒に矢張り氣位の高い仲間であつた。ところが今から考へると、兩方共それ程えらいものでも無かつた。といつて徒らに吹き飛ばすわけでは無かつた。當人は事實をいつてゐるので、事實え

らいと思つてゐたのだ。教員などは滅茶苦茶であつた。同級生なども滅茶苦茶であつた。」とさへも言つてゐるのである。

漱石の是までの友人は、例へば太田達人でも、橋本左五郎でも、佐藤友熊でも、中村是公でも、その殆んどすべては、藝術とは緣のない人人であつた。然るに今漱石の眼の前には、小說家たる事を畢生の目的として、日夜その事計りを考へつめてゐるやうな、然も漢詩も作れば漢文も書き、和歌でも俳句でも、擬古文でも論文でも、何をやつても出來ない事はないといふやうな、藝術的な子規が出現したのである。子規によつて漱石は、自分の要求にぴつたり嵌つた友人が獲られたものとして、歡喜したいやうな氣持にもなつたものだらうと思ふ。同じ『正岡子規』の中で、漱石は「彼は僕には大抵な事は話したやうだ」と言つてゐる。その「大抵な事」といふのが、果してどの程度の事であつたか、判然しないのは遺憾であるが、然しそれだけ漱石の方からも、子規には「大抵な事は」話したものに違ひない。またこの年頃に雙方の間に爾汝の關係が成立すると、「大抵な事は」言はないと氣が濟まないのが、人情である。また「半分は性質が似たところもあ」り、「半分は趣味の合つてゐた處もあ」つた以上、言へば理解される嬉しさから、「大抵な事」は聽きもし、聽いてももらひたい氣になるのである。當時漱石が子規に宛てて書いた多くの手紙の中に、漱石の人には言へぬ、憤りや嘆きや、惱みや悲しみや、その他のあらゆる內面が、相當

赤裸裸に吐露されてゐるのに就いて見ても、この間の消息は明らかであると思ふ。

一七 『木屑録』

子規が政治家たらむとする希望を抱いて、郷里の松山から上京したのは、明治十六年（一八八三）六月十四日の事である。子規は共立學舍に入學して『莊子』の講義を聽き、「こんな面白い本は又とはあるまい」と思つて喜んだといふが、然しその共立學舍に子規が、いつからいつまでゐたものか、はつきりした事は分からない。ただ子規は、漱石と同じく明治十七年には、豫備門に這入つてゐる。從つて子規の共立學舍にゐた期間が、明治十六年の六月から明治十七年の七月までの間の事であつた事は、言ふまでもない。然も子規が、自分は「哲學を目的とし誰がすゝめても變ずまじ」と思ひ込むに至つたのは、明治十八年（一八八五）の春、卽ち豫備門に這入つた翌年の春の事ださうである。

子規は、既に松山にゐる時分、明治十一年（一八七八）の夏のころから漢詩を作る事を覺え、明治十二三年のころには小說を讀み習ひ、『源平盛衰記』・『平家物語』を始めとし、書肆から本を借

りて重に馬琴ものに讀み耽り、東京に來ては人情本に移り、和歌は明治十八年(一八八五)に、俳句は明治二十年(一八八七)に、それぞれ松山で手ほどきをしてもらつたのだといふ。「かくの如く余は哲學を志すにも拘はらず、詩歌を愛すること甚だしく、小說なくては夜があけぬと思ふ位な」ので、子規は、自分でもどうしてかういふ「全く反對の者を、兩立し難き者を」「同時に好むかとをかしく思」ひ、然も自分ではどつちともきめる事が出來ないので、自分の「目的は哲學なり、詩歌は娛樂なり」と言つてはゐたが、それでも何か胸中の不安を押へる事が出來なかつた。それで子規は、私かに「哲學と詩歌の間に」「何か關係あれかし」とかねがね念じてゐた所、此所に審美學といふものがあつて、「詩歌書畫の如き美術を哲學的に議論するものなることを知」つたので、「顏色欣々として雀躍するの思ひを生じ、遂に余が目的を此方にむけ」たのが、明治二十一年(一八八八)の事だつたのださうである。——此所から漱石が恐れをなした、子規のハルトマンが出て來るのであるが、然し、哲學的美學的な研究は竟に子規の性情には適しなかつたと見えて、子規は次第に詩歌小說を創造する事の方のみに深入りし、明治二十二年・明治二十三年・明治二十四年と、年を追うて、文筆を以つて身を立てようと志すに至るのである。

その現はれの一つが、明治二十一年(一八八八)の夏、子規が向島に寓居してつくり上げた、『七草集』であつた。もつとも子規が向島にゐて作つたのは、「蘭之巻」・「萩之巻」・「女郎花の

巻」・「芒のまき」・「蕣のまき」の五巻で、「葛の巻」はその年の末に、「瞿麥の巻」は翌明治二十二年（一八八九）の四月に書き添へられ、合計七巻、即ち『七草集』として纏め上げられたものであるが、子規は是を一冊に綴つて、人人の廻覽に供し、漱石にもそれを示した。『七草集』を示されて漱石は、大に刺激された。漱石は巻末に讀後の感を書くとともに、九首の七言絶句を添へて、禮讚の辭を呈した。是は恐らく讀後の所感を書けといふ、子規の要求に應じたものだらうと思ふ。その中で漱石は「不知吾兄校課之餘。何暇綽々能如此。僕天資陋劣。加疎懶爲風。齷齪沒于紅塵裡。風流韻事蕩然一掃。愧于吾兄者多矣」と言つてゐる。前にも言つたやうに、元來漱石は「風流韻事」に身を委ねたかつたのであるが、然しそれは長兄から叱られて思ひ止まつた。後に米山保三郎の忠告に聽いて、再び文學を修める氣になりはしたが、然し今度は英文學を修め、「英語英文に通達して、外國語でえらい文學上の述作をやつて、西洋人を驚かせようといふ」大望を懷くやうになつた爲に、漱石の所謂「風流韻事」の世界は、少くとも漱石が「英語英文に通達して、外國語でえらい文學上の述作」がやれるといふ自信がつくまでは、頭の中からその姿を消してゐなければならなかつた。勿論その事は、漱石が「風流韻事」の世界に全然興味を持たなくなつたといふ事を、意味しない。反對に漱石は、それに興味は持つてゐても、それは意志の力で押へて、もつと重大な、自分の大望に仕へようとするのである。その矢先に、

漱石から見れば「風流韻事」の塊りであるやうな『七草集』が、忽然として漱石の眼の前に出現した。漱石はそれを見て、子規を羨ましく思ひ、子規の餘裕綽綽たるに驚き、ひいては自分が學校の事に齷齪して、かういふ「風流韻事」の世界を顧るに暇がない事を、情なく思はざるを得なかつた。知らず吾兄校課の餘、何の暇あつてか綽綽よくかくの如くなる。――是は皮肉でもなんでもないのである。漱石自身寸暇を惜んで勉強しても、なほ且つ望洋の嘆に堪へないのに、人はどうしてこんな餘裕を持つ事が出來るのかと、漱石は本氣で子規の餘裕を羨ましく思ふのである。さうして、さういふ餘裕を少しも持つ事が出來ずに、齷齪と紅塵裡に沒頭してゐる自分の現在の生活を省み、自分にさういふ「風流韻事」の一つもない事を、子規に對して愧かしいと感じるのである。その刺激が漱石をして、せめてもの心遣りに、『七草集』の評の終に、更に九首の七言絕句を添へしめる。

然し一度『七草集』によつてかき立てられた漱石の「風流韻事」の世界は、九首の七言絕句だけでは、滿足する事が出來なかつた。然し「校課」は漱石に、「風流韻事」に耽ける事を許さない。漱石は「校課」から解放される時期を、待たなければならなかつた。夏休みが來て、漱石の「校課」に役せられる事がなくなり、或は興津に遊び、或は房總に旅行し、漱石の心に餘裕が出て來た時に、漱石の「風流韻事」の世界は、蘇み返る事を許された。さうして出て來たものが、卽ち

『木屑錄』なのである。

『木屑錄』は勿論子規一人に示す目的で書かれたものであつた。然しそれだけに是は、學校の作文のやうなものではなく、純粹に自發的に、內から迫がされて書かれた作品として、漱石の最初の纒まつた作品と言はれべきものであつた。然も是が子規によつて認められ、子規は是によつて、更に漱石を畏敬するやうになるのである。『正岡子規』の中で漱石は、「又正岡はそれより前漢詩を遣つてゐた。それから一六凮か何かの書體を書いてゐた。其頃僕も詩や漢文を遣つてゐたので、大に彼の一粲を博した。僕が彼に知られたのはこれが初めであつた。或時僕が房州に行つた時の紀行文を漢文で書いて其中に下らない詩などを入れて置いた、それを見せた事がある。處が大將頼みもしないのに跋を書いてよこした。何でも其中に、英書を讀む者は漢籍が出來ず、漢籍の出來るものは英書は讀めん、我兄の如きは千萬人中の一人なりとか何とか書いて居つた。處が其大將の漢文たるや甚だまづいもので、新聞の論說の假名を抜いた樣なものであつた。けれども詩になると彼は僕よりも澤山作つて居り平仄も澤山知つて居る。僕のは整はんが、彼のは整つて居る。漢文は僕の方に自信があつたが、詩は彼の方が旨かつた。尤も今から見たらまづい詩ではあらうが、先づ其時分の程度で纒つたものを作つて居つたらしい。たしか內藤さんと一緒に始終やつて居たかと聞いてゐる。」と言つてゐる。

勿論『木屑録』は、子規が言つてゐるやうな、作者漱石を「千萬年一人焉耳」とするに足るほどの、傑出したものではなかつた。是は結局當時の子規が、非常に感服したといふ事を表現する、「白髪三千丈」流の形容であるに過ぎない。然し例へば、中で子規の褒めてゐる「時天晴風死。菜藻毿々然。搖藍曳碧。游魚行其間。錦鱗頳尾。忽去忽來。水底螺石。布列如可捫而觀焉。倒竿而測其深。則至沒竿水觸手。而不能達也。」といふ一節、もしくは「余在京聞鯛浦之奇熟矣。乃賃舟而發。距岸數町。有一大危礁當舟。濤勢蜿蜒。延長而來者。遭礁激怒。欲攫去之而不能。乃躍而超之。白沫噴起。與碧濤相映。陸離爲彩。礁上有鳥。赤冠蒼脛。不知其名。濤來一搏而起。低飛回翔。待濤退復于礁上。」といふ一節、もしくはもつと前に溯つて、鋸山の羅漢の描寫、或は保田の隧道の描寫などに就いて考へて見ても、既に漱石が當時、今日の鑑賞眼にも堪へ得る、自然の優秀な把握力と表現力とを持つてゐた事を、十分に想像する事が出來る。千餘體の羅漢があすこに二百、ここに百といふ風に置かれて、もう是でお仕舞だらうと思つてゐると、道の果に豁然として一洞が開け、滿洞悉く羅漢であるのに驚ろくといふやうな描寫、或は隧道の內部の岩壁が、眞つ暗な中にじとじとと濕つて、ある所ではぽたぽたと雫がたれてゐる中をあるくと、下駄の音ががんがん反響する。向うを見ると隧道の口が開けて、海の光つてゐるのが見える。出て見ると急に道が曲がつてゐて、身は怪岩亂礁のまつただ中に立つてゐる。かういふ隧道が幾つも

幾つもあつて、一洞を過ぐる毎に、頭上の山石はますます犖确、脚底の潮水は亦ますます谺訇、眞に奇觀也といつてゐるやうな所など、漱石が靜的な自然をいかに動的に把握してゐるか、然も漱石がその動的に把握した自然を、いかに自由にフレキシブルに表現してゐるかを、はつきり證明する。――その點でこの『木屑錄』は、假令それ自身としては、子規の言ふやうな藝術的價値を持つてゐるものではなかつたとしても、後年の漱石の處女作たるを辱しめないもの、寧ろ後年の漱石の萌芽を、多分に中に含んでゐるものと言つても、少しも差支のないものであつた。

今日保存されてゐる漱石の作文の中で、漢文で書かれたものが二篇、漢文直譯體のものが一篇、擬古文が五篇、英文が一篇ある。漢文で書かれた作文の一つは、「三級二組　鹽原金之助拜」と書かれた『觀菊花偶記』で、是は明治十九年(一八八六)、卽ち漱石二十歲ごろのものかと思はれる。今一つは「一部一年三之組　夏目金之助」の署名ある『居移氣說』で、最後に「己丑六月三日」といふ日附を持つてゐる。是は明治二十二年、漱石二十三、卽ちこの『木屑錄』が書かれた年のものである。漱石は成立學舍に這入つて以來、持つてゐた漢籍は賣り飛ばして、英語を勉強する事に專心したと言つてゐるが、それでも漱石は、『虞初新誌』のやうなものも讀めば、作文にも漢文で應じてゐる。たまには漢詩も作つてゐる。其所に漱石の、漢詩文の世界との、切つても切れない關係がある。事實また漱石は、明治三十九年(一九〇五)三月十五日發行の『文章世界』に掲

載された談話筆記『余が文章に裨益せし書籍』の中ででも、「一體に自分は和文のやうな、柔かいだら〳〵したものは嫌ひで、漢文のやうな強い力のある、即ち雄勁なものが好きだ。また寫生的のものも好きである。」と言つてゐる。漱石には、子供の時に親しんだ漢詩文の世界が、骨髓に沁み込んでゐたと言つて可いのかも知れない。その漱石が高等學校の作文で、恐らく本科二年以後、ずつと擬古文計りを用ひてゐるのは、ひどく不思議なやうでもあるが、然し是は或は落合直文・小中村義象などの、當時の作文を受け持つた先生がそれを要求したものかとも想像される。さうでなくとも漱石自身、いろんな文體に親しむ爲に、自ら進んでこの文體を選んだものであるとも、想像する事が出來る。――ただ漱石はこの『木屑錄』を機として、自發的にも他發的にも、漢文でものを書かなくなつた。この事と漱石が本科二年以後、ずつと擬古文計りを書いたといふ事との間には、密接な關係があるかも知れない。もつとも漱石は、その後でも、漢詩は時時作つてゐるのである。

漱石は『木屑錄』の表紙に、「明治二十二年九月九日脫稿」と一行に書くとともに、他の一行に「漱石頑夫」と書いた。その前の『七草集』の批評の終にも、漱石は「明治己丑五月念五日辱知漱石妄批」と書いた。然も明治二十二年(一八八九)五月二十七日の正岡子規宛の手紙の終に、漱石が「七草集には流石の某も實名を曝すは恐レビデゲスと少しく通がりて當座の間に合せに漱石

となんしたり顔に認め侍り後にて考ふれば漱石とは書かで漱石と書きし樣に覺へ候此段御含みの上御正し被下度先は其爲め口上左樣／米山大愚先生傍より自己の名さへ書けぬに人の文を評するとは「テモ恐シイ頓馬ダナー」チョン々々々々」と書いてゐる所を見ると、五月二十五日の『七草集』の「漱石」は、或はほんの「當座の間に合せ」であつたものかも知れなかつたが、然し『木屑録』に來てそれは、はつきり「漱石頑夫」と表紙に書き出される。少くとも此所で漱石が、「漱石」をもつて自分の雅號とする事に決定した事は、確實である。

「枕流漱石」の文字が旣に『蒙求』にも出てゐて、頑固を意味するものである事は、誰でも知つてゐる。さうしてこの雅號は、『木屑録』の終に添へた「白眼甘期與世疎。狂愚亦懶買嘉譽」の詩と、密接に關聯する。漱石が明治二十三年（一八九〇）八月正岡子規に與へた詩の中にも、「仙人墮俗界。遂不免喜悲。啼血又吐血。憔悴憐君姿。漱石又枕石。固陋歡吾癡。君痾猶可癒。僕癡不可醫。」といふ一節がある。周圍の者から「變物」をもつて過せられ、自分でも「變物」をもつて任じてゐた漱石は、更にそれを雅號によつて標榜しようとしたものらしい。詩は無論、世の中に逆行して、自分の「愚」と「癡」とを貫ぬかうとする詩である。――後年漱石は、この「漱石」といふ號を、いやな、俗な號ではあるが、さればと言つて別に取かへるのも臆劫だから、そのまま用ひてゐるのだと言つてゐた。是は恐らく晩年の漱石には、「漱石」によつて表現される、言は

ば幼稚な、反抗的な氣分が、氣に入らなかつた爲だらうと思はれる。然し二十二三の漱石は、漱石の所謂「氣位の高い」絕頂ともいふべき時分だつた。漱石は寧ろこの雅號に、積極的に興味を持つたのかも知れない。

子規も明治二十二年(一八八九)五月十一日の夜喀血して、血に啼く子規といふ意味で、「子規」と號した。かうして漱石と子規とは、明治二十二年一月に相知り、明治二十二年五月に子規は『七草集』を完成するとともに「子規」と號し、漱石は同じ五月に『七草集』の評をかくとともに「漱石」と號し、九月漱石がその「漱石」の名をもつて『木屑錄』を脫稿し、それを子規に示すに至つて、子規は改めて漱石の文才に驚嘆し、それ以來二人の交情は愈濃厚なものになつて行くのである。さうして二人はその翌年、明治二十三年(一八九〇)七月に第一高等中學校を卒業して、文科大學に入學する。

一八　西と東と

明治二十二年（一八八九）十二月三十一日漱石は、松山に歸省してゐる子規に與へて、「御前兼て御趣向の小說は已に筆を下し給ひしや今度は如何なる文體を用ひ給ふ御意見なりや委細は拜見の上逐一批評を試むる積りに候へども兎角大兄の文はなよ〳〵として婦人流の習氣を脫せず近頃は篁村流に變化せられ舊來の面目を一變せられたる樣なりといへども未だ眞率の元氣に乏しく從ふて人をして案を拍て快と呼ばしむる箇處少きやと存候總て文章の妙は胸中の思想を飾り氣なく平たく造作なく直敍スルガ妙味と被存候さればこそ瓶水を倒して頭上よりあびる如き感情も起るなく胸中に一點の思想なく只文字のみを弄する輩は勿論いふに足らず思想あるも徒らに章句の末に拘泥して天眞爛熳の見るべきなければ人を感動せしむること覺束なからんかと存候今世の小說家を以て自稱する輩は少しも「オリヂナル」の思想なく只文字の末をのみ研鑽批評して自ら大家なりと自負する者にて北海道の土人に都人の衣裳をきせたる心地のせられ候成程頭の飾り衣の模樣

仕立の具合寸分の隙間なきかは知らねど其人の價値はと問はゞ三文にも當せず其思想はと問はゞ一顧の價なきのみならず鼻をつまんで却走せざるを得ざる者のみの様に被思候獨り篁村翁のみは直ちに胸臆を直敍して天眞爛熳の風姿紙上に躍然たる處なきにあらねど是亦質朴なる老翁のいやみ氣なきに過ぎず田舎漢の通がりにまさる萬々なりといへ共さりとも端肅とか遒麗とか磊落とか人をして一見嘆賞感動せしむる風采には乏きやに被存候故に小生の考にては文壇に立て赤幟を萬世に飜さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熟し腹に滿ちたる上は直に筆を揮つて其思ふ所を敍し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法抔は次の次の其次に考ふべき事にて Idea itself の價値を增減スル程の事は無之様に被存候御前も多分此點に御氣がつかれ居るなるべけれど去りとて御前の如く朝から晩まで書き續けにては此 Idea を養ふ餘地なからんかと掛念仕るゝ勿論書くのが樂なら無理によせと申譯にはあらねど毎日毎晩書て／＼書き續けたりとて子供の手習と同じヿにて此 original idea が草紙の内から靈現する譯にもあるまじ此 Idea を得るの樂は手習にまさるヿ萬々なるヿ小生の保證仕る處なり（餘りあてにならねど）伏して願はくは（雜談にあらず）御前少しく手習をやめて餘暇を以て讀書に力を費し給へよ御前は病人ゝ病人に責むるに病人の好まぬヿを以てするは苛酷の様なりといへども手習をして生きて居ても別段馨しきヿはなし Knowledge を得て死ぬ方がましならずや塵の世に

はかなき命ながらへて今日と過ぎ昨日と暮すも人生に happiness あるが爲ゝされど十倍の happiness をすてゝ十分の一の happiness を貪り夫にて事足り給ふと思ひ給ふや併し此 Idea を得るより手習するが面白しと御意遊ばさば夫迄なり一言の御答もなし只一片の赤心を吐露して歳暮年始の禮に代る事しかり穴賢」と書いた。

是に對して子規がどんな返事をしたかは分からない。然しともかく子規からは反駁が來たものと見えて、明治二十三年一月(日不詳)漱石は再び書を子規に與へて、自分の言つた事を更に敷衍して説明した。その中で漱石は、「文章 is an idea which is expressed by means of words on paper 故ニ小生ノ考ニテハ idea ガ文章ノ Essence ニテ words ヲ arrange スル方ハ element ニハ相違ナケレド essence ナル idea 程大切ナラズ經濟學ニテ申セバ wealth ヲ作ルニハ raw material ト labor ガ入用ナルト同然ニテ此 labor ハ單ニ raw material ヲ modify スルニ過ギズ raw material ガ最初ニナクテハ如何ナル巧ノ labor モ手ヲ下スニ由ナキト同然ニテ idea ガ最初ニナケレバ words' arrangement ハ何ノ役ニモ立タヌナリ」と言ひ、また「Best 文章 is the best idea Which is expressed in the best way by means of words on paper. ／此 under line ノ處ノ意味ハ idea ヲ其儘ニ紙上ニ現ハシテ讀者ニ己レノ idea ノ Exact ナル處、(no more no less)ヲ感ゼシムルト云フ義ニテ是丈ガ卽チ Rhetoric ノ treat スル所之去レバ文章(余ノ所謂)ハ

決シテ Rhetoric ノミヲ指スニ非ズ此儀上ノ解ニテ御合點アリタシ／ソコデ此 idea ヲ涵養スルニハ culture ガ肝要ニテ次ハ已レノ經驗ナリ去レ𪜈已レノ經驗ノ區域ノミニテハ Idea ヲ得ル區域狹キ故 culture ノ方ガ要用ナリト申スナリ／然ラバ Culture トハ如何ナル者ト云フニ Knowing the ideas which have been said and known in the world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバ culture ヲ得ル方ハト云フニ讀書ヲ捨テ、他ノ方ナキハ貴君モ御左祖ナルベシ故ニ讀書ヲシ玉ヘト勸ムルナリ去リ乍ラ Rhetoric ヲ廢セヨト云フニ非ズ Essence ヲ先ニシテ form ヲ後ニスベク Idea ヲ先ニシテ Rhetoric ヲ後ニセヨト云フナリ(時ノ先後ニアラズ輕重スル所アルベシト云フノ意ナリ)」と言つてゐる。是に對する子規の返事は、『筆まかせ』の中に出てゐる。それは冗談半分の不得要領な返事である。かういふ風に正正堂堂と論じつけられては、假令子規の肚の底に、承服出來ないものがあつたとしても、更に是を押し返すに足るだけの議論は、出來なかつたのだらうとも思ふ。

此所には漱石の教養論がある。また此所には漱石の讀書論がある。然も是は漱石の、殆んど一生を通じて渝らなかつた、生活の大方針であつただけに、人を說得しなければ措かない、重さを持つて言はれてゐる。然し此所で漱石が子規に特に言ひたかつた事は、單なる教養ではなく、また單なる讀書でもなく、もつと特殊な教養、もつと特殊な讀書であつたやうに見える。子規は必

しもRhetoric一本槍で進まうとしてゐた譯ではなかつた。『筆まかせ』を見てもわかるやうに、子規は絶えず自分の内面を觀察し、自分の周圍を觀察するとともに、隨分いろんな本を讀み、讀んだものに就いて考へ、考へたものをいろいろに、この日記の中に書きつけてゐる。それを知らない漱石ではない。その漱石がなほ且つその子規に讀書を勸めてゐるのは、子規の當時の讀書が、主として日本の、特に主として當時の文壇的なものに限られる傾向があつたから、其所から連れ出して、子規を世界的な廣廣とした世界に置かうとするのである。それだから漱石は「此Idea ヲ涵養スルニハculture ガ肝要ニテ次ハ己レノ經驗ナリ去レド己レノ經驗ノ區域ノミニテハIdea ヲ得ル區域狹キ故culture ノ方ガ要用ナリト申スナリ／然ラバCulture トハ如何ナル者ト云フニKnowing the ideas which have been said and known in the world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバculture ヲ得ル方ハト云フニ讀書ヲ捨テ、他ノ方ナキハ貴君モ御左袒ナルベシ」と言つてゐるのである。勿論當時漱石が、早くも自分自身を、世界的に廣く且つ高い立場に置き得てゐたかどうかには、疑問がある。然し西洋には西洋獨特の高い文化と深い智慧との寶庫があつて、その寶庫の富を十分吸收するのでなければ、日本は世界的な立場に立つて、西洋と同じレベルの上で角逐する事は出來ないといふ認識は、當時の人達の心の底を貫ぬいて、意識的に、或は無意識的に、力強く動いてゐた所のものであつた。同じ認識に動かされて英語を學んだ漱石

が、英語に深入りするとともにその認識を深め、自分の微力を嘆きつつも尚著その歩を踏み堅めて行く途中、自分の最も愛する子規をも、自分の同行に加へたいと念じるのは、極めて自然の事であつたと言つて可いであらう。

然し一度小説家たらうと志した子規は、なかなかその志望を捨てず、また小説家たるには漱石の所謂教養を蓄積する必要はないと考へたものと見えて、文筆に親しむ事を已めず、漱石の所謂讀書を取り上げる事をしなかつたらしい。のみならず子規はその後、反つて漱石に對して、自國の文學の尊重すべき所以を説き所謂南蠻鴃舌の書を貶しめる擧にさへ出でる。

明治二十四年（一八九一）八月三日漱石は子規に宛てて、「鷗外の作ほめ候とて圖らずも大兄の怒りを惹き申譯も無之是も小子嗜好の下等なる故と只管慚愧致居候元來同人の作は僅かに二短篇を見たる迄にて全體を窺ふ事かたく候得共當世の文人中にては先づ一角ある者と存居候ひし試みに彼が作を評し候はんに結構を泰西に得思想を其學問に得行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者と存候右等の諸分子相聚つて小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある樣に思はれ候尤も人の嗜好は行き掛りの教育にて 假令ひ文學中にても種々なる者故已れは公平の批評と存候ても他人には極めて偏窟な議論に見ゆる者に候得ば小生自身は洋書に心醉致候心持ちはなくとも大兄より見れば左樣に見ゆるも御尤もの事に御座候全體あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位然し退

いて考ふれば是前にも云へる如く元來の嗜好は同じきも從來學問の行き掛りにてかゝる場合に立ち到り候事と存じ夫よりは可成博覽をつとめ偏僻に陷ざらん樣に心掛居候其上日本人が自國の文學の價値を知らぬと申すも日本好きの君に面目なきのみならず日本に夫程好き者のあるを打ち棄てゝわざ〳〵洋書にうつゝをぬかし候事馬鹿々々敷限りに候のみならず我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分り候得ば以後は可成大兄の御勸めにまかせ邦文學研究可仕候さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば自ら面目なき迄に愧入候性來多情の某何にでも手を出しながら何事もやり遂げぬ段無念とは存候得共是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候御憫笑」と書いてゐる。

饗庭篁村に對する漱石の批評と、森鷗外に對する漱石の批評とは、今日なほ通用する妥當性を持つてゐる。それは此所では暫く問題外に措くとして、漱石は恐らく子規から、鷗外の作品を褒めた事から發して、「洋書に心醉」しすぎる事を指摘され、「自國の文學の價値を知らぬ」と言つて非難され、日本に是程「好き者のあるを打棄てゝわざ〳〵洋書にうつゝをぬか」すのは、隨分馬鹿げた事であるとまで、痛論されたものらしく、その返事がこの手紙となつて現はれたものに違ひない。勿論漱石は、自分が「洋書に心醉」し「洋書にうつゝをぬかし」てゐるとは、決して

考へてゐなかつたに違ひなかつた。漱石は自分の爲に學問をするので、他人の爲に學問をするのではなかつたからである。從つて漱石はその非難を、そのまま子規に返上する事が出來た。然し西洋の學問と藝術とを專念研究しようとする結果、自分は「自國の文學の價値を知らぬ」やうな事になつてゐるのかも知れない。是は日本人として、日本に申譯のない事である。それだから、漱石は子規の忠告に聽いて、是から出來るだけ「邦文學研究」に身を入れようと、約束する。殊に漱石は、英語英文に通達して、外國語でえらい文學上の述作をやつて、西洋人を驚かせようといふ希望を抱いてゐた」のが、「我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分かり」、「さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば自ら面目なき迄に愧入」る氣持になつてゐた際である。子規の忠告が身に沁みて、是からは日本の文學を研究して見ようといふ氣にもなつたのだらうと思ふ。

然しその事は漱石が、今になつて英文學を捨てようと決心したといふ事を、意味しなかつた。漱石は或は「洋文學の隊長」とならうとする事は、思ひ止まつたのかも知れない。然し漱石は knowing the ideas which have been said and known in the world による教養の獲得を、決して斷念しはしなかつた。然も英文學は、漱石にとつて、さういふ世界的な智慧と文化とを吸收する、吸盤だつたのに外ならなかつた。のみならず漱石が「洋文學の隊長とならん事思ひも寄

らぬ事」と感じたといふ事は、一方から言へば、漱石が從來よりも一層英文學の中に、深入りした證據であるとも言ふ事が出來る。さういふ氣がすればするほど漱石は、ますます眞面目に、ますます深切に、英文學と取つ組み合はなければゐられなくなる筈だからである。――「性來多情の某何にでも手を出しながら何事もやり遂げぬ段無念とは存候得共是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候」が、具體的に何を意味するのかは全然不明であるが、然し例へばそれが『木屑錄』のやうなもの、漢詩のやうなもの、俳句のやうなもの、(書簡第三四七號で漱石は、「僕が二十三四にかきかけた小說が十五六枚殘つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり耻かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた。」と言つてゐる)、さういふ創作に關するものを意味してゐるのだとすれば、自分にそれが「やり遂げ」られないのは、「一つは時勢の然らしむる所」と、漱石が諦めてゐたのだと、解釋する事が出來る。然もこの「時勢」とは、詮ずる所、西洋文化の吸收に急がしい「時勢」、漱石から言へば、漱石の所謂教養獲得に關する、內なる必至の衝迫に外ならない。此所でも漱石は、『七草集』の跋に書いたのと同じやうな心構へで、言はば私の、「風流韻事」の世界を押へて、教養獲得の一路に邁進する事が、自分の生活にとつて、遙に重要な事であると、反省し認識し、ますますその方向に深入りしつつあつたのである。更にこの事を證明するものは、漱石が明治二十四年(一八九一)十一月七日正岡子規に與へた手紙であつた。

是より先き子規は『明治豪傑譚』といふ本に子規一流の氣節論を添へて、漱石に贈つたものらしい。十一月七日の手紙はその返事である。

漱石は其所で先づ、子規から送られた『明治豪傑譚』に現はれた行爲が、決して人人の氣節を示してゐるものではなく、「卽座の頓智」か、「其場の激情」か、「何人の生活中にも穿鑿したらば出てきさうなる失策話」か、「尋常一樣の世間話」かに過ぎないものである事を詳説し、一轉して、氣節とはいかなるものであるか、自分の考へる所を一般的に論じようと言つて、「御存じの如く人間の能力は智、情、意の三者に外ならず氣節は人間能力の一部なる以上は三者の中何にか屬せざるべからず第一氣節とは情に屬するやと云ふに決して然らず一時の怒りに激して人を痛罵す是氣節なりや余は氣節とは思はざるなり年來の怒りに激して日常人を痛罵す是氣節なりや是も亦氣節とは思はれずさらば一時の感情にもせよ年來の感情にもせよ感情を以て爲したる行爲は氣節と云ふ可からず氣節旣に感情に屬せずんば之を意志の作用とせんか打つ可きの道理なく打ち度の感情なく妄りに鐵拳を擧て人に加ふ是れ氣節なりや同じく打つ可きの道理なく又打ち度の念慮なきに日常鐵拳を擧げて人に加ふ亦氣節にあらず去らば一時の意志にせよ年來の意志にせよ意志より來るもの氣節なりと云ふべからず意志に屬せず感情に屬せずんば氣節の屬する處は智の範圍内にあらずんばあらず親には孝を盡すべき理ありと心得て孝を盡す是氣節なり君に忠を致すべき道存す

とて忠を致す是氣節なり人を罵しるべきの理あり故に罵しる人を打つべきの理あり故に打つ是氣節なり然れども一時の理を行ふ是れ一時の氣節を表はすのみ一小見識を抱いて之を行ふ是れ一小見識の氣節のみ一時の氣節一小見識の氣節有もよし無くとも差支へなし吾人の欲する所は絕大見識を抱懷して人生の前後を貫き通ずるにあり書物にても一頁(原)には一頁の主意あり文字あり一篇には一篇の主意あり文字あり一卷には一卷を貫くの主意あり文字なかる可らず一頁の主意一篇の文字は一時の氣節一小見識の氣節のみ人生五十年の浩帙人生天大の主意決して一章一篇の中に存せざるなり故に僕謂ふ氣節は情に屬せず意に屬せずして智に屬す而して大氣節は人生を掩ふ大見識に屬すと」と述べ、更に筆を轉じて、「小生元來大兄を以て吾が朋友中一見識を有し自己の定見に由つて人生の航路に舵をとるものと信じ居候其信じきりたる朋友がかゝる小供だましの小冊子を以て氣節の手本にせよとてわざ／＼惠投せられたるはつや／＼其意を得ず小生不肖と雖モ亦人生に就て一個の定見なきにあらず此年頃日頃詩を誦し書を讀むも讀むに從ひ誦するに從つて此定見の自然と發達して長大になるが爲めのみ徒らに彫琢の末技に拘して一字一句の是非を論ずるは愉快なきにあらず然れども遂に小生が心を滿足せしむるに足らざるなり去れど小生とて我が見識こそ絕大なれ最高なれと云ふにあらず若し吾が主義の卑野ならんか大兄の高說を拜聽して其愚を癒するも可なり前賢の遺書に因て之を啓發するも可なり何を苦んで此蕞爾(原)たる一俗册を用いん君此書

を讀んで自ら思へらく日本男子の區域外に放逐せられて饕餮飽くなきの蠻夷と伍するに至らざるを喜こぶなりと然れども君の目して蠻夷となすもの饕餮飽くなきの輩となすもの實に余に誨ゆるに人生の大思想を以てせり僕をして若し一點の節操あらしめば其節操の一半は鴃舌の書中より脫化し來つて余が腦中にあり此腦中にあるの秤量を以て此書の貫目をはかるに其輕き事秋毫の如し君何を以て此書を余に推擧するや余殆んど君の余を愚弄するを怪しむなり」と書いてゐる。

西洋の智慧と文化とに對する漱石の態度は、此所に於いて明白であつた。「君の目して蠻夷となすもの饕餮飽くなきの輩となすもの實に余に誨ゆるに人生の大思想を以てせり僕をして若し一點の節操あらしめば其節操の一半は鴃舌の書中より脫化し來つて余が腦中にあり」と宣言した漱石は、勿論鹿鳴館に集つた人人のやうに、自分の日本人としての立場を捨て切つてまで西洋に仕へようとしたのではなしに、自分を取り外す事なく、自分の日本人としての立場を踏み外す事なく、西洋獨特の智慧と文化との寶庫の中から、意識反省して、自分に必要なものを攝取し、自分のものに「脫化し」ようとしてゐるのである。同時に是は漱石が、自分の生活を、旣にはつきりと「黨派心がなくつて理非がある主義」の上に、「朋黨を結び團隊を作つて、權力や金力のために盲動しない」「人生五十年の浩帙人生天大の主意」を貫ぬく大見識を育て上げる上に、置いてゐるのだといふ事を指示する。

この往復書簡は、ある意味では、明治二十二年の暮から春へかけての、「教養」と「讀書」とに關する往復書簡の、繼續であつたやうに見える。ただあすこでは漱石と子規との見解の相違がどう解決されたかは分からなかつたが、然しここではそれが解決はされないまでも、凡そどういふ形で今日まで繼續してゐたかを、想像する事が出來る。是は要するに、西洋の智慧と文化とを取り扱ふ、態度の相違である。西洋を「饕餮飽くなきの蠻夷」と頭から輕蔑してかかるか、「余に誨ゆるに人生の大思想を以て」するとして、それを自分自身のものに「脫化し來」る爲に、男らしく相手を尊敬するかの相違である。然しここでかういふ姿をとつて現はれた見解の相違が、その後どう合ひ、もしくはどう離れるかは、少くとも手紙の上だけでは分からない。漱石は子規に宛てて、かういふ西洋の智慧と文化とに關する手紙を、その後一つも書かなかつたからである。嘗てはハルトマンの美學を振り廻して、漱石に恐れをなさしめた子規も、その後は次第に自分の好む所に深入りして、小說を書き、俳句を作り、漱石が英文學にますます深く這入つて行く事なぞ、どうでも可くなつてしまつたのかも知れない。子規が馬琴を讀み、春水を讀み、西鶴を讀み、近松を讀み、龍溪を讀み、春迺家おぼろを讀み、二葉亭四迷を讀み、饗庭篁村を讀んだ揚句、幸田露伴に私淑し、「歌發句共に永久のものに非ず、殊に發句は明治に恐くべきものとは小生の豫言なり」と喝破し、幾度か露伴を訪れ、小說『月の都』を草してその批評を聽かうとしたのは、こ

の明治二十四年から明治二十五年(一八九二)の春へかけての事であり、然も露伴から『月の都』をあまり高く買はれなかつたのに落膽したのか何か、「僕は小說家となるを欲せず詩人とならんことを欲す」と高濱虛子に書いてやつたのは、明治二十五年五月四日の事であり、それを機として子規の、俳人としての、脇目も振らない生活が始まつたからである。殊に子規は、明治二十五年の七月に大學を落第してから、大學をやめてしまつた。漱石から言へば、子規にもつと西洋の本を讀めといふ氣にもなれなくなつたに違ひない。子規から言へば、漱石にもつと日本のものを讀めといふわけにも行かなくなつたのだらうと思ふ。

是で漱石には、子規の觸發による西洋か東洋かの問題は、自然消滅の形になつたやうに見える。然し事實はこの問題は、もつと後に、もつと重大な、もつと深刻な問題として、漱石の爲にセーヴされてゐたのである。

一九　初戀

『三四郎』の中で廣田先生が三四郎に、自分が「生涯にたつた一遍逢つた女に、突然夢の中で再會したと云ふ小說染みた」話を、話して聞かせる一節がある。

「憲法發布は明治二十二年だつたね。其時森文部大臣が殺された。君は覺えてゐまい。幾年かな君は。さう、それぢや、まだ赤ん坊の時分だ。僕は高等學校の生徒であつた。大臣の葬式に參列するのだと云つて、大勢鐵砲を擔いで出た。墓地へ行くのだと思つたら、さうではない。體操の教師が竹橋內へ引張つて行つて、路傍へ整列さした。我々は其處へ立つたなり、大臣の柩を送る事になつた。名は送るのだけれども、實は見物したのも同然だつた。其日は寒い日でね、今でも覺えてゐる。動かずに立つてゐると、靴の下で足が痛む。隣の男が僕の鼻を見ては赤い赤いと云つた。やがて行列が來た。何でも長いものだつた。寒い眼の前を靜かな馬車や俥が何臺となく通る。其中に今話した小さな娘がゐた。今、其時の模樣を思ひ出さうとしても、ぼうとして迚も

明瞭に浮んで來ない。たゞこの女丈は覺えてゐる。夫も年を經つに從つて段々薄らいで來た、今では思ひ出す事も滅多にない。今日夢を見る前迄は、丸で忘れてゐた、けれども其當時は頭の中へ燒き付けられた樣に熱い印象を持つてゐた。――妙なものだ」

是は小說中の人物の體驗である。いくら廣田先生が漱石らしい風貌をもつて描き出されてゐると言つて、是を直ちに漱石の體驗であると見做してしまふのは、詩と眞實との區別を知らない、素人の速斷であると言はれなければならない。それにも拘はらずこの話には、假令ミュスティフィカツィオーンの衣が被せてはあつても、何かこの中に、漱石自身が體驗した、眞實が籠められてゐる氣がする。さうして是は、明治二十四年(一八九一)七月十八日漱石が子規に宛てて書いてゐる、「えゝともう何か書く事はないかしら、あゝそう〳〵、昨日眼醫者へいつた所が、いつか君に話した可愛らしい女の子を見たね――銀杏返しにたけながをかけて――天氣豫報なしの突然の邂逅だからひやつと驚いて思はず顏に紅葉を散らしたね丸で夕日に映ずる嵐山の大火の如し其代り君が羨ましがつた海(原)氣屋で買つた蝙蝠傘をとられた、夫故今日は炎天を冒してこれから行く」の女と、同一人に對する體驗でありさうな氣がする。明治二十二年(一八八九)の紀元節に初めて會つた女に、明治二十四年(一八九一)の七月十八日に眼醫者で偶然出會つた所で、少しも不合理な事はない。既に「いつか君に話した」といふ言葉には、相當時日の距離がある感じが含まつてゐ

る。「天氣豫報なしの突然の邂逅」とある以上は、曾てこの「眼醫者」の所で會つたのではなく、何所か別の所で會つて、かういふ所で會へやうなどとは、夢にも豫期する事が出來なかつた事を意味する。――さうは言ふものの、この眼醫者で會つた女が、果して竹橋內を俥で通つた女と同一人であるかどうかは、文獻的には是以上何の手がかりもない。ただ鏡子の『漱石の思ひ出』によると、漱石が「トラホームを病んでゐて、毎日のやうに駿河臺の井上眼科に通つてゐ」ると、「始終そこの待合で落ち合ふ美しい若い女」があつて、それが「脊のすらつとした細面の美しい女」で、「見るからに氣立が優しく」「しんから深切で」「見ず知らずの不案內なお婆さんなんかが入つて來」ると、「手を引いて診察室へ連れて行つたり、いろんな面倒を見」てやるので、「傍で見てゐてもほんとに氣持がよかつた」と、後に漱石自身が言つてゐたのださうである。然もそれが漱石の初戀の女で、漱石はその爲にいろんな奇行を演じたと、漱石の兄、和三郎直矩が話してゐたといふのだから、少くともこの「銀杏返しにたけながをかけ」た女が、漱石の初戀の女であつたといふ事だけは、認めて可いだらうと思ふ。

ただ不思議なのは、夏目家の傳へでは、是が漱石の法藏院に下宿してゐた前後の事になつてゐるといふ事である。漱石が小石川表町七十三番地の法藏院に越して行つたのは、明治二十七年（一八九四）十月十六日の事で、「銀杏返しにたけながをかけ」た女に「天氣豫報なし」に突然に

「邂逅」したのは、明治二十四年（一八九一）七月十七日の事であつた。その間にはまるまる三年の日子が挾まつてゐる。もつとも是は、漱石がその後三年の間なほその人を戀し續け、到頭法藏院に下宿してゐた前後になつて、その人を御嫁にもらひたいと言ひ出したのだと想像すれば、別に辻褄の合はない事はないが、然し漱石のこの手紙によると、手紙の文句は短く、さりげない調子で言はれてはゐるが、なほ雷火にでも撃たれた者のやうな、激しい、理非を絶した、動顚する計りの興奮が感じられるのに、『漱石の思ひ出』によれば、漱石の戀愛は、何かひどく分別臭くつて、理づめで、勿體ぶつた感じがあるのが、不思議である。もつとも是も、漱石が後に鏡子にその女に就いて語るとすれば、或はこんな風に語るより語りやうはなかつたかも知れない。また漱石といへども、その後「眼醫者」で屢この人に會つたとすれば、その人のさういふ「親切な」所を、注意しなかつたとは言ひ斷れない。然し夏目家で言ひ傳へられ、もしくは理解されてゐる所と、實際に漱石が體驗したらうと想像される所との間には、どうも重大な所に喰ひ違ひがありさうな氣がする。少くとも『漱石の思ひ出』の記事には、いろんな腑に落ちないふしがある。

例へば其所には、「その女(ひと)の母といふのが藝者上がりの見榮坊で、――どうしてそれがわかつたのか、そのところは私にはわかりませんが――始終お寺の尼さんなどを廻し者に使つて一擧一動をさぐらせた上で、娘をやるのはいいが、そんなに欲しいんなら、頭を下げて貰ひに來るがいい

といふ風に言はせます。そこで夏目も、俺も男だ、さうのしかかつて來るのなら、此方も意地づくで頭を下げて迄呉れとは言はぬといつた按排で、それで一ト思ひに東京がいやになつて松山へ行く氣になつたのだとも言はれて居ります。」といふ一節がある。是を鏡子は誰から聽いたものか、私にはよく分からない。然し「それで一ト思ひに東京がいやになつて松山へ行く氣になつたのだとも言はれて居ります。」といふ最後の一句から推測すると、是は大部分漱石の兄、和三郎直矩から出たものだらうと思はれる。もしさうだとすれば、此所には多く和三郎直矩の解釋が這入つてゐて、どの程度に眞相を穿つてゐるのかは、遽かに判斷が出來ない氣がするのである。例へば直矩の話によると、漱石はその事件の最中に喜久井町の實家に來て、自分の所へ縁談の申込みがあつたらうと訊くので、そんなものはなかつたやうだと答へると、自分に默つて斷るなんていふのは不都合だ、そんな事をするやうなら、もう親でも兄弟でもないと言つて、怒つて歸つて行つたといふが、然し明治二十八年（一八九五）十二月十八日漱石は子規に宛てて、「遠路わざ／＼拙宅まで御出被下候よし恐縮の至に存候其節何か愚兄より御話し申上候由にて種々御配意ありがたく存候小生は教育上性質上家内のものと氣風の合はぬは昔しよりの事にて小兒の時分より「ドメスチツク　ハツピネス」抔いふ言は度外に付し居候へば今更ほしくも無之候近頃一段と隔意を生じ候事も甚だ不本意に存居候然し之が爲め御配慮を受けんとは期し居らず候ひしなり愚兄の申

す處も幾分の理窟も可有之上京の節緩々可伺候……／小生家族と折合あしき爲外に欲しき女があるのに夫が貰へぬ故夫ですねて居る抔と勘違をされては甚だ困る今迄も小生の沈默し居たる爲め友人抔に誤解された事も多からんと思ふ家族につかはしたる手紙にも少々存意あつて心になき事迄も書た事あり今となつては少々困却し居るなり是非雲煙の如し善惡亦一時只守拙持頑で通すのみに御座候此頃は人に惡口されると却て愉快に相成候呵々」と書いてゐるのである。明治二十八年といへば、漱石がその四月に松山に行つた年であり、然もその前年の十月十六日に法藏院に越して行つた年であつた。その明治二十八年十二月の手紙に、然も大抵な事は打ち明け合つた子規宛の手紙に、漱石が「小生家族と折合あしき爲外に欲しき女があるのに夫が貰へぬ故夫ですねて居る抔と勘違をされては甚だ困る」と言つてゐるとすれば、和三郎直矩のその事に關する解釋は、全部「勘違」の上に立つてゐて、假令何か事實それに似たやうな事があつたとしても、解釋の交つてゐる和三郎直矩の話は、決して眞相を傳へたものではないと、見做さなければならないだらうと思ふ。

殊に漱石の松山行が失戀の結果であると解釋するのも、大きな「勘違」であるとしか思はれない。その理由に就いては後の『松山』の章で詳說するが、もしその爲に漱石が松山落を決心したのだとすれば、その漱石が松山に著いてまる二タ月經つか經たない内に、もう妻帶しようかどう

しようかと考へてゐたといふ事が、ひどく辻褄の合はない、不思議な心理現象になつてしまふからである。漱石は遲くとも四月初めには松山に赴任した筈であるが、その五月二十八日子規に宛てて、「結婚、放蕩、讀書三の者其一を擇むにあらざれば大抵の人は田舍に辛防は出來ぬ事と存候」と書き、「當地出生軍人の娘を貰はんか〳〵と勸むるものあり貰はんか貰ふまいかと思案せしが少々血統上思はしからぬ事ありて御免蒙れり」と書いてゐる。同じ七月二十六日には齋藤阿具に宛てて、「近頃女房が貰ひ度相成候故田舍ものを一匹生擒る積りに御座候」と書いてゐる。同じく十一月十四日には子規に宛てて、「二三々九度の方はやめにするかも知れず如何となれば先づ金の金主から探さねばならぬからな」と書いてゐる。然もこの最後の手紙は、その年の冬漱石が上京して見合をし、もらふ事にきめる、鏡子との緣談をさすものであつた。いくら人間が氣が變り易いと言つて、自分の故鄕でもあり、修學の便を最も多く持つてゐる東京を去らなければならないほど、失戀の痛手を負うた者が、その年の內に、急に妻帶したくなり、のみならず、見合を實行して、相手をきめてしまふなどといふ事の、あり得る筈がない。

もつとも漱石が法藏院に下宿してゐる時分、漱石のうちの者を驚かすやうな事が、何かあつたには違ひない。それでなければ、いくら漱石の兄が「勘違」をすると言つて、『漱石の思ひ出』に書いてあるやうな話を、人に話す筈がない。さう言へば狩野亨吉の談話『漱石と自分』の中にも、

「夏目君は大學卒業後傳通院の傍の法藏院といふのに菅君が前にゐた關係から下宿したが、そこは尼さんが出入りすると言つて、それを恐れてどうも氣に入らぬ。それで俺のところへ來いと菅君がその頃住つてゐた指ケ谷町の家へ引つぱつて行つた。そこで最初に菅君を驚かすやうなことがあつたのだが、それは菅君が一番詳しく知つてゐる事で自分が語るべきでない。」とある。菅虎雄によれば、漱石が菅虎雄のうちに厄介になつてゐたのは、法藏院に下宿する前で、菅虎雄の所から法藏院へ越して行つたのだといふ。菅虎雄を「驚かすやうなこと」といふのは、はつきりした事が、敎へてもらへない。然し漱石はある時漢詩を書き殘しただけで、なんにも言はずに、ぷいと菅のうちを飛び出してしまつたのださうである。是は『薤露行』の中の、ランスロットが隱士の家を脫け出す一節を思ひ出させるものを持つてゐるが、當時の漱石の生活氣分から想像すると、かういふ漱石の行動は、もつと重大な、——漱石の一生の分岐點ともいふべき、重大な問題に頭を惱ました結果であつて、明治二十四年七月の「銀杏返しにたけながをかけ」た女に對する戀愛とは、直接關係ある事ではなかつたのではないかとも考へられる。さうして漱石は恐らくその重大な問題の爲に、『門』の宗助と同じやうに、その年の冬、鎌倉に行つて參禪しさへもするのである。

然し後の漱石の作品を見ると、漱石は、『三四郎』の廣田先生の話の中にあるやうな、たつた一

度見ただけで、否應なしにそれに牽き寄せられる、鐵と磁石との戀のやうな戀を、頻に取り扱つてゐる。殊に漱石の初期の短篇には、さういふテーマを、まともに取り扱つたものが、非常に多い。『倫敦塔』の中にもそれがある。『幻影の盾』の中にもそれがある。『一夜』の中にも、『薤露行』の中にも、『趣味の遺傳』の中にも、ある意味では『猫』の中にも、それがある。長篇小說となつてからでも、『三四郎』の中の三四郎と美禰子との關係がさうである。『それから』の中の代助と三千代との關係がさうである。『門』の宗助とお米との關係がさうである。是は三部作として受胎されたものだから、さうであるのは當然だとしても、その後の作品でも、漱石が取り扱つてゐる戀愛關係は、何等かの點で、このテーマと關聯を持たないものはないと言つて可い位である。この事は漱石の頭に、曾て「燒き付けられた樣に熱い印象」を止めたものがあつて、それが爾後絕えず漱石の記憶に再生し、恰もダンテに於けるベアトリーツェのやうに、漱石の生活に特別な役目を勤めたに違ひない事を想像させるに、十分である。――『漱石の思ひ出』によると、漱石が亡くなる四五年前、漱石が虛子に誘はれて九段の能を見に行き、其所で昔の女に會ひ、歸つて來て鏡子にそれを話したので、鏡子が「どんなでした」と訊いたら、「餘り變つてゐなかつた」と答へたが、その口の下から「こんなことを俺が言つてゐるのを亭主が聞いたら、いやな氣がするだらうな」と言つて、「穩かに笑つ」たといふが、是は『行人』の中の、有樂座の名人會か

何かで、思ひがけなく昔の女に出會ふ話を思ひ出させる。さういへば、明治四十四年の「斷片」の中の、『彼岸過迄』に用ひられる筈だつたらしい材料の列記の中に「○有樂座名人會　呂昇　堀川」といふのの前に、「○能樂堂　左陣　松風」といふのがある。勿論是がその時の事を記念するものかどうかは分からないが、鏡子の「亡くなる四五年前」といふ記憶に誤りがなかつたとすれば、是もあながち關係がなくもないといふ氣もするのである。

　書簡第四九九號で漱石は、「僕がやすんだのは病氣ぢやない。去ればと云つて君が病氣だから夫に對して休んだ譯でもない。只やすんだのさ。靈の感應で僕がやすむなんて事があるものか。左程に僕を信仰してくれるのは難有いが君がそんな傾向を發達させると飛んでもない事になるよ。僕だからまだいゝが女が相手だと君は遂に其女の爲めに食ひ殺されて仕舞ふ。あぶない。君の樣な性質の人は可成反對の性質を養成しなくてはいけない。君も年頃だから今に戀をするかも知れない。其時に靈の感應なんぞばかり振り廻はしてゐると小宮豐隆なるものは地球の表面から消滅して仕舞ふ。僕も君位な年には靈の感應を擔いであるいたものだ。而して其「御」蔭でもつとえらくなる所をこんな馬鹿になつて仕舞つた。以來は決して靈の感應を擔いぢやいけない。ことに女に對して擔いぢや大變な事になる。世の中には感應を擔がせてひそかに冷笑する樣な怖い女が澤山居る。僕だつて靈の感應を利用して君を嬉しがらせる位は出來る。然しそんな罪な事はしない

から君もやめなくつちやいけない。……」と書いてゐる。是は、言ふまでもなく、漱石が四十の年の——女を知り、女に愛想をつかし、寧ろ女を憎んでゐた時の手紙であつた。同時に是は、弟子の性質を心配して、それを反對の方向に導かうとする目的を持つた、手紙であつた。然しこの中には漱石自身の、過去の告白がある。漱石は恐らくその人から「燒き付けられた樣に熱い印象」を受けて、いつまでもその人を忘れる事が出來ず、然も漱石の內氣な性質からも、漱石の育つた時代からも、それを相手に通じさせる何等かの方法を採る事は、思ひも寄らない事であつた爲に、結局漱石は「靈の感應」といふやうな事を唯一の賴みとして、ある時期の間は、生きてゐたものに相違ない。明治二十五年(一八九二)五月の『哲學會雜誌』に、漱石が『催眠術』の翻譯をしてゐるのも、明治三十二年(一八九九)八月の『ホトトギス』に『エイルヰン』の批評を書いてゐるのも、それと關聯させて考へれば、十分脈絡があるもののやうにも思はれる。然も一方では、漱石の中の理性と意志とは、さういふ「靈の感應」のやうな、賴みにならないものを賴みとして生きるロマンティシズムを克服して、——少くとも押壓して、その爲め漱石の生活が道草を喰つたり、脇道にそれたりする事を防いだものだらうと思ふ。「其御蔭でもつとえらくなる所をこんな馬鹿になつて仕舞つた」といふ言葉の中には、その爲め浪費された時日が相當長かつたといふ事を示唆する。それがその後絕えず漱石の記憶の中に蘇り、屢漱石の作品の中のテーマになつたの

は、克服されてそれが美しい思ひ出となつて殘り、漱石の現在の息苦しい世界に、ある救援を用意したからに違ひない。

談話筆記『正岡子規』の中に、「一時正岡が易を立ててやるといつて、これも頼みもしないのに占つてくれた。疊一疊位の長さの巻紙に何か書いて來た。何でも僕は教育家になつて何うとかするといふ事が書いてあつて、外に女の事も何か書いてあつた。これは冷かしであつた。」といふ一節がある。この占ひは、子規の『筆まかせ』によると、明治二十三年(一八九〇)の事である。もしその中に書いてあつたといふ「女の事」が、私の想像するやうに、漱石の手紙の「いつか君に話した可愛らしい女の子」の事であるとすると、我我は『三四郎』の中の廣田先生の體驗と明治二十四年七月の漱石の體驗とを、更に確實に繋げる、一環を持つ事になる譯であるが、是は然し今日からは、その想像の當否を點檢する手懸りがない。子規の『筆まかせ』には、その占つた文句は書きとめてあるが、「女の事」は書いてない。

二〇　厭世主義

漱石が子規の所へやつた手紙を見ると、特に明治二十二年・二十三年ごろの手紙には、戯作者風に洒落のめした所があつて、或は義太夫口調が出て來たり、或は講談口調が出て來たり、臭氣紛紛たる事を感ぜしめる。是は當時の文壇の一般の風潮にかぶれた爲もあるに違ひないし、一つには、當時二人は寄席通を以つて任じてゐたらしいから、寄席的の表現で物を言ひ合ふ事を樂しみとするほど、趣味が幼稚だつた爲もあるに違ひない。松本亦太郎によると、高等學校當時漱石は、眼が惡いといつて紅絹の片れを持つてゐた、それを胸のポケットから少し喰み出させて、人がからかふと、江戸ぢや眼やみ男に風邪ひき女と言つて、いきなものにしてあるんだと答へてゐたのださうである。

然しさういふふざけた、もしくは通がりの奥に、純粋で眞面目なものが燦として輝いてゐる事は、恐らく誰の眼にも見遁がされる事がない。例へば明治二十二年(一八八九)五月十三日、吐血

した子規の所へ見舞に行つて歸つてから、更に子規に宛てて書いた漱石の手紙など、その最も眞面目な、義憤と思ひ遣りと親切とに充ちた、暖か味の溢れた、代表的な手紙と言つて可いだらうと思ふ。一口に言へば、漱石は眞面目だつたのである。眞面目なものの上皮に、猥雑なものがくつついてゐたのである。

もつとも漱石には、ある場合、自分の眞面目である事がやりきれない爲に、せめて冗談を言ひ、輕口を叩いて、それに風を入れ、寛ろぎをつけようとする所もあつた。例へば明治二十二年（一八八九）八月三日、興津に行つて來た漱石は子規に與へて、「小生等最初は水口屋と申す方に投宿せしに一週間二圓にて誠にいやはや雲助同樣の御待遇を蒙むれり樓上には曾我祐準先生將軍乎として鎭座まします者から拙如き貧乏書生は「パラサイト」同樣の有樣御憫笑可被下候拙曾我中將を呼んで御山の大將ト云へり（解に曰く高之謂山、樓者高故曰御山、大將者武人之）手短かに申せば樓上ノ軍師（梁上ノ君子ニアラズ）ト云フ意味ゝ宿屋ノ主人御山の大將ヲ拜スルヿ平蜘蛛ノ如ク婢僕ノ之ヲ敬スルヿ鬼神ノ如シ偖々金錢程世ノ中に尊きはあらじと樓下ニテ握り睾丸をしながら名論を發明仕り候夫より忼慨心を鼓舞し身延屋といふに一週間三圓の御散財にて御轉居仰せ被出二三日逗留すると又々何處かの縉紳先生の爲に追出され、どうにもこうにも駿河の國立ツたり寐たり又興津、淸見の浦は淸むとても心はすまぬ濱千鳥啼くより外はなかりしが（ヤ、デン）といふ

體裁、汗臭き富士講連と同車にて漸々歸京仕候何れ道中の御話は御面晤之節萬々可申述候云々」と書いてゐるが、假令「どうにもこうにも駿河の國」などといふ文句は馬鹿氣切つた文句であつたとしても、漱石はさうでも言つて自分を馬鹿にするのでもなければ、世の中の狀態が不合理で馬鹿馬鹿しくて、まともには見てゐられないのである。

勿論當時の漱石の手紙には、さういふ意味ではなく、單なる冗談の爲の冗談、單なる輕口の爲の輕口が、到る所に出て來る事も爭はれなかつた。是はある意味では漱石の頭の働らきが、輕捷活潑である事を證明するものではあるが、然しなんといつても、低劣な趣味である。反省的な漱石に、その事に氣がつかずにゐる筈がない。年がたつに從つて漱石は、その厭味と輕口とから脱却する。明治二十四年・明治二十五年と、年一年漱石の手紙には、特に眼に立つて、輕浮な調子がひつ込み、眞面目な調子が前景に出て來る。同時に漱石の手紙には、段段憂鬱な調子が際立つて來る。

眞面目で純粹で一向きな漱石が、世の中を見れば見るほど、世の中の事を考へれば考へるほど、世の中が淺ましく、世の中が不愉快になつて來るのは、當然であつた。二番目の兄の形見の時計の事で、默つてうちの者に愛想をつかした漱石が、子規を診察した醫者の不親切に憤慨し、興津の宿屋で曾我祐準に對する宿屋の主人や下女番頭の態度に憤慨したのは、ほんの一例に過ぎない。

養家にゐては養父母に愛想をつかし、實家に歸つては亦親兄弟に愛想をつかし、世間に出ては又その世間に愛想をつかすべき、多くの理由を發見するとすれば、漱石はどうしても憂鬱にならざるを得なくなるのである。明治二十三年（一八九〇）八月九日漱石は子規に宛てて、「此頃は何となく浮世がいやになりどう考へても考へ直してもいやで／＼立ち切れず去りとて自殺する程の勇氣もなきは矢張り人間らしき所が幾分かあるせいならんか「ファウスト」が自ら毒藥を調合しながら口の邊まで持ち行きて遂に飲み得なんだといふ「ゲーテ」の作を思ひ出して自ら苦笑ひ被致候小生は今迄別に氣兼苦勞して生長したといふ譯でもなく非常な災難に出合ふて南船北馬の間に日を送りしこともなく唯七八年前より自炊の竈に顔を焦し寄宿舍の米に胃病を起しあるひは下宿屋の二階にて飲食の決闘を試みたりそれは／＼のん氣に月日を送り此頃は其にも倦きておのれの家に寐て暮す果報な身分でありながら定業五十年の旅路をまだ半分も通りこさず既に息竭き候段貴君の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へどこれも misanthropic 病なれば是非もなしいくら平等無差別と考へても無差別でないからおかしい life is a point between two infinities とあきらめてもあきらめられないから仕方ない／We are such stuff／As dreams are made of; and our little life／Is rounded by a sleep.／といふ位な事は疾から存じて居ります生前も眠なり死後も眠りなり生中の動作は夢なりと心得ては居れど左樣に感じられない處が情なし知らず生れ

死ぬる人何方より來りて何かたへか去る又しらず假の宿誰が爲めに心を惱まし何によりてか目を悅ばしむると長明の悟りの言は記臆すれど悟りの實は迹方なし是も心といふ正體の知れぬ奴が五尺の身に蟄居する故と思へば惡らしく皮肉の間に潜むや骨髓の中に隱るゝやと色々詮索すれども今に手掛りしれず只煩惱の焰熾にして甘露の法雨待てども來らず慾海の波險にして何日彼岸に達すべしとも思はれず已みなん／＼目は盲になれよ耳は聾になれよ肉體は灰になれかしわれは無味無臭變ちきりんな物に化して／I can fly, or I can run, ／Quickly to the green earth's end, ／Where the bowed welkin slow doth berd; ／And from thence can soar as soon ／To the corners of the moon. ／と申す樣な氣樂な身分になり度候、あゝ正岡君、生て居ればこそ根もなき毀譽に心を勞し無實の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁上より落つるも膽を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか御文樣の文句ではなけれど二ツの目永く閉ぢ一つの息永く絕ゆるときは君臣もなく父子もなく道德も權利も義務もやかましい者は滅茶／＼にて眞の空々眞の寂々に相成べく夫を樂しみにながらへ居候棺を蓋へば萬事休すわが白骨の鍬の先に引きかゝる時分には誰か夏目漱石の生時を知らんや穴賢一と書いてゐる。

同情のない見方をすれば、此所には、自分の感情の滿足を得る爲に、自分の厭世觀を表現したといふやうな――從つて漱石の興味は寧ろかういふ文章を書く事の上にあつて、自分の惱みを眞

率に親友の前に告白する趣が乏しいとも、言へないい事はないのかも知れない。同時に此所に書かれてゐる事は、自分で自分の心を支配する事が出來ない――その意味で自分自身に對する愛想づかしの方が主になつて、世間に對する愛想づかしは、あまり問題になつてゐないとも、言へない事はない。然し世間に對する愛想づかしとともに、自分に對する愛想づかしが並行すればこそ、厭世と憂鬱とは、一層深刻なものになる。その表現がセンティメンタルなもので濡れてゐるのは、それだけ自分をいとほしむ心が強い事を、指示するものに過ぎないとすれば、我我はこの手紙の奥に動いてゐる眞實に、少しも疑ひを挾む必要はないと思ふ。

ただ不思議なのは、この手紙のある部分と『薤露行』の中のエレーンの悩みの描寫との間に、いくらか通ふもののある氣がする事である。漱石は其所で、ランスロットを一目見たエレーンの心持を、「燭盡きて更を惜めども、更盡きて客は寢ねたり。寢ねたるあとにエレーンは、合はぬ瞼の間より男の姿の無理に瞳の奥に押し入らんとするを、幾たびか拂ひ落さんと力めたれど詮なし。強ひて合はぬ目を合せて、此影を追はんとすれば、いつの間にか其人の姿は既に瞼の裏に潜む。苦しき夢に襲はれて、世を恐ろしと思ひし夜もある。魂消える物の怪の話におのゝきて、眠らぬ耳に鶏の聲をうれしと起き出でた事もある。去れど恐ろしきも苦しきも、皆われ安かれと願ふ心の反響に過ぎず。われと云ふ可愛き者の前に夢の魔を置き、物の怪の祟りを据ゑての恐と苦しみ

である。今宵の惱みは其等にはあらず。我と云ふ個靈の消え失せて、求むれども遂に得難きを、驚きて迷ひて、果ては情なくて斯くは亂るゝなり。我を司どるもの、我にはあらで、先に見し人の姿なるを奇しく、怪しく、悲しく念じ煩ふなり。いつの間に我はランスロットと變りて常の心はいづこへか喪へる。エレーンと吾名を呼ぶに、應ふるはエレーンならず、中庭に馬乘り捨てゝ、廂深き兜の奥より、高き櫓を見上げたるランスロットである。再びエレーンと呼ぶにエレーンはランスロットぢやと答へる。エレーンは亡せてかと問へば在りと云ふ。いづこにと聞けば知らぬと云ふ。エレーンは微かなる毛孔の末に潛みて、いつか昔しの樣に歸らん。エレーンに八萬四千の毛孔ありて、エレーンが八萬四千壺の香油を注いで、日に其膚を滑かにするとも、潛めるエレーンは遂に出現し來る期はなからう。」と書いてゐる。それと漱石が手紙で、「定業五十年の旅路をまだ半分も通りこさず既に息竭き候段貴君の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へど」とか、「是も心といふ正體の知れぬ奴が五尺の身に蟠居する故と思へば惡らしく皮肉の間に潛むや骨髓の中に隱るゝやと色々詮索すれども今に手掛りしれず只煩惱の焰熾にして甘露の法雨待てども來らず慾海の波險にして何日彼岸に達すべしとも思はれず已みなん〳〵目は盲になれよ耳は聾になれよ肉體は灰になれかしわれは無味無臭變ちきりんな物に化して」とか言つてゐる所とを突き合せて考へて見ると、少くともその間に、全然脈絡がないとは言ひ切れない、サムシングがある。

もつとも是は、私が迎へて讀むから、特に雙方の脈絡を感じるのかも知れない。「心といふ正體の知れぬ奴」をつかまへて、是を自分の支配下に置き、「煩惱の焰」を押さへ「慾海の波」を靜めて、物に役せられない生活を送りたいと希望する事は、一般人間の問題であつて、必しも其所に成らざる戀愛を背景に持つ事を必要としないのである。のみならず漱石は同じ手紙の中で、「あゝ正岡君、生て居ればこそ根もなき毀譽に心を勞し無實の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁上より落つるも膽を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか」と言つてゐる。是は漱石が、身内の者から「變物」扱ひを受けてゐたといふ事と、密接に關聯する。漱石は「變物」をもつて自任する氣になつてはゐても、周圍の者から「變物」と言はれ、世間知らずと言はれ、頑固だの馬鹿だのと言はれれば、それが氣にならざるを得ない。然も「根もなき毀譽に心を勞し無實の褒貶に氣を揉」む事は馬鹿馬鹿しい事であると承知してゐても、なほそれが氣になるから、自分に愛想をつかさざるを得なくなるのである。此所にも漱石の、成らざる戀愛の這入り込んで來る餘地はない。――それにも拘はらず私がこの手紙の中から、なほ漱石の成らざる戀愛を嗅ぐ氣がするのは、この手紙が、漱石の子規に與へた手紙の中で、最もセンティメンタルな手紙だつたからかも知れない。

もつとも漱石は子規に宛てては、外にもセンティメンタルな手紙を書いてゐる。例へばこの手紙の一つ前、明治二十三年(一八九〇)七月二十日の手紙にも、「何の因果か女の祟りか此頃は持

病の眼がよろしくない方で讀書もできず」と書いてゐる。この手紙の前半にも、「爾後眼病兎角よろしからず……然シ……所謂ずる〴〵ベッたりにて善くもならねば惡くもならぬといふ有樣故……眼鏡ごしに簾外の秋海棠の哀れに咲きたるをかしと眺むる位の事は少しも差支無之候去れば時々は庭中に出て（米山法師の如く蟬こそ捉らね）色々ないたづらを致し候茶の樹の根本に丹波ほうづきとかいふ實の赤く色づきて寐ころげたるを何心なく手折りて不圖心づけば別に贈るべき人もなし小さき妹にてもあれかしと願ふも甲斐なし……」と書いてある。然もかういふセンティメンタルな調子は、子規の氣に入らなかつたと見えて、子規は八月十五日、二つの手紙の返事を書き、「何だと女の祟りで眼がわるくなつたと、笑はしやアがらア、此頃の熱さではのぼせがつよくてお氣の毒だねへといはざるべからざる嚴汗の時節」だとか、「秋海棠丹波ほうづきを見て粹界の堂に上り小妹を思ふて通國の室に入る」とかいつた調子で、漱石をひやかしたのみならず、「此頃は何となく浮世がいやになり……いやで〳〵立ち切れず……」に對しては、「最少し大きな考をして天下不大瓢不細といふ量見にならではかなはぬこと也けし粒程の世界に邪魔がられ、うぢ蟲めいた人間に追放せらるゝとは、ても扨も情なきことならずや……」と、頭からきめつけた。それに對して漱石は、「女祟の攻擊晝寐の反對奇妙〳〵然し滑稽の境を超えて惡口となりおどけの旨を損して冷評となつては面白からず其も貴樣の手紙が癪に障るからだと言はるれば閉口仕候悟

道徹底の貴君が東方朔の囈語に等しき狂人の大言を眞面目に攻撃してはいけない」と答へ、更に「仙人墮俗界。遂不免喜悲。啼血又吐血。憔悴憐君姿。漱石又枕石。固陋歡吾癡。君痾猶可癒。僕癡不可醫。素懐定沈鬱。愁緒亂如絲。……」といふ五言の古詩を添へる。この五言古詩の句から考へても、漱石の悩みの主たる源が、自分の「固陋」であり、自分の「癡」であり、その爲め世間と調子を合せて生きる事が出來ない點にあつた事は、明白であると言つて可いかも知れない。

然も子規の「天下不大瓢不細といふ量見になら」なくてはいけないといふ忠告は、漱石にぐつと徹へたもののやうである。翌明治二十四年(一八九一)十一月七日、漱石が子規の所へ氣節論を書いてやつた手紙の中にも、子規が「僕は賢愚の差に於て人を輕重する事少し然れども善惡の違に至つては一歩もこれを假さず小惡あれば卽ち極口之を罵詈し小善あれば極口之を褒美す……僕之を以て得意となす他人の毀譽敢て關せざるなり」と言つてよこしたのに對して、人間は完全な者ではない。人間界では善は善、惡は惡といふ風に截然と分かれてゐて、善人は生涯惡を犯す事がなく、惡人は生涯善に移る事がない、といふ風になつてゐるものではない。どんな人間でも取るべき所がある代りに、どんな人間でも非難すべき所がある。君のやうに言つてゐては、結局交際すべき人が一人もゐなくなつて仕舞ふに違ひない。「君既に寸善を容るゝの量あらば又分惡を包むの度なかるべからず乍失禮君の一身でさへ前後を通看したなら機微の際忽然として惡念の心

頭に浮びし事あるべし(假令ひ之を行はぬにもせよ)何となれば人間は善惡二種の原素を持つて此世界に飛び出したるものなればなり若し人性は善なりと云はゞ惡と云ふ事を知るべきの道理なし惡と云ふ事を行ふ筈なし善惡二性共に天賦なりとせば善を褒すると同時に不善をも憐まざるべからず今君毗睚の不善を假さずして終身之を忘れずんば僕實に君が慈憐の心に乏しきを嘆ぜずんばあらず僕思ふに君實にかゝる主義を應用するにあらず論じて筆端に上る〔に〕至つて遂に此過激の文字となりしならん先年僕が厭世の手紙の返事に天下不大瓢不細の了見で居るべしと云ひ給へり其了見で居る君が斯る狹隘なる意見を述べて(得意となす)抔云ふに至つては實に前後の隔絕せるに驚かずんばあらず先に云ふ處のものは單に壯言大語僕を驚かせしなれば僕向後決して君を信ずまじ又冗談ならば眞面目の手紙の返事にかゝる冗談は廢して貰はんと存ず又先年の主義を變じ今日の主義となしたりと云はゞ夫でよし人間の主義終始變化する事なければ發達するの期なし變じたるは賀すべし然し變じ方の惡きは驚かざるを得ず高より下に上り大人より小兒に生長したる樣な心地するなり僕決して君を誹謗するにあらず唯君が善惡の標準を以て僕が言の善か惡かを量れ」と書いてゐる。

「天下不大瓢不細」といふ考へ方を、當時漱石が知らなかつた筈がない。知つてはゐても漱石は當時、恐らくそれを實踐する事が出來なかつたのである。「根もなき毀譽」だの「無實の褒貶」

たのに對しては、「根もなき」事・「無實」な事・間違つてゐる事として、それを一一訂正しなければ、どうしても氣が濟まなかつたのである。然し漱石には、一一さういふ事に拘泥してゐるのは、馬鹿馬鹿しい事であるといふ氣が、一方にはあつた。それだけ漱石は、子規からかう言はれて、きつとぐつと徹へたものだらうと思ふ。勿論子規のこの言葉が、その後果して漱石の世界を、廣め寛ろげるに役立つたものかどうかは分からない。然し少くとも明治二十四年(一八九一)の漱石は、觀念的には、善と惡とは共に人間に天賦のものである、從つて人は善を愛するとともに不善を憐むべきで、決して憎むべきでないと考へ、同じ「天下不大瓢不細」の言葉をもつて、子規のその點に關する狹量を戒める立場に立つ事が出來てゐるのである。

子規はこの手紙に對して、自分の前言を説明し敷衍するとともに、漱石が曾て厭世主義を唱へながら、今となつて「慈憐の心に乏し」いなどと、人に向つて言ふ事は、前後撞著であると、反擊して來たものらしい。それに對して漱石は十一月十一日、「僕前年も厭世主義今年もまだ厭世主義なり嘗て思ふ樣世に立つには世を容るゝの量あるか世に容れらるの才なかるべからず御存の如く僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれどどうかこうか食ふ位の才はあるなりどうかこうか食ふの才を頼んで此浮世にあるは説明すべからざる一道の愛氣隱々として或人と我とを結び付るが爲なり此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に增加するの見込あ

り此増加につれて漸々慈憐主義に傾かんとす然し大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり唯極端ならざるのみ之を撞着と評されては仕方なく候」と答へた。――これらの手紙は、最もよく當時の漱石の心境を説明する。「世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏し」い漱石は、それにも拘はらず「世」を愛しなければゐられないのである。勿論此所の「愛氣」と此所の「或人」とは、特定の「戀愛」と特定の「相手」とを意味しない。例へば『硝子戸の中』の親切な下女のやうな、また例へば明治二十四年八月三日の手紙の中の「悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ」た嫂のやうな、また例へば豫備門以來の幾多の友人、中村是公、橋本左五郎、太田達人、米山保三郎、正岡子規のやうな、さういふ人間も亦この世の中にはゐるのだといふ認識が、砂漠の中のオアシスとして、漱石に生き甲斐を感ぜしめる。同時に自分の中にも「機微の際忽然として惡念の心頭に浮びし事」が屢あるといふ反省が、「何人にても取るべき所あり又貶すべき所あり」従つて「既に寸善を容るゝの量あらば又分惡を包むの度なかるべからず」と考へしめ、竟に漱石をして漱石の所謂「慈憐主義」へ傾かしめるのである。然もこの「愛氣」の中に、「眼醫者」で會つた「銀杏返しにたけながをかけ」た女に對する漱石の戀愛も亦籠められてゐるとしても、それは決して放恣な想像であるとは言はれ得ないであらう。

三　大學時代

明治二十三年(一八九〇)九月、漱石は大學に這入つた。漱石二十四の年である。然も漱石は大學に這入るとともに、文部省の貸費生になつた。談話筆記『私の經過した學生時代』の中で漱石は、豫科三年の時に一年計り江東義塾に教鞭をとつた事を言ひ、後にトラホームに罹つて家から通學する事になつたが、「それから、後の學資はいふまでもなく、再び家から仰いでゐたが、大學へ進むやうになつてからは、特に文部省から貸費を受けることとなり、一方では又東京專門學校の講師を勤めつゝ、それ程、苦しみもなく大學を卒へた」と言つてゐる。當時文部省の貸費がいくらであつたか精確には分からないが、然しそれは恐らく、明治十九年の大學令によつて作製された諸規則の中の、年額八拾五圓とあるのと、同額だつたのだらうと思ふ。現に『漱石の思ひ出』には、漱石が熊本に行つてからも暫くの間、月七圓づつ、貸費返濟に宛ててゐたと書いてある。——月七圓では、月謝の貳圓五拾錢を引き去れば、四圓五拾錢しか殘らない。二年目からは特待

生になつて月謝が入らないとしても、七圓では本一つ碌に買へなかつたのかも知れない。もつとも漱石は江東義塾では五圓もらつて、別に不足もなく暮してゐた。それから四五年は立つてゐても、それで漱石は、大して不自由は感じなかつたのかとも思はれる。殊に漱石は自宅から通學してゐた。七圓は授業料と書籍費と小遣とに宛ててよかつた筈である。

東京專門學校は、言ふまでもなく、今日の早稻田大學の前身である。此所には漱石は明治二十五年一八九二）の五月、即ち漱石の大學三年の時から出だしたものらしい。綱島梁川の日記（『梁川全集』第八巻）、明治二十五年五月四日の條に、「この日初めて余等クラスのビーカーの講師は文科大學の三年生と云ふなる夏目某と云へる人なるよしを聞きぬ。」とあり、六日には、「午後始めて新聘講師夏目氏のビーカーの講義を聞く。」とある。ただ此所で漱石が、どの位報酬をもらつてゐたかは分からない。

明治二十五年（一八九二）十二月十五日漱石は子規に宛てて、「偖運動一件御書狀にて始めて承知仕り少しく驚き申候然し學校よりは未だ何等の沙汰も無之辭職勸告書抔も未だ到着不仕御報に接する迄は頓とそんな處に御氣がつかれず平氣の平左に御座候過日學校使用のランプの蓋に「文集はサツパリ分らず」と書たるものあれど是は例の惡口かゝる事を氣にしては一日も教師は務まらぬ譯と打捨をき候其後講義の切れ目にて時間の鳴らぬ前無斷に室外に飛び出候生徒ありし故次

の時間に大に譴責致候是は前の金曜の事其外別段異狀も無之今日迄打過居候元來小生受持時間は二時間のところ生徒の望みにて三時間と致し且つ先日前學年受持の生徒來り同級へも出席致し呉ずやと賴み候位故左程評判の惡しき方ではないと自惚仕居候處豈計らんやの譯で大兄の御手紙にて運動一件小生の耳朶に觸れ申候勿論小生は教方下手の方なる上過半の生徒は力に餘る書物を捏ね返す次第なれば不滿足の生徒は澤山あらんと其邊は疾くより承知なれど是は一方より見ればあながち小生の咎にもあらず學校の制度なれば是非なしと勘辨仕居候去るにても小生の爲めに此間運動抔致す程とは實に思ひも寄らずと存居候段隨分御目出度かりし無論生徒が生徒なれば辭職勸告を受てもあながち小生の名譽に關するとは思はねど學校の委托を受けながら生徒を滿足せしめ能はずと有ては責任の上又良心の上より云ふも心よからずと存候間此際斷然と出講を斷はる決心に御座候」と書き、更に「御報知の段ありがたく奉謝候坪内へは郵便にて委細申し遣はすべく候其文言中には證人として君の名を借る親友の一言なれば固より確實と見認むると云へば突然辭職しても輕卒の誹りを免がるゝ譯なればなり願くば證人として名前丈をかし給へ但し出處は命ぜず召還の氣使ひも無用なり」と書き添へてゐる。是で見ると、當時の東京專門學校の學生の間に、漱石に辭職勸告を申し出ようとする運動があるといふ噂を、子規が何所かから聞き込んで、それを漱石に知らせたものらしい。子規がそれを何所から聞き込んだかは、元より分からない。當時

この學校には、後に自殺した、子規の從弟の藤野古白が、籍を置いてゐた筈である。從つてその「出處」は或はこの古白あたりではなかつたのかとも思はれる。然しそれも分からない。その上この噂が事實だつたのかどうか、漱石が辭職を申し出たかどうか、辭職を申し出たとして、坪內逍遙がそれをどう處理したか、さういふ事も一切分からない。

ただ漱石が當時「左程評判の惡しき方ではな」かつた事は、梁川の五月六日の日記に、「午後始めて新講師夏目氏のビーカーの講義を聞く。辯舌明快ならず、講釋の仕方未だ巧みならずと雖も、循々として穩和に綿密に述べらるゝ處やゝ大西氏に似たるところありて、未だ麻姑搔痒の快を與へざれども、又その不明の雲霧を散ずるの感あらしむ。更に角可なりの講師と評すべし。」とあり、五月十一日の日記に、「……只だ夏目氏「ビーカー」の講義に一時間出校せるのみ。氏は前に言へる如く這般大西先生が特に專門學校に吹薦せられたる大學生徒にして大學內にても餘程好評あるよしなるが、果せるかな「ビーカー」の講義は勿論、余が該講義の了りし後にてラボツク氏の著書中不審の點(而かも田原氏も曖昧に答へ大隈氏は解すること能はざりし不審)を尋ねしに別に躊躇もせず、いと平然として意を解されしは誠に感服の至りなりき。」とあり、その後梁川が屢漱石をたづねて行つてゐるのに就いて考へて見ても、明白である。假令漱石が辭職を申し出したとしても、坪內逍遙は是を採り上げなかつたに違ひないし、「前學年受持の生徒」も漱石を支

持したに違ひない。現に漱石は、明治二十八年(一八九五)四月松山に赴任するまで、ずつと續けて此所にゐるのである。漱石が松山に赴任する時、後任として藤代素人を推薦し、素人は厭厭そのあとを引き受けたが、「散々の不成績で一學期の終りにソコ〱に逃げ出して仕舞つた」といふ話は、素人自身の『夏目君の片鱗』に書かれてゐる。——もつとも此所で漱石が、先任教師から引繼ぎの、ミルトンの『アレオパジチカ』を教へさせられて、どうも解らない、解るやうで解らないから大變困つたといふ話は、談話筆記『僕の昔』にも『ミルトン雜話』にも出てゐる。

明治二十四年(一八九一)二月發行の『日本大家論集』によると、當時文科大學の學長は外山正一で、社會學を外山正一、英語・英文學をジェームス・メーン・デクソン、支那法制沿革・支那歷史・東洋哲學・漢文を島田重禮、日本歷史・日本法制沿革・國文を小中村清矩、日本歷史・支那歷史・東洋哲學及法制を內藤恥叟、國語・國文を物集高見、羅甸語を神田乃武、哲學・倫理學・審美學・哲學演習をルドヰッヒ・ブッセ、地文學・史學・地理學をルドヰッヒ・リース、日本歷史・日本法制沿革・支那歷史を重野安繹、日本歷史・支那歷史及法制・漢文を星野恒・田中稻城、心理學・精神物理學を元良勇次郎、比較宗教及東洋哲學・哲學を井上哲次郎、獨逸語・獨逸文學・比較博言學をカール・フローレンツ、教育學を野尻精一、倫理學を中島力造、東洋哲學を村上專精が受持つてゐたのださうである。漱石がこの中の誰と誰との講義を聽いたものか、はつきりし

た事は分からない。然し漱石がフローレンツに就いてシラーの『ギルヘルム・テル』やゲーテの『ヘルマン・ウント・ドロテヤ』を讀んだ事は分かつてゐるし、教育學の論文と東洋哲學の論文とが今日殘つてゐるから、それらの講義を聽いた事も明らかである。明治二十九年(一八九六)正月に漱石は「永き日や韋陀を講ずる博士あり」といふ句を作り、下に「井の哲の事」と注して、子規の所に送り、子規は是に丸をつけた上、自分の『承露盤』に登錄してゐる。恐らく二人とも、この講義を聽いたのだらう。その外漱石は、ブッセの哲學の講義にも出てゐたらしいし、リースの歷史の講義にも出てゐたらしい。小中村清矩の講義や物集高見の講義にも、或は出席してゐたかも知れないと、想像される節がなくもない。ディクソンの講義や神田乃武の講義に出てゐたのは、英文學專攻の學生として、當然の事である。元良勇次郎の心理學も、恐らく聽いたらうと思ふ。ラファエル・フォン・ケーベルは明治二十六年六月に大學に來てゐる。從つてケーベルの講義を漱石は、學生としては聽かなかつた筈である。

『夏目君の片鱗』の中で、藤代素人は、「君が英文科に入學したのは明治二十三年であつた。帝國大學に英文學科を設けられてから、第一期の學生は我々と同年の立花君であつた。其翌年には志望者がなくて、一年置いて君が來られた。今度英文科の新入者は大分英語に堪能で、○○先生とは英語でばかり話してゐる相だと云ふ評判であつた。其評判を裏書すると思ふ事實がある。そ

れは其頃歴史の先生でリースと云ふ獨逸人があつた。此先生の英語には大抵の學生が參つて仕舞つたので、一同分り惡い下手な英語と極めたのであるが、夏目君はリースの英語は獨逸人としては餘程宜い方だと云つた。君から此話を聞く前に僕は或る獨逸人にリースの英語は分り惡くて困ると訴へたら、そんな筈はない、あの人は日本へ來る前二度も英國へ研究に行つてゐるから、英語は確かだと言はれた事がある。それでも半信半疑で居たが、夏目君の話を聞いてから、すると矢張り我々の耳が至らないのだと悟つた。」と言つてゐる。此所から我我は、大學生としての漱石が、その專攻の學問で、いかに儕輩から推重されてゐたかを、想像する事が出來る。然しそれは、單に儕輩のみではなかつたのである。漱石の第一高等中學時代の歴史と英語の教師であつたマードックは、ある時漱石と山川信次郎とを相手に、特に漱石を相手に、歴史の事で、二時間ぶつ通しに議論した事があつたといふが(坂牧善辰)、そのマードックが當時、漱石の高等中學本科二年時代の英文『十六世紀の英國と日本』を、外の生徒の同題の英文とともに、雜誌『みゅーぜあむ』に掲載し、外の生徒の文章とともに、漱石の文章を批評した事がある。それを例へば子規の文章の批評と比較して見ると、マードックがいかに漱石を、子規などとは段違ひに愛し且つ尊敬してゐたかが分かる。後に漱石が博士を辭退した時、高等中學で分れたぎりの無音を破つて、是は君が道義的な脊骨（モラル・バックボーン）を持つてゐる證據であると言つて、漱石のその擧を稱揚した手紙を寄越し

たのも、またこのマードックであつた。それのみではない。漱石は明治二十四年(一八九一)十二月八日、大學二年の十二月に、恐らくディクソンから頼まれて『方丈記』を英譯し、その初めに實に要領を得た解說を書いた。それにディクソンは "excellent performance" といふ讃辭を呈したのみならず、是を基礎として "Chōmei and Wordsworth. A Literary Parallel" といふ題で、明治二十五年(一八九二)二月十日の『日本亞細亞協會』の例會で講演を試み、この譯文にいくらか手を入れたものを朗讀し、後この譯文は "A Description of My Hut" と改題されて、ディクソンの名前で、明治二十六年(一八九三)の『日本亞細亞協會會報』に、講演とともに掲載されたが、その初めにディクソンは、この翻譯の原稿・解說並に翻譯の細部の說明に關しては、文科大學英文科學生夏目金之助君の、價値ある助力に俟つ所甚大であつたと書いてゐる。

然し漱石が大學で優秀の成績を示したのは、單に英語が達者に話せ、また英語が達者に讀み書き出來るといふ點にのみあつたのではなかつた。それは今日まで保存されてゐる、明治二十五年(一八九二)六月と明治二十五年十二月とに書かれた、漱石の東洋哲學の論文『老子の哲學』と教育學の論文『中學改良策』とが、最も雄辯に證明する。漱石は、大正三年(一九一四)一月十三日畔柳都太郞に宛てて、「僕は自分で文藝に携はるので文藝心理を純科學的には見られない。又見ても餘所々々しくてとてもそんなものに耳を傾ける氣がしない。僕のはいつでも自分の心理現象の

解剖であります。僕にはそれが一番力強い説明です。若しそこに不完全なものがあればそれは心理現象そのものゝ複雑から來るので方法のわるい點からくるとは考へられません」と書いてゐるが、單に文藝心理の問題のみに止まらず、すべての問題を一度自分の心上に投射した上で、自分自身の問題として、自分自身の體驗によつて解釋した事でなければ、案に他人に示す事を潔しとしない漱石の特徴が、既に此所にも現はれ、是らの論文を直截で深切で、且つ說得力を持つものにしてゐるのである。

明治二十五年(一八九二)七月漱石は、藤代禎輔、立花銑三郎、松本文三郎、大島義脩などとともに選まれて、『哲學雜誌』の委員となつた。是は是までの『哲學會雜誌』の內容を改めて、「少し世間向の材料を加へようといふ方針になつた」爲に、純文學の方面からも委員を選んだものかと思はれる。然も漱石はその前既に明治二十五年五月の『哲學會雜誌』の雜報欄に、催眠術に關するアーネスト・ハートの記述を飜譯して、語彙の豐富と、その豐富な語彙の自在な驅使とに、人人の注目を牽いてゐるのである。委員に選まれた後、明治二十五年十月、漱石は更にその『哲學雜誌』に、『文壇に於ける平等主義の代表者「ウオルト・ホイツトマン」Walt Whitmann の詩について』を書いた。是は特に文獻の徵すべきものはないが、然し恐らく一層人人の注目を牽いたものだらうと思ふ。

漱石は子供の時分から自由を愛した。養父母から、父さんが母さんがと、親切と恩とを押しつけられる事に窒息しさうに感じたのも、一つは漱石に、自由を愛する本能が動いてゐたからである。同時に漱石は平等を欲した。漱石の平等とは、他人の肩の上に足を揚げるのではなく、自分は決してさういふ事をしないから、他人からもさういふ事をされたくないといふのである。漱石の箇人主義は、一つは漱石が平等を欲する所から來てゐる。然も純粹で、一本氣で、正直で、然もその爲め周圍の者から「變物」扱ひを受けてゐた漱石が、赤裸裸の人間を赤裸裸のままで、自由に平等に愛す事を出發點とするホィットマンの詩に響きを合はせるのは、當然の事だつたと言つて可い。それだけに此所では漱石は、その方面の自分の心持をホィットマンの詩の中に投げ込んで、ホィットマンの詩の世界の精髓を、掌を指す如くに、我我の眼の前に展開する。殊に漱石がホィットマンを、自主獨立の精神を尊重する詩人であると言ひ、ホィットマンが、時間に於いて平等に、空間に於いて平等に、從つて古代といへども偏重せず、現代といへども偏斥せず、文明國といへども叩頭する事なく、野蠻國といへども冷遇する事なく、一箇の人間を一箇の人間として尊重し、是を結ぶに“manly love of comrade”を以つてし、この純潔で、私のない「男づくの友愛」によつて結ばれる社會を理想の社會として、人人はそれに向かつて邁進すべきであると說くと言つてゐる所なぞ、漱石は恐らく當時の自分が、言ひたくて言へなかつた事を、ホィッ

トマンが代辯してくれたやうな氣がしたのだらうと思はれる。

「此大世界何とて不淨の有らざるべき只此不淨中圓滿の種子を含むとは「ホイットマン」が"Song of the Universal"中に述べたる言なり此一言にても其の一種の進化論を抱いて科學的の世界觀を有せるを證するに足れど若し其の"With Antecedents"を讀むときは其主義一層明瞭なりとす其詩に曰く我が今日あるは皆祖先の賜過去の報なり埃及印度希臘羅馬皆吾人をして此域に達せしめたる者なり「ケルト」「スカンヂネウビアン」「サクソン」亞拉比亞人皆今日の境界を補益したる者なり航海、法律、工業、戰爭、詩人、卜者、奴隸の賣買、十字軍の遠征、僧侶、舊大陸、列國の興廢、宗教の盛衰皆預かつて力あらざるなし……余は百般の思想を有し百般の事物を信ず唯物論も眞ならん唯心論も僞と云はじ……過去は斯の如くならざる可からざるが故に斯の如し現在も然らざる可からざる理由あつて然り……過去は廣大なり未來も亦廣大ならん奇なるかな此廣大なる過去と未來とは現世一代に蹙まる故に我等何處の果に生息するとも其生息する所卽ち萬民の中心なり百代の中心なりと彼の「サラミス」の巖頭に箕坐して"For Greece a blush—for Greece a tear"と叫び世の味氣なきを嘆じて"Out of the day and night／A joy has taken flight"と悲しんだる詩人等浮世を觀ずること「ホイットマン」の如き能はず四民同權の主義實行し難きを憤り一は白眼嫉視の旋毛曲りとなり有らゆる厭世の分子を一身に引き受け「ドン

ジュアン」を公にして天下を愚弄し餘憤洩らす所なく遂に南歐に客死し一は"Prometheus Unbound"を作つて望を後世に屬したりと雖ども彼れ卅年の生涯を三分して一分は讀書世界に沒し一分は空想世界に住し殘る一分を擧げては醜惡不埒の世界に委ね不幸薄命を悲しんで客土に溺れぬ此二人說く所の主義「ホイツトマン」を去ること遠からず而るに其世界觀何とて斯の如く異なるや居氣を移すが爲か養體を移すが爲か抑も天稟の氣質に强弱あるが爲か時の先後人心に感ずること此の如く甚しきか余は只「バイロン」の厭世主義を悲しんで「ホイツトマン」の樂天敎を壯とするのみ又其の「ヘーゲル」を讀んで／Roaming in thought over the Universe, I saw the little that is Good steadily hastening towards immortality,／And the vast all that is call'd Evil I saw hastening to merge itself and become lost and dead."と咏じ出せるを嘉みする者なり」の一節の如きに至つては、漱石の厭世主義と「慈憐主義」とがホイツトマンの力强い世界觀の影響の下に相當の變形を受けて、生きる事の賴もしさを、特に漱石に痛感せしめたのではないかとさへも思はれるふしがあるのである。――元來漱石は、自分の生活と重大な、また直接な關係のある問題でないと、換言すれば自分に最も關心の深い問題でないと、それを採り上げて書く事がなかつた。書いても書かなくても可いやうな事は、決して書かないのである。この事は既にこの時分からはつきり漱石の書くものの特色をなしてゐるやうに見える。バイロン

に同情があり、シェリーが最屓でも、ただそれだけでは漱石は、それに就いて何か書く氣にはならなかつたに違ひないのである。

かうして漱石は、英語を自由に話し、英語を自由に讀み且つ書き、西洋の文化の堆積の中から、自分自身の世界を豐富にするものを、しつかり吸收しつつ、大學の課程を正當に征服して行つた。同時に漱石は一面子規との交際を深める事によつて、自分の藝術的な世界を開發する事を怠らなかつた。漱石が子規とともに、京都や堺に遊び、岡山に行き、次いで松山までも出かけ、この時分としては大旅行を試みたのも、この大學時代、明治二十五年(一八九二)の夏休みの事である。

後年の漱石は、どつちかと言へば、出不精であつた。然し漱石は旅行が嫌ひなのではなかつた。漱石の持病が、旅行をすれば必ず起るといふやうな事になつてしまつたので、後年の漱石は、旅に出たくても、出る事が出來なかつたのである。然し漱石は若い時分には、よく旅行してゐる。例へば漱石は明治二十年(一八八七)の夏には、中村是公などと一緒に、富士登山をしてゐる。明治二十二年(一八八九)の夏には、兄の和三郎直矩とともに、興津に遊び、そのあと學友の四五とともに、房總の地をあるいてゐる。明治二十三年(一八九〇)の夏には、箱根に滯在する事二十日に及んだ。經濟的に決して豐かではなく、從つて行きたい所へすぐ行ける身分ではなかつたが、それでも漱石は、毎年のやうに、夏はかうして、東京を離れてあるいてゐるのである。

明治二十五年の夏の旅行は、岡山へ行くのが目的であつた。岡山には次兄の妻君の里があつた。その妻君は次兄の歿後離縁になつて岡山の里、卽ち内山下百三十八番邸片岡機の許に歸つたが、その妻君の實弟龜太郎は、次兄の跡を繼いで、臼井姓を名のつてゐる。漱石が岡山に行つた理由の何であつたかは分からない。然し恐らく何かさういふ方面で、家の用務を帶びて行つたものに違ひない。夏目家と片岡家との間に、漱石の次兄の死んだあとでもなほ交渉が續いてゐた事は、明治二十三年（一八九〇）の内國勸業博覽會の際に、臼井龜太郎が光藤龜吉兄弟と一緒に上京して、漱石の喜久井町のうちに、半月計り滯在してゐた（光藤龜吉）といふのでも、分かる。漱石は岡山に來て、片岡機の許に滯在した。片岡機は戸長役場に勤めてゐたといふが、其所に滯在してゐるうち漱石は、「前代未聞」と言はれる、明治二十五年の岡山の大洪水に遭遇する。

明治二十五年七月十九日漱石が、松山にゐる子規に宛てた手紙によると、片岡の家は「旭川に臨み前に操山を控へ東南に京橋を望み夜に入れば河原の掛茶屋無數の紅燈を點じ納涼の小舟三々五々橋下を往來し燭光清流に徹して宛然たる小不夜城」を呈したといふ。然しこの形勝の地も、その旭川が氾濫して、ひとたまりもなく面目を潰されてしまつた。八月四日子規に宛てた手紙の中で、漱石は「朶雲拜誦仕候御申越の如く當地の水害は前代未聞の由にて此前代未聞の洪水を東京より見物に來たと思へば大に愉快たる事ながら退いて勘考すれば居席を安んぜず食飽に至らず

随分酸鼻の極に御座候……／小生去る二十三日以後の景況御報申し上んと存居候へども烏に化して跡をかくすとありし故旅行中にもやと案じ別段書狀もさし上げず居候先便にも申し上候通り當家は旭水に臨む場所にて水害中々烈しく床上五尺程に及び二十三日夜は近傍へ立退終夜眠らずに明し二十五日より當地の金滿家にて光藤と云ふ人の離れ座敷に迎へ取られ候處同家にても老祖母大患にて厄介に相成も氣の毒故八日目に歸宅仕候歸寓して觀れば床は落ちて居る疊は濡れて居る壁は振い落してあるいやはや目も當てられぬ次第四斗樽の上へ三疊の疊を並べ之を客間兼寐處となし戶棚の浮き出したるを次の間の中央に据へ其前後左右に腰掛と破れ机を併べ是を食堂となす屋中を步行する事峽中を行くが如し一步を誤てば椽の下に落ついやはや丸で古寺か妖怪屋敷と云ふも猶形容し難かり夫でも五日が一週間となるに從ひ此野蠻の境遇になれて左のみ苦とも思はず可笑しき者なり實は一時避難の爲め君の所へでも罷り出んと存居候ひしが旅行中で留守にでも遇つたら困ると思ひ今迄差し控へ居候斯る場合に當方に厄介に相成候も氣の毒故先日より歸京せんと致候處今少し落付く迄是非逗留の上緩々歸宅せよと强て抑留せられ候へども此方にては先方へ氣の毒先方では此方へ氣の毒氣の毒と氣の毒のはち合せ發矢面目玉をつぶすと云ふ譯御憫笑可被下候／夫故閑谷黌へも猶參らず然し近日當主人の案內にて金比羅へ參る都合故其節一寸都合よくば御立寄可申歸京は九月上旬と御約束申上置候へども右の次第故少々繰り上本月中旬か又は下旬

頃に致し度と存候……來る六七日頃太田達人より爲替送付致し呉候筈故夫より後なら何時でも歸京差支へなし／實に今回の水は驚いた樣な面白い樣な怖しい樣な苦しい樣な種々な原素を含み岡山の大洪水又平凸凹一生の大波瀾と云ふべし然し餘波が長くて今に乞食同樣の生活を爲すは少し閉口石關の堤防をせき留めるや否や小生肛門の土堤が破れて黃水氾濫には恐れ入る其に床下は一面の泥で其上に寐る事故餘程身體には害があるならんと愚考仕る許りで目下の處では當分此境界を免がるゝ事能はざらんとあきらめ居候」と、共にその慘狀を描き出してゐる。――此所に「平凸凹」とあるのは、たひらのでこぼこと訓んで、漱石自身の異名である。漱石は、自分の顏に痘痕がある所から、當時かういふ異名を用ひた。「光藤と云ふ人」とあるのは、內國勸業博覽會の時、臼井龜太郎と一緒に上京して、漱石の家にとまつた光藤龜吉の事である。

漱石の手紙に「近日當主人の案內にて金比羅へ參る都合故其節一寸都合よくば御立寄可申」と書いてある。然しかういふ騷ぎの中で、それが實行されたかどうかは、分からない。然し漱石が松山に行つた事は、高濱虛子の當時の日記『杌迺㕦』の中に、八月二十六日の朝、漱石・子規・その他二人が、東京に向かつて松山を出發したと書いてあつて、確實である。同じ虛子は後に『漱石氏と私』の中で、「私が漱石氏に就いての一番舊い記憶はその大學の帽子を被つてゐる姿である。時は明治二十四五年の頃で、場所は松山の中の川に沿うた古い家の一室である。それは或

る年の春休みか夏休みかに子規居士が歸省してゐた時のことで、その席上には和服姿の居士と大學の制服の膝をキチンと折つて坐つた若い人と、居士の母堂と私とがあつた。母堂の手によつて、松山鮓とよばれてゐるところの五目鮓が拵へられて其大學生と居士と私との三人はそれを食ひつつあつた。他の二人の目から見たら其頃まだ中學生であつた私はほんの子供であつたであらう。又十七八の私の目から見た二人の大學生は遥かに大人びた文學者としてながめられた。……その席上ではどんな話があつたか、全く私の記憶には殘つて居らぬ。たゞ何事も放膽的であるやうに見えた子規居士と反對に、極めてつゝましやかに紳士的な態度をとつてゐた漱石氏の模様が昨日の出來事の如くはつきりと眼に殘つてゐる。漱石氏は洋服の膝を正しく折つて靜座して、松山鮓の皿を取上げて一粒もこぼさぬ樣に行儀正しくそれを食べるのであつた。さうして子規居士はと見ると、和服姿にあぐらをかいてぞんざいな樣子で箸をとるのであつた。それから兩君はどういふやうにして、どういふ風に別れたか、それも全く記憶に無い。たゞ其時私は一本の傘を居士の家に忘れて歸つて來たことと、其次ぎ居士を訪問してみると赤や綠や黃や靑やの詩箋に二十句ばかりの俳句が記されてあつた、それを居士が私に見せて、「これが此間來た夏目の俳句ぢや。」と言つたことを覺えて居る。どんな句があつたか記憶しないが何でも一番最初に書いてあつた句が鶯の句であつたことだけは記憶して居る。」と言つてゐる。

この虛子の記憶に誤がないならば、漱石は恐らく宿屋か何かに泊つて、子規の家には泊らなかつた筈である。もしさうだとすれば、漱石の松山滯在はそんなに長くなかつたに違ひない。然し漱石が、子規たちと一緒に、八月二十六日に松山を立つたといふ事が分かるだけで、あとの事はまるで分からない。その往きだか歸りだかに、漱石が子規と一緒に京都をあるいたといふ事は、明治四十年(一九〇七)の『京に着ける夕』に出てゐる。明治四十四年(一九一一)八月漱石が堺で講演した際に、私は前に一度此所に來た事がありますと言つてゐるのも、この時の事だらうと思ふ。更に大正二年(一九一三)の『行人』の中で、一郎が昔自分が大阪にとまつた時の事を話す條が取り扱はれてゐるが、是も恐らくこの時の經驗だつたらう。

子規はこの年の七月、大學の二年から三年になる學年試驗に落第し、漱石がとめるのも聽かず、大學をやめてしまつた。さうして、その年の六月二十六日から『獺祭書屋俳話』を書いてゐたのを緣に、『日本』新聞に這入る事に決心し、十一月には鄉里から母と妹とを連れて來て、上根岸に一戸を構へた。然し暫くの間はまだ大學と緣を切つてしまはなかつたものか何か、明治二十六年(一八九三)二月二十日漱石は子規に宛てて、「過日文學談話會へ出席仕候處大兄御病氣の趣にて御來駕無之右は御風邪にても有之候や又は例の御持病にや心元なく存候間御容體一寸相伺ひ申上候隨分御養生專一と奉存候」と書いてゐる。——もつともこの「文學談話會」といふのは、恐らく

漱石が其所で『英國詩人の天地山川に對する觀念』を講演した、明治二十六年一月の文學談話會を指すものに違ひない。もしさうだとすれば、假令子規が當時大學と縁を切つてゐたとしても、問題が問題だから、子規にも是非聽いてもらひたいといふので、漱石の方から子規を招待したものかも知れない。

三　『英國詩人の天地山川に對する觀念』

漱石は『英國詩人の天地山川に對する觀念』を一月の文學談話會で講演した後、明治二十六年（一八九三）三月から六月に亙つて、是を自分が委員をしてゐる『哲學雜誌』に連載した。是が當時の人人を瞠目せしめた事は、旣に大塚保治・藤代禎輔・戸川秋骨・笹川臨風などの、漱石の思ひ出の中で語られてゐる。狩野亨吉によれば、當時の文科大學長外山正一も、是を讀んでひどく感服したのださうである。然もこの論文の重きをなす根本の所以は、漱石がこの問題を、前のホイットマン論の場合と同じやうに、自分自身の問題として、自分自身の生活を傾け悉して、解釋しようとした點にあるのだと思ふ。

漱石が子供のうちから自然を愛してゐた事は、『草枕』第十二の中に、「小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く枝振を作つて、筆架をこしらへた事がある。それへ二錢五厘の水筆を立てかけて、白い穗が花と葉の間から、隱見するのを机へ載せて樂んだ。其日は木瓜の筆

架ばかり氣にして寐た。あくる日、眼が覺めるや否や、飛び起きて、机の前へ行つて見ると、花は萎へ葉は枯れて、白い穗丈が元の如く光つて居る。あんなに奇麗なものが、どうして、かう一晩のうちに、枯れるだらうと、その時は不審の念に堪へなかつた。今思ふと其時分の方が餘程出世間的である。」と書いてゐるのによつて、十分想像する事が出來る。『思ひ出す事など』第二十四の中には、漱石が十七八の時分、「靑くて丸い山を向ふに控えた、又的皪と春に照る梅を庭に植へた、又柴門の眞前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て——無論畫絹の上に——何うか生涯に一遍で好いから斯んな所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語」つて、その友人から「君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるかと左も氣の毒さうに」言はれたといふ話が出てゐる。明治二十二年(一八八九)の『木屑錄』で漱石は、漱石が如何に自然を愛してゐるか、またその愛する自然を如何に美しく把握してゐるかを示すとともに、巻後の「白眼甘期與世疎。狂愚亦懶買嘉譽。爲譏時輩背時勢。欲罵古人讀古書。才似老駘駑且駿。識如秋蛻薄兼虛。唯贏一片烟霞癖。品水評山臥草廬。」の詩によつて、自分は世と疎く、時勢に背いて生きてはゐるが、自分には生れながらの「烟霞癖」がある、自分は草廬に臥して水を品し山を評して暮し、それを別に寂しい事とも思はない、と宣言してゐる。——勿論此所には「與世疎」を氣にし、「爲譏時輩背時勢」事を寂しく感じてゐる事が、言外に溢れてゐるには相違ない。『行人』の

一郎は、弟に向つて、「二郎己は昔から自然が好きだが、詰り人間と合はないので、已を得ず自然の方に心を移す譯になるんだらうかな」と訊いてゐる。然しそれとともに漱石に、自然に對する熱烈な愛があり、それが、人間を思ひのままに愛し得ず、人間から思ひのままに愛される事のない漱石の寂しさを、ともかく慰めて來た事も、爭はれない。さういふ漱石の自然への愛が、漱石にこの題目を選み、英國文學史上に於いて、自然主義の詩人と稱せられる人人の作品から、それらの人人の自然に對する態度を研究し、それによつて自分の感じたもの考へたものを、或は否定し或は確肯し、或は訂正し或は補強し、或は明瞭にし或は參考にしようとさせるのである。

是は勿論英文學の研究であつたには違ひない。然し是は英文學の爲の英文學の研究ではなくて、自分自身の爲の英文學の研究であつた。その點で是は、一年前のホィットマン論と共通する。ただホィットマンでは漱石は、寧ろホィットマン一人の詩に集中して、その詩の根本をなすものを闡明しようとする。此所では漱石は、英國の文學史上に於ける一つのムーヴメントとしての自然主義の、發生と發展とを眼中に置いて、そのムーヴメントに携はつてゐる人人の特徴と相互關係と發展の跡とを眺めようとする。是は一人一人の詩人のあらゆる作品に眼を通した上で、そのグループに屬する代表的な詩人達全體の上に見渡しを持つとともに、そのグループの文學史上に於ける位置を知る必要上、その前にも又その後にも見透しをつけなければならない意味で、決して

一朝一夕に成就し得る仕事ではなかつた。のみならず漱石は、自分の所論の正確を期する爲に、本國の專門家の說もそれぞれ參照する事を懈つてゐないやうなのである。

漱石は此所でトムソンから始めた。然しトムソンから初める爲には、トムソンの屬した時代の巧緻派の人人の、自然に對する態度に通じて置く必要がある。それで漱石は、巧緻派の驍將として有名なポープの、自然に對する態度に觸れ、またポープの儕輩としてのアディソンの、自然に對する態度に觸れ、それらとの對照に於いて、トムソンの自然に對する態度を說く。然し漱石から言へば、トムソンは「かく自然を愛したりと雖ども、申さば死したる現象の往來復剝する樣を外面より寫し來つて、毫も其內部の活動を會せず。只雪が降る。風が吹く。花が咲く。田舍は面白し。釣りも自由なれば、獵も勝手に出來る。去るが故に、……grant, ye powers, that it may be my lot,/To live in place from noisy towns remote といふ」に過ぎないのだから、つまらない。「高尙なる詩想は、中々此位の事では濟まず。漸々自然主義が發達するに從ひ、景物界は活動力なり。天地間には鬱勃たる生氣あり。抔感ずるに至る」やうになるのでなければ、大して意味をなさない。――此所に漱石がこの論文をかく大眼目があり、また此所に漱石が、自分自身の問題として、この問題に特に興味を持つ所以があつたやうに見える。子規は曾て漱石の『木屑錄』の一節を評して、是は自然のパーソニフィケーションである、かういふパーソニフィケー

ションは漢詩には曾て見ない所で、是は恐らく漱石が西洋の詩から不知不識の間に得來つたものであるに相違ないと言つたが、それが漢詩に曾てないものであるかどうかは別問題とするとしても、少くとも漱石が自然を受けとる受けとり方は、自然をパーソンとして受けとる受けとり方、「景物界は活動力なり。天地間には鬱勃たる生氣あり」とする受けとり方、一口に言へば、自然を人間と同じやうな、生きたものとして受けとる受けとり方であつた。

漱石はかうしてトムソンからゴールドスミスに移り、クーパーに移り、バーンスに移り、ウォーヅウォースに移つて、一篇を閉ぢる。さうして、漱石に從へば、人人の自然に對する態度は、この順序に於いて、自然に深まつて行つてゐるのである。それだけに漱石が、最も力を入れて論じ、從つてその所論に精彩が加はるのは、最後の二人、バーンス論とウォーヅウォース論とであつた。――漱石は先づバーンスの自然に對する感情の種種相を解剖し例證した上で、「先づ理窟一遍に考ふれば、人間が向ふへ廻はして、談論を試むべき者は、人間以外にあるべき筈なし。獸は走り禽は飛ぶとも、固より之を相手にして語るに足らず。況んや花卉草木をや。又況んや泉石煙霞をや。今此非情の物を捉へて、君と云ひ、僕といふ。是既に之を待つに非情を以てせざるなり。之を人に擬したるなり。之に一團の靈氣を付與したる也。自然主義の極端なり。元來俗眼を以て天地を見渡すときは、自然程冷淡なる者はあらず。成程人間には、親殺しもあり。大泥棒も

あり。一方より觀れば、極めて險呑なるに相違なけれど、其代りには、善人もあり慈父もあり。孝子もあり。刎頸の友、霜操の妻もあるべし、加之何人にても全く德義心なきものは、あらざるべし。之に反して自然は寸毫も情を解せず、如何程此方より愛情を與ふるも、彼より之に酬ゆる抔といふ事は一切なし。故に俗語にも、無情を形容して木石の如しといへり。夫れ愛は相對なり。一脈の靈氣、甲を去つて乙に入り、乙に入るもの又返つて甲に入る。我起動者たれば、彼は反動者なり。與ふる處あれば、必ず受くる處あり。動と反動と互に應じて、戀愛の念始めて深し。人は此動と反動とを解する者なり。故に俗物は只人を愛するを知るのみ。自然は動を受くる事を知る。去れど之を反す事を知らず。之を愛するは石を水に投じて手應へなきが如し。故に世人は自然を樂しむ能はず。今「バーンス」此手應なきの自然を愛し、寤寐忘るゝ能はざるは何の故ぞ。是自然を以て人間に擬したればなり。人間に擬したるにあらず。人間としか思はれざればなり。草木、泉石、花卉、翎毛、彼が瞳子に入る者は、一として喜怒哀樂の情を具せざるはあらず。既に此情を具ふる以上は、我之を愛すれば、彼亦我を愛せん。我彼を愍まば、彼亦我を慕はん。所謂動と反動の大則彼我の間に行はれて、而も普通の人間の如く、我を欺ひ我を傷くるの憂なし、觀じて玆に至れば、自然界は猶人間界の如し。但觀じて玆に至ると、玆に至る能はざるが詩人と常人の差なり。感情鋭どく想像深き事、「バーンス」の如くにして、始めて此境界に入るを得るな

り。」と言つてゐる。

然るにウォーヅウォースの「自然を愛するは山峙ち雲飛ぶが爲にあらず、水鳴り石響くが爲にあらずして、其内部に一種命名すべからざる高尚純潔の靈氣が、磅礴塡充して、人間自然兩者の底に潜むが爲めのみ。「バーンス」は自然界裏に活氣を認め得たりと雖も、之を貫くに"a spirit" "a force"を以てする事能はず。山は固より山なり。水は固より水なり。崢嶸たる者を以て、潺湲たる者と混同する意なく、又之を以て人間と氣を同ふすると考へざるなり。此一點が兩詩人の異なる處にて、一は感情的直覺より、一は哲理的直覺より、共に自然を活動せしめたるなり。蓋し活動法(spiritualization)は自然主義の尤も發達せるものながら前二者の間にて自ら深淺の區別なきにあらず。夫れ世に不平あつて山林に逃るゝものは、不平の消する時が山を出づるの時なり。過去の行き掛り(association)にて自然の有り難きは、行き掛りの滅したる時が有り難味のなくなるときなり。(「スコツト」の如し)第三に來るものは、自然の爲めに自然を愛す。自然の爲に自然を愛する者は、是非共之を活動せしめざるべからず。之を活動せしむるに二方あり。一は「バーンス」の如く外界の死物を個々別々に活動せしめ、一は凡百の死物と活物を貫くに無形の靈氣を以てす。後者は玄の玄なるもの、萬化と冥合し宇宙を包含して餘りあり。「ウオーヅウオース」の自然主義是なり」。「今一つ「バーンス」と「ウオーヅウオース」の異なる點を擧ぐれば、

此兩人が自然に對する、消極と積極の差なり。消極とは、胸裏不平の情、ひいて自然の悽楚なるに及び、積極とは、心中愉快の念發して天地の瑰麗なる點と結合せるを謂なり。故に「バーンス」を讀めば、跌宕沈鬱にして、悲慘の音多く、「ウオーヅウオース」を讀めば、高遠の中、自ら和氣の藹然たる者あり。是固より兩詩人性質の差に根するに相違なきも、其境遇も亦預つて大に力ありといふべし、夫れ「バーンス」は曠世の才なり。而して天下之を知らず。天下之を知つて、遇するに天才を以てする能はず。身分は百姓なり。金はなし。空しく無限の感慨を抱いて、野店村廬の間に酣醉するのみ。去れば其胸裏には、已れ世に賊せられたりといふ感情、常に往來したるが如し。かゝる感情を有して、自然を眺めなば、天地の麗しき現象は、眼中に宿らで、眸中に聚まる者は、悉く可憐の狀況のみならん。假令韶光忽來沖融の氣自ら瞳底に映ずるも、徒らに之を吾身の上に較べて、轉た不幸の念を增さしむるに過ぎず。「ウオーヅウオース」は全く之に異なり。其主義とするところは、"Plain living and high thinking"にありて、固より俗界を眼下に見降だしたれば、彼の虛榮を鬪はす輩を觀て、氣に障るの何のと云ふ事なし。加之富めるといふにあらねども、衣食に事缺く程の貧乏にてもなく、山林に逍遙して自由に自然を樂しむ位の資產を有せし故に、其外界に對する觀念も從つて和風麗日に接するが如き心地のせらるゝなり」。

當時漱石がどういふ態度で自然に對してゐたか、無論この論文を讀んだだけでは分からない。

然し漱石が『木屑錄』の終に添へた七言律詩の內容から言へば、漱石の自然に對する態度は、寧ろバーンスに近く、ウォーヅウォースに遠いと言ふ事が出來るだらう。然しそれとともに漱石の中に、ウォーヅウォースに近いものも亦動いてゐたといふ事は、ウォーヅウォースの世界を說いて、あれほど具體的であり得た事に就いて考へて見ても、明白である。ただ漱石の場合、假令漱石の中に、バーンス的なものとウォーヅウォース的なものと、兩樣の心が動いてゐたとしても、結局はバーンス的になつてしまはなければならないほど、漱石は世の中に對して、鬱勃たる不平を押へる事が出來なかつたかも知れない。然も漱石は、自分が自分のこの不平を乘り越すのでなければ、到底自分には「和風麗日」の、平和な、幸福な世界の現はれる期はないといふ事を、承知してゐるのである。その意味でウォーヅウォース的なものは、漱石によつて、切に庶幾されてはゐたが、然しまだ所有されてはゐない世界だつたと、言つて可かつたのかも知れない。「天下不大瓢不細」の世界も、外の言葉で言へば、ウォーヅウォース的な世界だつたのに外ならないのである。漱石が、米山保三郎だの太田達人だの、漱石の言葉を借りれば「大きい」人間を尊敬してゐたといふ事も亦、是と關聯がある。

漱石は『硝子戸の中』第九で、高等學校時代の太田達人の事を敍述して、「彼の性質が鷹揚である如く、彼の頭腦も私よりは遙に大きかつた。彼は常に當時の私には、考への及ばないやうな

問題を一人で考へてゐた。彼は最初から理科へ入る目的を有てゐながら、好んで哲學の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの第一原理といふ本を借りた事を未だに忘れずにゐる。／＼空の澄み切つた秋日和などには、能く二人連れ立つて、足の向く方へ勝手な話をしながら歩いて行つた。さうした場合には、往來へ塀越に差し出た樹の枝から、黄色に染まつた小さい葉が、風もないのに、はら／＼と散る景色を能く見た。それが偶然彼の眼に觸れた時、彼は「あツ悟つた」と低い聲で叫んだ事があつた。唯秋の色の空に動くのを美しいと觀ずるより外に能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或祕密の符徴として怪しい響を耳に傳へるばかりであつた。「悟りといふものは妙なものだな」と彼は其後から平生のゆつたりした調子で獨言のやうに說明した時も、私には一口の挨拶も出來なかつた。」と書いてゐる。――人間の大いさに敬服するといふ事は、いろんな事にこだわつて、自分自身を不快にし、自分自身を傷け、結局は自分自身を狀ふ、自分のこせついた性分から脫却したいと願ふ事である。さうして紛紛たる人情の世界とは別な、廣廣とした世界に生きたいと庶幾する事である。漱石は恐らくバーンスに同感しつつも、

“Plain living and high thinking” を理想とし、「俗界を眼下に見降だし」、「彼の虛榮を鬪はす輩を觀て、氣に障るの何のと云ふ事な」く、「山林に逍遙して自由に自然を樂し」み、「和風麗日のやうな世界に生きてゐたウォーヅウォースのやうな人間に、一日も早くなりたいと希つたもの

に違ひない。さうしてそれこそ漱石の所謂「風流韻事」の世界に、純粋に生き得る事だつたのである。

漱石はこの年、卽ち明治二十六年(一八九三)七月に、英文科を卒業した。さうして直ちに大學院に這入つた。漱石二十七の年である。漱石が大學院での研究題目が何であつたかは、分からない。同時に漱石が卒業論文に何を書いたかも分からない。第一この時分に卒業論文の制度が布かれてゐたかどうかも、よくは分からない。然し卒業論文はなくても、この『英國詩人の天地山川に對する觀念』は、實に立派な卒業論文であつた。殊に是が、「ウオーヅウオースは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピヤのフオリオは幾通りあるかとか、或はスコツトの書いた作物を年代順に竝べて見ろとかいふ問題ばかり」が試驗に出てゐた、當時の大學の英文學科の學生によつて書かれたのだと考へる時、この論文は一層その光輝を加へる筈であると思ふ。

三　就職

漱石が卒業してから、漱石の成績が非常によかつたので、方方に就職口があつた。その中で、學習院の口は、仲に立つた人が大丈夫だといふので、漱石はモーニングを拵らへて待つてゐると、その口をアメリカ歸りの人か何かにとられてしまひ、仕方がないから漱石は、一張羅のモーニングを著てあるいてゐたといふ話は、漱石の講演『私の個人主義』の中に出てゐる。

その後漱石には、高等學校と高等師範と兩方から、殆んど同時に口が掛つた。『私の個人主義』に、「私は高等學校へ周旋して呉れた先輩に半分承諾を與へながら、高等師範の方へも好い加減な挨拶をしてしまつたので、事が變な具合にもつれて仕舞ひました。もともと私が若いから手ぬかりやら、不行屆勝で、とう〳〵自分に祟つて來たと思へば仕方がありませんが、弱らせられた事は事實です。私は私の先輩なる高等學校の古參の教授の所へ呼びつけられて、此方へ來るやうな事を云ひながら、他にも相談をされては、仲に立つた私が困ると云つて譴責されました。私は年

の若い上に、馬鹿の肝癪持ですから、一そ雙方とも斷つてしまつたら好いだらうと考へて、其手續きを遣り始めたのです。すると或日當時の高等學校長、今では慥か京都の理科大學長をしてゐる久原さんから、一寸學校迄來てくれといふ通知があつたので、早速出掛けて見ると、其座に高等師範の校長嘉納治五郎さんと、それに私を周旋して與れた例の先輩がゐて、相談は極つた、此方に遠慮は要らないから高等師範の方へ行つたら好からうといふ忠告です。私は行掛り上否だとは云へませんから承諾の旨を答へました。が腹の中では厄介な事になつてしまつたと思はざるを得なかつたのです。といふものは今考へると勿體ない話ですが、私は高等師範などを夫程有難く思つてゐなかつたのです。嘉納さんに始めて會つた時も、さうあなたの様に教育者として學生の模範になれといふやうな注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡巡した位でした。嘉納さんは上手な人ですから、否さう正直に斷わられると、私は益貴方に來て頂きたくなつたと云つて、私を離さなかつたのです。斯ういふ譯で、未熟な私は雙方の學校を懸持しやうなどゝいふ欲張根性は更になかつたに拘はらず、關係者に要らざる手數を掛けた後、とう〳〵高等師範の方へ行く事になりました。」と書いてある。――この嘉納治五郎の言葉は、『坊つちやん』の中で、新任の坊つちやんに言ふ、狸の言葉に酷似する所を持つてゐる。然しそれは今此所では問題ではない。

當時漱石が高等師範から受けとつた月給は、三拾七圓五拾錢であつた。明治二十六年(一八九三)

十月の日附で「高等師範學校英語授業ヲ囑託シ一ケ年年金四百五拾圓給與」といふ辭令が、高等師範學校から出てゐる。

漱石の學生の時分から出てゐた、東京專門學校の報酬がどの位だつたか、分からない。然し七圓づつの貸費の返濟は、或はすぐ始める必要がなかつたとしても、漱石は毎月の月給の內から必ず拾圓づつを父に贈らなければならなかつた。從つて漱石は、いくら大學の寄宿舍漱石がいつ大學の寄宿舍に這入つたかは、分からない。然し明治二十六年の二月二十日には、漱石は自分のうちにゐる。然し同じ八月七日には、もう寄宿舍に這入つてゐる。それから少くとも明治二十七年の九月四日までは其所にゐたやうである。書簡第三三五號に、「夏休みに金がなくつて大學の寄宿に籠城した事がある。而して同室のもの丶置き去りにして行つた蚤を一身に引き受けたのには閉口した。」とあるのが、明治二十六年の事だとすれば、漱石は或は夏休みになつてから、寄宿舍に這入つたものかも知れない。)で生活費を儉約したとは言つても、自分でモーニングを拵へたり本を買つたりするのでは、相當苦しかつた事だらうと思ふ。それでもその方面では、自分の分といふ事を知つてゐた漱石は、別に不幸だなどとは、決して考へなかつたかも知れない。

殊に漱石には、大學に這入つてから、竝びに大學を卒業してからも、精神上の重大な問題があつた。その大問題の前には、衣食問題なぞ殆んど問題にはならなかつたらうとも思はれる。談話

筆記『處女作追懷談』の中で漱石は、自分は元來「英語英文に通達して、外國語でえらい文學上の述作をやつて、西洋人を驚かせようといふ希望」の下に、英文科に這入つたが、さて「愈大學へ這入つて三年を過して居るうちに、段々其希望があやしくなつて來て、卒業したときには、是でも學士かと思ふ樣な馬鹿が出來上つた。それでも點數がよかつたので、人は存外信用してくれた。自分も世間へ對しては多少得意であつた。たゞ自分が自分に對すると甚だ氣の毒であつた。そのうち愚圖々々してゐるうちに、この己れに對する氣の毒が凝結し始めて、體のいゝ往生(レシグネーション)となつた。わるく云へば立ち腐れを甘んずる樣になつた。其癖世間へ對しては甚だ氣燄が高い。何の高山の林公抔と思つてゐた。」と言つてゐる。

前に述べたやうに、漱石は既に明治二十四年(一八九一)八月三日、卽ち漱石が大學の一年から二年になつた年の夏休みに、子規に宛てて、「我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分」つた、「さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば自ら面目なき迄に愧入候」と書いてゐる。漱石の中の巨人的なものは、漱石を驅り立てて、外國人を向うに廻し、外國語で文學上の述作を試みる事を夢みしめるのであるが、さうして漱石をして實際的に著著その準備を進めしめるのであるが、然し漱石は早くも大學に這入つて間もない時分から、自分は不可能事を夢みてゐるのではな

いかと、自分自身の能力を疑ひ始めざるを得なかつた。それでも漱石の中の巨人的なものは、漱石を驅り立てる事を止めなかつた。漱石は一方では「己れと己れの貫目が分」つたと言ひ、「天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎ」てゐたのだと思へば、「自ら面目なき迄」に愧ぢ入る外はないと言つてゐるにも拘はらず、なほ且つ曾ての自分の夢を棄てず、英文學の大海の中に、敢然として跳り込んで、それが示現するあらゆる光景に通じ、それが示現するあらゆる光景を體得しようとする。『文學論』の序で漱石は、「靑年の學生につぐ。春秋に富めるうちは自己が專門の學業に於て何者をか貢獻せんとする前、先づ全般に通ずる必要ありとし、古今上下數千年の書籍を讀破せんと企つる事あり。かくの如くせば白頭に至るも遂に全般に通ずるの期はあるべからず。余の如きものは未だに英文學の全體に通ぜず。今より二三十年の後に至るも依然として通ぜざる可しと思ふ。」と言つてゐるが、然し是は恐らく漱石の若い時分の苦しい經驗の告白で、「古今上下數千年の書籍を讀破せんと企」てた者は、實は當時の漱石だつたのに違ひないのである。それだから漱石は、大學を卒業しても、自ら省みて、讀んだ本は少なく、體得したものは乏しく、人間としては未熟で、どうしても自己を低劣としてしか認識出來ない爲に、「是でも學士か」と反問して、忸怩たらざるを得なかつたのである。勿論漱石は、他人と自分とを、世間の人達と自分とを比較する場合には、「多少得意であ」り得たのに違ひなかつた。例へば

ホイットマン論でも、『英國詩人の天地山川に對する觀念』でも、外の人に、さうさう書けるものではないからである。然し漱石にとつて、相手は他人ではなくて、自分であつた。自分の中の天であつた。然るに天は漱石に、滿足する事を許さない。漱石は「體のいゝ往生(レシグネーション)」に、「わるく云へば立ち腐れ」に、甘んじなければならなくなつてしまつた。――漱石は『英國詩人の天地山川に對する觀念』以後、筆を焚いて、なんにも書かなくなつた。

もつとも漱石の「往生(レシグネーション)」もしくは「立ち腐れ」には、もつとアクテュアルな理由があつた。それに就いて『私の個人主義』は、詳細に述べてゐる。――「私は大學で英文學といふ專門をやりました。其英文學といふものは何んなものかと御尋ねになるかも知れませんが、それを三年專攻した私にも何が何だかまあ夢中だつたのです。其頃はヂクソンといふ人が教師でした。私は其先生の前で詩を讀ませられたり文章を讀ませられたり、作文を作つて、冠詞が落ちてゐると云つて叱られたり、發音が間違つてゐると怒られたりしました。試驗にはウオーヅウオースは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピヤのフオリオは幾通りあるかとか、或はスコツトの書いた作物を年代順に竝べて見ろとかいふ問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にも略想像が出來るでせう、果してこれが英文學か何うだかといふ事が。英文學はしばらく措いて第一文學とは何ういふものだか、是では到底解る筈がありません。それなら自力でそれを窮め得るかと云ふと、

まあ盲目(めくら)の垣覗きといつたやうなもので、圖書館に入つて、何處をどううろついても手掛がないのです。是は自力の足りない許でなく其道に關した書物も乏しかつたのだらうと思ひます。兎に角三年勉強して、遂に文學は解らずじまひだつたのです。私の煩悶は第一此所に根ざしてゐたと申し上げても差支ないでせう。／私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとう／＼教師になつたといふより教師にされて仕舞つたのです。幸に語學の方は怪しいにせよ、何うか斯うか御茶を濁して行かれるから、其日々々はまあ無事に濟んでゐましたが、腹の中は常に空虚でした。空虚なら一そ思ひ切りが好かつたかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが、至る所に潜んでゐるやうで堪まらないのです。しかも一方では自分の職業としてゐる教師といふものに少しの興味も有ち得ないのです。教育者であるといふ素因の私に缺乏してゐる事は始めから知つてゐましたが、たゞ教場で英語を教へる事が既に面倒なのだから仕方がありません。私は始終中腰で隙があつたら、自分の本領へ飛び移らう／＼とのみ思つてゐたのですが、さて其本領といふのがあるやうで、無いやうで、何處を向いても、思ひ切つてやつと飛び移れないのです。」

　ホィットマンを論じ『英國詩人の天地山川に對する觀念』を書いた漱石に、文學といふものが分かつてゐない筈はない。從つて「ウオーヅウオースは何年に生れて何年に死んだとか、シエクスピヤのフオリオは幾通りあるか、或はスコツトの書いた作物を年代順に竝べて見ろとかいふ問

題ばかり」を試験に出すディクソンに、文學が分かつてゐるだらうとは、恐らく漱石も考へてゐなかつたに違ひない。然し當時は、藤代素人の談話にもあるやうに、日本の大學に英文學科が置かれてから三年目、學生の側から言へば、漱石は、第二回目の學生であり、英文學といふものがどういふものであるか、言はば、誰も知らない時代であつた。のみならずディクソンの講義はつまらなくても、ディクソンの背景には英國が控へてゐる。假令漱石がディクソンの教授法を否定しようとしても、もしそれが英國の文學教授法として正しい教授法であつたのだとすれば、それをしも否定する事が出來るほど、漱石が自分の意見に自信を持つ事が出來ないのは、當然であつた。その上「其道に關した書物」の乏しい當時にあつては、其所から自分自身の自信を養ひ來つて、ディクソンに對抗しようとする事も、漱石にとつて、殆んど不可能の事であつた。それ計りではない。漱石は、英文學に深入りし、自分は自分なりに、其所から動かすべからざる意見を積み重ねて來たとしても、本國の學者・批評家が、それとはまるで逆な意見を發表してゐるとすれば、こつちは外國人である悲しさには、いつでも相手が正しくて、自分は間違つてゐると、無理にも自分を壓へなければならないのである。それは自己の尊嚴を重んずる漱石にとつて、到底堪へられない事であつた。然しそれが堪へられない事であつてもなくても、自分にそれを押し返すだけの力量がない限り、人は默つてそれを堪へて行くより仕方がない。漱石は「何だか不愉快な

贇え切らない漠然たるものが、至る所に潛んでゐるやうで堪まらな」かつたと言つてゐるが、まつたく不愉快で「丁度霧の中に閉ぢ込められた孤獨の人間のやうに立ち竦んでしま」ふ外はなかつたのに違ひない。

『文學論』の序で漱石は、「余は少時好んで漢籍を學びたり。之を學ぶ事短かきにも關らず、文學は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左國史漢より得たり。ひそかに思ふに英文學も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を擧げて之を學ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。余が單身流行せざる英文學科に入りたるは、全く此幼稚にして單純なる理由に支配せられたるなり。在學三年の間は物にならざる羅甸語に苦しめられ、物にならざる獨逸語に窮し、同じく物にならざる佛語さへ、うろ覺えに覺えて、肝心の專門の書は殆んど讀む遑もなきうちに、既に文學士と成り上りたる時は、此光榮ある肩書を頂戴しながら、心中は甚だ寂寞の感を催ふしたり。／春秋は十を連ねて吾前にあり。學ぶに餘暇なしとは云はず。學んで徹せざるを恨みとするのみ。卒業せる余の腦裏には何となく英文學に欺かれたるが如き不安の念あり。余は此の不安の念を抱いて西の方松山に赴むき、一年にして、又西の方熊本にゆけり。熊本に住する事數年未だ此不安の念の消えぬうち倫敦に來れり。……」と言つてゐる。勿論この不安と不愉快とが、漱石を「文學論」著述の十年計畫に驅り立てる原動力となつたものではあるが、然しこの

一念を發起するまでの漱石は、まつたくどうにも足搔きがつかない心持で、じりじりしながら、なほ煮え切らない生活を續けなければならなかつたのだらうと思ふ。

そのうち漱石は病氣をした。明治二十七年（一八九四）三月九日漱石は菊池謙二郎に宛てて、「實は去る二月初め風邪にかゝり候處其後の經過よろしからずいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて喀出仕り候故從來の〇〇と〇〇と兩方へ轉んでも外れそうのなき小生故直ちに醫師の診察を受け候處只今の處にては心配する程の事はなく矢張り平生の如く勉強致してもよろしく只日々滋養物を食し身體の榮養を怠らぬ樣にする事專一なりとて夫より檢痰を試み候處幸ひバチルレン抔は無之去れば肺病なりとするも極初期にて今の内に加攝生すれば全治可致との事に御座候小生身體上の自覺も至極爽快にて目下は毫も平日と異なる所無之候へども可成滋養物を食し運動を力め「ノンキ」に消光致居候今暑中休暇には海水浴か溫泉にて充分保養を加ふる積りに御座候……／小生始め醫師より肺病と聞きたる時は兼て覺悟は致居候へば今更の樣に驚愕は不仕又死と云ふ事に就ても小生は至極冷淡の觀念を有し候へば喀血抔に神經を痛むる事は無之りしも只家の後事抔を考へ過ぎて少は心配仕候然し一方にては一度び此病にかゝる以上は功名心も情慾も皆消え失せて恬淡寡慾の君子とならんかと少しは希望を抱き居候にも係らず身體は其後愈壯健に相成醫師も左程差當りての心配はなし抔申し聞け候に就ても性來の俗氣は依然不改舊觀實に

自らもあきれ果候」と報告し、次いで五月三十一日再び菊池謙二郎に宛てて、「……病氣も何處へやら行方知れず相成候へども猶醫師の診察を受け豫防の爲め服藥も仕居候……小生は其後毎日弓術を勉强致居候へども天性の不器用中々上達の見込無之去りながらこゝが辛防處と入らざる處に負惜みを出し朝夕兩度に百本位は毎日稽古致居候中らなくとも少しは面白く散步抔は全く廢止仕候……過日より賄の後に柔道劍道の道場を開き有志の面々頻りに勉强致居候小生も少し擊劍でも始め度と存候へども餘り運動の過劇なると手頃の相手のなきに閉口致し差控へ居候斯樣に運動は隨分出精致候へども肝心の研究の方は一向はかどり不申此學年はまんまと遊んで通り拔け候是も病氣の爲と自ら良心に對し辯護致居候兎角理窟は何とでもつけらるゝ者に御座候」と報告してゐる。

漱石の長兄も次兄も、胸の病で死んだのださうである。漱石は此所で「今更の樣に驚愕は不仕」、「神經を痛」める事もなかつたとは言つてゐるが、然し是が相當の打擊であつた事は、いかに用心深く漱石がこの病氣に對して鬪つたかを見る事によつても、十分想像される。然し漱石が用心深く病氣と鬪へば鬪ふほど、漱石は思ふやうには勉强する事が出來なかつたに違ひない。また思ふやうに勉强が出來なければ出來ないほど、時間を無駄にするのが殘念で、いくら「是も病氣の爲と自ら良心に對し辯護」して見ても、なほ漱石はもどかしい、腹立たしい、不愉快な氣持に閉

され勝ちであつたに違ひない。漱石が、この病氣にかかる以上は、「功名心も情慾も皆消え失せて恬淡寡慾の君子とな」るといふのに、「性來の俗氣は依然不改舊觀」と言ひ、「研究の方は一向はかどり不申此學年はまんまと遊んで通り抜け」たと言つてゐるのも、すべてさういふ心持を物語つてゐるやうに思はれる。

もつともこの病氣は、程なく漱石から離れ去つた。然し漱石の、自分自身に對する幻滅、學んで徹する事が出來ない不安、徹したと信じてゐても猶それを公言する事を憚らなければならない遲疑、心の自由と獨立とを欲してゐながらどうしてもそれが得られない焦燥、さういふものはいつまでも漱石を離れ去る事がなかつた。一方漱石の對社會の關係は、漱石を神經質にする計りであつた。『私の個人主義』の中で漱石は、高等師範に勤めてゐた時分の事を、「教育者として偉くなり得るやうな資格は私に最初から缺けてゐたのですから、私はどうも窮屈で恐れ入りました。嘉納さんも貴方はあまり正直過ぎて困ると云つた位ですから、或はもつと横着を極めてゐても宜かつたのかも知れません。然し何うあつても私には不向な所だとしか思はれませんでした。奥底のない打ち明けた御話をすると、當時の私はまあ肴屋が菓子屋へ手傳ひに行つたやうなものでした。」と言つてゐる。かういふ心持が重なり重なつて、漱石はゐても立つてもゐられない心持になつたものであらう。夏休みになると東京を飛び出して、方方をあるき廻つた。明治二十七年

（一八九四）九月四日漱石は子規に宛ててかう書いてゐる。

「拜啓昨夜又々持て餘したる酒嚢飯袋を荷ひてのそ〳〵と歸京仕候小生の旅行を評して健羨々々と仰せらるゝ段情なき事に御座候元來小生の漂泊は此三四年來沸騰せる腦漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん爲のみに御座候去すれば風流韻事抔は愚か只落付かぬ尻に帆を擧げて歩ける丈歩く外他の能事無之願くば到る處に不平の塊まりを分配して成し崩しに心の穩かならざるを慰め度と存候へども何分其甲斐なく理性と感情の戰爭益劇しく恰も虛空につるし上げられたる人間の如くにて天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安心立命到底無覺束候俊鶻一搏起てば將に蒼穹を摩すべし只此頸頭の鐵鎖を斷ずるの斧なきを如何せん抔と愚癡をこぼし居候も必竟驀向に直前するの勇氣なくなり候爲と深く慚愧に不堪去月松島に遊んで瑞巖寺に詣でし時南天棒の一棒を喫して年來の累を一掃せんと存候へども生來の凡骨到底見性の器にあらずと其丈は斷念致し候故踵を回らして故鄕に歸るや否や再び半肩の行李を理して南相の海角に到り日夜鹹水に浸り妄りに手足を動かして落付かぬ心を制せんと企て居候折柄八朔二百十日の荒日と相成一面の青海原凄まじき光景を呈出致候是屈究と心の平かならぬ時は隨分亂暴を致す者にて直ちに狂瀾の中に沒して瞬時快哉を呼ぶ折宿屋の主人岸上より危ない〳〵と叫び候故不入驚人浪難得稱意魚と吟出したれど主人禪機なき奴と相見〔え〕問答も其丈にて方がつき申候右の有樣故別段面白き事もなく只

錢を使つた處が大兄よりは幅が利く丈にて其他の「コンヂション」は大兄の方遙かによろしくと斷定仕候間御自身も左樣御承知可被下候俗界に在て勉强が出來ぬ由御嘆息御尤もには御座候へども學問の府たる大學院に在つて勉强すべき時間はありながら勉强の出來ぬは實心苦しき限に御座候此三四年來勉强といふほど勉强をした事なく常に良心に譴責せらるゝ小生の心事は傍で見る程氣樂な者には無之候然し申譯の爲暇さへあれば終日机に向ふ處幾分か殊勝に御座候此度も讀もせぬ書籍を山ほど携帶致候段我ながら其意を了解するに苦しみ候只「シエレー」の詩集一卷は常にと〔は〕云はざれど時々あまり不快の時は繰り返し〳〵或部分を熟讀致し大に愉快を覺え候必竟小生此不平を散ぜん爲めではなけれど此不平の頂點に達せる折忽ち腦中の靈火炎上して一路通天の路を開き或る「プリ〔ン〕シプル」を直覺的に感得したる如き心地致し大に胸中落付候其砌り「シエレー」の詩を讀み候に其句々甚だ小生の考へと合し天外亦此同情の人あるかと大に愉快に存候故に御座候」。

この手紙だけを讀んで、漱石の言ふ事が稍感傷的ででもあれば抽象的ででもあつて、何か肺腑を突くものに缺ける憾みがあると感じる人が、ないとも限らない。然し是までの漱石の生活内容を背景として、この手紙を讀むと、漱石の此所の惱みが、相當立體的に厚みを持ち、我我の目近に迫つて來る。――是は、メフィストを呼ぶ直前のファウストの、二つの魂の惱みにも比せられ

べき悩みである。ファウストの一つの魂は地上のものを振り切つて祖先の國・靈の國へと天翔らうとする、他の一つの魂はをぞましい愛欲の手足で地上のものに必死にしがみつく。然も一つの魂は他の魂と絡み合つて、決して引き放す事が出來ない。其所からファウストの中には分裂が起り、進まうにも退かうにも、足掻がつかず、結局メフィストを引き寄せてしまつた。『行人』の一郎は、愛するお直を疑はなければならない羽目に陷つて、じつと坐つてゐられないから立つ、立つとじつと立つてゐられないからあるく、あるくと愚圖愚圖あるいてゐられないから駈け出すと言つてゐるが、この時の漱石も、恐らく一郎のやうに、じつとしてゐられなくなつて、或は松島或は南相の海岸と方方を「漂泊」し、愛する自然の膏油を、自分の傷口に作用させようとしたものに違ひない。然もこの二つの魂の爲にファウストはメフィストを呼んだが、漱石は竟に參禪しようと決心するのである。

一四　參禪

同じ明治二十七年（一八九四）九月四日の手紙の末に、漱石は「近日中下宿」するかも知れないと書いてゐる。何故漱石が大學の寄宿舍から出てしまはうと思つたのかは分からない。或はかういふ惱みを胸に懷いてゐて、いろんな人に顏を會はせなければならない寄宿舍生活は、漱石にとつて、決して愉快な生活ではなかつたからかも知れない。十月十六日漱石は小石川區表町七十三番地法藏院から子規へ宛てて、「塵界茫々毀譽の耳朶を撲に堪ず此に環堵の室を賃して蠕袋を葬り了んぬ猶尼僧の隣房に語るあり少々興覺申候」と書いてゐる。

然し菅虎雄によると、漱石は法藏院に下宿する前に、指ケ谷町の菅虎雄のうちに暫く厄介になつてゐたのださうである。それがどの位の期間であつたか、はつきり分からないが、然しその事だけに就いて考へてみても、漱石は一刻も早く寄宿舍から離れたい氣で一杯であつたのだと、想像する事も出來る。のみならず漱石は、その菅虎雄の家をさへ、無斷で飛び出したといふのであ

る。その時漱石が何所に行き、それからどうして法藏院に落つく事になつたかは、知るを得ないが、然し親友の家を無斷で飛び出さなければゐられなかつたほど、漱石の氣持は切迫して嶮しく、人間の顔といふ顔は、見るも厭で、何所か山の奥へでも這入つて仕舞ひたいやうにも思はれたのではないかと思ふ。事實九月四日の手紙といひ、十月十六日の手紙といひ、何かその、漱石の燃え上がり沸ぎり立つた腦漿の、熱氣のやうなものが、讀者の顔に襲ひかかつて來る感がある。殊に「塵界茫々毀譽の耳朶を撲に堪ず」といふのは元より、「環堵の室」などといふに至つては、漱石が何所にゐても、自分を監視してゐる人間の眼のやうなものを感じ、劇烈に厭人的になつてゐる事を感じさせるものを持つてゐる。

十一月一日漱石は再び子規に宛てて、「小生の住所は先づ傳通院の山門につき當り左りに折れて又つき當り今度は右に折れて半町程先の左側の長屋門のある御寺に御座候淨土宗の寺にて住持は易斷人相見抔に有名な人豐田立本といふ　圖にて示せば〔圖略〕大略右の如し午後は大抵閑居す必用なければ何處へも出ず隣房に尼數人あり少しも殊勝ならず女は何時までもうるさき動物なり／尼寺に有髮の僧を尋ね來よ」と書いた。此所にも無論漱石のイリタブルな心持は出てゐるが、然し漱石は、十月十六日の手紙に比べると、少しは落ついたやうにも見える。是は或は漱石が、この下宿に住んでゐる事に、多少馴れて來たせゐかも知れない。

『漱石の思ひ出』によると、此所の尼さんの中に、漱石が「眼科で會ふその婦人に寔によく似」てゐる尼さんがあつて、それがある時風邪をひいて熱を出した。漱石が同情して解熱劑をやると、外の尼たちが「まだあの人のことを思つてゐるんだよ」と言つて、漱石をひやかしたのださうである。是は鏡子が漱石自身の口から聽いたといふのだから、疑ひを容れる餘地はない。然し此所には覺え違ひか聽き違ひか、何かさういふやうなものがあるのではないかと思はせる節がなくもない。例へば『漱石の思ひ出』によると、その尼さんの名前は祐本とか言つたとあるが、是は法藏院の住持が豐田立本といつた、その立本と混同されてゐるのではないか。それと同じやうに、此所には外にも混同か何かがありはしないか。「尼僧の隣房に語るあり少々興覺申候」といひ、「隣房に尼數人あり少しも殊勝ならず女は何時までもうるさき動物なり」といふ言葉の裏には、その尼さんたちが、漱石の神經に障る言語動作を示してゐる事は、十分窺ふ事は出來ても、さういふ「眼科で會ふその婦人に寔によく似」てゐる尼さんが中に混じつてゐさうな氣配は、どうも感じられさうもないからである。『猫』第十の中には、「主人が昔し去る所の御寺に下宿してゐる時、襖一と重を隔てゝ尼が五六人居た。尼抔と云ふものは元來意地のわるい女のうちで尤も意地のわるいものであるが、この尼が主人の性質を見拔いたものと見えて自炊の鍋をたゝきながら、今泣いた烏がもう笑つたと拍子を取つて歌つたさうだ、主人が尼が大嫌になつたのは此時か

らだと云ふが、尼は嫌にせよ全くそれに違ない。」と書いてある。――是は何所までがほんとで、何所から先きが作り事であるか、はつきり分からないやうなものではあるが、然し是も根本では「女は何時までもうるさき動物なり」と共通する所は持つてゐても、その尼さんの中に一人好きな尼さんがゐた事を示唆するものは、何も持つてゐない。

さうは言つても、是らの事は、『漱石の思ひ出』に書いてある事を、否定してしまふ力を持つてゐない。従つて『漱石の思ひ出』の記事は、そのままそつとして置くより仕方がない。ただ此所ではつきり言へさうに思はれる事は、漱石が「襖一と重を隔てゝ尼が五六人居」るやうな所に下宿してゐて、その尼が、漱石をして「女は何時までもうるさき動物なり」と言はしめるほど、べちやくちや饒舌つて計りゐたとすれば、それは「俊鶻一搏起てば将に蒼穹を摩すべし只此頸頭の鐵鎖を斷ずるの斧なきを如何せん」と嘆いてゐた漱石の、「沸騰せる脳漿」を、「冷却」するどころか、反つて一層「沸騰」させるにしか役立たなかつたに違ひないといふ事である。

漱石が鎌倉に赴いて、宗演の提撕を受けようとした直接の動機は、はつきりしてゐない。然し九月四日の手紙以來、漱石の心持が同じ方向に愈切迫して行つたとすれば、漱石が鎌倉に赴く氣になつたのも、極めて自然の事に思はれる。一口に言へば其所で漱石は、「頸頭の鐵鎖を斷ずるの斧」を求めようとするのである。然も漱石を圓覺寺の宗演に紹介し、歸源院の宗活に紹介した者

は、菅虎雄であつた。

菅虎雄は一木喜德郎・內田康哉・早川千吉郎・林權助・鈴木馬左也・北條時敬などと一緒に、明治二十一年(一八八八)から、今北洪川の會下に參禪してゐたのださうである。宗演は洪川門下の麒麟兒と言はれてゐたといふから、言はば菅虎雄の相弟子であつた。その上漱石の親友米山保三郎が亦、明治二十二年(一八八九)の頃から參禪してゐた事は、既に『木屑錄』の中にも出てゐる。是も洪川和尙の弟子である。松本亦太郎は高等學校時代、米山保三郎から勸められて、洪川の『禪海一瀾』を讀んだと言つてゐる。恐らく漱石も亦米山から勸められて、是を讀んでゐたらうと思ふ。同じく漱石の親友太田達人も、是は誰の下で參禪してゐたかは分からないが、『硝子戶の中』によれば、「悟」を問題にしてゐる。當時青年の間に參禪によつて自分の惱みから拔け出ようとする風潮が、相當顯著に現はれてゐたのみならず、漱石の周圍がこの風潮を、特に鮮明に反映してゐた事は、是だけで明瞭である。然も漱石の手紙の中には、或は「生て居ればこそ根もなき毀譽に心を勞し無實の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁上より落つるも膽を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか」といひ、或は「露地白牛」といひ、或は「先づ節操の毅然たるは申すに不及性情の公平正直なる胸懷の洒々落々として細事に頓着せざる抔生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ候」といひ、或は「不入驚人浪難得稱意魚」といひ、假令人人のやうに自

分で參禪しようといふ氣にはならなかつたまでも、兎も角漱石が當時禪に興味を持ち、禪に關する記述をいくらかは讀んでゐたに違ひないと想像させる、いろんな言葉が散見する。それが今、親友を介して、參禪する氣になつたとしても、それは別に不思議な事でもなんでもなかつた。

　意地つ張りで負け嫌ひで、自由と獨立とを信條としてゐた漱石は、いくら自分で苦しんでも、他力を本願とするキリスト教や佛教に歸依して、神だの佛だのから救はれる事を欲しなかつた。のみならず、すべて自分の眼で視、自分の耳で聽き、具體的なものとして自分の心の中に納める事の出來るものでなければ、實在するものとして認めようとはしなかつた漱石は、抽象的に觀念的に神だの佛だのを拈出して、それを崇めそれに賴る心持には、どうしてもなれなかつた。それだけに漱石には、自力で解脱の道を辿らうとする禪宗は、最も自分の性に合つた宗教であつた筈であつた。それにしても漱石が、すべてのものを抛擲して鎌倉までも出かけ、その道の修行をして見ようと志したのは、漱石にとつてよくせきの事だつた筈である。

　『門』の第十八から第二十一へかけて、主人公の宗助が、知人の紹介狀を懷にして鎌倉へ行き、其所で宜道の世話になつて、「老師」に見參する所が書いてある。勿論『門』の宗助は、自分の過去の罪が、いつまでも自分を追つかけて、自分に安き心を與へない爲に、圓覺寺の山門を潛るのである。漱石に宗助のやうな過去の罪はなかつたが、然し漱石は宗助のやうに、安き心がなく、

「風碧落を吹いて浮雲盡き、月東山に上つて玉一團」といふやうな、豁然とした「光風霽月」「和風麗日」の世界に入る事を念願して、同じ山門を潜る。宗助は、自分の過去の罪に追はれて、東京の夜の町を漂泊者の如くに漂泊してあるき、「彼は黒い夜の中を歩るきながら、たゞ何うかして此心から逃れ出たいと思つた。其心は如何にも弱くて落付かなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知に見えた。彼は胸を抑えつける一種の壓迫の下に、如何にせば、今の自分を救ふ事が出來るかといふ實際の方法のみを考へて、其壓迫の原因になつた自分の罪や過失は全く此結果から切り放して仕舞つた。其時の彼は他の事を考へる餘裕を失つて、悉く自己本位になつてゐた。今迄は忍耐で世を渡つて來た。是からは積極的に人生觀を作り易へなければならなかつた。さうして其人生觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であつた。心の實質が太くなるものでなくては駄目であつた。／彼は行く〳〵口の中で何遍も宗教の二字を繰り返した。けれども其響は繰り返す後からすぐ消えて行つた。攫んだと思ふ烟が、手を開けると何時の間にか無くなつてゐる樣に、宗教とは果敢ない文字であつた。」と感じ、最後に參禪といふ事に思ひ到つた。漱石は當時、或は松島、或は南相の海岸と「漂泊」し、大學の寄宿舍を出て菅虎雄の家に入り、菅虎雄の家を飛び出して法藏院に下宿し、恐らくは「如何にも弱くて落付かなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知に見え」る自分の「心から逃れ出」て、「心の實質が太くなるもの」を獲る事

が出來る爲に、參禪しようと決心する。

然し漱石の參禪の結果は、失敗であつた。少くとも漱石はそれによつて、自分の「心の實質」を「太く」する事が出來なかつた。『門』の宗助は、「父母未生以前の本來の面目」とは何かといふ公案を出され、いろいろに考へあぐんだ揚句、「老師」の所へ行くと、「老師」は「もつと、ぎろりとした所を持つて來なければ駄目だ」「其位の事は少し學問をしたものなら誰でも云へる」と言つて、突つぱねてしまつた。再び宗助はいろいろと考へる。然し宗助は結局、「私の様なものには到底悟は開かれさうに有りません」と言ひ、「自分は門を開けて貰ひに來た。けれども門番は扉の向側にゐて、敲いても遂に顏さへ出して吳れなかつた。たゞ、／「敲いても駄目だ。獨りで開けて入れ」と云ふ聲が聞えた丈であつた。彼は何うしたら此門の閂を開ける事が出來るかを考へた。さうして其手段と方法を明らかに頭の中で拵えた。けれども夫を實地に開ける力は、少しも養成する事が出來なかつた。從つて自分の立つてゐる場所は、此問題を考へない昔と毫も異なる所がなかつた。彼は依然として無能無力に鎖ざされた扉の前に取り殘された。彼は平生自分の分別を便に生きて來た。其分別が今は彼に祟つたのを口惜く思つた。さうして始から取捨も商量も容れない愚なものゝ一徹一圖を羨んだ。もしくは信念に篤い善男善女の、知慧も忘れ、思議も浮ばぬ精進の程度を崇高と仰いだ。彼自身は長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて來たものらしか

つた。夫は是非もなかつた。けれども、何うせ通れない門なら、わざ〳〵其所迄辿り付くのが矛盾であつた。彼は後を顧みた。さうして到底又元の路へ引き返す勇氣を有たなかつた。彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時迄も展望を遮ぎつてゐた。彼は門を通る人ではなかつた。又門を通らないで濟む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。」と感じて、山を下るより仕方がなかつた。漱石は『鷄頭』の序の中で、「余は禪といふものを知らない。昔し鎌倉の宗演和尙に參して父母未生以前本來の面目はなんだと聞かれてぐわんと參つたぎりまだ本來の面目に御目に懸つた事のない門外漢である。」と言つてゐる。また漱石は明治二十八年(一八九五)一月十日齋藤阿具に宛てて、「小子去冬より鎌倉の楞伽窟に參禪の爲め歸源院と申す處に止宿致し旬日の間折脚鐺裏の粥にて飯袋を養ひ漸く一昨日下山の上歸京仕候五百生の野狐禪遂に本來の面目を撥出し來らず御憫笑可被下候」と書いてゐる。

然し漱石が歸源院で、如何に猛烈に己事の究明に從事したかは、『夢十夜』の中の第二夜の敍述によつて、凡そ想像する事が出來る。是だけ集中して何事かを考へる習慣が、歸源院にゐる內に十分養はれ得たのだとすれば、所期の結果は得られなかつたとしても、漱石はこの參禪を悔いる必要はなかつた筈である。『門』の宣道は宗助に、「決して損になる氣遣は御座いません。十分坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の德があるのは無論です。其上最初を一つ奇麗に打

ち抜いて置けば、あとは斯う云ふ風に始終此所に御出にならないでも濟みますから」と教へてゐる。「最初を一つ奇麗に打ち拔いて置」く事は漱石には出來なかつたが、それでも漱石は、十日は其所で坐つてゐたのである。殊に漱石には、宗活の人となりに敬意を持つたと見えて、『門』の宜道でその人を不滅にしたとともに、この翌翌年、明治三十年(一八九七)の秋には、再び歸源院に宗活を訪ね、「歸源院卽事　佛性は白き桔梗にこそあらめ　山寺に湯ざめを悔る今朝の秋」「禪僧宗活に對す　其許は案山子に似たる和尙かな」などといふ句をさへ作つてゐる。のみならず漱石が晩年に志した「道」の修業は、禪の修業とは言へなかつたとしても、少くとも多分に禪的な要素を持つてゐるのである。漱石の參禪は、無駄ではなかつた。

二五　松山

その年、即ち明治二十八年(一八九五)四月、漱石は愛媛縣尋常中學校の教諭として、松山に赴任する。

三月十八日漱石は山口にゐる菊池謙二郎に宛てて、「拜呈仕候其後は打絶御無音奉謝候過日御招聘の件早速御返事可仕筈の處彼是不得其意荏苒今日に至り候段甚だ不調法御容赦可被下候偖小生儀今般愛媛縣尋常中學へ赴任の事と粗決定致し十中八九迄は相談も可纏と存候間貴校の方は乍失禮御斷り申上候右につき愈出發と定まり候上は彼是買調へ候品物も有之候處御存じの文なしにては如何とも致方なく因て甚だ御迷惑ながら貴方にて金五十圓程御融通被下間鋪候や尤も貴兄も隨分貧の字なるべければ(是は失敬)御手本になきは承知なれどそこの所を友達の好みと思ひ何とか御算段相願はれ間じくや尤も返濟の義は赴任後兩三月中に屹度皆濟可致若し又赴任不致事と決定仕り候へばすぐに其儘御返却可致候右否や乍憚電報にて御報被下度(若し出來なければ外に奔

走せねばならぬ故ゝ先は用事のみ」と書いた。菊池謙二郎は當時山口高等學校に奉職してゐたのである。漱石は其所からの招聘を斷つて、松山の中學に赴任した。是は或は、松山の中學からの話の方が、漱石の耳に先きに這入つた爲かも知れない。さうして漱石にこの話を持ち込んだのは、菅虎雄である。菅虎雄は、當時愛媛縣の書記官をしてゐた淺田知定から人選を頼まれて、是を漱石の所へ向けたのださうである。

明治二十八年四月五日子規が廣島の宿から、松山にゐる叔父の大原恒德に宛てた手紙の末に、「友人夏目金之助は松山中學校の教師として近く赴任致候趣申來候若し間にあはゞ當地にて面會すべくと存候」と書いてある。明治二十八年といへば、言ふまでもなく、日清戰爭の二年目である。もつともこの三月十九日には李鴻章が下關に來て、その翌日から講和談判が開始されてゐたが、然し子規は『日本』の從軍記者として支那へ渡る氣で、既に一ケ月許り前から廣島に滯在し、四月十日午後一時には、司令部とともに宇品を出帆する豫定になつてゐたのである。その子規に漱石が廣島で會つたかどうかは、分からない。然し少くとも是で漱石の松山到著が、四月五日以後であつたといふ事だけは、明白である。

漱石は優秀な成績で大學を卒業し、直ちに大學院に這入り、第一高等中學と高等師範との間に引つ張り凧となり、結局は高等師範に出る事になつて、東京專門學校の教師を兼ねてゐたのに、

何を苦しんで、自分の生れ故郷である東京を捨てて、松山のやうな、四國の果の一中學の教師として赴任する氣になつたのであるか。――松山は、自分の親友の子規の、故郷であつたには違ひない。のみならずその松山に漱石は、既に明治二十五年の夏に一度行つてゐる。その上月給八十圓といふのだから、當時としては破格な優遇だつたといふべきでもあるのだらう。然しいくら破格な優遇でも、またいくら自分の親友の故郷でも、高等師範の口を捨て、東京專門學校の口を捨て、山口高等學校からの招聘をも斷わり、自分の生れ故郷の東京を離れて、松山のやうな邊鄙な場所の一中學の教師になるといふ事は、普通に考へれば、どうしても不思議である。その理由として、漱石の失戀といふ事が持ち出されるのも、無理はない。

然し私は此所に、漱石の失戀などを持ち込む餘地は、全然なささうに思ふ。第一にその事を、漱石自身が否定してゐる。是は既に言つた。第二に私は漱石自身の口から、自分は何もかも捨てる氣で松山に行つたのだと、言つて聞かされてゐる。何もかも捨てる氣とは、結局生きながら自分を葬らうとする事である。是は、ファウストに就いて言へば、ファウストが自身調合した毒杯を仰がうとした、あの瞬間の心持と同じ心持である。勿論さうした心持になる事が、必しも失戀を否定するものではないが、然しその事は既に漱石自身によつて否定されてゐる。失戀は、問題にはならない。

漱石が大學を卒業して以來、自分自身の理想の高さに比べて、自分の現實が少しも是に伴はない事を歎き、「自分が自分に對すると甚だ氣の毒」なので、手も足も出ない氣がしてゐたといふ事は、既に述べた。のみならず漱石は、子供の時分漢文・漢詩の類ひを讀んで、文學とはおよそかういふものであると、冥冥の裡に會得する事が出來てゐたのに、英文學を専攻する事十年を過ぎるにも拘はらず、英文學が分かつたといふ氣がしない、從つて腹の中が空虚で、いつも鬱陶しい不安と不愉快との中に閉ぢ込められてゐなければならなかつたといふ事も亦、既に述べた。一方漱石を包む社會は、その無反省や無責任や無神經によつて、漱石の正義感情を傷け、更にその傷けられたる正義感情は、漱石の、人を愛せずにはゐられない、孤獨な魂と噛み合ひ、漱石は安き心を持つ事がない。然もさういふものから超越し得る希望は、鎌倉で粉砕されてしまつたかたちである。

不愉快はそれだけではなかつた。漱石は高等師範にゐて、窮屈で窮屈で堪らなかつたと言つてゐる。『坊つちやん』の中の坊つちやんは、團子を喰ふな、蕎麥を喰ふなと言はれ、窮屈で堪らない思ひをし、そんな事なら初めから團子と蕎麥との嫌ひな者と言つて教師を探すが可い、默つて人を雇つて置いて何を喰ふなかを喰ふなといふほど罪な事はない、俺のやうな外に道樂のない者にとつては大變な打撃であると、こぼしてゐるが、さすがに高等師範では現實の團子と蕎麥と

を禁じはしなかつたとしても、恐らく別の「團子」と「蕎麥」とは、いくらもあつた筈である。時の校長は漱石に、あなたは正直すぎて困ると言つたといふが、然し漱石から言へば、「團子」を喰ふな「蕎麥」を喰ふなと言はれてゐながら、なほそれを敢てするのは、横著であり厚顔であつた。喰ふ事は小さな事でも、それによつて德義を冒す事の罪は大きかつた。從つて漱石はさういふ御布令が出れば出るほど、ますます窮屈に、ますます不愉快を感ぜざるを得なかつたに違ひない。——恐らくそれがやり切れなかつた爲であらう、漱石は當時横濱にあつた『ジャパン・メール』の記者となる事を志願し、試驗として、日本の禪の事を論じた英文をその社に提出する。この仲介者も亦、菅虎雄であつた。

然しこの事は、漱石に別の不愉快を用意しただけで、何の役にも立たなかつた。といふのは、この英文は、默つて突つ返して來られたからである。菅虎雄によると、菅虎雄がそれを漱石の所へ持つて行くと、漱石は、何所が何ういけないといふ、場所と理由とを指摘して返すのが禮儀である、默つて突つ返すなどとは怪しからんと言つて憤激し、菅虎雄の面前で、その原稿をずたずたに引き裂いてしまつたといふ。禪の事は日本語で書いても、なかなか分かりにくい。況んや是は外國語で書くのである。恐らく是は外國人には分からなかつたに違ひないと、菅虎雄は言つてゐるが、それは正にその通り、相手には、言葉は分かつても、意味内容は少しも通じなかつたに

相違ないのである。然しそれが何で外國人に分からなかつたにもせよ、ともかく自分の論文が無言で突つ返されたといふ事は、英文學で苦勞して來た漱石には、非常な侮辱と感じられ、ひいてはまた漱石に、自分自身に對する、劇烈な幻滅のやうなものを感じさせたに違ひない。

漱石が松山行を決行する前、漱石の事情は、此所まで急迫して來てゐる。是だけいろんなものが重なり合つて來れば、漱石でなくても、誰でも「何もかも捨てる氣」で松山に行く氣になるかも知れない。漱石は自分の生活を立て直す氣で、いろんな試みをして來てゐるのである。然もその試みは、すべて失敗に歸してゐるのである。

漱石は、明治二十八年(一八九五)五月二十六日と五月三十日とに、自分が東京を去つて松山に來た感懷を詠じた七言律を五首、病を獲て支那から歸り、當時神戸の縣立病院にゐた子規の所へ送つてゐる。「快刀切斷兩頭蛇。不顧人間笑語譁。黃土千秋埋得失。蒼天萬古照賢邪。微風易碎水中月。片雨難留枝上花。大醉醒來寒徹骨。餘生養得在山家。」・「辜負東風出故關。鳥啼花謝幾時還。離愁似夢迢々淡。幽思與雲澹々閒。才子群中只守拙。小人圍裏獨持頑。寸心空托一杯酒。劍氣如霜照醉顏。」・「二頃桑田何日耕。青袍敝盡出京城。稜々逸氣輕天道。漠々癡心負世情。弄筆慵求才子譽。作詩空博冶郞名。人間五十今過半。愧爲讀書誤一生。」・「駑才恰好臥山隈。夙托功名投火灰。心似鐵牛鞭不動。憂如梅雨去還來。青天獨解詩人憤。白眼空招俗士咍。日暮蚊軍將滿

室。起揮紈扇對崔嵬。」・「破碎空中百尺樓。巨濤却向月宮流。大魚不語沒波底。俊鶻將飛立岸頭。劍上風鳴多殺氣。枕邊雨滴鎖閑愁。一任文字買奇禍。笑指青山入豫洲。」といふのが、それである。是は元より漱石の氣持を表現したものであつた。それだけに此所から何か具體的なものを探り出さうとするのは、無理でもあれば又危險でもあるが、然し「快刀切斷兩頭蛇。不顧人間笑語譁。」や「大醉醒來寒徹骨。餘生養得在山家。」や「才子群中只守拙。小人圍裏獨持頑。」や「稜々逸氣輕天道。漠々癡心負世情。弄筆慵求才子譽。作詩空博冶郎名。人間五十今過半。愧爲讀書誤一生。」や「駑才恰好臥山隈。夙托功名投火灰。」や「青天獨解詩人憤。白眼空招俗士咍。」や「破碎空中百尺樓。巨濤却向月宮流。大魚不語沒波底。俊鶻將飛立岸頭。」や「一任文字買奇禍。笑指青山入豫洲。」など、すべて自分が自分にかけたイリュージョンを、自分で思ひ切つてぶち毀し、自分が駄目な人間である事を無理にも自分に納得させて生きようとする、悲壯な心持によつて貫ぬかれてゐる事は、誰の眼にも著しい事ではないかと思ふ。にも拘はらず漱石が、それではどうしても納まり切れないものを持つてゐた事は、捨てた筈の世間に對する憤ほろしさが、行と行と、文字と文字との間から、屢閃めき出てゐるのに徴しても、明白である。漱石は「何もかも捨てる氣」で松山に行つたには違ひないが、事實は「何もかも捨てる」事は出來なかつたのである。漱石の中の「大魚」と「俊鶻」とは、今に見ろといふやうな氣で、「波底」に沒し「岸頭」に

立つてゐるのである。その年の冬には、漱石は「家も捨て世も捨てけるに吹雪哉」といふ句を作つてゐる。

明治二十八年七月二十六日漱石は齋藤阿具に宛てて、「小生當地に參り候目的は金をためて洋行の旅費を作る所存に有之候處夫所ではなく月給は十五日位にてなくなり申候」と書いてゐる。然しこの事と「何もかも捨てる氣」で松山に來た事とは、少しも矛盾しない。殊に漱石が「何もかも捨てる氣」で松山に來るとともに、今に見ろといふ氣持を持つてゐたとすれば、それと漱石が洋行する目的を持つてゐたといふ事とは、更によく調和する。漱石は、中學の英語なら、樂に教へる事が出來るといふ、自信を持つてゐたに違ひないのである。漱石は松山に來て、中學生を教へて、出來るだけ僅かな時間をその方に使ひ、あとの餘裕の一切をあげて自分の修業のやり直しをし、出來れば英國まで出かけて行つて、本場で本式の修業をして見たいと思つてゐたのかも知れない。もしさうだとすれば、松山落は漱石にとつて、乾坤一擲の背水の陣のやうなものであつた。ただそれが「月給は十五日位でなくな」つてしまふやうな實情だつたとすると、「洋行の旅費を作る所存」は、早くも撤回しなければならなかつたのかも知れないが、然し漱石の内面は、洋行の見込のあるなしに拘はらず、悲壯だつたには違ひないのである。――もつとも八月には子規が松山に歸つて來て、漱石の下宿に轉がり込んだ。さうして松山中の門下生を集めて、頻に俳

句を作り出し、到頭漱石をもその渦中に捲き込んでしまつた。漱石には俳句といふ、自分自身を表現する、一つの新しい道が開かれ、切迫した漱石の内面は、それによつて、ある寛ろぎが與へられる。

二六　俳句

明治二十八年(一八九五)五月二十八日漱石は、神戸にゐる子規の所へ、「拜呈首尾よく大連灣より御歸國は奉賀候へども神戸縣立病院はちと寒心致候長途の遠征舊患を喚起致候譯にや心元なく存候小生當地着以來昏々俗流に打混じアツケラ閑として消光身體は別に變動も無之候教員生徒間の折合もよろしく好都合に御座候東都の一瓢生を捉へて大先生の如く取扱ふ事返す〲恐縮の至に御座候八時出の二時退出にて事務は大概御免蒙り居候へども少々煩瑣なるには閉口致候僻地師友なし面白き書あらば東京より御送を乞ふ結婚、放蕩、讀書三の者其一を擇むにあらざれば大抵の人は田舍に辛防は出來ぬ事と存候當地の人間隨分小理窟を云ふ處のよし宿屋下宿屋皆ノロマの癖に不親切なるが如し大兄の生國を惡く云ては濟まず失敬々々／道後へは當地に來てより三回入湯に參り候小生宿所は裁判所の裏の山の半腹にて眺望絶佳の別天地恨らくは猶俗物の厄介を受け居る事を當地にては先生然とせねばならぬ故衣服住居も八十圓の月俸に相當せねばならず小生

如き丸裸には當分大閉口なり」と書いた。その末に漱石は「小子近頃俳門に入らんと存候御閑暇の節は御高示を仰ぎ度候」と書き添へてゐる。

漱石に放蕩する氣はなかつた。結婚はさうさう簡單に事が運ぶ譯のものではなかつた。從つて「田舍に辛防」出來る爲には、漱石は差し當り讀書するより仕方がなかつた。然し讀書と言つても、程がある。殊に漱石は、何かしら自分の腹の中にたまつてゐるものを、がつと吐き出してしまふのでなければ、落つく事が出來ない氣がしてゐたに違ひないのだから、久し振りに漢詩を取り上げて見た漱石が、それによつて創作の歡びを味ふとともに、もつと簡單に、もつと自由に、もつと直接に、自分自身を表現する事の出來さうな器として、俳句を少し作つて見たい氣になつたのは、當然の經過であると言つて可いかも知れない。

漱石は子規の刺激で、俳句を是まで幾度もつくりかけては、やめてゐる。勿論それは大抵まづい句ばかりではあるが、それでも「東風吹くや山一ぱいの雲の影」・「白雲や山又山を這ひ回り」（明治二十三年）、「雀來て障子にうごく花の影」・「涼しさや書架の皃に青松葉」（明治二十四年）などといふ、見どころのある句も、その中にいくらかはなくもない。殊に子規が、小說を作る事を斷念して、俳句の制作に全幅の精神を集中し、この道に活眼を開き、俳句の中に、藝術としての新生命を吹き込む骨を覺えた明治二十七年（一八九四）の頃となると、漱石も亦活眼を開き、

骨を覺えたと見え、「春雨や柳の下を濡れて行く」・「弦音にほたりと落る椿かな」・「凪に乘つて輕くのし行く燕かな」・「菜の花の中に小川のうねりかな」などと、今までのものとは見違へるやうな、清新な句を幾つも作つてゐる。然しそれも漱石にとつては、ほんの一時のすさびに過ぎなかつた。もつとも是は、漱石の詩の句「一任文字買奇禍」をまともにとつて、高等師範の校長から新聞(漱石の俳句のあるものは、子規の關係から、當時『小日本』に掲載された。『小日本』は、明治二十七年二月十一日に發刊され、同年七月十五日に廢刊された)などに關係してはいけないとでも言はれたものではないかと、想像する事も出來なくはない。然しこの年は正月の病氣以來、漱石の氣持のひどく嶮しくなつてゐた年である。そんな外部からの働きかけがなくても、漱石は、俳句など作つてゐる氣に、到底なれなかつたのかも知れない。それが松山に來るとともに、心持の上にも何か一段落がつき、のみならず「僻地師友なし」、讀書以外、何かしなければゐられなくなつたので、子規の所へこんな事を書いてやつたものだらうと思ふ。

然し漱石は、六月になつても七月になつても、俳句を始めた模樣がない。是は或は子規の病氣が、その後餘りよくなかつた爲に、漱石を指導する譯に行かなかつたからかも知れない。そのうち子規は、八月末、須磨から松山に歸つて來た。さうして八月二十七日には、漱石が下宿してゐた二番町八番戸の上野の離れに引越して來た。談話筆記『正岡子規』の中で、漱石は「なんでも

僕が松山に居た時分、子規は支那から歸つて來て僕のところへ遣つて來た。自分のうちへ行くのかと思つたら、自分のうちへも行かず親族のうちへも行かず、此處に居るのだといふ。僕が承知もしないうちに、當人一人で極めて居る。御承知の通り僕は上野の裏座敷を借りて居たので、二階と下、合せて四間あつた。……僕は二階に居る、大將は下に居る。其うち松山中の俳句を遣る門下生が集まつて來る。僕が學校から歸つて見ると、毎日のやうに多勢來て居る。僕は本を讀む事もどうすることも出來ん。尤も當時はあまり本を讀む方でも無かつたが、兎に角自分の時間といふものが無いのだから、止むを得ず俳句を作つた。」と言つてゐる。

漱石は此所で自分が厭厭俳句を作つたやうな事を言つてゐる。然しもともと漱石は「小子近頃俳門に入らんと存候」と言つてやる位、俳句に對する興味を湧かしてゐた際である。一方では「本を讀む事もどうすることも出來ん」から「止むを得ず俳句を作つた」傾向もあつたには違ひないが、一方では不知不識の内に――寧ろ好んで、好きな道に踏み込んで行つた所もあつたのだらうと思ふ。九月七日子規が河東碧梧桐に宛てた手紙の中には、「夏目も近來運坐連中の一人に相成候」とある。子規が漱石の所へ行つたのは、八月二十七日の事であつた。子規が行つて一週間たつかたたないかに、もう漱石は「運坐連中の一人」になつてゐるのである。當時夏休みがいつまで續いてゐたかは分からないが、假に九月十日までだつたとして、九月十一日から漱石が勉強

する氣でゐたとしても、一旦かうして踏み込んだ以上は、さうさう容易く足が抜けるものではない。殊に漱石には、初めから佳い句が澤山あつた。子規にさへ作れさうもない佳い句が、澤山あつた。烱眼な子規が、それを認めないで措く筈がない。認められればそれだけ脂がのつて來る譯でもあるから、漱石はますます熱心に俳句の中へ深入りして行つたものだらうと思ふ。子規は十月十九日松山を出發して東上したが、それを追つかけるやうにして子規の所へ送つた漱石の句稿の句數が、十月中だけで八十八句に及んでゐるのに就いて見ても、いかに漱石が當時句作に熱中してゐたかを想像する事が出來る。のみならずその後その年の十二月までに送つた漱石の句數は二百四十句に近い。一ケ月およそ平均百二十句作つてゐる勘定である。

子規は俳句革新の事業を始めるに當つて、芭蕉を貶し蕪村を揚げて、寫生を鼓吹した。舊派の宗匠たちから桃青大明神として祀り上げられ、長い間には無知無識の宗匠たちの手垢で穢くろしくされてしまつた芭蕉の代りに、誰の手垢もついてゐない蕪村を昇ぎ出し、それを守り本尊として天下に號令する事は、革新者としての子規にとつては、恐らく必要な戰術でもあつたのだらう。然しその爲め子規が、表現の器としての俳句の表現能力を半減してしまつた事は、爭はれない。然るに漱石にとつて俳句は、自己内面の表現としてのみ、先づ意味があつた。もし俳句を通して、自分の主観を述べる事が許されなかつたとするならば、漱石は恐らく俳句を、わざわざ採

り上げようとする氣にならなかつたかも知れない。漱石は、言はば、初めから子規の言ふほど嚴密に、所謂客觀の句や寫生の句に偏する事がなく、寧ろ自由に、自分の言ひたい事を、俳句で言はうとしてゐたのである。

勿論漱石は、自分の表現しようとする世界を客觀化して、それに十分な具體性もしくは彫塑性を與へる爲には、寫生がいかに必要であるか、またその意味で所謂客觀句に錬達する事が、いかに必要であるかを、よく知つてゐた。從つて漱石はその方面に努力する事を、決して怠つてゐない。それでも漱石の句で眼に立つのは、「黄菊白菊酒中の天地貧ならず」・「思ふ事只一筋に乙鳥かな」・「櫻ちる南八男兒死せんのみ」・「時鳥名乘れ彼山此峠」のやうなのを初めとして、「鵜飼名を勘作と申し哀れ也」・「誰が家ぞ白菊ばかり亂るゝは」・「いたづらに菊咲きつらん故鄕は」・「名月や故鄕遠き影法師」・「菊の香や故鄕遠き國ながら」・「岩にたゞ果敢なき蠣の思ひ哉」・「亡き母の湯婆やさめて十二年」・「尼寺や芥子ほろ〳〵と普門品」・「白露や芙蓉したゝる音すなり」。「親一人子一人盆のあはれなり」・「行く年や膝と膝とをつき合せ」などといふやうな、純粹に主觀的な句か、少くとも主觀味の勝つた句である。當時漱石は滑稽の句を作つて、一方の雄だと稱せられた。まつたく漱石には「凧吹けば糸瓜をなぐる瓢かな」・「海鼠哉よも一つにては候まじ」・「達磨忌や達磨に似たる顏は誰」・「賭にせん命は五文河豚汁」・「叩かれて晝の蚊を吐く木魚哉」・「明

け易き夜ぢやもの御前時鳥」・「史官啓す雀蛤とはなりにけり」といふやうな、滑稽を旨とした句が相當に多い。然もこの事は、漱石の態度が純粹に客觀的である事に堪へない事を、半面から證明する。滑稽には批評がある。また滑稽には表象の突飛な聯結がある。從つて滑稽では、客觀の上に主觀が君臨する。假令滑稽を形成する要素は客觀の世界ではあつても、それらの要素に滑稽の光をかけるものは、主觀の世界に外ならないのである。

漱石は明治二十八年(一八九五)十一月十四日、東京にゐる子規に宛てた手紙の中で、「小生の寫實に拙なるは入門の日の淺きによるは無論なれど天性の然らしむる所も可有之と存候」と書いてゐる。是は恐らく漱石が十一月三日に子規に送つた「句稿」第四・第五に對する、子規の批評に答へたものだらうと思ふ。「句稿」第四・第五には、合計六十八句書かれてゐるが、その中から拔き出して子規が、自分の『承露盤』の中に書き入れた句は、たつた四句に過ぎない。子規はその不成績を激勵するとともに、是は畢竟君が「寫實」に努めないせゐであるとかなんとか、忠告してよこしたものに相違ない。然し「いたづらに菊咲きつらん故郷は」・「名月や故郷遠き影法師」・「菊の香や故郷遠き國ながら」といふやうな句を作らないではゐられなかつた漱石には、子規の所謂「寫實」の必要は十分認めても、なほ「寫實」だけに凝り固まる事に堪へられない自分の性質をも考へ併せ、結局「天性の然らしむる所も可有之と存候」と答へなければならなかつた

のだらう。既に明治二十四年(一八九一)四月二十日漱石は子規に與へて、「狂なるかな狂なるかな僕狂にくみせん君が芳墨を得て始めは其唐突に驚ろき夫から腹を抱へて滿案の哺を噴き終りに手紙を掩ふて泫然たり君の詩文を得て此の如く數多の感情のこみ上げたるは今が始めてなり君が心中一點の不平俄然炎上して滿腦の大火事となり餘焔筆頭を傳はつて三尺の半切に百萬の火の子を降らせたるは見事にも月ばゆき位なり平日の文章心を用いざるにあらず修飾なきにあらず只狂の一字を缺くが故に人をして瞠若たらしむるに足らず只此一篇狂氣爛熳わが衷情を寸斷しわが五尺の身を戰慄せしむ七草集はものかは隱れみのも面白からず只此一篇／嗚呼狂なる哉狂なるかな僕狂にくみせん……」と書き、間接に自分と子規との「天性」の相違を、はつきり指摘してゐるのである。

それでも漱石は、子規の忠告に聽いて、自分の俳句の中に「寫實」の要素を採り入れる事を怠らなかつた。同時に自分の「天性」は「天性」で護り通しつつ、ずつとこの道の修行を續けた。漱石ほど自分を大事にした者もないが、また漱石ほど人の忠告を謙虛に聽かうとした者もない。それが此所にも現はれる。漱石は翌明治二十九年(一八九六)の四月、松山を去つて熊本に赴任したが、然し漱石は熊本に行つてもなほこの道の修行を繼續した。『明治二十九年の俳句界』の中で、子規は「漱石は明治二十八年始めて俳句を作る。始めて作る時より既に意匠に於て句法に於

て特色を見はせり。其意匠極めて斬新なる者、奇想天外より來りし者多し。」……「漱石亦滑稽思想を有す。」……「又漱石の句法に特色あり。或は漢語を用ゐ、或は俗語を用ゐ、或は奇なる言ひまはしを爲す。」……「然れども漱石亦一方に偏する者に非ず。滑稽を以て唯一の趣向と爲し、奇警人を驚かすを以て高しとするが如き者と日を同うして語るべきにあらず。其句雄健なるものは何處迄も雄健に、眞面目なるものは何處迄も眞面目なり。……」と、それぞれ證句を澤山に擧げて、漱石を推稱した。

二七 孤獨

當時松山の中學の五年生で、松根東洋城とともに、丁度一年間漱石から英語の教授を受けた眞鍋嘉一郎は、當時の漱石の授業振りを回顧して、「先生は吾々に四年五年を通じてスケッチブックのヴォイエージとロスコーとブロークン・ハートの三章を講義されたが、其講義振りは、机に凭れて兩肘をつき、右手に鉛筆を持つて、細々と講義を進めて行かれた。能辯とか達辯とか云ふのではないが、非常に言葉の綾に富んだ話しぶりで、誠に明快を極め、熱心で正確で、其口吻が當時十七八歳だつた自分の頭裡に刻せられて、今だにあり〳〵と殘つてゐる。先生の英語の教授法は、譯ばかりでは不可ない、シンタックスとグラムマーを解剖して、言葉の排列の末まで精細に檢覈しなければならぬと云ふので、一時間に僅に三四行しか行かぬこともあつた。そのため一年間にスケッチブック三章しか讀了しなかつたのである。プレフイックス、サツフイックスを始終やかましく云ふので、夏目さんのプレフイックス、サフイックスと云つて吾々の間に通つてゐた。

私には此の根本的な語學研究法が、後々まで永く感化を殘して、いくら役に立つたか知れない。」と言つてゐる。

言ふまでもなく、英語は、漱石がその爲め十年以上も苦勞して來た、語學であつた。漱石の大學時代の教育學の論文『中學改良策』を見ても分かるやうに、漱石は旣にその當時から、英語の教授法に關して、具體的で、且しつかりした意見を持つて居た。殊に、是は餘程の後の事になるが、明治四十四年(一九一一)の一月號と二月號との『學生』に揭載された談話筆記『語學養成法』などでは、漱石は、日本人の爲の外國語學力養成法に關して、實に適切を極める意見を發表してゐる。從つて當時漱石の教授法が、眞鍋嘉一郎のやうな當時の秀才にとつて、初めて眼の上の覆ひをとり去るやうな教授法であつた事は、十分想像されうる所である。然し眞鍋嘉一郎以外の、當時の中學生が、一般に漱石の教授法にどの位感謝する事が出來たか、疑問であるといふ氣もする。殊に漱石は、熊本では、出來る學生には實に親切であつたが、出來ない學生からは、實に怖がられ、烟たがられてゐたと言はれる。眞鍋嘉一郎の談話だけでは、或は當時の學生の一般の評判を測定する譯には行かないかも知れない。もつとも眞鍋嘉一郎によれば、當時松山では、ああいふえらい先生が、こんな田舍の中學に來る筈がない、あれは教師をする傍ら、道後の溫泉に這入つて保養する氣で來たのであると、誠しやかに語り傳へられてゐたのださうである。さう

言へば、子規に宛てた手紙の中にも、「教員生徒間の折合もよろしく好都合に御座候東都の一瓢生を捉へて大先生の如く取扱ふ事返す〴〵恐縮の至に御座候」とあつた。七月二十六日齋藤阿具宛の手紙にも、「當中學は存外美少年の寡なき處其代り美人があるかと思ふと矢張り払底に御座候何しろ學校も平穏にて生徒も大人なしく授業を受け居候小兒は惡口を言ひ惡戲をしても可愛らしきものに御座候」と書いてある。漱石は一般からも尊敬されてゐたし、生徒を可愛がつてもゐたと想像しても、よささうに思はれる。從つて對學校の關係では、漱石には『坊つちやん』にあるやうな經驗は、一つもなくて濟んだ筈である。同じ齋藤阿具宛の手紙の中で、漱石は「此度山口高等學校より招聘を受け候へども當地の人間に對し左樣の不親切は出來惡く候へば一先辭退仕候」とさへ言つてゐる。

然し松山では、漱石には、友達がなかつた。後には俳句を通じて多少の友達も出來たには違ひないが、それとても俳句の友達で、眞の友達ではなかつた。松山著匆匆漱石は子規に、「僻地師友なし面白き書あらば東京より御送を乞ふ結婚、放蕩、讀書三の者其一を擇むにあらざれば大抵の人は田舍に辛防は出來ぬ事と存候」と書いてゐる。東京を去る時は「何もかも捨てる氣」で、遁世出家する覺悟ではあつても、來て見ると「僻地」ではあるし「師友」はなし、著いて二ケ月も立たないうちに、漱石は沁沁孤獨の感じを味はなければならなかつた。西行の嘆きと同じやう

な嘆きを詠んだ「家も捨て世も捨てけるに吹雪哉」には、自分の腑甲斐なさを憤る漱石の顏よりも前に、まづ孤獨に堪へない漱石の顏が浮かんで來る。「有感　二十九年骨に徹する秋や此風」も、表現は生硬蕪雜に近いが、同じ魂の惱みである。「いたづらに菊咲きつらん故鄕は」・「名月や故鄕遠き影法師」・「菊の香や故鄕遠き國ながら」・「京や如何に里は雪積む峯もあり」の如きに至つては、田舍にゐて故鄕の東京を憧がれるの情に堪へない感じが、卿卿として人に迫る事を覺える。この東京は、現實の東京であるとともに、恐らくは象徵の東京——自分の「師友」を包んだ東京である。漱石は「師友」に憧がれるとともに東京に憧がれ、東京に憧がれるとともに「師友」に憧がれた。東京で生れ東京で育つた漱石が、寫生すると言へば、結局東京の何所かを寫生するより仕方がなかつたのには違ひないが、それにしても漱石の句に、東京を詠んだ句、東京らしいものを詠んだ句が、特に松山時代に多く見えるのも、矢張さういふ意味での東京への憧がれの、他の現はれだつたのだらうと思ふ。

それでも漱石は、子規が自分の下宿にゐる間は、俳句といふ新しい世界も開けたのだから、樂しかつた。然し、その子規は十月十九日には、立つて東京へ行つてしまつた。俳句は自分の前に殘されてゐても、漱石は、恐らく以前よりも一層、松山にゐる事を寂しく、東京への憧がれを切實に、身に沁みて感じたに違ひない。漱石は、後の夏目鏡子、當時の中根鏡子と見合ひをする爲

に、この年の十二月も押し詰つてから、東京に歸り、見合を濟ませ、子規の所にも行き、句會にも出席し、翌明治二十九年(一八九六)一月匆匆松山に歸任したが、その事は更に切實に、東京への憧がれを煽り立てたのではないかと思ふ。『漱石の思ひ出』によると、この時の見合は順當に進行し、話は纏まり、ただもう少し漱石の收入の途がついてから一緒になるといふ事になつたのだといふが、漱石は一月十七日子規に宛てて、「其後御病勢如何可成書狀を見合せられたし小生依例如例日々東京へ歸りたくなるのみ……」と書いてゐる。

東京への憧がれが強くなるといふ事は、ある意味では、松山をそれだけ好まなくなるといふ事である。もう少し收入の途がついてから世帶を持つといふ約束も、漱石に、假令東京へは歸れないまでも、ともかく松山を去つて何所かへ行きたい意志があつた事を暗示する。漱石は山口高等學校からの招聘を、「當地の人間に對し左樣の不親切は出來惡」いといふ理由から、辭退した。是は明治二十八年(一八九五)七月の事である。十月八日菊池謙二郞宛の手紙にも、漱石は「山口は其後當參事官宛にて再び申し來候故同樣辭退致し候處今度は岡田氏より折を見て呼ぶ積り故其心にて居てくれと申來候無論往先の事などは當には致さず風船玉主義に御座候呵々」と書いてゐる。それが十一月七日、つい二三週間前まで自分の下宿に一緒にゐて、今は東京に歸つてゐる子規に宛てては、「十二月には多分上京の事と存候此頃愛媛縣には少々愛想が盡き申候故どこかへ巣を

替へんと存候今迄は随分義理と思ひ辛防致し候へども只今では口さへあれば直ぐ動く積りに御座候貴君の生れ故郷ながら餘り人氣のよき處では御座なく候」と書いてゐるのである。是は例へば、前便の十月八日とこの十一月七日との間に、漱石を特に不愉快にする何事かが起つたといふよりも、是まで漱石がいろいろ不愉快に感じてゐた事が、十一月七日のころに至つて、漱石に竟に堪へ難くなつたのだと解釋すべきであらうと思ふ。漱石は旣に五月二十八日の手紙で、「當地の人間隨分小理窟を云ふ處のよし宿屋下宿皆ノロマの癖に不親切なるが如し」と言つてゐる。さうして十一月七日の手紙では、「今迄は随分義理と思ひ辛防」したのだと言つてゐる。

明治二十八年(一八九五)十一月二十五日發行の愛媛縣尋常中學校校友會雜誌『保惠會雜誌』に、漱石は賴まれて『愚見數則』なるものを書いた。その初めに漱石は、「昔しの書生は、笈を負ひて四方に遊歷し、此人ならばと思ふ先生の許に落付く、故に先生を敬ふ事、父兄に過ぎたり、先生も亦弟子に對する事、眞の子の如し、是でなくては眞の教育といふ事は出來ぬなり、今の書生は學校を旅屋の如く思ふ、金を出して暫らく逗留するに過ぎず、厭になればすぐに宿を移す、かゝる生徒に對する校長は、宿屋の主人の如く、教師は番頭丁稚なり、主人たる校長すら、時には御客の機嫌を取らねばならず、況んや番頭丁稚をや、薰陶所か解雇されざるを以て幸福と思ふ位なり、生徒の增長し教員の下落するは當前の事なり。」と言つてゐる。その他「月給の高下にて、

教師の價値を定むる勿れ、月給は運不運にて、下落する事も騰貴する事もあるものなり、抱關擊柝の輩時に或は公卿に優るの器を有す、是等の事は讀本を讀んでもわかる、只わかつた許りで實地に應用せねば、凡ての學問は徒勞なり、晝寐をして居る方がよし。」・「教師は必ず生徒よりゑらきものにあらず、偶誤りを教ふる事なきを保せず、故に生徒は、どこまでも教師の云ふ事に從ふべしとは云はず、服せざる事は抗辯すべし、但し已れの非を知らば翻然として恐れ入るべし、此間一點の辯疏を容れず、已れの非を謝するの勇氣は之を遂げんとするの勇氣に百倍す。」・「多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ、已れの無氣力なるを天下に吹聽するに異ならず、斯の如き者は人間の糟なり、豆腐の糟は馬が喰ふ、人間の糟は蝦夷松前の果へ行ても賣れる事ではなし。」・「厭味を去れ、知らぬ事を知つたふりをしたり人の上げ足を取つたり、嘲弄したり、冷評したり、するものは厭味が取れぬ故なり、人間自身のみならず、詩歌俳諧共厭味のあるものに美くしきものはなし。」・「教師に叱られたとて、已れの直打が下がれりと思ふ事なかれ、又褒められたとて、直打が上つたと、得意になる勿れ、鶴は飛んでも寐ても鶴なり、豚は吠ても呻つても豚なり、人の毀譽にて變化するものは相場なり、直打にあらず、相場の高下を目的として世に處する、之を才子と云ふ、直打を標準として事を行ふ、之を君子と云ふ、故に才子には榮達多く、君子は沈淪を意とせず。」・「小智を用る勿れ、權謀を逞ふする勿れ、二點の間の最捷徑は直線と知れ。」・「妄

りに人を評する勿れ、斯様な人と心中に思ふて居れば夫で濟むなり、惡評にて見よ、口より出した事を、再び口へ入れんとした處が、其甲斐なし、況して、又聞き噂抔いふ、薄弱なる土臺の上に、設けられたる批評をや、學問上の事に付ては、無暗に議論せず、人の攻撃に遇ひ、破綻をあらはすを恐るればなり、人の身の上に付ては、尾に尾をつけて觸れあるく是他人を傭ひて、間接に人を撲ち敲くに異ならず、頼まれたる事なら是非なし、／頼まれもせぬに、かゝる事をなすは、眞醉興中の醉興なるものなり。」・「損徳と善惡とを混ずる勿れ、輕薄と淡泊「と」を混ずる勿れ、眞率と浮跳とを混ずる勿れ、溫厚と怯懦とを混ずる勿れ、磊落と粗暴とを混ずる勿れ、機に臨み變に應じて、種々の性質を見はせ、一有つて二なき者は、上資にあらず。」・「世に惡人ある以上は、喧嘩は免るべからず、社會が完全にならぬ間は、不平騷動はなかる可らず、學校も生徒が騷動をすればこそ、漸々改良するなれ、無事平穩は御目出度に相違なきも、時としては、憂ふべきの現象なり、斯く云へばとて、決して諸子を教唆するにあらず、無暗に亂暴されては甚だ困る。」・「理想を高くせよ、敢て野心を大ならしめよとは云はず、理想なきものゝ言語動作を見よ、醜陋の極なり、理想低き者の擧止容儀を觀よ、美なる所なし、理想は見識より出づ、見識は學問より生ず、學問をして人間が上等にならぬ位なら、初から無學で居る方がよし。」などといふのがある。

勿論これらの言葉は、すべて漱石の當時の人生觀から來たものである。この人生觀を纏め上げ

る爲には、松山や松山の中學のみでなく、東京や東京の學校や、その他漱石の體驗の一切を必要としたものである事は、言ふまでもない。然しそれと同時に、漱石がかういふ人生觀を反映した文章を、特に『保恵會雜誌』に書いた——卽ち松山の中學生が讀み又その父兄が讀む筈の雜誌に書いたといふ事の奥には、それらの人人にかういふ事を聽かせるのが、最も適切であるといふ反省、——その意味で其所に微妙な、松山及び松山人に對する漱石の批評が動き出てゐるといふ事も、見逭がせない。換言すれば、此所で漱石がよくないと斷じた事の幾分が、松山及び松山人の中に濃厚に動いてゐるのを看破したればこそ、漱石は、松山といふ所は「人氣の好い所で」ないと感じ、「愛媛縣には少少愛想が盡き」た、口さへあれば何所へでも動く、といふ氣になつたものに違ひないのである。明治二十九年六月八日漱石は子規に宛てて、自分が高濱虛子の爲に肩を入れるのは、「虛子が前途の爲なるは無論なれど同人の人物が大に松山的ならぬ淡泊なる處、のんきたる處、氣のきかぬ處、無器用なる點に有之候」と書いてゐる。——その點でも漱石は、松山にゐて、孤獨であつた。漱石が周圍の者から「大先生の如く取扱」はれれば取り扱はれるほど、この孤獨感は一層劇しく、漱石に襲ひかかつたものだらうと思ふ。

その內熊本の第五高等學校から招聘が來た。是は、前年五高の教授として赴任した、菅虎雄の肝煎である。漱石は、自分の希望からも、また岳父の希望からも、東京に轉任したかつたのに違

ひないが、然し東京には適當な口がなく、且つ五高は自分の親友である菅虎雄のゐる所ではあり、松山には愛想がつきて、口さへあれば何所へでも動くといふ氣になつてゐる際ではあり、思ひ切つて熊本に行く事にきめてしまつた。漱石は、明治二十九年(一八九六)四月九日、中學の講堂で人人に別れを告げて、四月十日三津濱を出發し、高濱虛子とともに宮島に一泊し、廣島で東西に別れて、四月十三日熊本に著いた。熊本に著くや否や、途中知り合ひになつた俳人を連れて菅虎雄の內に飛び込み、墨を磨らせてその連れの俳人に、「市中や君に飼はれて鳴く蛙」といふ句を書いてやつた。それがどうも水落露石ぢやなかつたかと思ふが、どうもはつきりとは覺えてゐないとは、菅虎雄の語るところである。

六　結婚

漱石が松山に來るとすぐ、結婚の事が問題になつた事は、明治二十八年(一八九五)五月二十八日の子規宛の手紙の中に、「結婚、放蕩、讀書三の者其一を擇むにあらざれば大抵の人は田舍に辛防は出來ぬ事と存候」と書いてあるので分かる。同じ手紙の終りの方には、「當地出生軍人の娘を貰はんか〳〵と勸むるものあり貰はんか貰ふまいかと思案せしが少々血統上思はしからぬ事ありて御免蒙れり」と書いてある。狹い松山に、文學士で、月給を八十圓とるといふ獨者が飛び込んで行つたのである。假令漱石の方にその意志はなくても、結婚の申し込みは、降る程押し寄せたのかも知れない。七月二十六日齋藤阿具宛の手紙の中には、「近頃女房が貰ひ度相成候故田舍ものを一匹生擒る積りに御座候」とある。十月八日菊池謙二郎宛の手紙には、「結婚の事も漸く落着致候〇〇〇のは母肺病にて沒し候由につき小生には不適當と存じやめ申候矢張東京より貰ふ事に致候」とある。是で松山の候補者は一切打ち切りにされて、舞臺は東京に移つた。この時既に、中

根鏡子との話が、段段漱石に問題になり出して來たのである。

十一月十四日漱石は子規に宛てて、「今冬上京の節は仰せなくとも押しかけて見參仕る覺悟に候へども昨今の力量にては甚だ心元なく存候三々九度の方はやめにするかも知れず如何となれば先づ金の金主から探さねばならぬからな」と書いてゐる。更に十二月十八日同じ子規宛の手紙には、「結婚の事抔は上京の上實地に處理致す積りに御座候かゝる事迄に貴意を煩はす必要も無之かと存候尤も家内のもの確と致候もの少なき故此度の緣談につきても至急を要する場合には貴兄に談合せよとは兼て申しやり置候中根の事に付ては寫眞で取極候事故當人に逢た上で若し別人なら破談する迄の事とは兼てよりの決心是は至當の事と存候」とある。漱石は鏡子の見合の寫眞が氣に入つて、是ならもらつても可いと思ひ、承諾の旨を答へはしたが、なほ實際に自分の眼で見て、寫眞と實物とが同じものであるかどうかを確めるまでは、はつきりした態度をとる事が出來なかつたものらしい。鏡子の父、中根重一は、當時貴族院書記官長をして居て、私宅は牛込矢來町三番地中の丸內六十號(現在の新潮社のある所)にあつた。『漱石の思ひ出』によると、鏡子の祖父の碁の相手で、その矢來の家によく遊びに來る小宮山といふのが、郵便局に勤めてゐて、漱石の兄の直矩と同僚だつた關係から、この話は小宮山の發意から起つたのださうである。

見合は、明治二十八年(一八九五)十二月二十八日に、その時には既に年寄を除いた中根一家が

其所に越して行つてゐた、虎の門の貴族院書記官長の官舍で行はれた。見合が濟んでうちへ歸つて、漱石が、鏡子の齒竝が惡くて齒がきたない、それを當人は强ひて隱さうともせず平氣で居るところが、大變氣に入つたと言つたといふ話は、同じく『漱石の思ひ出』に出てゐる。それを聽いてうちの者は、みんな、妙なところが氣に入る人だ、だから金ちやんは變人だよと言つて笑つたといふが、然し事實は是こそ鏡子の性格の一つの重要な特徴を、その長所と短所とを籠めて、實にしつかり捉まへたものだつたのである。

『漱石の思ひ出』によると、是で緣談は成立したが、然しいつ結婚するかは極らなかつた。鏡子の父が漱石に、なるべく東京で職を探し、歸つて來て結婚するやうに希望したのに對し、漱石は、さう御誂へ通りに行くかどうかは分からないが、然し現在よりはもう少しどうにかなつた上で結婚する事にしようと答へたのださうである。それが漱石は、急に熊本に赴任する事になつた。熊本では月給が百圓だつた。松山の時分よりも收入が二十圓殖えた譯である。然し岳父の希望とは反對に、漱石の任地は、今までよりも更に東京から遠くなつた。それを岳父がどう考へるか分からない。鏡子自身もどういふか分からない。其所で漱石は岳父に手紙を書いて、自分は熊本に行く事になつたが、行く以上は少くとも一年は熊本にゐなければならない。然しもし熊本のやうな知らない土地に、當人がどうしても來るのが厭だといふやうだつたら、已むを得ないから破談

にしてくれても仕方がない旨を、言つてやつたのださうである。

然し中根重一の方では、今更破談にするなどといふ事が出來る譯のものではない。此所一二年東京に歸る見込みがないといふのならそれでも可い。何も必ず東京で暮らさなければならないといふ譯ではなし、それに一生熊本で暮す譯でもあるまい。口は結婚したあとでゆつくり探す事にして、ともかく熊本にやる事にしようと決心し、早速その手筈に取りかかつたのださうである。鏡子は結婚したあとで漱石に、もしあなたの所へお嫁に來られなかつたら、わたしは尼になつて順禮に出る積りだつたと言つたといふから、鏡子自身も勿論熊本でも何所でも行く氣だつたのに相違ない。それで中根重一は鏡子をつれて東京を出發し、六月八日に熊本に到著し、翌六月九日漱石の光琳寺町の新居で結婚の式を擧げた。

『道草』第三十五に、「東京からわざ〳〵彼女を伴れて來た細君の父は、娘に振袖を着せながら、自分は一通りの禮裝さへ調へてゐなかつた。セルの單衣を着流しの儘で仕舞には胡坐さへ掻いた。婆さん一人より外に誰も相談する相手のない健三の方では猶の事困つた。彼は結婚の儀式に就いて全くの無方針であつた。もと〳〵東京へ歸つてから貰ふといふ約束があつたので、媒妁人も其地にはゐなかつた。健三は參考のため此媒妁人が書いて送つて呉れた注意書のやうなものを讀んで見た。それは立派な紙に楷書で認められた嚴めしいものには違なかつたが、中には東鑑などが

例に引いてある丈で、何の實用にも立たなかつた。／「雌蝶も雄蝶もあつたもんぢやないのよ貴方。だいち御盃の緣が缺けてゐるんですもの」／「それで三々九度を遣つたのかね」／「えゝ。だから夫婦中が斯んなにがたぴしするんでせう」／兄は苦笑した。」と、その時の光景が書いてある。それでも漱石が、結婚の翌翌日、六月十一日に子規に結婚式を擧げた旨を通知し、最後に「衣更へて京より嫁を貰ひけり」といふ一句を附け加へてゐる所を見ると、漱石はこの結婚を、滿足をもつて眺めてゐたに違ひないのである。――かうして漱石の家庭生活が始まつた。それは漱石三十、鏡子二十の年の事だつた。

『漱石の思ひ出』によると、漱石は新婚匆匆鏡子に、自分は學者で、勉強しなければならない人間だから、さうさうお前に構つて計りはゐられない、それだけの事は承知してゐてもらひたいと、言ひ渡したのださうである。鏡子は「私の父も役人ではありましたけれども、相當に本を讀む方でしたから、學者の勉強するの位にはびくともしやしませんでしたが、何しろ里にゐた時とは樣子のがらりと違ふのにはまゐつて了ひました。先づ官舍に居りますれば、出入りの人も自然多くて、何となく生活も華やかでしたが、急に田舍の小人數のところへ來たのだから、勝手が違ふことつたらありません。それに里にゐた時にいくらか家事のこともやるにはやつたのですが、さて主婦となつて見ると、どこからどう手をつけていいかまるで見當がつきません。殊に里では

父は氣のつく方で、買ひ物なんぞは大方父の手でされて、母は始終家に引き籠もつてゐて、三度三度の食事の指圖や子供のこと位しかしない方なので、さて買ひ物はどうしていいものやら、違つた土地に來てはなほ更のことわかりません」。それで非常に困つたと言つてゐるが、それはまつたくその通りだつたらうと思ふ。殊に漱石は、さういふ方面にかけては、殆んど無能力と言つて可いほど、何の知識をも持つてゐなかつた。假令漱石自身がそれを氣の毒に思つて、何か手を貸してやらうとしたとしても、それは結局手を借りない方がよかつたやうな結果になつたのに違ひない。それだけ鏡子の困惑は、普通以上甚だしいものだつた事と想像されるが、然し漱石が鏡子に、自分は學者で勉強しなければならない人間だから、お前に構つて計りはゐられないと言つたのは、さういふ點にあるのではなく、自分は自分の時間の一切を擧げて、女房の遊び相手になつてゐる譯には行かない、その點で自分を理解し、その點で自分に見當違ひの要求を持たないやうにしてもらひたいといふ事を、前以つて斷つたものだらうと思ふ。然しこの事が、賑やかで、派手で、物質的な里の空氣に育つた、二十歳のお孃さんとしての鏡子に、何か「勝手が違ふ」と感じさせ、ひどく物足りない寂しさを感じさせたに違ひない事も、亦想像に餘りある所である。

　然し漱石は鏡子を愛してゐたのである。愛してゐたればこそ、――少くとも愛するに足ると思つたればこそ、結婚する氣になつたのに違ひないのである。『漱石の思ひ出』には、漱石が鏡子

に、或は手習をしろと勸めて見たり、或は俳句をつくつて見ろと勸めて見たり、またある時なぞ、鏡子の脫ぎ棄てた著物を自分で著て、巫山戲て見たりしたといふ事が書いてある。是は漱石に、鏡子に對する若若しい愛情があつた事を假定するのでなければ、到底想像の出來る事ではない。もつとも鏡子が、里にゐる時分からの朝寐の癖が、嫁いで來てからもなかなか脫けない爲に、朝飯が間に合はないままで漱石を學校に出したり、或は腹さへ減つてゐれば、なんでも旨い筈だと言つて、旨からうがまづからうが一切御構ひなしの料理を喰はせたり、そんな事が續けば、漱石も決して愉快ではなかつたに違ひないが、然し「齒並が惡くてさうしてきたないのに、それを強ひて隱さうともせずに平氣でゐるところが大變に氣に入つた」と言つた漱石は、ある意味から言へば、その自然な正直な所を愛して、さういふ事も大目に見る事が出來てゐたのではないかとも思はれる。新婚の年の九月初め、鏡子の叔父が福岡にゐるのを訪ね旁、漱石は鏡子を伴つて一週間許り北九州を旅行し、博多・香椎・太宰府・二日市・久留米・船後屋などをあるき、方方で名句をつくつて來たが、恐らくその旅行から歸つて間もない時分、漱石は「內君の病を看護して枕邊や星別れんとする晨」といふ句を作つてゐる。鏡子に對する愛情の濃やかさが、春雨のやうに人の胸に滲み込む句である。

漱石は感情生活に於いて、特に戀愛生活に於いて、今日の若い人人のやうに、自分の內面を自

然に表現する事は、罪惡であるといふやうな、考へ方をする時代に育つて來た。從つて漱石は、人間としても、趣味としても、さういふ點で自分の言葉がセンティメンタルになる事を、極度に嫌ひ、ある場合にはさういふ感情に、まるで逆な表現を與へようとする事さへあつた。其所に漱石の諧謔句が生れて來る一つの重大な根據があるのであるが、然しこの句に於けるやうに、物によそへながら、漱石の鏡子に對する愛情が濃やかに出てゐる句は、漱石の多くの句の中でも、まつたく珍らしい事である。この句から滲み出る愛情に比べれば、例へば漱石が鏡子に手習を勸め、俳句を勸め、もしくは鏡子の晴著を著てあるいて廻るなどといふ事は、まつたく兒戲に過ぎない。漱石は當時不斷どんな取り扱ひをしてゐたか、精しい事は分からないが、然し内部では是ほどひたひたと鏡子を愛してゐたのである。

二九　第五高等學校

漱石は第五高等學校に四年餘りゐた。初めは講師で來たが、來た年、卽ち明治二十九年(一八九六)の七月九日に、教授に任ぜられ、高等官六等に敍せられ、九月十日には正七位に敍せられた。明治三十二年(一八九九)六月八日高等官五等、同六月二十一日大學豫科英語主任、同十月十日從六位、明治三十三年(一九〇〇)四月二十四日教頭心得、同五月十二日英語研究の爲め滿二年間英國留學を命ぜられ、その學年の試驗を濟まして東京に歸り、九月に英國留學の途に上つたきり、もう熊本には歸らなかつた。――武藤智雄の『芥川龍之介』の中に、漱石が熊本を去つたのは、熊本の教頭になりそくなつたのも一つの原因をなしてゐる、然もこの事は「一部の人達の間では常識となつてゐる所である」旨が書いてある。然し事實は漱石は、芥川もその時言つてゐるやうに、東京にゐたかつたから、熊本に歸りたくなかつたのに過ぎない。この事に就いては後に詳說するが、第一「教頭心得」になつた計りで洋行した者が、教頭になりそくなつたから熊本に

歸らないといふのも、をかしな話である。

留學中にどうしても東京に住みたくなつたのとは別な理由からではあるが、漱石は既に松山にゐる時から、東京に住みたがつた。婚約が成り立つて、中根重一から東京に就職する事を希望された時にも、漱石は、さう注文通りに行くかどうかは分からないが、出來れば東京に住みたいと思つた。然し漱石のその希望は滿たされず、漱石は熊本に來てしまつた。結婚後も漱石は、この希望を捨てなかつた。中根重一の方でも、元より漱石の爲に、東京の口を探してやつた。然し學校の方にも、義理がある。漱石はさうさう手輕に、學校を渉りあるく事は、遠慮しなければならなかつた。その上漱石は、學校で人に物を敎へる事に、あまり興味を持つ事が出來なかつた。漱石は敎師をやめてしまはうかと考へ出した。それに就いて何か好い分別はないかと、漱石が中根重一の所に相談してやつたのは、明治二十九年(一八九六)十月の事である。然し是は、さし當り出來さうな口は、外務省の翻譯官位なものだらうといふ返事だつたので、ひとまづ漱石は斷念しなければならなかつた。翌明治三十年(一八九七)の春、中根の方から高等商業學校に年俸千圓高等官六等の口がある、金に不足があるならこつちで月月補助するから、歸つて來ないかと言つて來たが、是には漱石は、同じく敎師をするのなら、當分此所に留まつて、少し成績を上げてからでないと、動きたくないと返事を書いた。然し東京へ歸りたいといふ氣と、敎師をやめて「文學

三昧」でその日その日を送りたいといふ希望とは、漱石の中で段段強くなつて來たと見えて、漱石は明治三十年四月二十三日、子規に宛てて、かう書いてゐる。

「小生身分色々御配慮ありがたく奉謝候實は教師は近頃厭になり居候へどもさらば翻譯官はといふと果してやつて除るといふ程の自信と勇氣無之第一法律上の言語も知らぬ我々が外務の翻譯官と突然變化した處で英文の電報一つ滿足には書けまいと思ふなり尤も一二年見習の上は多少地のある事なれば何とか胡魔化しもきくべけれど差當りては到底高等官處か屬官の價値もあるまじと存候實は去年十月頃教師をやめたいが好分別はなきやと中根に相談致し候處外務の翻譯官に依賴し置きたり（多分小村なるべし）と申し越したり尊叔が課長なれば非常の好都合なれど自信なき事に周旋を賴み後に至り君及び加藤氏に迷惑がかゝりては氣の毒故其職掌事務等詳細の事相分り是ならば隨分君の面目を損する事なく遣つて行けるといふ見込がつく迄は先づ差し控た方可然と愚考致候

「仙臺の高中に目下行き度考なし仙臺は愚か東京の高等學校でも多分は辭する考なり否教師をして居る位なら當分現在の地位にて少し成蹟を現はしたる後にて動きたし過日高等商業學校長小山より中根を介して年俸千圓高等官六等にて來ぬかと申し來り中根も金の不足あるならば月々補助するから歸京せよとまで勸めたれど一方にては當地の校長は是非共居つて吳れねば困ると懇々

の依賴なりし故宜しい貴公が夫程小生を信じて居るならば小生も出來る丈の事はすべし又教師として世に立つ以上は先づ當分の處御校の爲に盡力すべしと明言したり且此語は校長のみならず山川を呼ぶ時にも明答に及びたる次第日下假令如何なるよき口ありとも自ら進んで求むるの意なく候尤も小生と當學校との關係變化する場合或は一身の事情にて斷然教育界を去る場合や或は官命にて是非なき場合は別問題にて自由に進退し得る境遇に御座候今回の翻譯官抔も教師の口で他へ轉ずる譯でないから小生に意思あり外務省で採用すれば當校を去る點に於ては別に苦情もある間鋪と思へども如何せん進んで願はれぬと申す譯は冒頭に申せし次第なれば是非なし

「偖小生の目的御尋ね故御明答申上たけれど實は當人自らが所謂わが身でわが身がわからない位故到底山川流に說明する譯には參り兼候へども單に希望を臚列するならば教師をやめて單に文學的の生活を送りたきなり換言すれば文學三昧にて消光したきなり月々五六十の收入あれば今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覺悟なれど遊んで居つて金が懷中に舞ひ込むといふ譯にもゆかねば衣食丈は少々堪忍辛防して何かの種を探し(但し教師を除ク)其餘暇を以て自由な書を讀み自由な事を言ひ自由な事を書かん事を希望致候然るに小生は不具の人間なれば行政官事務官抔は到底して吳れる人もなくあつても二三月で愛想を盡かすにきまつて居れば大抵な口では間に合はず因て先頃郵便にて今回若し帝國圖書館とか何とかいふものが出來る樣子だから若し出來たらば其

方へで「も」周旋して吳れまいかと中根へ申てやり候處圖書館の方は牧野に面會色々聞た處恰も松方內閣成立の始めでどうなるやら夢の様な話しなりとの返答中根より到着致候まゝ其話しは今日迄夫ナリに御座候」

漱石のこの時考へてゐた「文學三昧」が、何をする事であつたのか、よく分からない。「自由な書を讀み自由な事を言ひ自由な事を書」くといふが、例へばその「書」くものが、漢詩のやうなものであつたか俳句のやうなものであつたか、それとも論文のやうなものであつたか小說のやうなものであつたか、さういふ事はまるで分からない。もつとも是は當時の漱石にも、よくは分からなかつたのかも知れない。當時の漱石にとつては、そんな事はどうでもよく、寧ろ漱石は、學校の授業に煩はされる事がなく、學校の時間に縛られる事がなく、自分自身に自由に使へる時間を澤山持つて、何か眼に見えて生產的（フルフトバール）な——なんでも可いが、ただ生產的（フルフトバール）な仕事がしたかつたのではないかと思はれる。是には曾て『七草集』が刺激したやうに、自分自身に自由な時間を持ち、自分自身の好きな事をして、眼に見えて生產的（フルフトバール）な仕事を、著著とし續けてゐる子規の「文學三昧」が、再び漱石を刺激し、何か腕がむづむづするやうな氣持を起させたのかも知れない。ともかく漱石は、『愚見數則』にもあるやうに、自分には教師としての資格がない事を感じ、從つて教師といふ仕事を重荷に感じ、何か直接に自由に自分自身を表現する事の出來る仕事を、切に持

ちたがつてゐたのである。然し教職を抛つてまでその道に突き進むには、漱石はあまりに家族に對する責任を感じすぎた。漱石は已むを得ず、熊本に止まつてゐたやうに見える。事實また漱石は、厭厭熊本に止まつてゐたのに相違ないのである。といふ事は然し、漱石が教師としての職責を盡す事がなく、いい加減な事をしてその日その日のお茶を濁してゐたのだといふ事を、意味しない。反對に漱石は、教師としての自分の職責を十分盡したのみならず、頼まれれば喜んで生徒の爲に、課外講義として、毎朝七時からシェークスピアの講義をしてやつたりしたのみならず、學生の爲に俳句を說き、學生の爲に學資の心配をし、或者はうちに置いて世話をするなど、隨分親切に、また隨分周到に、學校の爲め學生の爲に、時間と勞力と金錢とを割いてやつてゐるのである。速水滉・高原操・木部守一・寺田寅彥・內丸最一郎・湯淺廉孫などの漱石の思ひ出が、その事を證明する。

漱石の高等學校での教授法は、中學の場合とは全然違つて、やさしいものをどんどん讀ませる方針だつたのださうである。是は恐らく高等學校の學生は、英語の基礎教育が出來てゐる筈だといふので、なるべく英語のいろんな文體といろんな言ひ廻しとに馴れさせた上で、どんな文章でも大體の意味を正確に把握出來るやうにする目的から來たものだつたのだらうと思ふ。漱石は教

場では實に嚴格で、下讀みをして來ない癖にその場でいい加減に胡魔化したりしようとすると、随分手嚴しくやり込められたものだつたといふが、質問でも、下らない字の意味を質問したりすると、そんな事は字書を引けば分かると言つて、決して質問に應じない、それだから漱石はみんなから怖がられ、外の先生の場合だと、教室へ來るのが遲くなつたりすると、皆で何所かへ逃げ出してしまふのに、漱石の時間には、誰も逃げ出すものがなかつたのださうである。然も漱石の講義は歯切れがよく、實によく分かるのみならず、科外講義のシェークスピアなど、「例の落著いた調子で、餘りに字句の穿鑿はせず、短評を狹んでの講義で、私共には初めてハムレットの面白味がわかつた」と、速水滉が話してゐるやうに、當時の學生にとつて、非常に印象の深い講義であつたといふ。

速水滉は同じ談話の中で、漱石の教室に於ける態度が、嚴格ではあつても、暖か味のある、一風變つた感じがあつたと言つてゐる。湯淺廉孫の談話の中にも、「教場では嚴格な、八釜しい、皮肉な先生と生徒の目には映じてゐたでせう。しかし一面非常に親しみのある人でした。」とある。是は湯淺廉孫が、股野義郎や土屋忠治などと相前後して、漱石の家に書生に置いてもらひ、親しく家庭内で漱石に顔を合せてゐたせゐもあつたのかも知れないが、然しそれ計りではなく漱石は、教場でも速水滉のいふやうに、嚴格ではあつても、暖か味があつて、一風變つた感じを與へてゐ

間の抜けた質問をしても、眞面目にさへ向つて行けば、いくらでも正面から相手になつてくれられた。その意味で、私なぞ先生には随分厄介になつたものです。例へば、重野安繹先生の如きは一向稽古臺にならない。いくらこちらが詰め寄つても、曖簾に腕押しで、終ひにはあはゝと笑つてしまはれる。そこへ行くと先生は好うござんしたな。宅へ行つても、一層親しみがありました。」と言つてゐる。この親しみと暖かみとが、なんとも名狀出來ない力で人を惹きつけたからこそ、寺田寅彦のやうな、愼み深い、また人の厄介になる事の非常に嫌ひな人間が、漱石が熊本の內坪井にゐる時分、物置でもなんでもいいから書生に置いてくれろと、漱石にせがむやうな氣持にもなつたのである。

三〇　俳句生活

子規が、明治三十年(一八九七)一月二日から三月十五日まで二十二回に亙つて『日本』新聞紙上で『明治二十九年の俳句界』を論じ、三月七日その第二十回で漱石に說き及び、その「意匠極めて斬新」にして「奇想天外より來」る點や、その「滑稽思想」や、その「或は漢語を用ゐ、或は俗語を用ゐて、或は奇なる言ひまはしを爲」して、自分の言ひたい事を自在に表現し得る點や、滑稽な句も作るが、然し眞面目なものは實に眞面目である點などと、その特徵として指摘したといふ事は、既に述べた。子規の俳句革新の運動が、澎湃として全國に行き亙り出したのは、恐らくこの明治二十九年(一八九六)の事であると言つて可いであらう。それは又同時に、子規竝びに子規門下の俳人たちが、最も旺盛な制作欲の下に、最も旺盛に、立破な作品を、續續公けにし出した時であつた。この事は亦、漱石自身に就いても言はれ得る。明治二十八年の九月から俳句を本氣に作らうとし出した漱石は、明治二十九年を通じても、同樣句作に脂が乘り、松山から熊本

に轉任し、轉任匆匆結婚し、結婚後間もなく頼まれて科外講義の『ハムレット』を始めるといふ風に、相當句作の煩ひが次ぎから次ぎへと重なつてゐたらしいにも拘はらず、明治二十九年中に漱石が子規の所へ送つてやつた句數は、外に子規初め友人の所へ宛てた手紙の端に書いた句、その他句稿になくて『承露盤』だけにあつたり、雜誌に載つたりした句などと合せて五百句に近く、一ケ月平均四十句強、一日平均一句半弱の割合で作つてゐるのである。

もつとも一日平均一句半弱位の割合では、あまり制作欲が旺盛だといふ事は、出來ないかも知れない。現に明治二十九年九月二十六日子規宛の手紙の中で、漱石は「俳句も近頃は頓と浮び申さず困却致候夫にも關らず小生の駄句時々雜誌抔に出るよし生徒抔の注進にて承知致候少々赤面の至と存じ何か傑作をものせんと思ひ立つ事有之候へども思ひ立つのみにして毫ものにはならない事が不思議に御座候」と言つてゐる。漱石自身といへども、自分が句作に精進してゐるとは、己惚にも考へる事が出來なかつたに違ひない。然し漱石には、學者としての、自分の專門の仕事があつた。學校の爲に奪はれる時間と精力とを除けば、あとの時間と精力とはその方に注ぎ込まれなければならない。俳句はすべて、その餘暇に作られるのである。そんなに澤山作句のある筈がない。その上句作の多くないといふ事は必しも漱石が、俳句に對する興味を失つた事を意味しなかつた。漱石が、頭の中で俳句に關する工夫を積めば積むほど、漱石の句作は、段段少くなつ

て行くといふ事も、十分あり得る。事實漱石が俳句に興味を失つてゐなければこそ、また漱石が絶えず頭の中で俳句に關する工夫を重ねてゐたればこそ、例へば同じ子規宛の手紙の中ででも、漱石は「俳書購求一件は大兄より虛子にでも御托し被下度候又同子に御面會の節活版の七部集及故人五百題一部づゝ乍面倒送る樣御依賴被下度候」とも書いてゐるのである。

同じ年の十一月十五日漱石は子規に宛てて、「俳句頗る不景氣につき差控へ申候其癖種切の有樣に御座候」といふやうな、自分の仕事を安く見縊つたやうな事を書いてゐるが、然し一方では「虛子の俳論を讀み候內容と外容の議論「論事矩」を應用したる所面白く御座候或點に於て內容を充すと同時に外容を縮めざる事を力むべきは誰も同感ならんと存候然し夫が爲め好んで詩形の外に逸出せば遂に俳句なきに至らんか況んや外容內容共に依然たるの時に於て猶好んで字句を膨張せば不必要の勢力を使用するに過ぎざらん虛子好んで長句を用ふ是旣に十七字の詩壘を離れんとするなり全く離るゝは可なり虛子今日の擧動は半身を壘外に排して敵を麾ぐが如し矢石の標とならずんば幸なり敢て貴意を問ふ」といつて、俳句の根本問題の一つに就いて、自分の意見を吐露してゐる。また例へば同じ年の十二月五日高濱虛子に宛てて漱石は、「今日日本人三十一號を讀みて君が書牘體の一文を拜見致し甚だ感心致候立論も面白く行文は秀でゝ美しく見受申候此道に從つて御進みあらば君は明治の文章家なるべし益御奮勵の程奉希望候先日世界の日本に出たる

「音たてて春の潮の流れけり」と申す御句甚だ珍重に存候子規子がものしたる君の俳評一讀是亦面白く存候人事的時間的の句中甚だ新にして美なるもの有之候様に被存候然し大兄の御近什中には甚だ難澁にして詩調にあらざるやの疑を起し候ものも有之様存候（心安き間柄失禮は御海恕可被下候）所謂べくづくし抔は小生の尤も耳障に存候處に御座候然し「吾に醉べく頭痛あり」又「豐年も卜すべく新酒も醸すべく」抔は至極結構と存候凡て近來の俳句一般に上達巧者に相成候様子に存候讀賣抔に時々出るのは不相變まづき様覺候まづしと云へば小生先頃自身の舊作を檢査致し其まづきことに一驚を喫し候作りし當時は誰しも多少の己惚は免るべからざる事ながら小生の如きは全く俳道に未熟の致す處實に面目なき次第に候」と書いてゐる。漱石が自分の舊作を點檢して「面目なき次第」と感じたといふのは、虛子近來の傾向をいろいろに非難した事に對する償ひの意味もあつたには違ひないが、然しそれとともに、漱石の反省と工夫とが、漱石を絶えず進步せしめ、自分の舊作を眺めては「面目なき次第」と感ぜしめるのみならず、現在の自分に對しても亦、甚だしい不滿を感ぜしめる結果であつたのに外ならないと思ふ。漱石が虛子の字餘りの句に疑義を挾み、或は「大兄の御近什中には甚だ難澁にして詩調にあらざるやの疑を起し候ものも有之様」に思ふと言ひ、或は「所謂べくづくし抔は小生の尤も耳障に存候處に御座候」と言つてゐるのなぞでも、漱石のその反省と工夫とが、文字の末末にまでも行き亙つて、實に精到を極め

てゐる事を物語るものである。

もつともさういふ外面的な材料に俟つまでもなく、漱石が明治二十九年に至つて句の上でどんな進歩の跡を示してゐるかは、漱石の句そのものが最も雄辯に證明する。「短夜の芭蕉は伸びて仕まひけり」・「すゞしさや裏は鉦うつ光琳寺」・「滿潮や涼んで居れば月が出る」・「博多公園　初秋の千本の松動きけり」・「船後屋溫泉　ひや／＼と雲が來るゝ溫泉の二階」・「内君の病を看護して　枕邊や星別れんとする晨」・「廻廊の柱の影や海の月」・「明月や丸きは僧の影法師」・「作らねど菊咲にけり折りにけり」・「長けれど何の糸瓜とさがりけり」・「月東君は今頃寐て居るか」・「憶古白　古白とは秋につけたる名なるべし」・「別戀　見送るや春の潮のひた／＼に」・「絶戀　忘れしか知らぬ顏して畠打つ」・「恨戀　行春を琴掻き鳴らし掻き亂す」・「凩や海に夕日を吹き落す」・「底見ゆる一枚岩や秋の水」・「日あたりや熟柿の如き心地あり」・「魏叔子大鐵椎傳　星飛ぶや枯野に動く椎の影」・「うつむいて膝に抱きつく寒哉」——適宜に抄出したこれらの句の中で著しく眼につく事は、漱石の内面世界が豐富であるといふ事とともに、それを表現するに當つて、漱石が前年に比べて、自分の句の中に、遙に多分に「寫實」的な要素を導き入れてゐるといふ事である。此所で漱石は大膽に、自分の「天性」を正面に押し出してゐる。然もその「天性」に十分の現實性を與へる爲に、それを一度「寫實」の坩堝の中に放り込んでゐる。漱石の句は、客觀され

た景物といへども必ず奥に漱石の内部に動いてゐるポエジーを貯へてゐないものはない。然も漱石の頭の中に搖曳するさまざまな幻想は、漱石の感覺の鋭さと强さとによつて「寫實」的に客觀化され、一つのはつきりした形象として、第三者の前に跳り出る。

この傾向は、明治三十年(一八九七)に至つて、一層顯著である。明治三十年に漱石が子規に送つた句稿の句數は、漱石がこの年の夏の休みに上京して子規の所で作つた句や、子規初め外の友人の所に書いて送つた句數を加へても、三百句に滿たない。前年の約半分である。然し句そのものの粒が揃つて、佳句の多い點から言へば、明治二十九年の句は、明治三十年の句の敵ではない。明治三十年に至つて漱石の技巧はその絶頂に達し、どんな題材でも――嚴密に言へば漱石自身の中に動くどんな幻想を表現するのでも――自在に表現し悉して、遺憾がないといふやうな、錬達無比の境地に到達したやうに見える。「燭きつて曉ちかし大晦日」・「人に死し鶴に生れて冴え返る」・「寒山か拾得か蜂に螫されしは」・「ふるひ寄せて白魚崩れん許りなり」・「落ちさまに虻を伏せたる椿哉」・「明天子上にある野の長閑なる」・「柳あり江あり南畫に似たる吾」・「朧夜や顏に似合ぬ戀もあらん」・「春は物の句になり易し古短册」・「木瓜咲くや漱石拙を守るべく」・「瀧に乙鳥突き當らんとしては返る」・「菫程な小さき人に生れたし」・「西函嶺を踰えて海鼠に眼鼻なし」・「菜の花の遥かに黄なり筑後川」・「筑後路や丸い山吹く春の風」・「山高し動ともすれば春曇る」・

「留針や故郷の蝶餘所の蝶」・「魚は皆上らんとして春の川」・「圓覺寺　冷やかな鐘をつきけり圓覺寺」・「歸源院卽事　佛性は白き桔梗にこそあらめ」・「晴明の頭の上や星の戀」・「留別　朝寒み夜寒みひとり行く旅ぞ」・「萩に伏し薄にみだれ故里は」・「明月や拙者も無事で此通り」・「妻を遺して獨り肥後に下る　月に行く漱石妻を忘れたり」・「某は案山子にて候雀どの」・「有感　ある時は新酒に醉て悔多き」――どれをとつて見ても、みんな自由自在に言ひたいままが表現されてゐる。ある場合には、その腕のよさが眼に立つて、奥に籠もつてゐる筈の、作者の感情を忘れてしまひさうな句さへ、なくはないほどである。例へば「いたづらに菊咲きつらん故鄕は」といふ明治二十八年の句と「萩に伏し薄にみだれ故里は」といふこの年の句を比べて見ても、いかに漱石の内部とその表現とが、二年の間に目ざましく進步してゐるかを、一目で明らかにする事が出來ると思ふ。

寺田寅彥によると、漱石は寅彥に、俳句はレトリックのエッセンスを貸つめたものであると敎へたのださうである。この事は漱石の俳句に於いて感じてゐたもの、俳句修業に於いて目ざしてゐたものを、最も簡單明瞭に道破した言葉であるやうに思はれる。漱石は旣に明治二十九年の十一月に、「虛子好んで長句を用ふ是旣に十七字の詩疊を離れんとするなり全く離るゝは可なり虛子の今日の擧動は半身を壘外に排して敵を麾ぐが如し」と言つて、俳句十七字論者としての自分

の立場を明らかにしてゐる。人が、十七字を離れては俳句は成り立ち得ないと考へる以上、その人にとつて、俳句の天地は必ず十七字の天地であり、その人は、自分の歡び、悲しみ、憧がれ、惱み、夢、幻、――自分がそれを表現する事によつて表現の歡びに與からうとするすべての感情を、その十七字の中に詰め込む覺悟を持つてゐなければならない。然も俳句は、その傳統から言つても、また當時の傾向から言つても、其所で表現される感情が、自然の景物によつて滲透されてゐる事を、自然の景物と融合・反襯し、言はば自然の景物を藉りて具體化される事を、要求してゐる。從つて俳句は、人がそれを眞正な意味での表現機關としようとすればするほど、最も不利益な條件に於いて、最も嶮難な戰ひを戰はなければならない、特殊な藝術である。其所ではまづ自分の複雜な感情が、一點に凝集されなければならない。さうしてその一點に凝集されたものは、それに適切な自然の景物の中に移入されなければならない。最後にその自然の景物の中に移入された感情は、自然の景物とともに活きて動いて、象徵的に、自分が嘗て感じた複雜なものを、無限に示唆しなければならない。――この手續きこそ、恐らくは漱石がレトリックのエッセンスの煑つめたものと言つた、その手續きであるのに違ひないのである。

然しこの手續きをさして、レトリックのエッセンスの煑つめたものと言つてしまふのは、何か物足りない、適切でないものがあるやうにも感じられる。俳句で重大なのは、表現の問題よりも、

寧ろ感じ方の問題、感じ方の經濟の問題だからである。勿論それは含蓄ある言葉の選擇とその言葉の餘韻ある排列の工夫とに關聯し、畢竟レトリックの問題になつて來るのには違ひないが、然しそれは、レトリックといふ言葉を用ひては誤解を招き易い、レトリック以前のものを多分に含んでゐるのである。それをなほレトリックといふ言葉で說明してしまはうとするのは、或は相手に通じ易くする便利から來たものとも思はれるが、然しさういふ考へ方が漱石に影響し、漱石に普通に所謂レトリック(漱石が嘗て子規と論爭した意味でのレトリック)のエッセンスを萃つめたものとしての俳句を、幾つか作らせるに至つたのだと、考へられなくもない。「人に死し鶴に生れて冴え返る」でも、「明天子上にある野の長閑なる」でも、「寒山か拾得か蜂に螫されしは」でも、かういふ世界は是以上適切に表現のしやうはないと思はれるほど、手の利いた句である事には論がないが、然しその世界そのものには、何かしんみりしないもの、作者の魂と讀者の魂とがぢかに觸れ合ふ事のないもの、卽ち人巧的なものが存在し、強ひて言へば、後の『草枕』だの『虞美人草』だのの文章に感じる、厭味のやうなものを感じさへする。

俳句がかういふ傾向に進んで行くとすれば、句作の數が少くなり、句に對する興味が減つて行くのも、自然である。もつと自分自身の魂に直接なものでなければ、いくら澤山句を作つても、その句はその人に何か物足りない感じを起こさせるに違ひないからである。もつとも漱石はさう

いふ意味ではなく、自分自身の中の表現を迫るものが、段段複雜に、俳句の表現能力を超えたものになり、從つて俳句ではどうしても滿足する事が出來なくなつたから、次第に俳句から遠ざかつて行つたものらしくも見える。漱石が明治三十年（一八九七）十二月に『無題』、明治三十一年（一八九八）三月に『春興』・『失題』・『春日靜坐』・『菜花黃』などと、古詩・律詩を作つてゐるのも、恐らくその心持の現はれである。明治三十一年・明治三十二年・明治三十三年と、年を追うて漱石の句數は少くなつて行つた。明治三十一年は總數百句を越える事僅かである。明治三十二年（一八九九）は總數三百句を越えはするが、然しそのうち二月の「梅百五句」と、正月宇佐から日田へかけて旅行した時の六十六句と、九月阿蘇に登つた時の三十三句とを除けば、餘す所の句數は、前年度よりも遙に少ない。明治三十三年（一九〇〇）には、漱石は官命によつて、九月英國留學の途に上つた。この年漱石は、合計十五句しか作つてゐない。

寺田寅彥の『夏目漱石先生の追憶』によると、寅彥が初めて漱石の所へ訪ねて行つたのは、寅彥の第二學年の學年試驗の終つたころで、漱石が「白川の河畔で、藤崎神社の近くの閑靜な町」に住んでゐた時分だつたといふから、それは恐らく明治三十一年（一八九八）七月の事だつたに違ひない。寅彥はその時漱石に、俳句とはどういふものであるかといふ事を聽き、「急に自分も俳句がやつて見たくな」り、夏休みに國へ歸つてから、「手當り次第の材料をつかまへて二三十句ばか

りを作」り、九月にまた熊本に出て來るなりそれを漱石に見てもらつたといふが、寅彦はその後ずつと厨川千江・平川草江・原(當時蒲生)紫川などとともに、漱石に俳句の教へを受ける事になつたのださうである。——明治三十一年六月十日の漱石の手紙で見ると、蒲生紫川・厨川千江は、その前から漱石の所へ出入して、俳句を見てもらつてゐる。同じ年の三月二十一日に、漱石は虚子に宛てて、『新俳句』を贈つてもらつた禮を言つてゐる。或はこの『新俳句』の出版が刺激になつて、漱石の周圍に若い學生が集るやうな機運が動いたのではないかとも想像されるが、それはともかく、かうして漱石の周圍に若い人人が集つて來れば、いくら漱石が段段俳句に遠ざかつて來つつあつたとは言つても、その刺激で多少は俳句に對する興味を喚び戻されるのも、當然の事だつた。その上漱石は、もともと俳句が嫌ひではないのである。のみならず自分の親友の子規は、それを自分の畢生の事業として、一所懸命働らいてゐるのである。それだからこそ漱石は、明治三十二年(一八九九)十二月十一日の虚子宛の手紙ででも、或は「先般來當熊本人常松迂巷なる人當市九州日々新聞と申すに紫溟吟社の俳句を連日掲載する樣盡力致し猶東京諸先俳の俳句も時々掲載致し度趣にて大兄へ向け一書呈上候處其後何等の御返事もなきよしにて小生より今一應願ひくれる樣申來候右迂巷と申す人は先般來突然知己に相成候人なるが非常に新派の俳句に熱心忠實なる人に有之實は今回の擧抔も新派勢力扶植の爲めの計畫に候左すればほとゝぎす發行者などは

大に聲援引き立てゝやる義理も有之べきかと存候且九州地方は新派の勢力案外よはくほとんど俳句の何ものたるを解せざる有様に候へば俳句趣味の普及をはかる點より論ずるも幾分か大兄抔は鼓吹奬勵の責任ありと存候右の理由故何とか返事でも迂巷宛にて御差出可被下候又日日新聞は同人より大兄宛にて毎日御送致し居候よし定めて御閲覽の事と存候」といひ、或は「「ほとゝぎす」が同人間の雑誌ならばいかに期日が後れても差支なけれど既に俳句雑誌抔と天下を相手に呼號する以上は主幹たる人は一日も發行期日を誤らざる事肝要かと存候……」といひ、或は「「ほとゝぎす」中にはまゝ樂屋落の様な事を書かれる事あり是も同人間の私の雑誌なら兎に角苟も天下を相手にする以上は二三東京の俳友以外には分らず隨つて興味なき事は刪られては如何加之品格が下る様な感じ致候高見如何……」といふやうな、親友の事業を完成させる上に必要な配慮を、いろんな方面に配り、相手にとつては痛い、忠告もする氣になるのである。後の『東京朝日』の編輯長を勤めた澁川玄耳も、この『紫溟吟社』の同人の一人であつた。後に玄耳に頼まれて、漱石と『朝日』との間の橋渡しをした坂元雪鳥も、たしか『紫溟吟社』に關係があつたと思ふ。もつとも雪鳥は野間眞綱などとともに、漱石の俳句の弟子だつたのである。

然し、さういふ事はしても、漱石の俳句そのものに對する關心は、年年減退した。明治三十年十二月十二日漱石は子規に宛てて、「小生碌々矢張因例如例に御座候俳句頓とものにならず嚢底

と共に拂底に御座候」と書いてゐる。明治三十一年三月二十一日虚子に宛てて、「小生爾來俳境日々退歩昨今は現に一句も無之候此分にてはやがて鳴雪老人の跡釜を引き受る事ならんと少々寒心の體に有之候」と書いてゐる。同じ年の九月四日、菅虎雄に宛てて、「近頃は頓と俳句も作り不申」と書いてゐる。明治三十三年四月五日、村上霽月に宛てて、「近頃は發句廢業駄句もなにも皆無に候」と書いてゐる。

三　旅行

熊本にゐる間、漱石は方方旅行した。その旅行に漱石は、大抵鏡子を連れて旅行したのは、明治二十九年の秋の、北九州の旅行が初めての終りである。『漱石の思ひ出』によると、鏡子はこの時の旅行で、九州の宿屋だの溫泉宿だのの汚ない事、夜具の襟の垢だらけである事、湯槽のぬるぬるしてゐる事などで、すつかり旅行に愛想をつかしてしまひ、その後九州の旅行には、誘はれてもくつついて行かなかつたのださうである。

もつとも漱石の旅行の中には、學生の修學旅行にくつついて行く旅行だの、英語授業視察の爲め出張を命じられてする旅行だのもあつた。第五高等學校の記錄によると、漱石は明治二十九年（一八九六）十一月九日「修學旅行ニ付天草島原地方へ出張ヲ命」じられてゐる。是は外に文獻の徵すべきものがない。然し既にかういふ辭令が出てゐるのだから、漱石が天草・島原地方をあるいて來た事には、疑ひがない。

翌明治三十年（一八九七）四月十八日子規宛の手紙に、漱石は「今春期休に久留米に至り高良山に登り夫より山越を致し發心と申す處の櫻を見物致候歸途久留米の古道具屋にて士朗と淡々の軸を手に入候につき御慰の爲め進呈致候……」と書いてゐる。是は親友の菅虎雄が病氣の爲め五高を辭して、郷里久留米に引き籠つたのを、見舞ふための旅行であつた。この旅行で漱石は、相當澤山の名句を作つてゐる。「高良山　石磴や曇る肥前の春の山」・「菜の花の遙かに黄なり筑後川」・「筑後路や丸い山吹く春の風」・「山高し動ともすれば春曇る」・「濃かに彌生の雲の流れけり」などといふのが、それである。然もこの花の旅で興味がある事は、この旅の經驗が、どうも『草枕』の中の、畫工が山越しをする場面に利用されてゐるらしいといふ事である。「石磴や曇る肥前の春の山」は、無論高良山から見晴した所を詠んだものに違ひないが、旣にこの邊から『草枕』の景色を感じさせるものがある。「菜の花の遙かに黄なり筑後川」の「筑後川」は、『草枕』の中には出て來ない。然し「菜の花の遙かに黄なり」の景色は、其所にちやんと描き出されてゐる。「山高し動ともすれば春曇る」は、畫工が山の中で雨に遭ふ事の可能を、氣象學的に證明してゐるやうな句である。「雨に雲に櫻濡れたり山の陰」・「松をもて圍ひし谷の櫻かな」・「花に濡るゝ傘なき人の雨を寒み」・「人に逢はず雨ふる山の花盛」――これらの句と畫工が峠の茶屋に這入つて行く前、雨に濡れながら山の中をあるいてゐる景色の描寫とを比較するならば、人人

はその類似が、單なる通り一遍の類似ではなく、相當箇性的に類似してゐる事に、氣がつくに違ひない。

再び第五高等學校の記録によると、この年十月二十九日漱石は「學術研究ノ爲メ福岡佐賀兩縣下へ出張ヲ命」じられてゐる。是は、漱石がこの年四月、自分の學校へ呼んだ山川信次郎と一緒に出張したものだつたといふ事は分かつてゐるが、然し漱石がこの時、何所と何所とをあるいたものかは、分からない。然し是は中學の英語授業の視察だつたのだから、恐らく兩縣下の目ぼしい中學は、ほぼあるいたものに違ひない。「紫影に別るゝ時　菊の頃なれば歸りの急がれて」といふ句は、この時の句である。藤井紫影は福岡の修猷館中學の教師をしてゐたのである。

次いで漱石は、この年の暮から明治三十一年の正月へかけて、山川信次郎と一緒に、小天溫泉に出かけてゐる。この小天が『草枕』の舞臺にとられてゐるといふ事は、誰でも知つてゐる。然し『草枕』の舞臺は、一面の春景色であるにも拘はらず、漱石が小天に行つたのは、少くとも文獻的には、この冬一度ぎりである。是は菅虎雄が溫泉宿の主人、前田案山子を知つてゐた關係から出かけたのだといふが、『草枕』第十二の中に、「門を出て、左へ切れると、すぐ岨道（そばみち）つゞきの、爪上りになる。鶯が所々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑が一面に植ゑてある。右には高からぬ岡が二つ程並んで、此所にもあるは蜜柑のみと思はれる。何年前か一度此地に來た。

指を折るのも面倒だ。何でも寒い師走の頃であつた。其時蜜柑山に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一枝賣つてくれと云つたら、幾顆でも上げましよ、持つて入らつしやいと答へて、樹の上で妙な節の唄をうたひ出した。東京では蜜柑の皮でさへ藥種屋へ買ひに行かねばならぬのにと思つた。夜になると、しきりに銃の音がする。何だと聞いたら、獵師が鴨をとるんだと教へてくれた。其時は那美さんの、なの字も知らずに濟んだ。」と書いてある、その冬の景色が、この時の景色だつたのだらうと思ふ。

漱石がこの明治三十年から三十一年へかけての冬以外に、もう一度小天に行つたやうな事を言ふ者がある。然し是は事實か想像か、はつきり分からない。漱石は既に『草枕』の初めで、「山越を致し發心と申す處の櫻を見物致候」といふ、その發心で自分が經驗した事を利用してゐる。漱石が『草枕』で、自分が是までに經驗した「春」をすつかり動員して、たつた一度、その冬の姿しか見なかつた小天に、「春」の化粧を試みたとしても、それは少しも不思議な事ではない。のみならず漱石は、明治三十一年(一八九八)一月十八日、夏目金之助・山川信次郎の連名で、前田案山子に宛てて、「拜啓先日は兩人にてまかり出種々御厄介に相成御禮申上候今囘は見事なる蜜柑幷びに茸わざ〳〵御惠送にあづかり奉萬謝候先は右口上迄早々如斯に御座候也　頓首」といふ禮狀を書いてゐるが、それが一本だけ前田家に保存されてゐるのも、漱石の小天行が一度きりであ

つた事を、反面から證明するやうにも思はれる。漱石は當時其所で「降りやんで蜜柑まだらに雪の舟」・「かんてらや師走の宿に寐つかれず」・「溫泉の門に師走の熟柿かな」・「溫泉の山や蜜柑の山の南側」・「海近し寐鴨をうちし筒の音」・「うき除夜を壁に向へば影法師」・「馳け上る松の小山や初日の出」などといふ句とともに、「小天に春を迎へて　溫泉や水滑かに去年の垢」といふ句を作つてゐるのである。

第五高等學校の記錄には、同じ年の十一月十一日附で、「修學旅行ニ付山鹿地方へ出張ヲ命ズ第五高等學校」といふのが出てゐる。然し是は天草・島原地方の修學旅行と同樣、俳句にもなつてゐなければ、手紙にも書かれてゐない。

明治三十二年の句には、「元日屠蘇を酌んで家を出づ　金泥の鶴や朱塗の屠蘇の盃」といふのだの、「宇佐に行くや佳き日を選む初暦」だのといふのがあつて、漱石が元日に立つて宇佐に詣で、羅漢寺に行き口の林に一泊し、耶馬溪をあるいて、柿坂を經て守實に泊り、峠を越して日田に出、筑後川の上流を下つて吉井に泊り、「追分」を經て多分久留米に出た上で、汽車で熊本へ歸つて來た事を物語つてゐる。旅行の句の中には、「峠を下る時馬に蹴られて雪の中に倒れければ　漸くに又起きあがる吹雪かな」といふのがある。また「追分とかいふ處にて車夫共の親方乘つて行かん喃といふがあまり可笑しかりければ　親方と呼びかけられし毛布哉」といふのもある。『坊つち

やん』第三の中に、「二年前ある人の使に帝國ホテルへ行つた時は錠前直しと間違へられた事がある。ケツトを被つて、鎌倉の大佛を見物した時は車屋から親方と云はれた。」といふ一節がある。漱石が大學生の時分、ほんの少しばかり大學の教師をしてゐたオーガスタス・ウッドが、初めて自分を訪ねて來た漱石を、錠前屋と間違へたといふ話は、既に有名であるが、漱石が車屋から「親方」と呼ばれたといふのは、實は「鎌倉の大佛」ではなく、この「追分」で經驗した事だつたのである。九州の田舍では、少くとも明治三十五六年までくらゐは、多くの人は雪の降る日に、赤だの青だのの毛布を頭からかぶつてあるいた。漱石もこの吹雪に、或は毛布を頭からかぶつてあるいてゐたのではないかと思ふ。

明治三十二年(一八九九)九月初めごろに、漱石は山川信次郎と一緒に阿蘇登山を試みた。九月五日の日附で子規の許に送つた句稿第三十四には、その途上矚目の句が、澤山書き込まれてゐる。戸下溫泉・內牧溫泉といふのは、熊本から阿蘇へ登る途中の、寧ろ阿蘇山中の溫泉である。「阿蘇山中にて道を失ひ終日あらぬ方にさまよふ　灰に濡れて立つや薄と萩の中　行けど萩行けど薄の原廣し」や、同じ句稿に添へてある「阿蘇山二首」の「赤き烟黑き烟の二柱眞直に立つ秋の大空」・「山を劈いて奈落に落ちしはたゝ神の奈落出でんとたける音かも」などを讀むと、『二百十日』の背景には、すべてこの時の經驗が利用されてゐる事が、分かる。「重ぬべき單衣も持た

ず肌寒し」・「山里や今宵秋立つ水の音」・「秋雨や蕎麥をゆでたる湯の臭ひ」・「立野といふ所にて馬車宿に泊る　語り出す祭文は何宵の秋」――これらの句が表現する世界もすべて、何等かの形で『二百十日』の中に嵌め込まれてゐる世界である。

漱石が熊本にゐた時分の旅行は、是だけである。多くの人がさうであるやうに、漱石も旅行をすると、大抵は句を作つた。然し明治三十年・三十一年・三十二年と年がたつにつれて、漱石の俳句は、(勿論明治三十二年の『熊本高等學校秋季雜咏』のやうな、手だれの名句も澤山あるにはあるが)、漱石が旅行した時ででもなければ見られないやうな、觀を呈した。少くとも漱石の俳句は、漱石の旅行中の句をのければ、あとにはいくらも殘らないやうな事になつて行つてゐるのである。

漱石は、明治三十三年(一九〇〇)の秋には、ドイツ船に乘つて、英國留學の途に上る、大きな、海を超える旅をする。然しこの旅は、環境も心持も特別なものであつただけに、漱石に句作の感興を湧き立たせる事が殆んどなかつた。かうして漱石はますます俳句から遠ざかつた。その後漱石がいくつか俳句を作つてゐるのは、ほんの惰性に過ぎない。

三　結婚生活

明治二十九年（一八九六）六月九日漱石が結婚式を擧げたのは、光琳寺町の家であつた。然し九月二十五日の日附で、漱石が子規に「小生今回表面の處に移轉せり熊本の借家の拂底なるは意外なりかゝる處へ來て十三圓の家賃をとられんとは夢にも思はざりし「名月や十三圓の家に住む」かね」と書いてゐる所を見ると、漱石は間もなく、光琳寺町から合羽町二百三十七番地に越して行つたらしい。『漱石の思ひ出』によると、合羽町の家といふのは、まだ建てて間もない、また相當間數の澤山ある、大きな家ではあつたが、がさつな普請だつた。然し光琳寺町の家といふのは、もと妾宅で、それだけに萬事小粋に出來てはゐたが、すぐ前が墓場である上に、妾が不義をして此所でお手打にあつたとかいふ噂があつて、なんとなく不氣味な家だつたので、合羽町の家を借りる事にしたのださうである。漱石は合羽町の家に一年計り住んだ。その間には、五高の歴史の教授をしてゐた、長谷川貞一郎が暫く同居してゐたし、後には山川信次郎も暫く同居してゐ

たといふ。山川信次郎が五高に赴任して來たのは、明治三十年四月だつた筈である。——明治三十年の正月は、漱石が新しい家庭を持つた初めての正月で、鏡子はどうして好いか勝手が分からないながらも、一所懸命御馳走を拵らへて置いた所、漱石の客と長谷川貞一郎の客と、正月の客が一緒になり、その上生徒も五六人年始に來たので、御馳走が足りなくなつて、漱石は怒り出す、長谷川はなだめる、鏡子が大變にまごついたといふ話も、それ以來漱石は、正月には旅行して、なるべくうちにゐない方針をとる事にしたといふ話も、同じ『漱石の思ひ出』の中に出てゐる。

明治三十年(一八九七)六月二十九日、漱石の父直克が八十四歳で死んだ。漱石は、前にも言つたやうに、いろんな理由から、父に對して、愛情をも敬意をも持つ事が出來なかつた。それでも漱石は、五高の學年試驗を濟ませるや否や、鏡子をつれて、そこそこに東京に歸つた。然るに、その時姙娠してゐた鏡子は、それとは知らずに、長い道中を汽車に搖られたりした爲に、東京に著いて間もなく流產してしまつた。鏡子は里の者の行つてゐる鎌倉に出養生する。漱石は自分の家だの鏡子の里だのに泊つて、子規の所へ遊びに行つたり、東京と鎌倉との間を往復したりする。その內夏休みの期限も切れさうになつたので、漱石は鏡子を里に預けたまま、獨りで熊本に歸つて行つた。「妻を遺して獨り肥後に下る　月に行く漱石妻を忘れたり」といふのは、この時の句である。「今日ぞ知る秋をしきりに降りしきる」・「萩に伏し薄にみだれ故里は」・「明月に今年も

旅で逢ひ申す」・「眞夜中は淋しからうに御月樣」・「明月や拙者も無事で此通り」・「蝉よ秋ぢや鳴かうが鳴くまいが」・「秋の暮一人旅とて嫌はるゝ」・「朝寒の膳に向へば焦げし飯」・「長き夜を平氣な人と合宿す」・「吏と農と夜寒の汽車に語るらく」――恐らくはこの旅で作られたものに違ひないこれらの句は、勿論藝術的な價値の高下はあるが、すべて何か淋しい、侘しい心持を奧に祕めてゐないものはない。

漱石は九月十日の午後に熊本に到著し、その翌日大江村四百一番地に越して行つた。是は落合東郭の留守宅で、東郭の夫人の里である元田永孚の宅の隣で、「家の前は一面に畑、その先が見渡す限り桑畑が續いて、森の都と言はれる熊本郊外の秋の景色は又格別」だつたが、「其代り冬になると隨分と寒く、見たこともないやうな大きな氷柱が、水車のあたりにのべつたらに下がつて居」たのださうである。この家賃は七圓五十錢だつた。その上父が死んだので、漱石は、是まで父の所へ毎月送つてゐた拾圓の金を送る必要がなくなり、大學への貸費の返金も濟んだので、此所に住むやうになつてから、經濟上多少の餘裕も出來るやうになつたといふが、その爲めか何か、十月の末に鏡子が熊本に歸つて見ると、新しい家に書生が一人來てゐたのださうである。是が後に『猫』の中の多々羅三平は自分の事を書いたものである、あれは迷惑だから取り消してもらひたいと漱石に申し込んで、漱石を困らせた股野義郎であつた。股野は勿論五高の生徒である。後

に土屋忠治も加はつて、漱石の所には、書生が二人になつた。さうして二人は明治三十一年の七月に第五高等學校を卒業する。湯淺廉孫が漱石の所に厄介になつたのは、そのあとの事に違ひない。

大江村の家には漱石は、八ケ月位しか住まなかつた。それは明治三十一年（一八九八）の三月に、家主の落合東郭が東京から歸つて來て、熊本に勤める事になつたからである。漱石は井川淵に小さい家を見つけて、越して行く。今度の家は白川の川べりで、すぐ近くに明午橋が見えてゐたといふのだから、明治三十一年の漱石の春の句、「白川　颯と打つ夜網の音や春の川」・「藤崎八幡禰宜の子の烏帽子つけたり藤の花」・「明午橋　春の夜のしば笛を吹く書生哉」などといふのは、恐らくこの家からの嘱目を詠んだものだらうと思ふ。

この年、明治三十一年（一八九八）の一月、狩野亨吉が第五高等學校の敎頭として、熊本にやつて來た。狩野亨吉は、前から漱石の敬愛してゐた、親友である。菅虎雄は病氣の爲め當時五高にはゐなかつたが、然し山川信次郎だの狩野亨吉だの、古い時分からの友人が、熊本には大分集つて來たのだから、漱石も、松山のやうに淋しがる必要もなかつたらう。その狩野亨吉の住んでゐた宅があいたといふので、漱石は井川淵の家から、內坪井町七十八番地の家に越して行つた。是は『漱石の思ひ出』によると「秋」とあるが、然し明治三十一年九月四日漱石が東京にゐる菅虎

雄に宛てた手紙には、既にこの住所が書いてある。然も菅虎雄はその前に上京してゐる。さうして菅の上京する前に、引越しは既に濟んでゐたらしく思はれる。引越しは或は夏の休みの、八月中に行はれたのではなかつたかと思ふ。この家は、『漱石の思ひ出』によると、漱石が熊本で住んでゐた家の中で、一番いい家で、家そのものはさほど廣くもなかつたが、廣い庭があり、桑畑があり、もとの持主が厩と馬丁部屋として建てたのを、作りなほした別棟の廣い物置があり、なんでも屋敷は五六百坪にも餘る屋敷だつたのださうである。――寺田寅彦が書生に置いてくれと頼みに行つて、是より外に何所にも置いてやる所がないと言つて、見せられた物置といふのは、この物置の事である。

『漱石の思ひ出』には、鏡子がこの秋猛烈な惡阻に惱まされ、九月から始まつて十一月まで續き、ひどかつた時は食物・藥はおろか、水さへも咽喉に通らず、漸く滋養浣腸で命をつなぐ狀態だつたと書いてある。是は、その翌年、明治三十二年(一八九九)五月三十一日長女筆子が生れた、その時の惡阻なのだらうと思ふ。

鏡子の惡阻は隨分猛烈なものだつたやうである。漱石が敬愛してゐた嫂は、明治二十四年(一八九一)七月、この惡阻の爲に死んだ。それは何か外の病氣を併發したのかも知れないが、然し是で漱石は、女が惡阻で死ぬ事もあるといふ事を、經驗してゐた筈である。それが現在自分の愛

する妻に於いて、もつと猛烈な症狀を呈して現はれるのだから、漱石の心配は、恐らく一通りや二通りの心配ではなかつたに違ひない。さう言へば、明治二十九年（一八九六）九月の「枕邊や星別れんとする晨」も、或は鏡子の惡阻を看護して、夜を明かした時の句ではなかつたのかとも思はれる。ともかく鏡子の惡阻は、劇しいヒステリのやうなものとして現はれ、普通の女が癪を起す時によくするやうに、齒を喰ひしばつて、仰むきに反つくり返つて、ぶつ倒れたりするのださうである。流產したあと、長い間鎌倉に滯在してゐたのも、無論惡阻ではあり得ないが、そのヒステリ的な症狀が現はれた爲であつたらしい。

當時熊本では、鏡子が井川淵に身を投げたといふ噂が立つてゐた。是が事實であつた事は、その後、漱石に近親したいろんな人の口から證言されてゐる。さう言へば漱石は、『道草』第七十八に、「發作の今よりも劇しかつた昔の樣も健三の記憶を刺戟した。／或時の彼は毎夜細い紐で自分の帶と細君の帶とを繫いで寐た。紐の長さを四尺程にして、寐返りが十分出來るやうに工夫された此用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。／或時の彼は細君の鳩尾へ茶碗の糸底を宛がつて、力任せに押し付けた。それでも踏ん反り返らうとする彼女の魔力を此一點で喰ひ留めなければならない彼は冷たい油汗を流した。／或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。／「御天道さまが來ました。五色の雲へ乘つて來ました。大變よ、貴夫」／「妾の赤ん坊は死ん

ぢまつた。妾の死んだ赤ん坊が來たから行かなくつちやならない。そら其處にゐるぢやありませんか。桔槹（はねつるべ）の中に。妾一寸行つて見て來るから放して下さい」／流産してから間もない彼女は、抱き竦めにかゝる健三の手を振り拂つて、斯う云ひながら起き上がらうとしたのである。……」と書いてゐる。漱石が「細い紐で自分の帶と細君の帶とを繋いで寐た」といふのは、自分が寐入つてゐて知らないまに、鏡子が家を飛び出して、また身を投げはしまいかと心配し、それを未然に防がうとする用意だつたのに違ひないのである。漱石が井川淵から內坪井の方へ越して行つたのは、さういふ「細い紐で自分の帶と細君の帶とを繋いで寐た」不安極まる幾夜かの後の事だつたらうと想像される。

この事件が當時新聞の三面記事にならず、從つて一種のスキャンダルとして世間にぱつとならずに濟んだのは、當時五高の事務にゐた、熊本の人、淺井榮熙の盡力によるものなのださうである。淺井榮熙は熊本見性寺の蘇山の弟子で、禪の方面で相當出來た人だつたといふが、是が菅虎雄を通じて漱石と知り合つてゐたので、漱石の爲に大に奔走したのだといふ。淺井榮熙はその後細川家の家扶とかをしたと聞いてゐるが、漱石は、明治四十二年（一九〇九）『滿韓ところ〴〵』の旅で、京城で淺井榮熙を訪ねてゐる。十月六日の日記には、「引き返して太平町の郵便局に淺井榮熙を訪ふ。先生三等郵便局の主人たり。膝を容るゝとは正に是なり。余と陶山さんと這入つた

らあとは何うする事も出來ない。淺井さん大いに喜こぶ。其顏を見たのが甚だ愉快であつた。」と書いてある。淺井は當時京城に住んでゐたのである。明治三十一年(一八九八)九月四日、漱石が内坪井から東京の菅虎雄に宛てた手紙の中には、「……小生終日閑坐貴重の米粒を浪費致〔居〕候淺井氏股野生過日東上中根岸邊に寓居のよし手紙を以て報じこし候參上の節は隨分御訓示願上候淺井氏には時々面會御噂致居候……近頃は頓と俳句も作り不申暑中は少々奮發打坐を試み候處些の入處も無之其内運動不足の爲め下痢を催ふし夫より昨今に至りては始業間近く相成候爲め夫なりに放却致候御憫笑可被下候法語々錄の類數種披見致し候が少しの得に御座候へども畫餠不充饑依然たる噇酒糟の漢なるには閉口致候」と書いてある。井川淵の事件は、股野・土屋などが、漱石の所にまだ書生をしてゐた時分の事だと言はれてゐる。またこの手紙の樣子から察しても、それはどうも明治三十一年の六七月の頃ではなかつたのかといふ氣がする。――勿論是は想像である。

鏡子が姙娠したり流産したりする度に、井川淵の事件のやうな事件ではないまでも、『道草』に出て來るやうな事件が續き、その都度漱石が脅かされるやうな心持になつた事は、說明するまでもない。『道草』第七十八には、「細君の發作は健三に取つての大いなる不安であつた。然し大抵の場合には其不安の上に、より大いなる慈愛の雲が靉靆(たなび)いてゐた。彼は心配よりも可哀想になつた。弱い憐れなものゝ前に頭を下げて、出來得る限り機嫌を取つた。細君も嬉しさうな顏をし

た。」と書いてある。もつとも是は、漱石が洋行から歸つて、千駄木に住んでゐた時分の心持を述べたものかも知れない。然し千駄木の時代が既にかうであつたとすれば、熊本の時代、新婚後あまり年數のたつてゐない熊本の時代には、この感じは恐らくもつと強かつたものに相違ない。漱石は不安とともに慈愛を感じ、苦痛に思ふとともに可哀想に思ひ、出來るだけ手を悉して、鏡子を看護し鏡子を愛撫した。新婚以後「菊活けて內君轉た得意なり」・「筋違に葱を切るなり都振」・「留針や故鄉の蝶餘所の蝶」などといふ句を作つてゐる漱石は、明治三十一年（一八九八）の九月末ごろ、「病妻の閨に灯ともし暮るゝ秋」といふ句を作つた。是は以前の「枕邊や星別れんとする晨」の句に比べて、溢るる計りの情愛には不足はあつても、深い淋しさ、かはしやうのない憂愁が黑く動いてゐる點では、「枕邊や」の句よりも、遙に淒愴な感じを持つてゐる。それだけ漱石の鏡子に對する愛情は、深刻なものになつたのだと、言つても可いかも知れない。

　明治三十二年五月に長女の筆子が生れた。その御産のあとで漱石は、「安々と海鼠の如き子を生めり」といふ句を作つたといふが、漱石は筆子を隨分可愛がつたのださうである。自分の所にまだ子供の生れないうちは、漱石は菅虎雄の所へ行つて、菅の長男重武を抱き上げ、不器用な調子で「米が十錢すりやヤツコラヤノヤ」といふ歌を歌つてやつて、頻に重武をあやした、筆子が生れてからは、漱石は筆子を可愛がり、頻に抱いたりかかへたりして暮したのださうである。女中

の照といふのが、色が眞つ黑だつた。子供は抱く者に似るといふ、あんな眞つ黑なのに似られちやたまらない、照にそんなに抱かせてはいけないと、漱石は言つてゐたが、鏡子の留守などに、筆子が火のつくやうに泣き出しても、漱石ではどうする事も出來ない。いくらあやさうとしても旨くあやす事が出來ない。其所へ照が出て來て抱き上げると、すぐ泣き止んでしまふので、漱石も小言が言へなくなつてしまつたといふ話は、『漱石の思ひ出』に出てゐる。『行人』の一郎は、どうすれば人が綾成せるか、自分にはその方法が分からないと言つてゐる。漱石には、この筆子の場合のやうに、自分ではありあまる愛情を持つてゐても、どうすれば相手を泣きやまさせることが出來るかの法がつかないやうな、不器用な所があつたのである。

明治三十三年（一九〇〇）四月、漱石は内坪井から北千反畑に轉居する。「鶯も柳も青き住居哉」・「菜の花の隣ありけり竹の垣」といふ句を村上霽月に書いて送つたのは、此所へ轉居して來てからの事である。然しこの家に漱石は長くは住まなかつた。漱石は、四月二十四日に教頭心得を命ぜられ、五月十二日には、英語研究の爲め英國留學を命じられるのである。是より先き、明治三十一年（一八九八）十二月には、狩野亨吉は第一高等學校長に任ぜられて、熊本を去り、次いで明治三十二年（一八九九）九月山川信次郎も第一高等學校の教授となつて、熊本を去つた。

三　內面生活

熊本に於ける漱石の內面生活が、どういふ經過をとつてどう動いて行つたか、精しい事は分からない。自分の內部を相當詳細に披瀝してゐる、子規宛の手紙も、この時分は、目に見えて少なくなつてゐる。是はお互のする仕事がはつきり分れてしまつた爲や、子規が仕事だの病氣だのであまり手紙を書かなくなつた爲や、雙方が、自分の問題は自分一人で處理して、さうさう他人には訴へまいとする年齡に達した爲や、その他いろんな理由から來てゐるものに相違ないが、その爲め一層、漱石の當時の內面生活を探り知る上に困難を感じる事は、爭はれない。

漱石は、熊本にゐるうちに、五つの文章をしか發表してゐない。明治二十九年（一八九六）十月、卽ち漱石が熊本に轉任して來た年の十月、第五高等學校の校友會雜誌『龍南會雜誌』に發表した『人生』・明治三十年（一八九七）三月『江湖文學』に發表した『トリストラム・シャンデー』・明治三十一年（一八九八）十一月及び十二月の『ホトトギス』に發表した『不言之言』・明治三十二

年(一八九九)四月の『ホトトギス』に發表した『英國の文人と新聞雑誌』・同じ年の八月『ホトトギス』に發表した『小説「エールキン」の批評』、およそ一年に一つの割で、それさへ賴まれて不得已書いたもの計りである。當時の漱石の內面生活を、せめてその輪郭でも想像しようとする爲には、これらの文章と、當時の俳句及び俳文の類ひと、その乏しい手紙とを、手懸りとするより仕方がない。

漱石の談話筆記『處女作追懷談』の中に、漱石が大學を出た時分、「世間へ對しては多少得意で」はあつたが、然し「自分が自分に對すると甚だ氣の毒で」、「是でも學士かと思」はざるを得ない氣持になつてゐたが、「そのうち」「この己れに對する氣の毒が凝結し始めて、體のいゝ往生（レシグネーション）となつた。わるく云へば立ち腐れを甘んずる樣になつた。其癖世間へ對しては甚だ氣焰が高い。何の高山の林公抔と思つてゐた。」といふ一節があるといふ事は、既に前にも引用した。高山樗牛が大學を卒業したのは、明治二十九年(一八九六)七月、漱石が熊本へ轉任した年の七月の事である。樗牛はその前から文壇に名前を出してゐたが、然しその目ざましい活躍が始まつたのは、丁度漱石が熊本に住んでゐた時分の事であつた。それを漱石が「何の高山の林公抔と思つてゐた」といふ事は、いろんな意味で注目に値ひする事のやうに思ふ。第一に漱石が熊本にゐても、常に文壇の動靜に注目してゐた事が、是で分かる。第二に漱石が高山樗牛のやうなものが世の中に幅

を利かせてゐる事を、快よく思つてゐなかつた事が、是で分かる。漱石は既に教師をやめて「文學三昧」で日を暮したいと言つてゐる。漱石が中央の文壇の動靜に注目してゐた事は、當然だと言つて可いのかも知れない。また明治二十五年(一八九二)に漱石が書いたウォルト・ホイットマン論と、樗牛が明治三十一年(一八九八)に書いた『ウォルト・ホイットマン』とを比較して見れば、漱石が樗牛を輕蔑するのも無理はないと言へるかも知れない。——そんならなぜ漱石は自分で堂堂と文壇に打つて出なかつたのであるか。自分は何も書かない癖に、人を輕蔑して計りゐるのは、男らしくない事ではないか。然しそれは、漱石の場合では、既に漱石自身が説明してゐるやうに、漱石は「世間へ對しては多少得意」でも、「自分が自分に對すると甚だ氣の毒で」、手も足も出せない狀態にゐたからである。漱石に、樗牛よりも自分の方が立破な、實のあるものが書けるといふ自信があつた事は、疑へない。然しその事が漱石には、自分がものを書いて自分自身に愧ぢないでゐられるといふ事にはならなかつた。漱石の理想は、高かつた。同時に漱石は、腹の底から押し出して來る力を感じる事なしには、敢てものを書く事が出來なかつたのである。

『不言之言』の初めに、漱石は「天下恥づべき事多し。道を得ずして道を得たるが如くす。尤も恥づべし。道を得て熟せず。妄りに之を人に授く。次に恥づべし。我既に恥づべきものゝ一を犯す。糊口の途に窮して恆心を失ふに因ると雖豈甘んじて其二を犯し強て人の子を賊すべけんや。

われ時に迂、勢に昧し。聞說方今驕旆あり到る所に翻り慢幢あり行く先に充つと。却つて樵者、漁者、舟子、馬子に一點風流の氣を認むるは如何に。已みなんかな人は糸瓜の愚を嘲る。ぶらり〳〵として彼鬪せざるなり。杜鵑鳴て雲に入る。觀音で耳をほらすも行燈を月の夜にするも彼の知らぬ事なり。但吾に杜鵑の好音なし。寧ろ糸瓜の愚を學ばんか。」と書いてゐる。漱石は「驕旆あり到る所に翻り慢幢あり行く先に充つ」る時勢に慨嘆するけれども、「道を得ずして道を得たるが如く」し、もしくは「道を得て熟せず。妄りに之を人に授く」る事を「天下恥づべき事」として、じつと眼を瞑り、「糸瓜の愚を學」んで、「ぶらり〳〵」とその日その日を送らうとするのである。明治三十年(一八九七)の正月には、漱石は「生れ得てわれ御目出度顔の春」といふ句を作つてゐる。二月には「木瓜咲くや漱石拙を守るべく」といふ句を作つてゐる。明治三十一年(一八九八)の正月には「正月の男といはれ拙に處す」といふ句をつくつてゐる。

然し漱石が「糸瓜の愚を學」んで、「ぶらり〳〵」とその日その日を送つた方が可いと言つてゐるといふ事は、漱石が時勢に愛想をつかした結果、ほんとに何もしないで「ぶらり〳〵」とその日その日を送つてゐたといふ事を意味しなかつた。明治三十年一月の『無題』で漱石は、「われはわが父母の墓碑銘わが子はわが傳記抄錄なり但横目竪鼻二足の馬眞善美を載せて無限の空間を走るわれ走らずんば彼等去つて他によく走るものを求めん日暮れ道遠し急ぐとも及ぶまじ時に量な

し背後に印する鐵鞭の痕は一條毎に秒と分と時と晝夜を刻して自覺の料となす已れに鞭たざるものは時を自覺する能はず時を自覺する能はざるものは死者と一般なり」と書き、また「祖先の產を傳ふるは難きにあらず吾願くは之を倍し三倍し百倍せん父母の藥罐を受繼ぎ之を子孫に讓るが能ならばわれは唯一個の電信線に過ぎざらん」と書いた。漱石は過去・現在・未來と三世に跨る人生の歷史に於いて、自分自身の存在の意義を「われはわが父母の墓碑銘わが子はわが傳記抄錄」であると自覺し、自分は「祖先の產」を「倍し三倍し百倍せん」とする意氣込で、年三十一にして既に「日暮れ道遠」きを嘆じつつ、「われ走らずんば彼等去つて他によく走るものを求めん」と言ひ、「秒と分と時と晝夜とを刻」する「鐵鞭」を自分の上に加へて、驀地に自分の道を進まうとするのである。明治二十九年(一八九六)一月、亡き母の墓に詣でて、「梅の花不肖なれども梅の花」といふ句を作つた漱石は、その年の冬「初冬や向上の一路未だ開かず」といひ、明治三十年(一八九七)正月「元日や吾新たなる願あり」といひ、同じ年の十二月「有感 ある時は新酒に醉て悔多き」といひ、或は「旅にして申譯なく暮るゝ年」といひ、明治三十一年(一八九八)の春「有感 有耶無耶の柳近頃緣こ」といふやうな句を作つて、幾度となく自分の生活が自分の思ふやうに形成される事がない事を嘆き、新らたな勇氣を振ひ起して、絕えず建て直しを試みようとするのである。漱石の一生は精進と工夫との一生であつたに違ひないが、特に漱石の熊本時代は、

自分の生活建築の基礎を、積み上げては崩し、積み上げては崩しする、悲壯な苦鬪の連續であつたやうに見える。

漱石が、自分の專攻してゐる英文學の方面に於いて、いかに勉強の手を緩めてゐなかつたかは、漱石が、一方では『トリストラム・シャンデー』を論じ、一方では『エールヰン』を論じてゐる事から、想像する事が出來る。ウォッツ・ダントンの『エールヰン』が出たのは西暦千八百九十八年、卽ち明治三十一年の事で、漱石がその批評を書いたのは明治三十二年七月二十七日の事である。『エールヰン』が出版になつてから、まだまる一年とたつてゐない。その間に漱石は英國の新聞雜誌に眼を通して、本國に於ける『エールヰン』の評判の一般に通じた上で、自分でそれを讀み、自分でそれを批評し、その批評を纏めて、世間に公けにしてゐるのである。漱石が、絕えず當時の英國の文壇の狀勢に注目し、其所で評判になつたものは、逐一見逃すまいとしてゐるのでない限り、かういふ仕事の出來る筈がない。同時に漱石が『トリストラム・シャンデー』を論じてゐるといふ事は、漱石が現在眼前の英國文壇にも注目してゐたのみならず、十八世紀の英國の文壇にも注目し、當時の一異彩と稱せられ、英國のみならず、廣く大陸の文壇にも異常の刺激を與へたスターンにも注目し、スターンの心を探ぐる爲の、精到な硏鑽を遂げてゐた事を證明する。然も漱石は、大學を卒業する年には、『英國詩人の天地山川に對する觀念』の題下に、十八

世紀の技巧派の詩人ポープに對立する自然派の詩人の、自然に對する態度を、ポープをも籠めて、論じ悉してゐるのである。スターンはポープ、アヂソン、スティールなどと自然派との中間に立つて、側面から新しい運動を助成したやうな役割を演じた作者であるといふ事も出來る。のみならず漱石は、學生の請に應じて、シェークスピアの科外講義をも開いてゐる。當時の漱石の研究分野は、英國文學の全般に亙つてゐたとは言へないまでも、相應に廣い範圍を、相當に深切に把握してゐたと想像して可いだらうと思ふ。然も漱石の研究が、古今に亙つて、單に有名な作品を讀むといふだけではなく、その作品を生み出す社會的環境の方面にも向いてゐた事は、『英國の文人と新聞雜誌』とが、是を證明する。是は言ふまでもなく、英國の新聞・雜誌の成立の歴史とともに、それらのものと文人との關係を調査し、誰がどういふものを何に書いて、どんな成績を收めたかといふ事を、相當精細に述べたもので、十八世紀から十九世紀へかけて、文人の作品を見る上には、是非とも一往は知つて置く必要のある事を取り扱つたものである。

漱石には初めから、ニイチェの所謂「骨董癖」はなかつた。漱石にとつて必要な事は、其所に表現されてゐる根本のもの、生活そのものに觸れて、其所から自分の榮養を攝取して來るといふ點にあつた。然し漱石は、英文學に觸れて、漢詩や俳句のやうには、理解し悉す事の出來ないもの、自分が是まで文學だと思つてゐたものとは違つたものが、英文學にはあつて、それが自分と

英文學との間に大きな溝となつてゐる事を發見した爲に、漱石は、英文學を完全に理解し悉す爲の必須の條件として、英國文學を生み出すものとしての、英國の社會、歴史、風俗、慣習、一口に言つて英國人の生活の研究を始めようとしたものに違ひないのである。それでも漱石には、「英文學に欺かれた」といふ感じが、とりのぞかれる事がなかつた。從つて漱石は、英文學に深入りすればするほど、英文學は自分から遠のいて行くやうに感じられた。「天下恥づべき事多し。道を得ずして道を得たるが如くす。尤も恥づべし。道を得て熟せず。妄りに之を人に授く。次に恥づべし。」といふのは、恐らくかういふ狀態にゐる、自分の心持を述べたものである。

『文學論』の序によると、漱石は英國に留學を命じられた時、「特に洋行の希望を抱かず、且つ他に余よりも適當なる人あるべきを信じたれば、一應其旨を時の校長及び教頭に申し出でた」のださうである。それに對して校長及び教頭は、「他に適當の人あるや否やは足下の議論すべき所にあらず、本校は只足下を文部省に推薦して、文部省は其推薦を容れて、足下を留學生に指定したるに過ぎず、足下にして異議あらば格別、左もなくば命の如くせらるゝを穩當とす」と言つたので、漱石も「特に洋行の希望を抱かずと云ふ迄にて、固より他に固辭すべき理由あるなきを以て、承諾の旨を答へ」たといふが、是も亦漱石が、自分の英文學に關する理解の不足を反省して、自分のやうな者が洋行してもしやうがない、それよりももつと適任者がある筈だと、心から考へた

結果に外ならなかつた。現實に誰を漱石が自分より適當だと思つてゐたかといふ事は、此所では問題ではない。漱石の頭の中には、或はそんな人は現實にはゐなかつたのかも知れない。然し「自分が自分に對すると」、漱石は自分が適任であるとは、どうしても考へられないのである。

のみならず漱石には、英文學といふ事を問題外に置くとしても、自分で自分の心を支配し得ないといふ、悲しい認識があつて、それが絶えず漱石を苦しめた。是は結局漱石の内省の眼が鋭く、自分の中のさまざまな矛盾・撞著に氣がついて、一つの事を單純に素朴に主張し唱道する事が出來ない、その意味で漱石の自分自身に對する、高等學校以來の懷疑から來るものに外ならないが、然し一面から言へば、是は漱石の中に理路を絶するもの（ダス・イルラチオナーレ）があつて、屢跳梁し、漱石の心の平衡を失はせ勝であつた事から來たものに違ひないと思はれる。現に漱石は『人生』の中で、人間の生活には「一種不可思議のもの」があつて、人間を支配し、人間の智慧では、どうしてもそれを測り知る事が出來ないといふ意味の事を書いてゐる。――「所謂不可思議とは」「われ手を振り目を搖かして、而も其の何の故に手を振り目を搖かすかを知らず、因果の大法を蔑にし、自己の意思を離れ、卒然として起り、驀地に來るものを謂ふ、世俗之を名づけて狂氣と呼ぶ、狂氣と呼ぶ固より不可なし、去れども此種の所爲を目して狂氣となす者共は、他人に對してかゝる不敬の稱號を呈するに先つて、己等亦曾て狂氣せる事あるを自認せざる可からず、又何時にても狂氣し得る

資格を有する動物なる事を承知せざるべからず、人豈自ら知らざらんやとは支那の豪傑の語なり、人々自ら知らば固より文句はなきなり、人を指して馬鹿といふ、是れ己が利口なるの時に於て發する批評なり、己も亦何時にても馬鹿の仲間入りをするに充分なる可能力を具備するに氣が付かぬものの批評なり、局に當る者は迷ひ、傍觀するものは嗤ふ、而も傍觀者必ずしも棊を能くせざるを如何せん、自ら知るの明あるもの寡なしとは世間にて云ふ事なり、われは人間に自知の明なき事を斷言せんとす」、「蓋し人は夢を見るものなり、思ひも寄らぬ夢を見るものなり、覺めて後冷汗背に洽く、茫然自失する事あるものなり、夢ならばと一笑に附し去るものは、一を知つて二を知らぬものなり、夢は必ずしも夜中臥床の上にのみ見舞に來るものにあらず、青天にも白日にも來り、大道の眞中にても來り、衣冠束帶の折だに容赦なく闥を排して闖入し來る、機微の際忽然として吾人を愧死せしめて、其來る所固より知り得べからず、其去る所亦尋ね難し、而も人生の眞相は半ば此夢中にあつて隱約たるものなり、此自己の眞相を發揮するは卽ち名譽を得るの捷徑にして、此捷徑に從ふは卑怯なる人類にとりて無上の難關なり、願はくば人豈自ら知らざらんや抔いふものをして、誠實に其心の歷史を書かしめん、彼必ず自ら知らざるに驚かん」。「三陸の海嘯濃尾の地震之を稱して天災といふ、天災とは人意の如何ともすべからざるもの、人間の行爲は良心の制裁を受け、意思の主宰に從ふ、一擧一動皆責任あり、固より洪水飢饉と日を同じうし

て論ずべきにあらねど、良心は不斷の主權者にあらず、四肢必ずしも吾意思の欲する所に從はず、一朝の變俄然として己靈の光輝を失して、奈落に陷落し、闇中に跳躍する事なきにあらず、是時に方つて、わが身心には秩序なく、系統なく、思慮なく、分別なく、只一氣の盲動するに任ずるのみ、若し海嘯地震を以て人意にあらずとせば、此盲動的動作亦必ず人意にあらじ、人を殺すものは死すとは天下の定法なり、されども自ら死を決して人を殺すものは寡なし、呼息逼り白刃閃く此刹那、既に身あるを知らず、焉んぞ敵あるを知らんや、電光影裡に春風を斫るものは、人意か將た天意か」。「二點を求め得て之を通過する直線の方向を知るとは幾何學上の事、吾人の行爲は二點を知り三點を知り、重ねて百點に至るとも、人生の方向を定むるに足らず、人生は一個の理窟に纏め得るものにあらずして、小說は一個の理窟を暗示するに過ぎざる以上は、「サイン」「コサイン」を使用して三角形の高さを測ると一般なり、吾人の心中には底なき三角形あり、二邊竝行せる三角形あるを奈何せん、若し人生が數學的に說明し得るならば、若し與へられたる材料よりXなる人生が發見せらるゝならば、若し人間が人間の主宰たるを得るならば、若し詩人文人小說家が記載せる人生の外に人生なくんば、人生は餘程便利にして、人間は餘程えらきものなり、不測の變外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で來る、容赦なく且亂暴に出で來る、海嘯と震災は、啻に三陸と濃尾に起るのみにあらず、亦自家三寸の丹田中にあり、險呑なる哉」。

人によつては此所に、ある臭味を感じる人があるかも知れない。然し此所で漱石が說いてゐる事は、極めて眞面目な問題である。漱石は既に第一高等中學校にゐる時分、「道德會」に入會を勸められて、自分の懷疑を告白して、それを斷つてゐる。明治二十七年（一八九四）九月四日漱石が子規に宛てて、「元來小生の漂泊は此三四年來沸騰せる腦漿を冷却して尺寸の勉强心を振興せん爲のみに御座候」と書いてゐるのも、「理性と感情の戰爭益劇しく恰も虛空につるし上げられたる人間の如くにて天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安心立命到底無覺束候俊鶻一搏起てば將に蒼穹を摩すべし只此頸頭の鐵鎖を斷ずるの斧なきを如何せん抔と愚癡をこぼし居候も必竟驀向に直前するの勇氣なくなり候爲と深く慚愧に不堪」と書いてゐるのも、もしくは明治二十七年の暮から明治二十八年の正月へかけて、漱石が楞伽窟で參禪したのも、すべて漱石が、自分の中の理路を絕したものの跳梁に苦しんだ事の、記錄であるのに外ならなかつた。『人生』では、然し、さういふ理路を絕したものに支配され勝ちであるのが人間で、人豈自ら知らざらんやなどといふ言葉ほど、人間と人生とを知らない言葉はないと宣言される。その點で漱石は一段の進步を示して、人間の矛盾・撞著を、矛盾・撞著のままに肯定しようとする立場に立つてゐるかの如くに見える。然し事實は漱石は、さういふのが人間であると考へるやうにはなつてゐても、それだけではどうしても滿足する事が出來ないのである。其所に更に深刻な漱石の惱みがあつた。理

路を絶したものに支配されるのが人間の常でも、その理路を絶したものが、ある時、ある場合、卒然として「己靈の光輝」を失墜せしめ、わが身心を「秩序なく、系統なく、思慮なく、分別なく」してしまひ、人間を「只一氣の盲動するに任」かせなければならなくしてしまふといふ事は、到底堪へられる事ではないからである。『彼岸過迄』の須永は、自分が妻にしようともしてゐない千代子に對して、千代子のみならず、千代子の婿の候補者である高木に對しても、自分にさへも不思議な嫉妬を示して、千代子からは輕蔑され、自分自身では愧ぢ入らなければならなかつた。『心』の主人公は「一氣の盲動するに任」かせて、一生をその罪の贖ひに委ねる。此所の漱石の惱みに、さういふ具體的な背景がある筈もないが、然し漱石を惱ましたものが、およそさういふ性質のものであつた事は、明らかである。

漱石がそれを馴致し制御し主宰して、「己靈の光輝」を保ち、自分の身心に「秩序」と「系統」と「思慮」と「分別」とを與へる爲に、どういふ方法を採つたか。それは具體的には分からないが、然しその一つの方法として漱石は、坐禪を採り上げたやうに見える。漱石は楞伽窟に參禪して、全然その道の修業を斷念してしまつたやうな事を言つてゐるが、さうしてそれはまつたくその通りに違ひなかつたが、然し『門』の宜道が言つてゐるやうに、「十分坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の德があ」つて、漱石はその後でも、假令誰かの下で坐るといふやうな事は

ないまでも、決して禪から離れてしまふ事がなかつた。漱石を熊本に招聘する事に盡力した菅虎雄が、洪川會下で居士號をもらつた俊秀であつた事は、既に述べた。菅は間もなく病氣で熊本を去つたが、舍監としての菅虎雄の下に働いてゐた淺井榮熙が、見性寺の葆岳と宗般との提撕を受けて、その道で立破な修業の出來てゐた人であり、菅を介して漱石は淺井を知り、菅が熊本を去つてからも、その交際は續いてゐたといふ事も、既に一往述べた所である。のみならず漱石は、明治三十年（一八九七）の初秋には、流産した豫後の出養生をしてゐる鏡子を見舞ひがてら、歸源院に宗活をたづねてゐる。是は勿論『門』に書かれてゐるやうに、漱石が宗活の人間を敬愛してゐた爲で、あながち漱石が禪に興味を持つてゐた爲ではなかつたのかも知れないが、然しその道の修業をして立破な人間になつた人を尊敬するのは、結局その人を通じてその道の修業に心を惹かれる事である。恐らく漱石は『不言之言』にも書いてあるやうに、屢香を焚いて、自分で坐つてみる事を、實行してゐたに違ひないのである。現に漱石は、明治三十一年（一八九八）九月四日、東京にゐる菅虎雄に宛てて、「淺井氏には時々面會御噂致居候……近頃は頓と俳句も作り不申暑中は少々奮發打坐を試み候處些の入處も無之其內運動不足の爲め下痢を催ふし夫より昨今に至りては始業間近く相成候爲め夫なりに放却致候御憫笑可被下候法語々錄の類數種披見致し候が少しの得に御座候へども畫餅不充饑依然たる喧酒糟の漢なるには閉口致候」とさへ書いてゐる。

もつとも是は或は鏡子のヒステリの影響で、特にこの夏だけ漱石が、かういふ事をしたものかも知れない。然しこの「打坐」がその爲であつたとしても、その爲に漱石が「打坐」を試みたといふ事は、漱石に「打坐」が自分の心の動亂を鎭靜するのに、最も良い方法であると考へられてゐたといふ事を證明するのみで、それが漱石によつて無關心に取り扱はれてゐたといふ事を、證明するものではない。殊にこの手紙の相手が菅虎雄――言はばその道の先輩である菅虎雄であるといふ事は、少くとも漱石が是までの間にも、その方面の問題で、いろいろ菅に言つたり聽いたりしてゐたに違ひないといふ事を、想像させるものを持つてゐる。

然し自分の中に蟠居する理路を絕したものの認識と克服とは、一朝一夕に成就する事が出來るほどの、生易しい問題ではなかつた。漱石が『人生』に於いて示したそれの認識は、當時の日本人としては、驚くべき深切な認識であつたには違ひなかつたが、然しこの認識が果してそれの克服にどれだけ貢獻し得たかは、問題であつた。勿論漱石はこの問題との取つ組み合ひに、必死の力を竭したに違ひない。漱石は、明治三十年十月十日の第五高等學校の開校記念日の祝辭の中で、「諸子今學生たりと雖ども、其一言一動は卽國家の全局に影響するなり。佐久間象山、我四十にして斯身の天下に關する事を知るといへり、象山の人傑にして、始て然るにあらず。中等の人士も然り。下等の匹夫匹婦も亦然り。」と訓示したが、漱石は自分の一身が天下に密接な關係があ

るといふ事を自覚してゐるだけに、その緊張は鋭くその努力は凄じかつたとしても、更に深刻な認識と更に嶮難な克服との連鎖が、この先き二十年も續いて、容易に漱石の心を安んぜしめなかつた事は、是非もない事であつた。

三四　洋行

明治二十八年（一八九五）七月二十六日齋藤阿具宛の手紙の中で、漱石は、自分が松山に來たのは「金をためて洋行の旅費を作る所存」だつたのに、「夫所ではなく月給は十五日位」でなくなつてしまふと、書いてゐる。然るに『文學論』の序では、自分は留學を命じられはしたが、然し「特に洋行の希望を抱かず、且つ他に余よりも適當なる人あるべきを信じ」てゐたので、一往校長及び教頭の所へ斷りに行つたと書いてある。是は一見矛盾のやうであるが、然し漱石の自分自身に對する幻滅の程度が、明治二十八年よりも明治三十三年の方が、一層深刻であつたと想像すれば、別に矛盾でもなんでもなくなるに違ひない。その上漱石は「特に洋行の希望を抱か」なかつたといふまでで、それを固辭するほど洋行する事が嫌ひだつたわけではなかつたのである。もつとも辭令には「英語研究ノ爲メ滿二年間英國ヘ留學ヲ命ズ」とあつて、「英文學研究ノ爲メ」とはなかつた。その點に漱石が留學を「特に」希望しない、他の大きな理由があつたのかも知れな

かつたが、然し是は漱石自身が文部省に時の專門學務局長上田萬年を訪ひ、自分の研究題目が「英語」とあつて「英文學」とない事に就いての疑義を質した上で、それが「多少自家の意見にて變更し得るの餘地ある事を認め得」たのだから、此所でも「特に洋行を希望」しない理由はなくなつた。それで漱石は、愈留學の決心を固め、妻子を矢來中の丸の里の隱居所に殘して、明治三十三年（一九〇〇）九月八日橫濱出帆のドイツ汽船プロイセン號で西征の途に上る事になつた。「秋風の一人をふくや海の上」といふ句は、出發の前前日漱石が、寺田寅彥に書いて送つた留別の句である。その寺田寅彥は『夏目漱石先生の追憶』の中で、「先生が洋行するので橫濱へ見送りに行つた。船はロイド社のプロイセン號であつた。船の出るとき同行の芳賀さんと藤代さんは帽子を振つて見送りの人々に景氣の好い挨拶を送つてゐるのに、先生は一人少しはなれた舷側にもたれて身動きもしないでじつと波止場を見下して居た。船が動き出すと同時に、奧さんが顏にハンケチを當てたのを見た。」と書いてゐる。

藤代素人の『夏目君の片鱗』によると、この明治三十三年に高等學校の教授を海外留學生として派遣する新例が開かれ、その選に當つたのが、藤代素人と夏目漱石とだつたのださうである。一行は文科の芳賀矢一・農科の稻垣乙丙・軍醫の戸塚機知の五名で、外に高山樗牛も同行の筈であつたが、是は出發間際に咯血したので、見合せる事になつたのだといふ。船にプロイセン號を

選んだのは、藤代素人の主張が通つたのださうである。
航海の途中の事は、漱石の日記や斷片の中に、纏めて書かれた手紙も、殆んどすつかり保存されてゐる。鏡子その他に宛てて書かれた手紙も、殆んどすつかり保存されてゐる。何所に上陸して何を見たといふやうな事は、此所に一一書く必要もないと思はれるが、ただ『夏目君の片鱗』に書かれてゐる、「或時僕は君と文學の話をした中に、君は今迄和漢洋の文學を研究して居るが、何一つ是が分つたと思ふものはない。唯俳句のみは其趣味を解し得た樣に思ふと云つたことがある。」といふ、船中會話の一節と、「上海からは英米の宣教師が妻子眷屬を引連れ二十名餘り乘船した。何れも風采から見ると、迚も人を感化する力は無さ相に思はれたが、中には可なり職務に忠實な向もあつて、熱心に傳道を試みる。夏目君は其一人に見込まれて、神の存在と云ふ樣な問題で、哲學的見地から對手を手古擦らしたこともある。」といふ、船中見聞の一節とは、注目すべきものを含んでゐるやうに思ふ。前者は、言葉は違ふが、結局漱石が「英文學に欺かれたるが如き不安の念」を今もなほ懷いてゐるといふ事を、別方面から表現してゐるものだからである。同時にこの、日本的なもののうちで最も日本的な俳句趣味は、どこまでも漱石について廻り、最後に至つては、それによつて漱石がすべての趣味を綜合してしまはうとしたと言つても可い趣味に外ならなかつたからである。後者は恐らく決定版全集の第十五卷『日記及斷片』の第二十六頁から第二十九頁に互つて書かれてゐる

"Those dear souls are in full conviction that they are iconoclasts; at the same time they do not hesitate in saying Christ is the incarnation of God. God can only have a meaning to them through Christ. God in itself in its absoluteness is not sufficient for their sensual intellects to form a clear conception of. God through Christ, God in its incarnation is necessary for their belief to form a palpable ground to rest on. Is not this, in a sense, an idol-worship? They insist on the idea of one supreme God. Very well. But then does not this idea vary according to different denominations? They say Christianity is the only true religion in the world, but when each denomination holds up its own idea of the Supreme God as true, it tantamounts to saying that those of other denominations are false and Christianity is the true religion only so far as each denomination is concerned. I have no grudge against Christianity, on the contrary I firmly believe that it is a grand religion, and those who can find faith in it, are surely saved by it. Meanwhile, those whom they call idolaters can likewise find salvation in their way of worship, never so gross, provided they have good faith in them. Religion is after all a matter of faith, not argument or reason. No matter how grand the con-

ception, how deep the reasoning, it is only a toy, splendid to look at, but only waiting to tumble down at the first whip of wind that may happen to blow. For it is only an air castle with no sound basis to sustain its huge superstructure. St. Peter built his church of Rome on the rock, which means faith, nothing more than faith, in my opinion. Where there is faith, there is religion, there is happiness, repose and salvation. Fetishism is as good as Christianity. Everything is right as long as there [is] faith. With no faith Buddhism, Mahometanism as well as Christianity are nothing more than ingenious contrivances of wise men to indulge in their flights of fancy and the power of speculation. Let people believe in everything which is good and true, in their eyes, and each according to their stage of intellectual development so that they may find therein contentment and happiness. Let my religion be such that it contains every other religion within its transcendental greatness. Let my God be that nothing which is really something, and which I call nothing because, being absolute, it cannot be called by a name involving relativity; which is neither Christ, nor Holy Ghost, nor any other thing, yet at the same time Christ, Holy Ghost and everything. / One of my friends who has a

capacious head for strong liquors, takes out a piece of 'Beer-mark,' goes to one of the missionaries and holding up that piece says, "This is my God."" といふ感想の機縁になつたものに違ひないし、然も此所に書かれてゐる神觀と宗教觀とは、その大體の方向に於いて、漱石の後年の神觀竝びに宗教觀と同じものだと言つて可いものだからである。

漱石が船に弱かつたらしい事は、既に明治二十二年（一八八九）の『木屑錄』に出てゐる。九月八日横濱を解纜して、船が遠州灘にかかるや否や、漱石は既に醉つて、晩餐をとる事が出來なかつた。神戸に著いて上陸し、諏訪山の中の常盤で晝食したまではよかつたが、芳賀矢一の父の招待による晩餐には、下痢して箸をとる事が出來なかつた。十日夜半長崎に著いた時にも「床上ニ困臥シテ氣息奄々タリ」とある。それでも十二日には「船頗ル動搖食卓ニワクヲ着ケテ顚墜ヲ防グ」とあるから、食堂に出る事が出來たに違ひない。「漸ク動搖ニナレテ氣分少シハヨシ」とも書いてある。然し心細いのは心細いと見えて、「長崎ヨリ西洋婦人夥多乘込ム皆我ヨリ船ガ強キ樣ナリ羨シキヿナリ、彼等ハ平氣デ甲板ニ居ル婆サンモ若イノモ、特ニ佛人ノ家族ニ六七歲ノ小供ガ居ルガ御玩弄ノ蒸汽船ヲ引張ツテ甲板ヲ馳ケ廻ツテ居ル、我々モ可成平氣ナ顏ヲ裝ツテ居ルケレドモ眞ニ平氣ナノハ芳賀位ノモノデ他ハ皆左程平氣デモナイノデ〔ア〕ル其内デ尤モ平氣ナラヌノハ小生デアル」とも書いてある。漱石は「平氣デ甲板ニ居ル」事が出來なかつたのに違ひない。

十六日も十七日もさういふ狀態が續く。十八日には「腸胃少シク舊ニ復ス」とあるが、二十四日には又「胃惡ク腹下リテ心地惡シ」とある。その後は十月十六日の日記に「海荒レテ氣色惡シ」といふのがあるきりで、あとは「甲板ノ椅子ニ踞シテ讀書ス」だの、「此二三日風波頗ル穩ナリ今朝ハ殊ニ靜カニテ恰モ鏡上ヲ行クガ如シ印度洋モ存外ナ者ナリ……／午後大魚無數波間ニ躍ルヲ見ル」だの、「滿月ニテ非常ニ美シ」だの、「見渡セバ不毛ノ禿山巑岏トシテ景色頗ル奇怪ナリ十時頃出帆始メテ亞弗利加ノ土人ヲ見ルロシヤナ佛ノ頭ノ本家ハ玆ニアリト信ズ」だのといふやうな、割に暢氣な記事が多い所をもつて見ると、船が新嘉坡を出帆する時分あたりから、漱石は漸く航海に馴染んで來たもののやうに見える。もつとも『夏目君の片鱗』によると、一行が上海見物をすませて本船に歸つて來た頃、颱風の襲來に遭ひ、船は吳淞河口に碇泊してそれをやり過したが、出帆後も餘波がなかなか強くて、芳賀矢一以外醉はないものは一人もゐなかつたのだといふ。新嘉坡以西は、さういふ騷ぎがなかつたので、割に愉快に航海を續ける事が出來たのだらうと思ふ。

航海は樂になつても、漱石はその日その日を餘り愉快に過す事が出來なかつた。それは漱石は山の方が好きで、海は寧ろ自分の性に合はないと言つてゐたせゐもあるが、最も重要なのは、漱石の趣味が東洋的・日本的・俳句的で、ドイツ船に乘つて、西洋人に取り圍まれて、洋服を著て、

洋食を喰つて、ベッドに寐る事に堪へられなかつたからである。九月十日、横濱を出帆して三日目、既に漱石は中根重一に宛てて、「乘合ハ英人ヤラ佛人ヤラニテ既ニ洋行シタル感有之神戸ニテ上陸諏訪山溫泉ニテ日本料理ヲ食ヒ日本ノ浴衣ヲ着タル爲メ漸ク歸朝致候樣ノ感ニ存候此先ハ漸々西洋クサクナル許ト存候」と書いてやつてゐる。九月十二日の日記の中には、「カバンノ中ニ几董集ト召波集ガアツタカラ少シ讀マウト思フタガ讀メヌ周圍ガ西洋クサクテ到底俳句抔味フ餘地ハナイ芳賀ハ詩韻含英抔ヲヒネクツテ居ルガ是モ何モ出來ヌラシイ俳句モ一二句ハ作ツテ見度ガ一向出テ來ナイ恐入ツテ仕舞ツタ」と書いてある。九月十三日の日記には、「夢ニ入ル者ハ故郷ノ人故郷ノ家醒ムレバ西洋人ヲ見蒼海ヲ見ル境遇夢ト調和セザルヿ多シ」と書いてある。九月十九日漱石は香港から高濱虛子に宛てて、「唐人と洋食と西洋の風呂と西洋の便所にて窮窟千萬一向面白からず、早く茶漬と蕎麥が食度候」と書いてやつてゐる。九月二十七日にはペナンから鏡子に宛てて、「食物ノ急ニ變化シタルト氣候アツキト運動不足ト船ノキラヒナトガ合併シテ消化機能兎角働キ方面白カラズ目ハ餘程クボミ申候其割ニ身體ハ左ノミヤセ不申候」と書いてやつてゐる。十月八日にはコロンボから同じく鏡子に宛てて、「毎々ながら西洋食には厭々致候且海岸は小生の性に適せざる事とて横濱出帆以來眼が餘程くぼみ申候然し別段の病氣もなく先ゞ無事なれば御安堵可被下候」・「船中は毎日入浴も出來よごれ物の洗濯も出來御馳走も食へ下等下宿抔より

も遙かに上等の生活と存候然し寢室の窮窟にて風通のあしきは閉口致候」と書いてやつてゐる。――かうして漱石は竟にこの航海とこの生活に、親しみ馴染む事が出來ず、いつまでもエトランジェーとして、到頭ナポリに著きジェノワに上陸し、其所からパリに向ふのである。漱石の一行がパリに著いたのは、十月二十一日の朝であつた。

『夏目君の片鱗』によると、伊太利に著く前に一行の間で、當時パリで開かれてゐた萬國博覽會を見るか、それとも博覽會は斷念してナポリで上陸し、ポムペイ・ペスツムなどを見物した上で、ローマに一週間くらゐ滯在する事にするかに就いて、いろいろ議論があつたのださうである。然し一行のうちの多數は、伊太利は留學中でも見られるが、博覽會は今度でなければ見られないといふ意見だつたので、結局ジェノワに上陸して、博覽會に間に合ふ爲に、パリに直行する事になつたのだといふ。「併し夏目君は以太利觀光に熱心と云ふ譯でもなし、博覽會も强いて見たいと云ふ風でも無かつたらしい。唯目的地の倫敦へ行くには巴里を經由するが一番便利である。そこで初めから其積りで巴里でも二三の人に面會する豫定だつたらしい。けれども若し一行の多數意見が以太利見物に傾いたら、夫れにも反對を唱へなかつたらうと思はれる。兎に角君は航海中始終超然主義とでも云ふ樣な態度を執つて居た。」と藤代素人は書いてゐる。

漱石の十月二十日の日記には「午前八時半ノ滊車ニテ Genoa ヲ出發ス旅宿ノ馬車ニテ停車場

ニ馳付タルハ立派ナリシガ場内ニテ委細方角分ラズウロ〻スル様洵ニ笑止ナリ漸ク滊車到着セシガ乘車セントスレバドコ[モ] occupied ト喧突ヲ喰ヒ途方ニ暮レタリ漸ク Cook ノ agent ヲ見出シテ之ニ英語ヲ以テ頼ミシガヤガテ乘客滿員ノ爲メ新列車ヲ增加シ漸ク之ニ乘込ミシガ Turin ニテ乘易ル譯故氣ガ氣ニアラズ漸ク該所ニツキ停車場前ノ旅館ニ至リ中食シ四時半ノ發車ヲ待テ合ス Genoa 上陸以來一切夢中ニテ引キ廻サル、如キ觀アリ見當違ノ所ニ至ラザルガ仕合ナリトス／四時三十分頃旅屋ノ番頭ニ送られて滊車ニ乘る何處モ occupied ト云ハレテ這入ルヲ得ズ五人離々ニナリテ漸ク乘込就中余ハ最後迄赤帽ニ引マハサレテ茫然トシテウロ〻スルヿ多時漸ク毛唐人ノ內ニ割込ム皆キヨロキヨロトシテ余ガ顏ヲ見ル此體裁ニテ Modane 迄至ル茲所ニテ荷物ヲ檢査シテ佛ノ國境ニ入ルト云フ故此處ニ至リ見ルニ手荷物ヲ持チテ下リルヿト心得テ車ヲ飛ビ出セバ豈計ランヤデ檢査官ガ車中ニ來リテ檢査スト云フニ倉皇引キ返セバ知ラヌ奴ガ我物顏ニ自分ノ席ヲ占メテ居ル故此ハ我席ナリト英語デ云ヘバ佛語ニテ君ハ何モ置テ行カヌ故此ニ座シタルナリト威張ツテ入レズ已ヲ得ズ藤代氏ノ席ノ處ニ至リ廊下ニ佇立スルニ車掌ノ如キ者來リ次ノ部屋ヲ指シ連リニ分ラヌヿヲ兎角申ス故ノゾキ見レバ八人定員ノ處ニ一ノ空席アリ是幸ヒト座ヲ占ムレバ同席ノ一行六人連ノ奴原連リニ何カ吾ヲ罵ル様子ナリ然此方モ負ヌ氣ニテ馬耳東風ト聞キ流スカクシテ東方ノ白ム頃迄ハヤリ通シ八時頃漸ク「パリス」ニ着ス停車場ヲ出デ、見レバ丸デ

西モ東モ分ラズ恐縮ノ體ナリ巡査如キ者ヲ捕ヘテ藤代氏船中ニテ一夜造リニ勉強シタル佛語ニテ何カ云フニ親切ナル人ニテ馬車ヲ雇ヒ呉レテ正木氏ノ宿所迄送リ屆ケ呉タリ正木氏英國旅行中ニテ會ハズ渡邊氏アリ朝食ト晝食ノ馳走ヲ受ク佛人ト會食セルハ是ガ始メテナリ食後停車場ニ至リ再ビ荷物ヲ受取リ返ル晩餐ヲ料〔理〕店ニ食ニ行ク美人アリテ英語ヲ話ス夜 Nodier 夫人ノ家ニ歸リテ宿ス渡邊氏ノ周旋ニテ借リタルモノナリ」と書いてある。

　藤代素人によると、素人の一行は「大博覽會は二日程見物したら厭氣がさして、ルウブルも見ず、グランド・オペラも覗かず倫敦へ渡る夏目君と袂を分つて」ベルリンへ赴いたのださうである。漱石の日記によると、漱石は十月二十二日と二十五日と二十七日と、三日ほど博覽會を見物してゐる。然も十月二十六日には、淺井忠を訪ねたあとで、芳賀矢一・藤代素人とパリの町を散歩してゐる。藤代素人の一行は、漱石より一日早く、十月二十七日にベルリンへ向け立つたものかも知れない。――素人はルーヴルも見ずグランド・オペラも見なかつたと言つてゐるが、漱石は割に自由行動をとつてゐたらしいにも拘はらず、同じやうにルーヴルもグランド・オペラも見ないで、ロンドンに立つたものではないかと思はれる。もつとも後年漱石は『文學評論』の中で、ドラクロアのかいたダンテとヴージルの畫に就いて述べてゐる。その話しつ振りから想像すると、どうも寫眞ではなく、實物を見て來たやうに感じられる節がある。然もそのドラクロアの畫は、

ルーヴル所藏の大幅であつた。勿論漱石は十月二十五日の日記に、「博覽會ニ行ク美術館ヲ覽ル宏大ニテ覽盡サレズ日本ノハ尤モマヅシ」と書いてゐる。ドラクロアだのレオナルドだのは、或はこの美術館で展覽されたものかも知れない。もしさうだとすれば、漱石は、ルーヴルには行かなくても、ドラクロアを見てゐて可いわけである。

ともかく漱石はパリに丁度一週間滯在の後、「巴理ノ繁華ト墮落ハ驚クベキモノナリ」と日記に書いて、十月二十八日海を渡つてロンドンに到著した。

三六　ロンドン

漱石はロンドンに著いてすぐ 76 Gower Street の下宿に這入つた。是は日本人のよく下宿するうちだといふので、大塚保治から教はつて來た下宿ではあつたが、然し部屋代・食料などを入れると、一日に六圓位かかる下宿で、留學費の月額百五十圓を全部つかつてもまだ足りない位だつたのだから、無論漱石は此所に長くゐる氣はなかつた。然し漱石は熊本で知合ひになり、また船の中で偶然出會つたノット夫人から紹介狀をもらつてゐたので、一度ケムブリッヂに行つて様子を見て來る計畫を持つてゐた。それでこの下宿には、まあ二三日の間といふので、我慢して腰を下ろしたものらしい。さうして漱石は、その二三日の間に、方方を見物してあるいた。ロンドンに著いた翌日漱石は鏡子に宛てて、「倫敦も今日出で見たれども見當がつかず二十返位道を聞て漸く寓居に還り候」と書き、また「西洋にては金が氣がヒケル程入候留學費でどうしてやるかゞ問題に候」と書いてゐる。さうしてその翌翌日、卽ち十月三十一日には漱石は、タワー・ブ

リッヂ、ロンドン・ブリッヂ、タワー、モニュメントなどを見、夜はヘーマーケット座にシェリダンの『ゼ・スクール・フォア・スカンダル』の芝居を見に行つてゐる。漱石の『倫敦塔』はこの日の印象を基礎として、それに詩の衣を著せたものである。その初めに、自分が倫敦塔の見物に「行つたのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理抔は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の眞中へ抛り出された様な心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。」と書いてあるが、それは恐らく漱石がロンドンに著いた匆匆の時分の心持を、正直に告白したものだらうと思ふ。然もその翌日、十一月一日、漱石は留學地を選定する爲に、ケムブリッヂに赴くのである。

然しケムブリッヂは漱石が豫期したやうな所ではなかつた。明治三十四年(一九〇一)二月九日漱石が狩野亨吉・大塚保治・菅虎雄・山川信次郎に宛てて書いた手紙の中には、「偖是から留學地選定の件を方付ねばならぬ「ケンブリツヂ」か「オクスフオード」か乃至「エヂ〔ン〕バラ」か「ロンドン」かと色々思案をしたが幸ひ或る西洋人の紹介を持つて居たから一先「ケンブリツヂ」に行つて樣子を見て來ようと思ふて出掛て見た是が英國内の旅行の最初である「ケンブリツヂ」へつくと驚いたのは書生が運動シヤツト運動靴で町の内を「ゾロゾロ」歩いて居る是は船を漕い

だり丸を抛げたり又は自轉車へ乘る先生方であつて而して大學生の大部分は此先生方である夫から段々大學の樣子を聽て見ると先づ普通四百磅乃至五百磅を費やす有樣である此位使はないと交際抔は出來ないそうだ尤もやり方でもつと安くも出來るが世間がそういふ風だから衣服其他之に相應して高い月謝も高い留學生の費用では少々無理である無理にやるとした處が交際もせず書物も買へず下宿にとぢ籠つて居るならば何も「ケムブリツヂ」に限つた事はない少しでも樂な處に行くが善いと判斷した是に於て「ケンブリツヂ」も「オクスフオード」も御巳めにして此度は「エヂ〔ン〕バラ」か「ロンドン」かと考へ出した「エヂンバラ」は景色が善い詩趣に富んで居る安くも居られるだらう倫敦は烟と霧と馬糞で塡つて居る物價も高い、で餘程「エヂンバラ」に行かうとしたが玆に一の不都合がある「エヂンバラ」邊の英語は發音が大變ちがう先づ日本の仙臺辯の樣なものである切角英語を學びに來て仙臺の「百ズー三」抔を覺えたつて仕樣がない夫から倫敦の方はいやな處もあるが社會が大きい女皇が死ねば葬式が倫敦を通る王が卽位すれば「プロクラメーション」が倫敦である芝居に行きたければ West End に並んで居る夫から僕に尤も都合の善いのは古本抔をさがすには〔新い本で〔も〕出版屋は大概倫敦である〕此處が一番便利である　以上の譯で先づ倫敦に止まる事に致した」とある。漱石は十一月二日ケムブリッヂからロンドンに歸つて來、翌日からブリティッシュ・ミュージアムだのウェストミンスター・アベーだの、ナショ

ナル・ギャラレーだのを見て廻る傍ら下宿を捜し、またユニヴァーシティ・カレッヂのケア教授に手紙を出してその講義を聴く事の許可を得たりなぞして、十一月七日からケア教授の講義を聞き始め、十一月十二日には 85 Priory Road, West Hampstead の下宿に引き移つた。

漱石には然しケア教授などの講義があまり面白く思はれなかつたらしい。十一月二十日ベルリンにゐる藤代素人に宛てて、漱石は「學校ノ講義ナンカ餘リ下サラナイヨ伯林大學ハドウカネ」と書いてゐる。もつともその翌日、十一月二十一日は水曜で、ケア教授の講義がある日で、その日の日記には「Ker ノ講義ヲ聞ク面白カリシ」と書いてはあるが、結局漱石は大學の講義には見切をつけたらしく、その後の日記には、日記そのものからが既に疎かにされてはゐるが、ケア教授の名前は、一度も出て來ない。その代り同じ十一月二十一日の日記には、「Craig ヨリ返事來ル滅茶苦茶ノ字ヲカキテ讀ミニクシ來リテ相談セヨトノ意味ナリ」とあり、翌二十二日の日記には「Craig ニ會ス Shakespeare 學者ナリ一時間 5 shilling ニテ約束ス面白キ爺ナリ」とあり、その後火曜毎に「Craig」とか「Craig ニユク」とか、それでなくともその火曜にあたる月日だけが書き上げられてゐる所から想像すると、漱石は大學の方は好い加減にして、クレイグの所だけに熱心に通つたものに違ひない。

もつとも狩野亨吉・大塚保治以下連名宛の手紙には、「University College へ行つて英文學の

講義を聞たが第一時の配合が悪い無暗に待たせられる恐がある講義其物は多少面白い節もあるが日本の大學の講義とさして變つた事もない汽車へ乘つて時間を損して聽に行くよりも其費用で本を買つて讀む方が早道だといふ氣になる……時間の浪費が恐いからして大學の方は傍聽生として二月許り出席して其後やめて仕舞た同時に Prof. Ker の周旋で大學へ通學すると同時に Craig と云ふ人の家へ教はりに行く此人は英詩及「シエクスピヤー」の方では專門家で自分で edit した沙翁を「オクスフオード」から出版して居る「ダウデン」の朋友で今同教授が出版しつゝある沙翁集中の「キングリヤ」の editor である「ベーカー」町の角の二階裏に下女と二人で住んで居る頗る妙な爺だよ餘〔り〕西洋人と緣が絕ても困るから此先生の所へは逗留中は行く積りだ」と書いてある。漱石はケア教授の講義をクリスマスの休みまでは聽いたものらしい。さう言へば明治三十四年〔一九〇一〕二月五日ベルリンにゐる藤代素人に宛てて漱石は、「大學も此正月から御免蒙つた往復の時間と待合せの時間と教師のいふ事と三つを合して考へて見ると行〔く〕のは愚だよ夫に月謝抔を拂ふなら猶々愚だ夫で書物を買ふ方が好い」と書いてゐる。その代りに漱石は、明治三十四年の正月から、箇人教授を頼んだクレイグの所へだけ、通ふ事にする。漱石がクレイグの所へいつまで通つたか、はつきりした所は分からないが、然し少くともその年の十月十五日まで續いた事は、日記によつて、明らかである。このクレイグが、『永日小品』の中に出て來る『クレイ

グ先生』である事は、言ふまでもないだらう。

同じ『永日小品』の中に、漱石は『下宿』といふ小品を書いてゐる。「始めて下宿をしたのは北の高臺である。赤煉瓦の小じんまりした二階建が氣に入つたので、割合に高い一週二磅の宿料を拂つて、裏の部屋を一間借り受けた。其の時表を專領してゐるK氏は目下蘇格蘭巡遊中で暫くは歸らないのだと主婦の說明があつた。」といふ書き出しで始まるこの小品は、アグニスといふ小さな女の子を中心にした、何か複雜した、暗い、不思議な家庭の空氣を描き出して、次の『過去の臭ひ』と對をなすものであるが、是は恐らく 85 Priory Road の下宿の事を書いたものだらうと思ふ。もつとも中に出て來るK氏は、この時一緒であつた長尾半平と、後の下宿が一緒であつた田中茱とが、一つの人物に搗き交ぜられてゐるのではないかといふ氣もするが、精しい事は分からない。

漱石は、この家が「いやな家で」「且つ頗る契約違背の所爲があつた」といふので、程なく「東京の小石川といふ樣な」Priory Road から「今度は深川のはづれと云ふ樣な」6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. へ越して行つた。明治三十三年（一九〇〇）十二月二十六日鏡子宛の手紙には、既にこの番地が書いてある所から想像すると、漱石は恐らくクリスマス以前に、引越しを濟したものらしい。その手紙には、「以前の處は東京の小石川の如き處に存候今

度の處は深川と云ふ樣な何れも邊鄙な處に候卽ち北西ヨリ南東に轉居致候日本にて三里許りの道のり有之馬車を傭ひて書物を載せて宿替隨分厄介なれど日本の書生の如くランプを手に持つ樣な不體裁は無之候此度の家は先頃迄女學校なりし處傳染病の爲め閉校其後下宿と變化致候主人夫婦と妻君の妹にてやり居候下宿にしては女學校の女先生丈ありて上品に候色々親切にて家族の如く致し居候同宿のもの日本人少々有之候主人は頗る日本人好にて西洋人を下宿させるよりは日本人を客にしたしと申居候是は日本人はおとなしく且金にやかましからぬ故に候」と書いてある。この下宿の事と、この下宿に雇はれてゐた下女の事とは、『倫敦消息』の中に精しく書かれてゐる。然も漱石がこの下宿にくつついて Tooting の方へ越して行つた事、竝びにその新居がいかにも沒趣味な家であつたといふ事も、亦『倫敦消息』に精しい。日記によれば、その移轉は明治三十四年(一九〇一)四月二十五日の事である。その日の日記には、「午後 Tooting ニ移ル聞シニ劣ルイヤナ處デイヤナ家ナリ永ク居ル氣ニナラズ」とあり、翌二十六日の條には、「朝 Tooting Station 附近ヲ散歩ス　ツマラヌ處ナリ」とあり、翌翌二十七日の條には「Balham ニ行ク、又移リ度ナツタ　兎ニ角池田君ノ來テカラノ事ダ」とある。漱石は此所にゐるのはよほど厭だつたらしいが、丁度ドイツから池田菊苗が歸朝の途次漱石の下宿に來るといふ事になつてゐたので、越すにしてもその池田菊苗が來た上の事にしようといふのである。

池田菊苗は、漱石が豫備門に這入つた時に、第一級にゐた。大學を卒業したのは、明治二十二年で、漱石の四年前である。漱石は英文科の出で、池田菊苗は化學の出であるから、漱石と池田とが前から知つてゐたかどうかは分からない。然し文部省の留學生は、當時は極めて少數であつた上に、ヨーロッパにゐる日本人からが極めて少數だつたのだから、假令それまで大した知り合ひではなかつたとしても、日本人同士、殊に大學出同士は互に便宜を計り合ふ氣持が強かつたに違ひない。漱石が四月十九日と四月二十三日とに、池田の所へ手紙を書いてゐるのは、恐らく下宿の事を頼んで來た返事なのだらうと思ふ。五月三日の日記には「池田氏ノ部屋出來上ル」とあり、五月四日の日記には「池田氏ヲ待ツ來ラズ」とあり、その池田は翌五月五日になつて漱石の下宿に來てゐる。

五月五日の日記に、漱石は「朝池田氏來ル午後散歩」と書いてゐる。五月六日の日記には、「池田菊苗氏ト Royal Institute ニ至ル／夜十二時過迄池田氏ト話ス」とある。五月七日の條には、「Craig 氏ニ至ル池田氏寫眞を惠マル、」とある。五月九日の條には、「夜池田氏ト英文學ノ話ヲナス同氏ハ頗ル多讀ノ人ナリ」とある。五月十四日の條には、「池田氏と話す」とある。五月十五日の條には、「池田氏と世界觀ノ話、禪學ノ話抔ス氏ヨリ哲學上ノ話ヲ聞ク」とある。五月十六日の條には、「夜池田氏ト教育上ノ談話ヲナス又支那文學ニ就テ話ス」とある。五月二十日の條には、

「夜池田ト話ス理想美人ノdescriptionアリ兩人共頗ル精シキ說明ヲナシテ兩人現在ノ妻ト此理想美人ヲ比較スルニ殆ンド比較スベカラザル程遠カレリ大笑ナリ」とある。五月二十一日の條には、「昨夜シキリニ髭ヲ撚ツテ談論セシ爲右ノヒゲノ根本イタク出來物デモ出來タ様ナリ」とある。――漱石の書いた簡單な日記の中に、是ほどのべつに一人の人の名前が出て來て、然もそれがいかにも樂しさうに見えるのは、稀有である。漱石が、池田菊苗とともに生活してゐる事を、いかに喜んでゐたかは、是だけでも想像する事が出來る。もつともその後の日記には、あまり池田の名前は出て來ない。それは、五月二十二日の條に、「晩ニ池田氏トCommonニ至ル男女ノ對此所彼所ニbenchニ腰ヲカケタリ草原ニ坐シタリ中ニハ抱合ツテkissシタリ妙ナ國柄ナリ」とあるのと、六月十五日の條に、「此日池田室ニテ煖爐ヘ火ヲタク」とあるのと、たつた二箇所に見えるきりである。然し二人がその後もずつと始終話をしてゐた事は、六月十九日漱石がベルリンの藤代素人に宛てて、「目下は池田菊苗氏と同宿だ同氏は頗る博學な色々の事に興味を有して居る人だ且つ頗る見識のある立派な品性を有して居る人物だ然し始終話し許りして勉强をしないからいけない近い内に同氏は宿を替る僕も替る」と書いてゐるのでも知れる。漱石がロンドンで池田菊苗に會つた事は、漱石にとつて、無上の歡びであつたやうに見える。それは或は漱石のロンドンに於ける生活の中で、池田菊苗と同宿して暮した、この二ケ月近くの生活が、一番愉快な生活だ

つたのかも知れないと思はれるほどである。漱石は池田菊苗から大きな刺激を受けたが、さういふ大きな刺激を與へ得る人と一緒に住んで、こつちの言ふ事が一一理解されアップリシエートされるとともに、向うの言ふ事を一一理解しアップリシエートする事が出來る生活といふものが、人生に於いてそれほど數多く惠まれるものではない。然も二人とも、あまり話ばかりして勉強をしないからいけないと感じ、お互に下宿を替らうなどとまで考へるに至つては、いかにお互がお互の中に溺れ込むほどの牽引を感じてゐたかが、眼に見える氣さへする。

六月二十六日に池田菊苗が先づ Kensingston に去つた。漱石も七月二十日 81 the Chase, Clapham Common の Miss Leale の所へ越して行つた。七月二十日の日記に、「午後 Miss Leale 方ニ引越ス大騷動ナリ四時頃書籍大革鞄來ル箱大ニシテ門ニ入ラズ門前ニテ書籍ヲ出ス夫ヲ三階ヘ上ル非常ナ手數ナリ暑氣堪難シ發汗一斗許リ室內亂雜膝ヲ容ル丶能ハズ」と書いてある。その後も漱石は池田菊苗と手紙のやりとりをし、自身も往復し、食事をともにしたりしてゐたが、然し池田は八月三十日アルバート・ドックを立つて日本に歸つてしまつた。漱石は九月十二日寺田寅彦に宛てて、「つい此間池田菊苗氏(化學者)が歸國した同氏とは暫く倫敦で同居して居つた色々話をしたが頗る立派な學者だ化學者として同氏の造詣は僕には分らないが大なる頭の學者であるといふ事は慥かである同氏は僕の友人の中で尊敬すべき人の一人と思ふ君の事をよく話して置た

から暇があつたら是非訪問して話しをし給へ君の專門上其他に大に利益がある事と信ずる」と書いてゐる。

漱石の今度の下宿は、ロンドンの西南の町外れにあつた。十二月十八日漱石が子規に宛てた手紙の中には、「僕は又移つたよ。五乞閑地不得閑、三十五年七處移なんと三十五年に七度居を移す位な事では自慢にやならない。僕なんか英吉利へ來てからもう五返目だ。今度の處は御婆さんが二人退職陸軍大佐といふ御爺さんが一人丸で老人國へ島流しにやられたやうな仕合さ。この御婆さんが「ミルトン」や「シエクスピヤー」を讀んで居ておまけに佛蘭西語をペラ〳〵辯ずるのだから一寸恐縮する。「夏目さん此句の出處を御存知ですか」抔と仰せられる事がある。「あなたは大變英語が御上手ですが餘程おちいさい時分からお習ひなすつたんでせう」抔と持上げられた事もある。人豈自ら知らざらんや。冗談言つちやいけないと申度なる。こちらへ來てお世辭を眞に受けて居ると大變な事になる。男は左程でもないが、女なんかはよく“wonderful”などと愚にもつかないお世辭をいふ。下手の方に“wonderful”ですかと皮肉をいふこともある。」とある。『創作家の態度』の中で、漱石がロンドンに下宿をしてゐた家に、退職の軍人で八十許りの老人がゐて、是が外に出ると不思議に、小供が玩具にするブリキ製の匙を拾つて來て、それを叮嚀に部屋の中に列べるといふ事を述べてゐるが、是が恐らくこの下宿の退職陸軍大佐なのだらうと思

ふ。『永日小品』の中の『霧』も、漱石がこの下宿にゐた時の經驗である。『自轉車日記』の中に出て來る下宿の婆さんも、この下宿の婆さんである。——さうしてこの下宿こそ、漱石が、明治三十五年(一九〇二)十二月五日ロンドンを出發して歸國の途につくまで、凡そ一年半に亙つて、最も長くゐた下宿であり、またこの下宿こそ漱石が、其所に立て籠つて最も鋭意に「文學論」の著述に專念した下宿であり、またこの下宿こそ漱石が、その爲め神經衰弱に罹り、この先二度と英國みたいな所に來るものかといふ意味の事を、わざわざポートサイドから下宿の婆さんに言つてよこすほど、漱石を英國嫌ひにした下宿だつたのである。

三六 「文學論」

漱石がロンドンで池田菊苗に會つたといふ事は、漱石の生活にとつて、一大事件であつた。漱石はその爲め「文學論」著述の一念を發起し、「文學論」著述の一念を發起するとともに、外國文學に對する漱石の「他人本位」が、「自己本位」に變る事が出來たからである。「文學論」の著述が漱石の外國文化に對する獨立戰爭の宣言であつたとすれば、その宣言の口火を切つたものは、池田菊苗だつたからである。その意味で池田菊苗は、米山保三郎・正岡子規とともに、漱石の歴史に於て、重要な役割を演じた人物であつたと言つて可い。

談話筆記『處女作追懷談』の中で、漱石は「然し留學中に段々文學がいやになつた。西洋の詩などのあるものをよむと、全く感じない。それを無理に嬉しがるのは、何だかありもしない翅を生やして飛んでる人のやうな、金がないのにあるやうな顏して歩いて居る人のやうな氣がしてならなかつた。所へ池田菊苗君が獨乙から來て、自分の下宿へ留つた。池田君は理學者だけれども、

話して見ると偉い哲學者であつたには驚ろいた。大分議論をやつて大分やられた事を今に記憶してゐる。倫敦で池田君に逢つたのは、自分には大變な利益であつた。御蔭で幽靈の樣な文學をやめて、もつと組織だつたどつしりした研究をやらうと思ひ始めた。それから其方針で少しやつて、全部の計畫は日本でやり上げる積で西洋から歸つて來ると、大學に教へてはどうかといふことだつたので、そんならさうしようと言つて大學に出ることになつた。(是も今云つた自分の研究にはならないから、最初は斷つたのである。)」と言つてゐる。既に是まで屢觸れて來たやうに、漱石は大學を卒業して以來、「英文學に欺かれたるが如き不安」に惱まされ續けた。ロンドンに來る船の中ででも、漱石は藤代素人に向かつて、その事を間接に洩してゐる。勿論漱石に英文學が分からないのではないのである。分かつてゐればこそ漱石は『英國詩人の天地山川に對する觀念』や、ウォルト・ホイットマン論や、『トリストラム・シャンデー』論や、『エイルヰン』論や、あゝいふ立派な批評を書く事が出來たのである。然し漱石には、それだけでは、敢て分かるといふ事が出來なかつた。漱石にとつて英文學が分かると言ひ切る事が出來る爲には、それに關する自分の意見が、英國の本國に於いても十分通用するのみならず、自分の意見がそのまま英國人の意見になり得る程度のものでなければならなかつた。然るに漱石の意見は屢英國の本國の意見と喰ひ違つた。自分の良いと思ふものも、英國の本國では惡いと言はれる。英國の本國で良いと言はれ

てゐるものも、自分には少しも良いと思へないものもある。然も英國文學の鑑賞は、英國本國の人の舌によつて、最も正しく鑑賞される筈のものであるとすれば、いかに漱石が自分を立てようとしても、事英文學に關する限り、絕對の權威は英國本國にあつて、自分にはない。少くとも理窟の上から言つて、此所に自分本位の世界を建立する餘地がないのである。其所に漱石の惱みがあつた。漱石は『私の個人主義』の中で、その邊の消息を、最も精細に說明する。——

「私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとう〳〵教師になつたといふより教師にされて仕舞つたのです。幸に語學の方は怪しいにせよ、何うか斯うか御茶を濁して行かれるから、其日々々はまあ無事に濟んでゐましたが、腹の中は常に空虛でした。空虛なら一そ思ひ切りが好かつたかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが、至る所に潛んでゐるやうで堪まらないのです。しかも一方では自分の職業としてゐる教師といふものに少しも興味も有ち得ないのです。教育者であるといふ素因の私に缺乏してゐる事は始めから知つてゐましたが、たゞ教場で英語を教へる事が旣に面倒なのだから仕方がありません。私は始終中腰で隙があつたら、自分の本領へ飛び移らう〳〵とのみ思つてゐたのですが、さて其本領といふのがあるやうで、無いやうで、何處を向いても、思ひ切つてやつと飛び移れないのです。

「私は此世に生れた以上何かしなければならん、と云つて何をして好いか少しも見當が付かな

い。私は丁度霧の中に閉ぢ込められた孤獨の人間のやうに立ち竦んでしまつたのです。さうして何處からか一筋の日光が射して來ないか知らんといふ希望よりも、此方から探照燈を用ひてたつた一條で好いから先迄明らかに見たいといふ氣がしました。所が不幸にして何方の方角を眺めてもぼんやりしてゐるのです。ぼうつとしてゐるのです。恰も嚢の中に詰められて出る事の出來ない人のやうな氣持がするのです。私は私の手にたゞ一本の錐さへあれば何處か一ケ所突き破つて見せるのだがと、焦燥り抜いたのですが、生憎其錐は人から與へられる事もなく、又自分で發見する譯にも行かず、たゞ腹の底では此先自分はどうなるだらうと思つて、人知れず陰鬱な日を送つたのであります。

「私は斯うした不安を抱いて大學を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、又同樣の不安を胸の底に疊んで遂に外國迄渡つたのであります。然し一旦外國へ留學する以上は多少の責任を新たに自覺させられるには極つてゐます。それで私は出來るだけ骨を折つて何かしやうと努力しました。然し何んな本を讀んでも依然として自分は嚢の中から出る譯に參りません。此嚢を突き破る錐は倫敦中探して歩いても見付りさうになかつたのです。私は下宿の一間の中で考へました。詰らないと思ひました。いくら書物を讀んでも腹の足にはならないのだと諦めました。同時に何の爲に書物を讀むのか自分でも其意味が解らなくなつて來ました。

「此時私は始めて文學とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作り上げるより外に、私を救ふ途はないのだと悟つたのです。今迄は全く他人本位で、根のない萍のやうに、其所いらをでたらめに漂よつてゐたから、駄目であつたといふ事に漸く氣が付いたのです。私のこゝに他人本位といふのは、自分の酒を人に飲んで貰つて、後から其品評を聽いて、それを理が非でもさうだとして仕舞ふ所謂人眞似を指すのです。一口に斯う云つて仕舞へば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人眞似をする譯がないと不審がられるかも知れませんが、事實は決してさうではないのです。近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や角いふので日本人も其尻馬に乘つて騒ぐのです。まして其頃は西洋人のいふ事だと云へば何でも蚊でも盲從して威張つたものです。だから無暗に片假名を竝べて人に吹聽して得意がつた男が比々皆是なりと云ひたい位ごろ／＼してゐました。他の惡口ではありません。斯ういふ私が現にそれだつたのです。譬へばある西洋人が甲といふ同じ西洋人の作物を評したのを讀んだとすると、其評の當否は丸で考へずに、自分の腑に落ちやうが落ちまいが、無暗に其評を觸れ散らかすのです。つまり鵜呑と云つてもよし、又機械的の知識と云つてもよし、到底わが所有とも血とも肉とも云はれない、餘所餘所しいものを我物顔に喋舌つて歩くのです。然るに時代が時代だから、又みんながそれを賞めるのです。

「けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着をして威張つてゐるのだから、內心は不安です。手もなく孔雀の羽根を身に着けて威張つてゐるやうなものですから。それでもう少し浮華を去つて摯實に就かなければ、自分の腹の中は何時迄經つたつて安心は出來ないといふ事に氣がつき出したのです。

「たとへば西洋人が是は立派な詩だとか、口調が大變好いとか云つても、それは其西洋人の見る所で、私の參考にならん事はないにしても、私にさう思へなければ、到底受賣をすべき筈のものではないのです。私が獨立した一個の日本人であつて、決して英國人の奴婢でない以上はこれ位の見識は國民の一員として具へてゐなければならない上に、世界に共通な正直といふ德義を重んずる點から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

「然し私は英文學を專攻する。其本場の批評家のいふ所と私の考と矛盾しては何うも普通の場合氣が引ける事になる。そこで斯うした矛盾が果して何處から出るかといふ事を考へなければならなくなる。風俗、人情、習慣、溯つては國民の性格皆此矛盾の原因になつてゐるに相違ない。それを、普通の學者は單に文學と科學とを混同して、甲の國民に氣に入るものは屹度乙の國民の賞讚を得るに極つてゐる、さうした必然性が含まれてゐると誤認してかゝる。其所が間違つてゐると云はなければならない。たとひ此矛盾を融和する事が不可能にしても、それを說明する事は

出來る筈だ。さうして單に其說明丈でも日本の文壇には一道の光明を投げ與へる事が出來る。――斯う私は其時始めて悟つたのでした。甚だ遲蒔の話で慚愧の至でありますけれども、事實だから僞らない所を申し上げるのです。

「私はそれから文藝に對する自己の立脚地を堅めるため、堅めるといふより新らしく建設する爲に、文藝とは全く緣のない書物を讀み始めました。一口でいふと、自己本位といふ四字を漸く考へて、其自己本位を立證する爲に、科學的な研究やら哲學的の思索に耽り出したのであります。今は時勢が違ひますから、此邊の事は多少頭のある人には能く解せられてゐる筈ですが、其頃は私が幼稚な上に、世間がまだそれ程進んでゐなかつたので、私の遣り方は實際已を得なかつたのです。

「私は此自己本位といふ言葉を自分の手に握つてから大變强くなりました。彼等何者ぞやと氣慨が出ました。今迄茫然と自失してゐた私に、此所に立つて、この道から斯う行かなければならないと指圖をして吳れたものは實に此自我本位の四字なのであります。

「自白すれば私は其四字から新たに出立したのであります。さうして今の樣にたゞ人の尻馬にばかり乘つて空騷ぎをしてゐるやうでは甚だ心元ない事だから、さう西洋人振らないでも好いといふ動かすべからざる理由を立派に彼等の前に投げ出して見たら、自分も嘸愉快だらう、人も嘸

喜ぶだらうと思つて、著書其他の手段によつて、それを成就するのを私の生涯の事業としやうと考へたのです。

「其時私の不安は全く消えました。私は輕快な心をもつて陰鬱な倫敦を眺めたのです。比喩で申すと、私は多年の間懊惱した結果漸く自分の鶴嘴をがちりと鑛脈に掘り當てたやうな氣がしたのです。猶繰り返していふと、今迄霧の中に閉ぢ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を敎へられた事になるのです。

「斯く私が啓發された時は、もう留學してから、一年以上經過してゐたのです。それでとても外國では私の事業を仕上る譯に行かない、兎に角出來る丈材料を纏めて、本國へ立ち歸つた後、立派に始末を付けやうといふ氣になりました。卽ち外國へ行つた時よりも歸つて來た時の方が、偶然ながらある力を得た事になるのです。」

――是は言ふまでもなく、當時の日本の盲目的な歐化主義に對する、決然たる叛逆である。ヨーロッパ文明を鵜呑みにして、得意さうに肩で風を切つてあるいてゐる日本人と訣別して、自主獨立の日本人として、世界的の立場に立ちつつ、對等に、男らしく、ヨーロッパの文化に接觸して行かうとする、漱石の門出である。漱石はその爲め、ある作品を讀んで良いとか惡いとか議論する、空中樓閣上の戰ひを棄てて、もつと根本的な、文學を生み出す心の研究から手をつけて、

それが次第に種種の文學形式に分化・發展して行く徑路を跡づけ、それを科學的に説明する事によつて、何人の抗辯をも許さない、文學に本質的な問題を解決しようとするのである。勿論是は漱石の中の、獨立自尊の心が、漱石にさういふ研究を促がしたのには違ひない。然し漱石がロンドンで池田菊苗に會ふ事がなかつたら、この時分にかういふ形で、漱石が「文學論」著述の一念を發起したかどうかは分からない。オリジナルな科學者としての池田菊苗が、オリジナルな文學者としての漱石を刺激して、漱石に文藝の科學的研究を思ひ立たしめたのに違ひないのである。

然し漱石の「文學論」はいつごろ漱石に受胎されたものであるか。是が池田菊苗の刺激によるものである以上、明治三十四年(一九〇一)五月五日、池田菊苗が漱石のツーティングの下宿に來るまでは、是がまだはつきりした形に纏まり上がつてゐない事は、言ふまでもない。然し明治三十四年六月十九日漱石が藤代素人に與へて、「近頃は英學者なんてものになるのは馬鹿らしい様な感じがする何か人の爲や國の爲に出來そうなものだとボンヤリ考ヘテ居るコンナ人間は外ニ澤山アルダラウ」と言つてゐるのは、池田の刺激が既に相當力強く漱石の中で醱酵し出してゐる事を、證明するもののやうに思はれる。少くとも是は「幽靈の様な文學をやめて、もつと組織だつたどつしりした研究をやらうと思ひ始めた」第一歩であつたと考へて可いだらう。次いで漱石が九月十二日寺田寅彦に宛てた手紙の中には、「學問をやるならコスモポリタンのものに限り候英

文學なんかは椽の下の力持日本へ歸つても英吉利に居つてもあたまの上がる瀬は無之候小生の様な一寸生意氣になりたがるもの丶見せしめにはよき修業に候君なんかは大に專門の物理學でしつかりやり給へ本日の新聞で Prof. Rücker の British Association でやつた Atomic Theory ニ關する演說を讀んだ大に面白い僕も何か科學がやり度なつた」とあり、九月二十二日鏡子に宛てた手紙の中には、「近頃は文學書は嫌になり候科學上の書物を讀み居候當地にて材料を集め歸朝後一巻の著書を致す積りなれどおれの事だからあてにはならない只今本を讀んで居ると切角自分の考へた事がみんな書いてあつた忌々しい」とある。この時分にはもう凡その方針が立つて、漱石は、そろそろその方針に從つて勉强してゐるのである。日記にあたつて見ると、今迄文學書でなければ "Illustrated History of England" だとか、"Hundred Pictures" だとか、それでなければ "Wild Birds" だとかいふ本を買つてゐたものが、九月二十三日の條には、「Denny ニテ Ethics 及ビ Origin of Art ヲ買フ」と書いてあつたり、十月十六日の條には、「Bosanquet ヲ讀始ム」と書いてあつたりする。漱石は遲くも明治三十四年(一九〇一)の九月には、既に、この仕事にとりかかつてゐたと推定して可い。

十一月二十日寺田寅彦宛の手紙には「小生不相變碌々別段國家の爲にこれと申す御奉公を出來かねる様で實に申譯がない／今から十年もしたら何か出來想に思ふが此十年が昔からの事だから

頗るあてにならない」と書いてある。是は恐らく漱石の仕事が著著進行してはゐたが、然し仕事が仕事だから、十年計畫の仕事として、どつしり腰を据ゑて是と取つ組む氣でゐなければならないといふ覺悟が、漱石に出來上つてゐる事を物語るものではなかつたかと思はれる。翌明治三十五年（一九〇二）二月十六日菅虎雄宛の葉書の中には、「漸々留學期もせまり學問も根つからはかどらず頗る不景氣なり歸つて教師なんかするのは厭でたまらない況んや熊本迄歸るに於てをや夫を考へると英國に生涯居る方が氣樂でよろしい近頃は文學書抔は讀まない心理學の本やら進化論の本やらやたらに讀む何か著書をやらうと思ふが僕の事だから御流れになるかも知れません」と書いてある。此所には、眼に見えて出來上がつたものがいくらもない事をもとがしく思ふ心と、そんな事には貪著なく悠悠と胡坐をかいて是を仕上げるべきであるとする心と、二つの心が同時に閃めき出てゐるやうにも見える。然し三月十五日中根重一宛の、「私も當地着後（去年八九月頃より）より一著述を思ひ立ち目下日夜讀書とノートをとると自己の考を少し宛かくのとを商買に致候同じ書を著はすなら西洋人の糟粕では詰らない人に見せても一通はづかしからぬ者をと存じ勵精致居候然し問題が如何にも大問題故わるくすると流れるかと存候よし首尾よく出來上り候とも二年や三年ではとても成就仕る間敷かと存候出來上らぬ今日わが著書抔事々敷吹聽致候は生れぬ赤子に名前をつけて騷ぐ樣なものに候へども序故一應申上候先づ小生の考にては「世界を如何

に觀るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釋すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の變化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原素を解剖し其聯合して發展する方向よりして文藝の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」る積りに候斯様な大き「な」事故哲學にも歴史にも政治にも心理にも生物學にも進化論にも關係致候故自分ながら其大膽なるにあきれ候事も有之候へども思ひ立候事故行く處迄行く積に候斯様な決心を致候と但欲しきは時と金に御座候日本へ歸りて語學教師抔に追つかはれ候ては思索の暇も讀書のひまも無之かと心配致候時々は金を十萬圓拾つて圖書館を立て其中で著書をする夢を見る抔愚にもつかぬ事に御座候此手紙差上候後は又當分御無沙汰致すやも計り兼候間右様御了知被下度候」といふ手紙に至つては、戰略既に定まつて、著著それを實行に移さうとしてゐる將軍かなどのやうに、漱石は凛凛たる勇氣に充ちて、是を書いた感がある。恐らく漱石はこの時分が、仕事に一番膏が乘つてゐた時期だつたのだらうと思ふ。

漱石が『文學論』の序で、「余は下宿に立て籠りたり。一切の文學書を行李の底に收めたり。文學書を讀んで文學の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり。余は心理的に文學は如何なる必要あつて、此世に生れ、發達し、頽廢するかを極めんと誓へり。余は社會的に文學は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めん

と誓へり。／余は余の提起せる問題が頗る大にして且つ新しきが故に、何人も一二年の間に解釋し得べき性質のものにあらざるを信じたるを以て、余が使用する一切の時を擧げて、あらゆる方面の材料を蒐集するに力め、余が消費し得る凡ての費用を割いて參考書を購へり。此一念を起してより六七ケ月の間は余が生涯のうちに於て尤も鋭意に尤も誠實に研究を持續せる時期なり。而も報告書の不充分なる爲め文部省より譴責を受けたるの時期なり。」と書いてゐるのも、恐らくこの明治三十五年(一九〇二)三月前後の事をさすのに違ひない。然も人生に於いて、仕事に一番膏の乘つてゐる時が、その人の健康にとつて、屢一番危險な時であつた。漱石が「尤も鋭意に尤も誠實に研究を持續」した「六七ケ月」の後に、漱石には劇しい疲勞が來た。さうして漱石は、ひどい神經衰弱にかかるのである。

三七　神經衰弱

漱石の所へ文部省から送つて來る留學費は、年額千八百圓、卽ち月百五十圓であつた。然ものFlodden Road の下宿で漱石は、一週二十五志拂つてゐる。是は當時として穢ない安下宿だつたやうであるが、それでも是で一ケ月五十圓の金はなくなつた。その餘りで本を買つたり、洋服を拵へたり、芝居を見たり、たまには外で飯も食ふとすれば、漱石が「歐洲ニ來テ金ガナケレバ一日モ居ル氣ニハナラズ候穢クテモ日本ガ氣樂デ宜敷候」（三三・一〇・二三）と言つたり、「西洋にては金が氣がヒケル程入候留學費でどうしてやるかゞ問題に候」（三三・一〇・三〇）と言つたり、「當地にては金のないのと病氣になるのが一番心細く候病氣は歸朝迄は謝絶する積なれど金のなきには閉口致候日本の五十錢は當地にて殆んど十錢か二十錢位の資格に候十圓位の金は二三回まばたきをすると烟になり申候今度の下宿は頗るきたなく候へども安直故辛防致居候可成衣食を節して書物丈でも買へる丈買はんと存候故非常にくるしく候」（三三・一二・二六）と言つたり、非

常に切り詰めた、金で苦勞する生活をしなければならなかつたのは、是非もない事であつた。

然も漱石は、折角此所へ來たのだから、「可成衣食を節して書物丈でも買へる丈買は」うと、決心してゐるのである。漱石の生活は愈切り詰められなければならなかつた。漱石はある時は「表へ出た歸り掛に途中で買つたサンドヰツチを食ひながら、廣い公園の中を目的(めあて)もなく步」き、「斜めに吹きかける雨を片々の手に持つた傘で防(よ)けつゝ、片々の手で薄く切つた肉と麵麭を何度にも頰張るの」に苦しみ、又ある時は「町で買つて來たビスケットの罐を午(ひる)になると開」き、「湯も水も呑まずに、硬くて脆いものをぼり〳〵嚙み摧いては、生唾の力で無理に嚥み下し」、又ある時は「馭者や勞働者と一處に如何はしい一膳飯屋で形ばかりの食事を濟まし」、さうする事によつて下宿屋に拂ふ金額を少しでも減らして、一冊でも餘計に本を買つて歸らうとする。――是が直ちに漱石の神經衰弱を惹き起す原因にはならなかつたとしても、是が漱石の肉體をさいなんだ事は、言ふまでもない。

その上漱石には、ロンドンの市街・風土・人間・ひつくるめてロンドンの生活そのものが、窮屈で、陰氣で、沒趣味で、不愉快でたまらなかつた。漱石が西洋風の生活と馴染む事が出來なかつた事は、既に航海中の手紙によつて明白である。それがロンドンに住み出してから一層漱石に堪へ難くなつた事は、例へば「倫敦ノ町ニテ霧アル日太陽ヲ見ヨ黑赤クシテ血ノ如シ、鳶色ノ地

ニ血ヲ以テ染メ抜キタル太陽ハ此地ニアラズバ見ル能ハザラン。」(三四・一・三)だの、「倫敦ノ町ヲ散歩シテ試ミニ痰ヲ吐キテ見ヨ眞黑ナル塊リノ出ルニ驚クベシ何百萬ノ市民ハ此煤烟ト此塵埃ヲ吸收シテ毎日彼等ノ肺臟ヲ染メツヽアルナリ我ナガラ鼻ヲカミ痰ヲスルヰハ氣ノヒケル程氣味惡キナリ」(三四・一・四)だの、「一昨日 Brixton デ買物ヲシタラ善イ結構ナ御天氣デスナト云ツタ此ガ結構デハタマラナイ辱クモ日本晴ヲ拜マシテやリタイ」(三四・二・一八)だの、「先達て Craig 氏に雪は好キかと尋ねたら大嫌ひだと答へた何故と云たら泥がきたないと云つた泥は誰も好くまいが雪は Poet ノ愛するものだと答へてやつた Craig は頻りに Nature を云々する男だ」(三四・二・九)だの、「家の者共は犬ノ共進會を見に行た惡い天氣デ雪が降つて居る、當地のものは天氣を氣にかけない禽獸に近い」(三四・二・一三)だの、「西洋人ハ執濃イ「ガスキダ華麗ナ「ガスキダ芝居ヲ觀テモ分ル食物ヲ見テモ分ル建築及飾粧ヲ見テモ分ル夫婦間ノ接吻や抱キ合フノヲ見テモ分ル、是ガ皆文學ニ返照シテ居ル故ニ洒落超脱ノ趣ニ乏シイ出頭天外シ觀ヨト云フ樣ナ樣ニ乏シイ又笑而不答心自閑ト云フ趣ニ乏シイ」(三四・三・一二)だの、「晩ニ池田氏ト Common ニ至ル男女ノ對此所彼所ニ bench ニ腰ヲカケタリ草原に坐シタリ中ニハ抱合ツテ kiss シタリ妙ナ國柄ナリ」(三四・五・二二)だのと日記に書いて居り、また手紙にも「山川君世帶を持つたか僕は歸つたらだれかと日本流の旅行がして見たい小天行抔を思ひ出すよ」(三四・二・九)だ

の、「國を出てから半年許りになる少々厭氣になつて歸り度なつた」(三四・二・二〇)だの、「おれは丈夫だ餘程肥た様だ然し早く日本に歸りたい」(三四・三・九)だの、「僕の趣味は頗る東洋的發句的だから倫敦抔にはむかない支那へでも洋行してフカの鰭か何かをどうも乙だ抔と言ひながら賞翫して見度い」(三四・九・一二)だの、「勉强するには今日の如き境遇まことに安氣にてよろしけれど其他の點に於ては矢張日本の方すみよき心地致候いづれ今年十二月頃には歸朝致す事と存候」(三五・四・一三)だの、「當地には櫻といふものなく春になつても物足らぬ心地に候且つ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣も無之文明がかくの如きものならば野蠻の方が却つて面白く候鐵道の音滊車の烟馬車の響腦病抔ある人は一日も倫敦には住みがたかるべきかと思はれ候日本に歸りての第一の樂みは蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る是が願に候夫から野原へ出て蝶々やげん／＼を見るのが樂に候」(三五・四・一七)だのと書いてあるのでも、知れる。航海中の船の中と同じやうに、漱石はロンドンにゐても、すべての點に、自分をエトランジェーとして感じ、それだけに日本と日本の生活とを手ぐり寄せたいやうに、戀しがつてゐるのである。

　勿論漱石には、金がなかつた。もし漱石が經濟的に惠まれ、もつと良い家に住み、もつと景色の好い所をあるき、その他いろいろもつと良い條件の下に生活する事が出來てゐたら、或は漱石

はロンドンに住んでゐても、もう少しはコムフォタブルに感じる事が出來たかも知れない。それにしても「蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る」といふやうな事は、餘程の金でも使ふ氣になるのでなければ、到底ロンドンでは出來る事ではなかつた。この點で漱石は、根本的に、ロンドンの風土では榮える事の出來ないものを持つてゐるのである。現に漱石は自分の趣味は「頗る東洋的發句的だから倫敦抔にはむかない」と言つてゐる。漱石が『文學論』の序で、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英國紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を營みたり。倫敦の人口は五百萬と聞く。五百萬粒の油のなかに、一滴の水となつて辛うじて露命を繫げるは余が當時の狀態なりといふ事を斷言して憚からず。」と言つてゐるのも、外にいろんな理由もあつたが、根本は漱石の趣味が「頗る東洋的發句的」で「倫敦抔にはむかな」かつたから、漱石は孤獨に感じざるを得なかつたのである。

漱石がロンドンにゐて、日本にゐては到底こんなに暢氣に勉強する事は出來ないから、この機會にうんと勉強して置かうといふ氣になつてゐた事は、事實であつた。殊に「文學論」著述の一念を發起してからは、歸ればなかなか追ひ使はれる身だから、此所で出來るだけの材料を集めて置かなければならないといふので、「六七ケ月の間」といふもの、最も銳意に最も誠實に勉強した

事も、亦事實であつた。然しその事と、漱石の内なる渇きと餓とが竟に充たされる事がないといふ事とは、全然別箇の問題であつた。否、漱石が意志の力を振ひ起して、研究に集中し、内なる渇きと餓とを無視しようとすればするほど、漱石の心は、日陰の草花のやうに、段段瘠せ、衰へ、萎え、凋れて行つたやうにさへ見える。勿論廣いロンドンには、例へば「朝雪晴れて心地よき天氣なり獨り野外に散歩す溫風面を吹きて春の如し倫敦もDenmark Hill附近は閑靜にて聊か風雅の心を喚起するに足るHampstead Heathに長尾氏と散歩せしときと今日が尤も倫敦に來てよりの愉快なる日なり」(三四・一・一〇)といひ、或は「朝Dulwichニ至リPicture Galleryヲ見ル此邊ニ至レバサスガノ英國モ風流閑雅ノ趣ナキニアラズ　綺所を栗燒く人に尋ねけり」(三四・二・一)といひ、或は「又Brockwell Parkニ至リ花園ヲ觀泉水ヲ廻ル葦ノ芽ノ青キヲ見ル又桃ノ花ノ蕾ムヲ見ル愉快ナリ」(三四・三・四)といひ、或は「Craig氏ニ至ル歸途Bond St.ヨリPiccadillyニ出デSt. John's Parkニ至ル青キ芝ノ中ヨリ黃ト藤色ノtulipガ「ニヨキ〳〵」出テ居ルノガ大變美クシイ」(三四・三・一二)といひ、或は「Streathamニ神田先生ヲ訪フ……／畠ニテcows, pigs, fowlsヲ見ル頗ル愉快ナル家ナリ、……」(三四・五・一二)といふやうな、漱石の眼を樂しませ、心を樂しませる風景も、たまにはないでもなかつたが、然し障子を開ければすぐ緣側があり、緣側にはすぐ庭が續き、庭には芭蕉だの木賊だの羊齒だのが生えてゐるといふ

やうな日本と違つて、さういふものを見る爲には、わざわざ其所を目ざして、時間をかけて往復しなければならない面倒があり、閉ぢ籠つて勉強する所は、窓の廣い牢屋のやうな部屋であり、外をあるけば煤烟と塵埃とで痰が黑くなるやうな場所にゐるのでは、決して眼と心との樂しむ餘裕の、ある筈がないのである。漱石は既に明治三十四年(一九〇一)七月一日の日記に、「近頃非常ニ不愉快ナリクダラヌ事ガ氣ニカヽル神經病カト怪マル、然一方デハ非常ニヅーヅー敷處ガアル、妙ダ／洒々落々光風霽月トハ中々ユカン駄目〳〵」と書かなければならなかつたほど、いらいらした氣持になつて來てゐる。

さういふ環境にあつて、更に漱石を住みにくくしたものは、ロンドンに、自分の緊張し切つた心持を揉みほごしてくれる、曖昧がなかつた事であつた。換言すれば漱石はロンドンにゐて、自分が愛し、また愛される、相手を持つ事が出來なかつたのである。漱石は、緊張すれば緊張しつぱなし、心が結ぼれれば結ぼれつぱなしで、生きて行かなければならなかつた。明治三十三年(一九〇〇)十一月二十日漱石はベルリンにゐる藤代素人に宛てて、「君等ハ大ゼイ寄ツテ御全盛ダネ僕ハ獨リボツチデ淋イヨ」と書いてゐる。明治三十四年一月三日にも同じ藤代素人に宛てて、「倫敦に遊びにこられるなら僕の處へき給へ安い事は受合いだ」と書いてゐる。同じ年の二月五日にも、同じ藤代素人に宛てて、「友達がなくて淋い倫敦へ遊びに來ないか」と書いてゐる。その

うち池田菊苗が、ドイツから來るには來たが、然し池田は八月三十日には、日本に歸つてしまつた。さうして漱石に特に愛が必要だつたのは、池田が日本に歸つてから後、漱石が「文學論」著述の一念を發起して、猛烈に勉強し出してからの事である。勿論漱石が勉強を續けてゐるうちは、一人の方が結局氣樂だつたのかも知れない。然し一旦その勉強の緊張を解きほごさうとする段になると、一人ぽつちでは漱石は、どうする譯にも行かなかつた。漱石の心は、自分で自分の命根を嚙むやうな事になつた。其所へ持つて來て、漱石に宛てた鏡子の手紙が、漱石の心持を更に孤獨にしたやうである。

漱石は鏡子を愛した。漱石の留別の句「秋風の一人をふくや海の上」でも、文獻的には寺田寅彦に書いて送つたものであるには違ひないが、然し漱石は是を鏡子に短冊に書いてやつたといふのだから、漱石の「一人」と感じる最も大きな所以が、鏡子に離れて行くといふ事の上にあつた事は、疑ひを容れない。のみならず漱石は、船中からもロンドンからも鏡子に宛てて、實に情の濃やかな手紙を書いてゐるのである。明治三十四年（一九〇一）二月五日漱石が、ベルリンにゐる藤代素人に宛てて、「所謂難關說は承はつた時は左程でもなかつたが昨今は大に名說だと思つて感服仕るね第一無精極まる僕が妻の處へ丈は一月に一返位便りをするから奇特だらうあんな御多角顏でも歸たら少々大事にしてやらうと思ふよ」と書いてゐるのは、恐らく洋行中の難關は、日

本を出て半年位たつた時で、丁度その時分が一番劇烈な鄕愁に襲はれる時である、その難關を突破しさへすれば、あとはずつと樂な氣持になれるといふやうな說(是は恐らく誰でも洋行する時に聽かされる)を、漱石が素人か誰かから話して聽かされ、日本を立つて丁度半年にならうとする今、沁沁思ひ當り、それを素人に言つてやつたものに違ひない。然し漱石が「難關」にぶつかつたのはこの時分でも、漱石が鏡子を愛し、その愛の爲に鄕愁を感じてゐたのは、既に日本を立つ前、「秋風の一人をふくや海の上」といふ句をつくつた時からだつたと言つても可かつたのである。

「其許ハ齒ヲ拔キテ入齒ヲナサルベク候只今ノ儘ニテハ餘リ見苦ク候／頭ノハゲルノモ毎々申通一種ノ病氣ニ違ナク候必ズ醫者ニ見テ御貰可被成候人ノ言フヿヲ善ヒ加減ニ聞テハイケマセン」(三三・九・二七)――「髮は丸髷銀杏返抔に結ばざる方よろしく洗髮にして御置可被成候」―(三三・一〇・八)――「其許懷妊中善々身體ヲ大事ニ可被成候筆モ隨分氣ヲ付ケテ御養育可被成候妊娠中ハ感情ヲ刺激スル樣ナ小說抔ハ御止メ可被成候可成ノンキに御暮シ可被成候／入齒ノ事御實行可被成候丸髷抔ニハ結ハヌガヨロシク候洗髮可然候」(三三・一〇・二三)――「筆も丈夫に相成候よし何より結構の事に候可成我儘にならぬ樣あまへぬ樣可愛がりて無暗にあまき物抔やらぬ樣無暗にすはらして足部の發達を妨げぬ樣御注意可被成候是等は一時に害なき樣なれども將

來恐るべき弊害を生じ一生の痼疾と相成申候小兒の教育程困難なる物は無之精々御心配願上候」(三三・一二・二六)――「其後は如何御暮し被成候や朝夕案じ暮し居候先以て皆々様丈夫の事と存候其許も御壯健にて今頃は定めし御安產の事と存候此方も無事にて日々勉强に餘念なく候御懸念あるまじく候小兒出產前後は取分け御注意可然と存候」・「先年熊本にて筆と御寫し被成候寫眞一枚序の節御送り可被下候厚き板紙の間に挾み二枚絲にてくゝり郵便に御投じ可被下候當地は十圓位出さねば寫眞もとる事出來ず候故小生は當分送りがたく候」・「筆は定めし成人致し候事と存候時々は模樣御知らせ可被下候少し步行く樣になると危險なものに候けがなき樣御注意可被下候」・「手紙も再々上げたいが時を使ふのが惜いからあまり書かない其積りで居て下さい」・「產後の經過よろしく丈夫になり候へば入齒をなさい金がなければ御父ツさんから借りてもなさい歸つてから返して上ます髮抔は結はぬ方が毛の爲め腦の爲よろしいオードキニンといふ水がある是はふけのたまらない薬だやつて御覽はげがとまるかも知れない」(三四・一・二二)――かういふ風に漱石は、鏡子や筆子を自分の身に近近と感じて暮し、殊に鏡子への愛情を「齒」と「髮」とに託して、繰り返し繰り返し表現する。然し鏡子からの便りは、あまり來なかつた。

明治三十四年(一九〇一)二月二十日、漱石は「國を出てから半年許りになる少々厭氣になつて歸り度なつた御前の手紙は二本來た許りだ其後の消息は分らない多分無事だらうと思つて居る御

前でも子供でも死んだら電報位は來るだらうと思つて居る夫だから便りのないのは左程心配にはならない然し甚だ淋い」・「御前は子供を産んだらう子供も御前も丈夫かな少々そこが心配だから手紙のくるのを待つて居るが何とも云つてこない中根の御父つさんも御母さんも忙がしいんだらう」・「段々日が立つと國の事を色々思ふおれの樣な不人情なものでも頻りに御前が戀しい是丈は奇特と云つて褒めて貰はなければならぬ夫から筆の事だの中根の御父つさんや御母さんの事だの御梅さんや倫さんの事だの狩野だの正岡だの菅だの山川だの親類や友達の事なんかを無暗に考へる其癖あまり手紙はかゝない」・「おれの下宿には〇〇と云ふサミュエル商會へ出る人が居る此人はノンキな男で地獄の話より外は何にも知らない人だ此人と時々芝居を見に行く是は一は修行の爲だから敢て贅澤ではない日本の人は地獄に金を使ふ人が中々ある惜い事だおれは謹直方正だ安心するが善い」と書いてゐる。「御前でも子供でも死んだら電報位は來るだらうと思つて居る夫だから便りのないのは左程心配にはならない然し甚だ淋い」といふのは、まつたく淋しい。然も漱石は――腹の中では十分感傷的になつてゐても、それをそのまま言葉に出す事を、趣味として極端に嫌つてゐた漱石は、此所で「おれの樣な不人情なものでも頻りに御前が戀しい」とさへも言つてゐるのである。是は漱石にとつて、よくせきの思ひであつたのだと思はれる。それにも拘はらず漱石の所には、鏡子からの便りが屆かなかつた。三月九日漱石は再び「其後國から便があ

るかと思つても一向ない二月二日に横濱を出た「リオヂヤネイロ」と云ふ船が桑港沖で沈沒をしたから其中におれに當た書面もありはせぬかと思つて心掛りだ／御前は産をしたのか子供は男か女か兩方共丈夫なのかどうもさつぱり分らん遠國に居ると中々心配なものだ自分で書けなければ中根の御父さんか誰かに書て貰ふが好い夫が出來なければ土屋でも湯淺でもに賴むが好い／新聞も賴んで置たが一向來ない是は經濟上の都合があると云ふならよこさんでもよろしい只だんまりですてゝ置くのは宜しくない注意するがよい／おれは不相變忙がしいから長い手紙を出し度ても出す暇がない諸方へは御前からよろしく言つて呉れ」と書いてゐる。前にも言つたやうに、鏡子にはひどい惡阻があつた。流産したあとでも、ひどいヒステリに罹つてゐる。漱石が鏡子からの便りを待ち焦がれてゐるのは、勿論「戀しい」鏡子の消息が分からない爲であつたには違ひないが、それとともに、姙娠したままで殘して來た鏡子が、或はまた熊本のやうな事にでもなつてゐはせぬかといふ、不安からも來てゐるのである。それだから漱石は、鏡子の「髮」の事を頻に氣にもし、腦に良いとか惡いとか言ひ、姙娠中の讀書の心配までもしてゐるのである。その後漱石の手紙は、まる二タ月近く杜絶える。この間に鏡子からの手紙が著いたかどうかは、分からない。然し手紙が來て返事を書かない漱石ではない。恐らく鏡子からの手紙は來なかつたのだらう。さうして次女の恒子は、明治三十四年（一九〇一）一月二十七日に生れてゐるのである。

漱石は五月八日に鏡子に宛てて、「御前の手紙と中根の御母さんの手紙と筆の寫眞と御前の寫眞は五月二日に着いて皆拜見した／久々で寫眞を以て拜顔の榮を得たが不相變御兩人とも滑稽な顔をして居るには感服の至だ少々耻かしい樣な心持がしたが先づ御ふた方の御肖像をストーヴの上へ飾つて置たすると下宿の神さんと妹が掃除に來て大變御世辭を云つてほめた大變可愛らしい御孃さんと奥さんだと云つたから何日本ぢやこんなのは皆御多福の部類に入れて仕舞んで美しいのはもつと澤山あるのさと云つてつまらない處で愛國的氣燄を吐いてやつた筆の顔抔は中々ひようきんなものだね此速力で滑稽的方面に變化されてはたまらない」と書いた。是は恐らく何ケ月振り目かに來た手紙で、また思ひがけず著いた寫眞だつたのだらうと思ふ。「中根の御母さんの手紙」が一緒に來てゐる所から想像すると、是は漱石の三月八日の手紙が日本に著いてから、慌てて出した手紙だつたのかも知れない。それでも漱石は、手紙とともに寫眞を受けとつた事が、非常に嬉しかつたらしく、漱石は此所で少し羽目を外して喜んでゐる。勿論漱石は、口では「御兩人とも滑稽な顔をして居るには感服の至だ」などといふやうな減らず口を叩いてゐるが、然し西洋流の嫌ひな漱石は、その寫眞を西洋流に、自分の部屋のストーヴの上に飾つたのみならず、宿の婆さんから「御世辭」を言はれて、自分でもをかしいやうな、てれ隱しを言つてゐるのである。漱石には、今迄便りがない事の不愉快よりも、二人の丈夫な顔を、寫眞で見ただけで、安心

なやうな、嬉しいやうな氣がしたものに相違ない。

然しその後また暫く便りが途切れたと見えて、八月十日漱石はまた、「其許よりは一向書信無之或は公使館邊に滞停致し居るやと存候」と書いてゐる。もつとも八月十五日パリからロンドンに來て、漱石の下宿に這入つた土井晩翠は、鏡子の手紙や中根重一の手紙やその他「肌着上下一着絹ハンケチ四枚」を託されて、持つて來た。然しいづれにしても鏡子からの便りは少なかつた。九月二十二日の手紙にも、漱石は「日本新聞は時々來る大抵一週間に一返位來る／端書でもよいから二週間に一度位宛は書面をよこさなくてはいかん子供抔があると心配になるから」と書いてゐる。是は然し入れ違ひに鏡子から手紙が來たらしく、漱石はおつかけて九月二十六日に返事を書き、中に「下女暇をとり嘸かし御多忙御氣の毒に候金が足りなくて御不自由是も御察し申す然し因果とあきらめて辛防しなさい人間は生きて苦しむ爲めの動物かも知れない」・「倫さんの手紙によると筆は何か大變な強情ぱりの容子だ男子は多少強情がなくてはいかんが女が無暗に強情ではこまる又之を直すに無暗に押入に入れたりしてはいかんよ仕置も臨機應變にするのはいゝがたゞ嚴しくしてはいかぬ小供の性質は遺傳によるは勿論であるが大體六七歳迄が尤も肝要の時機だから決して瞬時も油斷をしてはいかん可成スナホな正直な人間にする様に工夫なさい」・「入齒の事も承知時機を見てやれたらやるがいゝ無理をするにはあたらない此頃は長い手紙をかくのがオ

ツクーだから是でやめる」と書いた。——漱石留學中の留守手當は、年額三百圓、月二十五圓であつた。然しそのうちから製艦費の二圓五十錢を差つ引かれるので、あとには二十二圓五十錢きり殘らない。鏡子は里の隱居所に住んで、家賃を拂ふ必要はなかつたが、二人の子供を抱へて女中を置いて暮してゐるのでは、月二十二圓五十錢では、相當苦しかつたらうと思ふ。勿論漱石は、その事を承知して、出發前に幾分の補助を鏡子の父に依賴した。鏡子の父はそれを引き受けた。然し鏡子の父は貴族院の書記官長から内務省の地方局長に轉じ、それをやめたあと、相場に手を出して、すつかり財產をすり潰してしまひ、構つてやりたくても、どうする事も出來ない狀態にあつた。鏡子は勢ひ漱石に窮境を訴へなければならなかつた。然し訴へられた所で、漱石の手では、どうする事も出來なかつた。「人間は生きて苦しむ爲めの動物かも知れない」と言つて見た所で、鏡子のみならず、漱石自身さへもそれで慰められる事は出來なかつたらう。もつとも鏡子は、父の窮境を初めのうちは知らなかつた。漱石も恐らく誰からもその事を聽かされなかつた。それだけに漱石は、鏡子がそれほど窮境に立つてゐるといふ事を、具體的に想像出來なかつた。

それから漱石の手紙は、十月・十一月・十二月・一月と四ケ月途切れる。恐らくこの時分漱石は「文學論」著述の「十年計畫」に熱中して「長い手紙をかくのがオツクーだ」つたものに違ひないが、然し一面から言へば、是はそれだけ鏡子からの手紙が途切れてゐた事を意味するのだら

うとも思ふ。明治三十五年(一九〇二)二月二日漱石は、「……クリスマス贈品として注文致し候品押繪二枚ハンケチ一枚は去る一月六日到着受取申候……越えて一月二十日に其元の手紙到着是亦披見致候……川住様御逝去のよし御くやみ申上候／其許の手紙にはそれやこれやにて音信を忘たり云々とあれど「それやこれや」とは何の言譯やら頓と合點不參候其許はとまり掛にでも川住へ看病にでも被參候や又川住殿死後手傳の爲毎日同家へ止宿被致居候や去らずば二週間に一返の端書位かけぬひまは有之間敷と存候冬着の仕度とて朝から寐るまでかゝる譯には有之まじと存候元來留守中朝は何時頃起きて夜は何時頃寐らるゝや去年つかはし候二週間に一返位端書にて安否を通信せよと申つかはしたる書狀(端書)を讀みたるにや讀まぬにや此方より右の端書を出したるは去年九月二十二日なれば十月末にはつきし筈なり而して其許の最近の手紙は十二月十三日日附なれば此方の手紙到着の日より凡そ一月半ばかり捨置たるなり又其以前とても二月許り音信なければつまり前後を通じて四月許此方へ一片の音信もせざるなりそれで「それやこれや」位な言譯でよしと思ふや又多忙其他にて音信を繁くする事出來ずば何故始めより斷はり置かざるや左すれば此方にても心配なく一年でも二年でも安心して過すべきに、去りとては餘り愚かなる事なりよく考へよく思ふて口をきくべし又事をなすべし以來ちと氣をつけるがよろしい」と書いた。急がしい漱石は、それにも拘はらずそれまでの間に、明治三十三年九月二十七日、十月八日、十月二十

三日、十月三十日、十二月二十六日(返事)、明治三十四年一月二十二日、一月二十四日(返事)、二月二十日、三月九日、五月八日(返事)、といふ風に、平均月に一通位は必ず便をしてゐるのである。「文學論」著述の大願を起し、一切の時間と勞力と金とをその方に打ち込み始めたと想像される時分でも、漱石は八月十日、八月十七日(返事)、九月二十二日、九月二十六日(返事)、といふ風に、「手紙も再々上げたいが時を使ふのが惜いからあまり書かない其積りで居て下さい」(三四・一・二二)と斷つてゐるにも拘はらず、手紙が來さへすれば、必ずそれに響を返す事を怠つてゐないのである。それがその後「端書でもよいから二週間に一度位宛は書面をよこさなくつてはいかん」と言つてやつてあるにも拘はらず、鏡子からは「二週間に一度位」どころか、「四月許此方へ一片の音信も」しない上に、「それやこれやにて音信を忘たり」といふやうな、意味をなさない言譯をして來たのである。漱石が腹を立てたのも無理はない。否、漱石は腹が立つよりも寧ろ、淋しい、情ない氣がしたのに違ひないのである。「去りとては餘り愚かなる事なりよく考へよく思ふて口をきくべし又事をなすべし以來ちと氣をつけるがよろしい」といふ言葉は、その心持を表現する。

然しそれよりももつと淋しい、情ない氣持を漱石に起こさせたのは、二月十四日に出した鏡子の手紙だつたのではないかと思はれる。漱石は三月十八日に、「此方よりも書面を出さないと云ふ

苦情だが己は今迄返事を出さなかつた事はない又忩がしいから度々はかけぬと先最初から斷つてある斷つて無沙汰をするのと無斷で無沙汰をするのとは大變違ふ／心配になるから度々端書で音信をせよと云ふのと疑るのと一所にされてはたまらないよく落付て手紙を見るがよい女の腦髓は事理がわからない様に出來て居るなら仕様がない／おれの事を世間で色々に言ふつてどんな事を言つて居るのか、おれも御前の信用してくれる程の君子でもないから何をして居るか實は分らんのさ世間の奴が何かいふなら言はせて置くがよろしい／……／倫敦では日本人が大分居るが少しも交際をしない會抔へも出た事がない土井とも近頃は滅多に遇はないたつた一人で氣樂でよろしい世間の人間共がおれの事を何とかいひ度ても己が何をして居るか知つてる者はない　彼等はどこから材料を得てそんな事をいふか聞て御覽」と書いてゐる。鏡子の手紙は二月十四日に出てゐるといふから、漱石の二月二日の手紙とは入れ違ひになつたのだらう。從つてこの鏡子の手紙は、前年の九月二十二日に出した漱石の「端書でもよいから二週間に一度位宛は書面をよこさなくてはいかん子供抔があると心配になるから」といふ手紙に對する反應と見るべきであるに違ひない。然し鏡子が（漱石の文面から推して）どうしてかうヒステリックに、漱石を反噬するやうな態度に出たものか、よくは分からない。然しついその前に「去りとては餘り愚かなる事なりよく考へよく思ふて口をきくべし又事をなすべし以來ちと氣をつけるがよろしい」と書いてやつた計りの漱

石から言へば、こつちで安否を氣遣つてゐる事を、疑ぐつてゐると解釋するのみならず、あなたの方でも何をしてゐるか分からない、ちよいちよいさういふ噂を聞く事もあるなどといふやうな、漱石の愛をへし曲げ、漱石の人格を誹謗する、毒毒しい内容を持つた筈の、このヒステリックな手紙は、自分たちの夫婦生活の前途を暗くしてしまふほど、悲しい、腹立たしい愛想のつきる手紙だつたに違ひないと想像される。――「餘りビールを飲まない樣餘り美人に近付の出來ぬ樣天帝に祈禱して新年の御慶を申上ます／僕は書物をかつて仕舞ふから又邊鄙な處に居るから家がやかましいから金と不便と遠慮がハチ合せをして頗る謹直である」(三四・一・三)――「僕はまだ一回も地獄抔は買はない考ると勿體なくて買た義理ではない芳賀が聞たらケチな奴だと笑ふだらう……君は病氣だつたつてね大事にし給へ美人を封じられて轉た鄕愁を惹くと云ふ譯なら封じられない前は思ひやられるね、せつぱつまらなければ不品行抔はよすがいゝ其方が上品でもあり經濟でもあり時間も德であるからね僕は幸ひ無事だ安心して呉給へ」(三四・二・五)――「日本の人は地獄に金を使ふ人が中々ある惜い事だおれは謹直方正だ安心するが善い」(三四・二・二〇)などと書いてゐるやうに、身を持する事謹嚴を極めてゐた漱石は、自分を最も信じて可い筈の鏡子から、あなたの事を世間で色色に言つてゐるなどといふ、淺ましい手紙をつきつけられたのである。漱石は「おれも御前の信用してくれる程の君子でもないから何をして居るか實は分らんの

さ」と、まづ答へてゐるが、是は漱石が恐らく感じたに違ひない苦苦しさを、最も端的に表現する。此所には何か市井の「勝手にしやがれ」に似た響を含んだものがあると思ふ。

もつとも漱石は、その後といへども、鏡子に四月十三日、四月十七日、五月十四日、七月二日、九月十二日と、手紙を書いた。それには是までと同じやうに、「勉強するには今日の如き境遇まことに安氣にてよろしけれど其他の點に於ては矢張日本の方すみよき心地爲致候いづれ今年十二月頃には歸朝致す事と存候」（四・一三）だの、「留守中色々多忙にて困難のよし委細の樣子相分り候甚だ氣の毒の事ながら今少し辛防可被成候いづれ今年末には歸朝のつもり故其後は何とか方法も立ち少しは樂になるべくと存候然しおれの事だから到底金持になつて有福にはくらせないと覺悟はして居て貰はねばならぬ」（四・一七）だの、「手紙の趣によれば夜は十二時過朝は九時十時頃迄も寐るよし夜はともかくも朝は少々早く起きる樣に注意あり度し日本の諺にも朝寐宵張はあしきものとしてある位其邊は心得あるべし九時か十時迄寐る女は妾か、娼妓か、下等社會の女ばかりと思ふ苟も相應の家に生れて相應の教育あるものは斯樣のふしだらなものは澤山見當らぬ樣に考へらるまづ矢來町三番を門並しらべて見よ左樣の妻君其許を除くの外例あるまじ、此事は洋行前にも常に申したる樣に思へど其許は左程感ぜぬ樣なりし夏目の奧さんは朝九時十時迄寐るとあつては少々外聞わるき心地せらる其許は如何考へらるゝや尤も病氣は特別の事なれど先達の手紙に

よれば非常に丈夫になりし由なれば身體に異狀なき限はつとめて早く起きる樣心掛らるべし且小兒の敎育上にもよろしからざる結果ありと思ふ筆などが成人して嫁に行つて矢張九時十時迄寐るとあつては余は未來の婿に對して甚だ申譯なき心地せらる其許の御兩親はそれを何とも思はれざるかも知らねど余は大に何とも思ふなり力めて己れの弊を除くは人間第一の義務なり且早起は健康上に必要なりことに眼あしき時抔は早く寐て早く起るが專一なるべし」(五・一四)だの、「二女とも丈夫の事と存候筆はインフルに罹り候よし然しすぐ癒り候由にて安心、倫君は高等學校の試驗準備中のよし勉强專一に候御梅さんは華族學校へ通ふよし英語なんかなまなか出來ぬ方がよろしい日本の婦人が西洋的になつては大變ぢやこちらの男は婦人に對して皆召使の如きものである御嫁に行く心配なんか御無用とあるがまだ御嫁に行き度はありませんか」(七・二)だのと書いてあるが、ただこれらの漱石の手紙が、すべて返事の手紙で、自發的に出した手紙でない事は、注目に値ひする。勿論この時分は、漱石の仕事に最も脂が乘つて來た時分である。自發的に手紙を書くほど心の餘裕がなかつたのには違ひないが、それにしても、求めて得られない淋しさ、得ても見當違ひなものしか得られない淋しさが、漱石に自發的に手紙をかく氣を沮喪させてしまつたのも、一つの原因になつてゐるに違ひないと思ふ。然も九月十二日、漱石がロンドンから鏡子に宛てた最後の手紙には、「近頃は神經衰弱にて氣分勝れず甚だ困り居候然し大したる事は無之候

へば御安神可被下候／……／近來何となく氣分鬱陶敷書見も碌々出來ず心外に候生を天地の間に享けて此一生をなす事もなく送り候樣の腦になりはせぬかと自ら疑懼致居候然しわが事は案じるに及ばず御身及び二女を大切に御加養可被成候」といふやうな、悲愴な內容が書き記されてあつたのである。

漱石が明治三十六年(一九〇三)、即ち漱石が歸朝した年の六月『ホトトギス』に發表した『自轉車日記』は、漱石がこの神經衰弱をなほす爲に人から勸められて、自轉車の稽古をした、その稽古の事を書いた小品である。「監督兼敎師の〇〇氏」といふのは犬塚武夫、「其友なる貴公子某伯爵」といふのは、小笠原長幹、その犬塚武夫は、三土忠造とともに小笠原長幹の御傅役として渡英し、偶然漱石と下宿を同じくしてゐたので、漱石の神經衰弱を氣の毒に思ひ、自轉車の稽古にひつぱり出したのだといふ。その『自轉車日記』の最後には、「余が廿貫目の婆さんに降參して自轉車責に遇つてより以來、大落五度小落は其數を知らず、或時は石垣にぶつかつて向脛を擦りむき、或る時は立木に突き當つて生爪を剝がす、其苦戰云ふ許りなし、而して遂に物にならざるなり、元來此二十貫目の婆さんは無暗に人を馬鹿にする婆さんにして、此婆さんが皮肉に人を馬鹿にする時、其妹の十一貫目の婆さんは、瞬きもせず余が黃色な面を打守りて如何なる變化が余の眉目の間に現るゝかを檢査する役目を務める、御役目御苦勞の至りだ、此二婆さんの呵責に逢

てより以來、余が猜疑心は益深くなり、余が繼子根性は日に日に増長し、遂には明け放しの門戸を閉鎖して我黄色な顏を愈黄色にするの已を得ざるに至れり、彼二婆さんは余が黄色の深淺を測つて彼等一日のプログラムを定める、余は實に彼等にとつて黄色な活動晴雨計であつた、會々降參を申し込んで贏し得たる所若干ぞと問へば、貴重な留學時間を浪費して下宿の飯を二人前食ひしに過ぎず、去れば此降參は我に益なくして彼に損ありしものと思惟す、無殘なるかな、」と書いてある。

漱石は既に明治三十四年（一九〇一）七月一日の日記に、「近頃非常ニ不愉快ナリクダラヌ事ガ氣ニカヽル神經病カト怪マル、然一方デハ非常ニヅーヅー敷處ガアル、妙ダ／洒々落々光風霽月トハ中々ユカン駄目〳〵」と書き込んでゐるが、明治三十五年（一九〇二）九月のころに至つて、その「非常ニ不愉快ナ」心持、「クダラヌ事ガ氣ニカヽル」氣持が昂じて、到頭下宿の婆さんの言語動作が一一氣にかかり、婆さんが何か漱石を馬鹿にしようとし、漱石を壓迫しようとし、呵責しようとしてゐるかの如くに思はれ出し、「余が猜疑心は益深くなり、余が繼子根性は日に日に増長し、遂には明け放しの門戸を閉鎖して我黄色な顏を愈黄色にするの已を得ざるに至」つた。

『倫敦塔』の初めで漱石は、自分がロンドンに著きたてに感じた氣持を敍して、「表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心は

なかつた。此響き、此群集の中に二年住んで居たら吾が神經の纎維も遂には鍋の中の麩海苔の如くべと〳〵になるだらうとマクス、ノルダウの退化論を今更の如く大眞理と思ふ折さへあつた。」と書いてゐるが、さういふ機械的な騷音には馴染む事が出來なくはないとしても、竟に馴染む事の出來ない衣食住と、竟に馴染む事の出來ない風土と人間とに取り卷かれ、「朝夕安き心」もない生活を續けてゐる上に、一生のうちで是ほど勉强した事はないといふほど、一所懸命に勉强し、然もその勉强に疲れた頭を採みほごしてくれる友達もなく、妻子もなく、まして日本からは漱石の柔らかな心臟を傷つけて省みないやうな手紙ばかりが來るとすれば、いくら强靭な神經を持つてゐる者でも、その神經の纎維は「鍋の中の麩海苔の如くべと〳〵にな」つてしまふのは、當然すぎるほど當然の事だつたのである。

藤代素人の『夏目君の片鱗』の中に、「我々の留學は滿二年の期限であつた。其期の滿つる一ケ月程前に「夏目ヲ保護シテ歸朝セラルベシ」と云ふ電命が僕に傳へられた。これは君の精神に異狀があると云ふことが大袈裟に當局者の耳に響いた爲である。それでなくても僕は無論同船して歸朝する積りで、其前に君と打合を仕て置いた。所が倫敦へ着くなり郵船會社の支店へ行くと、事務員が「夏目さんは一度乘船を申し込んで置きながらお斷りになりました」とさも不平らしく訴へる。「若し同船して歸ると云つたら船室の都合は附きますか」と聞いたら、「それはどうにか

なりませう」と云ふ返答だ。そこで夏目君に端書を出したら翌朝僕の下宿へ來て呉れた。君より前に來て居たO君は、例の電報を取次いだ關係で、是非一所に連れて歸れ、荷物の始末は跡でどうにでも付ける。あゝいふ電報のあつた以上若しもの事があつたら君は申譯はあるまいと熱心に同行を主張する。兎に角同行を勸めて見ようと答へて置いて、其日は夏目君とナショナルギャレリーを一所に見て、午餐を共にし、それから君の下宿に一泊した。君が歸朝を後らせることになつたのは、蘇格蘭へ旅行して、豫定よりも長逗留をし、荷物が出來ない爲めだ。そこで荷造りは人に賴んで體だけ僕と一所に歸つたらどうかと再三勸めて見たが、どうしても應じない。成る程君の部屋には留學生としてよくもこんなに買集めたと思ふ程書籍が多い。これを見捨てゝ他人に後始末を任せると云ふことは僕にしても出來相もない。それに今日一日見た樣子では別段心配する程の事もないらしい。此上無益の勸告を試みるでもないと僕は斷念した。其翌日君にケンシントン博物館と圖書館を案內して貰ひ、圖書館のグリル・ルームで一片の燒肉でエールを飲んだ。「モウ船までは送つて行かないよ」と云ふ言葉を最後に別れた。／君は僕より二タ船後れて明治三十六年の正月歸朝した。……」とある。野間眞綱によれば、漱石が病氣だと言つて文部省に電報を打つたのは、岡倉由三郎なのださうである。此所に「O君」とあるのも、恐らく岡倉由三郎に違ひない。然し漱石は神經衰弱にかかり、下らない事が氣にかかつて勉强が碌に出來ず、氣分

も鬱鬱として樂まなかつたといふ事は、事實でも、岡倉由三郎の考へてゐたやうに、氣が違つてゐたのではなかつた。それを藤代素人が證言する。少くとも藤代素人が二日一夜行動をともにした限りに於いては、漱石は素人を普通に案内する事も出來れば、普通に言動する事も出來てゐるのである。船室の申込みをして間際に斷つた事も、スコットランドの旅行が長びいて、出發の支度が出來なかつたのだから、仕方がない。澤山買ひ込んだ本を、人任せにして、身一つで立つ譯に行かないといふのは、當り前である。「夏目ヲ保護シテ歸朝セラルベシ」といふ文部省の電命にも拘はらず、その電報を取次いだ「○君」が、是非連れて歸れと熱心に忠告するにも拘はらず、自分の見た所では決して心配はないとして、藤代素人が一人で立つて行つたのも、適切な計らひであつたと言つて可い。

もつとも漱石の神經衰弱をなほすのに、氣持を轉じる意味で、自轉車の稽古なども、多少は役に立つてゐるのかも知れない。然しそれよりももつと役に立つたのは、漱石がスコットランドの旅をして、美しいスコットランドの秋の自然に取り卷かれて暮した事だつたのだらうと思ふ。漱石がスコットランドの旅をして、「豫定よりも長逗留をし」、約束して置いた藤代素人と、一緒に立つ事が出來なくなつたといふ事も、いかにスコットランドの秋の自然が、漱石の氣に入つたかを證明する。『永日小品』の中で『昔』と題して、漱石はスコットランドの秋、ピトロクリの谷

の十月の光景を描き出してゐるが、是など漱石が曾て作つた「日當りや熟柿の如き心地あり」を散文に敷衍したやうな、漱石が四邊の風光の美しさの中に溶け込んでしまつてゐるやうな、美しい小品――漱石が西洋の事を書いたものの内で、恐らく無比の美しさを持つた小品である。

ただ殘念な事は、漱石のスコットランドの旅が、いつ、どこを、どうあるいたか、まるで分らない事である。『文學論』の中に、「蘇國に招待を受けて逗留せるは宏壯なる屋敷なり。ある日主人と果園を散歩して、樹間の徑路悉く苔蒸せるを看て、よき具合に時代が着きて結構なりと賞めたるに、主人は近きうちに園丁に申し付けて此苔を悉く掻き拂ふ積なりと答へたるを記憶す。」とあるのから推して、漱石は誰かに招待されてスコットランドに行つたのだといふ事だけは、分かる。談話筆記『イギリスの園藝』の中には、スコットランドへ行つて見ると、片田舍の百姓家で菊を作つてゐるといふ話が出てゐる。坂元雪鳥の『修善寺日記』には、漱石が雪鳥に、スコットランドの山路を馬車で通ると、道端の木に栗鼠がひよいひよいと飛んで遊んでゐて、可愛いかつたの、スコットランドの田舍のやうな田舍は日本にはない、實に氣持が良い、その上一寸田舍町に出ると、それがまた實に綺麗で、神樂坂なんかよりもずつと整つてゐるし、道が良いなどと、話して聞かせる所が書いてある。大正元年(一九一二)八月十七日の日記には、西那須野で汽車を下りて輕便に乘り、關谷から車で鹽原に向ふ道が佳い路で、スコットランドを思ひ出す旨が書い

である。これらのものから漱石が、スコットランドの田舎を少しはあるいたらうと想像する事は出來るが、それ以外の事は分からない。ただあらゆるものが、スコットランドでは漱石の氣に入つたらしい事を證明するのみである。

ともかく漱石はかうして、いくらか心持を輕くされた上で、藤代素人よりも「二タ船後れて」十二月五日、ロンドンを出發して歸朝の途に著いた。

然も出發間際になつて、漱石は子規の訃報に驚ろかされた。漱石は十二月一日高濱虚子に宛て、「啓子規病狀は毎度御恵送のほとゝぎすにて承知致候處終焉の模樣逐一御報被下奉謝候小生出發の當時より生きて面會致す事は到底叶ひ申間敷と存候是は雙方とも同じ樣な心持にて別れ候事故今更驚きは不致只々氣の毒と申より外なく候但しかゝる病苦になやみ候よりも早く往生致す方或は本人の幸福かと存候倫敦通信の儀は子規存生中慰藉かた〴〵かき送り候筆のすさび取るに足らぬ冗言と御覽被下度其後も何かかき送り度とは存候ひしかど御存じの通りの無精ものにて其上時間がないとか勉强せねばならぬ抔と生意氣な事ばかり申しつい〳〵御無沙汰をして居る中に故人は白玉樓中の人と化し去り候樣の次第誠に大兄等に對しても申し譯なく亡友に對しても慚愧の至に候／同人生前の事につき何か書けとの仰せ承知は致し候へども何をかきてよきや一向わからず漠然として取り纏めつかぬに閉口致候　倍小生來五日愈々倫敦發にて歸國の途に上り候へば

着の上久々にて拜顔種々御物語可仕萬事は其節まで御預りと願ひ度此手紙は米國を經て小生よりも四五日さきに到着致す事と存候子規追悼の句何かと案じ煩ひ候へどもかく筒袖姿にてビステキのみ食ひ居候者には容易に俳想なるもの出現仕らず昨夜ストーヴの傍にて左の駄句〔俳句略〕を得申候得たると申すよりは寧ろ無理やりに得さしめたる次第に候へば只申譯の爲め御笑草として御覽に入候近頃の如く半ば西洋人にて半日本人にては甚だ妙ちきりんなものに候」と書いた。「生きて面會致す事は到底叶ひ申間敷」と感じて出發して來たのだとは言つてゐるものの、十數年來の知己を失つたのだから、漱石はさぞ殘念だつたらうと思ふ。のみならず子規は、漱石の『倫敦消息』を非常に喜んで、せめてもう一度で可いから、自分の生きてゐるうちに、『倫敦消息』のやうたものをよこしてくれと、自分で筆をとつて漱石に賴んでよこしてゐるのである。然し漱石には、しなければならない仕事があつた。自分は遊んでゐる身ではないのだから、さうさうあんなものを書いてやるわけにも行かないといふので、漱石は、書いてやりたいとは思ひつつ、到頭書いてやらなかつた。それが漱石には、更に殘念だつたらうと思ふ。此所で漱石は、「大兄等に對しても申し譯なく亡友に對しても慚愧の至に候」と書いてゐるが、その心持を漱石は後に『吾輩は猫である』中篇の序で、更に詳細に披瀝した。

兲　英國及英國人

漱石は英國及英國人を嫌つた。漱石が英國人を嫌つたのは、英國人が僞善者だからである。この事は『猫』以下の作品に、到る所に現はれる。

ロンドンで胚胎された『文學論』の序で漱石は、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英國紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を營みたり。倫敦の人口は五百萬と聞く。五百萬粒の油のなかに、一滴の水となつて辛うじて露命を繋げるは余が當時の狀態なりといふ事を斷言して憚からず。淸らかに洗ひ濯げる白シャツに一點の墨汁を落したる時、持主は定めて心よからざらん。墨汁に比すべき余が乞食の如き有樣にてヱストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を漲らしつゝある此大都會の空氣の何千立方尺かを二年間に吐呑したるは、英國紳士の爲めに大に氣の毒なる心地なり。謹んで紳士の模範を以て目せらるゝ英國人に告ぐ。余は物數奇なる醉興にて倫敦迄踏み出したるにあらず。個人の意志

よりもより大なる意志に支配せられて、氣の毒ながら此歳月を君等の麵麭の恩澤に浴して果々と送りたるのみ。二年の後期滿ちて去るは、春來つて雁北に歸るが如し。滯在の當時君等を手本として萬事君等の意の如くする能はざりしのみならず、今日に至る迄君等が東洋の豎子に豫期したる程の模範的人物となる能はざるを悲しむ。去れど官命なるが故に行きたる者は、自己の意思を以て行きたるにあらず。自己の意志を以てすれば、余は生涯英國の地に一歩も吾足を踏み入るゝ事なかるべし。從つて、かくの如く君等の御世話になりたる余は遂に再び君等の御世話を蒙るの期なかるべし。余は君等の親切心に對して、其親切を感銘する機を再びする能はざるを恨みとす。」と書き、冥冥の裡に英國人を「狼」にさへ比した。

然しこの事は漱石が、事英國及英國人に關する限り、どんな事でも嫌ひ通したといふ事を意味しない。漱石が英國及英國人を嫌つたのは、漱石の結論である。然し漱石は、かういふ結論に達すると同時に、英國及英國人にも亦學ぶべき幾多の美點がある事を認めるのに吝かでなかつた。のみならず漱石は、英國の長所と短所とを公平に認めようとするとともに、それを鏡として、日本及日本人の長所と短所とを、公平に認めようとさへもしてゐるのである。この事は漱石の當時の日記・斷片・書簡等が證明する。

明治三十四年(一九〇一)一月三日の日記に、漱石は「彼等ハ人ニ席ヲ讓ル本邦人ノ如ク我儘ナ

ラズ／彼等ハ己ノ權利ヲ主張ス本邦人ノ如ク面倒クサガラズ／彼等ハ英國ヲ自慢ス本邦人ノ日本ヲ自慢スルガ如シ／何レガ自慢スル價値アリヤ試ミニ思へ」と書いてゐる。一月五日の條には、「妄リニ洋行生ノ話ヲ信ズベカラズ彼等ハ己ノ聞キタルヿ見タルヿヲ universal case トシテ人ニ話ス豈計ラン其多クハ皆 particular case ナリ、又多キ中ニハ法螺ヲ吹キテ厭ニ西洋通ガル連中多シ、彼等ハ洋服ノ嗜好流行モ分ラヌ癖ニ己レノ服ガ他ノ服ヨリ高キ故時好ニ投ジテ品質最モ良好ナリト思ヘリ洋服屋ニダマサレタリトハ嘗テ思ハズ斯ノ如キ者ヲ着テ得々トシテ他ノ日本人ヲ冷笑シツ、アリ愚ナルヿ夥シ」とある。一月十一日の條には、「己レノ英語ノ出來ヌヿニ氣付カズシテ人ノ英語ヲ笑フモノアリ笑ハル、者正シクシテ笑フモノノ方却ツテ間違ヘル場合ナキニアラズ妄リニ西洋通ガルモ却ツテ此類ナラン」とある。一月十二日の條には、「英國人ナレバトテ文學上ノ智識ニ於テ必ズシモ我ヨリ上ナリト思フナカレ、彼等ノ大部分ハ家業ニ忙ガシクテ文學抔ヲ繙ク餘裕ハナキナリ respectable ナ新聞サヘ讀ム閑日月ハナキナリ、少シ談シヲシテ見レバ直ニ分ルナリサスガ自國ノ文學故知ラヌトハ云ハザレド繁忙ニテ讀書ノ時間ナシ抔トテ御茶ヲ濁スカ或ハ知ツタフリヲシテ通スナリ彼等ノ胸中ニハ日本人ニ負ケテハ耻カシトノ念充分アル故ナラン此方モ餘慶ナ話シヲシテ先方ヲ苦シムルニモ及バズト思ヒ善キ加減ニ話頭ヲ轉ズルナリ、余ノ知レル lady ハ中等社會ノ人ナリ然シ文學ノヿ抔ハ一切知ラヌナリ、大學ニテ女生徒ガ講義ノ後ニ

Prof. ニ向ヒ Keats 及ビ Landor ノ綴リヲ聞キ居タルヲ見シヿアリ余ガ下宿ノ爺ハ一所ニ芝居ニ行キシ處 Robinson Crusoe ヲ演ゼシガ是ハ一體眞ニアツタヿナリヤ小說ナリヤト余ニ向ツテ問ヒタリシ故無論小說ナリト答ヘシニ余モ然思フト云ヘリ因ツテ 18th cent. ニ出タ有名ナ小說ナリト云ヒシニ左樣カト云フテ直チニ話頭ヲ轉ジタリ其女房ハ先日迄女學校ヲ開キツヽアリ〔シ〕女故少シク教育ノアルベキ筈ナルガ文學ノヿハ矢張リ一二冊ノ小說ヲ讀ミシノミ其癖生意氣ニテ何デモ知ツ〔タカ〕振ヲスルナリ此方ニテ少々六ヅカシキ字ヲ使ヘバ分ラヌ癖ニ先方ニテハクダラヌ字ヲ會話中ニ挾ミテ此字ヲ知ツテ居ルカト一々尋ねラレルニハ閉口ナリ此等ハ只現今ノ Ouida 又ハ Corelli 位ノ名ヲ知ルノミ而シテ必ズシモ下賤ナモノニハアラズ中以下ハ篤志ノモノニアラザレバ概シテ斯ノ如キモノナラン、會話ハ自國ノ言語故無論我々鯱立シテモ及バヌナリ然シ所謂 cockney ハ上品ナ言語ニアラズ且分ラヌナリ倫敦ニ來テ是ガ分レバ結構ナリ倫敦上流ノ言語ハ明晰ニテ上品ナリ standard ナランカ是ナラ大抵分ルナリ、カヽル次第故西洋人ト見テ妄リニ信仰スベカラズ又妄リニ恐ルベカラズ然シ Prof. 抔ハ博學ナモノナリ夫スラ難問ヲ出シテ苦メルヿハ容易ナリ」とある。一月十八日の條には、「英國人ニテモ普通ノモノハ accent ヲ間違ヘタリ pronunciation ヲ取違ヘタリスルヿ珍シカラズ日本人ハ無理ナラヌヿナリ、然シ日本人ノ英語ハ大體ニ於テ頗ルマゾシ、調子ガノラヌナリ變則流ナリ、切角ノ學問見識モ是ガ爲ニ滅茶々々ニ

見ラル、ナリ残念ノ事ナリ字ノ下手ナモノガ下品ニ見ユルガ如シ」とある。一月二十五日の條には、「西洋人ハ日本ノ進歩ニ驚ク驚クハ今迄輕蔑シテ居ツタ者ガ生意氣ナコトヲシタリ云タリスルノデ驚クナリ大部分ノ者ハ驚キモセネバ知リモセヌナリ眞ニ西洋人ヲシテ敬服セシムルニハ何年後ノコトヤラ分ラヌナリ土臺日本又ハ日本人ニ一向 interest ヲ持テ居ラヌ者多キナリツマラヌ下宿屋ノ爺抔ガ日本ヲ appreciate セヌノミカ心中輕侮スルノ色アルヲ見テ自ラ頻リニ法螺ヲ吹キ己レ及ビ己レノ國ヲエラソウニ言ヘバ云フ程向フハ此方ヲ馬鹿ニスルナリ是ハ此方ガ立派ナコトヲ云ツテモ先方ノ知識以上ノコトヲ言ヘバ一向通ゼヌノミカ皆之ヲ conceit ト見傚セバナリ默ツテセツ〱トヤルベシ」とある。一月二十七日の條には、「夜下宿ノ三階ニテツク〲日本ノ前途ヲ考フ日本ハ眞面目ナラザルベカラズ日本人ノ眼ハヨリ大ナラザルベカラズ」とある。一月二十九日の條には、「……Portrait Gallery ヲ見ル一婦人妙ナ風ナノアリ諸人之ヲ嘲笑ス是ガ英國ノ civility カ厭ナ事ナリ」とある。一月三十日の條には、「世間知ラズノ英國ノ女ニハコマル、或婆さんハ御前ハ superstition ト云フ字ヲ知テ居ルカト尋ネタ下宿ノ神さんハ tunnel ト云フ字ヲ知ツテ居ルカト聞タ呆レテ物ガ言ヘヌ」とある。一月三十一日の條には、「下宿ノ神さんがそんなに勉強して日本へ歸つたら嘸金持になるだらうと云つた　好笑」とある。

二月二十日の條には、「Craig ニ George Meredith ノ事に就て聞たら少しも知らない色々言

譯をした英語の書物を悉く讀まねばならぬ譯はない耻るに及ばぬ事だ」とある。二月二十一日の條には、「雪ガチラ／＼降ツテ居ル時計ガ三時ニナル厭ダガ Dulwich 迄行カナケレバナラナイ雪ヲ衝テ出掛タ目的地ニ達シテ時計ヲ見ルト三十分許早イ雪ハ益烈敷降ル仕方ガナイカラ雪見ト覺悟シテソコラヲ無暗ニ歩行タ、漸ク時ガ來タカラカチ／＼／＼ヲやツテ這入タコチラヘト云フカラ這入ルト驚イタ狹イ drawing room ニズラリ列ンダリナ半ダースの貴女ガ御出ダ已ヲ得ナイカラ腰ヲ据エタ右ヲ見テモ左ヲ見テモ知ラナイ女ダ家ノ妻君モ知ラナイ女ダ外國人ノ然モ日本人ヲ一度モ逢ツタヿモナイノニ'at home'ニ呼ブナンテ野暮ナ奴ダト思ツタガ仕方ガナク向モ義理デ呼ンダンダラウ此方モ義理デ行ツタノダ茶ガ出ル、キマリキツタ事ヲ二三言話ス其内ニ亭主ガ出テ來タ白髮頭ノ坊主ダ餘リ善イ人デハナイ樣ダ妻君ハ好イ顏ヲシテ居ル善イ英語ヲ使フ早々ニ還ツタ全ク時間ツブシダ西洋ノ社會ハ愚ナ物ダコンナ窮屈ナ社會ヲ一體ダレガ作ツタノダ何ガ面白イ雪ハマダ降ツテ居ル」とある。三月十五日の條には、「日本人ヲ觀テ支那人ト云ハレルト厭ガルハ如何、支那人ハ日本人ヨリモ遙カニ名譽アル國民ナリ、只不幸ニシテ目下不振ノ有樣ニ沈淪セルナリ、心アル人ハ日本人ト呼バルヽヨリモ支那人ト云ハルヽヲ名譽トスベキナリ、假令然ラザルニモセヨ日本ハ今迄ドレ程支那ノ厄介ニナリシカ、少シハ考ヘテ見ルガヨカラウ、西洋人ハヤヽモスルト御世辭ニ支那人ハ嫌ダガ日本人ハ好ダト云フ之ヲ聞キ嬉シガルハ世話ニナツタ

隣ノ惡口ヲ面白イト思ツテ自分方ガ景氣ガヨイト云フ御世辭ヲ有難ガル輕薄ナ根性ナリ」とある。三月十六日の條には、「日本ハ三十年前ニ覺メタリト云フ然レドモ半鐘ノ聲デ急ニ飛ビ起キタルナリ其覺メタルハ本當ノ覺メタルニアラズ狼狽シツヽアルナリ只西洋カラ吸收スルニ急ニシテ消化スルニ暇ナキナリ、文學モ政治モ商業モ皆然ラン日本ハ眞ニ目ガ醒ネバダメダ」とある。三月十八日の條には、「吾人ノ眠ル間吾人ノ働ク間吾人が行屎送尿の裡に地球ハ回轉シツヽアルナリ吾人ノ知ラヌ間に回轉シツ〔ヽ〕アルナリ運命ノ車ハ之ト共ニ回轉シツヽアルナリ知ラザル者ハ危シ知ル者ハ運命ヲ形クルヲ得ン」とある。三月二十一日の條には、「英人ハ天下一ノ強國ト思ヘリ佛人モ天下一ノ強國ト思ヘリ獨乙人モシカ思ヘリ彼等ハ過去ニ歴史アルヿヲ忘レツヽアルナリ羅馬ハ亡ビタリ希臘モ亡ビタリ今ノ英國佛國獨乙ハ亡ブルノ期ナキカ、　日本ハ過去ニ於テ比較的ニ滿足ナル歴史ヲ有シタリ、比較的ニ滿足ナル現在ヲ有シツヽアリ、未來ハ如何アルベキカ、自ラ得意ニナル勿レ、自ラ棄ル勿レ默々トシテ牛ノ如クセヨ孜々トシテ鷄ノ如クセヨ、內ヲ虛ニシテ大呼スル勿レ眞面目ニ考ヘヨ誠實ニ語レ摯實ニ行ヘ汝ノ現今ニ播ク種ハヤガテ汝ノ收ムベキ未來トナツテ現ハルベシ」とある。四月九日の『倫敦消息』の初めには、「……こちらへ來てから

どう云ふものかいやに人間が眞面目になつてね。色々な事を見たり聞たりするにつけて日本の將來と云ふ問題がしきりに頭の中に起る。柄にないといつてひやかし給ふな。僕の樣なものが斯

る建物を有して居るのは全く天氣のせいか一つヒステリーのせいではない。天の然らしむる所だね。此國の文學美術はいかに盛大で。其盛大なる文學美術は如何に國民の品性に感化を及ぼしつゝあるか。此國の物質的開化はどの位進歩して其進歩の裏面には如何なる潮流が横はりつゝあるか。英國には武士といふ言葉はないが紳士といふ言葉があつて。其紳士とは如何なる意味を持つて居るか。如何に一般の人間が鷹揚で勤勉であるか。色々目につくと同時に色々癪に障る事が持ち上つて來る。時には英國がいやになつて早く日本へ歸りたくなる。すると又日本の社會の有樣が目に浮んで來たのもしくない樣な氣がする。日本の紳士は德育、體育、美育の點に於て非常に缺乏して居るといふ事が氣にかゝる。其紳士は如何に平氣な顏をして得意であるか。彼等は如何に空虛であるか。彼等は如何に浮薄であるか。彼等は如何に現在の日本に満足して己れが一般の國民を墮落の淵に誘ひつゝあるかを知らざる程近眼であるか杯と、色々な不平が持ち上つて來る。一例である。四月十五日の日記には。[illegible]ハ大變ナ先輩デアリ且上ナニ恥等ヲ異フルナリ[illegible]ノ[illegible]及ビ[illegible]多端ナリ。[illegible]ノ位置ニ借フルナリ且ツ人ハ如何。實際ノ年齢ハ、聞ハレタキハ正直ニ答ヘルナド妙ナ顏ヲシテ嘘ダラウト云フ者ヲ予ガ前トモ見ハブタフル者ハ大體ノ嘘ノ言ヲテ見ルナリ實際ノ僕邊ニアラン乎。然レドモ人ハ嘘ノツクナキ御氣質ニ嘘ノツクナリノ國際ノ[illegible]ハイヤニハゾカシキナリ日本

ス之ニ反シテ丈デ禮儀ナキナリ、窮屈ニスルハ我儘ヲ防クナリ但シartificialityヲ免カレズ日本ハ禮儀ナシ而モartificialityアリ且無作法ニ伴フvulgarityアリ禮ナクシテspontaneityアンバマダンモナシ其利ナク其害アルノミナラズ禮ノ害ヲモ兼有セリ馬鹿々々敷」と書いてある。

漱石はロンドンで見聞きするものに一一反應し、一一批評し、且つそれを一一日本と對照させ、それにつれて日本を批評し、日本の將來を考へ、將來の日本人としてのゾルレンを考へた。明治三十四年一月二十二日の日記に書かれたらしい幾多の「斷片」には、人から聞いた話の要點を書きとめたものもあり、また何となし頭の中に浮いて來た有稽なイデーや奇警な觀察を書きつけて、笑ふ事によつて自分の心持を寛ろげようと試みたらしいものもあり、また癪に障つてたまらないから、それをそのまま紙の上にぶちまけようとしたらしいものもあるが、そのうちには例へば「斷片」第七の、「1西洋ヲ紹介スルノ善事ノ一ツハSchellingノorganisationデアル 3生存競爭上必要デアル 4未來ニ取捨ノ見識ナカルベカラズ 5取捨ノ見識ハintellectニ屬ス 6Intellectハcosmopolitanナル故ニ取捨シ易シ 7只アルestablished scienceノ外ニハ妄リニ西洋ノintellectヲ信ズベカラズ lawless scienceハtentativeナリ氣ヲ付ケベシ 8Intellect以外ノfacultyヲ用ニル取捨ハ猶嚴重ニ慎マザルベカラズ 9其ハfeelingノfacultyナリ 10FeelingノfacultyハE一致シ難シ 11故ニ西洋ノ文學ヲ必ズシモ善イト思ハズ 12之ヲ強テ善イトスルハ

輕薄ナリ／(13)之ヲ introduce シテ參考スルハ可ナリ／(14)之ヲ取捨スルノ見識ハ非常ニ必用ナリ／(15) Insurmountable difficulty アリ／(16)是ハ一朝一夕ニ正シ難シ／(17)且或部分ハ正ス必用ナシ是見識ナリ／(18) Voltaire ハ Milton ノ Paradise Lost ヲ評セリ」などといふやうな、漱石の思索の結果を摘記した、重要なものもある。是がいつ書かれたものであるかは、精確には分からないが、然し此所には既に「文學論」として纏まり上がらうとするものが、相當はつきり動いてゐる。――といふよりも、漱石をして「文學論」を書かしめるに至つた動因が、此所には相當はつきり描き出されてゐると言つて可いのである。

漱石は、ロンドンに來て、自分の眼で英國及英國人をあるがままに視た。さうして漱石は、英國及英國人には勿論尊敬すべきものもあるが、また唾棄すべきものもある事を、はつきり見た。英國人といへども、日本人と同樣の、人間である。英國人なるが故に尊敬する必要がない事は、支那人なるが故に輕蔑する必要がない事と、同樣である。從つて日本人といへども、それが正直に、良心にかけて、自分の人間としての立場を踏み外さない限り、立破に彼等と對等に、自分の仕事を進めて行く事が出來る。のみならず日本人は、日本人としての自分の立場を正直に、良心にかけて失はない限り、彼等に對して、優に自分自身に獨特な、ユニークな位置を主張する事が出來る。自分の趣味を主張する事が出來るとともに、彼等の趣味を無視する事が出來る。「西洋

ノ文學ハ必ズシモ善イト思ヘヌ」「之ヲ强テ善イトスルハ輕薄」である。「之ヲ introduce シテ參考スル」のは可いが、「之ヲ取捨スルノ見識ハ非常ニ必用」である。殊に趣味の相違は「一朝一タニ」統一する事が出來ないから、是を紹介して參考に供するのも可いが、其所には打ち克ち難い困難がある事を、覺悟しなければならない。その上日本の趣味の「或部分ハ正ス必用」はないのである。何が「正ス必用」があり、何が「正ス必用」がないかをきめるのは、「見識」である。――漱石の「文學論」は、その出發點から言へば、漱石自身の中の東洋と西洋と、東と西との、根本的な對決の爲に企てられたものであつた。然し事實は「文學論」は、自由と獨立とに充ちた漱石の中では、初めから勝負はきまつてゐて、自分が東洋人としての權利を、世界に向かつて十分主張する事が出來るといふ見透しの下に、それを證明する爲に書かれようとしたものだつたのである。

漱石は次第に英國を嫌ひ英國人を嫌ひ、仕舞には、二度と再び英國の地を踏まないとまで宣言するに至つた。それは漱石にとつても、また英國及英國人にとつても、ある意味で不幸な事であつた。然し一方から言へば、漱石がロンドンに來て、英國及英國人を自分の目のあたりに見て、嫌ふ事が出來たればこそ、漱石は「文學論」著述の「十年計畫」を思ひ立つ事も出來、從つて、是まで長い間漱石にとつて重荷であつた「他人本位」の頸木をかなぐり棄てて、「自己本位」の世

界に立ち、陰鬱なロンドンを爽やかな心持をもつて眺め廻す事も出來るやうになつたのである。その點で漱石のロンドン留學は、漱石にとつては無上に不愉快な二年であつたには違ひなかつたが、然し是は、漱石が漱石になる爲の、必要な過程だつたと言ふ事も出來る。漱石は初めから謂はれなく英國及英國人を信仰し崇拜してはゐなかつた。然しいくら漱石が對等だと思つてゐても、その土地に行き、その土地の人を見、はつきりその見極めがつかなかつたら、漱石は或は頭では對等になれても、心臟では對等になれなかつたかも知れない。當時の日本の時勢が、殆んどすべての日本人を、さういふ風に馴致してしまつてゐたからである。然しロンドン留學の二年は、漱石に、その心臟上の對等感を齎らした。ロンドンに住んで漱石は、初めて「彼等何者ぞや」といふ氣慨を、心臟的にも持つ事が出來た。――かうして初めて、懷疑に懷疑を重ね、不安に不安を重ねて、公けには物を言ふ事も出來なかつた漱石は消滅して、新しい、自信に充ちた漱石が生れ出た。

三九　歸朝

漱石が何所の船でどの航路を通つて歸つて來たのか、よくは分からない。ただ藤代素人の「二タ船遅れて」歸つて來たといふ言葉から、多分郵船會社の船で、印度洋を通つて歸つて來たのだらうと想像されるだけである。例によつて漱石は、航海中は弱つたのに違ひない。然しさういふ事も、一切分からない。日本では、恐らく神戸に上陸し、それから汽車で東京に向つたものだらう。漱石は明治三十六年(一九〇三)一月二十三日に東京に著いた。寺田寅彦の『夏目漱石先生の追憶』には、「病氣がよくなつて再び上京し、間もなく妻を亡くして本郷五丁目に下宿して居たときに先生が歸朝された。新橋驛(今の汐留)へ迎ひに行つたら、汽車から下りた先生がお嬢さんのあごに手をやつて仰向かせて、じつと見詰めて居たが、やがて手をはなして不思議な微笑をされたことを想出す。」と書いてある。漱石はそのまま、妻子のゐる、矢來中の丸の、中根の隱居所に這入つた。

漱石が、歸朝したら東京に住みたい、熊本には歸りたくないと考へてゐたのは、ロンドンに著いて間もなくの時分からの事である。明治三十四年(一九〇一)二月九日漱石は、「夫からもう一つ狩野君と山川君と菅君に御願ひ申す僕はもう熊本へ歸るのは御免蒙りたい歸つたら第一で使つてくれないかね未來の事は分らないが物が順にはこぶと見て僕も死なず狩野君も校長をして居るとした處で如何ですかな御安くまけて置きますよ」と書いてゐる。越えて六月十九日漱石は、ベルリンの藤代素人に宛てて、「第一高等學校で僕を使つてくれないかと狩野へ手紙を出した返事が來ない熊本はもう御免蒙りたい」と書いてゐる。無論この時分はまだ「文學論」著述の一念を發起した時分ではない。漱石は、その方面からの必要ではなく、單に熊本のやうな田舍には歸りたくない、自分の生れ故鄉の東京に居りたいといふだけの事だつたのだらう。然し狩野亨吉からは返事が來なかつたので、漱石は多少心細く感じ、それで素人にかういふ事を書いたものに違ひない。

然るに九月十二日寺田寅彥宛の手紙には、「僕も歸つて熊本へは行き度ない可成東京に居りたい然し東京に口があるかないか分らず其上熊本へは義理があるから頗る閉口さ」とあり、九月二十二日鏡子宛の手紙には、「先達櫻井氏より手紙參り候其前櫻井氏宛にて留學延期(佛國へ)の件周旋賴み置候處延期は文部省にて一切聞き屆けぬ由につき泣寢入に候歸朝後は東京に居り度と思

へど此様子では熊本へ歸らねばならぬかも知れぬ御前も其覺悟をして居るがいゝ」とある。「文學論」著述の計畫が熟して來れば來るほど、漱石は益東京にゐたい、熊本に歸りたくないと思ひ出したに違ひないが、然し漱石は熊本から留學生として派遣されてゐるのである。校長が歸れと言へば、漱石には、どうしても熊本へ歸らなければならない「義理」があつた。その「義理」が漱石を束縛する。然し漱石は東京に止まりたい。然し東京には口があるかないか分からない。漱石はディレムマにかかつて、まつたく「閉口」したのだらうと思ふ。明治三十五年(一九〇二)二月十六日漱石は菅虎雄に宛てて、「漸々留學期もせまり學問も根つからはかどらず頗る不景氣な り歸つて教師なんかするのは厭でたまらない況んや熊本迄歸るに於てをや夫を考へると英國に生涯居る方が氣樂でよろしい」と書いてゐる。三月十五日中根重一に宛てては、「但欲しきは時と金に御座候日本へ歸りて語學教師抔に追つかはれ候ては思索の暇も讀書のひまも無之かと心配致候時々は金を十萬圓拾つて圖書館を立て其中で著書をする夢を見る抔愚にもつかぬ事に御座候」と書いてゐる。三月十八日鏡子に宛てては、「先達櫻井さんから又熊本へ歸つて貰ひ度が一己の御都合はどうだと云つてきたから實の所を白狀すると歸り度ないといつてやつた此さきどうなるか分らないが先々遠くへ行くと思つて覺悟して居ないといけない」と書いてゐる。四月十七日同じ鏡子に宛てては、「とにかく熊本へは歸り度ないが義理もある事故我儘な運動も出來ず只成行にま

かせるより仕方がないと思ひ居るなり」と書いてゐる。――かうした心元ない氣持で漱石が東京に歸つて見ると、東京では狩野亨吉と大塚保治との盡力で、第一高等學校と大學とにほぼ口がきまつて、漱石を待つてゐた

然し漱石が歸つて來たのは一月の末で、學年から言へば、二學期の途中であつた。ほぼ口がきまつてゐたとは言つても、二學期の途中では、漱石はすぐ勤めに出る譯には行かなかつた。のみならず漱石は、東京に住んで時間と勞力とを餘り費す必要のない高等學校の語學の教師を勤めて、ロンドンから持ち越しの「文學論」を大成したいとは希望してゐたが、然し大學で講義をして、その方に多くの時間と勞力とを割かうなどとは夢にも思つてゐなかつたので、大學の口の方を引き受けるには、相當躊躇せざるを得なかつた。談話筆記『處女作追懷談』によると、漱石はそれを「最初は斷つ」てゐる。然し漱石は、結局それも引き受けた。『文學論』の序には、「留學中に余が蒐めたるノートは蠅頭の細字にて五六寸の高さに達したり。余は此のノートを唯一の財産として歸朝したり。歸朝するや否や余は突然講師として東京大學にて英文學を講ずべき依囑を受けたり。余は固よりかゝる目的を以て洋行せるにあらず、又かゝる目的を以て歸朝せるにあらず。大學にて英文學を擔任教授する程の學力あるにあらざる上、余の目的はかねての文學論を大成するに在りしを以て、教授の爲めに自己の宿志を害せらるゝを好まず。依つて一應は之を辭せんと

思ひしが、留學中書信にて東京奉職の希望を洩らしたる友人（大塚保治氏）の取計にて、殆んど余の歸朝前に定まりたるが如き有樣なるを以て、遂に淺學を顧みず、依托を引き受くる事となれり。」と書いてある。

それはそれできまつたが、然しきまらないのは、熊本の方であつた。『漱石の思ひ出』によると、熊本の方では漱石をなかなか手放したがらなかつたので、漱石はその方の話し合ひをつけるのに、ひどく困つたのださうである。明治三十六年（一九〇三）二月九日漱石が、ロンドンで知り合ひになつた渡邊和太郎に宛てて、「一昨日は唐突參堂御多忙の折から嘸かし御迷惑と存候御蔭にて橫濱見物を致し面白く一日を消し申候小生只今家屋搜索中身分も未だ定まらず日々くらげ的生活を營み居候何れ近日東京へ御出向の節は是非御來訪被下度待上候」と書いてゐるのは、或はさういふ面倒がやり切れないので、漱石がふらふらと出かけて行つた事を反映してゐるものかも知れない。然し是も結局は話がついて、漱石は東京にゐられる事になつた。ただ困つたのは、金のない事であつた。さうして差し當り金のとれる仕事がない事であつた。漱石はロンドンから、一文なしで歸つて來た。漱石は一切の餘裕を傾け悉して、本を買つて來たのである。

『漱石の思ひ出』によると、鏡子が住んでゐた里の、中根の離れといふのは、「玄關が二疊、次ぎが四疊半、座敷が八疊で、女中部屋ともで三疊が二間あ」つたのだといふ。鏡子は其所で家賃

こそ拂はなかつたが、里からの補助を全然受ける事なしに、子供二人に下女を置いて、二十二圓五十錢で月月を立ててゐたので、漱石が歸つて來た時には、家の中は「三年間疊替へもしなければ何の手入れもしない、たゞ留守中雨露を凌いでゐたといふだけの荒れに荒れた」慘澹たるものになつてゐた。のみならず鏡子は、それを買ふ金がないといふので、自分の著物を著破つてからは、漱石の著物を仕立直して著、夜具も破れたままの夜具を著て寐てゐたのださうである。いよいよ漱石が歸つてくるといふので、鏡子は妹婿の鈴木禎次から百圓の金を借りて、漱石を迎へる準備をしたといふが、かういふ狀態での百圓では、恐らくなにほどの準備も出來なかつたらう。然もさうして迎へられた漱石には、紙入の底をはたいて見ても、高の知れた金しか殘つてゐなかつた。『道草』第五十八で漱石は、その當時の事を、「首の廻らない程高い襟を掛けて外國から歸つて來た健三は、此慘澹な境遇に置かれたわが妻子を默つて眺めなければならなかつた。ハイカラな彼はアイロニーの爲めに手非道く打ち据ゑられた。彼の唇は苦笑する勇氣さへ有たなかつた。」と書いてゐる。無論漱石はロンドンにゐて、是以上切り詰めやうのない、切り詰めた生活をして來てゐるのである。また漱石はロンドンにゐて、是以上勉强しやうのない、勉强の生活をして來てゐるのである。その爲め漱石は神經衰弱にまでなつた。それでも漱石は、日本に歸つて來る匆匆妻子の慘澹な境遇に置かれてゐるのを見て、自分の責任として、濟まないと感じ、自分

の高い襟を愧ぢなければならなかつたのである。

漱石は三月三日に、第二高等學校の教授として仙臺に行つてゐる齋藤阿具の、本郷千駄木五十七番地の家を借りて、中の丸の隱居所を引き拂つた。然も漱石には、熊本を立つ時、屋財家財一切を賣り拂つてしまつたので、家を持つとなると、さういふものを一通り買ひ整へる必要があつた。然しそれに必要な金は、何所からも出やうがなかつた。「彼は唯一の手段として、今迄繼續して來た自分の職を辭した。彼は其行爲に伴つて起る必然な結果として、一時賜金を受け取る事が出來た。一年勤めれば役を已めた時に月給の半額を呉れるといふ規定に從つて彼の手に入つた其金額は、無論大したものではなかつた。けれども彼はそれで漸と日常生活に必要な家具家財を調へた。」（『道草』第五十八）――辭令を見ると、明治三十六年三月三十一日の日附で「依願免本官」とあり、四月三十日の日附で「在官六年以上ニテ退官ニ付年俸月額三ケ月分下賜」とある。當時漱石は六級俸だつた筈だから、それは恐らく五百圓足らずの金額だつたらうと思ふ。漱石はそれで「日常生活に必要な家具家財を調へ」るとともに、自分に必要な「本棚だの机だのを新調しなければならなかつた」。

然も「彼の誂へた本棚には硝子戸も後部も着いてゐなかつた。塵埃の積る位は懷中に餘裕のない彼の意とする所ではなかつた。木がよく枯れてゐないので、重い洋書を載せると、棚板が氣の

引ける程撓つた。／斯んな粗末な道具ばかりを揃へるのにさへ彼は少からぬ時間を費やした。わざ〳〵辭職して貰つた金は何時の間にかもう無くなつてゐた。迂濶な彼は不思議さうな眼を開いて、索然たる彼の新居を見廻した。さうして外國にゐる時、衣服を作る必要に逼られて、同宿の男から借りた金は何うして返して好いか分らなくなつて仕舞つた様に思ひ出した。／そこへ其男から若し都合が付くなら算段して貰ひたいといふ催促状が屆いた。健三は新しく拵へた高い机の前に坐つて、少時彼の手紙を眺めてゐた。」（『道草』第五十九）――「同宿の男」といふのは、漱石がロンドンで初めて下宿をした85 Priory Road, West Hamptead の下宿で同宿だつた、長尾半平の事である。借りたのは或は明治三十四年六月十一日の日記に、「洋服屋ニ百圓許ヲ拂フ」とある、その時分の事ではなかつたかと思ふ。借りた額は「五磅のバンクノートを二枚」卽ち百圓であつた。是も漱石は、外にしやうがないから、「舊い友達」から借りて返した。その「舊い友達」には十圓づつの月賦で返す事にしたといふ事が、『道草』に書いてある。『漱石の思ひ出』では、漱石は大塚保治から金を「百圓か百五十圓か」借りて引越しをしたといふ事になつてゐるが、是が或は長尾半平に返す爲の金ではなかつたかとも思はれる。もつとも漱石の一時賜金の辭令は、四月三十日の日附になつてゐる。四月三十日では、三月三日の引越しには間に合はない。從つて引越しの費用は大塚保治から借りて、長尾半平に返す金は、菅虎雄から借りたものかも知れない。

明治四十四年(一九一一)十二月三日の日記に、漱石は炭取の事を書き、是は「自分が外國から歸つて世帶を持ちたてにせめて炭取丈でもと思つて奇麗なのを買つ」たのだと言つてゐる。是だけで漱石が、當時いかに窮迫してゐたかを、具體的に想像する事が出來る。漱石は、ほんとに入用なものだけを、ごく切り詰めた費用で買ひあつめたのである。それだけ新居は殺風景で、眺めてゐるに堪へなかつたと見えて、漱石は引越匆匆の三月十七日、横濱の渡邊和太郎に宛てて、「先日參堂の節御座敷にて拜見致候蘭數株御惠送被下候へば幸甚と存候貧居にて床間に何の裝飾も無之ふと先日の御話しを思出し此段願上候尤も澤山無之候へば無理に頂戴仕らずともよろしく餘つてゐたら頂き度と存候」と書いてゐる。「日本に歸りての第一の樂みは蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る是が願に候夫から野原へ出て蝶々やげん〲を見るのが樂に候」とロンドンから書いて寄越した漱石は、蕎麥も喰ひ日本米も喰ひ日本服も著たには違ひないが、然しかういふ狀態では、到底「日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る」といふやうな、打ち寛ろいだ心持には、到底なる事が出來なかつたに違ひない。渡邊和太郎から芝居見物に誘はれ、一旦は「小生歸朝以來兎角不精にて芝居抔も見るも一向のり氣に相成る間敷かと存候尤も折角ノ御誘引故或は出馬致すやも計りがたく候へど元來何時頃どこへ參るにや又月末にて懷中甚だ不如意ならんと思はる全體いくら位かゝるのですか一寸御しらせ下さい」(三六・

三・一九）と答へはしたものの、日時所を指定されると、「二十九日芝居見物の儀は月末にて少々多忙ことに小生近來芝居抔申すのんきな量見にならず乍殘念御斷り申上候いづれ其内落付候へば御供致し度と存候」（三六・三・二二）と返事をしてゐるのなども、この時分の漱石のいらいらした心持を指示する。

然もかういふ心持のままで漱石は、大學の講師として、人人にシェークスピアを講じ、「文學論」を講じる新しい生活へ、突進しなければならなかつたのである。

四〇　講義

漱石は明治三十六年(一九〇三)の四月の新學期から、第一高等學校と大學とに教鞭をとる事になつた。雙方とも講師である。それだけに暢氣で責任がないと言へば言へなくもないが、然し一高の方はさうでも、大學の方は講義を新しく始めるのだから、さうは行かなかつた。

『文學論』の序に「不幸にして余の文學論は十年計畫にて企てられたる大事業の上、重に心理學社會學の方面より根本的に文學の活動力を論ずるが主意なれば、學生諸子に向て講ずべき程體を具せず。のみならず文學の講義としては餘りに理路に傾き過ぎて、純文學の區域を離れたるの感あり。余の勞力はこゝに於て二途に出でたり。一は纏まらぬものを、既に蒐集せる材料にて、ある程度迄具體的に組織する事なり。二は略系統的に出來上がりたる議論を可成純文學の方面に引き付けて講說する事なり。」と書いてあるやうに、漱石はこの際、自分が唯一の財産として持つて歸つた「文學論」のノートを、元來の計畫を變じて、すぐに一往の纏まつたものに組み立て

[illegible]てあつた。

第三十[illegible]年三月[illegible]日、[illegible]講義の準備に[illegible]

いてゐる。實際漱石は、俳句などを作つてゐるやうな「のんきな量見」には、到底なれやうがなく、寧ろ物に憑かれたやうに、自分で自分の前に置いた、いろんな義務の中に跳り込み、それを片端から征服して行かうとするが、それは涯しなく茫茫と繋がつて、いつになつたら征服し悉されるか、見當もつかないやうな狀態にあつたのだらうと思ふ。緊張しきつた漱石の精神は、一度ロンドンで極度に張りつめられて、竟に漱石を神經衰弱にしてしまつたが、日本に歸つてもその緊張は揉みほごされる事がないのみならず、再び劇しく緊張し續けなければならなかつた。

然も、さうまでして纏め上げた漱石の講義は、漱石が豫期したほどの刺激を、學生に與へる事がなかつた。少くとも漱石には、さう見えた。それが漱石を淋しくする。またイリタブルにする。五月二十一日漱石は菅虎雄に宛てて、「小生は存外閑暇にて學校へ出て駄辯を弄し居候大學の講義わからぬ由にて大分不評判　俳人時々來訪又々邪道へ引き入られさうなり藤代先日より病氣本日承り候へば肺炎の由しかし最早全快の事と存候第一高は遙かにのんきに候熊本より責任なく愉快に候大學の方は此學期に試驗をして見て其模樣次第にて考案を立て考案次第にては小生は辭任を申出る覺悟に候もし左樣なれば小生の目的通の研究をなす積に候」と書いてゐる。更に六月十四日、南京に赴任した菅虎雄に宛てて、「高等學校ハスキダ大學ハやメル積ダ一方案ヲ立テナケレバナラン何ノカンノツテ一學期立ツテ仕舞ツタ僕モ一度神社佛閣ノ樣ナ家ニ住ンデ見度イ學問ナ

ンカスルナ馬鹿氣タモンサネ骨董商ノ方ガイヽヨ僕ハ高等學校へ行ツテ駄辯ヲ弄シテ月給ヲモラツテ居ル大デモ中々良教師ダト獨リデ思ツテル大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツヾケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク樣ナ事ハ教エルノガイヤダ、試驗ヲシテ見ルニドウシテモ西洋人デナクテハ駄目ダョ」と書いてゐる。

然し『英文學形式論』の筆記を讀んで見ても分かるやうに、是は漱石の「文學論」の序論のやうなものである。この奥には漱石が西洋文化と鬪つた十數年の體驗が籠つてゐる。さうして此所には、日本人は日本人としての立場から外國文學を鑑賞して差し支へがない、理由が說かれてゐる。是が學生に刺激を與へなかつたのが、寧ろ不思議な位である。思ふに是は、前任者の小泉八雲が、詩的な日本の紹介者として、世界的な名聲を持つてゐたのに反し、漱石は曾て俳人としては有名であつたにしても、中央の文壇もしくは學界では、まだ名もない存在にしか過ぎなかつたのだから、學生の人氣が立たなかつた爲もあつたに違ひないし、又小泉八雲の講義が文學的で隨筆的であつたのに反して、漱石の講義が論理的で科學的で、その意味で何かひどく乾燥無味に感じられた爲もあつたに違ひないし、殊に漱石の講義には引用文が多く、その引用文はすべて英語で、殊に漱石の事だから、それを一一ボールドに書くといふやうな事はなく、恐らくどんどん朗讀して行つた事と想像されるから、一層學生の理解を困難にした爲もあつたに違ひないし、いろ

んな條件がすべて漱石に不利だつたせゐなのだらうと思ふ。然し一番重大な原因は、漱石が大學の學生のレベルを非常に高いものに考へ、自分にとつて最も興味のある問題を、そのまま學生の前に開陳しようとした爲に、その講義は、恐らく學生の耳には這入つても、心には沁み入る事がなく、從つて「ワカラナイ」といふ聲になつた。一口に言へば、當時の學生には、漱石の『英文學形式論』や『文學論』を聽くに値ひするほどの頭腦が、まだ出來てゐなかつたのである。

然しさうは考へても、漱石はそれで自らを慰める事が出來なかつた。「學問ナンカスルナ馬鹿氣タモンサネ」といふ漱石の棄鉢な言葉は、漱石の遣る瀨のない淋しさを表現する。殊に漱石が「大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツヾケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク樣ナ﹅ハ教エルノガイヤダ」といふに至つては、何か悲愴な氣さへする。學生のレベルの低い事は、試驗をして見て、漱石には分かつた。然し漱石には、自分の調子を卸して、學生の低いレベルに立ち、學生に「得ノ行ク樣ナ﹅」を教へる事は、どうしても厭であつた。自分は飽くまでも自分のレベルに立つて、自分に最も興味ある問題を講義する。學生は努力して、自分のレベルまで登つて來るべきである。然しその講義がどうしても學生に「ワカラナイ」とすれば、さういふ「講義ヲツヾケルノハ生徒ニ氣ノ毒」である。漱石は、新しく一方案を立て、その方案次第では、自分は大學をやめようと決心する。——漱石が試驗の結果「ドウシテモ西洋人

デナクテハ駄目ダヨ」と感じたといふ事は、教師はどうしても西洋人でなくては駄目だといふ意味と、自分の講義を聽くもの、もしくは西洋文學を研究するものは、どうしても西洋人でなくては駄目だといふ意味と、二樣に解釋する餘地がありさうに見える。然し是は、既に「試驗ヲシテ見ルニ」といふ言葉が前にあるのだから、結局自分の講義を聽くものはといふ意味ではないまでも、西洋文學をやるものは、どうしても西洋人でなくては駄目だといふ意味に解釋すべきであらうと思ふ。試驗の結果漱石は、當時の英文科の學生の學力に、すつかり愛想をつかしてしまつたのである。

然しその爲め漱石がどういふ方案を立て、それをどういふ形で當時の學長坪井九馬三の所に持ち出したものか、精しい事は分からない。ただ七月三日の菅虎雄宛の手紙に、「僕大學ヲヤメル積デ學長ノ所ヘ行ツテ一應卑見ヲ開陳シタガ學長大氣燄ヲ以テ僕ヲ萎縮セシメタソコデ僕唯々諾々トシテ退クマコトニ器量ノワルイ話シヂヤナイカ」とあるので、その結果を知る事が出來るのみである。是は或は英文學科の學制を改め、例へばもつと澤山の西洋人を招聘するか何かで、英文學科の學生の學力を向上させようとするやうな意見ではなかつたのかとも想像されるが、然しそれに就いては一切精確な事は分からない。ただこの事が漱石の心持を一層暗くし、一層デスペレートなものにした事は、この事を報じた手紙全體を貫ぬく氣分に就いて見ても、明白である。そ

の中には、「大學モ高等學校モ試驗ハスンダ昨日ハ點數會議デ朝カラ晩迄引張〔ラ〕レル只默ツテ名説ヲ謹聽スル許リダガ中々草臥ルモンダナー明日カラハ入學試驗トクルカラ又厄介ダドーモ人間ハ生キタイ爲ニ生キテ居ツテソーシテ生キタイ爲メニ苦勞スルイクラ骨ガ折レテモ生キテ居ル方ガ善イノト見エル夫ガ高ジルトイクラ骨ガ折レテモ名譽ガトリタクナル學問ガ出來タガル金ガ欲シクナル實ニ變ナ奴サネ」といふのだの、「發句ナンカ下火極マルマルデ作ル氣ニナラン然シ退窟凌ギニ時々ヤル是ハ得意ノ餘ニ出ルノデハナイ一時ノ鬱散ト云フ資格サ時ニ僕近頃ノホト、ギスニ自轉車日記ト云フ名文ヲ已ヲ得ズ草シテ載セタカラ見給ヘ甚ダ上品ナラザル文章ダガ中々ウマイヨ」といふのだの、「近頃梅雨ノ天氣鬱陶敷甚ダ困リ入ル平生ノ物草太郎ハ益物草太郎ニナル(樂寢晝寢われは物草太郎なり)抔とすまして居る内に天罰覿面胃病、腦病、神經衰弱症併發醫者モ匙ヲ投ゲルト云フ始末ハ近キ將來ニ於テノ出來事ト察セラレル」といふのだの、「山川ハ近キ將來ニ於テ氣狂ニナルト？ドーダカ分ラナイ普通ノ人ハ大概氣狂ダ自分デ氣狂デナイト自信シテ居ル許リサ何ノ事ハナイ世ノ中ト云フ者ハ氣狂ノ共進會ト云フ樣ナ物サ其中ノ大氣狂ヲ稱シテ英雄トカ豪傑トカ天才トカスベツタトカ轉ンダトカ云フ迄ダラウ御前サンダノ吾輩ノ如キハ小氣狂ダカラ駄目サ鳥渡泥棒ノ樣ナモノデ大泥棒ハ人カラ崇拜セラレ小泥棒ハ牢屋ヘ入ル世ノ中ハ種類ノ差デナクテ單ニ程度ノ差デ反對ノ物ニナツテ仕舞フ黑白ナカト云フノハソレサ」といふのだのが

ある。漱石が「愚かければ獨りすゞしくおはします」・「無人島の天子とならば涼しかろ」・「能もなき教師とならんあら涼し」などといふ句を作つてゐるのも、またおよそこの時分の事である。

四一 再び神經衰弱

『漱石の思ひ出』によると、漱石が西洋から歸つて三日目とか四日目とかに、漱石と長女とが火鉢を挾んで坐つてゐると、火鉢の平ぺつたい緣の上に、五厘錢が一枚載せてあるのが眼に著いた。是は長女が持つて來た譯でもなく、又それをいぢつてゐた譯でもないといふ。どうしてそんなものがそんな所に置いてあつたものか、甚だ不思議な話であるが、ともかく不圖それを見るや否や、漱石は急に機嫌を惡くして、いきなり長女を擲りつけた。長女は泣き出す、鏡子もびつくりして、いろいろ聽いて見ると、漱石がロンドンにゐた時に、ある日街を散歩してゐると、乞食が金をくれと言つて哀訴するので、銅貨を一枚惠んでやつた。漱石が下宿に歸つて來て、便所に這入つて見ると、それと同じ銅貨が一枚便所の窓に載つかつてゐる。常常漱石は、下宿の婆さんが自分のあとをつけて、自分を探偵してゐると思つてゐたが、やつぱり自分の推察してゐた通りである。然も今日はその手柄を見せびらかす爲に、自分の眼につく所にこんなものを置いたに違

ひない、あの婆あ實に怪しからんと憤慨した事があつたが、それと同じやうな銅貨が、同じく是見よがしに、今日火鉢の緣にのつけてある。いかにも人を馬鹿にした、怪しからん子供だといふので、長女を擲つたといふ事が分かつたのださうである。

それはそれきりで、別になんの事もなかつた。然るに「六月の梅雨期頃からぐん／＼頭が惡くなつて、七月に入つては益〻惡くなる一方です。夜中に何が癪に障るのか、無暗と癇癪をおこして、枕と言はず何といはず、手當り次第のものを放り出します。子供が泣いたといつては怒り出して居ります。どうにも手がつけられません。／丁度其頃私が又姙娠して居りまして惡疽で苦しんで居ります。其上正月頃風邪をこじらせて熱がとれたいといつてゐたのが、實はいつの間にやら肋膜をいくらかやられてゐたとかで熱があります。そんなわけで始終臥せり勝ちだつたのですが、どう考へても夏目の癇癪が腑に落ちません。以前はあんなに無茶苦茶に怒る人ぢやなかつたのだが、あんまり勉强でも爲過ぎて、どつか身體なり頭なりに異狀のあるのではあるまいか。以前とはまるでころりと違つて居ますので、不審でもあり心配でもあるので、其頃始終私を診に來て下さつた尼子四郎さんにお話をしまして、とてもまともに診て上げませうなどといつたつて、近頃の容模樣では素直におとなしく診せる氣遣ひもなし、いつか折を見て、私を診に來てゐると、ど

うも夏目の顔色が悪いがとか何とか言ひがかりをつけて、そこのところをうまく持ちかけて診察してやつてくれませんかと御願ひしました。尼子さんも仔細承知で引きうけて下さいました。／四五日たつと、尼子さんが見えてのお話に、餘程話が旨く運んだと見えて診察をされたといふのです。どんなでしたとお伺ひしますと、どうもたゞの神經衰弱ぢやないやうだと首を傾げられます。それではと重ねて御伺ひしますれば、精神病の一種ぢやあるまいか。しかし自分一人では何ともそこのところは申し上げ兼ねるから、呉博士に診て戴いてはといふお話です。さうなれば是非もありませんが、又益〻心配なので、ではさう願はうといふことにお話をきめて、萬事の謀は尼子さんに御願ひ致しました。／さう言はれて改めて見るせいか、どうもやることなすことが只事でありません。何が癪に障るのか女中を追ひ出して了ひます。私にはいよ〳〵つらく當たります。女中は居ず、その上私は病氣でふら〳〵して居るのですが、仕方がないから何かしますれば、それが一々氣に入らない様子ですが此方もさう〳〵面當てがましく振る舞はれるのでは堪まりませんし、又そのいら〳〵してゐるのを見るのが實に堪まりません。しきりに里へ歸れといふことを面と向かつて申しますので、私も考へました。こんなことが續いて、一層頭をいら〳〵させて了つても悪いし、萬一子供にどんな危害がふりかからないものでもない。或は私が一時子供たちを連れて身を引いてゐたら、其間それだけ眼の前から邪魔物がなくなるわけで、かへつて氣が鎭

まるかも知れない。一先づ身を引いて様子を見よう。さう考へまして父に相談しまして、ともかく病氣に逆らはないやうにして、一時子供を連れてどいて見ることに致しました。さうして七月に一旦里の父母の許へかへりました。其時尼子さんが病氣が惡いやうなら、私が電話を上げるなり何なりいいやうにしますから、其方は私にまかして心配なくと深切に言つて下さいました。／其中に尼子さんが御約束どほり吳さんに診せて下さいましたといふことだつたので、吳さんのところへ様子を伺ひに參りますと、あゝいふ病氣は一生なほり切るといふことがないものだ。なほつたと思ふのは實は一時沈靜してゐるばかりで、後で又きまつて出て來ると申されて、それから病氣の說明をいろ／＼詳しく聞かして下さいました。私もそれを聽いて、なる程と思ひまして、漸く腹がきまりました。病氣なら病氣ときまつて見れば、其覺悟で安心して行ける。かう思ひまして、どんな具合かしらと時々行つてはのぞいて見ますが、いつ行つて見てもどうも御機嫌甚だうるはしくありません。さらばといつて此儘いつ迄かうして居るわけにも行かず、どうしたものかと思つて居りますと、夏目の兄さんが、これは昔風な考から、私が、むきに此儘離籍でもすると思はれたものか、夏目の爲めを思ひ、私の爲めを思つて、どうか別かれるの何のといはず、其儘默つて怒らずにかへつてやつてくれ、とかういふお話なのです。で私も、……どうか兄さんから話の口を切つて戴きたい。あやまつて歸ることにするからといふので、兄さんが夏目に、私が

かへりたいと言つてるからと取りなして下すつたわけです。すると夏目が、／「つまり兩方で神經衰弱なんだ。歸りたいといふなら、そんならかへつて來るがいい。が、大體中根の家では子供を甘やかせて我が儘に育て過ぎる。だから鏡子なんぞもあのとほり我が儘で、自分のやりたい放題をやる。」／と、申しますので、兄さんも、／「外の姉妹(きやうだい)はどうか知らんが、鏡子さんはあんたの奥さんぢやないか。細君のことなら强情であらうと我が儘であらうと、自分のいいやうに教育したらいいぢやないか。」／とか何とか言つたやうな按排だつたさうです。そこで母を煩はしまして、母から夏目にどうかまあといつた具合にあやまつて貰つて、そこで漸く千駄木に歸ることになりました。」――『漱石の思ひ出』によると、是が九月の事だつたのださうである。さう言へば明治三十六年（一九〇三）九月十四日漱石が菅虎雄に宛てた手紙には、「愚妻先日より又歸宅致居候大なる腹をかゝへて起居自在ならず如何なる美人も孕むといふ事は甚だ美術的ならぬものに候況んや荊妻に於てをやかね」と書いてある。

　この時は是で一往の段落がついたが、十月の末に三女の榮子が生れ、十一月に這入ると「又ぞろ前にも增して雲行きが險しくなつて」來て、それが翌明治三十七年の四五月ごろまで續いたといふ。『漱石の思ひ出』によると、その間に漱石は、或は「貴樣はお產でねてゐるのだから、相當日がたつたらかへれ。」と言つたり、或は鏡子の父の所へ再三手紙を出して、鏡子を返すから引

き取つてくれと言つてやつたり、或は次女の恒子がやつと三つで、乳を離されて、ひい／＼よく泣くのを、ひどく氣にして、夜中でも何でもひどい目に會はしたり、或は學校から歸つて來ると、女中を呼んで、「これを奥さんのとこへ持つて行つて、これで澤山小刀細工をなさいつてさう言ひなさい」と言つて、錆ついた小刀を渡したり、或は「朝學校へ出るにしても、洋服を着せようとすれば、彼方へ行つて居ろと頭からどなりつけるので前の晩のうちにカラーからネクタイ迄揃へておいて、それを朝になるとそつと部屋へ置いておくと、ひとりで默つて着て出かけ」たり、或は鏡子に「お金なんぞ一文も呉れず、お小遣も元よりくれ」なかつたり、もつとも「日用品は通で取つて月末にこれだけかかつたと勘定を見せれば、まさかそれを拂ふのはいやだとは申さないのだからいいのですが、手元に小遣ひをおいてくれ」なかつたり、或は「夜中によくねむれないらし」く「夜中、不意に起きて、雨戸をあけて寒い寒い庭に飛び出します。何をするか知れたもんぢやありませんから、ついて出たいのですが、そんなことをしようものなら、あべこべに何をされるかわからないし、第一大きな聲で呶鳴られでもしたら、四邊近所に面目もないし、息を殺して寝た振りをして、聽き耳を立てて居ますと、やがて何事もなく戻つて參ります。かと思ふと眞夜中に書齋でドタン、バタン、ガラ／＼とえらい騒ぎが持ち上がることがあります。これも仕方がないので出たいのをじつと堪らへて居りますと、やがてそれも一時で騒ぎもひつそり鎭まつて

了ひます。まあよかつたと翌朝學校へ出るが早いか書齋に入つて見ますと、ランプの火屋は粉微塵にわれてゐる、火鉢の灰は疊一面に降つてゐる、鐵瓶の蓋は取つて投げたものと見えてとんでもないところにごろついてゐる、二月と見られた部屋の模様ぢやありません。留守の間に大掃除をしておくと、歸つて來て又けろりとしてそこに入つて居」たり、或は向ひの下宿屋にゐる書生を氣にして、「その書生さんの二階の部屋から書齋が見下ろされる具合になつてゐて、毎晩部屋の窓に明りがついて、そこで書生さんが相當高い聲で音讀するのです。それが習慣と見えて、窓ぎわの机に向かつて勉強してゐる時には、きまつて聲を立てて本を讀んでゐるのです。そこへ時たまお友達が遊びに來る。さうするとやはり大きな聲で話をしてゐるのです。それが一々夏目の異常な耳には、穩かならぬ自分の噂や蔭口に響くらしいのです。さうして高いところから始終此方の方を覗いて監視してゐる。それが氣になつて仕方のないところへ、學校の始まる時間はどこでも大概同じですから、夏目が出かける頃になると、其學生も出かける支度をして、夏目の後からついて行く。あれは姿こそ學生だが、しかし實際は自分をつけてゐる探偵に違ひない。かう一人できめてゐるのです。學生さんこそいい面の皮です。／そこで朝起きて顔を洗つて、いざこれから御飯といふ時になると、まづその前に書齋の窓の敷居の上に乘つて、下宿の書生さんの部屋の方を向いて、大きな聲で聞こえよがしに呶鳴るのです。／「おい、探偵君。今日は何時に學校

へ行くかね。」／とか、／「探偵君、今日のお出かけは何時だよ。」／とか、自分では揶揄つてる積りか、先方でそんなにこそ〳〵ついて來なくたつて、此方で堂々と教へてやるよといつた具合に、一ぱし上は手に出た積りらしいのです。それを毎日毎朝やるのだから、書生さんも變な氣狂親爺だな位には思つてゐたことでせう。それを大眞面目になつて斷わつてから、それから食膳につ」いたり、それはそれは澤山變つた事があつたのださうである。

『漱石の思ひ出』では、漱石を精神病者として扱つてゐる。鏡子が漱石を精神病者であると信じてゐた事には、疑ひがない。然し尼子四郎や吳秀三の診斷にも拘はらず、かういふのを精神病者と見做して可いかどうかに就いて、私は深刻な疑ひを持つてゐる。元來一人の人間が精神病であるかないかを決定する事は、困難ではあるに違ひない。それだから今日の精神病醫は、數回に亙り、もしくは數時間に亙つて、患者と對話し、あらゆる方面から、手間をかけて、その患者の精神機能を觀測し、診斷の材料を蒐集しようと努めてゐる。然るに尼子四郎や吳秀三は、恐らく漱石の身體を一回、たかだか二回くらゐ、それも外の事に託して、そこそこにしか見てゐない。診斷の材料の重なるものは、鏡子の口供だけだつたのに違ひないのである。然も鏡子には、漱石がなぜさう自分を憎むのか、なぜさう肝癪を起すのか、その理由が分からなかつた。理由なしに女房を憎み、理由なしに子供をいぢめ、理由なしに下女を追ひ出し、理由なしにそこいらの人間

に怒鳴り散らすとすれば、是は、尼子四郎や呉秀三を俟つまでもなく、まさに氣違ひの沙汰であるに違ひない。尼子四郎も呉秀三も、『漱石の思ひ出』に書かれてゐるやうな事實を、一一鏡子の口から聽かされて、結局漱石を神經衰弱以上のもの、即ち精神病者と診斷したものと思はれる。然し鏡子が理由がないと思つてゐるといふ事その事に、第一の問題があるのである。

例へば『漱石の思ひ出』には、漱石が、是でたんと小刀細工をなさいと言つて來いと言つて、下女に錆びた小刀を渡し、下女はそれをひどく氣味を惡がつたといふ事が出てゐる。然し是は、漱石が鏡子の小刀細工を憎むのあまり――蔭でこそこそと策略する事を憎むのあまり――さういふ擧に出でたのだと解釋すれば、假令それは子供らしいといふ非難は免がれ得ないにしても、決して非常識でも、精神病でもないのである。鏡子が漱石を病氣に違ひないと判斷し、尼子四郎に「いつか折を見て、私を診に來てゐると、どうも夏目の顏色が惡いがとか何とか言ひがかりをつけて、そこのところをうまく持ちかけて診察してやつてくれ」ないかと賴み、尼子四郎がその意を體して診察する。また尼子四郎の發意で、是は一往呉秀三に見てもらつた方が可いといふので、「萬事の謀は尼子さんに御願ひ」して、それを實行に移す。――是は、漱石から言へば、正に「小刀細工」に違ひないのである。勿論鏡子から言へば、この際は事情が事情だから、さうするより外に途がなかつたのだらう。然し漱石がさういふ事が嫌ひであり、さういふ事をすれば、漱

石から憤られるといふ事は、初めから知れ切つた事である。にも拘はらず鏡子は、漱石の自分に對する非難を、決して當つてゐないとし、漱石が自分を、理由なしに憎むとするのである。

是はずつと後、大正三年(一九一四)十月の事であるが、鏡子の妹婿鈴木禎次の父の御葬ひの時の話が、『漱石の思ひ出』の中に出てゐる。鈴木家では、御葬ひに漱石は來ないだらうと思つて、馬車の席を用意しなかつた。然るに豫想に反して、漱石が來た。仕方がないから漱石には人力に乘つてもらひ、鏡子は馬車で御葬ひの伴をした。すると漱石が怒つて、一般會葬者席か何かに這入つたのか、葬儀場には姿を見せず、葬儀がすんで鏡子が鈴木のうちに歸つてゐると、漱石は鏡子を電話で呼び歸し、さんざ怒つたのださうである。鏡子は是を、事情已むを得ない事だから承知してくれてもいいと思つてゐるやうであるが、然しいくら事情已むを得ないにしても、女房が馬車に乘つて、亭主が人力で、葬式の伴に立つ法はない。席が一つしかないのなら、亭主を馬車に乘せて、女房が人力に乘るのが、當り前である。漱石の怒るのに少しも無理はないと思ふ。それを鏡子は、漱石がこの時「あたまの惡い」せゐにしてゐる。是も大正二年(一九一三)の正月ごろといふから、およそ同じくらゐの時代の話であるが、鏡子は穴八幡の蟲封じの御札に釘を打ち込んで、漱石の「あたまの惡い」のを治ほさうとした事があつた。是は長い釘をその御札に毎日一度づつ打ち込むのださうであるが、漱石が外へ出ないとそれを打つ事が出來ない。それで漱石

が一回分の原稿を書き上げては、それを自分で出しに行くその隙を見計らつて、毎日打つてゐたが、ある日漱石がまだ玄關にゐるうちに、それといふので釘を打ち出したのを漱石に見つかり、漱石は大變な權幕で上がつて來て、蟲封じの札を滅茶苦茶に叩きこわしたのみならず、それを一まるめにして芥溜の中に叩き込んだのださうである。『漱石の思ひ出』によれば、是も漱石の「あたまの惡い」現はれの一つになつてゐる。然し石倉小三郎によれば、鏡子は既に千駄木にゐる時分から、妻戀稻荷へ行つて蟲封じの御祈禱などを頻にしてもらつてゐるのである。漱石は昔からそれを知つてゐて、その迷信と無理解とを不愉快に思つてゐたに違ひないのである。

言ふまでもなく漱石は、道理ある生活を愛した。從つて漱石は道理に戻る、一切のものを憎んだ。それだけに漱石は、道理に戻る一切のものを、機微に看破する、鋭敏な感覺を持つてゐた。同時に漱石の想像力は豐富であり、漱石の頭腦は迅速に活動した。誰にも氣がつかないほどの小さな汚染でも、漱石の眼には大きなものとして映り、のみならずその中にあらゆる惡の芽を含むものとして、忽ちのうちに顯著な花に咲き出でる。想像を持たず、神經も遲鈍で、反省する事を知らない人間が、自分にはそんな事をした覺えはないと言ひ張つてゐる間に、漱石は、その爲に傷つけられ、その爲に惱み、その爲に狂つて、停止する事を知らない狀態に置かれる事も、十分可能なのである。——ストリンドベリの『父』の大尉は、妻君の無意識的な下司根性と半意識的

な支配慾との爲に、科學者としての自分の活動を妨げられたのみならず、その妻君の「惡」の爲に肝癪を起しつづけて、到頭ほんとの精神病者にされてしまつた。

殊に漱石はロンドン以來、劇しい神經衰弱に罹つてゐた。外國で神經衰弱に罹つたものは、大抵日本に歸つて來さへすれば、なほる。是は、日本に歸れば、外國での緊張は、なし崩しに揉みほごされるからである。然るに漱石は、日本に歸つて來た日から、「アイロニーの爲めに手非道く打ち掂ゑられ」て、「苦笑する勇氣さへ有たな」い狀態に置かれた。東京に口があつたのはよかつたが、然しその爲め漱石は、身體が二つあつても三つあつても足りない位の、勉强をしなければならなかつた。その結果漱石の贏ち得たものは、漱石の講義が六づかしくて、「ワカラナイ」といふ評判である。のみならず漱石の周圍の者は、漱石を洋行して歸つて來た大學の先生として、取らうと思ひさへすれば、いくらでも金のとれる、働きのある人間として、金をせびりに來るのである。その中には、漱石の兄があつた、漱石の姉があつた、漱石の養父母があつた、鏡子の父があつた。然も漱石は、引越しをするにさへ、熊本を辭職してもらふ事の出來る、僅か計りの一時賜金を當にしなければならないほど、餘裕のない生活を續けてゐるのである。是で漱石が、家庭で慰められる事がなかつたとすれば、漱石は再び神經衰弱になり、肝癪を起し、投げ打ちをし、妻子や女中に怒鳴り散らさない方が、寧ろ不思議であつた。

その上鏡子には、熊本以來のヒステリがあつた。鏡子は、漱石が歸つて來て間もなく、姙娠した。姙娠は惡阻を伴ひ、惡阻はヒステリを伴つた。『道草』第五十四には、かう書いてある。

――

「健三の氣分にも上り下りがあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるやうな事ばかりは云つてゐなかつた。時によると、不快さうに寐てゐる彼女の體たらくが癪に障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つた儘、わざと慳貪に要らざる用を命じて見たりした。

「細君も動かなかつた。大きな腹を疊へ着けたなり打つとも蹴るとも勝手にしろといふ態度をとつた。平生からあまり口數を利かない彼女は益沈默を守つて、それが夫の氣を焦立たせるのを目の前に見ながら澄ましてゐた。

「「詰りしぶといのだ」

「健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色でゞもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はなければならなかつた。しぶといといふ觀念丈があらゆる注意の焦點になつて來た。彼は餘所を眞闇にして置いて、出來る丈强烈な憎惡の光を此四字の上に投げ懸けた。細君は又魚か蛇のやうに默つて其憎惡を受取つた。從つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても氣違染みた癇癪持として評價されなければならなか

つた。

「「貴夫（あなた）がさう邪慳になさると、また歇私的里（ヒステリー）を起しますよ」

「細君の眼からは時々斯（こん）な光が出た。何ういふものか健三は非道くその光を怖れた。同時に劇しくそれを惡んだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部では強ひて勝手にしろといふ風を装つた。其強硬な態度の何處かに何時でも假装に近い弱點があるのを細君は能く承知してゐた。

「「どうせ御産で死んでしまふんだから構やしない」

「彼女は健三に聞えよがしに呟いた。健三は死んぢまへと云ひたくなつた。

「或晩彼は不圖眼を覺まして、大きな眼を開（あ）いて天井を見詰てゐる細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髪剃があつた。彼女が黒檀（エボニー）の鞘に折り込まれた其刃を眞直に立てずに、たゞ黒い柄丈を握つてゐたので、寒い光は彼の視覺を襲はずに濟んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髪剃を捥ぎ取つた。

「「馬鹿な眞似をするな」

「斯ういふと同時に、彼は髪剃を投げた。髪剃は障子に嵌め込んだ硝子に中つて其一部分を摧いて向ふ側の縁に落ちた。細君は茫然として夢でも見てゐる人のやうに一口も物を云はなかつた。

「彼女は本當に情に逼つて刃物三昧をする氣なのだらうか、又は病氣の發作に自己の意志を捧

げべく餘儀なくされた結果、無我夢中で切ものを弄ぶのだらうか、或は單に夫に打ち勝たうとする女の策略から斯うして人を驚かすのだらうか、驚かすにしても其眞意は果して何處にあるのだらうか。自分に對する夫を平和で親切な人に立ち返らせる積なのだらうか、又はたゞ淺墓な征服慾に驅られてゐるのだらうか、――健三は床の中で一つの出來事を五條にも六條にも解釋した。さうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けて其動靜をうかゞつた。寐てゐるとも起きてゐるとも付かない細君は、丸で動かなかつた。恰も死を衒ふ人のやうであつた。健三は又枕の上でまた自分の問題の解決に立ち歸つた。

「其解決は彼の實生活を支配する上に於て、學校の講義よりも遙に大切であつた。彼の細君に對する基調は、全く其解決一つでちやんと定められなければならなかつた。今よりずつと單純であつた昔、彼は一圖に細君の不可思議な擧動を、病の爲とのみ信じ切つてゐた。其時代には發作の起るたびに、神の前に己れを懺悔する人の誠を以て、彼は細君の膝下に跪いた。彼はそれを夫として最も親切で又最も高尚な處置と信じてゐた。

「「今だつて其原因が判然分りさへすれば」

「彼には斯ういふ慈愛の心が充ち滿ちてゐた。けれども不幸にして其原因は昔のやうに單純には見えなかつた。彼はいくらでも考へなければならなかつた。到底解決の付かない問題に疲れて、

とろ〳〵と眠ると又すぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかつた。彼は昨夕の事に就いて、つひに一言も細君に口を利く機會を得なかつた。細君も日の出と共にそれを忘れてしまつたやうな顔をしてゐた。」

——かういふ狀態が續く限り、漱石の緊張した頭は、ロンドンに於ける場合のやうに、緊張すれば緊張しつぱなしのままで、少しも寬ろぐひまがなかつた筈である。然もロンドンでは、まだ「日本に歸りての第一の樂みは蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る是が願に候夫から野原へ出て蝶々やげん〳〵を見るのが樂に候」と書く事が出來た。ある意味で、先きの樂しみを持つ事が出來た。然るに今は、その樂しみさへもない。『文學論』の序の中で、漱石は「歸朝後の三年有半も亦不愉快の三年有半なり。去れども余は日本の臣民なり。不愉快なるが故に日本を去るの理由を認め得ず。日本の臣民たる光榮と權利を有する余は、五千萬人中に生息して、少くとも五千萬分一の光榮と權利を支持せんと欲す。此光榮と權利を五千萬分一以下に切り詰められたる時、余は余が存在を否定し、若くは余が本國を去るの擧に出づる能はず、寧ろ力の繼く限り、之を五千萬分一に回復せん事を努むべし。是れ余が微少なる意志にあらず。余が意志以上の意志なり。余が意志以上の意志は、余の意志を以て如何ともする能はざるなり。余の意志以上の意志は余に命じて、日本臣民たるの光榮と權利を支持する爲めに、如

何なる不愉快をも避くるなかれと云ふ。」と書いてゐるが、漱石の肝癪は、ある意味から言へば、漱石が「力の繼く限り、之を五千萬分一に回復せん事を努」めた、その努力の現はれだつたのに外ならなかつた。何所にも行く所を持たない漱石は、さうでもするのでなければ、生きて行く事が出來なかつたのである。

神經衰弱に罹ると、人は先づ怺へ性がなくなる。理性の働らきを押しのけて、感情がのさばり出る。第二に周圍の壓迫を感じる爲に、人が自分に注目し、探偵し、愚弄しようとしてゐるかの如くに感じる。『自轉車日記』の中で漱石が言つてゐるやうに「猜疑心」と「繼子根性」とが、日に日に募つて來るのである。從つて漱石の神經衰弱が劇烈になつて來るに從つて、漱石が或は向ひの下宿屋に下宿してゐる書生を探偵と感じ、或は下女を自分を愚弄すると言つて解雇するなどといふやうな擧動があつても、別に異とするに足りない。然も漱石がさういふ自分を反省し、さういふ自分と鬪ひ、さういふ自分を乘り越さうと企ててゐた事は、漱石の『猫』以前の、多くの「斷片」が殊に明治三十七八年頃の「斷片」の第一から第九へかけて是を證明する。のみならず漱石が、自分の神經衰弱にさへ決して負けてゐなかつた事は、漱石があれほどの精しさとあれほどの確さとをもつて書いた『道草』が、最も雄辯に證明する。尼子四郎や吳秀三が言ふやうに、もし當時の漱石が、神經衰弱以上の精神病者であつたり、根治する事のない精神病者であつ

たりしたとして、精神病者に是ほどの記憶力と是ほどの客觀力と是ほどの批評力とを豫期する事が出來るのであるか。それのみではない。『漱石の思ひ出』によれば、漱石の兄が仲に立つて、鏡子が漱石の所へ歸りたいと言つてゐるといふと、漱石は、「つまり兩方で神經衰弱なんだ。歸りたいといふなら、そんならかへつて來るがいい。が、大體中根の家では子供を甘やかせて我が儘に育て過ぎる。だから鏡子なんぞもあのとほり我が儘で、自分のやりたい放題をやる。」と答へたといふが、「つまり兩方で神經衰弱なんだ」などといふやうな、相手をいたはつた言葉を、さうしてある意味では、この夫婦生活の不和の原因をぴたりと言ひあててゐる言葉を、およその精神病者が言ひ得るものであるか。常識から考へて、恐らく誰でも否といふに違ひないと思ふ。

私から言はせれば、漱石の當時の肝癪の根本は、鏡子の無理解と無反省と無神經から來てゐるのである。もつとも是はあながち鏡子のみではなく、誰が漱石の妻になつてゐても、漱石はその無理解と無反省と無神經に惱まなければならなかつたのかも知れない。漱石は自分に最も近いものを最も憎んだと言はれるが、正しい漱石は、自分が最も愛する者、自分が最もよく知つてゐる者、自分に最も近い者の中に、最も醜いものを澤山に發見する時、愛し、知り、近いといふ理由で、それを見て見ぬふりをするといふやうな、だらしのない眞似が出來なかつたのである。その上人は、自分に近い者でなければ、眞正の意味で、愛しも憎みもする譯に行かない。最も近いが

故に最も憎まれるといふ事は、その人に救ひやうのない「惡」が巣喰つてゐる爲である。

四二　表現の意慾

漱石は留學中は、作品らしい作品を書かなかつた。『倫敦消息』は子規に宛てて自分の身邊を報道したもので、發表を目的としたものではない。當時ロンドンには渡邊和太郎がゐて俳句を作り、漱石も其所の運座に招かれて、明治三十四年(一九〇一)の十一月三日と十一月十日とに、幾つかの句を作り、その外にも多少句を作つてゐないではないが、然しそれも日本を出てから日本に歸るまでに、合計三十句に足りない位の數だから、問題にならない。明治三十四年八月一日漱石は英詩"Life's Dialogue"を作り、クレイグに見てもらひ、クレイグは是を評して「Blakeニ似タリト云ヘリ然シincoherentナリト云ヘリ」といふ事が、八月六日の日記に出てゐるが、然し是もあとが續かなかつた。

漱石が歸朝して、高濱虛子・坂本四方太などの『ホトトギス』同人が漱石をおとづれ出し、或は俳句を作れと言ひ、或は文章を書けと勸めるに及んで、初めの內こそ「目下大多忙にて近來俳

句とは全く絶縁の有様に候……」(三六・五・九) などと言つてゐたが、既に六月八日には「頃日來ほとゝぎす關係の人にせめられて又々邪道に陷りかけて居候」といふやうに、表現慾を搖蕩され始め、六月十七日には「近頃俳句抔やりたる事なく候間頗るマヅキものばかりに候」と言つて、「愚かければ獨りすゞしくおはします」・「無人島の天子とならば涼しかろ」以下合計十三句を書いて送るやうになつて來てゐる。もつとも七月三日菅虎雄宛の手紙にもあるやうに、「發句ナンカ下火極マルマルデ作ル氣ニナラン然シ退窟凌ギニ時々ヤル是ハ得意ノ餘ニ出ルノデハナイ一時ノ鬱散ト云フ資格サ」で、漱石は是を、愉快だからやるのではなく、不愉快だからやるのではあつたが、それでも漱石にいくらかでも表現の道がついたといふ事は、意味のある事であつた。同時に漱石は、七月發行の『ホトトギス』に賴まれて、『自轉車日記』を寄稿する。漱石は是を自ら「甚ダ上品ナラザル文章」だと評したが、然し上品でも上品でなくても、漱石はかういふ風に書かなければゐられなかつたからかういふ風に書いたまでで、かうでもして見たら、自分の頭の中で煑え沸ぎつてゐるものが、少しは鎭まる事もあらうかと、從つて是も亦「得意ノ餘ニ出ルノデハナ」く、「退窟凌ギニ」「一時ノ鬱散ト云フ資格」で書かれたものに相違ない。

同じ年の八月に、漱石は英詩“Silence”と“Dawn of Creation”とを書いた。その他、日附のない英詩が二篇是に續く。これらのものは恐らく、前の詩と相前後して書かれたものだらう。

是に同じ年の十一月二十七日の日附を持つた無題の詩が三篇、十二月八日のが一篇、最後に明治三十七年(一九〇五)四月の詩が一篇續く。これらの詩も亦、例へば"I called to the stars in my dream"の詩や"I rested my head against her heaving bosom"の詩や"Let her dance alone in white"の詩のやうに、作者が美しい幻想を眼の前に展開させて、それを樂しんでゐる趣のものもなくはないが、然し多くは例へば"Silence"の詩や"Dawn of Creation"の詩や"Some feelings in the shadowy depth of my heart"の詩や"Lonely I sit in my lonesome chamber"の詩や"I looked at her as she looked at me"の詩のやうに、曾て自分の持つてゐた美しいものが無殘にも打ち碎かれてしまつた事を嘆いたり、或は自分自身を非常に孤獨に感じ、憂愁と寂寞とに鎖された、沈鬱な心持を詠んだりしたのでなければ、例へば"They had words together"の詩や"We live in different worlds, you and I"の詩のやうに、女の殘忍な性質を咎つたり、相手と自分との住む世界は違ふのだから、相手も自分のやうにはなりやうがないし、自分も相手のやうにはなりやうがない、その意味でお互は絶縁だといふやうな、相手に對する愛想づかしを表現するもので、是亦決して「得意ノ餘ニ出」たものではなく、「退屈凌ギ」だか「一時ノ鬱散」だかは分からないが、ともかく自分の焼けつくやうな心持に、かうして、いくらかでも風を入れようとしたものである事は、明白であつた。

それが果して豫期した通り、漱石の不愉快な心持に風を入れるに、十分であつたかどうかは、分からない。然し是は少くとも漱石に、自分の前には俳句以外にも表現機關がいくらもあつて、俳句では到底表現し切れないものも亦、それによつて比較的自由に表現する事が出來るのだといふ見極めを、はつきりつけさせる機縁にはなつてゐると思ふ。殊に英詩は、外國の言葉を使ふだけに、日本の言葉を用ひる場合ほど、自由自在に自分の心持を表現する譯には行かなかつたとしても、日本の言葉では一寸言へさうもないやうな、例へば極まりが惡くて言ふ事を躊躇しさうな事でも、外國語では割に易易と言へる利益もあつて、漱石は此所で、當時の漱石としては大膽に、言ひたい事を言つてゐるのではないかと思はれる。日本の言葉を用ひれば、自分の苦い體驗でも、まともにそれを訴へるといふ風でなく、例へば『自轉車日記』のやうに、三文の値うちもないかの如く、自分を揉みくしやにして書かなければゐられないものが、英詩では、かなりロマンティックな、色つぽい事も書き、またリアリスティックな、感情を露骨に剝き出した事も書き、またセンティメンタルな、弱い音をも吐いてゐるのは、勿論漱石の中に二つの心が棲んでゐたからの事であつたには相違ないが、然しその一つの心に道をつけて、それを表現する事を容易にする爲には、俳句でも漢詩でも文章でもなく、やはり英詩が必要だつたのだといふ氣がするのである。その意味で漱石の英詩は、言はば『倫敦塔』や『幻影の盾』や『薤露行』の先き觸れのやうなものであ

つたと、言へない事もない。

勿論漱石の英詩は、明治三十七年(一九〇五)四月を期して、お仕舞になつてゐる。その代り漱石は、英語の散文を書いて、その中に自分の肝癪を叩き込んだ。もつとも是らの散文が果していつ頃書かれたものであるか、精確には分からない。然し "Oh! Sorrow, ever failing yet ever present" をもつて始まる文章や "Ours is a country of earthquakes" をもつて始まる文章は、『ハムレットの性格』と題する覺書きと共通するものを持つて居り、『ハムレットの性格』は『マクベスの幽靈に就て』と相前後するものと想像されるから、凡そ明治三十六年十二月前後のものと見做して差支ないのかも知れない。もしさうだとすれば、ある時期漱石は、英語の詩と英語の散文とを、互ひに書いて行つてゐるのである。然も散文には、"You know me too well, ladies and gentlemen, you try every experiment upon me to satisfy your curiosity and seem to be anxious to know what will become of me. Well, wait and see. I will satisfy you or rather dissatisfy you for I will turn out anything other than what you expect. You presume too much, ladies and gentlemen, to make a man by artificial evolution. Nowadays people speak of atomic evolutions. Atoms may be generated by evolution. But you ought to know that I am not an atom. I am more elementary than atoms;

I am not susceptible of the process of your artificial evolution. I have lost my wife in teaching her a lesson; I am losing my children in teaching a lesson to my wife and her family. I am resolved to lose everything ere I teach them a severe lesson, except my will. It is my will that I assert and before it they shall bow. They shall bow before me as they find in me a heartless husband and a cruel father and an obdurate relative. They shall bow before me when they see their own cowardly behaviour reflected in their own minds. They will hold me as responsible for it. Silly things! Think of the cause and causality. If you were as obedient and dutiful as the most dutiful and obedient of all wives, I would not forgive thee. Wait and you will see; wait and you will see. Try everything; try every art till you are satisfied, till you are dissatisfied, till you are baulked of your scheme which will be all thrown away on me." といふやうな、猛烈な憎悪の談を相手の上に浴びせかける、劇しい感情に充ちた文句さへ書かれてゐるのである。漱石には、周圍の者から自分の上にかけられる技巧の罠が、不愉快で堪らなかつた。自分の言ふ通りに言動しない、妻も子も親類も、不愉快で堪らなかつた。漱石は、一切のものを失つても、この十重二十重に圍まれた蜘蛛の絲のやうな、私の多い人情の世界を踏み破つて、自分の意志を貫ぬき

通さうとする。――然も我我は、さういふ言葉の奥に、漱石の悲鳴のやうなものの響き出てゐる事を、感じない譯に行かない。漱石は淋しいのである。

英語の散文に續いて採り上げられたものは、日本語の散文である。是は既に、明治三十七年(一九〇五)一月の『帝國文學』に、『マクベスの幽靈に就て』となつて現はれてゐるが、然し此所でいふのは、さういふ學問的なものではなく、もつと漱石の實生活に卽したもの、漱石の感情生活の表現としての、散文である。是は元より、世間に發表されはしなかつた。然し例へば漱石は、「我輩の向ふの家に〇〇〇といふ書生の合宿所がある此書生等は日常我輩の癇癪を起して大聲を發するのを謹聽するの榮を得る果報者である時として先生の假聲抔を使つて我輩を驚かしめる其所に女の召使か何かゞ居つて此書生と二人假聲を使ふ其標本を一寸諸君に御紹介する、但し此書生共は種々研究の結果色々な假色を使ひ分ける或る時は某教授となりある時は某先生となる中々多藝なものである餘慶な事であるが其代りに役者の假聲でも習つたら小使取位になるだらうと思はれるが學校の先生の假色では單に我輩を驚殺せしむるのみで他に何等の功能もないのは氣の毒である／書生某教授の假聲にて「……中々評判がいゝですよ」 女「セルマの歌でも出れば善う御座んすがね」 男「それに近頃帝國文學へマクベスの幽靈と云ふをかいた所が大變評判がいゝです」有難い仕合せであるひそかに感謝の意を表してゐると 女「そうですかそんなに皆樣が仰つて

下さるのにねー」と何だか我輩の母さん然とした事を云ふ「どうしてあれで頭は中々可いのですよ」と蔭ながら贔屓をして呉れる但しあれでも丈は少々不平であつた「まあ何んて強情な人でせうね」と母さんが云ふ此邊よりさすが此女に息子の待遇を受ける我輩にも何の事だか分らなくなつて來た 男「いつそ出したら善いでせう」何を出す積りか知らん恐らく烟突より花火でも出すか去らずばから財布から金貨でも出す工夫をして居るんであらう女はかゝる名案を一言の下に斥けた曰く何か色をつけなくちやいけませんやねと白癡（こけ）が新粉（しんこ）屋と喧嘩する様な事を叱りつける様な口調でいふかゝる母さんを得たる我輩は實に仕合せであると思つた 男「時にいくつです」と云ふ 女「もう三十八でさあね」と嘲る如くに答へた成程我輩は三十八だ此點に於ては暗に御母さんの聰明なるに驚いた然し不孝なる我輩は未だ曾て此の御母さんの御年がいくつであるか毫も思ひ及ばなかつた多藝多能なる男はいつの間にか某教授の假色をやめた今度は一躍して魚河岸の兄いと變化した、「駄目だーな、とても折れねーや」「うむとても折れねー」と合槌を合せる、但し御母さんか御父さんかは我輩の知る限りでないすると又一人が「何にもう直に折れるよ大丈夫だ」と云ふ何が大丈夫なのか是亦分らなかつた」といふのを書いてゐるかと思へば、また別に「新體詩」と題して、「僕は新體詩を作つたから見てくれ給へ從軍行と云ふのだ帝國文學へ投書したから今に出るだらう」「それは面白いだらう見せ給へ、エー何だつて抑も敵は讐なれば、成程尤もだ、油

断をする な士官下士官、何だか妙だね」「敵は讐だといふのだから別に妙な事もないぢやないか」「それが餘り尤も過ぎて妙だと云ふのさ何となく可笑いしかのみならず油断をするな士官下士官とはなんだまるで狂歌の下の句見た様だね」「然し士官、下士官と士官を重ねた處が甘いだらう」「恐らく三日三晩苦心したのだらう」「なにそんなに名句の積りでもないのさその位な事は朝食前の藝さ」「何でも腹の減つて居る時の句に相違ないと思つた先づ是等は進めや進めと敵は幾萬の間に寐轉んで居て此日や天氣晴朗と來ると必ず一瓢を腰にして瀧の川に遊ぶ類の句だね、然し戰爭の詩歌も段々出來た様だが中々面白いのがあるよ先達て僕の知つて居る奴でいやに傲慢な人を馬鹿にする男が御多分に洩れず頗るまづい詩を作つたのさ處が其男が無暗矢鱈に剛慢とか無禮とか色々な形容詞を使つて露西亞の惡口をついて居る御當人は御世辭の圏點をもらつて頗る得意の様だがそれが自畫自賛の圏點だから滑稽だ自分で自分の惡口をいつて其惡口が當つて居るので人に褒められて喜んで居る世は様々のものさ夫から見る〔と〕君の新體詩の方が下手といふ丈だからまだ罪がない」などといふのも書いてゐる。

漱石の『マクベスの幽靈に就て』が『帝國文學』に出たのは、明治三十七年一月、オーシアンの翻譯『セルマの歌』・『カリツクスウラの詩』を載せた『英文學叢誌』の發行日は、同じ年の二月二十二日、『從軍行』が『帝國文學』で發表されたのは、明治三十七年五月の事である。それに

よつて是らの散文の書かれた年月が、前者は明治三十七年の一月の末ごろ、後者は同じ年の四月の末ごろと、相當精確に推定する事が出來るのであるが、同時に我我は此所に既に、『吾輩は猫である』に纏まり上がつて行くものの姿を、胎生學的に相當顯著に觀測する事が出來るのである。勿論此所には、まだ、フモールの世界が出現してゐない。此所には "You know me too well, ladies and gentlemen" で始まる散文ほどの、劇しい肝癪はぶちまけられてはゐないが、それでも此所にはまだ相當に刺刺しいものがあつて、漱石の肝癪は是で多少寬ぐのかも知れないが、然し讀者は後口に相當の苦いものを感じなければゐられない感がある。もつとも後者には、肝癪を離れて笑はうとしてゐる所があり、假令肝癪は起しても、自分の肝癪を自分から突き放して眺めるとともにそれを笑はうとする試みが、一段の進歩を示してゐるといふ事も出來るには違ひないが、それでも是が『猫』の世界にそのまま所屬するには、今少しく鍛錬を經る必要があつたやうに見える。

もつとも是だけでは、漱石の中の詩的幻想の世界、漱石の中のロマンティシズムとポエトリーとは、恐らく滿足しなかつた。漱石は現實眼前の世界が不滿であり不愉快であればあるほど、美しい幻想の世界に逍遙して、せめてもの息を入れたい要求を持つてゐたからである。その方面の心を滿足させるものとして、漱石は、是まで俳句を作り英詩を作つてゐたが、英詩を作らなくな

つてからは、それを新體詩だの、俳體詩だの、連句だので表現した。勿論是らのものは、英詩の場合のやうには、漱石に言ひたい事を言はせる自由を持つてゐなかつたには違ひないが、それでも是らのものが、漱石のその方面での渇きをとめる役目を勤めてゐた事は爭はれない。例へば『鬼哭寺の一夜』だの『尼』だののやうなのが、それである。さうして是らの表現機關の存在を漱石にサジェストし、同時に自分も一緒にそれを作つて漱石を刺激したものは高濱虛子であつた。もつとも一方から言へば是らの詩的な世界の表現様式を決定したものは、漱石のオーシアンの翻譯であつたといふ事も出來る。漱石のオーシアンの翻譯は、ゲーテのそれに比して、遙に多くの困難を凌いだ名譯であるが、此所に用ひられた様式こそ、漱石の詩の様式を決定したるのみならず、後の『倫敦塔』や『幻影の盾』や『薤露行』などに用ひられた特殊な様式を決定したと言つて可いものである。

四三　日露戰爭

ロシヤに對して宣戰の詔勅が下つたのは、明治三十七年(一九〇四)二月十日の事だつた。その二十四日に、既に第一回の旅順口閉塞が行はれてゐる。漱石の「征露の歌」『從軍行』が『帝國文學』に發表されたのは、その年の五月である。

漱石が明治二十八年(一八九五)四月松山に赴任したのは、丁度日清兩國間に講和條約が調印されはしたが、ロシヤ・フランス・ドイツの三國干渉が始まつて、遼東半島を還附するの餘儀なきに至つた、前後の事であつた。漱石が日清戰爭に就いて、またその結果に就いてどう考へてゐたかは、まるで分からない。漱石は當時、「何もかも捨てる氣」で、松山に赴いた。それだけに漱石は、日清戰爭に就いて考へるやうな餘裕を、全然持つ事が出來なかつたのかも知れない。然し漱石は既にその時分には、自分の肩の上の西洋文化を、相當重荷に感じ始めてゐた筈である。當時の多くの人人が感じてゐたやうに、漱石も或は遼東半島の還附を日本の屈辱と感じ、ロシヤ・フ

ランス・ドイツによつて代表される西洋文化の壓迫を、今に見ろといふやうな心持で、忍苦したのではなかつたかとも思はれる。――それは今からなんともきめられないとしても、日露戰爭の場合では、漱石はまるで違つた人間になつてゐるのである。勿論それは漱石の專門とする、文學の方面に於いてではあつたが、然し漱石は「他人本位」の世界から「自己本位」の世界に轉向し、頭腦的にも心臟的にも、西洋文化並びに西洋人に對して、對等に、相手を尊敬するとともに、自己を主張する事が出來るやうになつてゐるのである。日本人は日本人であつて、西洋人の奴隷ではない。從つて日本人は、假令相手が西洋人であつても、自分の道理と自分の權利とを護る點では、一歩も假借する必要を見ない。相手が暴戾にも日本の道理を無視し日本の權利を無視するならば、日本人は生命を賭して、相手と戰ふべきである。――さう思つて漱石は、十年の無理非道を堪へて來た日本が、決然としてロシヤに對して起つた時、その勇氣と情熱とを、自分自身の上に深切に感じて、共に起つほどの興奮を覺えたに違ひない。その興奮が漱石を驅つて、漱石としては空前でもあり絶後でもある、「征露の歌」を作らしめたのである。

漱石は明治三十七八年頃の「斷片」第六の中では、「然し戰爭の詩歌も段々出來た樣だが中々面白いのがあるよ先達て僕の知つて居る奴でいやに傲慢な人を馬鹿にする男が御多分に洩れず頗るまづい詩を作つたのさ處が其男が無暗矢鱈に剛慢とか無禮とか色々な形容詞を使つて露西亞の惡

口をついて居る御當人は御世辭の圏點をもらつて頗る得意の様だがそれが自畫自賛の圏點だから滑稽だ自分で自分の惡口をいつて其惡口が當つて居るので人に褒められて喜んで居る世は様々のものさ」と言ひ、明治三十七年六月三日野村傳四に宛てては、「太陽にある大塚夫人の戰爭の新體詩を見よ、無學の老卒が一杯機嫌で作れる阿呆陀羅經の如し女のくせによせばいゝのに、それを思ふと僕の從軍行抔はうまいものだ。」と言ひ、自分の「征露の歌」に相當の自信を持つてゐたやうであるが、その當否は此所では問題ではない。問題になるのは、今まで例へば『自轉車日記』のやうな、もしくは“You know me too well, ladies and gentlemen”のやうな、もしくは「我輩の向ふの家に〇〇〇といふ書生の合宿所がある」といふやうな、言はば自分自身にのみかまけてゐたやうな漱石が、俄然としてかういふ「征露の歌」を作るに至つた、飛躍である。

明治三十八年（一九〇五）、卽ち漱石が『猫』を書き出した年の五月の『新潮』に掲載された談話筆記『批評家の立場』の中で、漱石は、「近頃西洋の名を得た人の作を標準にして無闇と西洋がるものがある。西洋の作にも甚だいかゞはしいのがある。餘り西洋崇拜をして自己と我國との特色を沒するのは遺憾だ。／……／僕は軍人がえらいと思ふ。西洋の利器を西洋から貰つて來て、目的は露國と喧嘩でもしようといふのだ。日本の特色を擴張するため、日本の特色を發揮するために、この利器を貰つたのだ。文學者が西洋の文學を用ゐるのは、自己の特色を發揮する爲でな

ければならん。それが一見奴隷の觀があるのは不愉快だ。／人は壓迫せられた時自己の無能を思ふもので、明治維新の當時無闇と横文字が跳梁したので、一般に横文字は好いもの難有いものとなつたが、西洋ばかりが必ずしもえらいのではない。日本には日本固有の特色がある。其特色を發揮することが何よりえらいのだ。同時に自己の特色を發揮するのがえらいのだ。」と言つてゐる。同じ年の八月『新小説』に載つた談話筆記『戰後文界の趨勢』の中でも、漱石は、「然るに玆に今回の戰爭が始つて以來非常な成功で、對手は名におふ歐洲第一流の頑固で强いといふ露西亞である。それを敵にして連戰連捷といふ有樣――この連戰連捷といふ意味は船を沈め敵を斃すといふ物質の事であるが、然しこの反響は精神界へも非常な元氣を與へるので、今日まで恐れの叫びを高くして、今度戰爭をするのにも――當局の成算は吾々の窺ひ知る所ではないが、吾々は最初から死力を盡し、生きるか、死ぬかといふ精神であつたが、斯う勝を制して見ると國民の眞價が事實の上に現はれた心地がする。或はこれは多少期して居たかも知れないが、然し忌憚なくいへば決して吾々には所信があつて今日の大成功を期して居たとはいはれない。或はいへば暗に豫期(?)して居た位であつた。それが斯う事實が發展して來ると、つまり今日まで苦しまぎれに言つた大和魂は、眞實に自信自覺して出た大なる叫びと變化して來た。これと同時に同じ日本といつても、言ふことは同じだが言ふ人の了簡が違つて來る。人間の氣分が大きくなつて、向ふも人

なら、吾も人だといふ氣になる。チルソンも偉いかも知れぬが、我が東郷大將はそれ以上であるといふ自信が出る。この自信自覺が開けてくると、この反響はあらゆる方面に波及して來る。／サ、かうなつて來ると、文學の方面にも無論この反響は來るのである。今までは西洋には及ばない、何でも西洋を眞似なければならぬと、一も二もなく西洋を崇拜し、西洋に心醉して居たものが、一朝飜然として自信自覺の途が啓けて來ると、その考へも違つて來る。日本はどこまでも日本である。日本には日本の歴史がある。日本人には日本人の特性がある。あながちに西洋を模倣するといふのはいけぬ。西洋ばかりが模範ではない、吾々も模範となり得る。彼に勝てぬといふことはないと、かう考へが付いて來る。／日本の文學界の製作物として立派なものがある、近松はセクスピヤと比較し得るといつたやうな昔の國粹保存主義時代の考へではなく、今日から自信自覺の位地に起つた國民は、吾々は國民として全世界の何所までも通用する。我邦の過去には文學としては大なる成功を爲したものはないが、これからは成功する。これからは大傑作が製作される。決して西洋に劣けは取らぬ。西洋のに比較され得るもの、いやそれ以上のものを出さねばならぬ。出すことも出來得るといふ――氣概が出て來る。これが反響として國民に自覺され自信される事になるのは自然の勢ひである。で、この趨勢から生れて來る日本の文學は今までとは違つて頗る有望なものになつて來るであらう。／それでもう一つは日本の文學の見方――在來のも

のを批評するのでも大分違つた見方が出て來るであらう。例へば繪畫である、西洋畫の標準で日本のを見れば全然方なしであるが、然し見方を更へれば日本畫には亦日本畫として西洋畫には發見されぬおもしろさが存在する。日本人は西洋の畫を持ち出して標準を西洋に取るが、これは餠屋の標準で酒屋を評するのと一つだ。ところが西洋では既に自分に倦きて居るから、能くその間に日本畫を見て、日本畫に新しき所を發見する。マクネル、ホイツスラーなどは日本の繪畫から發見して平面的に物を寫して美しい理想を現はすのは日本繪畫の特徴であると稱して、その發見を應用して自身の繪畫に能くこれを現はしたが、これを日本人が聞くと首肯する所がある如く、日本の文學も在來の見方でなく繪畫のやうに觀察點を違へたなら亦或は未發のおもしろさを見ることもあらう。日本の芝居は西洋の劇から云へば比較にならぬかも知れぬが、或一種の技術としては特別な發達をして居る美しい價値を認めることが出來る。これらは人が氣を付けるが、文學の方は人があまり氣を付けぬ。然れども俳句の如きものに付いても考へ直す餘地は十分にあるかも知れぬ。」と言つてゐる。

勿論前者は恐らく奉天占領(三月十日)後に話されたものであり、後者は日本海海戰後に話されたものである。從つて是を宣戰の詔勅が下つた前後と比較して、漱石の心持の上に多大の相違があつた事は、爭はれない。然し漱石にとつて日露戰爭の意義の大半は、日本がロシヤに對して恐

る所なく、決然として起つたといふ事の上にあつた。漱石は三年間ロンドンに住んで、畢竟「彼等何ものぞや」といふ氣槪を持つ事が出來たが、日露戰爭は、日本が國運を賭して、その「彼等何ものぞや」の氣槪を、實地に示さうとしたものに外ならなかつたからである。そのロンドンから歸つて來てやつと一年立つた計りの時に、この戰爭が始まるといふ事になつたのだから、漱石がこの戰爭を、自分の體驗の象徵のやうに考へ、わが事のやうに感激し、日本が正正堂堂と戰つて正正堂堂と勝つ事を「八百萬神」に祈る氣になつたのは、極めて當然の事だつたと言つて可いと思ふ。

事實漱石は、單に『從軍行』のみならず、その後の作品のいろんな所で戰爭の問題に觸れてゐる。『猫』の中には、旅順陷落の事が書いてある。東鄕大將の率ゐる聯合艦隊がバルティック艦隊を全滅させた事が書いてある。沙河や奉天の戰爭の事が書いてある。日比谷公園の交番燒打の騷ぎが書いてある。是はほんのツマのやうなものに使つてあつたり、滑稽の爲に使つてあつたりするに過ぎないが、然し『琴のそら音』には、戰地へ行つた軍人の話が、相當重要なエピソードとして出て來る。『趣味の遺傳』には、凱旋兵士の出迎への描寫から始まつて、旅順の塹壕の中で暮してゐる浩さんと小野田博士の妹との戀物語が取り扱はれる。のみならず漱石は『滿韓ところ〴〵』の旅ででも、隨分熱心に、丁寧に、日露戰爭當時の旅順の地理・戰況の說明を聽いてゐ

るのである。かういふのは、曾て寺田寅彦が指摘したやうに、とかく際物を使はうとする、漱石の辯からも來てゐるに違ひないし、また光榮ある日本の戰勝を想起させる事によつて、日本人に「自信」と「自覺」とを喚びさましたいといふ、念願からも來てゐるのかも知れなかつたが、然し結局漱石が、深切にこの戰爭に興味を持ち、熱心に、丁寧に日日の戰況を貪り讀んだのみならず、それを相當具體的に頭の中に疊み込んでゐた事を前提とするのでなければ、到底出來た事ではなかつたのである。

同時にこの戰爭は、既に『從軍行』で象徵されてゐるやうに、漱石を飛躍せしめた。家庭的に惱まされ、經濟的に惱まされ、講義に惱まされ、世評に惱まされ、いろんな事で惱まされ續けてゐた漱石は、その惱ます事を蹴散らかして、「天外出頭」し、昂揚した氣持で創作に從事し始める。談話筆記『戰後文界の趨勢』で漱石が、戰後の文界は、この連戰連捷の結果を受けて、前途洋洋たるものがある、假令日本の過去に立破な文學はなかつたとしても、是からは立破なものが出來る、決して西洋に劣らない、西洋と十分角逐し得るのみならず、それ以上のものを出さうといふ「氣概」が、それを成就すると言つてゐるのは、寧ろ漱石自身の中にむづむづしてゐるものを、表現する。漱石の作品は、駸駸として日本が勝利を續けて行くただ中に於いて、それからそれへと矢繼早に發表された。もし日露戰爭がなかつたとしたら、當時果して漱石があのやうにきほつ

て物を書く事が出來たかどうか、疑問であると言つて可いほどである。

四　門下生

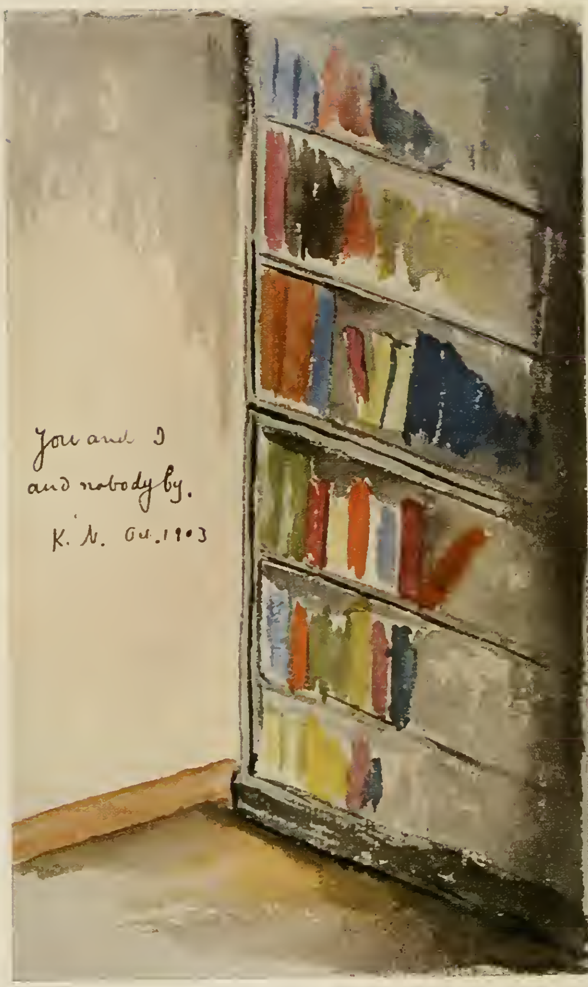
漱石の歸朝後、高濱虚子・坂本四方太など『ホトトギス』の同人たちが訪ねて來て、漱石に俳句・連句・俳體詩の類を作らせるに至つた事は、既に述べた。是が漱石の當時の心持に、慰藉を與へたものであつた事は、言ふまでもない。それとともに寺田寅彦・野野義郎・湯淺廉孫・野老山長角・野間眞綱・皆川眞拆・野村傳四など、熊本で教へた學生や、現在大學で教へてゐる學生が相次いで漱石を訪れ、漱石の門は次第に賑かになつた。漱石は寂しいが故に人懷こく、人懷こきが故に暖く、自分を慕うて集つて來るものを、「手を廣げて抱き締める」事はなかつたとしても、沁沁した暖いもので包んで、そのそばを立ち去り難くした。明治三十七年（一九〇四）七月二十日漱石は野間眞綱に宛てて、「俣野大觀先生卒業彼云ふ訪問は教師の家に限るかうして寐轉んで話しをして居ても小言を言はれないと僕の家にて寐轉ぶもの曰く俣野大觀曰野村傳四半轉びをやるもの曰く寺田寅彦曰く小林郁危坐するもの曰く野間眞綱曰く野老山長角」と書いてゐるが、漱石

は人を心置きなく寐轉ばせるやうなものを持つてゐたのである。

寺田寅彦の當時の日記を見ると、寺田寅彦などは、どうかすると、三日にあげず漱石を訪問してゐる。其所には「宗教論。亂れ髮の歌の話　歸りに門前のぬかるみに足を踏み込む」といふのがあるかと思へば、「虛子。四方太二氏來る。御土産なりとて團子持參す。文科學生某も來る能樂の話。故子規子の話。不折の話。文章の話。等　water color など見る。苺の御馳走あり」といふのがある。「學校なるマクスウエル傳持ち歸り夏目先生方へ持ち行く」といふのがあるかと思へば、「夏目先生を誘ひて白馬會。研精會。紫玉會。美術協會の繪畫を見る。靑陽樓にて晝食。田端へ散歩す。筑波園にて油繪のスケツチする男あり。拙劣見るに堪へず。花見寺には弓術の會あり。」といふのがある。勿論漱石は五高時代から寅彥を愛し、寺田君の答案を受け取る時だけ、先生はにこにことすると言つて、內丸最一郎を憤慨せしめたほどであつたには違ひないが、然しあれほど愼み深い寅彥をして、是ほど耽溺的に脚を運ばせたといふ事だけで、漱石の暖かさが、いかに人を牽いて已まない大きな力を持つてゐたかを、十分に物語るものであると思ふ。それだけに漱石の所には、訪問客が多かつた。然も漱石は、後に創作に從事し出し、講義と兩方で急がしくてたまらない時でも、客が來れば、必ずと言つて可い位、是に接した。明治三十八年（一九〇五）九月二十四日漱石は野間眞綱に宛てて、「小生日々來客責めにて何を致すひまもなく候然し

來客の三分二は小生にインテレストをもつて居る人々だから小生の方で逢ふとつい話しが長くなる次第必竟自分で來客を製造して自分で苦しんで居るに過ぎぬ愚見に候。夫故心ばかり狼狽して仕事は一向出來ず愛想がつき申候。」と書いてゐる。地位だの名聲だのではなく、純粋に「人」だけを愛し愛される事を欲した漱石は、地位も名聲も問題にしない、純粋に漱石の「人」だけを慕つて來る客を喜び、自分でも「心ばかり狼狽して仕事は一向出來」ない事を知つてゐながら、「つい話しが長くな」つて仕舞ふのである。もつとも是は、後に鈴木三重吉の發案によつて、明治三十九年(一九〇六)の十月中旬から面會日が定められ、木曜の午後三時以後をそれに宛てるといふ事になつたので、多少整理され、漱石の時間も無駄に潰されないやうになりはしたが、それでも初めの內は、木曜にも人が來れば、外の日にも人が來るといふ風に、ある意味では漱石は束縛を一つ餘計につくつたやうな結果を持たなければならなかつた。

漱石は人を刺激する事にも妙を得てゐれば、人から刺激を受ける事にも妙を得てゐた。是は漱石の頭が明敏で、相手の持つてゐる本質的な良いものを直ちに發見して、それが展開し得る可能性を尊敬する事が出來たせゐでもあるが、同時に漱石の頭が創造的で、他人の中の創造的な機能を、共に活動させるやうな、大きな力を持つてゐたせゐでもあると思ふ。然も漱石は、さうして他人の創造的な機能を活潑に運轉させるとともに、その活潑な運轉から、自分自身の創造への大



『ユー・エンド・アイ』水彩畫（明治三十六年）



『わが墓』水彩畫（明治三十六年）

きな刺激を受とつた。それは池田菊苗のやうな大きな刺激ではなかつたとしても、例へば自分の所に集つて來る若い門下生が、虚子・四方太を相手に試みる漱石の俳體詩などに刺激されて、さういふものを作る氣になるとすると、漱石は、それを或は激勵したり、或は『ホトトギス』に奬めたり、自分でいろいろと刺激しつつ、自分もまた其所から刺激を受け、その向うを張つて、ますますその中へ深入りして行くといふ類ひである。殊にそれが顯著に現はれてゐるのは、漱石の水彩畫であつた。

漱石の水彩畫がいつごろ始められたのか、はつきり分からない。然し今日保存されてゐる漱石の水彩畫の最も古い日附は、明治三十六年(一九〇三)十月である。是は或は寺田寅彦の刺激ではなかつたのかとも想像されるが、然し明治三十七年(一九〇四)以降、漱石と最も頻繁に自筆水彩畫繪はがきを交換した者が、橋口貢である所から考へると、重な刺激は、或は橋口貢から來てゐるのかも知れない。その漱石自筆の水彩畫繪はがきには、「是は久し振でかいたら無暗にきたたくなつた夜だか晝だか分らないから(春日影)とかいた」だの、「繪葉書はやめにしやうと思つたが又謀叛心を出して此度は自製ならぬ一枚八厘のやつを十枚許買つて來ました其二枚へ少し風替りのものを書いたから送ります素人くさい處が好い所です褒めなくてはいけません」だの、「此は紅葉の精に候無暗に赤くて大俗極まる所が却つて雅趣ある所に候繪畫の戸迷ひしたる如き畫端書に

候」だの、「此畫は昨日も一枚書いて橋口に送つた兩方共同様の出來である／後世の好事家一方を見て贋物といふ重野成齋なるものあり兩方共うそなりといふ漱石といふ發句を作る人は居るが端書に畫をかいた漱石とは別人である云々」だのとあつて、畫をかく事が、さうしてかいた畫を見て、自分でいろんな批評を加へたり連想を逞うしたりする事が、樂しくてたまらないといふやうな、それだから自分も一つ畫をかき、かいた畫を見ていろいろ批評したり連想を逞うしたりして見たくて堪らなくなるやうな、不思議な力を持つた文句が書いてある。かういふ繪はがきをもらつたら橋口貢でも寺田寅彦でも、又すぐ何かかいて漱石の所に送らなければゐられなくなつたに違ひない。然も漱石は、此所で「褒めなくてはいけません」と言つてゐるやうに、また「君から貰つた紙へ君から貰つた筆を以て君から授かつた法を實行してかくと斯様なものが出來る才子は違つたもので一時間許り稽古するとすぐ此位になるうまいものでせうほめてくれないと進歩しない」（三七・七・一八）と言つてゐるやうに、褒める事の必要と褒め方の技術とを心得てゐた。さういふと語弊があるが、煽動する事が旨かつた。それだから漱石は、「先達の君の發句は中々面白いうまいものだちと再興してやり給へ虚子に見せたらほめた」だの、「君の連句を高濱に送りほとゝぎすへ載せる事にした今度のに出るよ見給へ「諸國一見」の句は甚だ佳と思ふ」だの、「君中々見込がある少し發句をやり給へそして君の令弟にも是非勸めてくれ給へ、わけはない少しや

るとぢき上手になる、畫の趣味のある人が發句をやつて發句的の趣味を西洋畫でかいて貰ひたい、／＼白馬會に一人位發句をやる人があつてもよからう」だの、「先達は譯文の俳體詩御送拜見致しました處があれは白芙蓉のよりも甚だ劣りて見ゆる様なり翻譯なんどは駄目だから創作をどし／＼やつて送り玉へそうして俳體詩の大家になるさ……近頃尼が尼になる來歷の長い奴を俳體詩で虛子と試みて居るが中々困難でちつとも進歩しない、こんだ君と遠足でもして俳體詩の記行文でもやらうではないか、」だの、と、實に巧妙な、然し決して御座なりでもなく、また決して善惡無差別でもなく、灸所を外さない鼓舞を、多くの門下に向つて試みてゐるのである。

明治三十九年(一九〇六)五月十九日漱石は虛子に宛てて、「卒業論文をよんで居ると頭腦が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たくなります。決して猫や狸の事は考へられません。僕は何でも人の眞似がしたくなる男と見える。泥棒と三日居れば必ず泥棒になります」と言つてゐる。同じ年の七月三日、同じ虛子に宛てて、「實は論文的のあたまを囘復せんため此頃は小說をよみ始めました。スルと奇體なものにて十分に三十秒位づゝ何だか漫然と感興が湧いて參り候。只漫然と湧くのだからどうせまとまらない。然し十分に三十秒位だから澤山なものに候。此漫然たるものを一々引きのばして長いものに出來かす時日と根氣があれば日本一の大文豪に候。此うちにて物になるのは百に一つ位に候。草花の種でも千萬粒のうち一つ位が生育す

るものに候。然しとにかく妙な氣分になり候。小生は之を稱して人工的インスピレーションとなづけ候。小生如きものは天來ノインスピレーションは棚の御牡丹と同じ事で當にならないから人巧的ニインスピレーションを製造するのであります。」と言つてゐる。理解の幅が廣く、且つ理解したものへすぐ同化する事の出來る、センシブルな頭を持つてゐた漱石は、何か人の書いたものを見さへすれば、それに添うて自分の頭の中のさういふものが動き出し、自分も何かむづむづして來るのだから、假令相手となつた世界は大した値うちを持つてゐないものでも、それは漱石に對して、十分の刺激になる事が出來た。まして漱石の周圍に集つたものは、寺田寅彥・橋口貢・野間眞綱・皆川眞拆のやうな、若若しい、藝術的情熱に燃えてゐる、青年である。漱石は自分の創造的な世界で、それらの青年に刺激を與へ、更にそれらの青年の創造的な世界から刺激を受けて、次第次第に創作的氣分を濃厚にし、遂に一方では『ホトトギス』の爲に『吾輩は猫である』第一を書き、一方では『帝國文學』の爲に『倫敦塔』を書き、今迄腹の中に蓄積してゐたものを、一度にどつと吐き出し始める。それとともに寺田寅彥・野間眞綱・野村傳四、少し遲れては、鈴木三重吉・森田草平・野上八重子などが、次第に頭角を現はし始める。何かきつかけがありさへすれば、今にも爆發しさうになつてゐた漱石の創作的氣分は、勿論門下生のさういふ活動がなくても、いつかは堰を破つて外に溢れ出たには違ひないが、然しこの活動が一つの雰圍氣と

して、漱石の爆發を促進する上に與つて力があつた事は爭はれない。特に「ほめてくれないと進歩しない」と言つた漱石に、漱石の書くものを無條件で歡迎したやうなこの雰圍氣は、漱石をして矢繼早に創作を發表させる上に、相當重要な役割を演じてゐると言つて可いのである。

四五 『吾輩は猫である』

漱石が書き遺した明治三十七八年ごろの「斷片」第七の中に、「K君は近頃頻りに水彩畫の稽古をして居る」といふ句で始まる文章がある。それには「K君の畫題は得意もなければ苦手と云ふ程な者もない何で〔も〕手近にある者（K君は至つて無精者であるから）を手當り次第に畫いて面白がつて居る然し近來は漸々傾向が定まつて矢鱈には筆を著けない、K君は始め畫をかゝうと思つて友人B君の處へ行つて先づ何をかいたも〔の〕だらうと　するとB君はアンドリやデルサルト畫を學ぶなら何でも自然其物を寫せ天に星辰あり地〔に〕露華あり飛ぶに禽あり走るに獸あり池に金魚あり枯木に寒鴉あり自然〔は〕是一幅の大活畫なりと云ふといゝ加減な事をいふとK君は眞面目になつてアンドリやデルサルトがそんな事を云ふたかい　先第一に何をかゝうと思つて家へ歸つて書齋へ這入て考へて居ると向ふの垣根の上に隣の三毛猫が寐て居たK君こゝだと合點してすぐに紙を展べて彼の猫の寫生〔を〕始めた先づ耳をかき胸をかき夫から胴の圍りを茶色に塗る處で

肝心の猫は伸をしてあくびをしてのそ〳〵垣根を下りて隣の家へ歸つて仕舞たK君は九仞の功を一簣に缺いたのを轉た殘念に思つたが仕方がない夫より猫は險呑だからといふので決してかゝない」といふ一節や、その後K君が車屋の子の八つちやんに五錢の白銅を一つやつて、モデルになつてもらひ、それをB君の所へ見せに行く、「見ると顏と覺しき處に鼻はなくて風穴の樣なものが二つ開いて居る其周圍はセピヤで眞黑に塗つてある夫から衣服は繪具箱にある繪具を一色づゝ公平に分配したといふ樣な」色で一向何だか分らない背景には猫が逃げだした例の垣根を無遠慮な太い線であらはして居る濃淡もなければ遠近もない／「一體君是は何だ」とBは冷笑の意味を以て問ふた／「夫や筋向の車屋の子だよ」とK君は濟して答へた／「車屋の子はいゝがこんなものは繪にやならないよ、第一此顏の色を見給へ人間の色ぢやない眞黑ぢやないか」／「車屋の子だもの」と平氣である。「著物抔の汚ない色だ事」／「それも車屋の子だから仕方がない」／「車屋の子であると否とを問はず是は駄目だ遠近も濃淡もない英語で所謂ドーブなるものだ／車夫の子としても駄目かなとK君は問ふ何人の子でも駄目だといふ事を聞いてK君は憮然として去つたが夫から人間の寫生を斷念して仕舞つた。」といふ一節がある。是は言ふまでもなく、その前の「新體詩」と題する「斷片」第六、もう一つ前の「我輩の向ふの家に○○といふ書生の合宿所がある」で始まる「斷片」第五とともに、『吾輩は猫である』の習作である。此所から多くのもの

だ、そのままの形か或は加工されて、『猫』の中に用ひられてゐる。
例へば「斷片」第五の中の「駄目だーな、とても折れねーや」「うむとても折れねー」「何にもう直に折れるよ大丈夫だ」などといふのは、落雲館の生徒によつても使はれてゐるし、苦沙彌先生を調戯する車屋の一族によつても使はれてゐる。書生と下女との會話を一一皮肉に批評して行く手法は、多少趣を異にするが、猫が金田夫婦の會話を批評したりする所のみならず、迷亭が寒月の演說を批評する所にも、苦沙彌が迷亭の手紙を讀む所にも――否、『猫』全體を貫ぬく最も顯著の手法の一つが是であるとも、言ふ事が出來る。「斷片」第六の「新體詩」では、やつつけられるものが他人ではなく、自分卽ち「主人」で、その點で是は「斷片」第五と對立する。然も「斷片」第五の會話と會話との間に挾まれる奇警で皮肉な批評が、此所では、切れ切れでなく、寧ろ纏まつたものとして、前景に押し出される。その點で是は猫自身の氣燄を思ひ出させるものを持つてゐるが、『猫』では、此所の「客」が、「斷片」第七の「B君」とともに、一箇の性格に纏め上げられ、それが迷亭と名づけられるのである。同時に此所の「主人」は、「斷片」第七の「K君」とともに、亦一箇の性格に纏め上げられて、苦沙彌と名づけられる。さうして苦沙彌と迷亭との關係は、常に、此所の「主人」と「客」、「斷片」第七の「K君」と「B君」との關係であつた。事實また『猫』の中の迷亭は、多少言葉に相違はあり、また使ふ場所も違つてはゐるが、此

所の「客」の「先づ是等は進めや進めと敵は幾萬の間に寐轉んで居て此日や天氣晴朗と來ると必ず一瓢を腰にして瀧の川に遊ぶ類」だといふ言葉を、殆んどそのまま使つてゐるのである。迷亭が苦沙彌の『巨人引力』だの『空間居士墓銘』だのを批評する氣合も、亦是と全く同じ氣合であつた。「斷片」第七は、更に一歩『猫』に近づいてゐる。『猫』第一には、水彩畫を稽古する主人に、アンドレア・デル・サルトの言葉だと言つて、「天に星辰あり地に露華あり……」といふ出鱈目を教へ込む、友人の美學者が出て來る。『猫』の「主人」はK君のやうに、車屋の子の寫生はしなかつたが、然しアンドレアの言葉といふのを聽いて、猫を寫生する。それを猫が見て、恰も「B君」のやうに、さんざ罵倒したあとで、「兩足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸を」する。

殘念な事は、この「斷片」第七がいつごろ書かれたものであるか、まるで見當がつかない事である。然し此所に書かれてゐる水彩畫の稽古が、『猫』第一の、言はば中心になつてゐる點から言つて、是は『猫』が書かれる、ほんの少し前に書かれたものではないかと、想像する事が出來なくもない。然し漱石が水彩畫の繪はがきを、橋口貢や寺田寅彦などと特に頻繁に交換してゐたのは、明治三十七年の夏休みで、その惰性が十二月まで續き、十二月一日の繪はがきには、「是はミレの尼の鸚鵡を勝手に寫したらこんな頓ちんかんなものになつたのです」とあり、十二月七日の

繪はがきには、「是は例の如く亂暴な畫なり然し傑作とほめてくれゝば結構也」とあり、十二月十二日に至つて、「近頃多忙で畫をかくひまがない。皆舊作です」とあつて、十二月十二日のころは、或は『猫』第一を書いたあとで、『倫敦塔』の趣向を立ててゐたころではないかと想像される節がなくもないのだから、この「斷片」は事によると十一月前後に書かれたものなのかも知れない。――主人が水彩畫の稽古をしてゐる。友人のBがアンドレア・デル・サルトの言葉を教へる。主人はそれに感じて、猫を寫生する。猫は途中で「伸をしてあくびをしてのそ〳〵」行つてしまふ。已を得ず主人は、今度は車屋の子を寫生する。それは然し、「顏と覺しき處に鼻はなくて風穴の様なものが二つ開いて居る其周圍はセピヤで眞黑に塗つてある夫から衣服は繪具箱にある繪具を一色づゝ公平に分配したといふ様「な」色で一向何だか分らない」、Bの言葉を借りれば「遠近も濃淡もない英語で所謂ドーブなるもの」に過ぎなかつた。――實際『猫』になるには、ほんのもう一歩である。

もつとも端で考へれば、ほんのもう一歩に過ぎないが、然し此所で寫生の材料に使はれてゐる猫が、物を言ひ出し、自分を寫生する人間の手際を批評するのみならず、自分から「吾輩は猫である」と名のりを上げて、自分の生ひ立ちから、自分が現在の家に育てられるやうになつたいきさつを述べ、自分達の仲間のみならず、自分が飼はれてゐる家の主人や妻君や子供や下女の日常

生活の批評までする、——さういふ猫を創造するといふ事は、まつたく天外の奇想で、少し位工夫を凝した所で、到底出て來やうのない構想であつたには違ひないのである。勿論西洋にも日本にも是に似た構想がない譯ではなかつた。現に漱石自身談話筆記『滑稽文學』の中で、「十八世紀の頃一人が錢のアドヴェンチュアを書くと今度はそれをまねて着物のアドヴェンチュアを書くものが出來る。其他いろいろそれに類似したものを多勢が書く様になる」とも言つてゐる。明治の初めにも『一圓紙幣の話』などといふのさへある。然し『猫』は、さういふのよりも百尺竿頭一歩を進めて、作者が苦沙彌になつたり、迷亭になつたりするとともに、猫にもなり、人間でないもの、もしくは人間以上の立場から、豐富な知識と高邁な見識とによつて、苦沙彌・迷亭などの篇中の人間のみならず、一般の人間や一般の社會を縱横無盡に批評しまくるのである。換言すれば、『猫』の中の猫は、單なる傍觀者ではなかつた。一箇の性格を賦與された登場人物として、一定の論理と一定の主義との下に、議論を上下し、見識を示し、善惡正邪の判斷を、はつきり讀者の頭に叩き込む、作者の代辯者なのである。勿論この猫にも弱點はあつた。さうしてその弱點の故にこの猫は、雜煮を喰つて踊つたり、虎になつた夢を見て蹴飛ばされたり、自分を東郷大將に比して鼠から喰ひ下がられたり、仕舞にはビールに醉つ拂つて甕の中におつこつたり、『猫』の中で、また相當滑稽な場面を開展するのであるが、然しそれは結局作者漱石が、自分を猫の立場

だけに置かず、遙か猫をはみ出した所に坐つてゐる事を證明するもので、その爲めこの猫が、獨特の見識と獨特の批評を具へて、社會及び人間に對してゐる事が、少しも傷つけられるものではない。――さういふユニークな作品となるべきものの基礎を置いた『猫』第一に錬り上げられる爲には、漱石は「斷片」第五・第六・第七の場よりも、もつと違つた場に住んでゐる必要があつた。卽ち人生觀の上でも藝術的の上でも、更に飛躍する必要があつた、とも言ふ事が出來るのである。それには「斷片」第七の成立月日が明確にされる必要があるのであるが、殘念にもそれが分からない。

もつとも漱石は初めは『猫』を『猫』第一だけで讀み切りにする積りだつたのださうである。然し第一に對する周圍の評判が割によかつた爲に、漱石も氣乘りがするし、『ホトトギス』の編輯者も頻に續稿を書き繼ぐ事を勸めるので、漱石は第二を書いた。それでもまだ漱石は、その先きを書き繼ぐ意志はなかつたらしく、全體の構造も、第一の場合と同じやうに、首尾を整へた構造――漢詩で言へば、ちやんと起承轉合の法に叶つたやうな構造が與へられてゐるのみならず、「第二」もしくは「二」と書く代りに、「續篇」とさへ書いた。然るに『猫』第二が出ると、今度は世間が騷ぎ出した。さうなると、漱石も『ホトトギス』の編輯者も、更に乘り氣になつて來た。其所で第三が續いて書かれ、第四が書かれ、第五・第六・第七と、到頭第十一まで續けられた。

さうしてそれは明治三十八年（一九〇五）一月から始まつて、飛び飛びではあつたが、一年有半、明治三十九年（一九〇六）九月に終るのである。從つて漱石の『猫』がユニークな作品として、その『猫』らしさを發揮するのは、『猫』第一そのものであるよりも、第二・第三以下であり、その意味で『猫』第一はそれほど驚くべき創造でもないと言はれ得なくもないが、然し假にその說が正しかつたとしても、さういふ第二・第三以下を容れ得る器物（うつはもの）としての、『猫』第一が創造されたといふ事、換言すれば、その中に入れようとさへ思へばどんなものでも容易に入れる事の出來る、表現形式として實に自由自在な、のみならず卓拔奇警な表現形式が創造されたといふ事は、漱石の詩的幻想の饒かさと藝術的工夫の新しさとを證明するものに違ひなかつたのである。——自分に最も自然で、適切で、自由で、自分の言ひたい事を勝手にどしどし言ふ事の出來る、表現形式を發見するといふ事、のみならず是までの文學の世界で類のない、また人が眞似ても眞似やうのない表現形式を發見するといふ事は、科學上の大發見にも比較されべき大發見である。その發見者がそれだけの榮譽を贏ち得るのは、當然すぎるほど當然の事であつた。『猫』は漱石を有名にしたが、その有名にした根本の理由は、實は一に漱石のこの、表現形式の發見にかかつてゐるのである。明治三十八年三月號の『第一高等學校校友會雜誌』に出た『俺の記』、同じ年の四月號に出た『吾輩も猫である』を始めとして、その後あらゆる種類の「吾輩物」が輩出したのは、『猫』

がいかに世間的に人氣があつたかを證明するとともに、『猫』の表現形式がいかに科學上の大發見に比すべきであつたかを證明する。

談話筆記『處女作追懷談』の中で、漱石は「私が日本に歸つた時(正岡はもう死んで居た)編輯者の虛子から何か書いて吳れないかと囑まれたので、始めて『吾輩は猫である』といふのを書いた。所が虛子がそれを讀んで、これは不可ませんと云ふ。譯を聞いて見ると段々ある。今は丸で忘れて仕舞つたが、兎に角尤もだと思つて書き直した。／今度は虛子が大いに賞めてそれを『ホトヽギス』に載せたが、實はそれ一回きりのつもりだつたのだ。ところが虛子が面白いから續きを書けといふので、だん／＼書いて居るうちにあんなに長くなつて了つた。といふやうな譯だから、私はたゞ偶然そんなものを書いたといふだけで、別に當時の文壇に對してどうかうといふ考も何もなかつた。たゞ書きたいから書き、作りたいから作つたまでで、つまり言へば、私があゝいふ時機に達して居たのである。もつとも書き初めた時と、終る時分とは餘程考が違つて居た。文體なども人を眞似るのがいやだつたから、あんな風にやつて見たに過ぎない。」と言つてゐる。

高濱虛子の『漱石と私』の中には、「此頃われ等仲間の文章熱は非常に盛んであつた。殆ど每月のやうに集會して文章會を開いてゐた。それは子規居士生前からあつた會で、「文章には山がなくては駄目だ。」といふ子規居士の主張に基いて、われ等はその文章會を山會と呼んでゐた。その山

會に出席するものは四方太、鼠骨、碧梧桐、私などが主なものであつた。從來芝居見物などに誘ひ出す度びに一向乘り氣にならなかつた漱石氏が、連句や俳體詩には餘程油が乘つてゐるらしかつたので、私は或時文章も作つてみてはどうかといふことを勸めてみた。遂に來る十二月の何日に根岸の子規舊廬で山會をやることになつてゐるのだから、それまでに何か書いてみてはどうか、その行きがけにあなたの宅へ立寄るからといふことを約束した。當日、出來て居るかどうかをあやぶみながら私は出掛けて見た。漱石氏は愉快さうな顏をして私を迎へて、一つ出來たからすぐこゝで讀んで見て吳れとのことであつた。見ると數十枚の原稿紙に書かれた相當に長い物であつたので私は先づ其分量に驚かされた。それから氏の要求するまゝに私はそれを朗讀した。氏はそれを傍らで聞き乍ら自分の作物に深い興味を見出すものゝ如くしば〳〵噴き出して笑つたりなどした。私は今迄山會で見た多くの文章とは全く趣きを異にしたものであつたので少し見當がつき兼ねたけれども、兎に角面白かつたので大に推賞した。氣のついた缺點は言つて吳れろとのことであつたので、私はところ〴〵贅文句と思はるゝものを指摘した。氏は大分不平らしかつたけれども、未だ文章に就いて確かな自信がなく寧ろ私を以つて作文の上には一日の長あるものとして居つたので大概私の指摘したところは抹殺したり、書き改めたりした。中には原稿紙二枚ほどの分量を除いたところもあつた。それは後といはず直ぐ其場で直ほしたので大分時間がとれた。私

がその原稿を携へて山會に出たのは大分定刻を過ぎてゐた。／この「我輩は猫である」――漱石氏は私が行つた時には原稿紙の書き出しを三四行明けたまゝにして置いて、まだ名はつけてゐなかつた。名前は「猫傳」としようか、それとも書き出しの第一句である「吾輩は猫である」を其儘用ひようかと思つて決しかねてゐるとの事であつた。私は「吾輩は猫である」の方に賛成した。――は文章會員一同に、「兎に角變つてゐる。」といふ點に於て讃辭を呈せしめた。さうして明治三十八年一月發行の『ホトトギス』の巻頭に載せた。此一篇が忽ち漱石氏の名を文壇に嘖々たらしめた事は世人の記憶に新たなる所である。」と書いてゐる。

虚子がいろいろ言つた爲に、漱石は『猫』第一の方方を、抹殺したり書き改めたりして、「中には原稿紙二枚ほどの分量を除いたところもあつた」といふが、元の形がどういふものであつたか、今日からは分からない。或はその中には、「斷片」第五・第六・第七などが、もつと濃厚に取り入れられてゐはしなかつたのかとも想像されるが、それも元より分からない。ただ我我が『猫』を見て先づ感じる事は、『猫』第一と『猫』第二以下との、著しい感じの相違である。『猫』第二以下は奔放自由を極めるが、それに比べると第一は、何か愼ましやかで、をどをどしたものを持つてゐる。是は漱石が、初めてかういふ種類の作品を書いて、世の中に出す爲に、妙に堅くなつたせゐもあつたのかも知れないが、然し漱石は既に歸朝した年の六月の『ホトトギス』に、底には

苦苦しい氣分を湛へてはゐるが、うち見た所潑剌とした才氣を示してゐる、『自轉車日記』を發表してゐるのである。此所で漱石が、急にいぢける筈がない。是は恐らく「今迄山會で多くの文章とは全く趣きを異にしたものであつたので少し見當がつき兼ねた」虛子が、それでも自分の信じる所を言ひ、自分の趣味に合ふやうに、方方抹殺させたり、書き改めさせたりしたせゐであるに違ひない。第二以下は無論漱石は、自分の書きたい事を書き、虛子を呼んで朗讀してもらひ、多少の助言を受け自分も少しは手を入れたかも知れないが、大抵虛子はそれをそのまま印刷に廻したのである。

漱石が談話の中で、「書き初めた時と、終る時分とは餘程考が違つて居た。」と言つてゐる事は、無論この『猫』第一と『猫』第二以下との、文章の感じの相違を説明するものではなかつた。是は言ふまでもなく漱石が、『猫』を書き始めた時と書き終つた時とでは、創作の目的が、創作の態度が違つてゐたといふ事を意味する。漱石は既に明治三十八年（一九〇五）二月七日寺田寅彦に宛てて、"Dynamic Law on Mr. K. Natsume" と題し、「漱石が熊本で死んだら熊本の漱石で。漱石が英國で死んだら英國の漱石である。漱石が千駄木で死ねば又千駄木の漱石で終る。今日迄生き延びたから色々の漱石を諸君に御目にかける事が出來た。是から十年後には又十年後の漱石が出來る。俗人は知らず漱石は一箇の頑塊なり變化せずと思ふ。此故に彼等は皆失敗す。漱石を

知らんとせば彼等自らを知らざる可らず　這般の理を解するのは寅彦先生のみ　恐惶謹言」と書いてゐるやうに、目ざましく進展して止まず、決して一つの場にじつと止まつてゐなかつた。芭蕉の言葉を借りれば、「不易」を攫んで、絶えず「流行」するのである。『猫』が繼續した一年半の間に、漱石の考へが次第に變化し、書き始めと書き終りとでは、相當違つて見えるのも、當然の事であつた。

勿論漱石はその相違がどういふ點にあるといふ事を、はつきり説明してゐない。從つてそれは我我の忖度に委ねられてゐるのであるが、然し『猫』第一・第二・第三と、『猫』を順順に點檢して行つて、それそれのものを支配してゐる漱石の態度を注意して見ると、漱石は樂しみに『猫』を書くといふ事から、樂しむだけでは滿足が出來ず、それによつて直接に社會に働らきかけようとする事に移つて行つてゐる。勿論それは徐徐に移つて行つてゐるのである。急激な變化は全體としての感じの統一を紊亂する。從つて何所からがさうだと、はつきり區切をつける事は出來ないが、然し明治三十九年(一九〇六)一月の『ホトトギス』に發表された『猫』第八は、既にその方向に向かつて傾斜し始めてゐる。漱石はそれまで世の中の愚な事に愛想をつかして、その世の中から抜け出てしまひ、さういふ愚な事を吹いて吹いて吹き飛ばす風になつたやうな心持で、『猫』で逍遙游を試みてゐたのが、次第にその逍遙游は、何か卑怯な、腰抜のする事で、世の中

を輕蔑し、世の中を憎むほどなら、男らしくその世の中に働らきかけて、世の中の性根を叩き直すべきであるといふやうな考へ方が、強くなつて來たもののやうに見える。――それが漱石の、『猫』を「書き始めた時」と書き「終る時分」とは「餘程考が違つて」來たといふ、變化に相違ないのである。明治三十八年十二月三十一日漱石は鈴木三重吉に宛てて、「早稻田文學が出る。上田敏君抔が藝苑を出す。鷗外も何かするだらう。ゴチや／＼メチや／＼其間に猫が浮きつ沈みつして居る。中々面白い。猫が出なくなると僕は片腕もがれた様な氣がする。書齋で一人で力味んで居るより大に大天下に屁の様な氣燄をふき出す方が面白い。」と書いてゐる。明治三十九年一月三日には小島武雄に宛てて、「本年より早稻田文學藝苑其他にて文壇も大分賑やかになり候。其間に立ちて出頭沒頭の陋態を極め候事大悟の達人より見ば定めし可笑しからんと折々は自らさへも失笑致候」と書いてゐる。「屁のやうな氣燄」と言ひ、「出頭沒頭の陋態を極め候事大悟の達人より見ば定めし可笑しからんと折々は自らさへも失笑致候」と言ふのは、漱石が既に自分で「昨日の我に飽」きたのだといふ事を示唆する。何かしら新しい境地へ飛び移らうとしてゐるといふ事を示唆する。

勿論漱石は『猫』で、純粋に逍遙游を試みたのではなかつた。その點から言へば、『猫』の一系列と竝行して書かれた『倫敦塔』や『幻影の盾』や『薤露行』などの、漱石のロマンティックな詩

を發揮した小說の一系列の方が、もつと純粹に逍遙游を試みてゐるのだと言へる。然し『猫』を書き出した時分の漱石には、自分自身への諷刺や社會全體への諷刺もあるにはあるが、それとともに、苦沙彌や迷亭や寒月や、さういふ人人によつてつくられる、淡泊で、正直で、御世辭もなければ掛引もない、嘘もなければ小刀細工もない、自然で、自由で、勝手な事を言ひ、勝手な事をし、それで互に奧の方の暖いもので繫がり合つてゐる、世外の生活——漱石の言葉を借りれば、「太平の逸民」の世界に住んで、こせこせねちねちした世の中を、笑つて笑つて笑ひぬく事が、逝に樂しい事のやうに考へられてゐたらしいのである。例へば明治三十八年三月十一日野村傳四宛の手紙の中で、漱石は「虛子が猫をよむ僕がきく二人でげら／＼笑つて御蔭で腹がへつた。」と言つてゐる。然し是はその後、例へば『猫』第八の落雲館事件や、それに引き續いて出て來る「逆上」鎭壓法の問題などになると、をかしいのは正にをかしいのには相違なかつたが、然しその笑ひは、決して「げら／＼笑つて御蔭で腹がへつた」といふやうな笑ひではなかつた。それは何か不愉快でたまらないものが奧に蟠つてゐる事を人に感じさせる、從つてどうしてもさう朗かには笑はせてくれない、苦味を持つた笑に變化してゐるのである。『猫』第九で、主人公の苦沙彌が、前回の「逆上」の餘波を受けて、自分は或は氣が違つてゐるのではないかと、外の人と自分とをいろいろ比較して見たりする所でも、是を『猫』第二・第三などの調子に比較して、い

かに全體が沈鬱な底流に貫ぬかれ、從つて全體に遙に多くの苦苦しさが加はつて來てゐるかは、誰にでもすぐ氣がつくに違ひない。『猫』第十で馬鹿竹が問題にされてゐるのでも、或はまた中野武右衞門君が問題にされてゐるのでも、同樣である。然も『猫』第十は、漱石の道義的肝癪を、最もエレメンタリーに、最も直截に破裂させた、『坊つちやん』と同時に發表された。『猫』第十一では、漱石は、女性一般を論じ、箇性を論じ、二十世紀の文明を論じ、それと神經衰弱との關係を論じたが、さうして一終りの方の文明の議論が人によつて調子が變つてゐない。迷亭が喋舌つても苦沙彌が述べても同じ語氣」で、ちつとも箇性が出てゐないと寺田寅彦から非難され、漱石はその非難を承服しなければならなかつたが、然し、假令その非難は正鵠を射たものであつたにしても、さういふ箇性化を企てる餘裕を持つ事が出來なかつたほど、それほど漱石は、二十世紀の文明を論じ、女性を論じ、箇性を論じ、神經衰弱を論じる事に一向きになつてゐたのだと、解釋する事も出來るのである。

四六　ロマンティシズム

漱石は『猫』の一系列を書いて行くとともに、それと竝行して、『倫敦塔』以下の、美しい短篇の一系列を書いた。この事は誰でも知つてゐる。現實を輕蔑し現實を憎むが故に、現實の顏を歪めて見せ、その歪んだ所を笑つて樂しむやうな態度を、漱石は『猫』で示してゐるが、然し漱石は、それだけでは滿足する事が出來ず、一方では、到底現實には見る事の出來ない、さまざまに美しい夢の世界を創造し、それを鏤心彫骨して描き上げ、此所に美しいものがあると、世間に向かつて高高と揭揚する。生れながらに美しい世界を多分に賦與されて來た漱石は、現實の中に住んで、ともすると自分の中のその美しい世界が打ち碎かれさうになる事を嘆き、一方醜い現實を更に醜いものとして表現する事によつて、現實に對する防壁を築き、一方さういふ現實が近寄る事の出來ない遐かな所へ、詩の國・夢の國を建設して、その自分の中の美しい世界を護り通さうとするのである。

明治三十六年十一月二十七日、『漱石の思ひ出』によると、「さきにいくらか愁眉をひらいたのもあだとなつて、又ぞろ前にも増して雲行きが險しくなつて」來たといふ時分、漱石は“I looked at her as she looked at me:／We looked and stood a moment,／Between Life and Dream,／／We never met since:／Yet oft I stand／In the primrose path／Where Life meets Dream.／／Oh that Life could／Melt into Dream,／Instead of Dream／Is constantly／Chased away by Life!”といふ詩を作つた。是が堪へ難い家庭の荒涼から來たものかどうか、さうしてこの“she”が現實の女、「銀杏返しにたけながをかけ」た、漱石の初戀の女であるかどうかは分からないが、然し是が、少くとも、自分の「夢」が「生活」から追ひまくられて、自分があるく「花野の路」を暗くする事を悲しむ歌である事には、論がない。『倫敦塔』以下の一系列の短篇は、言はばこの「花野の路」の奪還である。

プラトーンの『饗宴』の中で、罪を犯した男女が、神から半分半分に截り放されて、自分の半身を戀ひ、それが目つかると、どんな障害を冒しても一緒にならうと、藻搔き足搔くといふ事が、アリストファネスの口から述べられる。漱石が堪へ難い家庭の荒涼に惱まされて、自分は自分に定められた半身と夫婦になつてゐるのではないと、感じたものかどうかは分からない（然し『行人』の一郎は、さう考へてゐる）が、然し漱石が、これらの短篇の多くのものに於いて、鐵が磁

石に惹きつけられるやうに、たつた一目顔を見合せただけで一生を賭する、運命的な戀愛、もしくはその可能を、換言すれば、「靈の感應」、もしくはその可能を描いてゐる事だけは、確實であつた。『幻影の盾』がさうである。『一夜』がさうである。『薤露行』がさうである。『趣味の遺傳』がさうである。『琴のそら音』が、ある意味に於いてさうである。『猫』第六の迷亭の初戀の話が、亦ある意味に於いてさうである。取り扱ふ角度が違ひ、取り扱ひ方の輕重も違ひ、化粧のさせ方も違つてゐるが、然しこれらの短篇の多くが常にこの一點を樞軸として廻轉してゐる所を見ると、どうしても漱石は、かういふ「夢」が自分に展開してくれる「花野の路」によつて、自分の「生活」の堪へ難さに、纔に寛ろぎをつけてゐたものに違ひないと、想像せざるを得なくなる。少くとも漱石は、これらの短篇を書く事によつて、竝びに『猫』を書く事によつて、嚢の中に這入つてゐるやうな息苦しさから、救はれる事が出來たのである。漱石の生活は、「花野の路」ではないまでも、明るくなつて來た。

例へば明治三十八年(一九〇五)一月一日漱石は野間眞綱に宛てて、「猫傳をほめてくれて難有いほめられると増長して續篇續々篇抔をかくきになる實は作者自身は少々鼻について厭氣になつて居る所だ讀んでもちつとも面白くない陳腐な戀人の顏を見る如く毫も感じが乘らない。……猫傳中の美學者は無論大塚の事ではない大塚はだれが見てもあんな人ぢやない。然し當人は氣をま

はしてさう思ふかも知れぬがそれは一向構はない。主人も僕とすれば僕他とすれば他どうでもなる。兎に角自分のあらが一番かき易くて當り障りがなくてよいと思ふ。人が惡口を叩かぬ先に自分で惡口を叩いて置く方が洒落てるぢやありませんか」と書いてゐる。同じ年の一月二十日皆川正禧宛の手紙には、「倫敦塔の御批評難有候實は稿を草する折は多少逆上の氣味にて自分でも面白いと思候處脱稿の上通讀したらいやな處が多く且今一いきと云ふ所で氣が抜けて居る樣で我ながらいやに成つて居たのです。然る所本日奇瓢先生から手紙をくれて大變ほめてくれたので又少し色氣が出た處へ君の端書が來たものだから當人大得意で以前の逆上に戻りさうに成つて來ました。／ダンテの句は仰せの如く故意とらしく候。あれはあまり句が長すぎる爲もあります何だか知つて居る事を氣取つて無理に插入した樣な感じがある。少し氣ざと思ふ。あの句を二句位につめれば色彩として存してもよからうと思ふ如何。番兵を褒めてくれ手はないと思つて居たら飛んだ處から喝采が出て大に面目を施こす譯です。首斬りの段は一番面白いかね。僕自身あすこが一番よく書けたとも思つて居らん。／倫敦塔で君を免職させるのは御氣の毒だから當分君を寐過させる樣なものはかゝない積りに候。二月のほとゝぎすには猫の續きが出ます是は健康に害のある程のものではないから讀んで下さい」とある。二月九日の野間眞綱宛の手紙には、「今日から三日間學校をやすんだよ。別段病氣でもないがまづ病氣の心持で居るそれで萬事自ら病人風に所置す

る積りで晝は牛乳と玉子で間に合せたら三時頃腹がへつて驚いた。矢張無病だと見える。まぼろしの楯といふ文章をかゝうと思つて大體趣向は出來たがうまく行きさうにない。僕は贅澤であの字はいや此句はいやと思ふものだから容易に出來ん苦しい。今日は朝からかく筈の處を色々雜用で晩に一ページ許りかいたらどうも氣に入らんからやめた。出來上つたら見て批評してもらはう／傳四の二階の男はまだ見ないみんな何でも蚊でも書いて〳〵世間を壓倒すればいゝ君も何でもいゝからやり給へ。」とある。二月十三日寺田寅彦宛の葉書には、「橋口の挿畫は特長がある無暗に他の雜誌抔には載つて居ない。あれは慥かに橋口の畫で他人の畫ではない。僕は非常に感服した。僕の文章よりもうまい。どうかあれを新聞かなにかで評してやつてくれゝばよい。然し僕の猫傳もうまいなあ。天下の一品だ。十錢均一位な所にはあたる。……時に續々篇には寒月君に又大役をたのむ積りだよ」とある。三月十四日野村傳四宛の手紙には、「虚子の石棺は奇な代りにどこか不自然で嫌味がある。今の人はとかくあゝ云ふものをほめる。僕の倫敦塔をほめてくれるのも全くその爲である。……卷末の百號廣告は少々山師的だね。僕もあの位かつがれゝば澤山だ。尤もあれで人が讀んでくれなければ僕の名聲も地に墜ちる譯だなあ！／世間は存外靜かだのに虚子一人が騷いで僕を吹聽して居る樣な氣色だハ、、、、、」とある。四月二十七日若杉三郎宛の手紙には、「拙作御懇篤なる御批評を蒙り難有存候大體に於て大兄の御考は正鵠を得たるものと

存候盾は禮服搭は袴猫は平常服の喩尤も得吾意申候。盾の廣告は出鱈目ですよ。あれが出た時天下は安泰だのに虚子が獨りで騷いで居ると笑つた位です。」とある。五月九日村上霽月宛の手紙には、「拙文につき御批評たまはり難有拜讀致候あんなものにても知人抔よりほめられると愉快なものに候小生は教師なれど教師として成功するよりはヘボ文學者として世に立つ方が性に合ふかと存候につき是からは此方面にて一奮發仕る積に候然し何しろ本職の餘暇にやる事故大したものも不出來只御笑ひ草のみに候。」とある。五月二十六日の山縣五十雄宛の葉書には、「拜復小生の文章を二三行でも讀んでくれる人があれば難有く思ひます。面白いと云ふ人があれば嬉しいと思ひます。敬服する抔といふ人がもしあれば非常な愉快を覺えます。此愉快はマニラの富にあつたより、大學者だと云はれるより、教授や博士になつたより遥かに愉快です。小生は君の手紙を得て此大愉快を得たのだから御禮は此方より申さなければならんと考へます　匆々」とある。漱石は是まで腹の中にたまつてもだもだしてゐたものを片端から吐き出して行く事が出來る事に歡びを持つた事も事實であつたが、それとともに、自分の書いたものに、世間の多くの人が好意を持ち、一作は一作毎に響きを返して來る讀者の多くなつて行く事に、無上の歡びを感じたのも事實であつた。今まで一人ぽつちであつたものが、さうでなくなつた氣がして、生きてゐる事が賴もしくなるのである。

然るに明治三十九年(一九〇六)になると、漱石の調子は少し變つて來る。漱石は明治三十九年一月の『ホトトギス』の爲に『猫』第七・第八を書き、同じ一月號の『帝國文學』の爲に『趣味の遺傳』を書き、明治三十八年十二月十八日高濱虛子に宛てて、「此二週間帝文とホトトギスでひまさへあればかきつゞけもう原稿紙を見るのもいやになりました是では小說抔で飯を食ふ事は思も寄らない。」と言つてゐる。無論是は「此二週間」「ひまさへあればかきつゞけ」た事に對する不愉快を洩したものに過ぎないが、然しそれ計りではなく、此所には、漱石の中に、自分の創作といふものに對する考へ方の變化が、徐徐に醱酵しつつあり、もしくは世間・周圍に對する漱石の不滿が、更に新たなる力をもつて擡頭しつつある事を告げる、第一聲のやうなものが、潛んでゐるやうにも思はれる。現に漱石は『猫』第八で、苦沙彌先生と落雲館の生徒との「戰爭」を取り扱つたが、それに關して明治三十八年十二月三十一日鈴木三重吉に宛てて、「今日は大晦日だが至つて平穩借金とりも參らず炬燵で小說を讀んで居ます。ホト丶ギスを見ましたか。裏の學校から抗議でもくれば又材料が出來て面白いと思つて居る。此學校の寄宿舍がそばにあつて其生徒が夜に入ると四隣の迷惑になる樣に騷動する。今夜も盛にやつて居る。此次は是でも生捕つてやりませう。仕舞には校長が何とか云つてくればいゝと思ふ。喧嘩でもないと猫の材料が拂底でいかん。」と書いてゐるのである。是は冗談めかした外貌を持つてゐるには違ひない。然しその奧に

は漱石の、郁文館の寄宿生の行狀に對する不愉快が、渦を巻いて動いてゐる。此所で漱石が「夜に入ると四隣の迷惑になる樣に騷動する」所を「生捕つて」やらうと言つてゐる事は、恐らく後の『坊つちやん』の寄宿生の騷ぎで實行されたのに違ひないが、然し『坊つちやん』の寄宿生の騷ぎの描寫が完成するまでには、それは絶えず漱石をじりじりさせたものに違ひないのである。實際この時分の漱石は、イリタブルになり、じりじりしてゐる。『趣味の遺傳』でも、是までと同じく、一目見て是が自分の相手だと認識する、運命的な戀愛を取り扱つてはゐるが、然しその戀愛を例へば『薤露行』のやうに、美しい詩として歌ひ上げるのではなく、さういふ戀愛の可能を科學的に說明し、さういふ戀愛の可能を信じない二十世紀人を、說伏しようとする態度で取り扱はれる。是は言はば、『猫』第八と同じやうに、漱石の攻擊的（アグレッシヴ）な態度の現はれである。さうしてその態度は、四月の『ホトトギス』で發表された『坊つちやん』に於いて、更に露骨に現はれる。

明治三十九年の漱石の手紙に就いて見ても、最も眼に立つものは、漱石のこの態度である。一月十四日漱石は菅虎雄に宛てて、「僕大學をやめて江湖の處士になりたい。大學は學者中の貴族だね。何だか氣に喰はん。」と書いてゐる。二月三日野間眞綱宛の手紙には、「小生例の如く毎日を消光人間は皆姑息手段で毎日を送つて居る。是を思ふと河上肇などゝ云ふ人は感心なものだ。あの位な決心がなくては豪傑とは云はれない。人はあれを精神病といふが精神病なら其病氣の所が

感心だ。……／近頃は訪問者が少々減じて難有い。忙しい事は依然として忙がしい。生涯此有様であらう。而して生涯落ちつく事はない。僕のキュー〳〵して居るのも亦姑息手段に過ぎぬ。要するに大俗物になつて益大俗物たらんとアセルのだね。是ではどこがえらいか分らない。人間は他が何といつても自分丈安心してエライといふ所を把持して行かなければ安心も宗教も哲學も文學もあつたものではない。」とある。二月十一日鈴木三重吉宛の手紙には、「猫の原書をかひにくるのは猫中の材料だ。色々な人があるものだ。大町といふ男が猫をよんで作者は氣の小さい陰氣な少し洒落氣のある男だと二度も三度も繰り返して居る。人民新聞といふのには僕が猫を作つて以來細君と仲が惡るくなつたとあるさうだ。すると高等學校で其きり抜を大事に校長に御目にかける。内田魯庵といふ男は夏目君は金田夫人に談判されて迷惑して居るさうだとある男に話したさうだ。／僕も此位有名になれば申分はないと思ふ。昔はこんな事が氣にかゝつて一々正誤したいと心持ちがわるかつた。今では却つて面白い心持ちがする。是から文章でもかいてながく居ると益僕の惡口をいふものが出て來ます。仕舞には漱石は昨日死んださうだ。いや瘋癲院へ這入つた。華族の御嬢さんから惚れられたなんて妙なのが出て來るでせう」とある。二月十七日姉崎正治宛の手紙には、「高等學校の入學試驗が每年ある。其折には學校長がよく僕の宅へ依頼にくる事がある。然し僕は多忙の故で每々辭する事がある。それでそれぎりになる。淡泊なものだ。世の

中は夫で澤山である。／夫では惡るいと云ふのは形式に拘泥した澆季の風習だ。二十世紀は澆季だから仕様がないが俗吏社會、無學社會ならとにかく學者の御そろひの大學でそんな事をむづかしく云ふのは大學が御屋敷風御大名風御役人風になつてるからだよ。／大學で語學試驗を囑托する、僕が多忙だから斷はる。其間に何等の文句は入らない。もしそれが僕の一身上の不利益になつたり英文科の不利益になれば僕のわるいのぢやない。大學がわるいのだ。／語學試驗なんか多忙で困つてる僕なんか引きずり出さなくつたつて手のあいて居る敎授で充分間に合ふのだ。／僕なんかは多忙のうちに少しでもひまがあれば書物を一頁でも讀む方が自分の爲にも英文學科の將來の爲にもなると思つて居る。語學試驗を引き受けないでけしからんと思ふなら隨意に思ふがよい。坪井さんなんか何と思つたづて困りやしない。少々こんな謝絕に逢ふ方が人間といふものが理解されていゝのだ。學長たるものは只歷史の大家になつたつて駄目だよ。少しは世の中の人間はこんな妙な奴が居つて講師でもそんなに意の如くにはならないといふ事を承知させるがいゝのだよ。」とある。

それから暫くの間は、寧ろ平和な手紙が續く。この間に漱石は『坊つちやん』及び『猫』第十を書き、鈴木三重吉から『千鳥』を受け取り、短篇集『漾虛集』を出版し、學生の卒業論文を讀んでゐる。然も六月七日には漱石は鈴木三重吉に宛てて、「君は九月上京の事と思ふ神經衰弱は全

快の事なるべく結構に候然し現下の如き愚なる間違つたる世の中には正しき人でありさへすれば必ず神經衰弱になる事と存候。是から人に逢ふ度に君は神經衰弱かときいて然りと答へたら普通の德義心ある人間と定める事に致さうと思つてゐる／今の世に神經衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の輕薄に滿足するひやうろく玉に候。／もし死ぬならば神經衰弱で死んだら名譽だらうと思ふ。時があつたら神經衰弱論を草して天下の犬どもに犬である事を自覺させてやりたいと思ふ。」と書いてゐる。六月二十三日野村傳四宛の葉書には、「正は勝たざるべからず、邪は斃れざるべからず。犬は殺さゞるべからず。豚は屠らざるべからず、猪子才は頓首せしめざる可からず。文は作らざるべからず。書は讀まざるべからず。月給は貰はざるべからず。御馳走は食はざるべからず。試驗はしらべざる可からず。人世多事」とある。七月三日高濱虛子宛の手紙には、「小生は生涯に文章がいくつかけるか夫が樂しみに候。又喧嘩が何年出來るか夫が樂に候。人間は自分の力も自分で試して見ないうちは分らぬものに候。握力抔は一分でためす事が出來候へども自分の忍耐力や文學上の力や強情の度合やなんかはやれる丈やつて見ないと自分で自分に見當のつかぬものに候。古來の人間は大概自己を充分に發揮する機會がなくて死んだらうと思はれ候。惜しい事に候。機會は何でも避けないで、其儘に自分の力量を試驗するのが一番かと存候／……／小生は何をしても自分は自分流にするのが自分に對す

る義務であり且つ天と親とに對する義務だと思ひます。天と親がコンナ人間を生みつけた以上はコンナ人間で生きて居れと云ふ意味より外に解釋しやうがない。コンナ人間以上にも以下にもどうする事も出來ないのを強ひてどうかしやうと思ふのは當然天の責任を自分が脊負つて苦勞する樣なものだと思ひます。此論法から云ふと親と喧嘩をしても充分自己の義務を盡して居るのであります。天に背いても自分の義務を盡して居るのであります。況んや隣り近所や東京市民や。日本人民や乃至世界全體の人の意思に背いても自分には立派に義理が立つ譯であります。是ではちと氣燄が高過ぎましたね。少々ひまになつたから餘計な事を書きます。／昔はコンナ事を考へた時期があります。正しい人が汚名をきて罪に處せられる程悲慘な事はあるまいと。今の考は全く別であります。どうかそんな人になつて見たい。世界總體を相手にしてハリツケにでもなつてハリツケの上から下を見て此馬鹿野郎と心のうちで輕蔑して死んで見たい。尤も僕は臆病だから、本當のハリツケは少々恐れ入る。絞罪位な所でいゝなら進んで願ひたい。」とある。八月六日森田草平宛の手紙には、「小生千駄木にあつて文を草す。左右前後に居るもうろくども一切氣に喰はず朝から晩迄喧嘩なり此中に在つて名文がかけぬ位なら文章はやめて仕舞ふ考なり。此間にあつて學問が出來なければ學問はやめて仕舞ふなり。手紙の十本や二十本來たつて詩想が妨げらるゝ樣なデリケートな文章家にあらず。喧嘩をしつゝ、勉強をしつゝ、文章をかきつゝ、もうろくど

もがくたばる迄は決して千駄木をうつらずして、安々と往生仕る覺悟なれば君が夜中遊びにくる位の事は何でもなく候。」とある。

漱石が目ざましく文壇に進出したのに對して、初めはあつけにとられた形であつた世の中にも、日數がたつにつれて、嫉妬や思ひ上がりや誤解や偏狹などから、漱石をいろいろに惡評するものが、澤山出て來た。それを一一訂正したり辯明したりしたくてたまらないほど、正しい事を愛する漱石は、然しそんな事に拘泥つてゐては、自分の書きたい事が書けなくなつてしまふ事を考へ、すべてそれを默殺する事にした。然し默殺とは氣にしないといふ事ではない。默殺しようとすればするほど、それは漱石の中で内訌した。二月十一日の手紙だの七月三日の手紙だのは、漱石がそれによつて、この内訌に風を入れようとしたものである。一方大學の空氣は、漱石にとつて少しも快いものではなかつたが、それでも籍を其所に置いてゐる以上、義務として漱石は、ちやんと講義も進めなければならず、卒業論文も讀まなければならず、口頭試驗もしなければならなかつた。然るに漱石は、自分は創作をしなければ生きてゐる氣がしないとまで、創作的氣分に侵されきつてゐるのである。漱石は感興と注文とにまかせて筆はとるものの、創作の世界に深入りすればするほど、自分は自分の義務を十分に履行してゐないといふ氣の咎めを、内に感じなければならなかつた。その氣の咎めが漱石に無理な勉强を强ひるとともに、漱石を神經衰弱にし、漱石

をイリタブルにする。然も漱石の身うちの者は、漱石が要求するやうには決して動く事がないにも拘はらず、漱石に對しては實にさまざまな事を要求し、それが容れられず、漱石が自分たちの思ふやうにならないといふので、漱石を變人扱ひにするのみならず、病人扱ひにする事、もと少しも異る事がないのである。一時は漱石の世界を明るくするやうに見えた創作も、かうして漱石を、更にイリタブルにする。それにつれて漱石の逍遙游は、次第にその純粋性を喪失する。例へば『草枕』のやうなものでも、美しい世界を美しく描き上げようとしたものであり、また描き上げられたものは事實美しいものであつたには違ひないが、然しその奥からは、この美しい世界を纏め上げる爲に、いかに作者が多くの醜いものを脚の下に踏まへて立つてゐなければならなかつたか、また現に是を書いてゐる刹那に於いても、作者がその醜いものを踏みつけるのに、いかに多大の努力を拂はなければならなかつたか、その惡戰苦闘の唸りが、はつきり聽こえて來るやうな感じを持つてゐるのである。『趣味の遺傳』で漱石が「靈の感應」の爲に闘つたやうに、漱石は『草枕』で「美」の爲に闘つたのだといふ事も出來る。闘はなければ、漱石の中でも、いつのまにかその「美」は、現實によつて打ち碎かれさうになるのである。

　昔の禪僧は、自分の脚の萎えてゐる事が、參禪悟道の妨げになる事を知つて、その萎えた脚をおつぺしよつたと言はれる。同じやうに漱石は、美しいものを單に美しいものとして書いてゐる

のでは、竟にこの美しいものを護り通す事が出來ない事に氣がついて、卒然として詩の國・夢の國・ロマンティックな世界を、ロマンティックに取り扱ふ事をやめて、現實の中に跳り込み、現實と鬪ひ、その爭鬪の記錄を自分の作品として發表しようと決心する。明治三十九年(一九〇六)十月二十六日漱石は、自分に敎訓を與へてくれといふ鈴木三重吉に答へて、「僕の敎訓なんて、飛んでもない事だ。僕は人の敎訓になる樣な行をしては居らん。僕の行爲の三分二は皆方便的な事で他人から見れば氣違的である。それで澤山なのである。現在狀態がつゞけば氣違である。死んでから人が氣違ときめて仕舞つたつて少しも耻とも何とも思はない。現在狀態が變化すれば此狂態もやめるかも知れぬ。さうしたら死んでから君子と云はれるかも知れん。つまり一人の人間がどうでもなる所が自分ながら愉快で人には分らないからいゝ。氣違にも、君子にも、學者にも一日のうちに是より以上の變化もして見せる。人が學者といふも、氣違といふも、君子と云ふも、月給さへ渡つてゐればちつとも差支ない。だから僕は僕一人の生活をやつてゐるので人に手本を示してゐるのではない。近頃の僕の所作を眞似られちや大變だ。」と言つたが、同じ日に「第二信」として、「只一つ君に敎訓したき事がある。是は僕から敎へてもらつて決して損のない事である。／僕は子供のうちから靑年になる迄世の中は結構なものと思つてゐた。旨いものが食へると思つてゐた。綺麗な着物がきられると思つてゐた。詩的に生活が出來てうつくしい細君がもてゝ。う

つくしい家庭が出來ると思つてゐた。／もし出來なければどうかして得たいと思つてゐた。換言すれば是等の反對を出來る丈避け様としてゐた。然る所世の中に居るうちはどこをどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く正反對の現象でうづまつてゐる。／そこで吾人は世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、イやなものでも一切避けぬ否進んで其内へ飛び込まなければ何にも出來ぬといふ事である。／只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅小な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。／此點からいふと單に美的な文字は昔の學者が冷評した如く閑文字に歸着する。俳句趣味は此閑文字の中に逍遙して喜んで居る。然し大なる世の中はかゝる小天地に寐ころんで居る様では到底動かせない。然も大に動かさゞるべからざる敵が前後左右にある。苟も文學を以て生命とするものならば單に美といふ丈では滿足が出來ない。丁度維新の當時勤王家が困苦をなめた様な了見にならなくては駄目だらうと思ふ。間違つたら神經衰弱でも氣違でも入牢でも何でもする了見でなくては文學者になれまいと思ふ。文學者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相遠かる様な小天地ばかりに居ればそれぎりだが大きな世界に出れば只愉快を得る爲めだ抔とは云ふて居られぬ進んで苦痛を求める爲めでなくてはなるまい

と思ふ。／君の趣味から云ふとオイラン憂ひ式でつまり。自分のウツクシイと思ふ事ばかりかいて、それで文學者だと澄まして居る様になりはせぬかと思ふ。現實世界は無論さうはゆかぬ。文學世界も亦さう許りではゆくまい。かの俳句連虚子でも四方太でも此點に於ては丸で別世界の人間である。あんなの許りが文學者ではつまらない。といふて普通の小説家はあの通りである。僕は一面に於て俳諧的文學に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰抜文學者の様な氣がしてならん／破戒にとるべき所はないが只此點に於テ他をぬく事數等であると思ふ。然し破戒ハ未ダシ。三重吉先生破戒以上の作ヲドン／＼出シ玉へ」と書いた。

勿論漱石には初めから志士的な氣分はあつた。日本の事を考へ、日本人の事を考へて、日本と日本人とを一日も早く西洋の桎梏から脱却させたいと願ひ、身をもつて西洋と戰つて來たのも、漱石の志士的氣分の現はれに外ならない。從つて漱石が「俳諧的文學」に出入してゐたのは、單に漱石の一面を示したもので、是から志士的文學に出入しようと宣言するのも、自分の中にないものを取り出さうといふのではなくて、是までまともに取り出して來なかつたものを、是からまともに取り出さうといふまでである。志士的文學が取り出されなかつたのは單に機縁が熟しなか

つたからに過ぎない。然も漱石がこの方面に手をつけ出し始めるや否や、漱石の所謂「俳諧的文學」は、漱石の作品の中から、殆んどその姿を沒してしまふのである。漱石は「僕は一面に於て俳諧的文學に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする樣な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい。」と言つたが、さうしてその手初めとして、明治三十九年(一九〇六)十月の『中央公論』に『二百十日』を發表し、明治四十年(一九〇七)一月の『ホトトギス』に『野分』を發表したが、間もなく朝日新聞に入社し、死ぬまでずつと長篇小説をかき續けた爲に、漱石の所謂「俳諧文學」は、『文鳥』・『夢十夜』・『永日小品』・『滿韓ところ〳〵』・『硝子戸の中』などのやうな、小品の中に現はれただけで、小説としては現はれる事がなかつた。もつとも『野分』の中の中野春臺とその許嫁との插話のやうに、それは、長篇小説の一部分として、長篇小説の中に包攝されてしまふのである。

この意味で『草枕』は、是までの『倫敦塔』や『幻影の盾』や『薤露行』などの一系列の作品に原理を與へ、人生的意義を與へ、さうする事によつて一往の締め括りをつけた上で、次に來るものの地ならしをしたやうな作品であると、見る事も出來る。例へば明治三十九年 一九〇六)八月七日漱石が畔柳芥舟に宛てて、『猫』第十一に就いて、「東風君苦沙彌君皆勝手な事を申候夫故に太平の逸民に候現實世界にあの主義では如何かと存候御反對御尤に候。漱石先生も反對に候。／

彼等の云ふ所は皆眞理に候。決して作者の人世觀の全部に無之故其邊は御了知被下度候。あれは總體が諷刺に候現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ猫中に收め候。もし小生の個性論を論文としてかけば反對の方面と雙方の働らきかける所を議論致し度と存候」と言ひ、更に「來九月の新小說に小生が藝術觀及人生觀の一局部を代表したる小說あらはるべく是は是非御讀みの上御批評願度候。是とても全部の漱石の趣味意見と申す譯に無之其邊はあらかじめ御斷はり申候」と言つてゐるのも、多少この邊の消息に觸れてゐるやうに思ふ。これらの作品が「一面の眞理」であり「作者の人世觀の全部」を表現したものではないといふ事を、漱石が此所で特に強調してゐるといふ事は、假令「作者の人世觀の全部」を表現する事が直ちに志士的文學を書く事を意味するものではなかつたにしても、ともかく漱石が、これらの作品の人生に於いて占めべき位地と意義とをはつきり認識してゐて、それらとは違つた、もつと人生的意義の大きい仕事が自分を待つてゐる事を感じてゐるといふ事を證明する。明治三十九年八月三十一日漱石が高濱虛子に宛てて、「先生驚ろきましたね僕の第三女が赤痢の模樣で今日大學病院に入院したといふ譯ですがね。ことによると交通遮斷になるかも知れません。小供の病氣を見てゐるのは僕自身の病氣より餘程つらい。しかも死ぬかも知れないとなるとどうも苦痛でたまらない。もしあの子が死んで一年か二年かしたら小說の材料になるかも知れぬが傑作抔は出來なくても小供が丈夫でゐ

てくれる方が遥かによろしい。到底草枕の筆法では行きません。」と書いてゐるのも、まつたく別な方面から、漱石が自分のロマンティシズムの世界の脆さを反省しなければならなかつた事を、物語るものであると思ふ。

四七 「本職」の問題

漱石が、自分には教育者となる資格がない、自分がたまたま教育者の列に加はつてゐるのは、畢竟「糊口の口を求めて、一番得易きものは、教師の位地」であるからに過ぎないと考へてゐた事は、既に明治二十八年（一八九五）十一月の『愚見數則』に出てゐる。明治三十年（一八九七）四月二十三日漱石が正岡子規に宛てた手紙の中にも、自分は近頃教師をしてゐるのがつくづく厭になつた、どんな口でも可い、「月々五六十の收入」さへあれば、自分は教師をやめてその口に勤め、餘暇に「自由な書を讀み自由な事を言ひ自由な事を書」き「文學三昧にて消光した」いと書いてある。もつとも是は漱石が、漱石の所謂「英文學に欺かれた」かの如き感じに生きてゐた時分の事であるから、それもいくらかは手傳つてゐると、言へない事はないかも知れない。

然し漱石がロンドンに留學し、「文學論」著述の「十年計畫」を立て、一意その仕事に打ち込むに及んで、漱石の所謂「英文學に欺かれた」かの如き感じはすつかり消えてしまひ、漱石はその

點では、陰鬱なロンドンの天地を、爽快な眼で眺める事が出來るやうになつた。のみならず漱石は、歸朝すると直ぐ大學で、その「文學論」を講ずる事になつた。是は、純粹に「文學三昧にて消光」する事ではなかつたとしても、ともかく文學に就いて講ずる事である。もし漱石が「英文學に欺かれた」かの如き感じから、自分を教育者としての資格がないと考へてゐたのだとすれば、この時分は全然事情が違つてゐるのだから、まるで違つた考へ方をすべきであるのに、漱石は依然として、自分に教育者としての資格が缺けてゐるといふ事を、はつきり考へてゐたらしい。漱石が、明治三十六年（一九〇三）六月十四日菅虎雄に宛てて、「大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツヾケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク樣ナヿハ敎ヘルノガイヤダ」と書いてゐるのが、その好い證據である。漱石は自分の調子を下ろして相手に對應する事を欲しない。然も自分の調子を下ろして相手に對應する忍耐と柔軔とがなければ、教育者としての資格が十分であるとは言はれない。それを知つてゐても漱石にはどうする事も出來ないから、漱石は「生徒ニ氣ノ毒ダ」と思ふのである。

然しその時分は、まだよかつた。漱石が、學者として講壇に立つ事を、自分の「本職」と考へてゐる間は、眼前の「生徒ニ得ノ行ク樣ナヿ」でなくとも、學生の知識と體驗とが豐富になりさへすれば、いつかはこの講義が役に立ち、「ワカラナイ」などといふやうな事は、決して言はなく

なるに違ひない事を、漱石は確信してゐたに違ひないのだから、まだよかつた。然し『猫』を書き『倫敦塔』を書き、漱石が段段創作に深入りするに及んで、この問題は段段深刻な問題になり始め、竟に漱石は絶えず、あれかこれかの選擇に苦しまなければならなくなるのである。問題は、自分に教育者としての資格があるかないかの問題を超えて、自分はどつちを「本職」とすべきであるかといふ問題と變化する。

明治三十八年(一九〇五)五月九日漱石は村上霽月に宛てて、「小生は教師なれど教師として成功するよりはヘボ文學者として世に立つ方が性に合ふかと存候につき是からは此方面にて一奮發仕る積に候然し何しろ本職の餘暇にやる事故大したものも不出來只御笑ひ草のみに候。」と書いた。是は恐らく「教師」と「文學者」とを竝べて問題にした最初の手紙である。ただ此所では、「文學者」の方が自分の「性に合ふかと存候につき」とは書いてあるが、然しそれも「何しろ本職の餘暇にやる事故大したものも不出來」とあるのだから、漱石はまだ自分の「本職」を、教師として立ててゐるのである。同じ年の七月十六日中川芳太郎宛の手紙には、「先達日本新聞がきて何でも時々かけといふから。僕もつく〴〵考へたね。毎日一欄書いて毎日十圓もくれるなら學校を辭職して新聞屋になつた方がいゝと。然し是は日本新聞で承知する譯のものでないから矢張り赤門の中で妙な事を云つて暮らす積りです。」とある。是も、漱石が「文學者」としての生活の

方へ大分心を動かしてゐる事は分かつても、なほその「文學者」を自分の「本職」として考へようとし出した事を、證明するものではない。漱石は、やつぱり「本職」は教師ときめて、「道樂」に文筆に携はるより外はないと、考へ直してゐるのである。

然るに同じ年の九月五日野間眞綱宛の葉書に、漱石は「學校が始まるのは何よりいやだ。」「僕の神經は學校に適しない樣に出來てるんだらう。」と書き、九月十七日高濱虚子宛の手紙には、「毎日來客無意味に打過候。考へると己はこんな事をして死ぬ筈ではないと思ひ出し候。元來學校三軒懸持ちの、多數の來客接待の、自由に修學の、文學的述作の、と色々やるのはちと無理の至かと被考候。小生は生涯のうちに自分で滿足の出來る作品が二三篇でも出來ればあとはどうでもよいと云ふ寡慾な男に候處。それをやるには牛肉も食はなければならず玉子も飲まなければならずと云ふ始末からして遂々心にもなき商買に本性を忘れるといふ顚末に立ち至り候。何とも殘念の至に候。(とは滑稽ですかね)とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さへ出來れば大丈で天に對しても人に對しても義理は立つと存候。自己に對しては無論の事に候。」と書き、九月二十四日野間眞綱宛の手紙には、「學校をやめたら創作家になれるだらうなかと己惚るのも矢張り本來の愚見かと存候。」と書いてゐる。漱石には、「本職」としての「文學者」といふ事が、相當眞劍な問題になり出した。ただ漱石には、是さへあればうちの者が相當に暮して行けるとい

ふ、一往安全な經濟的な基礎がなかつた。日本新聞からの寄稿の依頼は、漱石に毎日一欄書いて毎日十圓もらふ事を夢想せしめたが、毎日十圓どころか毎日一圓、それも確實にくれると約束しさうな所は、少くとも當時の漱石には、何所にも見當らなかつた。原稿を書けば、それに對する原稿料はとれるには違ひない。然しそれは毎月必しも何枚ときまつて書けるとは限らない。書けてもその原稿料は、『ホトトギス』からくれる原稿料を標準とすれば、四百字に換算して、一枚二十何錢かの原稿料にしか當らない。漱石は、いくら講義の準備をするのが厭でたまらなくても、原稿料で妻子を養つて行く見込が立たない以上、學校をやめて創作家になる譯には行かなかつた。同じ年の十月二十日漱石が奥太一郎に宛てて、「小生如きはどこへ參つても教師がいやで生涯覺れない剛突張に候人は大學の講師をうらやましく思ひ候由金と引きかへならいつでも讓りたくと存候」と書いてゐるのも、この間の漱石の心持を説明する。

もつとも漱石の創作に對する考へ方にも、多少の變化がないとは言へなかつた。同じ年の十一月二十六日漱石は高濱虛子に宛てて、「僕は當分のうち創作を本領として大にかく積りだが少々いやになつた。然し外に自己を發揮する餘地もないから矢張り雜誌の御厄介になる事に仕つた」と書いてゐる。十二月九日野村傳四に宛てて、「僕は小説家程いやな家業はあるまいと思ふ。僕なども道樂だから下らぬ事をかいて見たくなるんだね。職業となつたら教師位なものだらう。」と

書いてゐる。十二月十八日高濱虚子に宛てた手紙は、前に引用した「もう原稿紙を見るのもいや」だ、「是では小説抔で飯を食ふ事は思も寄らない。」といふ手紙である。

然し是は一時の現象に過ぎなかつた。暫くすると漱石の中には再び油然と創作する事の歡びが湧き上がり、既にその年の十二月三十一日には鈴木三重吉に宛てて、漱石は「猫が出なくなると僕は片腕もがれた樣な氣がする。書齋で一人で力味んで居るより大に大天下に屁の樣な氣燄をふき出す方が面白い。」と書き、明治三十九年(一九〇六)一月十四日には菅虎雄に宛てては、「僕大學をやめて江湖の處士になりたい。」と書き、二月十五日森田草平に宛てては、「僕の樣なものが到底文學者の例にはならないが僕は君位の年輩のときには今君がかく三分一のものもかけなかつた。其思想は頗る淺薄なもので且つ狹隘極まるものであつた。……／勿論今でも御覽の通りのものしか出來ぬが然し當時からくらべると餘程進歩したものだ。夫だから僕は死ぬ迄進歩する積りで居る。／夫から今日の事を申すと(例へば猫を一節かくと)此次にはもうかく事があるまいと思ふ然しいざとなると段々思想も浮んでくる先づ前回位なものは出來る。すべてやり遂げて見ないと自分の頭のなかにはどれ位のものがあるか自分にも分らないのである／君抔も死ぬ迄進歩する積りでやればいゝではないか。作に對したら一生懸命に自分の有らん限りの力をつくしてやればいゝではないか。」と書き、三月八日寺田寅彦に宛てては、「御病氣の由如何毎日いやな天氣風か

雨か雪　いやはや。小生不相變原稿にて多忙是もいやはやあまりたのまれるのもよしあしゝでげす」と書いてゐる。三月十七日瀧田樗陰宛の手紙には、「只今ホト、ギスの分を三十枚餘認めた所。何だか長くなりさうで弱はり候。夫に腹案も思ふ樣に調はず閉口の體に候。實を申すと今日抔はぶら／＼白帆の見える川べりでもあるきたい所に候。文章も職業になるとあまり難有からず又職業になる位でないと張合がなし厄介なものに候。」とある。創作に膏が乘つて來れば、更に大きな力で、講義の爲に浪費される自分の時間と精力とが惜しくなり、自然講義のノートを作る事がいやでいやで堪らなくなつて來るのである。

漱石は眞面目で、義務感覺が鋭く、從つて漱石は、自分の使命は創作にあつて講義にあるのではないと、はつきり認識し得ても、それを口實に自分の講義を粗末にしようとするほど、橫著でも無責任でもなかつた。主觀的には漱石は、自分ほど教育者として不適任な人間はないと思つてゐたには違ひない。また自分ほど橫著で無責任で、「教育をしに學校へ參らず月給をとりに參」る人間もないと思つてゐたには違ひない。然しさう思ふのは漱石が眞面目だつたからで、またさう思ふだけそれだけ漱石は、講義にも出來るだけの精根を打ち込んで、準備をしてゐるのである。漱石は講義のノートを多く、春・夏などの、休暇中に作つた。休暇中に作つたノートを教場では讀んで、それだけ不斷は、自分の自由な時間を持たうとしたのである。然し小說を書き出してか

らは、春・夏などの休暇は、漱石にとつて、言はば書き入れ時になつた。それだけ漱石は、講義のノートを作る時間を編み出すのに苦勞しなければならなかつた。またそれだけ漱石は講義のノートを作る事を不愉快に感じなければならなかつた。明治三十九年四月十一日漱石は鈴木三重吉に宛てて、「僕多忙でこまる。昨日から講義をかきかけたら半ページ出來た。講義を書くより千鳥をよむ方が面白い。」と書いてゐる。六月三日森卷吉に宛てては、「此夏は又講義をかゝなければならない苦しくて面白くなくてきく人もつまらなくて然もやらねばならぬとは馬鹿氣て居る」と書いてゐる。七月十八日小宮豐隆に宛てては、「來月は講義をかゝなければならん。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考へると大學は辭職仕りたい。」と書いてゐる。

漱石ほどの學力があれば、高等學校の授業は、ちつとも骨が折れなかつたに違ひない。事實また漱石は手紙の中で、その通りの事を言つてゐる。大學のシェクスピアの講讀も、學生から言へば、こんな示唆に富んだ、實のある、面白い講讀もなかつたが、漱石から言へば、下調べにあまり時間をとられる事のない、樂な仕事だつたのだらうと思ふ。然し講義の方はさうは行かなかつた。もつとも『文學論』の講義は、明治三十六年九月から明治三十八年六月の初めまで、前後二ケ年に亙つて講了になつたのだから、漱石の創作時代にはあまりかかつてゐない。然るに後に『文學評論』の名前で出版された、十八世紀英文學の講義は、『文學論』の講了の直後、明治三十

八年六月中に始められ、明治四十年三月、漱石が大學を止めるまで續いたのだから、それは、漱石が小説を書いて最も油が乘り出した時分と、丁度重なり合つてゐる。然もそれは、『文學評論』を見ても分かるやうに、初めに十八世紀の英國の文學の背景となる、文學以外の、英國の哲學・宗教・藝術・社會・風俗などの概觀を與へ、後に代表的な作家を一人一人詳論するとしても、その一人一人の一一の作品に、改めて悉く眼を通して出來た講義だつたのだから、それは假令漱石自身にとつては、十分滿足の出來るものではなかつたとしても、相當漱石の時間と精力とを潰す必要のあつた講義だつたのだらうと思ふ。勿論第三者から見れば、是は外の誰にも出來ない、漱石を俟つてのみ初めて可能な、實に立破な、ユニークな講義であつた。然し漱石から言へば、そんな事は、問題ではなかつた。漱石には第一に、自分の使命が創作家たるにあるにも拘はらず、自分には別に義務があつて、思ふさま創作に身を委ねる事が出來ないのが、不愉快なのである。然も漱石には第二に、講義の方でも、すればする事がいくらでもあり、またすれば十分出來る自信があるにも拘はらず、自分には別に使命がある爲に、それにも思ふさま身を委ねる事が出來ないのが、不愉快なのである。——其所へ次ぎ次ぎに、新聞社からの寄稿の依頼が來た。

明治三十九年（一九〇六）十月二十日漱石は皆川正禧に宛てて、「僕明治大學をやめやうと思ふ。先日高田が來て報知新聞へ何かかいてくれと云つたから明治大學をやめて新聞屋にならうか知ら

ん國民新聞でも讀賣でも依賴されてゐる。明治大學は土曜の四時間であるから、土曜を四時間つぶして何かかいてさうして夫が同じ位の收入になれば新聞の方が色々な便宜がある樣に思ふ。」と書いてゐる。明治三十九年十月といへば、旣に漱石が『猫』上卷を出版し、『漾虛集』を出版し、『坊つちやん』を書き、『草枕』を書き、『二百十日』を書き、もう少しで『猫』の中卷が出版されようとして、文壇的の名聲が隆隆としてあがつてゐた時分である。『國民』と『讀賣』と『報知』とが、殆んど同時に漱石に寄稿を依賴して來たのは、當然と言つて可かつたが、然し今度は漱石は、前年の『日本』の場合と違つて、この問題を可也實際的に具體的に考へようとするのである。——明治大學には漱石は、家計の不足を補充する目的で、明治三十七年四月から出だして、三十圓の月給を受け取つてゐた。漱石はこの明治大學をやめて、『報知』の特別寄書家のやうなものになり、土曜の四時間をそれに宛てて、明治大學からもらふ月給を、『報知』からもらふ事にしたらどうだらうと考へる。是は或は漱石がかうして、自分が作家として一本立ちが出來るかどうかの、瀨踏みをして見ようとしたものかも知れない。然し是は、『報知』の方で、漱石に特別寄書家として月給を出さうとするほどの、熱心を持ち合せなかつた爲か、それとも漱石に、實行に移すだけの決心がつかなかつた爲か、到頭實行には移されなかつた。

・そのうち今度は『讀賣』が、『中央公論』の瀧田樗陰を通じて、相當眞面目に、また相當具體的

に、漱石の寄稿を懇望して來た。漱石も是に對して、相當眞面目に考へた上で、自分の態度を決定したらしい。明治三十九年十一月十六日漱石は瀧田樗陰に答へて、「拜啓讀賣新聞文壇擔任の義につき昨夜考へながら寐て仕舞つた。夫故別段名答も出來ぬ／先づ一寸思ひ浮んだ事を云ふと月に六十圓位で各日に一欄もしくは一欄半宛かくのはちと骨が折れる。尤もやつて見んから分らんが多分いやになるだらう。／僕が各日にかけば高等學校か大學をやめる。どつちをやめるかと云へば大學をやめる。／大學は別段難有いとも名譽とも思ふて居らん。今迄三年半に余としては一人前の仕事をして居る。やめたとて職に堪へぬとは云はれない。／高等學校は授業が容易で文學上の研究及び述作の餘裕を作るに便だからやめぬ。のみならず今の所では猶やめない。高等學校の教師のあるものは生意氣である。生徒のあるものは生意氣である。ある教師は余がやめればいゝと考へてゐるらしい。余がやめれば、あとから、すぐ運動して這入らうと思ふてゐるものもあるらしい。こんな奴等を增長させては世の爲めにならんからやめぬ。生徒は何の考もなく只輕佻にして生意氣なのである。然しこんな生徒を征伏しないで學校を出ては余は生涯心持ちがわるい。世の爲めになる事を自分の安きを得る爲めに逃げた樣で甚だ不愉快である。だから高等學校は決してやめぬ。尤もそのうち職員のあるもの若しくは生徒のある「もの」と衝突して事件が急に發展して出るか居るか二つに極める場合が起るかも知れぬ。余はそんな事があればいゝと心待ちに待

つてゐる。然しさうして出るなら格別それでなければ出ない。騒動を起して出るにしても僕の代りに這入りたがつて居るものは決して入らせない。／大學をやめれば八百圓の收入の差がある。よし讀賣から八百圓くれるにしても毎日新聞へかく事柄は僕の事業として後世に殘るものではない（後世に殘る殘らんは當人たる僕の力で左右する譯には行かぬ。然し苟も文筆を以て世に立つ以上は其覺悟である）只一日で讀み捨てるものゝ爲めに時間を奪はれるのは大學の授業の爲めに時間を奪はれると大した相違はない。そこで僕は躊躇する。／よし夫でも構はんとする。然し讀賣新聞は基礎の堅い新聞かも知れぬが大學程堅くはない。尤も大學でいつ僕を免職するかも知れぬ。僕の眼中には學生も學長も教授もないから、其位の事はいつ僕の頭の上へふりかゝつて來るかも知れん。然し其懸念を度外視するときは大學の俸給は讀賣よりも比較的固定して居る。竹越氏は政客である。讀賣新聞と終始する人ではなからう。一反の約束である程度の機械的[原]文學欄を引き受けた所で竹越氏と終始して去就する樣に融通の利く文學者ではない。ある時ある場合に僕は一人で立場を失ふ樣になるかも知れぬ。竹越氏が如何に勢力家でも如何に僕に好意を表しても全然方面の違ふ文學者を生涯引きずつてあるく譯には行かぬ。／又それ丈の覺悟を以て最初から入社するには僕の方で夫丈のモーチーヴがなくてはならん。「僕は教育界に立てぬ人だから、退かなければならん」とか「是非共新聞紙上で自家の説を發表して見たい」とか何とかそこには未

來の危險を犧牲にする丈の强烈な事情がなくてはならん。所が今の僕には左程の事情がない。／夫からよし以上の理由を念頭に置かずして御依賴に應ずるにした所で到底文欄が僕の當初の所期の樣に行くものではない。讀賣には讀賣に附屬した在來の記者も居る。僕が文欄を擔任すれば僕の近しい人の文字のみを載せて、在來の人の文字を閑却する樣になるかも知れん。さうすれば苦情が起る。其他色々の事で苦情が持ち上がる。／もし僕の待遇をよくして月給を增して僕の進退を誘ふとすれば僕も少しは動くかも知れん。然し未來の危險は依然として元の通りである。のみならず比較的僕が過分の月給をとれば社中に又不平が起る。島村抱月氏の日々文壇と同樣の事情が起るに極つてゐる。／今度の御依賴に就て尤も僕の心を動かすのは僕が文壇を擔任して、僕のうちへ出入する文士の糊口に窮してゐる人に幾分か餘裕を與へてやりたいと云ふ事である。然し事情を綜合して考へると夫も駄目である。／以上の理由だからしてまづ當分は見合はす方が僕の爲めだらうと思ふ。　早々頓首」と書いてゐる。

漱石が、大學をやめて新聞に這入るといふ事に、なんの躊躇も感じなかつた事は、是でも明らかである。それほど漱石は大學にゐるのが――講義に時間と精力とを奪はれるのが――いやでいやで堪らなかつたのである。然しなにぶんにも『讀賣』の申し出しは、文藝欄の擔任といふ事であり、小さな評論文のやうなものか小品めいたものを、隔日に一欄もしくは一欄半かくといふ事

であり、報酬も月六十圓といふ事であり、小説が書きたい漱石にとつて、それは決して大した魅力のある申し出ではなかつた。漱石が動く氣にならなかつたのも、當然だと言つて可いだらう。ただ此所ではつきりする事は、何を「本職」とするかの問題が、漱石の中で、相當決定的になつて來たといふ事である。恐らく十月二十七八日頃書かれた『文學論』の序の中ででも、漱石は、「歸朝後の余も依然として神經衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。親戚のものすら、之を是認する以上は本人たる余の辯解を費やす餘地なきを知る。たゞ神經衰弱にして狂人なるが爲め、「猫」を草し「漾虚集」を出し、又「鶉籠」を公けにするを得たりと思へば、余は此神經衰弱と狂氣とに對して深く感謝の意を表するの至當なるを信ず。／余が身邊の狀況にして變化せざる限りは、余の神經衰弱と狂氣とは命のあらん程永續すべし。永續する以上は幾多の「猫」と、幾多の「漾虚集」と、幾多の「鶉籠」を出版するの希望を有するが爲めに、余は長しへに此神經衰弱と狂氣の余を見棄てざるを祈念す。／たゞ此神經衰弱と狂氣とは否應なく余を驅つて創作の方面に向はしむるが故に、向後此「文學論」の如き學理的閑文字を弄するの餘裕を與へざるに至るやも計りがたし。果して然らば此一篇は余が此種の著作に指を染めたる唯一の紀念として、價値の乏しきにも關せず、著作者たる余に取つては活版屋を煩はすに足る仕事なるべし。倂せて其由を附記す。」と書いてゐる。

さうかうする內に、三度目に來たのが、朝日新聞からの招聘である。

咒　朝日新聞入社

鳥居素川によると、漱石招聘の發議者は、素川だつた。當時『大阪朝日』の主筆をしてゐた素川は、漱石の『草枕』を讀んで感心し、それを當時の社長村山龍平にも讀ませ、その同意を得て、漱石を大阪に迎へようとしたものなのだらうである。明治三十九年（一九〇六）十二月二日漱石が中村不折に宛てて、「鳥居素川先生の手翰拜讀致候實は年末にて色々の用事輻湊手が五六本有つてもやりきれぬ體裁その爲め諸方よりの依頼も乍遺憾謝絕致候位故到底「朝日」の方も御たのみ通りに隨筆ものを綴る譯に相成かね候右御氣の毒ながら不惡御諒察の上鳥居君へ宜しく御斷わり被下度先は右當用のみ申述候」と書いてゐるのは、その議の熟する前か後かは知る由もないが、素川が漱石に當初から興味を持つてゐた事を證明するものだらうと思ふ。

大阪でその議が熟したのは、いつの事かは分からないが、然しそれが東京に傳へられ、東京の社の方から愈の話を切り出したのは、明治四十年（一九〇七）二月の事である。當時東京では、池

澄三山が主筆で、澁川玄耳が社會部長のやうな職にあつた。玄耳と同鄕の關係からか、當時折折『東京朝日』に短いものを書いてゐた坂元雪鳥(當時白仁)は、まだ文科大學の國文科の學生であつたが、この雪鳥が曾て熊本で漱石の弟子であつた關係上、使者に立つて、漱石に朝日新聞社の希望を傳へる事になつた。そこで二月二十日の夜、雪鳥は漱石に宛てて、「謹啓。久しく御伺不仕失禮致候段御海容被下度候。學校の揭示にて御不快の趣承知仕候。如何の御容體に被爲在候哉御伺申上候。/扨少々御意を得度儀有之候間參堂仕度存候へ共、木曜多人數の中にては少々都合有之候間、其外の日に何曜か三十分位御繰合せ拜眉相願へ間敷哉。今度の金曜・土曜は午前・午後共、日曜は午前中、小生何時にても參堂可仕候間、右三日の內にて御指示被下度願上候。尙勝手ケ間敷候へ共、成丈け晝間に願度存じ候。先は乍失禮以書中右御伺ひ申上候　恐惶謹言」と書いた。是が朝日新聞社から漱石への働らき掛けの第一步であつた事は、言ふまでもない。然しそんな事とは知らない漱石は、丁度その時分、中川芳太郞が整理した『文學論』の校閱で多忙を極めてゐたので、何氣なく、「拜啓御手紙拜見賓はいつでもよろしと申度なれど只今ある仕事に追はれ其方を一日も早く片づけねばならぬ故日曜の十一時と十二時の間に御出被下候へば好都合に存候先は右御返事まで　艸々頓首」と答へた。「日曜」といふのは、二月二十四日の事である。

坂元雪鳥によると、雪鳥はその日指定の時刻に漱石の所へ行つて、いきなり大學だの高等學校

だのを、やめようと思へばいつでもやめられるか、留學の義務年限はどうなつてゐるか、『讀賣』との關係はどんな關係であるかを訊いた上で、朝日新聞社の希望を述べたのださうである。『讀賣』には漱石は、明治四十年になつてから『作物の批評』と『寫生文』と、二度ばかり長い論文を、その日曜附錄の爲に書き、前年の十一月には『文學論』序を寄せてゐる。然しその間になんの特別な關係も成り立つてはゐなかつた。漱石の留學年限の二倍、四年の義務年限は、丁度この三月できれる事になつてゐる。大學をやめても可いといふ事は、漱石の前前から公言してゐる所である。――雪鳥は、漱石がさういふ朝日新聞社にとつて、最も都合の可い事情の下にある旨を聽いて、漱石が確答を避け熟考を約したにも拘はらず、旣に自分の使命が果たされたと感じ、當時漱石が住んでゐた本鄉區西片町十番地ろノ七號の、すぐ近所に住んでゐた長谷川二葉亭の家に駈け込んで、其所で雪鳥の來るのを待つてゐた、弓削田精一(當時の通信部長)と澁川玄耳とに、「交涉有望」と復命したのださうである。それを聽いて、その時初めてその計畫を知つた二葉亭も、弓削田精一も澁川玄耳も、ともに「喜び勇ん」だと、雪鳥の思ひ出に書いてある。

然し雪鳥の見當は外れなかつた。三月四日漱石は雪鳥に宛てて、「拜啓先日は御來駕失敬致候其節の御話しの義は篤と考へたくと存候處非常に多忙にて未だ何とも決せざるうち大學より英文學の講座擔任の相談有之候。因つて其方は朝日の方落着迄待つてもらひ置候。而して小生は今二三

週間の後には少々餘裕が出來る見込故其節は場合によりては池邊氏と直接に御目にかゝり御相談を遂げ度と存候。然し其前に考の材料として今少し委細の事を承はり置度と存候／一手當の事其高は先日の仰の通りにて増減は出來ぬものと承知して可なるや／それから手當の保證　是は六ぢみに免職にならぬとか、池邊氏のみならず社主の村山氏が保證してくれるとか云ふ事。／何年務めれば官吏で云ふ恩給といふ樣なものが出るにや、さうして其高は月給の何分一に當るや。／小生が新聞に入れば生活が一變する譯なり。失敗するも再び教育界へもどらざる覺悟なればそれ相應なる安全なる見込なければ一寸動きがたき故下品を顧みず金の事を伺ひ候／次には仕事の事なり。新聞の小說は一回(年に)として何月位つゞくものをかくにや。それから賣捌の方から色々な苦情が出ても構はぬにや。小生の小說は到底今日の新聞には不向と思ふ夫でも差し支なきや。尤も十年後には或はよろしかるべきやも知れず。然し其うちには漱石も今の樣に流行せぬ樣になるかも知れず。夫でも差支なきや。／小說以外にかくべき事項は小生の隨意として約どの位の量を一週何日位かくべきか。／それから學校をやめる事は勿論なれども論說とか小說とかを雜誌で依賴された時は今日の如く隨意に執筆して然るべきや。／それから朝日に出た小說やら其他は書物と纏めて小生の版權にて出版する事を許さるゝや／小生はある意味に於て大學を好まぬものに候。然しある意味にては隱居の樣な教授生活を愛し候。此故に多少躊躇致候。御迷惑とは存じ候

へど御序の節以上の件々御聞き合せ置被下度候。尤も御卽答にも及ばずもし池邊氏に面會致す機會もあらば同氏より承はりてもよろしく候。先は用事のみ　艸々」と書き、更に追加して、「「大學を出て江湖の士となるは今迄誰もやらぬ事に候夫故一寸やつて見度候。是も變人たる所以かと存候」」と書いた。

是に對する社の返事を持つて、雪鳥が漱石を訪問したのは、三月七日である。その翌朝雪鳥は漱石に宛てて、「謹啓。昨日は御邪魔仕候奉萬謝候。早速社の方へ參り委細申通じ候處、一同前途の有望なる可きを欣び居り候。彼時差上置候箇條書の內、小說以外の御執筆に就き、尙御相談可仕旨記載有之候は、決して先生に多大の御勞力を願ふ意味に無之、却而御都合次第にて分量・度數を減輕す可き餘地を示したるものゝ由申居候。要するに成丈御氣樂に御執筆被下候樣社の方にては注意致居候間、其邊は毛頭御懸念なき樣、尙小生よりも申上置べき旨呉々も申出候。／又時勢に關するものなどの御高說は、是を第三面の第一欄（主筆執筆の欄）へ揭げ度き希望の旨、話し有之候。社說として從來全く文藝論なきは、啻に編輯局員の遺憾とする處なりし由に候。尙御約束の條件は、御高見によりては、尙多少變改の餘地も有之候由申候。兎に角御入社の儀御承諾被下候樣、尙小生よりも强ひて御願申上べき旨、繰返し依賴相成候。／御多用中度々御妨げ仕恐縮の至に御座候。先は右申上置度如斯御座候　恐惶謹言」と書いてゐる。此所に「彼時差上置候箇

條書」といふのは、漱石が參考の爲に承知して置きたいと言つて、三月四日の手紙に列記した條條を、半紙を横に二つに折つて、上段に、恐らく雪鳥が、筆で、一一箇條書きにして行つたものの下段に、恐らく池邊三山が、ペンで一一答へて行つたものを指すものである。それにはかうある。——

1. 手當月額如何。竝に其額は固定するか或は累進するか
　月俸二百圓、累進式ナリ、但シ僕ノ如キ怠ケ者ハ動モスレバ固定シ易キ傾向アリ

2. 無暗に免職せぬと云ふ如き保證出來るや。池邊氏或は社主により保證され得べきか
　御希望トアラバ正式ニ保證サスベシ

3. 退隱料或は恩給とでもいふ樣なものゝ性質如何。竝に其額は在職中の手當の凡そ幾割位に當るや。夫等の慣例如何
　既ニ草案ハアルモ未ダ確定ニ至ラズ、併シ早晩社則ガ出來ルナラント信ズ、先ヅ御役所竝位ノ處ト見當ヲ附ケテ置イテ戴キタシ

4. 小說は年一回にて可なるか。其連續回數は何回位なる可きか
　年ニ二回、一回百回位ノ大作ヲ希望ス、尤モ回數ヲ短クシテ三回ニテモ宜敷候

5. 作に對して營業部より苦情出ても構はぬか
　營業部ヨリ苦情ノ出ル抔イフ事ハ絶對的ニナキヿヲ確保ス

6. 自分の作は新聞(現今の)には不向とおもふ、夫でも差支無きや

差支ナシ、先生ノ名聲ガ後來朝日新聞ノ流行ト共ニ益世間ニ流行スベキヿヲ確信シ切望ス

7. 小説以外に書く可き事項は、随意の題目として一週に幾回出す可きか、又其一回の分量は幾何

此事ハ其時々ニ御相談致シタシ、多作ハ希望セズ、又ソー無理ナヿハ願ハズ、其時々社モ希望ヲ述ベ、先生ノ御希望モ伺ヒ臨機ニ都合ヨク取極メタシ、

8. 雑誌には今日の如く執筆の自由を許さる可きか

從來御關係ノ深キ『ホトトギス』ヘハ御執筆御自由ノヿ、其他一二ノ雑誌ヘ論説御寄稿ハ差支ナシ、但シ小説ハ是非一切社ニ申受タシ、又他ノ新聞ヘハ一切御執筆ナカランヿヲ希望ス

9. 紙上に載せたる一切の作物を纏めて出版する版權を得らる可きか

差支ナシ

――是は、當事者雙方の意志を記録した、當時の唯一の文獻である。雪鳥は、自分が仲に立つてゐながら、雙方の意志を、少しでも曖昧に、もしくは謬つて、雙方に傳へてはならないといふ

用意から、わざわざかういふ文書を作成したものに違ひない。是を見て漱石は、三月十一日に、三度目の手紙を雪鳥に書いた。――「拝啓先日御話しの朝日入社の件につき多忙中未だ熟考せざれども大約左の如き申出を許可相成候へば進んで池邊氏と會見致し度と存候／一小生の文學的作物は一切を擧げて朝日新聞に掲載する事／一但し其分量と種類と長短と時日の割合は小生の隨意たる事。（原換言すれば小生は一年間に出來得る限り感興に應じ又思索の暇を見出して凡てを朝日新聞に致す事。但しもとより文學的の述作故に器械的に時間を限る能はず。小説抔にても回數を受合ふ譯に行かず。時には長くなり又短かくなり。又は一週に何度もかき又は一月に一二度しか書かぬ事あるべし。而して小生のやり得る程度は自己にも分らぬ故先づ去年中に小生がなし得たる仕事を以て目安とせば大差なからんかと存候尤も去年の仕事は學校へ出た上の事故專門に述作に從事せば或は量に於て多少の增加を見るに至るべきかなれどまづ標準はあの位と御考ありたし。而して小生の仕事の過半は無論美文ことに小説にあらはるべきかと存候。（或は長きものを一回にて御免蒙るか又は坊ちやんの樣なものを二三篇かくか其邊は小生の隨意とせられたし）／一報酬は御申出の通り月二百圓にてよろしく候。但し他の社員並に盆暮の賞與は頂戴致し候。是は雙方合して月々の手宛の四倍（？わからず）位の割にて豫算を立て度と存候／一もし文學的作物にて他の雜誌に不得已掲載の場合には其都度朝日社の許可を得べく候。（是は事實として殆んどなき

事と存候。既に御許容のホトトギスと雖ども入社以後は滅多に執筆はせぬ覺悟に候）／一但し全く非〔原〕文學的ならぬもの（誰が見ても）或は二三頁の端もの、もしくは新聞に不向なる學説の論文等は無斷にて適當な所へ掲載の自由を得度と存候／一小生の位地の安全を池邊氏及び社主より正式に保證せられ度事。是も念の爲めに候。大學教授は頗る手堅く安全のものに候故小生が大學を出るには大學程の安全なる事を希望致す譯に候。池邊君は固より紳士なる故間違なきは勿論なれども萬一同君が退社せらるゝ時は社主より外に條件を滿足に履行してくれ〔る〕ものなく又當方より履行を要求する宛も無之につき池邊君のみならず社主との契約を希望致し候。／必竟ずるに一度び大學を出でゝ野の人となる以上は再び教師抔にはならぬ考故に色々な面倒な事を申し候。猶熟考せば此他にも條件が出るやも知れず。出たらば出た時に申上候が先づ是丈を參考迄に先方へ一寸御通知置被下度候先は右用事迄　艸々頓首」といふのが、それである。

是で漱石の意志は、八分通りきまつたといふべきであつた。あとの二分を漱石は、池邊三山に會つて話をした上で、きめようとした。是は、池邊三山の都合を聽いた上で、漱石の方から會ひに行く豫定であつた。然るに三山は先を越して、自分の方から漱石を、西片町のうちに訪ねて來た。明治四十五年（一九一二）五月の『池邊君の史論に就いて』の中で、漱石は、「余が朝日新聞に入社の際、仲に立つものが漸次往復の勞を重ねた末、ほゞ相談が纒まりかけた機を見て、池邊君

は先を越して向ふから余の家を訪問した。」と書いてゐる。それは三月十五日の事である。三山は漱石に宛てて、三月十七日の日附で、「拜啓一昨日は御邪ま恐縮奉存候來十九日午後五時より御差支無御座候はゞ日本倶樂部（脇に「有樂町中山一位局横丁」と書入あり）にて共に晩食仕度御來駕奉願候同卓は同社の人々に候中村不折君にも申置候澁川玄耳君に有緣の軍人が二三人來るやも計られず候總人數多くて七八人少くて五六人に候御承諾奉希望候　草々」と書いた。

漱石は初めて三山に會つて、西鄕隆盛を聯想したのださうである。漱石はその時の事を回想して、「勿論西鄕隆盛に就て余は何の知る所もなかつた。だから西鄕から推して池邊を髣髴する譯はないので、寧ろ池邊から推して西鄕を想像したのである。西鄕といふ人も大方こんな男だつたのだらうと思つたのである。此感じは決していたづら半分のものではなかつた。其證據には、彼が歸つた後で、余はすぐ中間に立つて余を「朝日」へ周旋する者に手紙を出した。其文句は固より今覺えてゐる筈がないが、意味をいふと、是迄話が着々進行して略纏まる段になつたにはなつたが、何だか不安心な所が何處かに殘つてゐた。然るに今日始めて池邊に會つたら其不安心が全く消えた。西鄕隆盛に會つたやうな心持がする。——ざつと斯んなものであつた。池邊君が余の事を始終念頭に置いて、余の地位のために進退を賭する覺悟でゐたといふ話はつい此間池邊君と關係の深いある人の口を通して余に傳へられたから、初對面の時彼の人格に就いて余の胸に映じた

此畫像は全くの幻影ではなかつたのである。」と言つてゐる。最初漱石招聘の議を發案した大阪の方との話し合ひは、漱石が京都に行き、其所で大阪の鳥居素川と會ふ日まで殘されたが、然し漱石入社の最後の決心は、かうして、池邊三山との唯一度の會見によつて、堅められた。漱石は『入社の辭』の中で、「人生意氣に感ず」といふ言葉を引用してゐるが、漱石が意氣に感じたのは、勿論主として三山の意氣に感じたのだと言つて可いのである。

三月四日の漱石の手紙にもあるやうに、漱石は丁度この時分、大學から英文學の講座を擔任してくれないかといふ相談を受けてゐた。敎授にならないかといふ相談である。然し是は、朝日新聞入社の事がきまつたので、無論漱石は斷つた。漱石が三月二十五日の日附で「小生儀今般一身上の都合により文科大學講師の解囑を希望致候につき可然御取計相成度候也」と書いた辭表を提出し、それを大學の事務から、文科大學講師「ヲ免セラレ度候ニ付御許可相成度此段相願候也」と訂正して返送され、もう一度その「講師解囑願」を提出し直ほさなければならなかつたのは、この時の事である。同じやうに漱石は、三月二十二日片上天絃に宛てて、「拜啓かねて御約束の早稻田文學へ寄稿の件荏苒遲延申譯無之候然る處今般ある事情にて教員生活をやめ新聞に這入る事と相成候に就ては一切の文學的作物は其方へ廻さねばならぬ義務を生じ候。因て甚だ申譯なき次第ながら御約束を履行する運びに至りかね候右不惡御ゆるし被下度先は右御申譯旁御斷はり迄

艸々頓首」と書いて、寄稿の約束を斷つた。高濱虚子に宛てた當時の手紙はないが、『ホトトギス』に寄稿する事を遠慮する旨を、恐らく漱石は口頭で、虚子に通達したものに違ひない。

漱石は、長い間の念願が屆いて、教師をやめ、作家を「本職」として生活する事が出來るやうになつた。漱石が身も輕輕と深呼吸する氣持になつた事は、十分想像する事が出來る。然し漱石には、それとともに、全然新しい生活に對する、名狀する事の出來ない不安があつた事も、亦爭はれなかつた。漱石は、「小生はある意味に於て大學を好まぬものに候。然しある意味にては隱居の樣な教授生活を愛し候。此故に多少躊躇致候。」と言つてゐる。また「大學教授は頗る手堅く安全のものに候故小生が大學を出るには大學程の安全なる事を希望致す譯に候。」と言つてゐる。また「必竟ずるに一度び大學を出でゝ野の人となる以上は再び教師にはならぬ考故に色々な面倒な事を申し候。」と言つてゐる。安全無比の大學生活をやめて、假令基礎は鞏固であるとは言つても、とかく個人の好惡と意志とに支配され易い雇傭關係に這入るのみならず、又とかく人氣に左右され易い職業人としての作家生活に身を委ねようといふのだから、漱石がいくら池邊三山に西鄕隆盛を感じたとしても、漱石は自分の心の底から、自分の將來に對する漠然たる不安を、どう追ひのける譯にも行かなかつたに違ひないのである。三月二十三日漱石は野上豐一郎に宛てて、「世の中はみな博士とか教授とかを左も難有きものゝ樣に申し居候。小生にも教授になれと申候。

教授になつて席末に列するの名譽なるは言ふ迄もなく候。教授は皆エラキ男のみと存候。然しエラカラざる僕の如きは殆んど彼等の末席にさへ列するの資格なかるべきかと存じ。思ひ切つて野に下り候。生涯は只運命を頼むより致し方なく前途は惨怛たるものに候。それにも拘はらず大學に噛み付いて黄色になつたノートを繰り返すよりも人間として殊勝ならんかと存候。小生向後何をやるやら何が出來るやら自分にも分らず。只やる丈やる而已に候。」と書いてゐる。漱石は、自分の進む道はこの道を措いて外にないと覺悟して、新しい生活に跳り込んだのではあつたが、然し可能の最惡の場合を考へれば、まつたく「生涯は只運命を頼むより致し方なく前途は惨怛たるもの」で、「只やる丈やる而已」だといふより仕方がなかつたのだらうと思ふ。

それだけ漱石の當時の氣持は緊張し、又それだけ漱石の當時の書くものは激越の調を帶びる。三月二十三日の野上豐一郎宛の手紙が、既にさうである。四月二十三日に書かれた『野菊菊』の序が、さうである。五月三日に發表された『入社の辭』が、さうである。「明治四十年五月」といふ日附を持つた『猫』下卷の序が、さうである。恐らく漱石は、自分の新らしい生活に、暫くの間は、なんとしても馴染む事が出來なかつたのだらう。多少氣を廻して言へば、漱石のこの緊張は、漱石が『虞美人草』を書き終るまでは、竟にほぐれる事がなかつたのである。

咒　京都

漱石は池邊三山と會つて朝日新聞入社の肚をきめ、大學と高等學校とに辭表を提出し、去年から持ち越しの『文學論』校閲の仕事を卒へ、明治四十年（一九〇七）三月二十八日東京を出發して、京都に向つた。京都は漱石が、明治二十五年（一八九二）の夏、正岡子規とあるいて以來、漱石にとつて十五年振りの土地である。

のみならず京都には、其所に新設された文科大學の學長として、狩野亨吉が赴任してゐた。明治四十年一月六日漱石は伊津野直に宛てて、「閑靜なる御住居を卜され候由結構狩野君より每々京都はよい所だ是非こい〳〵といはれ候小生も行き度候。一ケ月ばかり遊んで東京へ歸つたら嘸面白からうと存候竹藪の中抔は東京では到底住めず候。」と書いてゐる。その上二月には、菅虎雄が三高に赴任し、狩野亨吉と同居してゐた。三月二十三日野上豐一郎宛の手紙に、「京へは參り候。……京都には狩野といふ友人有之候。あれは學長なれども學長や教授や博士抔よりも種類

の違ふたエライ人に候。あの人に逢ふために候。わざ〳〵京へ參り候。」とあるやうに、無論漱石は狩野亨吉や菅虎雄に會ふ爲に、また大阪の「新聞社の人々と近付になる」爲に、京都に出かけて行つたのではあつたが、それとともに漱石には、京都で暢氣に遊んでゐる內に、その內書かなければならない筈の小説の材料を、出來れば拾つて來たいといふ下心も、多少は動いてゐたに違ひないと思ふ。漱石は、その後、旅行に出れば、必ず日記をつける事にしてゐたが、然し漱石の日記らしい日記の殘つてゐるのは、明治三十三年（一九〇〇）の渡歐日記、明治三十四年（一九〇一）のロンドン日記以後、この京都の旅の日記をもつてその嚆矢とするといふ事も、漱石にこの下心があつた事を指示する。漱石は此所で、自分の見たもの聽いたものを、實に丹念に書きとめてゐるのである。

事實また漱石は、この京都の旅の見聞の中から、例へば叡山上りや保津川下りのやうなものを、『虞美人草』の、一つはその發端に、一つはその途中に挾んで、全部の事件が東京で行はれる事の單調を防ぐ、方便に用ひた。日記によると、漱石が嵐山に赴き、保津川を下つたのは、四月八日、叡山に登つたのは、その翌四月九日の事である。日記には、「〇嵐山／〇保津川。／潭、激流。岩。平ナルモノcrystal ノ如きもの〔畫略〕の如きもの、不規則に凸凹あるもの、烏帽子岩、書物岩、屛風岩。／〇山、松山、石山、雜木山。／〇杣、木樵、猿の如し。／〇筏、一列每ニ揖ヲ

トル。／〇筏士　岩の上に數多辨當ヲ食フ／〇舟、構造、舟子四人。二人は櫂ヲ右側に結ひつける(籐蔓)。一人は舳ニテ竹ノ竿デ岩ヲツク。一人は艫デ揖ヲトル／〇仁和等／田樂／〇妙心寺／〇等持院」とあり、「叡山上リ。高野より登る。轉法輪堂。叡山菫。草木採集。八瀨の女／根本中堂。學校デ晝食ヲ乞ふ案内に應ずるものなし。／〇坂本。はしり堂にて中食。石橋の上。石橋は古雅。數三あり。／〇大津迄汽船を待つ。時間かゝる。車にて大津迄行く。疏水の隧道を下る。篝火。欸乃。／〇十一屋。平八茶屋。高野村へ行く途中山端にあり。／御前川上、わしや川下で……」とある。その翌、四月十日、漱石は虛子に誘はれ、雨を衝いて平八茶屋へ行き、それから都踊を見た上で一力に赴き、其所で雜魚寢をしたといふが、是は到頭何所にも使用されなかつた。日記には、「〇一力亭。藝者が無暗に來る。舞子が舞ふ。」といふのと、小さな女らしい手で、「ふとんきてねたるすがたやふるめかし……」といふ、歌の文句が書きとめてあるだけである。

漱石が京都に來たと聽いて、大阪の鳥居素川は、三月三十一日、狩野亨吉の所に、漱石を訪ねて來た。さうして素川は、自分の計畫したやうには事が運んで居らず、漱石は大阪に來るどころではなく、東京にゐて『東京朝日』の爲に小説を書けば可いやうに考へてゐる事を知つて、大變に殘念がつたが、今更どうする事も出來なかつた。三月三十一日素川は漱石に宛てて、「拜啓仕候今朝は始て拜眉仕候に拘らず不得要領の長話をいたし御迷惑恐縮に奉存候歸來社長に相話申候處

御心中も相酌み又大阪朝日最初の申出も徹底し居らざりしこと遺憾に存候得共何れにしても御入社確定仕候上は御懇親も願度四日夕御差支無之候はゞ當地にて粗飯差上度御都合如何に御座候哉當所は必ず四日と限り不申候間御都合御洩被下度此段得貴意申候　頓首」と書いてゐる。次いで素川は、四月二日附で、再び漱石に宛てて、「拝啓昨（原）日一書差上置候間御落掌被下候事と奉存候然るに東京朝日にては別紙の如く既に御入社の事を發表いたし小生の苦心も水泡に歸し候然るに東京朝日よりも貴作を東西兩紙同日に掲載しては如何との事申來り其の事は大兄も御話し被下候事にて大に讓歩して仕方なく其通りに致し申候就ては御入社の事當紙にても吹聽いたし度村山社長よりは一應大兄の承諾を得てと申候へども東朝既に發表し作戰上甚だ後れを取り實は本夕參上仕らんかとも存候へども其の時間もなく小生の取謀らひにて遂に發表仕候間小生等の心情御酌取の上何卒御容認被下度候實は大兄を擁し同じ堡壘に據りて天下を引受勇戰仕度存居候も一蹟再蹟遂に是に至り併し何れにしても御入社相叶本懐不過之萬事皆因縁のシガラミと存申候大兄御不滿の事も御海容奉祈候左れば明後夕拜眉仕候も最早何も申上べき事無之唯々一笑握手歡を盡し可申而已村山社長よりも宜敷申出候　匆々拜具」と書いた。――漱石は是まで東京の事ばかり考へてゐたのである。鳥居素川の計畫が、漱石を大阪に呼び下さうとするのみならず、漱石を「擁し同じ堡壘に據りて天下を引受勇戰」しようとする點にあるのだなどと聽いたら、漱石は或は朝日新聞

に入社する事を、竟に承諾しなかつたかも知れないとも思はれる。その點で池邊三山が『東京朝日』に居り、その三山自身が先づ漱石に會つたといふ事は、漱石を朝日新聞に入社させる、最良の方法であつた。然し漱石が『大阪朝日』の申し出で入社するやうになつたといふ事實と、然もそれが漱石には少しも徹底せず、漱石は東京にゐて大阪には來ないといふ事實とは、漱石に『大阪朝日』もしくは鳥居素川に對して、氣の毒な事をしたといふ感じを持たせるには、十分であつた。それだから漱石は、自分が原稿の書き溜めをして、東西の『朝日』に同じものが同日に載るやうに、都合をつけようと申し出した。それは『東京朝日』からも申し出され、大阪ではそれを受け入れたが、然しその位な事では、東京方から出し拔かれたといふ鬱憤は、なかなか納まらなかつたものと見えて、素川はその後いろんな、大阪の方だけに出て、東京の方には載らないやうな、特別な原稿を書く事を、漱石に注文し始めるのである。勿論素川は、『東京朝日』と漱石との間に、原稿の分量に就いて、どんな契約があつたかは、恐らく知らなかつたのに違ひない。然も事情が事情であつて見れば、漱石は、東京の方との契約を盾に、無下にその注文を斷る譯にも行かなかつた。かうして漱石は、雙方の注文が聯絡なしに來る爲に、暫くの間は、契約以上に働かなければならなくなるのであるが、それでも漱石は別に厭な顏もせず、その注文に應じて、いろんなものを書いた。例へば『京に着ける夕』だの『文鳥』だのは、『大阪朝日』の爲だけに書かれ

たものである。『虞美人草』のあとにすぐ『坑夫』が書かれ、『坑夫』を書いた年に『三四郎』が書かれたのも、亦『大阪朝日』からの注文によるものである。

それはともかく漱石は、指定された四月四日に大阪に赴き、朝日新聞社で社長の村山龍平その他に會ひ、夜はホテルの晩餐會に出席し、その晩は高麗橋際の星野に泊つて、翌五日、伏見・桃山・宇治などをあるいて、京都に歸つて來た。京都に漱石は、なほ十一日まで滯在する。さうして十一日の夜行で、十二日の朝東京に歸つて來た。——およそ十五日の旅である。

五〇 『虞美人草』

京都から歸つて來て間もなく、明治四十年(一九〇七)四月二十日、漱石は美術學校で講演した。その筆記に手を入れたものは、『入社の辭』に次いで、五月四日から六月四日まで、二十七回に互つて『東京朝日』に掲載された。『文藝の哲學的基礎』が、それである。

是より先き漱石は、書肆の乞ひに應じて、曾て自分が大學で講じた『文學論』を出版する氣になり、その整理を中川芳太郎に委囑してゐたが、原稿が出來上がつたので、明治三十九年の十一月十一日ごろから、校閱にとりかかつた。然しそれは、いくら直して見ても、又いくら足して見ても、どうにも漱石の意に滿たず、その爲め漱石は、朝日入社の話がきまり、京都に立つて行くぎりぎりの時までその仕事に取りつき、到頭半分以上、すつかり書き直してしまはなければならなかつた。漱石は丁度五ケ月近く、自分のそれに費し得る全餘暇をあげて、この仕事にかかつてゐた譯である。漱石の頭は、その業を卒へても、絕えず『文學論』的に鳴り響き、自分の『文學

論』を中心に、あの問題この問題と、いろんな事を考へたものだらうと思ふ。この『文藝の哲學的基礎』も、恐らく漱石がロンドンにゐる時分に、自分の「文學論」の基礎的な部分として、既に一往は考へ通して見はしたものの、大學の講義では、それが餘り理路に傾き過ぎると認めたか、それとももつと鍛錬を必要とすると認めたか何かで、そつと取りのけて置いたのを、この機會に纏められるだけ纏めて、近く出版にならうとしてゐる自分の『文學論』の、補遺にしたいと思つたもの、卽ち漱石の頭の『文學論』的震動の、一つの餘波だつたのに違ひないのである。もつとも當時新聞に載せるに就いて、漱石が書いたはしがきには、「是より朝日新聞社員として、筆を執つて讀者に見えんとする余が入社の辭に次いで、余の文藝に關する所信の大要を述べて、余の立脚地と抱負とを明かにするは、社員たる余の天下公衆に對する義務だらうと信ずる。」とある。人間の理想を大別すれば、眞・善・美・壯などとなるが、眞を標榜する自然主義は、人間の理想の四分の一を表現するに過ぎない。それはそれで可いとしても、それだけが人生を描寫したものであるかの如くに考へ、眞を標榜する爲に、他の善・美・壯などといふ理想を冒さうとするに至つては許し難いといふやうな主意のこの講演は、事實また漱石の「立脚地と抱負とを明かに」したものであつたに相違ないのである。

その内『文學論』が出來あがつて來た。然るにそれは、到る處に誤植があつて、どうにも手の

著けやうのない本であつた。是は校正の任に當つた中川芳太郎が、かういふ仕事に全然不馴れなせゐでもあつたが、また印刷所の職工が無責任な爲でもあつた。漱石は、俺に金があつたら、本をみんなこの庭に積み上げて、焚いてしまふとまでも言つて憤慨したが、それは到底不可能の事だつたので、小宮豐隆が十八頁の正誤表を作つて初版本に添へ、再版本はそれに從つて全部象嵌訂正を試みる事にして、一往の段落をつけた。明治四十年(一九〇七)五月三十日漱石が菅虎雄に宛てて、「文學論が出來たから約束により一部送る。校正者の不埒な爲め誤字誤植雲の如く雨の如く癇癪が起つて仕様がない。出來れば印刷した千部を庭へ積んで火をつけて焚いて仕舞いたい。」と書いてゐるのは、その時の事である。漱石の肝癪が絶頂に達してゐた時、丁度寺田寅彦がやつて來て、科學上の論文などは丁寧な正誤表がついてゐればゐるほど値うちがある、正誤表のページ數が多いといふ事は必しもその本の値うちを落す所以にはならないと言つたので、漱石の肝癪が多少は納まつたなどといふ事も、この時の事を記念する、一つのアネクドートである。

かうして漱石は、『虞美人草』の豫告を五月二十八日に新聞に掲げた上で、六月四日から原稿を書き出した。それが新聞に掲載され始めたのは、六月二十三日の事である。

漱石が大學をやめて新聞に這入つたといふ事は、當時の一大センセーションであつた。その漱石が今度愈『虞美人草』を書くといふので、三越では虞美人草浴衣を賣り出す、玉寶堂では虞美

人草指環を賣り出す、ステーションの新聞賣子は「漱石の虞美人草」と言つて朝日新聞を賣つてあるくといふ風に、世間では大騷ぎをした。それが漱石に反響した爲もあつたに違ひないが、それよりも新生活に馴染まない爲の緊張や、その新生活に這入つて初めて小說を――長篇小說を書く爲の緊張や、いろんな緊張が重なつて漱石は固くなり、文章の上にも、主題の上にも、人物の上にも、また布置結構の上にも、鏤骨彫心の苦心を重ねて筆を執つて行つた。六月四日漱石は小宮豐隆に宛てて、「今日から愈虞美人草の製造にとりかゝる。何だかいゝ加減な事をかいて行くと面白い。」と書いてゐるが、然し事實は「いゝ加減な事」でも「面白い」でもなんでもなく、せめてさうでも言つて平氣にならうと努めるのでなければ、緊張してゐる事が自分にも分かつて、少し困つたのではないかと思ふ。現にそれから二週間たつかたたない六月十七日に、漱石は松根東洋城に宛てて、「御手紙拜見長い手紙をかく餘裕がない每日虞美人草の事ばかり考へてゐる今日社から原稿をとりにくる九十七枚わたした。／折角苦心してかいた所もあとから讀み直すと何だこんなものかと思ふ事多し。つまらない。」と書いてゐる。六月二十一日鈴木三重吉に宛てては、「本日虞美人草休業。肝癪が起ると妻君と下女の頭を正宗の名刀でスパリと斬つてやり度い。然し僕が切腹をしなければならないからまづ我慢するさうすると胃がわるくなつて便祕して不愉快でたまらない僕の妻は何だか人間の樣な心持ちがしない。」と書いてゐる。漱石の心持が異常

に緊張する結果、漱石は段段イリタブルになつて來るのである。何かにつけて肝癪が起り、神經がピリピリし、弟子の所へかういふ事でも書いてやらなければ、どうにも始末がつかなくなるのである。

漱石は夏が一番嫌ひであつた。そのくせ漱石は、朝日新聞に入社して長篇小説を書き出してから、どういふものか、それを夏から書き出すか、書いてゐて夏にかかるか、執筆と夏とがとかくくつつき合ふ廻り合せになつた。初めての長篇小説である『虞美人草』が既にそれで、漱石は夏と戰ひつつ筆をとつたのであるが、いくら緊張してゐても、暑さが段段劇しくなつて來ると、漱石は次第に仕事に厭厭して、早く小説を切り上げたい心持に、幾度となく襲はれた。もつとも是は、漱石の是までの經驗では、執筆は一週間か十日で、長くても二週間、その二週間ぶつ通しに小説を書いてさへ、もう原稿紙を見るのもいやだといふ氣がしてゐたといふのだから、その點で漱石が小説を早く切り上げたいと思つたせゐもあつたには違ひない。七月十六日漱石は高濱虚子に宛てて、「虞美人草はいやになつた。早く女を殺して仕舞たい。熱くてうるさくつて馬鹿氣てゐる。是インスピレーションの言なり。」と書いてゐる。七月二十日野間眞綱に宛てては、「小説はまだ書き了らず氣の長い事驚ろくべし。胃はよろしからず。旅行が致したし。」と書いてゐる。七月二十六日鈴木三重吉宛の手紙には、「虞美人草はだら〳〵小説七顚八倒虞美人草と名づけて未

だ執筆中」とある。

それでも漱石は、無理をして「早く女を殺して仕舞」ふ氣にはならなかつた。自然界の事物の發展には自然な經過がある。その自然な經過を無視すれば、小說は拵へ物になつてしまふ。漱石はそれを恐れた。八月五日漱石は鈴木三重吉に宛てて、「日々暑い事だ。偖旅行の儀は延引又延引今月の半頃ならばと思つてゐるが一方では段々考へて見ると例の小說がどうも百回以上になりさうだ。短かく切り上げるのは容易だが自然に背く〔と〕調子がとれなくなる。如何に漱石が威張つても自然の法則に背く譯には參らん。從つて自然がソレ自身をコンシユームして結末がつく迄は書かなければならない。するとことによると君と同伴行脚の榮を辱ふする譯に參らんかも知れぬ。旅行も大事だが虞美人草は胃病よりも大事だから其邊はどうか御勘辨を願ひたい。トルストイ。イブセン。ツルゲチフ。抔は怖い事更になければ只自然の法則は怖い。もし自然の法則に背けば虞美人草は成立せず。從つて誰がどう云つてもゾラが自然派でフローベルが何とか派でも其他の人が何とか蚊とか云つてもどうしても自然の命令に從つて虞美人草をかいて仕舞はねばならぬ萬一八月下旬に自然から御許が出たら早速端書をあげる。夫迄は吉原の美人でも見てインスピレーシヨンを起して居たまへ。もし自然の進行が長引けば此年一杯でも原稿紙に向つてゐなければならない。嗚呼苦しいかな。」と書いてゐる。八月十五日小宮豐隆宛の手紙には、「漱石は沙翁を繰

り返す氣もなし語學者になる氣もないが、此兩人の根氣丈はもらひたい。小説をじ然と發展させて行くうちには中々面倒になつてくる。是で見るとヂッケンスやスコットが無暗にかき散らした根氣は敬服の至だ。彼等の作物は文體に於て漱石程意を用ひてゐない。ある點に於て侮るべきものである。然しあれ丈多量かくのは容易な事ではない。／僕も八十位迄非常な根氣のいゝ人と生れ變つて大作物をつゞけ樣に出して死にたい。」とある。

漱石は俳句を繫げて行くやうな文章で『虞美人草』を書いた。是は例へば『幻影の盾』や『薤露行』のやうな前例があるにはあるが、然し長篇に於いては、殆んど不可能な文體である。然し漱石は、遮二無二、その不可能な文體で押し通した。是が漱石を苦しめる第一の原因だつたらうと思ふ。その上漱石は、是まで短篇小説ばかりを書いて來てゐる。長篇小説は初めてである。短篇小説と長篇小説との相違はいろいろあり得るが、最も重大な相違は、長篇には建築的な才能が特に必要だといふ事である。然も長篇小説は、言はば、生きた人間が生きたままで材料にされる建築であつた。生きた人間を生きたままに動かして、自分が思ふやうな建築を築き上げる爲には、作者の深い人間知と廣い人生知と、それらのものを自由に操縱する事の出來る、叡智と根氣とが必要である。勿論漱石は、是までの研究によつて、長篇にはさういふものが必要である事を、はつきり知つてゐたには違ひない。殊にこの正月に書いた『野分』は、白井道也の世界と中野春臺

の世界とを暫らく別別に書いて、それを高柳周作で繋げ、最後にこの三つの世界を一點に集めて全體の締め括りをつけるといふ、相當建築的な構成を持つてゐて、その點では『虞美人草』の構成の習作だと言ふ事も出來るのだから、漱石はその方面で、既に自分の才能を試驗して見てゐたのだと言ふ事も出來る。然し『野分』は、白井道也の論文と演說とを骨子にして、あとはほんのつけたしのやうな、短篇に過ぎなかつた。人間を多勢出して來て、その人間と人間とを擦り合せようとする『虞美人草』とは、譯が違ふ。それだけ漱石は『虞美人草』で、いろいろ苦しむとともに、いろいろ啓發される所があつたに違ひないと思ふ。

漱石は爾後の長篇小說に、決して『虞美人草』のやうな、絢爛な文章を用ひなかつた。また決して『虞美人草』のやうな、演劇的に大がかりな結構や場面を用ひなかつた。是は必ず漱石の、『虞美人草』による初めての體驗の、貴重な結果である。然し漱石が『虞美人草』によつて獲た、最も貴重なものは、腰を据ゑて題材と取つ組み合ふ、粘りの習得ではなかつたかと思ふ。是までどつちかと言へば、一氣にものを書く事に馴らされてゐた漱石が、『虞美人草』の爲に三ケ月近く机の前に縛りつけられてゐたといふ事は、漱石にとつて破天荒の事だつたからである。勿論漱石は、既にロンドンにゐて、「六七ケ月の間」最も銳意に最も誠實に、「研究を持續し」てゐる。最近でも『文學論』の校閱に、五ケ月を費してゐる。漱石に粘りがないとは、言はれない。然し片

方は讀む方である。片方は、學校に出たり、小說を書いたり、引越しをしたり、本を讀んだりの片手間で、その事だけに朝から晩までかかりつきりにかかつてゐたのは、或は一月、高高一月半ぐらゐの間だつたらう。その上是は自分の意見を表現する、理論的な文章である。然るに『虞美人草』は小說であつた。多くの他人の心持の中に這入り、その心持の自然な展開に沿うて、自分の思ふ所へ、徐徐に事件を傾斜させて行かなければならない、特別な仕事である。それだけにいくら漱石がじりじりしても、それは、結局漱石のいふやうに、「自然がソレ自身をコンシユームして結末がつく迄は」、結末のつけやうのない、自分の意志一つでどうする事も出來ない、仕事であつた。從つて漱石は、いくら悲鳴をあげてもなんでも、結局は「もし自然の進行が長引けば此年一杯でも原稿紙に向つてゐなくてはならない。」と覺悟しなければならないのである。然もこの事は、漱石の緊張をほごす上にも、また漱石の藝術を成熟させる上にも、非常に役に立つ、體驗であつたやうに見える。

漱石が『虞美人草』で取り扱はうとした問題はなんであるか。——明治四十年(一九〇七)七月十九日漱石は小宮豐隆に宛てて、「虞美人草は毎日かいてゐる。藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。德義心が缺乏した女である。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。然し助かれば猶々藤尾

なるものは駄目な人間になる。最後に哲學をつける。此哲學は一つのセオリーである。僕は此セオリーを說明する爲めに全篇をかいてゐるのである。」と書いてゐる。そのセオリーとは、言ふまでもなく、『虞美人草』の最後に置かれた、人間の第一義の生活——すべての問題を生か死かの、ぎりぎりの所まで押し詰めて考へる、悲劇的な生活の重要性を說いた、甲野さんの日記である。その爲め漱石は、甲野さんと甲野さんの妹、藤尾の親子とを、この小說の中心人物とする。さうして甲野さんと、甲野さんの味方である、宗近さんだの糸子だのを、第一義の生活の出來る人間の一群とし、藤尾親子と、藤尾親子の味方である小野さんのやうなのを、さういふ生活の出來ない、喜劇的な人間の一群とし、二つの群がいろんな因緣をもつて入り亂れる所を描き出さうとする。——甲野さんは高い所から、藤尾親子のする事言ふ事を眺めてゐる。我の強い藤尾は甲野さんに對して、初めから反感を懷いてゐる。藤尾の母は、生みの子の藤尾への愛にひかされて、藤尾に甲野の家を嗣がせたがつてはゐるが、さすが世間體を憚つて、それを口には出さない。さうして二人は甲野さんのゐない所で、額を鳩めて何かを凝議しては、陰から甲野さんに働らきかける。甲野さんには、然し、何もかも分かつてゐるのである。甲野さんは、家なんか欲しくなかつた。家が欲しいのなら、それを快く藤尾親子にくれてやつても可かつた。それを相手は少しも理解しないのみならず、いろいろ小刀細工をして、こつちに働らきかけて來るので、甲野さんは自

分の意志を、直截に發表する事が出來ない。發表しても、それをそのまま受け容れてもらへないのに、當惑してゐる。その上甲野さんは、藤尾の性質が、我が強くて、虚榮心に富んで、德義心だの、誠實だの、謙虚だのといふものが丸でない事を知つて、兄として妹に、どうにかそれを反省させてやりたいと思つてゐる。然し藤尾には支配慾と反抗心とが燃えてゐるだけなので、甲野さんの言ふ事なぞ、てんで受けつけようとしない。甲野さんは是を「業」と呼んでゐる。「業」の深い人間の爲には、「隻手を擧ぐれば隻手を失ひ、一目を搖かせば一目を眇す。手と目とを害うて、しかも第二者の業は依然として變」る所がない。從つて人は、それをそのままにして置く事は、いけない事であると知つてゐながら、どうしてやる事も出來ないのだと考へてゐる。

女性の我と虚榮と無理解と小刀細工とを、漱石は『野分』の道也の妻君に於いて描いた。『猫』の中ででも漱石は、多少さういふものに觸れないではなかつたが、然しほんの掠めて行く程度のものに過ぎなかつた。よしまともに取り扱ふ事があつても、『猫』第十一の場合のやうに、それは一般論に蒸餾して取り扱はれた。勿論『野分』では、それが、主題とされてゐる譯ではなし、また『猫』同樣に相當抽象化されてもゐるが、それでも此所では女性の惡德が、ともかく具體的なものに凝集され——卽ち白井道也の妻の形で、描き出されようとしてゐるのである。この點で『野分』は注目すべき作品であると言つて可いが、『虞美人草』では更に一歩を進めて、それを副

主人公格の藤尾親子に於いて描き出さうと試みられる。さうして漱石は、藤尾親子に働らきかけて、さういふ惡德を改めさせる責任のある甲野さんをして、それらの惡德は畢竟彼等の「業」なのだから、彼等が死に突き當つて「悲劇の偉大なる勢力」を味ふのでない限りは、竟に其所から救ひ出される機會はない。從つて自分は手を拱いて見てゐるより仕方がないのだと、宣言せしめる。『野分』の白井道也は、自分の妻の我と虛榮と無理解と小刀細工とにも拘はらず、超然として自分の道をあるいた。『虞美人草』の甲野さんは、藤尾親子のそれを、氣にし、非難し、改悛させる事を欲しながら、どうする事も出來ず、ただ相手に愛想をつかしてしまふより外はなかつた。是は恐らく漱石の當時の心の、二つの面を切り出して見せたものだらうと思ふ。

勿論『虞美人草』でも、『野分』と同じやうに、女性の我だの虛榮だの無理解だの小刀細工だのは、寧ろ抽象的・類型的に描き出され、具體的・箇性的に生き生きと表現されてゐない遺憾があつた。殊に『虞美人草』では、さういふ惡德の描寫は、作者自身も好む所でない旨を作中で明言し、もつと突つ込んで書く事が、是非必要な場合でも、「この作者は趣なき會話を嫌ふ。」などと言つて、わざとそれを回避しさへもしてゐる。從つて讀者には、漱石がさういふ惡德を嫌つてゐたといふ事は分かつても、その惡德そのものが、惡德として具體的に、讀者の頭に十分沁み込んで來ない不滿が、屢感じられもするのである。是は當時の漱石の、人生を把握する力量が、まだ

不足してゐる事を告げるものであるのかも知れない。それとも是は、當時の漱石の藝術觀が、それを具體的に表現する事を許さなかつた爲であるのかも知れない。然しともかく此所でさういふ事が問題にされるのみならず、それが殆んど中心の問題にされてゐるといふ事は、この『虞美人草』によつて漱石が、是まで觸れたくて堪らなかつたにも拘はらず、まともに觸れる事を避けてゐた形になつてゐたものに、正面から斬りつけて行つた事を物語るものである。その意味で『虞美人草』は、對象への斬り込み方の深淺はどうでも、男女間の戀愛の問題、殊に戀愛と正義との問題、さういふ問題を樞軸として廻轉する、後年の漱石の作品の軌道に、旣に乘つてゐるものであると言ふ事が出來る。漱石は此所で、一方では藤尾親子の惡德を、言はばかゝさにかかつて叩きつけるとともに、一方では、我のない、素直で、謙遜で、無慾な小夜子だの糸子だのを、眼に見える愛をもつて描き出した。糸子の如きは詩も分からない、理窟も言へない女ではあつたが、然し一切の私を棄てて、甲野さんに無限に信賴し、甲野さんの行けといふ所なら、何所へでも行く、甲野さんがお嫁に行くなと言へば、自分の甲野さんに對する戀愛を犧牲にしてまでも、その言葉に從はうとする、『行人』のお貞さんのやうな女として、描き出されてゐるのである。

五一　早稲田南町

『虞美人草』を漱石は、本郷區西片町十番地ろノ七號――大學正門前から空橋を渡つて、阿部邸前の廣場をぬけ、小石川柳町へ下りる坂の曲り角を、一寸左へ這入つた所――の家で書いた。是は千駄木の家の家主齋藤阿具が、仙臺から東京へ轉任するに就き、家を明け渡してしまつたからである。漱石は明治三十九年（一九〇六）も押し詰つた十二月二十七日、西片町の家に越して來た。この引越しの一部分は、『三四郎』の中に利用されてゐる。鈴木三重吉が『猫』の本尊だと稱せられてゐた猫を、屑籠に入れて千駄木から運んで來る途中、その猫から小便をかけられてひどく憤慨したのは、この時の事である。漱石は引越しをする度に、それまでに自分の所へ來た手紙の大部分を焚いてしまふ事にしてゐたやうであるが、この時もそれを庭に積んで燒かせた。其所へ寺田寅彦が這入つて來て、焚けて行く手紙を殘り惜しさうに眺めてゐた事を、私は今に忘れない。

漱石が西片町に越して來た時には、その家賃は二十七圓であつた。間もなく家主はそれを三十圓に引き上げ、更に十月から三十五圓にすると言ひ出した。是は漱石の名聲が當時隆隆と高まつて行つた事を傍證するものではあつたが、然し漱石はその無法に憤慨した。それで漱石は『虞美人草』を書き終るや否や、貸家探しを始めた。明治四十年(一九〇七)九月四日漱石は、戸川秋骨に宛てて、「小生の家主家賃を上げる事に堪能なる人物にて二十七圓を忽ちに三十圓と致し今や三十圓を三十五圓に致さんと準備最中にて此方も御同樣立退の準備を取り急ぎ候。そこで斯樣な立ち入つた話を致し候も實は貴君御住居の近邊に適當なる立退場御承知にもやと存じての御願の前置に候とくに御探しを願ふと申す樣な橫着心にては萬々無之、もし御心づきの貸家も有之候はゞ何卒端書にて御一報被下間鋪候や」と書いてゐるやうな手紙を、方方に書いたのみならず、自分でもいろんな貸家を見て廻つた。その貸家探しの事も『三四郎』の中に使はれてゐるが、さうしてやつと探し當てたのが、牛込區早稻田南町七番地の家——漱石が死ぬまで其所に住み、漱石の歿後、漱石の遺族によつて地面ごと買ひとられ、改築され、遺族によつて住まれ、目下は貸家になつてゐる家であつた。漱石は九月二十九日引越しをする。家賃は三十五圓である。

この南町の家といふのは、前にも言つたやうに、矢來の交番の下を榎町の方へ行き、十字路を左に柳町の停留所の方へ少し行つて、右へ辨天橋を渡る細い路をだらだらと上がつた坂の途中の、

右側の家である。その坂をもつと上がつて四五町も行くと、漱石の生れた家のある、馬場下へ出る。昔の地圖で見ても、馬場下から神樂坂へ出るには、恐らくこの南町の狹い通りをぬけたものに違ひない。從つてこの界隈一體は、漱石にとつて、いろんな思ひ出のある土地だつたらうと思ふ。今は改築されて多少勝手が違つたが、漱石の書齋の北側の緣に立つと、濟松寺の欅だかなんだか、大きな樹が見えた、本堂の甍も見えた。昔漱石の父が、名主として管理してゐた土地のうち、高田馬場は濟松寺領地だつたやうである。それだけに漱石のうちと濟松寺とは緣が深く、漱石にこの名前は、小さい時から、馴染が深く、或は誓閑寺の鉦の音と同じやうに、親しい名前だつたのかも知れない。さう言へば、漱石はよく私たちをつらまへて、濟松寺の名前を、さも自明の事のやうにして話す事があつたやうである。

もつとも『漱石の思ひ出』によると、漱石はこの家を買ひとつて、此所に住まうといふ氣はなかつたのだといふ。是は、家そのものが良い家でなかつたし、屋敷が坂の途中にあり、且段段になつてゐて、向つて左の上の段との間にも、向つて右の下の段との間にも、また裏の下の段との間にも、あまりゆとりがない上に、周圍に裏店のやうな貧乏長屋が立て込んでゐたから、火の用心も惡く、子供の教育の爲にもよくないと考へてゐた爲かとも思はれる。それに此所は足場も惡かつた。殊に榎町から早稲田南町一體の町といふのが、あまり感じの好い町ではなかつた。漱石

はどうせ買ふほどなら、もう少しどうかした所を買ひたいと思つてゐたのだらうと思ふ。大正三年（一九一四）三月二十日『大阪朝日』に掲載された談話筆記『文士の生活』の中で、漱石は、「家に對する趣味は人並に持つて居る。……私は家を建てる事が一生の目的でも何でも無いが、やがて金でも出來るなら、家を作つて見たいと思つて居る。併し近い将來に出來さうも無いから、如何云ふ家を作るか、別に設計をして見た事は無い。／此家は七間ばかりあるが、私は二間使つて居るし、子供が六人もあるから狹い。家賃は三十五圓である。……地坪は三百坪あるから、庭は狹い方では無い。……／私はもつと明るい家が好きだ。もつと奇麗な家にも住みたい。私の書齋の壁は落ちてるし、天井は雨洩りのシミがあつて、隨分穢いが、別に天井を見て行つて呉れる人もないから、此儘にして置く。何しろ疊の無い板敷である。板の間から風が吹き込んで冬などは堪らぬ。光線の工合も惡い。此上に坐つて讀んだり書いたりするのは辛いが、氣にし出すと切りが無いから、關はずに置く。……別に私がこんな家が好きで、こんな暗い、穢い家に住んで居るのではない。餘儀なくされて居るまでである。」と言つてゐる。

それにしても漱石は、自分の生れた家の近くに來て住み、自分の子供の時分によくあるき廻つた場所をあるくのである。漱石にとつて無量の感慨であつた事は、想像するに難くない。當時漱石と散歩して、馬場下の交番の方から早稲田小學の前へ出る途をあるいた時、漱石が不圖立ちど

まつて、右手の小高い土藏を眺め、あすこが僕のうちだつたんだぜと言つて、家と家との間から見える松の樹の方を指した時の事を、私は今でもありありと思ひ出す事が出來る。十月四日渡邊和太郎に宛てて、漱石は「今度の引越につき始めて借家の拂底を感じ書物が邪魔になり殆んどいやになり申候昔の人は自分の家藏を持たねば一人前でないとか申居候漂浪を分とする小生如きものも成程と思ひ當り候漸々郊外へ退却の外無之我ながら憫笑」と書いてゐるが、是が當時の漱石の、僞らざる告白だつたとしても、西片町にゐて「何だか西片町邊はエラ過ぎる樣に相成候」(四〇・九・八)と感じ出した漱石にとつては、此所に住んでゐる事が、さうさう心細いばかりでもなかつたらうといふ氣もする。殊に漱石が此所で『硝子戸の中』を書き『道草』を書いたといふ事は、無論外にいろいろ重大な理由も考へられるが、然し漱石がこの早稲田南町の家に、自分の生れた場所に近く住み、自分の子供の時分よくあるき廻つた所を、屢あるく機會を持つたといふ事が、亦一つの有力な原因になつてゐる事は爭はれないと思ふ。

五二 『坑夫』

漱石が早稲田南町の家に越して來て、初めて書いた小說は『坑夫』である。『坑夫』は、漱石の外の小說と違つて、特別の成立事情を持つてゐる。

談話筆記『「坑夫」の作意と自然派傳奇派の交渉』の中で漱石は、「或日私の所へ一人の若い男がヒヨツクリやつて來て、自分の身上に斯ういふ材料があるが小說に書いて下さらんか。その報酬を頂いて實は信州へ行き度いのですと云ふ。今は私の家に居るが、其時は一向見知らぬ人だつたので、加之(それに)上田敏君が暇乞に來てごた／＼してゐた時だから、私も話を聽いてる隙が無い。で、財布から幾らか掴み出して、これで行けるかと訊くと、行けますと云ふ。今夜はまだ立たぬかと云ふと、居りますとの答。ぢや今夜兎も角も來て其材料といふ奴を話して呉れと一旦歸してやつた。あゝは云ふものゝ、何の、騙(かたり)かなんかなら來やしまいと思つてると、正直に其夜やつて來た。そして三時間ばかり話を聞かせた。それは新聞に書いたのと違つて、主に坑夫になる前の話だつ

たが、私は個人の事情は書き度くない。相手の云つた通りに書けば好いけれども、小說にするにはどうしても話を變化させなきやならん。すると其人が氣の毒の狀態になるから、成べくは書き度くない。それで聽いて了つてから、私は、こりや信州へ行つてから君自身で書いちやどうか、出來たものが面白かつたら、雜誌へ載せる丈の盡力はしてやるから、と勸めると、ぢや然うしませうと云つて歸つて行つた。所が其後信州へも行かなければ、書きもせん樣子。さう斯うする間に朝日新聞に小說が切れて、島崎君のが出るまで、私が合ひの楔に書かなきやならん事になつた。早速憶ひだしたのは例の話で、本人に、坑夫の生活の所だけを材料に貰ひたいが差支へあるまいかと念を押すと、一向差支無いと云ふ許しを得たから、そこで初めて書出したのが『坑夫』なんだ。最初の考へぢや三十回ぐらゐで終る意なのが、とう〳〵長くなつて九十餘回に上つて了つた。」と言つてゐる。この「若い男」の名前は慥か荒井と言つたと思ふ。

　上田敏が漱石の所にいつ暇乞に來たのか、分からない。然し上田敏渡歐の送別會が上野の精養軒であつたのは、明治四十年十一月二十五日であり、上田敏が愈渡歐の途に上つたのは十一月二十七日だつたのだから、荒井が漱石を訪ねたのは、およそ十一月下旬の事だつたらうと思ふ。さうして漱石が社の方から、三十回續き位のものを新年から書いてくれと賴まれたのは、十二月十日であつた。『虞美人草』は『東京朝日』では、やつと十月二十八日に掲了になつてゐる。入社

の際の約束から言へば、漱石は既に『虞美人草』で、一年分の義務を果したと言つて可いのである。漱石はさうさう追つかけて小説を書く必要があるだらうなどとは、夢にも豫期してゐなかつたに違ひない。然し是は大阪からの注文で、大阪に載せるのなら此方にも載せるといふので、東京にも出るやうになつたものであり、然も大阪の方には義理があるので、漱石の方でも、默つて言はれるままに、更に小説をかく決心をしたものだらう。それにしても十二月十日になつて、新年からの續き物を書けといふやうな、短兵急な注文を受けては、簞笥にしまつてあるものを取り出すやうに、おいそれと應じられる筈のものではない。漱石は困つた揚句、不得已荒井の提供した種の一部分を、利用する事にして、すぐに仕事にとりかかつた。十二月十六日小宮豐隆に宛てた漱石の手紙には、「小生矢張り執筆中、毎日二三回かく豫定」とある。漱石は十二月十六日までのうちに、既に幾日か是を書き續けて來てゐるのである。かうして漱石は『坑夫』を書きつつ年を越し、翌明治四十一年（一九〇八）一月三十日に至つてそれを書き上げた。然も三十回の豫定が、九十一回にのびた。新聞で言へば『坑夫』は、明治四十一年一月一日から四月六日まで連載されたのである。

談話の中にもあるやうに、漱石は、荒井から自分の身の上を書いてくれと頼まれたけれども、パーソナル・アフェアを書くのは厭だと言つて、荒井が坑夫になるまでの徑路には手を觸れなか

つた。さうして、その荒井が坑夫になつて足尾の銅山で働らいてゐたが、どうしても辛棒が出來なくなつて其所から下りて來る、その坑夫生活だけを材料に使つて、『坑夫』を書いた。從つてそれは、決定版全集の『日記及斷片』の中の、第二百八十三頁から第二百九十六頁まで、十四頁に收められるほどの、僅かな分量の材料であつたに過ぎなかつた。漱石はその僅かな分量の材料を掌の上に載せて、科學者が自然を研究しでもするやうに、右から見たり左から見たり、上から見たり、下から見たり、ためつすがめつその心理を解剖し、全集で二百九十二頁に亙る、大きな作品に纏め上げた。この事に就いて漱石は、同じ談話の中で、「あれに出てる坑夫は、無論私が好い加減に作つた想像のものである。坑夫の年齢は十九歳だが、十九の人としちや受取れぬ事が書いてある。だから現實の事件は濟んで、それを後から回顧し、何年か前のことを記憶して書いてる體となつてゐる。從つてまア昔話と云つた書方だから、其時其人が書いたやうに敍述するよりも、どうしても感じが乘らぬわけだ。それはある意味から云へば文學の價値は下る。其代り(自分を辯護するんぢやないが……)昔の事を回顧してると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も惡い所も同じやうな眼を以て見て書ける。一方ぢや熱が醒めてる代りに、一方ぢや、さあ何と云つて好いか——遠い感じがある。當りが遠い。所謂センセーショナルの烈しい角を取ることが出來る。これは併しある人々には氣に入らんだらう。／も一つは、あの書方で

行くと、ある仕事をやる動機とか、所作などの解剖がよく出來る。元來この動機の解剖といふ奴は非常に複雜で、我々の氣付かん所が多くある。これを眞に事實として寫せば極く／＼煩瑣なものであつて殆ど書現はせない。よし現はせても煩に堪へぬ不得要領のものとなつて了ふ。面白くない故かも知らんが、ある意味から云へば、かゝる方面の事は餘り多くの人がやつて居らん。のを、私は却て夫が書いて見たい——細かくやつて見度い。といふ念があるから、事件の進行に興味を持つよりも、事件其物の眞相を露出する。甲なる事と、乙なる事と、丙なる事とが寄つて、斯うなつたと云ふ風な所に主として興味をもつて書く。——詳しく云へば、原因もあり結果もあつて脈絡貫通した一個の事件があるとする。然るに私はその原因や結果は餘り考へない。事件中の一箇の眞相、例へばBならBに低徊した趣味を感ずる。從つて書方も、Bといふ眞相の原因結果は顧慮せずに、甲、乙、丙の三眞相が寄つてBを成してゐる、夫が面白いと書く。卽ち同じ低徊してゐても、分解的に出來てる所が多い。この書方はある人には趣味が無いだらう。」と言つてゐる。一口に言へば、漱石は此所で、坑夫の一一の言語動作に對して、フロイドの「精神分析」のやうなものを試みようとするのである。

勿論是は、一面から言へば、漱石の窮餘の一策だつたには違ひない。漱石には、想を錬るひまがなかつた。手元にある、すぐ間に合ふ材料と言つては、ただ十四頁の坑夫の生活があるだけで

ある。その材料で少くとも三十回の續き物を書かなければならないとすれば、さしあたり漱石はさういふ方法を用ひるより仕方がなかつたのかも知れないのである。然し他の一面から言へば、漱石ほどの空想に豐かな作家なら、十四頁の坑夫の生活がありさへすれば、荒井のそれまでの身の上話を借りるまでもなく、いろんな場面を工夫して、別に一人の人間が坑夫になるまでの生活を、十分創造する事も出來た筈であつた。然し漱石は、それを敢てしなかつた。その代りに漱石は、坑夫の生活だけを題材にして、その坑夫の生活の中で起伏する人間の言語動作の奧深く潛り入り、その言語動作にまで盛り上がつて來る、さまざまの隱れた力を捕捉して、それを我我の眼の前に列べて見せようとした。是は漱石が、さうする事に、興味を持つたからである。『坑夫』の主人公の一一の言語動作を、例へば種子を割つて萌え出た植物の二葉のやうなものと考へ、その二葉に萌え出るまでの、種子の內部に働く力のみならず、種子の外部にあつて、內部のものを二葉に萌え出でしめる、いろんな力を捕捉し且つ表現しようとする事は、人間學者としての作家にとつて、絕好の題目たる事を失はない。のみならず漱石の後期の作品、例へば『彼岸過迄』や『行人』、特に『明暗』に於いて示した漱石の、人間心理の機微の捕捉は、この『坑夫』の方法を、更に鋭利に更に深刻に發展させたものに外ならなかつた。その點で『坑夫』は、假令當時の世評は思はしいものでなかつたにしても、漱石の漱石らしさをはつきり表現してゐるものとして、漱

石にユニークなもの、外の人には到底眞似の出來ないものを持つてゐる事は、言を俟たない。

その上漱石は、前年の『虞美人草』で、厚化粧の文章を書き、厚化粧の構造を工夫し、厚化粧の人間を描き出した。心理的に言つても生理的に言つても、漱石は『虞美人草』に次ぐ作品では、『虞美人草』とはまるで反對なもの、不斷著のままのもの、構造のないもの、性格のないもの、演劇的でないもの、一口に言へば、茶漬のやうな作品が書きたい氣がしてゐたのに違ひないと思はれる。その意味でこの『坑夫』の題材の取り扱ひ方と書き解ごし方とは、『虞美人草』を書いたあとの漱石にとつては、必然のものであつた。例へば漱石は『坑夫』の中で、「よく小說家がこんな性格を書くの、あんな性格をこしらへるのと云つて得意がつてゐる。讀者もあの性格がかうだの、あゝだのと分つた樣な事を云つてるが、ありや、みんな嘘をかいて樂しんだり、嘘を讀んで嬉しがつてるんだらう。本當の事を云ふと性格なんて纏つたものはありやしない。」と言つて、嘘・拵へ物・型の性格を罵倒し、自然を重んじ、眞を標榜したが、さうしてそれは明治二十九年(一八九六)の『人生』以來、漱石を貫ぬいて流れてゐる、人間に對する一つの考へ方であるが、然しその立場からすれば、それはある意味で『虞美人草』を否定するものであり、少くとも『虞美人草』の作者の態度にはつきりしたアンティテーゼを置くものであるのに外ならなかつた。談話の中ででも漱石は、かういふ立場から書かれたものは、「當りが遠い」から「感じが乘ら」ない

代りに「公平に」「善い所も惡い所も同じやうな眼を以て見て書ける」と言つてゐるが、是も亦漱石が『虞美人草』のアンティテーゼのやうなものとして、特にこの態度をとつたのだといふ事を、示唆するやうにも思はれる。漱石は『虞美人草』を書く時には、無論その中に自分の全精神を打ち込んで書いた。然し全精神を打ち込んで書けば書くだけ、それがすむと、その段階を卒業する。漱石はそれだけ成長して行くのである。『坑夫』がいろんな點で『虞美人草』のアンティテーゼを形づくつてゐるのは、漱石のこの成長を物語るものに外ならない。漱石は言はば、一作毎に前作を否定して進歩して行つたのである。

荒井は漱石に身の上話をしたあとで、信州に歸つて行かなかつたのみか、ずるずるに漱石のうちに書生として住み込み、なんでも明治四十一年(一九〇八)の四月ごろまではゐたやうである。そのうち荒井は漱石のうちにゐられなくなつて、何所かへ飛び出してしまつた。『漱石の思ひ出』の中に「或る時夏目が外へ出まして、亡くなられた沼波瓊音さんに會ひますと、其頃沼波さんは「萬朝報」に居られたのですが、此の間或る若い坑夫だといふ書生みたいな男が新聞社に來ての話に。夏目漱石といふ男は怪しからない奴だ。私に身の上話をしろといふのですると、その材料でもつてれい〳〵しく新聞に小説を書いてどつさり金を取つてる癖に、自分には一文も呉れない。全く卑劣な奴だから、うんと惡く書いてやつてくれないかといふ頼み。其時沼波さんはさういふ

個人一身上の話は書けないと斷わつたが、氣をつけないといけませんよとの話に、夏目もびつくり致しまして、歸つて來て早速本人に尋ねますと、斷じてそんなことはないと白ばくれて居ります。しかし夏目もかなり色をなして、／「君もそんなに金が欲しいのならば、これだけの材料を提供しますから、いくら〳〵下さいといつたらいいぢやないか。自分も紳士だからさうならさうでちやんと約束通りしもしよう。尤もそれ程迄にして書きたいとも思はないが……」／といふやうなことを申しますが、男の方ではかうなつてもやはり不得要領で、強情なひねこびれた、それでゐて煮え切らない態度で居ります。夏目も業を煮やします。私も面白くなく思つて居りますと、どう考へたものか翌日になると、今迄歸るところも無かつた筈ののが急に歸りたいからと申します。いい按排だと思つてそれ切り緣を切つたわけです。／後で伺ひますと、其足ですぐ「萬朝報」の沼波さんを訪ねて、此の間のことは書かなくてもいいと言つて行つたさうです。それから又新渡戸さんのところへか、やつぱり私のところへ來たやうなことを言つて行つたとかいふことが何かの新聞に書いてあつた事がありました。／其後二三度訪ねて來て、夏目に會ひたいと申して居りましたが、夏目はいやだと言つて會ひもせず、私がその都度三圓ばかりづゝ包んでやると、そのまゝおとなしく歸りました。」と書いてある。

この、飼犬から手を嚙まれたやうな經驗は、漱石にとつて、可也苦苦しい經驗だつたと見えて、

漱石はその後、よく自分の身の上を小說に書いてくれなどと賴まれ、その話を聽かされる事があつても、さうしてそれを自分のノートに書き留めて置く事があつても、決してそれを小說の種に用ひる事がなかつた。言ふまでもなく『坑夫』は漱石のものである。それは漱石自身の體驗が一切の基礎になつてゐる。荒井が提供した材料は、漱石の體驗を引き出す爲の口火でなければ、漱石の體驗を覆ふ衣裝に過ぎない。それでも漱石はその後、さういふ意味ででも、人の話を、自分の小說の種（『永日小品』のやうな小品ものの中には、それでも、人の話をそのまま書いたやうなものがある。例へば『儲口』などは、桑原喜市が提供した材料によつたものである。）に用ひる事がなかつた。漱石は後に、誰かの紹介がなければ、初めての人には決して會はない事にしてゐたが、それも或はこの事件が原因になつてゐるのではないかと思ふ。

五三 『三四郎』

『坑夫』がまだ新聞に連載されてゐる途中、漱石は『東京朝日』から頼まれて、明治四十一年（一九〇八）二月十五日神田美土代町の青年會館で、『東京朝日』主催の講演會で講演した。是は『創作家の態度』と題し、前年の『文藝の哲學的基礎』と似たやうな意味で、『文學論』の補遺をなすものでもあつたが、同時に『文藝の哲學的基礎』とは違つた方面から、自然主義とロマンティシズムとの相違を明かにしようとしたものでもあつた。

日本の自然主義は、丁度漱石が文壇に顔を出す時分から擡頭し始めたものである。それが明治四十年・四十一年の頃となると、少くとも文壇的には、自然主義でなければ人間でないやうな議論が、頻に書き散らされるに至つた。漱石は『「坑夫」の作意と自然派傳奇派の交渉』の中で、「いや、誤解といふ事は世の中にあるもんで、この頃自然派の議論が益々熾となるにつれて、私は到底その派とは相容れないもののやうに目されて了つた。一體今の自然派はローマンチシズムを攻

撃するんでなくて、積極的に自派の主義を主張してゐる。もうローマンチシズム對自然主義ぢやない。絶對的に自然主義萬能論となつて、其餘のものは一顧の價値もなく擯斥されてゐるのだ。自然主義の議論も色々出た。解釋もさま〴〵ある。私も一々見たんではないが、見た限りぢや何れも面白い。所で世間では私を自然派と目して居らん。自然主義を主張する人は、間接に私を攻撃して居る樣に外面上見える。この意味から云へば、私は夙(とつく)に辯じて居なければならんのだ。けれども今迄何にも云はない。云へなんだかも知らんが、まア云はなんだ方だ。何となれば、私は自然派が嫌ひぢやない。その派の小説も面白いと思ふ。私の作物は自然派の小説と或意味ぢや違ふかも知らんが、さればとて自然派攻撃をやる必要は少しも認めん。誰が書いても出來損ひは惡く、善い物は善いに極つてゐるんだから、そこで殊更に何といふ意見も發表しなかつた譯なのだ。／併し自然派の人々から云ふと、我々の書くものでは惡くて、自分たちの作物でなければ文學で無いかの如くなのだ。斯うなつて來ると、自然派の立場と私の其との比較研究が多少必要となつて來る。第一に自然派とは何ぞや、歴史的に如何なる價値ありて、如何に發展せしものぞ。第二に、自然派は日本に渡つてその小説に如何に現はれしか等を研究しなくちやならん。けれども自然主義は誰にもむづかしいと見えて、自然主義とは何ぞやと問うても、大抵の者は明瞭に答へられん。併し朦朧(ぼんやり)とは解つてる。が、たゞ纏められん。色々の作物を讀んで比較を試み、その共通

の要素を抜き出して、自然主義は斯く〳〵のものだと云ふ事もやり悪い。それは複雜で解剖が出來んからだ。も一つには、自然主義の意味が始終動搖てゐるんぢやなからうか。／だから歴史的研究は先づ止めて、心理的の物の見方の研究なぞから入ると、やり易くはないか、その極く單純な最初の經驗から出立して、次第に複雜になる所を調べてみれば面白くはあるまいか、と私は考へた。で、素より杜撰な、不完全なものぢやあるが、纏められるだけ纏めて見た。するとその結果は、無論歴史上の自然派とか何派とかいふものは失くなつて來る。が、たゞ其名に結付けて考へてみると、ローマンチシズムとナチュラリズムとは對立してゐると云ふ興味のある一種の現象が出て來る。……こんな風に出立したのに據つてみると、ローマンチシズムと自然主義とは、世の中で考へてるやうに相反してるものぢやない。相對して一所になれんといふものぢやなくて、却て一つの筋がズート進行してるやうなものだ。その筋の兩極端に二主義を置くと、丁度中央の部では半々に交はるところが出來てくる。或は三分の一と三分の二とで交つてる所もある。或は五分の一と五分の四とで交つてるところもある。卽ちグラデーションを爲してる形となる。光線をスペクトラムで分解すると七色に分れるが、一色と一色との間は劃然と別れてゐずに、混つてる。丁度そんな事實を認めたんだ。／すると今迄の人々が考へてたよりも、兩主義を少し接近させて比較することが出來るやうになつた。どちらにか片付けなければならんといふ考へが薄らい

で來た。……」と言つてゐるやうに、この談話によつて、自然主義の立場と自分の立場とが決して調和すべからざるものではない、のみならず二つの態度は一人の人間の生活の中で交錯して存在する。從つて自然主義の作物の中にもロマンティシズムの要素があるし、ロマンティシズムの作品の中にも自然主義の要素がある。さう自然主義一點張りを主張するのは、人性を知らない、强制であるといふ事を、人人に反省させようとするのである。

漱石は『文藝の哲學的基礎』で、眞を理想とする文藝は、他の善・美・壯を理想とする文藝と同樣に、存在する事を許されてゐるが、然しその眞を尊重するの餘り、他の善・美・壯を冒さうとする場合、その文藝の存在は、許され得ないと言つた。是は漱石の文藝に關する根本的な考へ方であるが、それとともに漱石は、かく言ふ事によつて、當時次第に暴威を逞うしつつあつた自然主義運動に對抗し、眞一色に塗り潰されて狹隘固陋になる事から、文壇を救ひ出したいと願つたからである。『創作家の態度』では、同じ事が、別方面から行はれる。漱石は自分自身の體驗から出發して、自分の中に自然主義の精神とロマンティシズムの精神とが、相ともに動いてゐる事に注意し、またある場合には一つの精神が背景に下がり他の精神が前景に出て、必要な活動を開始する事に注意し、それが普通の人間の普通な生活である事に注意する。漱石は『虞美人草』のあとで『坑夫』を書いた。是はロマンティシズムの精神のあとに、自然主義の精神が前景に出

て來たものである。勿論當時の自然派の作家たちだつたら、『坑夫』の中に、坑夫を説諭して、早くこの山から出て正業につけと勸める、金さんのやうな人間は、書かなかつたのかも知れない。假令書くとしても、漱石のやうには、感激を持つて書かなかつたのかも知れない。然し漱石から言へば、それも亦自然であり、眞だつたのである。當時の作家たちから言へば、金さんの親切に感激する事は、もしくはその感激を強調する事は、或は自然主義ではなく、ロマンティシズムの精神の活動以外の何ものでもなかつたに違ひない。然し漱石から言へば、それで少しも差支ない事であつた。此所で出會つた對象が、感激に値ひする對象であつたから、自然主義的な精神がひつこんで、ロマンティシズムの精神が出て來たまでの事である。漱石にとつて、一番いけない事は、感激に値ひする對象に出會つて、感激しないといふ事であつた。『明暗』のお秀は、兄夫婦に向つて、「自分丈の事しか考へられないあなた方は、人間として他の親切に應ずる資格を失なつてゐらつしやるといふのが私の意味なのです。つまり他の好意に感謝する事の出來ない人間に切り下げられてゐるといふ事なのです。」と言つてゐる。然し當時の文壇で自然主義を唱道し主張したものは、それを黨同伐異の旗印に用ひたに過ぎなかつた。フランスに興つた自然主義は、日本では文壇の政治運動の道具となつた。從つて當時の多くの作者は、自分自身の内面を深切に反省して見ようともせず、ただゾラ・モーパサンなどの鑄型に嵌めたやうなもの許りを作り、そ

の鑄型に嵌らないものは、當然外道として排斥するといふやうな傾向だつたので、漱石のこの講演は、後に訂正されて『ホトトギス』で發表されたが、誰も問題にする者もなかつた。もつとも漱石から言へば、文壇で問題になるならないは、問題ではなかつたのかも知れない。さうして漱石の自然主義研究は、第一に、自分自身の爲であつたのかも知れない。それにしても漱石にとつて、自分の苦勞して纏め上げた仕事が、反響を持たないのみならず、文壇の傾向はますます惡化して行く一方である事を見なければならない事は、寂しい事だつたらうと思ふ。それにも拘はらず漱石は、なほ自然主義の研究を持續する。明治四十四年(一九一一)の講演『文藝と道德』は、その現はれである。當時自然主義に就いて、本氣に考へ、考へた所を正直に發表し、さうして自然主義に關して最も卓出した意見を示した者は、或は漱石なのではなかつたかと思ふ。

漱石の講演は實に面白かつた。漱石が大學で講演したシェークスピアも、その輕妙な話し振りで、該博な知識と深刻な批評とを、易易と學生の頭の中に叩き込む所に、獨特の風格を具へてゐたが、講演となると、それは同じ方向でもつと碎け、丁度『猫』でも讀んでゐるやうな感じがあり、具體的な比喩や奇警な觀察や突兀たる連想を到る所に鏤めつつ、潑剌としたリズムに乘せて、聽き手の知らないまに、自分の連れて行きたい所へ連れて行く、その意味で大力無雙の講演であつた。この講演を聽いてゐた德富蘇峰が、あとで漱石に向つて、大變結構な講演でしたが、慾を

いふと、もう少し枝葉を伐りすかしたい氣がしますと言つたといふが、さう言へば、漱石の講演は、漱石の言ふ事の一言一句が面白い爲に、それに耽つてゐると、漱石の主意が何所にあるのか、分からなくなつてしまふ危險がなくもなかつた。勿論それは、一言一句の枝葉に耽る者が惡いのである。漱石は、枝葉の爲に根幹を見えなくしてしまふやうな講演は、決してしなかつた。然もなほ漱石の講演に、ある程度蘇峰の非難を認められなければならないものがあつたのは、漱石の恐らくは講釋・落語のやうなもので磨き上げられた、話術の巧みから來てゐるのだらう。

『創作家の態度』は、『文藝の哲學的基礎』のやうに、新聞には連載されなかつた。是はこの種の續き物は新聞には不向のものだから、載らないのが當然で、『文藝の哲學的基礎』の載つた事の方が、寧ろ特例と言ふべきだらうと思ふ。その代り漱石は是を、前にも言つたやうに、『ホトトギス』に掲載した。その際漱石が自分で筆記に手を入れた事は言ふまでもない。

漱石がこの講演の筆記に手を入れ了るころ、森田草平の『煤煙』事件が勃發した。その爲め漱石の所には人の出入が多くなり、仕舞には草平を自分の所に置いてやるやうな事になつたので、漱石は相當仕事の邪魔をされたやうである。寺田寅彦の日記によると、寺田寅彦は三月二十二日(日曜)午後漱石を訪ひ、其所で、森田の失踪に關して生田長江が相談に來てゐる所にぶつかつてゐる。さうして二時過ぎから漱石と一緒に、上野の音樂會に出かけてゐる。三月二十四日漱石は、

「拜啓多分明日は出來るだらうと思ひます。十九字詰十行の原稿紙で只今二百五十枚許かいて居ります。多分三百枚内外だらうと思ひます。明日書き終つて、一遍讀み直して、差し上げたいと思ひます。何だかごた〳〵した事が出來て、少々ひまをつぶします。頭がとぎれ〳〵になるものだから大變な不經濟になります」と、高濱虛子に書いてやつてゐる。さうして草平が尾花峠で見つかつて連れ戾されたといふ報知が東京の新聞に出たのは、三月二十六日の事である。草平は四月十日まで漱石の所に厄介になつた。

そのうち大阪から漱石の所へ、原稿を書けと言つて來た。それを漱石は、五月初旬に書いたやうであるが、然し新聞に出たのは、六月十三日から六月二十一日へかけての、九日間であつた。是が『文鳥』である。『文鳥』の中で文鳥を自分で見てやるひまがないうちに、文鳥が死ぬ所が書いてあるが、是は草平のごたごたのあつた時分の事ではなかつたかと思ふ。鈴木三重吉が「例の件」で會ひたいなどと言つてよこすとあるのは、無論架空である。

『文鳥』が大阪で歡迎されたかどうかは分からない。然し『文鳥』は『大阪朝日』だけに出て『東京朝日』には出なかつた。然も大阪からは追つ駈けて又何か短いものを書いてくれと注文して來たらしく、漱石は再び七月一日に『夢十夜』のうちの第一夜をかいて大阪に送つてゐる。もつとも是は『東京朝日』にも、七月二十五日から八月五日に亙つて掲載された。從つて是は、大

阪の方だけが別扱ひを受けた譯でもなかつたが、それでも是が大阪の申し出で書かれたものである事には、疑ひがない。然も大阪の鳥居素川は、既に七月の半に三度び漱石の所へ手紙をよこして、九月初旬から小說を書く事を依賴してゐる。それが實現されたのが『三四郎』である。是は島崎藤村の『春』の後を受けて、『東京朝日』にも連載される事になり、九月一日から十二月二十九日まで、百十七回まで續いた。

明治四十一年七月三十日漱石は小宮豐隆に宛てて、「明後日あたりから小說をかく。君や三重吉の手紙もことによつたら中へ使はうかと思ふ。」と書いた。同じ日鈴木三重吉に宛てては、「小宮からも手紙が來て君と停車場で落合つたとかいてある。何でも洋服屋の小僧に逆鱗してゐたとかいてあつた。小說をかゝなければならない。八月はうん〳〵云つて暮す譯になるが、まあ命に別條がなければいゝがと私かに心配してゐる。君の手紙や小宮の手紙を小說のうちに使はうかと思ふ。近頃は大分ずるくなつて何ぞといふと手近なものを種にしやうと云ふ癖が出來た。」と書いてある。「近頃」とあるのは、『坑夫』の材料が既にさうであり、『文鳥』には三重吉と豐隆との名前が出て來る事をさしたものに相違ないが、それにしても『三四郎』の中には、寺田寅彥の話した光線の壓力を實驗する裝置の事が、野々宮さんの仕事として出て來たり、松根東洋城の稽古してゐた一中節の話が、畫家の原口さんの口から出て來たり、小宮豐隆の鄕里から漱石へ出した手

紙が、三四郎の母から三四郎の所へ郷里の狀況を報告する手紙として利用されてゐたり、森田草平の『煤煙』事件の相手が、會つて見もしないのに、いろんな人の話を聽いてゐるうちに、漱石の頭の中で一つの姿となつて纏まり上がつてしまつてゐたのを、美禰子として描き出したり、まつたく『三四郎』は「手近なものを種にし」て描き上げた小說だと言つても、少しも過言ではなかつたのである。

然し同じく「手近なものを種にし」て描き上げた筈の『猫』とこの『三四郎』とを比較して、雙方の雰圍氣がいかに別趣なものになつてゐるかを感じる時、『猫』を書く時の漱石の生活氣分と『三四郎』を書く時の生活氣分との間に、格段の相違があつたのだといふ事を、誰でも認めない譯に行かないのではないかと思ふ。『猫』に激越の調があり、蕭殺の氣が含まれてゐるとすれば、『三四郎』は靜穩の調であり、和煦の氣に充ちたものである。是は一面から言へば『虞美人草』で妙に緊張し切つた漱石の神經が、一度『坑夫』で思ひ切り揉みほぐされ、『三四郎』に來て、丁度適宜な緊張と適宜な雍容とを持つ事が出來るやうになつた爲だつたとも考へられるが、然し一面から言へば、漱石に對する弟子たちの渴仰と愛情とが、純粹で一向きで、寂しい漱石に、何か賴もしい感じを起させ、從つて世に住む事を長閑やかに感ぜしめた爲だつたのではなかつたかとも思はれる。

勿論それまでの漱石といへども、渇仰と愛情とを寄せる弟子たちに、事を缺きはしなかつた。のみならず漱石は、その弟子たちの感激的な反應に鼓舞せられて、『猫』その他の作品を次ぎ次ぎに書いて行つたのだとも言へる位、それらの弟子たちを賴みにしてゐさへもした。然しこれらの弟子たちは、多くは、文學を專攻しようとする人ではなかつた。のみならずこれらの弟子たちは、どつちかと言へば、愼み深い、おとなしい人たちだつた。然るに明治三十八年(一九〇五)漱石が『猫』を書き出してから漱石の周圍に集つて來たもの(松根東洋城・森田草平・鈴木三重吉・野上豐一郎・小宮豐隆など)の多くは、文筆を以て立たうと志す者、さうでないまでも文學を專攻しようとする學生だつたのみならず、猛烈に自己の感情を漱石の上に浴びせかけ、殆んど異性に對する情合のやうなものをさへ、漱石に對して持つた弟子たちだつた。漱石は明治三十八年九月十一日中川芳太郎に宛てて、「それから次に驚ろいた事は三重吉君が僕の事をのべつにかいて居る事だ自分のおやぢの事より僕の事が餘程長くかいてある。あの手紙が三間の長さとすると二間は慥かに金やんの事で埋つて居る。僕の樣な人間が學生の一人の頭腦を是程迄にオキユパイして居るとは夢にも考へなかつた。あの手紙を讀むと三重吉君は僕の事を每日考へて神經衰弱を起した樣に思はれる。僕が十七八の娘だつたら。すぐ樣三重吉君の爲に重き枕の床につくと云ふ物騷な事になるのだが幸ひ吉原から買つて來た油壺なんかを乙がつて居る金やんなので、こつちにとつ

ては藥代も入らずに濟みさうなのは先以て結構仕合せの至りである。然しいくら漱石だつて、金やんだつて、講師だつて、髭が生へてたつて、三重吉君からこれ程敬慕せられて難有〳〵思はんといふ次第のものではない。難有いなどは通過して恐ろしい位だ。三重吉君は僕の細君抔より餘程僕の事を思つて居るらしい。然もそれが學資を貢いだと云ふのでもなし周旋をしたと云ふのでもなし。金を貸した事は無論ないのだから一層難有いと云はなければならない。僕は是で中々自惚の強い男だからある人には好かれて然るべき性質を有して居ると自信して居るがね――然しあれ程迄に敬慕され樣とは氣がつかなかつた。あれは已惚以上だよ。豫期を超過する事五十五六倍だよ。」と書いてゐる。この三重吉の手紙は、漱石の所に這入つた泥棒の爲に盜み去られ、今日その内容を知る事の出來ないのは遺憾であるが、然し漱石の所に集つた若いアドマイラーたちの多くは、それぞれ漱石に對して、漱石をしてかういふ心持を起させるやうな手紙を、もしくは言動を、漱石に對して示したのである。然もその弟子たちの感情は、二年たち三年たちして、なほ渝らなかつた。のみならずそれは（最も多く三重吉の趣味によつて）一種の親分・子分のやうな關係にさへ纏め上げられた。親分・子分といふやうな趣味が漱石にあつたとは言へない。然し漱石には、森田草平の場合のやうに、身を挺して弱い者を庇つてやる、親切と勇氣とはあつた。それが弟子どもを感激させ、弟子どもを一層漱石に近づけた。弟子どもが近づけば近づくほど、特に

純粋な愛情に餓ゑてゐた漱石が、嬉しい事に思はない筈がない。——かうした情況の下に、『三四郎』が書き出されたのである。勿論漱石は、此所で自分と門下生との、現實の關係を書かうなどといふ、意圖を持つてはゐなかつた。然し漱石と門下生との關係が既にさうであり、漱石が「手近なものを種にし」て小説を書かうとする以上、當時の漱石の心持が自然と滲み出るのも、當然と言つて可いだらうと思ふ。

その上明治四十一年(一九〇八)は丁度子規の七周忌であつた。恐らくその爲に違ひない、漱石は虚子に促がされて、子規の追憶談を試み、その筆記は九月一日の『ホトトギス』に載せられた。それには、「彼は僕などより早熟で、いやに哲學などを振り廻すものだから、僕などは恐れを爲してゐた。僕はさういふ方に少しも發達せず、まるでわからん處へ持つて來て、彼はハルトマンの哲學書か何かを持ち込み、大分振り廻してゐた。尤も厚い獨逸書で、外國にゐる加藤恒忠氏に送つて貰つたもので、ろくに讀めもせぬものを頻にひつくりかへしてゐた。幼稚な正岡が其を振り廻すのに恐れを爲してゐた程、こちらは愈々幼稚なものであつた。」だの、「妙に氣位の高かつた男で、僕なども一緒に矢張り氣位の高い仲間であつた。ところが今から考へると、兩方共それ程えらいものでも無かつた。といつて徒らに吹き飛ばすわけでは無かつた。當人は事實をいつてゐるので、事實えらいと思つてゐたのだ。教員などは滅茶苦茶であつた。同級生なども滅茶苦茶で

あつた。」だの、「非常に好き嫌ひのあつた人で、滅多に交際などはしなかつた。僕だけどういふものか交際した。一つは僕の方がえゝ加減に合はして居つたので、それも苦痛なら止めたのだが、苦痛でもなかつたから、まあ出來てゐた。こちらが無暗に自分を立てようとしたら迚も圓滑な交際の出來る男ではなかつた。」だの、「正岡は僕と同じ歳なんだが僕は正岡ほど熟さなかつた。或部分は萬事が弟扱ひだつた。從つて僕の相手し得ない人の惡い事を平氣で遣つてゐた。すれつからしであつた。(惡い意味でいふのではない。)」だの、「何でも大將にならなけりや承知しない男であつた。二人で道を歩いてゐても、きつと自分の思ふ通りに僕をひつぱり廻したものだ。尤も僕がぐうたらであつて、こちらへ行かうと彼がいふと其通りにして居つた爲であつたらう。」だのといふのがある。是は正に『三四郎』の中の、三四郎と與次郎との關係である。漱石は、門下のものの中に、子規と自分との若い時分の關係を發見し、それを三四郎と與次郎とによつて表現しようとしたものだつたのかも知れない。もしさうだとすれば、漱石は「手近なものを種にし」て、門下の者からもいろんな材料を仰いだには違ひないが、然し結局は漱石自身の體驗をその根幹として『三四郎』を纏め上げてゐるのである。全體として『三四郎』の上に、ほのかな哀愁が漂つてゐるのも、子規に對する追憶と當時の自分自身に對する追憶とが一つになつて、漱石にさういふ氣持を用意したものかも知れない。

『坑夫』では漱石は、女を取り扱はたかつた。『三四郎』では美禰子が出て來て、相當の程度に活躍する。然し美禰子は『虞美人草』の藤尾と違つて、遙かにデリケートに、また遙かに客觀的に取り扱はれた。是は作品そのものの要求でもあれば、漱石の意圖でもあつたには違ひないが、然し白井道也の妻君・藤尾・美禰子と序を追うて考へて來ると、漱石の女性に對する觀察が次第に和解的になり、客觀的になり、具體的になり、深切になり、細緻になつて行つてゐるやうにも感じられる。『三四郎』では漱石は、もう美禰子を叩きつけようなどとは考へてゐない。勿論漱石は最後に美禰子を非難してはゐる。然しその非難を漱石は、美禰子自身をして、自身の上に加へしめる。のみならず漱石は一方では、美禰子の相手の三四郎を、三四郎には己惚があるから迷ふのだと言つて、はつきりたしなめてゐるのである。

明治四十一年(一九〇八)十月一日の『早稻田文學』に出た談話筆記『文學雜話』の中で漱石は、「ズーデルマンの『アンダイイング・パスト』になると餘程妙なラヴですね。……之は女が男を追つかけるのだが、其の女のフエリシタスといふのには夫がある、有夫姦になるので男の方で始終逃げようとする。それを——フイジカリーに追つかけるのではないが——追つかけて〳〵キヤプテイヴエートする仕方が如何にも巧妙に、何うしてあゝいふ風に想像がつくかと驚かるゝ位に書いてある。誰もあんなデヴエロプメントをクリエートする事は出來ない。さうして此女が非常にサ

ツトルなデリケートな性質でね、私は此の女を評して「無意識な偽善家（アンコンシアス・ヒポクリット）」――偽善家と譯しては惡いが――と云つた事がある。其の巧言令色が、努めてするのではなく、殆ど無意識に天性の發露のまゝで男を擒にする所、勿論善とか惡とかの道德的觀念も、無いで遣つてゐるかと思はれるやうなものですが、こんな性質をあれ程に書いたものは他に何かありますかね、――恐らく無いと思つてゐる。……／○『三四郎』は長くなるかといふのですか。然うですね、長く續かせるのですね。サア何を書くかと云はれると、又困りますがね。――實は今御話をした其のフエリシタスですね、之を餘程前に見て面白いと思つてゐたところが、宅にゐた森田白楊が今頻りに小說を書いてゐるので、そんなら僕は例の「無意識なる偽善者（アンコンシアス・ヒポクリット）」を書いて見ようと、串談半分に云ふと、森田が書いて御覽なさいと云ふので、森田に對しては、さう云ふ女を書いて見せる義務があるのですが、他（ほか）の人に公言した譯でもないから、どんな女が出來ても構はないだらうと思つてゐます。實際何んな女になるかも自分で判らない。且つ今お話した層々累々的な敍述丈で進むのではなくエキステンションも這入つてくるんだから、女は何うなつても構はない、と云ふと無責任ですが、出來損なつてもズーデルマン抔を引合に出して冷かしちや不可ません。」と言つてゐる。この談話筆記は、當時、田山花袋の漱石の『三四郎』に對する冷評の種となり、それが又漱石の『田山花袋に答ふ』となつて、文壇に一波瀾を捲き起したが、それは兎も角、此所で漱石は、自分が『三

四郎』の美禰子で、その「無意識なる僞善者(アンコンシアス・ヒポクリット)」を書かうとしてゐるのだといふ事を、公言してゐる事は、注目に値ひする。

此所のヒポクリットを僞善者と飜譯するのは惡いと、漱石は言つてゐる。それは恐らく僞善者といふ言葉には、道德的な色彩が附著して、人が自分でないものになるといふ、本來の意味が消されるからには相違ない。フェリツィタスには亭主がある。亭主のある女が亭主以外の男を追つかける事は、許されない事である。フェリツィタスといへども、その事はよく承知してゐる。それにも拘はらずフェリツィタスは、自分にも知られない奥の力に驅り立てられて、亭主以外の一人の男を追つかけ、いろいろに動き、その男を擒にしようとしずにはゐられないのである。卽ち無意識的に自分でないものにならなければゐられないのである。是は、結果から言へば、無論道德的批判の對象となるべきものであつたには違ひない。然し動機から言へば、道德的批判を超越した、もしくは道德以前の、生理心理的事實のやうなものであるに外ならなかつた。それを漱石は、アンコンシアス・ヒポクリシーと名づける。――自由で、聰明で、誰にでも姉さんとして對しなければ氣が濟まないやうな美禰子は、同い年の三四郎を相手に戀愛を意識するには、餘りに大人びてゐた。然し美禰子は、自分の意識と反省とを超えた奥の方では、鐵が磁石に吸ひ寄せられるやうに、三四郎に吸ひ寄せられる。ただ美禰子は、意識し反省する面の上では、その事實を

認めない。從つてその面の上で、美禰子の眼に映る三四郎の姿は、影が薄かつた。然も美禰子の意識と反省との閾を越えた奥の方では、三四郎の姿は、別趣な光彩を帶びて來るのである。自然三四郎に對する美禰子の態度は二樣に分れ、普通の美禰子らしいものの間に、普通の美禰子らしくないものが、屢するすると、美禰子の奥から滑り出て來る。其所に美禰子のアンコンシアス・ヒポクリシーが成立し、また其所に三四郎は、無限に牽きつけられる。然も意識し反省する面の上では、美禰子にとつて三四郎は、物の數でもないのである。その時三四郎は、美禰子から突き放される。

漱石は『坑夫』の中で、人間に性格などといふものはない、小說だの戲曲だのに、かういふ性格を書いたとか、ああいふ性格が書かれてゐるとかよく言はれるが、あれは事實は纏める事の出來ないものを、無理に型に嵌めて纏めて喜んでゐるに過ぎないと言つて、無性格論を說いた。その意味で『三四郎』の美禰子は、この無性格論の實踐の一端であつたと見る事も出來る。美禰子の態度に二タ通りあつて、それがその時その時で頻に交錯するとすれば、美禰子は「無性格」だつたのに違ひないからである。然し當事者の三四郎から言へば、美禰子のこの「無性格」ほど、三四郎を惱ますものはなかつた。『行人』の二郎は嫂の事を、「嫂は何處から何う押しても押し樣のない女であつた。此方が積極的に進むと丸で暖簾の樣に抵抗がなかつた。仕方なしに此方が引

き込むと、突然變な所へ強い力を見せた。其力の中には到底も寄り付けさうにない恐ろしいものもあつた。又は是なら相手に出來るから進まうかと思つて、まだ進みかねてゐる中に、弗と消えて仕舞ふのもあつた。自分は彼女と話してゐる間始終彼女から飜弄されつゝある樣な心持がした。」と言つてゐるが、三四郎は美禰子に戀してゐただけに、二郎のやうに、相手の「無性格」から來るかういふ飜弄を、「不愉快であるべき筈だのに、却つて愉快でならなかつた。」とは、感じる事が出來なかつた。愉快ではあつても、結局迷路の奥に連れ込まれて、藻掻き足掻きしなければならなかつた。作者漱石が言つてゐるやうに、この際三四郎が渦中から一歩立ち退いて、事態を客觀化する事が出來たら、三四郎は恐らくこの迷路から拔け出す事が出來たに相違ない。それは既に野々宮さんによつて實行されてゐる。然し三四郎にはそれが出來なかつた。出來なかつたのは、三四郎が美禰子を愛してゐたからである。この事を後に、『行人』の一郎が、更に深刻に經驗する。

もつとも此所で漱石の書かうとした事は、その意味での女の「無性格」ではなかつた。少くともその「無性格」を非難する目的を持つてゐるものではなかつた。のみならず漱石が此所で書かうとした事は、三四郎と美禰子との、さういふ特殊な戀愛事件の經緯でもなかつた。勿論それも書かれてはゐるが、然し漱石が此所で書かうとしたものは、田舎の高等學校を卒業して、初めて

東京の大學に這入つた三四郎が、東京に來ていろんな事を經驗する、そのいろんな經驗である。美禰子との經驗は、その中の一つに過ぎない。その上三四郎の世界は、大學に這入りたての青年の世界であつただけに、純眞ではあるが幼稚で、まだ淺春の、よろづのものがほのぼのとした世界であつた。美禰子といへども、自由で、聰明で、誰にでも姉さんとして對しなければ氣が濟まないやうな女でも、良家の處女である。假令三四郎に對してアンコンシアス・ヒポクリシーが現はれるとしても、それが、例へばフェリツィタスのやうに、太い線となり鋭い輪郭となつて現はれて、大事を惹き起すに到る筈もない。從つて三四郎と美禰子との關係は、美禰子が三四郎から御嫁にいらつしやるさうぢやありませんかと、私かに怨じかけられて、「聞兼る程の嘆息をかすかに漏らし」すとともに、「細い手を濃い眉の上に加へ」て、「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」と、かすかな聲で、何ものかの前に謝罪する場面で、ふつと斷れてしまふのである。——然も漱石が『三四郎』で三四郎・美禰子の戀愛を、それよりも美禰子のアンコンシアス・ヒポクリシーを書いたといふ事は、注目に値ひする。『野分』や『虞美人草』で、主觀的に、感情的に、從つて十分具體化される事なしに、叩きつけられた女性の惡德が、此所ではまだはつきり惡德としては成長してゐない、從つてそれはこの先き善となるか惡となるか分からないやうな、從つてそれは善惡の彼岸にある芽生えの狀態に於いて捕捉され、寧ろ和解的な態度で描き出

されてゐるからである。漱石は此所から、更に女性を現實に見直して行かうとしたものかも知れない。

五四　『それから』

漱石は『三四郎』を書き終つてから、『文學評論』の原稿の校閲にとりかかつた。是は大學で講義した「十八世紀英文學」のノートを、瀧田樗陰・森田草平をして清書せしめたものである。この仕事は然し『文學論』の場合と違つて、ノートは言文一致體で、漱石が大學で講義する通りを書いたものだつたので、瀧田樗陰も森田草平も、ただそれを清書するとともに、引用文を譯しさへすればよかつた。もつとも樗陰は『中央公論』の編輯にも急がしく、大學を卒業するにも急がしく、碌に仕事が出來なかつたので、下働の殆んど全部は森田草平が全部引き受けたと言つても可いだらう。それを漱石は明治四十一年(一九〇八)の暮へかけて、「約一ケ月の間は專心」校閲するのである。その上漱石は、『文學論』の經驗で懲りたと見えて、自分で是を校正した。是ははつきりとは分からないが、明治四十二年(一九〇九)の二月の末ごろまでかかつた。

一方で漱石は、明治四十二年の元日に、小品『元旦』を新聞に載せた。是は吉例のやうなもの

だから致し方がない。然し大阪からはまた追つかけて、『夢十夜』のやうなものを書けといふ注文が來た。さうして新年早早「原稿まだ出來ませぬか」と催促してよこした。それで漱石は「大に狼狽して、原稿を書き始めた。是が『永日小品』である。是は、一月十四日から二月十四日まで、二十回に亙つて『東京朝日』に掲載されたが、然し『大阪朝日』にはそれ以外、『紀元節』・『行列』・『昔』・『聲』・『金』・『心』・『變化』・『クレイグ先生』などの諸篇が、掲載されてゐる。漱石は『永日小品』を書き續けるとともに、『文學評論』の校正刷を見て行つた譯である。『東京朝日』にそれらの小品がなぜ掲載されなかつたのかは、分からない。

然も三月の末には又又大阪から、四月下旬から「少し續くもの」を書いてくれと頼まれ、それも漱石は引き受けてゐる。この時『東京朝日』では、森田草平の『煤煙』のあとを與謝野鐵幹が書き、そのあと、およそ七月ごろから、漱石が書く筈になつてゐた。漱石は初めは小説を二つ、引き續いて書く氣でゐたのである。四月九日の日記に漱石は、「大阪へ小説を書く約束あり。もう書き始めねばならぬと思ふ。一向始める氣色なし。自分でも分らず。」と書いてゐる。四月十六日の日記には、「晩に小説を少し考へる。別段まとまらぬうちに寐て仕舞ふ。」とある。四月二十四日の日記には、「無上の好天氣。朝起少々小説を考へる。何だか書けさうな氣がした所であまり天氣が好いので散歩に出たくなる。」とある。同じ日に鈴木三重吉に宛てた手紙には、「小説は大

阪へ出すにて候。まだ一回も書かず候。何だか如是閑と申す男が？といふ標題で今しきりに書いて居り候。其あとへでも載せる氣にや一向催促も參らず候。然し小生ももう書き始める積りに候唯何を書いてよきか分らぬ丈に候」と書いてある。四月二十七日の日記には、「小說を書かう書かうと思つて未だ書かず。大坂より原稿送れといふ電報でも掛かれば好いと思ふ。」とある。然るに四月二十八日の日記には、「素川來信に曰く自分の小說を四月下旬より載せる筈の處如是閑の作中々盡きさうになし。よつて五月下旬より載せる事にすると。結構也。序でに東京の大塚楠緒女子の終結を待つて東京大阪へ雙方一時に出して呉れないかと申してやる。さうでないと、つゞけて兩方へ書く爲め。力を分つて充分に兩方を纏める事が出來ないからなり。尤も兩方へ輕いものを二つ書く方が樂な心持もする。」と書いてある。是は漱石の希望通り、長いものを一つ書くだけで、雙方一度に義務を果す事が出來るやうになつた。それが、六月二十七日から十月十四日まで、百十回に亙つて連載された、『それから』である。漱石は是を五月三十一日から書き始め、例の嫌ひな夏を書き通して、八月十四日に書き終つた。

『それから』は言ふまでもなく、『三四郎』・『それから』・『門』と續く三部作の、第二篇である。『三四郎』が、大學へ這入りたての三四郎を中心としてゐるのに對して、是は大學を卒業して三四年ぶらぶらしてゐる、代助を中心とする。然も『三四郎』で、三四郎が美禰子との戀で——戀

とも愛とも名のつけやうがない淡い心の傾きを押し返へされたのに反して、代助は、曾ては自分の戀愛を潔く友人に讓つたにも拘はらず、どうしてもそれを思ひ切る事が出來ず、自分自身と戰ひぬいた末、到頭その衷情を相手に吐露するに至るまでを描き出す事を目的とする。漱石は『三四郎』では、寧ろ廣田先生の立場に立つて、篇中の三四郎や與次郎や野々宮さんや原口さんを、多少見下ろした態度で描いてゐるが、『それから』では、寧ろ代助と同じ立場に立ち、代助とともに苦しみ、代助とともに歎き、代助の爲に書いてゐる感を與へる。是までの作品から言へば、漱石が作中の人物に是程接近して書いて行つた作品は、『幻影の盾』や『薤露行』のやうなロマンティックな作品は別として、殆んどないと言つて可いであらう。その點だけでも『それから』は、注目すべき作品である。

明治四十二年三月六日の日記に、漱石は「要吉朋子九段の上での會合の場／煤烟は劇烈なり。然し尤もと思ふ所なし。この男とこの女のパツションは普通の人間の胸のうちに呼應する聲を見出しがたし。たゞ此男と此女が丸で普通の人を遠ざかる故に吾々は好奇心を以て讀むなり。しかも其好奇心のうちには一種の氣の毒な感あり。彼等が入らざるパツションを燃やして、本氣で狂氣じみた芝居をしてゐるのを氣の毒に思ふなり。行雲流水、自然本能の發動はこんなものではない。此男と此女は世紀末の人工的パツションの爲に囚はれて、しかも、それに得意なり。それが

自然の極端と思へり。だから氣の毒である。神聖の愛は文字を離れ言說を離る。ハイカラにして能く味はひ得んや。」と書いてゐる。『それから』第六には、「代助は門野の賞めた「煤烟」を讀んでゐる。今日は紅茶々碗の傍に新聞を置いたなり、開けて見る氣にならない。ダヌンチオの主人公は、みんな金に不自由のない男だから、贅澤の結果あゝ云ふ惡戲をしても無理とは思へないが、「煤烟」の主人公に至つては、そんな餘地のない程に貧しい人である。それを彼所(あすこ)迄押して行くには、全く情愛の力でなくつちや出來る筈のものでない。所が、要吉といふ人物にも、朋子といふ女にも、誠の愛で、已むなく社會の外に押し流されて行く樣子が見えない。彼等を動かす內面の力は何であらうと考へると、代助は不審である。あゝいふ境遇に居て、あゝ云ふ事を斷行し得る主人公は、恐らく不安ぢやあるまい。これを斷行するに躊躇する自分の方にこそ寧ろ不安の分子があつて然るべき筈だ。代助は獨りで考へるたびに、自分は特殊人(オリヂナル)だと思ふ。けれども要吉の特殊人(オリヂナル)たるに至つては、自分より遙かに上手(うはて)であると承認した。それで此間迄は好奇心に驅られて「煤烟」を讀んでゐたが、昨今になつて、あまりに、自分と要吉の間に懸隔がある樣に思はれ出したので、眼を通さない事がよくある。」といふ敍述がある。

森田草平の『煤煙』が『東京朝日』に連載されたのは、明治四十二年一月から四月へかけての事である。小說を書いて生きるより外はないと考へてゐた草平の當時の境遇に同情し、その小說

が『東京朝日』に連載されるやうに取計らつてやつた漱石は、初めのうちこそその出來榮えに滿足し、激勵の言葉を直接間接に送つてゐたが、第十の神戸なる人物が出て來て要吉と會話をするあたりから段段激しい不滿を持ち始め、到頭要吉と朋子とが九段の上で會合する場面の描寫に至つて、すつかり愛想をつかしてしまひ、三月六日の日記に書きつけたやうな事を、考へるやうになつた。『それから』第六の中の代助の敍述も、恐らく漱石自身の感じた事を、日記とは別の方面から、そのまま描き出したものだらうと思ふ。その『煤煙』が『それから』を書く上に、漱石をどの位刺激したものかは、精確に言ふ事を得ないが、然し日記に書かれてゐる『煤煙』の批評と言ひ、『それから』の中の代助の『煤煙』の批評と言ひ、漱石が『それから』に於いて、『煤煙』の戀愛を否定するやうな意味で、別箇の戀愛を取り扱はうとしてゐる事だけは、爭はれない。日記の言葉を借りれば、漱石は此所で、「普通の人間の胸のうちに呼應する聲」をよび起し得る筈の、「行雲流水、自然本能の發動」による、「文字を離れ言説を離」れた「神聖の愛」を描き出さうとするのである。代助が『煤煙』の要吉に「不安」があるかどうかを疑ひ、その「不安」は寧ろ自分の方にこそあるのだと考へるのも、結局は代助の中に「行雲流水、自然本能の發動」するものがあつて、それと社會の掟とが摩擦して代助を苦しめるのに、要吉はさういふ苦しみを少しも經驗してゐると見えない事を、代助が不思議に思ふからの事であるのに外ならない。然も『幻影の

盾』のヰリアムとクララとの戀でも、『薤露行』のランスロットとギニヰアとの戀でも、もしくはランスロットに對するエレーンやシャロットの女の戀でも、また『一夜』で何氣なく觸れられ、『趣味の遺傳』でその可能を科學的に證明されようとした戀愛でも、すべて「行雲流水、自然本能の發動」としての、「文字を離れ言說を離」れた、「神聖の愛」であつた。『三四郎』の美禰子を、その意識と反省とを越えた奥の方で動かした力も、亦是であつたといふ事が出來る。廣田先生の經驗も、その上に淡い詩の衣がかけられてはゐるが、亦是である。漱石は、是までさういふ戀愛を、詩の世界もしくは物語の世界のやうな世界の中に置いて、その戀愛の美しさもしくは憐れさを描いたが、此所でそれを、現實の、二十世紀の社會のまん中に置いて、その惱みと悅びとを描き出さうとするのである。

明治四十二年三月十四日の日記に、漱石は「今日も曇。きのふ鰹節屋の御上さんが新らしい半襟と新らしい羽織を着てゐた。派出に見えた。歌麿のかいた女はくすんだ色をして居る方が感じが好い。」と書いてゐる。四月二日の日記には、「散歩の時鰹節屋の御神さんの後ろ姿を久振に見る。」とある。四月三日の日記には、「鈴木禎次曰く。夏目は鰹節屋に惚れる位だから屹度長生をすると。長生をしなくつても惚れたものは惚れたのである。」とある。四月十二日鈴木三重吉宛の手紙の中には、「今日散歩の歸りに鰹節屋を見たら亭主と覺しきもの妙な顔をして小生を眺め

居候。果して然らば甚だ氣の毒の感を起し候。其顏に何だか憐れ有之候。定めて女房に惚れてゐる事と存じ是からは御神さんを餘り見ぬ事に取極め申候」とある。この「鰹節屋」といふのは、南榎町の、御釋迦様のならびの鰹節屋である。其所の神さんは、色が蒼白く、下膨れの長顏で、まつたく「歌麿のかいた女」らしい女であつた。『それから』の三千代が、心臟が惡くて、色が蒼白く、下膨れの長顏で、「歌麿のかいた女」らしい女として描き出されてゐるのは、或はこの鰹節屋の御神さんの顏がモデルにされてゐるのではないかと思ふ。漱石は歌麿のかいた女の顏が好きだつた。既に『一夜』の中ででも、髯のある男に「わしは歌麻呂のかいた美人を認識したが、なんと甚を活かす工夫はなかろか」と言はせ、更に「夢にすれば、すぐに活きる」と言はせてゐる。理想の美人として漱石が憧がれてゐた女の顏は、歌麿のかいた女の顏だつた――といふよりも、漱石が初めて戀をした相手の人といふのが、細面の美人だつたといふから、その人の顏が歌麿のかいた女のやうな顏だつたのかも知れない。更に空想を逞うすれば、漱石は鰹節屋の御神さんの顏を、散歩の往き復りに眺めてゐるうちに、自分の初戀の女の事が次第に自分の頭の中に濃厚な影を落し始め、それが機緣となつて漱石の空想の世界は、いろんな場面を築き上げ、それに『煤烟』の刺激も加はつて、到頭『それから』のやうなものに纏まり上がつたものではないかとも思はれる。――勿論是は私の空想である。然し漱石の頭の中に、昔の美しい記憶が、絕えずとは言

はないまでも、陽炎のやうにちらちらしてゐたに違ひない事は、『幻影の盾』や『薤露行』などを問題にするまでもなく、既に『三四郎』の中の廣田先生の夢の話が、是を證明する。のみならず漱石は、この後といへども折に觸れては、漱石が頭の中にさういふ美しい姿を抱いてゐる事を示唆する、いくつかの場面を構成して見せてゐるのである。

『三四郎』の戀愛は、廣田先生の夢の話で象徴されてゐるやうに、夢のやうに淡い戀愛であつた。三四郎も美禰子も、自分の衷に「行雲流水、自然本能の發動」を感じながら、それとも知らずに、別れ別れになつてしまふ。『それから』では、互に「自然本能の發動」を感じてゐた二人のうちの一人が、ヒロイズムの美名に惑はされて、その發動を押へ、自分の戀を友人に讓つた後で、次第にそれを押へた事の非を悟り始め、止むに止まれぬものに驅り立てられつつ、竟に自然の命令するままに、一直線に對象に向かつて衝き進む所が描き出される。その點で『それから』は紛ふ方なく、『三四郎』の繼續である。三四郎を棄ててお嫁に行つた美禰子の役割を、三千代を勸めて平岡に片づかせた代助が勤めてゐると想像すれば、『それから』は普通に考へられてゐるよりもつと緊密に、『三四郎』と連接する。然も『それから』では、一度「自然本能の發動」を押へた代助は、その過誤を償ふ爲には、社會の罪人となる事の覺悟をしなければならなかつた。社會の罪人となつてもなほ、代助が「普通の人間の胸のうちに呼應する聲」を喚び起す事が出來る爲

誰でもには、代助は嚴肅に人間として苦しみ通しながら、嚴肅に人間として生きおほせた事を、誰でもが納得しなければならなかつた。――是は藝術家にとつて、困難至極な課題である。同時にアムビシアス至極な課題である。それだけに漱石は、「大阪へ小説を書く約束あり。もう書き始めねばならぬと思ふ。一向始める氣色なし。自分でも分らず。」だの、「無上の好天氣。朝起少々小説を考へる。何だか書けさうな氣がした所であまり天氣が好いので散歩に出たくなる。」だのと、『それから』を書かうと心が定まるまでは、隨分暢氣なやうな事を言つてゐるが、然しいよいよ『それから』を書き出す事に腹がきまつてからは、隨分事細かに全體の構成を組み立て、前以つて考へられるだけの事は、考へ悉して、萬遺漏なき事を期したやうに見える。その事は、決定版全集第十五卷「日記及斷片」の第四百四十五頁から第四百五十二頁へかけての、『それから』の覺え書きが證明する。漱石は其所で全體を十五に分ち、その一つ一つの下に、或は(a)(b)(c)、或は(1)(2)(3)の番號をうつて、その章に於いて書かれる豫定の、材料とその材料の取り扱ひ方との心覺えを、實に丁寧に、順序正しく書き列べて行つてゐるのである。勿論漱石は書き出す前に、書かうとする事を十分に錬り上げた。それは『虞美人草』や『三四郎』や、その他の作品に關する、相當詳細な覺え書きが殘つてゐるのを見ても、明かである。然しその詳細を極めてゐる點で、『それから』の覺え書きに匹敵し得るのは『虞美人草』の覺え書きがあるだけで、それさへ是に比べると、

遙に簡單なものであつた。さう言へば漱石は、『虞美人草』の百二十七回を書くのに、およそ九十日を費してゐるのに、『それから』の百十回に、およそ七十六日を費してゐる。『坑夫』の九十一回は、およそ五十日、『三四郎』の百十七回は、およそ六十日である。のみならず漱石は『それから』の原稿の或部分を、二度までも書き直してゐる。漱石が『虞美人草』を書きかけては反故にし、書きかけては反故にしたものが、今日多少殘つてゐるが、それは多く書き出しの四五行である。然るに八月九日の日記によると、漱石は『それから』の第百回を、半分程書いてから書き直してゐる。のみならず漱石は、『それから』を書き出して間もなく、六月九日に、プランの立て直しさへしたやうに見える。こんな事は、今までにない事である。是を見ても漱石が、いかに『それから』の題材を書きこなして行くに就いて、注意の上に注意を、苦心の上に苦心を重ねたかを想像する事が出來る。

然も漱石がそれほど苦心して書いた『それから』は、是までの長篇小說とは違つて、寧ろ女性を讚美する——少くとも戀愛のぎりぎりに押し詰められた土壇場に於いて、女は男よりも遙に立破な態度を示すものであるといふ事を、證明するやうな作品であつた。言ふまでもなく三千代は、初めから代助を愛してゐたのである。然し三千代は、自分の愛する代助から熱心に勸められて、自分は代助に愛せられてはゐないのだと考へ、代助を諦めた上で、平岡の所へ行く決心をしたの

である。然るに平岡は、三千代が病身で、十分自分に冊く事がないといふ事を口實に、道樂を始め、その爲め公金に手をつけ、職をやめられ、東京へ舞ひ戻つて來なければならない事になつた。三千代は寂しい家庭を寂しく守つてゐたが、それでも三千代は自分の置かれた境遇に隨順し、決して平岡に二心を抱くやうな事をしなかつた。東京に歸つて代助に會ひ、代助から暖い同情を濺がれても、三千代は曾ての戀人として代助を眺めるのではなく、父か兄かのやうなものとして、唯一の心の杖と賴んで、それを感謝をもつて受け取つてゐたのである。然し代助の方では、三千代に會ひ、三千代の家庭を覗き、三千代の寂しさうな顏を見る度每に、自分の現在の箇人主義も懷疑主義も、畢竟は自分が客氣に驅られて自分を欺き、自分の愛する三千代を平岡に讓つたといふ事から來てゐる事に氣が附き始め、次第に自分の過誤を悔いるとともに、どうしても三千代なしには生きる事が出來ない事を、痛切に感じ始め、あらゆる事情の錯綜とあらゆる苦鬪との末に、代助は到頭その衷情を、三千代に向かつて打ち明ける。然し三千代は、今になつてそんな事を打ち明けてくれるのは殘酷である、それほどならなぜあの時に自分を棄てたのかと、自分の現在の立場を守つて、容易に代助の衷情を受け入れようとしない。代助は元よりその反問を覺悟してゐた。それだから代助は、その刑罰として自分は今まで、獨身でゐて、苦しんでゐるのだと答へる。勿論三千代には、代助に對する愛情がなくなつてゐたのではなかつた。反對に三千代の奧では、

上に灰はかけられてゐたけれども、代助に對する愛情が、まだ燃えてゐたのである。今代助によつてその灰がかきのけられ、更に風さへ與へられた。當然それは前よりも更に劇しく燃え上がらなければならない。三千代は代助が、自分なしにはどうしても生きて行かれない事を感じるや否や、「仕樣がない。覺悟を極めませう」と答へる。然も三千代は「覺悟を極め」るや否や、決然として迷はないのである。このぎりぎりの場にあつても、第二義の事で迷つてゐるのは、代助であつた。

『三四郎』の中で、野々宮さんが「女には詩人が多いんですね」と言ふと、廣田先生が「男子の弊は却つて純粹の詩人になり切れない所にあるだらう」と答へる。『彼岸過迄』の中で須永は、「僕は自分と千代子を比較する毎に、必ず恐れない女と恐れる男といふ言葉を繰り返したくなる。……此間講釋好きの松本の叔父から、詩と哲學の區別を聞かされて以來は、恐れない女と恐れる男といふと、忽ち自分に緣の遠い詩と哲學を想ひ出す。……僕に云はせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思ひ切つた事の出來ずに愚圖々々してゐるのは、何より先に結果を考へて取越苦勞をするからである。千代子が風の如く自由に振舞ふのは、先の見えない程强い感情が一度に胸に湧き出るからである。」と言つてゐる。三千代は美禰子ではなかつた。また千代子でもなかつた。系圖から言へば三千代は、寧ろ一切の私を棄てて甲野さんを

愛し、甲野さんの行く所なら何所へでも行かうといふ、糸子の血をひいた女であるといふべきである。然し純粋な強い感情が一度に胸に湧き出る爲に、何ものをも恐れない「詩人」であつたといふ意味では、四人ともに共通するものを持つてゐる。それに比べると代助は、須永と同じやうに、正に「恐れる哲學者」であるに外ならなかつた。さうして代助は、須永がみともない如くにみともなく、須永が齒痒い如くに齒痒かつた。

漱石が果して『それから』でさういふ男女の對照を書かうと意圖したものであるかどうかは、はつきり分からない。寧ろ『それから』で漱石は、さういふ「恐れる」男が「恐れない」男と變化する所を書かうとしたのではなかつたのかとも思はれる。然し代助が最後に三千代と會ふ場面で、三千代が悲痛な反應を示したあとでも、結果の事を先に考へ、經濟の事計りに拘泥し、三千代から「今貴方の御父樣の御話を伺つて見ると、斯うなるのは始めから解つてるぢやありませんか。貴方だつて、其位な事は疾うから氣が付いて入つしやる筈だと思ひますわ」と注意され、さう言はれて初めて其所に氣がついたかのやうに驚き、頭を抑へて、「少し腦が何うかしてゐるんだ」と獨り言のやうに言ふ所でも、最後に代助が父だの兄だの、うちの者からは義絶され、平岡からは三千代に會ふ事を嚴禁され、じつとしてゐるに堪へなくなつて、「門野さん、僕は一寸職業を探して來る」と言つて出かけて行くのも、すべて代助のさういふみともない、齒痒いサイド

に、はつきりした光を掛けようとする、作者の意圖を洩してゐるやうに見える。然も『それから』に次いで書かれた『門』が、同じやうな男女の對照を示してゐる事を考へ合せる時、この想像は一層確肯される。少くとも此所で漱石は、女性を讚美しないまでも、「恐れる」ものとしての男性を描き出し、その「恐れる」事のみともなさ、齒痒さとともに、その餘儀なさを、男性のやうには西洋文化の壓迫を受ける事がなく、從つて頭だけが悧巧（ソフィスティケート）にされて心が是に伴ふ事がないといふのではなく、自然のままに成長する事が出來てゐる、女性の言動と對照させようとしたものだつたには違ひないのである。その意味で『それから』は、明治末期の社會相を反映する、日本のインテリゲンツィアの悲劇を取り扱つたものであると言つても可いかも知れない。事實『それから』には、『それから』の世界に幅を持たせる爲に、大きな背景として當時の社會相が織り込まれてゐるが、さういふ社會の子としての代助には、當然さういふ悲劇が可能だつたのである。

五五　滿韓旅行

漱石が中村是公と豫備門の時分から親しくしてゐた事は、既に述べた。漱石は是公と、ある時は江の島へ遠足し、ある時は富士に登山し、ある時は私塾を教へ、ある時はボートを漕ぎ、いろんな事を共にしてゐたが、大學を卒業してからは別れ別れになつて、その後一度ロンドンで會つたつきり、明治四十二年(一九〇九)の一月の末に、突如として漱石の所へ電話をかけて來るまでは、まるで消息を斷つてゐた。然もその電話がかかつて來た時も、漱石は、指定された場所へ、指定された時間に行く事が出來なかつた。「昔の中村は滿鐵の總裁になつた。昔の自分は小說家になつた。滿鐵の總裁とはどんな事をするものか丸で知らない。中村も自分の小說を未だ曾て一頁も讀んだ事はなからう。」と、漱石は、三月五日に書いた『變化』の中で、言つてゐる。その後是公は、七月三十一日(七月三十一日の日記に、「午後中村是公來。是公トラホームを療治して餘病を發し一眼を眇す。左の黑眼鼠色になれり。」とある。漱石と是公とは、ロンドン以來、恐

らくこの日初めて顏を合せたに違ひない。）に漱石の所へ訪ねて來た。八月六日には漱石が是公を訪ねて行つてゐる。かうして漱石と是公との舊交は暖められたが、恐らくこの間に話は成り立つたものだらう、漱石は『それから』を書き上げたら、是公と一緒に、滿洲に遊びに行く事に決心した。八月十四日漱石は『それから』を書き終つた。八月十八日中村是公から、いよいよ立つが、一緒に行くかどうかの問ひ合せがあつたのに對し、漱石は行くと答へ、洋服屋を呼んでその爲の洋服を作らせた。

然るに八月二十日になつて、漱石はひどい胃カタールに冒され、どつと床についてしまつた。是は一週間足らずで起き上がれたが、然し醫者は滿洲行に反對した。自分でも是では無理だといふ自覺が十分にあつたので、漱石は八月二十七日是公に、一船延す旨を通じた。是公は先に立つて大連に歸任した。その跡を追うて漱石が東京を立つたのは、九月二日の事である。

漱石は九月二日の夜行で大阪に赴き、三日朝九時出帆の鐵嶺丸に乘り込んで大連に向ひ、大連には六日の午後五時ごろに著いた。十日大連から旅順に向ひ、十二日に大連に歸り、十四日大連出發熊岳城、十六日熊岳城出發營口、十七日營口から湯崗子、十九日湯崗子から奉天、二十一日奉天から撫順、その日のうちに奉天に歸つて翌二十二日ハルビンに向ひ、二十三日ハルビンから長春へ引き返し、二十四日長春から奉天、二十六日奉天から安東縣、二十七日安東縣に著いて、

二十八日は平壤へ、三十日は平壤から京城へ、十月二日は仁川を見物し、十月三日は開城を見物し、十月七日には宿屋を引き拂つて、妹婿鈴木禎次の弟、鈴木穆の家に移り、十月十三日に京城出發、十月十四日下關著。下關から汽車で廣島に向ひ、廣島で下車。その夜九時半の汽車で十五日朝大阪に著。中の島ホテルに入り、直ちに朝日新聞社を訪うたが、鳥居素川は東京、西村天囚は獵に出て居り、社長は御影の別莊だといふので、天下茶屋に長谷川如是閑を訪ひ、一緒に濱寺へ行つて午飯を喰ひ、電車で大阪に歸つた上で、その日のうちに京都に赴き、十六日嵐山や高雄を見物、夜八時二十分の夜行で、十七日東京に歸つて來た。丁度四十六日の旅、漱石にとつて、ロンドン留學以來の大旅行だつた。

漱石は東京に歸るとすぐ『滿韓ところ〴〵』を書いた。是は既に十月二十一日から新聞に出だした。漱石が筆を執つたのは、歸つて來た翌翌日あたりだつたらうと思ふ。然もその『滿韓ところ〴〵』は、十月の末、特に十一月になつて、紙面の都合か何か、休載の日が多く續いてゐるうちに、明治四十二年も十二月三十日となつたので、漱石は五十一回で是を打ち切つてしまつた。從つて是は名前は『滿韓ところ〴〵』ではあつたが、然し事實は出發の日から大連、旅順、熊岳城、營口、湯崗子、奉天、撫順の印象だけしか書かれてゐない。その他のハルビン、長春、安東縣、平壤、京城、仁川、開城などの事は、到頭書かずじまひになつた。然も漱石が撫順に行つた

のは、九月二十一日である。『滿韓ところ〴〵』では漱石がその撫順の炭坑の中に這入つて行きかける所までで終つてゐる。日數から言へば『滿韓ところ〴〵』で取り扱はれたものは、全旅行の半ばにも足りないのである。是は勿論漱石が新年に跨がる事を好まなかつた爲もあつたには違ひないが、それよりもこの原稿が、十月二十一日から十二月三十日までの七十一日の間に、例へば十一月二日から七日まで、十一月二十四日から二十九日まで休むといふ風に、五十一回しか載せられなかつた――それほど新聞の方でこの原稿を載せる事に熱心を示さなかつた事が、漱石に原稿を書き續ける興味を失はしめた爲だつたに違ひないと思ふ。漱石は十一月二十八日、ドイツにゐる寺田寅彦に宛てて、「僕は新聞でたのまれて滿韓ところ〴〵といふものを書いてゐるが、どうも其日の記事が輻輳するとあと廻し［に］される。癪に障るからよさうと思ふと、どうぞ書いてくれといふ。だから未だにだら〴〵出してゐる。」と書いてゐる。――もつとも『東京朝日』では、この年の十一月二十五日から、漱石主宰の下に、文藝欄を新設し、その爲め毎日二段くらゐの餘白を、その方に割く事になつてゐたのである。漱石の『滿韓ところ〴〵』は、多少その影響を受けたのかも知れない。それにしても、必要な時には、ひつきりなしに書け書けと言つて來るくせに、こつちが乘り氣になつて書かうといふのに、よく休載してはこつちの氣勢を殺ぐといふ事は、漱石から言へば、まつたく「癪に障る」事だつたに違ひないのである。

もつとも『滿韓ところ〴〵』は、『滿韓ところ〴〵』ではなく、『漱石ところ〴〵』であるといふやうな批評が、當時あつた。それは、滿洲と朝鮮とを豫期してゐたのに、漱石しか與へられなかつたといふ事を意味する。是と同じやうな意見が社內にもあり、それが『滿韓ところ〴〵』の体裁となつて現はれたのではなかつたのかとも思はれる。然し、それは豫期する者の方が無理で、漱石は何も滿洲や朝鮮を書く爲に、出かけて行つたのではなかつた。漱石のこの旅行は飽くまでもパーソナルな旅行なのである。その旅行を卒へて歸つて來て、その旅行記を書くとすれば、それがパーソナルになるのは當り前であつた。然も事實は漱石は、滿洲の風土・文物の描寫を、決して閑却してはゐないのである。大連でも旅順でも熊岳城でも營口でも、何所でも、漱石は其所の樣子を躍如とさせる灸所をしつかり捕まへて、實に鮮やかにそれを描き出してゐる。例へば第二十二回の旅順の新市街の描寫、第二十五回の二百三高地の描寫、第三十三回の熊岳城の描寫、第三十五回の熊岳城から梨畑を見に行く途中の描寫、第三十六回の梨畑の主人の家の描寫、第三十八回の熊岳城から營口へ行く途中の描寫、第四十二回の汽車を下りて湯崗子の宿屋へ行く途の描寫、第四十九回から第五十回へかけての奉天の北陵見物の描寫、――さういふ纏つた、長いものを列擧するまでもなく、一行もしくは二行、到る所に鏤められた、その土地その土地の、空や山や樹や家や人や豚などの鋭い把握が、是を十分に證明する。是を看過して、漱石の『滿韓とこ

ろ〳〵』に滿洲だの朝鮮だのがない（朝鮮のないのは當り前であるが）と言ふのは、言ふ者の盲目を告白するに過ぎない。

勿論此所には、「是公」だの「左五」だの「友熊」だのといふ名前が頻に出て來る。さうしてその人人と自分との、人的關係が詳細に說かれる。それが恐らく此所に、滿洲だの朝鮮だのを要求する者の、目觸りになるのだらう。然しこれらの人人は、漱石の滿洲とは、切つても切れない關係に立つてゐるのである。これらの人人を取り除けば、漱石の滿洲は、存在しなくなるに違ひない。第一漱石は、中村是公が滿鐵の總裁をしてゐなかつたら、滿洲なぞへ出かけて行く氣にはならなかつた筈である。その上旅順には、同じ豫備門時代からの友人である、佐藤友熊がゐた。自分の弟子の坂元雪鳥の兄である、白仁武がゐた。大連には、熊本で自分のうちに書生に置いてやつた、股野義郎がゐた。奉天には古い俳句友達の、佐藤肋骨がゐた。大連で邂逅し、大連からハルビンまで行を共にしたものは、昔極樂水の寺を借りて一緒に自炊生活をしたり、神田の末富屋に陣取つて一緒に腕角力をしたりした、橋本左五郎である。平壤には、是も豫備門時代からの友人の、小城齋がゐた。京城には、自分が昔五高で敎へた事のある矢野義一が居り、その五高以來の友人である淺井榮熙が居り、同じく英文學を專攻し一高以來の友人である山縣五十雄が居り、妹婿禎次の弟鈴木穆夫婦がゐた。到る所でさういふ人人に會つてゐれば、滿洲だの朝鮮だのにゐ

る氣がしないのは無論の事、時代も明治四十二年から逆に二十年も二十五年も飛んで、自分が大學豫備門に通つてゐた時分の昔に返り、明けつ放しで、やんちやで、勝手で、禮儀作法といふやうなものを超越してしまつても、お互に傷けられたと感じないで濟む、遠慮氣兼ねのない、自由な、若若しい青春の夢が歸つて來たやうな氣持になるのは、當然である。その氣持がそのまま潑剌と『滿韓ところ〴〵』の上に跳り出る。その意味で『滿韓ところ〴〵』が『漱石ところ〴〵』になつて居り、然もその漱石が豫備門の漱石になつて居るのも少しも不思議ではなかつた。

漱石のこの旅行が、到る所に珍らしい風景を見て、漱石の氣持を若若しく、新鮮なものにした事は、言ふまでもない。然しそれよりももつと漱石の氣持を若若しく新鮮にしたのは、かういふ世界が今もなほ自分には存在してゐるのだといふ、事實の認識だつたのではないかと思はれる。寺田寅彦に宛てた十一月二十八日の手紙の中で、漱石は「僕は九月一日から十月半過迄滿洲と朝鮮を巡遊して十月十七日に漸く歸つて來た。急性の胃カタールでね。立つ間際にひどく參つたのを我慢して立つたものだから道中非常に難義をした。其代り至る所に知人があつたので道中は甚だ好都合にアリストクラチツクに威張つて通つて來た。」と書いてゐるが、全旅行を「好都合にアリストクラチツクに威張つて通」す事が出來た事も愉快な事だつたには違ひないが、然もそれよりももつと愉快な事は、自分の眼の前に卒然として、自由な、無遠慮な、どんな勝手でも許さ

れるといふやうな世界が出現し、何所へ行つてもその世界が自分について廻つたといふ事だつたのに違ひないのである。もつとも漱石は、胃カタールで「ひどく參つたのを我慢して立つたものだから道中非常に難義をした」と言つてゐる。この事は『滿韓ところ〳〵』の中にも書いてあり、日記には更に屢出て來る。然しそんな事にはお構ひなしに、漱石は豫定の通りに、どしどしと旅程を進行し續ける。是はこの旅行が、漱石にとつて、樂しい旅行だつたからである。

然し漱石には、この無理押しが、後に自分にどんな形になつて報いて來るものか、一向氣がつかなかつた。さうして漱石は、樂しいままに、仁丹を飲んだり、仰向けに臥たりして、胃の痛みをすかしながら、御馳走になつたり、講演をしたり、案內をされたり、次ぎから次ぎへと旅を續けた。

五六　朝日文藝欄

明治三十九年（一九〇六）十一月十六日、讀賣文壇擔任の依頼に對して、漱石が瀧田樗陰に答へた手紙の中に、「今度の御依頼に就て尤も僕の心を動かすものは僕が文壇を擔任して、僕のうちへ出入する文士の糊口に窮してゐる人に幾分か餘裕を與へてやりたいと云ふ事である。然し事情を綜合して考へると夫も駄目である。」と言つてゐる。漱石が『東京朝日』の文藝欄を擔任する事になつた時にも、まづ考へた事の一つは、この點にあつたのだらうと思ふ。

その上漱石は、朝日新聞に入社して以來、差し出がましからざる程度で、それまでの新聞に缺けてゐて、然も必要な事を、徐徐に塡補して行かうと企てた。その第一は、科學知識の普及に資するやうな記事を掲載する事であつた。もつとも是は或は寺田寅彦の助言によるのかも知れない。ともかく漱石は、當時の社會部長澁川玄耳に中介して、寺田寅彦の科學に關する目新しい記事を、『東京朝日』に掲載するやうに取り計らつた。寺田寅彦がＴＲ・ＴＲ生・ＨＫ・その他の匿名で、

『ラムプのいろ〳〵』・『汽船の改良』・『無線電信の現狀』・『天然色寫眞新法』・『ムーア燈』・『寫眞電送の新法』・『宇宙の二大星流』・『雪の話』・『相撲と力學』・『蚊帳の研究』・『天の河と星の數』・『卵の形』・『猫六題』・『萬年筆』・『話の種』・『歳時記新註』などと題して、科學に關して人人の注意を喚起するに必要な短文を『東京朝日』に載せ始めたのは、明治四十年(一九〇七)七月十五日の事である。是はとびとびではあるが明治四十一年(一九〇八)十一月十八日まで續き、明治四十二年(一九〇九)三月、寺田寅彥のヨーロッパ留學によつて中絕された。然も漱石は、明治四十年七月二日菅虎雄に宛てて、「僕うちの新聞で醫學上の事を簡易に書く人を周旋してくれといふが君の弟に聞いて吳れぬか。是は社員といふ譯ではない投書をしてくれゝばよいのである。原稿料は出すさうである」と書いてゐる。また明治四十年六月二十六日には、鈴木三重吉に宛てて、「今日澁川先生がわざ〳〵きて君の投書を歡迎すると云ふて來た。然し都合によると六號にする由。但し侮るべからざる六號にする由。僕は何とも云はなかつた。然し出してやつてくれ給へ」と書いてゐる。同じ年の十月には、戶川秋骨の送つてよこした原稿を、漱石が社の方へ取ついでゐる。かうして漱石は、文藝の方面でも、一方では知人だの弟子だのの爲に便宜を計るとともに、新聞の世界にも、淸新なもしくは有意義な空氣を注入する事を、機會ある每に怠らなかつたのである。

然し當時『東京朝日』では、漱石の文藝に關する時事問題の批評を、主筆が書く論説欄に載せようとは考へてゐても、文藝欄を創設しようなどといふ事は、まだ問題にしてゐなかつた。もつとも明治四十一年（一九〇八）二月一日漱石が戸川秋骨に宛てて、「夫から例の朝日文學欄につき玄耳氏と篤と相談致たる處此三四月に至り紙面擴張の意見實行出來れば附錄ごとに文學もの入要なれどそれまでは閑文字の入れ所なき由に候／小生も右文學欄の出來るのを待ち居候へども是は單に編輯者の一存故主權者の方ではどうなるやら分らず候／もし左樣の改革も實行出來候曉には先日御話しの通小生知人に依賴面白きもの書いて頂き度と存じ居候其節は是非御盡力相願度と存候／先づ夫迄は小生は先日申上候位のナマニエの體で打過ぎる了簡故大兄も御投稿は一先づ御控え被下度候」と書いてゐる所から想像すると、既にこの時分には漱石の頭の中では、この事が問題になつて居り、のみならず漱石はそれを、澁川玄耳まで言ひ出してゐるやうなのである。然し自分が良いと信じる事でも、新聞といふものの機構や、その中に於ける自分の位置などを承知して見ると、さうさうそれを強く主張する事も出來なかつた。從つて漱石は、社の方から積極的に、是非やつてくれと言つて來るまでは、結局「ナマニエの體で打過ぎる了簡」をきめるより仕方がなかつた。然し玄耳のいふ「此三四月」になつても、文藝欄は新設される模樣はなかつた。

そのうち『國民』では、高濱虛子を主宰とし、島田青峯・野上豐一郎を下働らきとして、文藝

欄を新設した。是はたしか明治四十一年十月初めごろの事ではなかつたかと思ふ。虚子は『ホトトギス』の關係を此所へも持ち込んで、いろんな手を盡して、漱石から原稿を取らうとした。例へば虚子は漱石を明治座に招待したり歌舞伎座に招待したりして、それぞれの劇評を書かせた。また島田青峯・野上豐一郎などを派して、漱石の談話筆記を作らせた。もつとも漱石から言つても、例へば『田山花袋君に答ふ』といふやうな、相手の粗野な冷評に對して、はつきり自分の立場を辯明して置く必要のある場合や、もしくは『コンラツドの描きたる自然に就て』といふやうな、眞面目な質疑に對して、自分の考へる所を相手の間に添うて更にはつきり說明する場合には、文藝欄のない自分の社の新聞よりも、『國民』の文藝欄を利用する方が遙に便利だつたのに相違なかつたのである。それでも、それを利用すればするほど、自然義理が出來て來る。芝居に誘はれて、劇評を書けと言はれれば、無下にそれを斥ける譯にも行かない。入社當時の契約から言つても、かういふものは書いて少しも差支のないものではあつたが、然し他所の新聞に自分の名前が出れば、漱石は社の方に對して何か後めたい感じを持たなければならなかつたかも知れない。それだけでも漱石は、早く自分の新聞に文藝欄が創設される事を、希望したらうと思ふ。

　然しその爲め漱石が「ナマニエの體で打過ぎる了簡」を改めて、積極的に、例へば池邊三山か誰かに働らき掛けたかどうかは、疑問である。寧ろ是は『國民』に新設された文藝欄に漱石がち

よいちよい書くといふ事から刺激を受けて、漱石を純粋にモノポライズし、漱石に今までよりももつと書かせる目的の下に、社の方から積極的に、文藝欄を創設する議に乘り出して來たと解釋する方が、遙かに自然でありさうに思はれる。もつとも漱石は、前にも言つたやうに、八月十四日に『それから』を書き終へて、間もなく胃カタールで寐込み、それが囘復するとすぐ滿韓の旅に出て、十月十七日になつて、やつと東京に歸つて來てゐる。社の方からさういふ話が出るとしても、恐らくそれ以後の事だつたに違ひない。然しこの間の消息の、精確な所は分からない。分かつてゐるのは、十一月二十日漱石が大塚保治に宛てて、この二十五日頃から『東京朝日』に文藝欄を設ける事になつたに就いて、森田草平を差し出すから、原稿を書くなり、談話をしてくれるなりしてくれ、さうして朝日文藝欄のスペシアル・コントリビューターになる事を承知してくれと言つてやつてゐる事だけである。さうして朝日文藝欄は、その大塚保治の談話筆記を載せて、豫定の通り十一月二十五日から開始された。

森田草平が『煤煙』事件によつて、社會から葬り去られるやうな境遇に陷り、小説を書いて生きるより外に生きる道がないやうな事になつて、身魂を打ち込んで『煤煙』を書いて行つた事は、既に述べた。その『煤煙』は、漱石の斡旋で『東京朝日』に掲載されて、明治四十二年の一月から四月まで續き、文壇のセンセーションを捲き起し、草平は一躍して文壇の寵兒となつたが、然

し警保局からの注意で、それは、書き改めるのでない限り、その一部分をしか出版する事が許されなくなつた。草平のやうな、自分で現實に體驗した事の一部始終を、事實どほり書いて行くのでなければ、小說は書けないといふ作家は、それほど數多く小說が書けるものではない。新聞雜誌に評論を書くとしても、それで生計を支へて行く事が出來るかどうかは、十分疑問である。それを漱石が再び拾ひ上げて、文藝欄の編輯をさせ、月月きまつた月給を與へる事にした。もつとも漱石の初めの計畫では、草平を社員として入社させた上で、自分の責任の下に、草平に文藝欄を擔任させるつもりだつたのである。然し當時の社長村山龍平は、ああいふ人を社員にするのは斷ると言つて、頑としてその入社を肯じなかつた爲に、不得已漱石は、編輯料といふ名義で社から月月五十圓の金を支出してもらひ、それを草平に月給として與へ、漱石の書齋を編輯局に宛てて、其所で選擇した原稿を社に屆け、日日の文藝欄のおよそ二段づつを埋めて行く事にしたのである。勿論草平の仕事は、社の方には分かつてゐた。また草平は毎日のやうに社に原稿を屆けに行くのだから、社の人たちとも顏馴染が出來て、まるで社員と同じやうなものではあつたが、然し正式に社員となる事は出來なかつた。

漱石は、自分の所に出入する若い者に「幾分か餘裕を與へ」る事の出來る仕事を授けてやりたいといふ氣はあつても、初めから文藝欄をそれらの人たちの氣餤の吐き場所にする氣は、毛頭も

持つてゐなかつた。その事は既に漱石が、大塚保治をスペシアル・コントリビューターに依頼したのを見ても分かる。それとともに漱石は或は橋口五葉に繪畫評を、或は新海竹太郎に彫刻評を、或は中島六郎に音樂評をたのみ、その他森鷗外・永井荷風・寺田寅彦・大谷正信といふ風に、文壇・畫壇・樂壇等のあらゆる方面からの隨筆・評論を網羅して、文藝欄に豐富な內容と複雜な變化とを與へ、文藝の如何なるものであるかを、偏頗なしに、一般の讀者層に浸み渡らせようとした。もつとも漱石は、當時の文壇の自然派に對しては、反感を持つてゐたのである。曾て漱石が「今の自然派とは自然の二字に意味なき團體なり。花袋、藤村、白鳥の作を難有がる團體を云ふに外ならず。而して皆恐露病に罹る連中に外ならず。人品を云へば大抵君より下等なり、理窟を云へば君よりも分らずや多し。生活を云へば君よりも甚だしく困難なり。さるが故に君の敢て爲し能はざる所云ひ能はざる所を爲す。君是等の諸公を相手にして戰ふの勇氣ありや。君を此渦中に引き入るゝに忍びざるが故に此言あり。」(書簡第八三七號)と言つたやうに、漱石は當時の自然派を、藝術的の內からの促がしに從つて、一つに纒まり上がつた結社ではなく、文壇的勢力を獲得する爲に、西洋から借物の御輿を擔ぎ廻る團體であるとしか考へてゐなかつた。從つて漱石が、いくら文藝欄の內容を豐富にしようとしたとは言つても、さういふ自然派としての團體の人人から、文藝欄の寄稿を仰がうとしなかつた事は、言ふまでもない。それだけに朝日文藝欄は、自然

派の人たちからは、反自然主義の旗印を振り翳して、文壇に打つて出た一團であるかの如くに觀察された。

然し漱石が反感を持つたのは、西洋の學說を鵜呑みにして、我が佛と振り廻し、世界を自分の色眼鏡一色に塗りつぶさうとする、狹隘で、野卑で、非人間的な、當時の文壇の自然派の態度であつて、自然主義そのものではなかつた。自然主義の「自然の二字に意味」を與へるとすれば、自然主義はもつと自由な、もつと高い、もつと人間的な立場に立たなければならない筈である。さうして漱石が、自分の主宰する文藝欄の編輯を貫ぬく大方針として採用してゐたものは、實にその自由な、高い、人間的な立場であつた。是は、當時の執筆者の顏觸れを見ても、その顏觸れによつて書かれたものの內容を見ても、また『日英博覽會の美術品』・『東洋美術圖譜』以下『坪內博士とハムレツト』・『學者と名譽』に至るまで、漱石自身が文藝欄の爲に書いたすべての評論を見ても、十分に首肯する事が出來ると思ふ。ただ是が、當時一般に認められてゐたかどうかは、分からない。それには森田草平だの小宮豐隆だの、漱石の下で働いて、實際の仕事を多く手がけてゐた若い者の立場の低さが、漱石の立場を歪めて世間に理解させる事に、相當役立つたかも知れないとも思ふ。

それはともかく朝日文藝欄が出來て、漱石門下の者は無論の事、漱石を尊敬してゐる者、漱石

に好意を寄せてゐる者、それでなくても時勢に反感を持つてゐる者などが、此所に翕然として集まり、朝日文藝欄は一時の偉觀を呈した。阿部次郎・安倍能成・魚住折蘆・武者小路實篤・森田草平・小宮豐隆など、此所に最も多く書いた。

五七 『門』

明治四十二年（一九〇九）十二月三日漱石は阿部次郎に宛てて、「御手紙拜見かねての講演御催促にて恐縮致候が御承知の如く文藝欄開店の爲め事務不少其上滿韓ところ〴〵を今月中つゞけた上に、新年の阪朝に十日つゞき位のものを書く事に相成何とも思索の餘地無之甚だ違約がましく不快なれどどうぞ事情御諒察の上御勘辨被下度候」と書いてゐる。是は大學の美學會から頼まれてゐた、講演の斷り狀である。是で見ると、漱石はまた大阪からの特別な注文を引き受けてゐるやうであるが、然し是は實行されなかつた。その代り漱石は、明治四十三年の三月一日から、東西の『朝日』に『門』を連載し始める。是は恐らく正月になつて『大阪朝日』の爲に「十日つゞき位のものを」書かうとしてゐるうちに、東京の方からも注文が來た爲に、雙方の注文を一つにして、三月一日から『門』を書く事に話し合ひをつけたものだらうと思ふ。

『門』は、言ふまでもなく、『三四郎』・『それから』・『門』と續く三部作の、最後の部分をなす

ものである。從つて『門』の主題は、『それから』の場合に比べて、遙に多くの制限を受ける。『それから』の代助は、社會の掟と「自然本能の發動」との相剋に悩みぬいた末に、甘んじて社會の罪人となつてしまつた。その先きを書き續けるとすれば、それは結局、社會の罪人となつた二人が、社會の罪人としてどういふ生活を送るかでなければならない。漱石は『門』で、宗助と御米とを、往來に出て見れば、もうからからに乾いてゐるのに、自分のうちへ這入る路地はいつでも霜どけで、足駄を穿かなければあるけないやうな、碌に日の目のささない、暗い、じめじめした、崖下の借家（是は或は曾て森田草平が住んでゐた、丸山福山町の、樋口一葉の住んでゐたといふ家が、モデルになつてゐるのかも知れない）にひつそりと住はせ、靴一足買ふにも、何か臨時の收入を俟たなければならないやうな、切り詰めた生活を送らしめる。さうして社會の片隅に小さくなつて、互に互だけを頼りとして生きる生活を續けしめる。過去を忘れるといふよりは、現在だけに生きる事の出來る御米は、それで滿足してゐる。然し宗助は、さうは行かない。宗助はともすると、過去の罪に追つかけられる。その爲め宗助には安き心がなく、宗助は刻刻に自分の罪の呪ひが、自分に肉薄して來る事を意識する。宗助はその意識から逃がれ出たい爲に、到頭鎌倉へ出かけて參禪までするが、それでもなほ心の平和を取り戻す事が出來ない。宗助は、曾て自分の心を撃つた、「風碧落を吹いて浮雲盡き、月東山に上つて玉一團」といふやうな心境には、

到底自分は這入る資格がない、それほど自分の「業」は深いのであると、つくづく自分に愛想をつかさなければならなくなるのである。

社會の片隅に小さくなつて暮し、外に向つて伸びやうがない爲に、「內に向つて深く延び」、「互の胸を掘り」、「互の底に迄喰ひ入つ」て、「世間から見れば依然として二人で」はあつたが、然し「互から云へば、道義上切り離す事の出來ない一つの有機體になつ」てゐる、宗助と御米との、具體的な、特殊な生活は、言ふまでもなく、漱石の想像上の體驗であつた。換言すれば、それは漱石の、心理的な實驗(エキスペリメント)であつた。さうしてこの實驗(エキスペリメント)は、『それから』の實驗(エキスペリメント)の繼續として、前以つてその方向が決定されてゐた實驗(エキスペリメント)であつた。然し宗助が過去の罪の意識に追はれて、其所から拔け出る爲に、鎌倉まで出かけて參禪するといふ段になると、その生活はある意味で、普遍的な色彩を帶びて來る。假令事情はいろいろで、どんなに特殊なものであらうとも、其所から拔け出して、自由な、拘泥のない、朗らかな、「風碧落を吹いて浮雲盡き、月東山に上つて玉一團」といふ世界に這入らうと努力する事は、少くとも解脫の要求を痛切に感じてゐる「人間の胸のうちに呼應する聲を見出」す筈のものだからである。漱石は、宗助を、この特殊からの普遍へ浮かび上がらせる事によつて、自分が現實に體驗した所のものを、自分が想像で體驗した所のものに接合しようと試みる。さうして自分の生活を宗助の生活によつて象徴化するととも

に、宗助の生活の特殊を、そのまま普遍化しようと試みる。

漱石が明治二十七年（一八九四）の暮から明治二十八年（一八九五）の正月初めへかけて、鎌倉の圓覺寺で宗演の下で參禪した事は、既に述べた。『門』ではその時の經驗が、そつくりそのまま、宗助の經驗として利用される。然し是も既に述べたやうに、漱石はその後でも、或は歸源院に宗活を訪ひ、或は語錄・法語の類に親しみ、時時は自分で打坐さへもしてゐる。是は單なる道樂から來たものではない。ロンドン留學中の日記の中にもあるやうに、漱石は「洒落超脫ノ趣」・「出頭天外シ觀ヨト云フ樣ナ」趣・「笑而不答心自閑ト云フ趣」を愛しながら、「近頃非常ニ不愉快ナリクダラヌ事ガ氣ニカヽル神經病カト怪マル、然一方デハ非常ニヅーヅー敷處ガアル、妙ダ／洒々落々光風霽月トハ中々ユカン駄目〳〵」と自ら嘲らざるを得ないやうな狀態を、屢繰り返して來てゐるのである。ロンドンから歸つて來て、東京に住む事になり、苦苦しく不愉快な日が續いて、その爲め漱石が神經を苛苛させてゐた時に、漱石は肝癪を起して、したい三昧の事をし、妻子は殉敎者の如くにその狂暴を忍受してゐなければならなかつたもののやうに言はれてゐるが、罪はどつちにあるかの問題は別として、漱石が、自分が肝癪を起し詰めに起して、その日その日を苦苦しく不愉快に送る事その事を、決していい事だとも誇るべき事だとも反省してゐたのでなかつた事は、漱石が鈴木三重吉に宛てて、自分の所作を眞似られちや大變だと書いてゐるのでも、

明白である。のみならず漱石が、此所でもロンドンに於けると同じやうに、「近頃非常ニ不愉快ナリクダラヌ事ガ氣ニカヽル神經病カト怪マル」「洒々落々光風霽月トハ中々ユカン駄目〳〵」と感じて、斷えず其所から拔け出る工夫を凝らしてゐたに違ひない事も、漱石が英詩・連句・俳體詩・水彩畫のみならず、いろんな散文のスケッチを試みてゐる事から、想像する事が出來る。そのうち漱石には、『猫』が發見され、『倫敦塔』が發見され、漱石の肝癪は稍寛ろぎをつけられた貌ではあつたが、所詮は漱石の心が「洒々落々光風霽月」の世界に這入り切るのでなければ、假令一時の寛ろぎはついても、苦苦しいもの不愉快なものは、あとからあとからと出て來て、竟に征服し盡す事は出來ないやうになつてしまふであらう。現に漱石は明治三十八年(一九〇五)の末ごろから明治三十九年(一九〇六)へかけて、再び苛苛した心持になつてゐる。それに氣がつかない漱石ではない。從つて漱石は『猫』第九の中ででも、「心を何處に置かうぞ」といふ『不動智神妙錄』の句を引用するのみならず、『猫』第八の落雲館事件の餘波として、頻に心の修業といふ事を問題にしてゐるのであるが、然しそれはその後でも續き、漱石は明治四十年の秋のころにも『禪門法語集』などを繙き、それと對決するやうな意氣込みで、その中にいろんな批評を書き込んでゐる。

例へば鈴木正三の『麓草分』に、漱石は「〇一切ヲ放下ストハ preservation of self ナル根本

義ヲ滅スルノ謂ナリ。心ハ self ニアラズ。故ニ self ハ preserve スル必要ナシト觀ズルナリ。心ハ不死不生ナリ。故ニ self ハ preserve スルニ及バズト云フ了ナリ。○ Self ヲ preserve スルニ及バザル故ニ凡ノ苦悶ガ消滅スルナリ。self ヲ preserve スルニ及バザル如ク之ヲ destroy スル必要モナキ故縁ニ從ツテ生存スルナリ。七情の去來ハ去來ニ任セテ顧ミザルナリ。心ノ本體ニ關係ナキ故ニ可モ不可モナキナリ。心ノ用ハ現象世界ニヨツテアラハル。其アラハレ方ガ電光石火モ及バヌ程に早キナリ。心ノ體ト用トノ移リ際ノ働ヲ機ト云フナリ。「オイ」ト呼バレテ「ハイ」ト返事ヲスル間ニ體ト用が現前スルナリ。ソレガ不可思議ニ早イナリ。ダカラ考ヘテ居ル樣デハ分ラヌナリ。ソレガ考ヘズニ相應ズル了ガ出來レバ以心傳心ニナル譯ナリ。／一タビ心ヲ知レバドウナツテモヨキナリ。此浮世デドウナツテモヨカラヌ善惡邪正數々ヲ守ル裡ニドウナツテモ構ハヌ度胸ガ出來上ルナリ。安樂ニナルナリ。カホドノ事は僧俗ニ限ラズ皆悟ルベキ筈ナリ。タヾ此境界に常住シテ活潑々地ノ活用ヲナスガ困難ナルナリ。此困難ヲ排セン爲メニ坐禪ノ修業ガ必要ナルナルベシ。シカラザレバ何ノ爲メニ打坐シ何ノ爲ニ悶々シ何ノ爲ニ苦慮スルヤヲ解スベカラズ。」と書いた。然し漱石は、解脱といふものを、頭でさういふ風に會得する事が出來ても、心臟では、もしくは自分自身の生活では、それを自在に實現する事が出來なかつた。それだけに漱石は、是までと同じやうに、「クダラヌ事ガ氣ニカヽ」り、「洒々落々光風霽月トハ中々ニ

カン駄目〳〵」と嘆ぜざるを得なかつた。漱石はその嘆を、宗助の惱みに託して、此所で表現しようとするのである。從つて此所に書かれた事は、漱石の明治二十七・八年の體驗でも、その體驗は同時に、明治四十三年の當時まで漱石の中で生きて動き、漱石をして自分自身に愛想をつかさせるやうな、痛切な體驗であつた。恐らく漱石は、それを此所で告白する事によつて、自分の生活に、何等かの意味で區切りをつけたいと思つたものだらうと思ふ。

　ただ此所で問題になるのは、さうした漱石の體驗と『門』の宗助の體驗とが、うまく接合されてゐるかどうかである。漱石には元より宗助のやうな體驗はなかつた。從つて漱石は宗助の特殊な體驗を、一種の思考實驗（ゲダンケン・エキスペリメント）として、頭の中で追體驗し、その追體驗に從つて描寫の筆を進めるより仕方がなかつた。それにしても罪の意識に追つかけられて、どうにも道がなくなり、竟に友人の紹介狀を持つて鎌倉に飛び出して行く、宗助の心的經過には少しも無理がなくても、宗助は唯一人でこの世の中に住んでゐるのではなかつた。宗助は妻の御米とともに、特別な過去を脊負はされて生きてゐるのである。その事實から出立すると、宗助の御米に對する態度に、最も重大な場合に、他人行儀な、水臭い所が現はれて、何か其所に拵へ物らしい感じを與へる所が出て來るやうに思はれ出すのである。宗助と御米とは、人に濟まない事をした爲に、社會の片隅に小さくなつて暮してゐる。彼等は外に向つて伸びやうがない爲に、「內に向つて深く延び」、「互の

胸を堀り」、「互の底に迄喰ひ入つ」て、「世間から見れば依然として二人で」はあつても、「互から云へば、道義上切り離す事の出來ない一つの有機體になつ」てゐる。それにも拘はらず宗助は、安井が出現しさうになつてゐる事を、御米には一言も告げる事なしに、それを自分の胸一つに疊み込み、その爲めあらゆる懊惱を重ね、竟に鎌倉へ飛び出して行くまでになつても、決して御米に實情を吐露しようとしないのである。是は勿論宗助から言へば、御米を愛するが爲だつたのに違ひなかつた。然しこの愛は、自分以下のものをいたはる愛ではあつても、「道義上切り離す事の出來ない一つの有機體になつ」てゐる二人のうちの一人が、相手に示す筈の愛情——互に互を神とも佛とも賴つて生きてゐる者の、相手に示す筈の愛情ではなかつた。然も御米は宗助を、神とも佛とも賴つて生きて來てゐるのである。事實また宗助を神とも佛とも賴むのでなければ、御米は、普通の眼から見て大それた、ああいふ事件を斷行する事は出來なかつた筈なのである。にも拘はらず宗助は、自分たちの過去の歷史を忘れてしまつたかのやうに、ただ普通の夫が普通の妻をいたはる如くに御米をいたはつて、御米に何事も知らせない。自分一人で苦しんで、自分一人で鎌倉へ行き、自分一人で自分に愛想をつかして歸つて來るのである。

是は恐らく『門』の藝術的な缺陷と考へべきものだらうと思ふ。然し此所でも顯著に目につく事は、戀愛のぎりぎりの土壇場に於いて、女は男に比べて、遙に立派な振舞をするといふ事であ

る。男は「恐れる」のに反して、女は「恐れない」といふ事である。御米は宗助の抱擁の中で、純粹に一切の事を忘れ恐してゐる。あなたは人に濟まない事をしてゐるから、子供は出來ないのだと、占者から言はれても、御米はその打擊を、宗助の抱擁の中で堪へ通す事が出來てゐる。然し宗助はさうは行かなかつた。宗助は何にでも「恐れ」ない譯に行かなかつた。宗助は弟の前にさへも「恐れ」た。のみならず御米の前にさへも「恐れ」た。「本當に難有いわね。漸くの事春になつて」と言つて、御米が「晴れ〴〵しい眉を張つ」ても、宗助は「下を向いたまゝ鋏を動かし」て、「うん、然し又ぢき冬になるよ」と答へなければならないのである。この事は漱石の意圖の如何に拘はらず、漱石の男性に對する、もしくは自分自身に對する、暗い氣持、少くとも女はある意味では易易と「風碧落を吹いて浮雲盡き、月東山に上つて玉一團」といふ心の世界を持ち得るのに、男はどうしてもそれを持つ事が出來ないといふ、暗い氣持を反映する。『門』はその題材の性質上、全體の空氣が『それから』のやうに派手ではなく、寧ろじめじめと暗い筈のものではあつたが、然し代助よりももつと多量に、宗助の中に漱石のさういふ氣持が封じ込められてゐる點でも、讀者が『門』から受ける印象は更に暗くなつて來る筈である。さうしてこの氣持は、次の『彼岸過迄』に於いて、更にまともに、更に濃厚に、須永の中に封じ込められる。――もつとも『門』全體の調子が陰鬱であるのは、一つは漱石の當時の、生理的條件からも來てゐるに違

ゐないのである。

漱石は明治四十三年（一九一〇）三月二日、即ち『門』が新聞に載り始めた翌日、林原耕三に宛てて、「小説執筆中にて多忙今度はゆる〳〵書いて居候」と書いてゐる。三月二十九日鈴木三重吉宛の手紙には、「小生は胃の加減わるく氣に任せて長く筆を執ると疲勞する故大抵毎日一回位で胡魔化し居り候」とある。五月十一日皆川正禧宛の手紙には、「「門」御愛讀被下候よし難有存候近頃身體の具合あしく書くのが退儀にて困り候早く片付けて休養致し度、今度は或は胃腸病院にでも入つて充分療治せんかと存候四十を越すと元氣がなくなり申候」とある。五月二十二日橋口貢宛の手紙には、「小生胃病烈しく外出を見合せ世の中を頓と承知不仕候」とある。漱石は是まで小說を、一氣に、ぶつとほしに書いてしまふのが常であつた。途中で邪魔が這入つて、どうかすると、一日・二日と筆を執らない事はあつても、それまでの漱石は、日に二回分でも三回分でも「氣に任せて」書いて、少しも疲勞しなかつたのみならず、寧ろ書けるだけ書かなければ氣が濟まない、傾向を持つてゐた。然るに『門』では、身體の具合が惡いといふので、日に一回分しか書かない方針をとつてゐるのである。さうして胃の具合が惡いやら、痛むやらで、書いて疲勞を感じたり、書くのが退儀だつたりするのを、「四十を越すと元氣がなくなり申候」といふ風に、年のせゐだと考へ、なんとなく世の中を、つまらなく、心細く感じてゐるのである。然し事實は漱

石の胃は、既に前年の夏にひどく惡くなつて居り、秋の旅行で更に惡くなり、積り積つて漱石の内部で、破壞的な工作の準備を、默默として營み續けてゐたのであつた。それとは知る由もない漱石は、退儀だつたり苦しかつたりするのを押へて、ともかく日に一回づつは『門』を書き續けて行くのである。

漱石は『門』を書き了つてから、皆川正禧宛の手紙にある通り、六月六日內幸町の胃腸病院に行つて診察を受けた。その後數度の診察と檢便との結果、漱石は、到頭胃潰瘍ときまつて、六月十八日其所に入院する事になつた。

六六　胃潰瘍

漱石の胃の悪いのは、久しいものである。明治二十四年（一八九一）七月九日漱石が正岡子規に、季兄直矩とともに歌舞伎座に團十郎の『春日局』と『幡随院長兵衛』とを見に行つた事を報じた手紙の中に、「團十郎の春日の局顏長く婆々然として見苦し然し御菓子頂戴御壽もじよろしい口取結構と舞臺そつちのけのたら腹主義を實行せし時こそ愉快なりしか。……やつがれは割前を通り越しての飲食に天咎のがれ難く持病の疝氣急に胸先に込み上げてしく／＼痛み出せし時は芝居所のさわぎにあらず腰に手を當て顏をしかめての大ふさぎはたの見る目も憐なり」と書いてある。その「持病の疝氣」といふのが何であるかはよく分からないが、然し是も胃の具合の悪い事を指してゐるのではないかと思ふ。『猫』の中に、苦沙彌先生の胃弱は、極樂水の寺を借りて自炊生活をしてゐた時分、汁粉を喰ひ過ぎたせゐだとあるのが、ほんとの事を書いたものだとすれば、それから七年後の明治二十三年の「持病の疝氣」が、胃病の事をさすのだとしても、少しも

差支ない譯である。

さう言へば、明治二十八年（一八九五）から明治二十九年（一八九六）へかけての俳句にも、「疝氣持臀安からぬ寒哉」・「落付や疝氣も一夜藥喰」・「疝氣持雪にころんで哀れなり」などと、「疝氣」を問題にした句が幾つかある。明治三十一年（一八九八）九月四日漱石は菅虎雄に宛てて、暑中少し坐禪を試みたが、「運動不足の爲め下痢を催ふし」たので、途中でやめたと書いてゐる。明治三十二年（一八九九）九月五日の句稿には、「秋暑し癒なんとして胃の病」といふ句がある。明治三十三年（一九〇〇）の渡歐日記には、到る所に船暈の爲に晩餐を喫しないといふ記事と、胃腸の具合が惡くて下痢するといふ記事とが出て來る。『猫』の中の苦沙彌先生は、年來の胃弱で、タカヂアスターゼをのんだり、大根卸しを喰つたりしてゐる。明治四十年（一九〇七）の秋には、漱石は「酸多き胃を患ひてや秋の雨」といふ句を作つてゐる。

若い時分にはいろんな運動をした漱石も、後には別に運動をするではなし、殊に學校へ出なくなつてからは、運動として謠（漱石は熊本にゐる時少し謠の稽古をしたのださうである。それだから『猫』の中にも、謠の話が出て來る。然し漱石が東京で謠の稽古を始めたのは、高濱虛子の勸めによるもので、明治四十二年（一九〇九）の二月ごろからの事だつたと思ふ。師匠は寶生新と尾上始太郎である。『元旦』の中で漱石が虛子の鼓に合せて『羽衣』の曲を謠ふ所が書いてある

が、あの時にはまだ稽古を始めてゐない筈である。)を始め、散歩には時時は出ても、結局は書齋が仕事場で、毎日書齋に坐つて、讀書し思索し空想し執筆する方が遙に多かつた。その上漱石は甘いものが好きで、餅菓子などをよく喰つた。從つて漱石が胃弱で胃酸過多で、その爲め屢苦しまなければならなかつたのは、當然の事だつたのかも知れないが、それでも明治四十二年(一九〇九)の夏までは、痛んでも暫くじつとしてゐれば、そのまま納まる程度で、その爲め決して寐込むやうな事はなかつた。明治四十二年『それから』を書いてしまつたあとの胃カタールでは、それが大分長く續き、一週間許りといふもの、漱石は氷の外なんにも口に入れる事が出來なかつた。然も漱石は、そのあとですぐ、滿韓の旅に出て、到る所で胃が痛み、「道中非常に難義をし」てゐるのである。殊にこの旅では漱石は、到る所で御馳走攻めに會つてゐる。のみならず滿洲では、土地の名產だといふので、鶉を頻に食はされてゐる。この旅で漱石の胃壁には、相當疵がついたのではないかとも思ふ。

漱石が六月六日胃腸病院で診察を受けたあと、六月九日には檢便の結果、血の反應があるから、胃潰瘍の疑ひがあると言はれた。六月十三日三度び病院に行つた時には、著しい血の反應があり、且つ纖維のやうなものさへ見える。然しまだ胃潰瘍と斷定する譯にも行かないから、もう一度檢便する。ただ外出步行はいけない、話も病症のきまるまではやめるが可いと申し渡された。六月

十六日漱石は四度び胃腸病院に赴き、竟に胃潰瘍と宣告され、入院して治療する事に決し、六月十八日到頭入院する。さうして漱石は此所で、床の上に横臥し、暫く硝酸銀を飲み、長い間蒟蒻で腹をやき、胃の消化の試験をしてもらつたり、胃液の試験をしてもらつたり、胃の酸をとつたり、胃の洗滌をしたりした上で、七月三十一日に退院し、醫者の勸めにまかせて、八月六日東京を出發し、修善寺に病後の出養生をする事にするのである。

丁度その時分松根東洋城が、御用掛を勤めてゐた北白川宮に陪して、修善寺に行く事になつてゐた。漱石が特に修善寺を選んだのは、その爲である。六日漱石は東洋城と一緒に立つ手筈にしてゐたが、東洋城は都合で一汽車後れ、それを漱石は御殿場で降りて待ち合せ、一緒に菊屋別館に來た。宮樣は菊屋の山莊にお出になつてゐたのである。然るに別館には、明いた座敷がなかつた。それでもその晩だけは、座敷をどうにか都合させた。然し翌日東洋城が帳場へ出かけて談判して見たが、この先きどうにも座敷の都合はつかなかつた。到頭漱石は、菊屋本店の三階に這入る事にした。

日記を見ると、漱石はもう著いた翌日、卽ち八月七日から胃の具合が惡く、「膨滿でもなければ疼痛でもなければ嘈囃でもなくて幾分かそれを具へてゐる」腹中の違和を感じ、十時に本店に移つたが、そのまま橫になつて、五時頃まで起き上がらず、起き上がつてもアイスクリームを一杯

呑んだぎりだつたのださうである。汽車に揺られたのが、いけなかつたのかも知れない。八月八日は朝五時に起きて上厠したが、便通がない。そのまま入浴して上がつて來ると、胃痙攣を起した。十二時又入浴すると、又胃痙攣を起した。夜九時過ぎ三度び入浴すると、三度び胃痙攣を起した。漱石は、是はどうしても入浴するのがいけないのに違ひないと考へたといふが、入浴の爲に血液の循環が活潑になり、その爲め血管が膨脹し、今迄催ほされてゐた胃壁の血管破裂が、徐徐に始まつたのではないかと思はれる。漱石はその夜中に目が醒めて、「一體に胸苦しくて堪えがた」く感じたのださうである。八月九日は朝からの豪雨で、伊豆鐵道がとまるかも知れないと氣遣はれた。それとともに漱石は、十日・十一日・十二日と「夢の如く生死の中程に日を送」つた。日記には「膽汁と酸液を一升程吐いてから漸く人心地なり。水と牛乳のみにて命を養ふ。」とある。然も暴風雨は荒れ荒れて、單に修善寺のみならず、東海道一帶を脅やかし、箱根に洪水があつたとか、湯河原の宿屋は流されて、その寶物が何所とかへ打ち上げられたとかいふ噂が、頻頻と修善寺を襲つた。東京からは水見舞の問ひ合せが來る。東京へは、東洋城から鏡子に、いつでも立てる用意をしてゐてくれと、言つてやる。然し十二日は少しく具合がよくなつたといふので、電報でそれを取り消す。外の騷ぎとともに、内の騷ぎも劇しかつた。漱石はいくらか具合がよくなつたとはいふものの、苦しいのは依然として苦しかつたらしく、十二日の日記に、「半夜一息づ

〵胃の苦痛を句切つてせい〳〵と生きてゐる心地は苦しい。誰もこれを知るものはない。あつても何うしてくれる事も出來ない。膏汗が顔から脊中へ出る。」と書いてゐる。

八月十三日はまだ荒れてゐた。八月十四日も強雨が續いた。十四日の夜は、漱石は明け方の三時頃まで眠る事が出來ず、とろとろとしたと思ふと胃が不安になり、入浴すると酸が出て苦痛を感じ、十五日・十六日は「苦痛一字を書く能はず」とあり、十七日には「吐血、熊の膽の如きもの。醫者見て苦い顔」をしたとある。十八日には東洋城が電話で鏡子の所と『東京朝日』とに急を報じた。社からは社員の坂元雪鳥と胃腸病院の森成麟造とを、即日立たせて、見舞によこした。鏡子もついで來た。翌十九日には、又吐血があつた。醫者は絶對安靜を命じ、氷で胃部を冷し、硝酸銀を服用させる。二十日朝になつて、漱石はやつと牛乳五勺、ソップ五勺を飲む事が出來た。然し二時間後、胃の膨滿と苦痛とを感じ出した。然しそれも三時間目の藥でやつと納まり、午後からは氣分もよくなつた。然しいつ又どういふ變化が來ないとも限らない。二十日歸京の豫定で出て來た森成麟造は、暫く滯在して、樣子を見る事にする。もつとも胃腸病院の院長長與稱吉は、漱石の愛讀者で、自分が病氣で寐てゐて診察が出來ないのをひどく殘念がり、森成麟造が修善寺に著くや否や、當分其地にとどまり看護に手を盡すべしと、電報を打つてよこしたのださうである。それもあるから森成麟造は、もう少し逗留する氣になつたのには違ひないが、事實漱石の潰

瘍がこの先どうなるものか、醫者の立場から見て、見當が立たないせゐもあつたのだらうと思ふ。不幸にしてその豫感は當つた。八月二十三日、東洋城が宮様のお伴をして歸京した翌日の日記に、「おくび生臭し。猶出血するものと見ゆ。便は無類血色あり」と漱石が書いてゐるのを先觸として、その翌二十四日午後四時大仁著の列車で、胃腸病院の副院長杉本東造がやつて來て診察したあと、午後八時三十分に漱石は、吐血五百グラムに及び、腦貧血を起して人事不省となり、カンフル注射十五筒、外に幾筒かの食鹽注射を試みたので、やつと息を吹き返しはしたものの、みな明日までもつかどうかは分からないものと覺悟しなければならなかつたほどの、危險狀態に陷るのである。この時の事は『思ひ出す事など』第十三・第十四・第十五・第十六に詳しい。

坂元雪鳥の『修善寺日記』八月二十四日の部に、「恐ろしかつた廿四日、午前から先生の顔色が非常に惡い、衰弱の色顯著になつた、口數を利かれない、胃部が著しく膨滿の體である、午後胃腸病院の杉本氏が來た、六時過ぎだつたか診察をした、別室に退いてから大に樂觀して居る、予は嬉しさに堪えず直ちに社へ電報を發して「杉本氏診察の結果大に人意を強うせり」と知らせた、杉本森成兩氏にウヰスキーを勸めて談して居ると丁度八時三十分だつたと思ふ頃中庭を隔てた二階の病室の欄干の處へ夫人が表れて「森成さん早く〱」と手を拍き乍ら悲鳴を揚げられた、三人は何事とも解せず宙を飛んで行くと!!　先生は今しも唾壺（夫は夫人が右手に先生を抱き左手

に持つて居られたゝに一杯血を吐いて居られる眞蒼になつた先生は眼を瞠いて瞳孔の散大したのが分る毛髮も髯も眞黑に見える中に生々しい鮮血がダク／＼と流れ出て居る、予は直ぐ椽側から金盥を持て來て唾壺と更へた、森成氏は既に注射の用意をしてる杉本氏は其便々たる腹を波立たせてシカと先生の手を握つて先生の顏と森成氏の手許とを見詰めて居る、金盥には又新たに多量の塊血が出た新しい雞の肝臟の樣である、見ると血は夫人の肩を越して三四尺も飛んで居る最初我慢に我慢されたのが迸つたのであらう、汚れたる坐蒲團を椽に捨て先生の口邊を拭ひ夫人に着換を勸めて立たせる、シッカリなさいと勵ます、夫人は森成さん杉本さんと切な相な聲を絞つて居られる、大丈夫ですから更へて居らつしやいと予は眞紅に染んだ夫人の浴衣を見るに忍びず立たしめる、注射は猶豫なく初まつた、此時既に先生は虛脫に陷いりかけて人事不省だつたのである、カンフルとボンベルンを盛に注〔射〕し馳付けた野田醫師に食鹽水を依賴する。杉本氏は右手を予は左手を堅く握つて殆ど死體と同じき冷たさの內に幽かに消え行く脈搏を探して居る、數箇の注射で少しく脈搏が出た、夫でも杉本氏は絕望の色を示して居る「キンドは……レッツテーゼーヘン……」と余が顏を見詰めて小聲にいふ、情なさに込上げて余は身體が震へ出した、傍らに跪ける夫人を顧みて「シツカリナサイヨ」を繰返したのは自ら鞭撻した聲である、脈が又幽かになつた、予は詰と杉本氏の顏を見戍る氏は予が視線の集る處に灼熱を感ずるかの如く眼を外して

「カンフル／＼」といふ森成氏は更に注射した、食鹽水も出來た、夫は右の胸に注射された、や丶有望の徵が表れた、杉本氏は夫人の詰るが如き問に答へて「モ一度來ては駄目ですね」と悲觀して居る／然し當坐を逃れた氣が一寸した、先生は再び覺醒して「妻は」といはれる、予はギヨツとした（後に聞けば夫人も悸としたといはれた）最後の聲を聞くのではないかと思つた、夫人は耳をさし寄せた「大丈夫……」と後がヨク聞取れない、大丈夫かと尋ねられる樣でもあるし大丈夫だよと慰められるかとも聞かれる、然し答は此際同一である、「大丈夫ですよ」夫人と予と聲を揃へていふ、先生は「一字不明」相に首背いて目を瞑られる、少時すると又目を瞎いて探す樣な目附だから夫人に注意すると又耳を寄せられる、同じく「大丈夫……」と云はれる、同じ答を繰返す、又暫くして「妻は」といはれる、次の間に仆れ臥せる夫人を呼ぶと先生は夫人の顏を見て「何でもないよ」といはれる容體が重いのではないとの意味なのか、何アに用があるんではない何處に居るかとおもつたのさといふ意味なのか解らなかつたが或は後者だらうと思つた、／兎も角も一時落付いた、予は暫く手を夫人に更つて握つて貰ひたかつたが夫人は到底此冷い手を取るに堪えなかつた、之より先き盛に注射せる間に予は夫人の身の氣遣はしさに森成氏に耳語して夫人に赤酒をすゝめた、夫人は夫を服されたが然し殆ど坐に堪へないで次の間に横はつて居られた、おせんは震ひ乍ら夫人を看護した、／予は取敢へず社へ急電を送つた「只今劇變、吐血多量、危篤」

と次で夫人を勵まして急報す可き人々を糺した、立所に三十餘通の電文を認め提袋を提げて予は自ら電信局へ駈付けた、面倒な料金の計算を熱苦しき局内へ入りて濟し局を出づる時正に十一時、何日の月か寂しく雲を洩れて瀬の音がいやに澄んで聞える、／歸つて一度手を洗つて自分の室を取片付け、夫人を勵ましなどし凡て手落なく運びて夫人は隣室へ臥せしめおせんと小僧一人とを之に陪せしめ、森成氏は先生の傍らに假寢せしめ予一人殆ど死を守る如き今夜の看護の任に當る事とした、一寸氣が附いたから手帳と鉛筆とを用意した、先生の痺れた手足に蚊でも來るかと時々團扇の風を送り乍ら予は右の膝は先生の床の上に登りて右手に先生の右手を堅くとつた、血に汚れた先生の懷中時計を拭いて膝下に見詰める。

同じ二十五日の日記には、「午前〇時五分脈搏九〇、同十分脈同、同十五分呼吸廿四、同廿六分に至て今迄横臥されてたのが少し仰臥の姿勢となる、同廿八分、同四十分共に脈九十、同四十七分呼吸廿、同五十五分「カツ」といはれたのでハツとして唾壺を出す一小塊血が出た喉邊りに殘つてたものと安心する、同五十分脈八十六、一時五分同九十、同十分呼吸廿、一時十二分横濱から(夫人の令妹)見舞の電話が來る夜が更けるに從つて四邊が寂となるに從つて昂進し切つて居ながら微細な音響にも胸を轟かして先生の脈搏はやがて自分の脈搏であるかの如く感ぜられ自分の呼吸が何時の間にか先生の呼吸と一致する、何時となく予は光明眞言を唱へて居る、／一時二十

分次の間から大きな蜘蛛がコソ〳〵と這ひ出した、厭な奴だと睨めて居ると閾まで來て少時此方を窺つて居る、悄さが堪らない、團扇を揚げて追うと此方へ入らずに逃げた、／一時二十八分小い黒い蛾が電燈に來てチラ〳〵するのがいやに氣になる、／一時三十七分先生は眠られたらしい、／一時三十九分先生は「取て」といはれる、此際問返へすのは氣が咎めるけれども仕方なく問返すと「暑いから取つて」と低い聲でいはれる、足にかけた膝掛を取り捨てた、握て居る先生の手には時々電氣が傳はる樣にビク〳〵と力が籠もる。其度毎に予はハツとする、無意識の神經的運動に相違ないが夫が如何にも恐ろしくて堪らない絕えず握つて居る手に響く脈も折々强弱があつて氣が氣で無い、數は殆ど始終同一であるが自分の氣からか漸次弱くなつて來たり又强くなつたりする樣な氣がする、／弱くなつて來る時は次第〳〵に穴の中へ引入れられる樣な氣がして身內が震へる、モウ堪らないから森成氏を起さうかと思ふて息を殺して居ると又少し回復して來る、ホツと汗を拭く、／一時四十分脈九〇、一時五十分脈八八、呼吸廿三、二時五分、九〇、同十分九〇、廿四、同二十分氷嚢を更へる、同廿五分、九〇、廿二、同廿七分幽かな聲で「雨か」と聞かれる、耳を澄すと何時も聞ゆる庭の池へ落つる水音ばかり「イヽエ池へ流れ込む音ですよ」默つて居られる同卅分九〇同四十二分先生の顏を見詰めて居た眼を偶然外らして膝下を見ると、先刻の蜘蛛が唐突に自分の膝の下から駈出して次の間へ逃げた、予はどうしても夫が心なき一昆蟲

の所爲とは思へないで急に四邊を見回した、同四十五分大連の中村是公外一通の見舞の電報が來た、危篤の報に接した第一の返電が大連から來るのは妙だナと思ふ、／同五十五分、九〇、廿二、三時、三時五分各九〇力強し、同十分又蜘蛛が來て室へ入る、腹が立つて堪らないから又追ひまくる、同廿五分、九〇、廿一、三時廿七分何處かで鷄が鳴いた、同時に先生は目を開かれた、額の汗を拭いて上げる、序に口の邊も、／ジロ〳〵と予を見て居られたが――夫は恰も予が何ッ人トであるかを確かめんとするものゝ如く――靜かに「サツキなにした」と聞かれる一寸分りかねて「先生ですか」と聞けば首肯かれる「少しお吐きになつたんですよ」と何だか急に情なさが込上げる、「ソノ前、はく前」「何もなさらなかつたんですよ、横のまゝ小用をなさつて、何ともなさらないのに、ひよつとお氣分がお惡くなつたんですよ」先生は默つて首肯いて又目をツブられる、／三時三十分何處かでお神樂を上げる、朝の勤めだナアと少し心強くなる。同三十五分、九〇、（脈搏を書いてるのは絶えず握り乍ら時々數へたる也）同卅七分幽かに予に目配して「ねたまへ〳〵」といはれる、そんな事にまで心配なさらなくても宜いのにと思ふと勿體なさが身に餘る心持がする「チツトモねむたくないんですもの」と態と笑に紛らす、／三時五十五分氷嚢をかへる、先生目を覺し談話長し、恐らく一字一句も誤らざる積りにて左に記す、／「はじめ卒倒したかい」「イヽエ少しお氣分が遠くなつた位です」「最初に、ヒドク油汗が出て苦しかつたから之で

（ト指寄つた余が浴衣の右肩を指して）拭いたよ、それから此方（床の右側）見たらモウ覺えぬ、氣が付いたら金盥に血を吐いてた 先生は最初アイスクリームと牛乳と混じては居たが兎も角も唾壺一杯吐かれた事を御存じない）其時はモウ氣持よくなつて居た（先生は前日終日氣分が惡くて杉本氏診察の時も非常に惡かつた相だ、夫が吐いて濟はれて氣が附いた時は胸の氣分が直つてた時だつたのだ）アの氣持は記憶に殘つて居る、死ぬのがあんなだらうと思ふ、注射された後又一遍あんな氣になりかけたらカンフルでさめた、はじめ注射するのは脈が無くなつたからかい」「無くなりはしなかつたんです、薄くなつたんですよ」余は殆ど遣瀬がない、次の間の夫人は話聲を聞いて起きて來られた、枕頭から掩ひかゝる様にして「分りますか」といはれる、「分るさ、はじめから分つてる、二人も醫者がかゝつてるから大丈夫とは思ツたけれども……死ぬ時の氣持は那如だらう……お前ねて宜いよ」夫人胸塞がりて辭なく首肯いて隣室へ歸られる、／四時五分、九〇、／四時二十分頃森成氏起出づ、夫人も起きて來られる、暫時でもお休みと頻りに勸められるから四時三十五分御前を退いて自室へ行つた、前夜のウヰスキイを呑んで寢ようと、杉本氏の室へ忍び込んで茶碗で一杯呑んで自室へ歸り電報の詳報を社へ出す手紙を書くしてると、神經は尙昂ぶつて醉も出ねば眠氣もさゝぬ、更に杉本氏の室よりウヰスキーの壜を取り來り湯を混ぜて二杯を煽り床に就く輾轉反側して五時半頃眠つた／七時半に起された、目は覺めたが醉が覺めて居な

い、／枕頭に誰か客がある、聞くと沼津に來て居た安倍能成君が第一に駈付けたのであつた、臥ながら容體を話す、夫人が來られて其後別に異變もないといはれる、／顔を洗つて先生の所へ行く、言葉なく床近く侍す、衫本氏午前歸京、看護婦を迭ると約束する、明日來る看護婦が間に合ふだらうかと危ぶまれる、／又床に侍す、「昨夜は子供を呼べと云つてたぢアないか」と先生の口邊には微笑が見えた、仕方が無いから觀念して「エヽ」と答へる、「あの儘駄目になると思つたらしいね」彌窮したけれども仕方がない、「ナーニソウでもないンでせうけれども泡食つたんでせう」「獨逸語だもの乃公だつて分るよ」と又微笑が見える「トートなんていつてたよ」とマジ／＼と余を見られる、困つたから默つてると先生は更に語を繼いで「二度目に變になつたのは一瞬間だつた、（實は然らず）夫が恢復した時注射したのだよ、醫者は注射の功と思つてるけれどもソウでは無い」先生は二度目に盛に注射した事を御存じないカンフルを全體で十五筒も注射し食鹽水は八〇〇も入れたのであつた、夫人にも後ソウ話された相だ、ソシテ「乃公はヨツポド心(シン)が強いと見える」といはれた相だ、／排尿が無いからカテーテルを插したが無効だつた、反つて獨でに多量の排尿があつた、頻りに注射の痕の痛みを訴へられる、「ねたかい君は」と聞かれる「ねましたウ」「ねられたかい」「ハイ杉本さんに上げたウヰスキイが餘つてたから夫を呑んでねました」「ソウカイウヰスキイを呑んでねたのかい」「ハイ、先刻目覺すと目は覺めたが醉が覺めてないのに弱

りましたよ」先生微笑、／「妻はどうしてるかね」「お休になつてますよ……お呼申ますか」「イヽエ病氣になり易い女だから心配して何處かどうかしたんぢやないかね」「イ、エ何ともありませんよ……昨夜は私も御心遣しましたからねお醫者にソウいつて昨夜お藥を上げました」「藥？」「興奮劑ですよ」先生首肯く、」とある。

雪鳥は鏡子に相談して、方方に漱石危篤の急電を發した。人人は八月二十五日から陸續として、修善寺へ見舞に來始めた。野間眞綱は鹿兒島から、阿部次郎は山形から、湯淺廉孫は伊勢から、小宮豐隆は豐前から、その他夏目直矩、高田庄吉夫婦、筆子、恒子、榮子、大塚保治、菅虎雄、高濱虛子、高田知一郎、森卷吉、森田草平、鈴木三重吉、安倍能成、野上豐一郎など、みんなもう死に目に會へないだらうといふ氣持で、修善寺へやつて來た。事實杉本東造は鏡子に向つて、もう一遍吐血があれば回復の見込はないものと諦めて頂かなければならないと言つたのみならず、翌日東京に歸つて、自身で看護婦會に電話をかけ、看護婦を二人修善寺に急派する手筈を調へた時には、早く行かないと間に合はないかも知れないと言つたのださうである。

然し二十五日・二十六日・二十七日と日を經るにつれて、幸に杉本東造の恐れた、再度の吐血もなく、漱石は寂然と床の上に仰臥したまま、徐徐に生命を回復して行つた。見舞の人たちも、安心して、一人歸り、二人歸り、次第に減つて、仕舞には、森成麟造と鏡子と小宮豐隆とだけが殘

つて、漱石の病軀を守つた。漱石は順當に囘復して九月八日には、萬年筆をふる力もない事を感じながらも、少しづつ日記をつけ始めるまでになつた。九月十日の日記に漱石は、「〇時間を惜いと思ふ程人間に精力が出たのだらう」と書いてゐる。九月十四日の日記には、「〇體力日に加はる。床の上にて身體を動かす力、頭を枕にずらす力にて自分によく分る。」とある。九月十五日の日記には、「〇今朝髮をけづる。／稍寒の鏡もなくに梳る。／〇昨夜より白毛布をかく淸楚佳意」とある。九月十六日の日記には、「〇重湯葛湯水飴の力を借りて仰臥靜かに衰弱の囘復を待つはまだるこき退屈なり併せて長閑なる美はしき心なり。年四十にして始めて赤子の心を得たり。此丹精を敢てする諸人に謝す」とある。九月十七日小宮豊隆は東新と代つて、東京へ去つた。九月十八日の日記には、「〇今日は體力囘復と思ふ。明日になると夫がイリユージヨンである。……／今朝はソーダビスケツトを一枚もらふ。旨くも何ともなかつた／夢中に獻立などをして樂んでゐたがよくなつて見ると馬鹿氣てゐる／〇午食に起き返りて始めて粥半椀を食ふ。起き直りつゝある退儀を思へば粥の味も半分は減る位也。吾は是程疲れたりやと驚く」とある。九月二十日の日記には、「〇東云ふ先生は蒼い神々しい顔をしてゐながら食物の事ばかり考へてゐるから可笑しいと。昨日はソツプをやめてオートミールか粥を増す事をねだりて拒絶さる。　間食にミルクとカジノビスケツトを食ふは丸で赤子也。／粥を口へ運んでもらう處は赤子也　佛より瘦せて衰れや

曼珠沙華」「○昨日より病前に讀みかけた六づかしい本を寐ながら少々讀むに頭の工合は病前と差して異ならず。其癖起き直りて便器にかゝる事は一世の大事業の如く困難である。かほど衰弱したものが何うして哲學的の書物抔を讀む事が出來るかと思ふと不思議である。妻に其事を話すと、あなたは惡かつた二三日頭が判然し過ぎてみんな困りました。」とある。九月二十三日の日記には、「○粥も旨い。ビスケットも旨い。オートミールも旨い。人間食事の旨いのは幸福である。其上大事にされて、顏迄人が洗つてくれる。糞小便の世話は無論の事。これを難有いと云はずんば何をか難有いと云はんや。醫師一人、看護婦二人、妻と外に男一人附添ふて轉地先にあるは華族樣の贅澤也。」とある。九月二十六日の日記には、「○昨夜始めて起き直つて食事。橫に見る世界と竪に見る天地と異なる事を知る。食事うまし。夜に入つて元氣あり。……」とある。十月四日の日記には、「○午 障子を開けば晴空澄徹久し振也。體を拭く。垢出でゝぼろ〳〵す。寐卷を着更ふ。よき心地なり。やがて腹減りて汗出づ。／○夜は朝食を思ひ、朝は晝飯を思ひ、晝は夕飯を思ふ。命は食にありと、此諺の適切なる余の上に若くなし。自然はよく人間を作れり。余は今食事の事をのみ考へて生きてゐる」とある。十月八日の日記には、「○顏に漸く血の色が出て來た。」とある。――かうして漱石は、十月十一日に東京に歸る事を許され、橇のやうな擔架で座敷から玄關の馬車の中へ擔ぎ込まれ、そのまま馬車から汽車へ、汽車から釣臺へと移されて、

胃腸病院へ連れて行かれた。

その年漱石は胃腸病院で越年し、翌明治四十四年（一九一一）二月二十六日やつと早稲田の家へ歸る事が出來た。漱石は八月六日に修善寺に向つて立つてゐる。漱石はおよそ七ケ月——然もその前の一ケ月半の入院をも加へるとすれば、丁度八ケ月半うちをあけてゐた勘定である。

六九　『思ひ出す事など』

漱石は、胃腸病院に歸つて來て間もなく、明治四十三年(一九一〇)十月二十日から、ぽつりぽつりと『思ひ出す事など』を書き始めた。是は、言ふまでもなく、自分が修善寺で體驗した事を記錄して、一つには自分の病中自分の事を心配してくれた人たちに感謝と報告とを致し、一つには自分が大病によつて初めて體驗する事の出來た、漱石の所謂「天賚(ソリス)」の記念としようとしたものである。そんな身體でそんな筆を執つたりしてはいけないと、漱石は池邊三山から叱られたといふが、漱石は坂元雪鳥をつけて置いてくれたのみならず、「どんな醫師でもどんな器械でも送る事にした」と言つてくれた、社に對する感謝からも、何か書かなければ氣が濟まなかつたに違ひない。是は、明治四十三年十月二十九日から明治四十四年二月二十日まで、三十二回に亙つて新聞に掲載された。

漱石は修善寺で三回吐血し、三度目には五百グラムといふ多量の血を吐いて、三十分の間は人

事不省に陥り、あと半歳近く床に就いてゐなければならなかつた。この事は漱石にとつて、肉體上の大事件であるとともに、精神上の大事件であつた。是を機として漱石は、生活の上にも藝術の上にも、大轉回を遂げる。『思ひ出す事など』は、その轉機に於ける漱石の、内外二面の消息を、亘細に報告するものである。

第一に漱石が此所で體驗したものは、死の問題であつた。人間は一度はどうしても死ななければならないといふ事は、誰でも知つてゐる。從つて死の問題は、誰でも不斷に考へてゐなければならない問題である。さうは言つても多くの人は、眞劍にそれを考へてはゐない。よし考へてゐるとしても、觀念的にそれを考へると、現實にそれにぶつかるのとは、強度がまるで違ふ。漱石にはその死が、思ひも寄らぬ瞬間に、卒然として現實にやつて來て、暫くの間漱石を虜にしたのみならず、また卒然として引き上げて行つてしまふのである。然も漱石はそれをはつきり意識する事が出來なかつたのである。その時の事を漱石は「強ひて寐返りを右に打たうとした余と、枕元の金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連續してゐるとのみ信じてゐた。其間には一本の髪毛を挾む餘地のない迄に、自覺が働いて來たとのみ心得てゐた。程經て妻から、左様ぢやありません、あの時三十分許は死んで入らしつたのですと聞いた折は全く驚いた。子供のとき惡戯をして氣絶した事は二三度あるから、夫から推測して、死とは大方斯んなものだらう位にはかね

て想像してゐたが、半時間の長き間、其經驗を繰返しながら、少しも氣が付かずに一ケ月あまりを當然の如くに過したかと思ふと、甚だ不思議な心持がする。實を云ふと此經驗――第一經驗と云ひ得るかゞ疑問である。普通の經驗と經驗の間に挾まつて毫も其連結を妨げ得ないほど內容に乏しい此――余は何と云つてそれを形容して可いか遂に言葉に窮して仕舞ふ。余は眠から醒めたといふ自覺さへなかつた。陰から陽に出たとも思はなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げて行く夢の匂ひ、古い記憶の影、消える印象の名殘――凡て人間の神祕を敍述すべき表現を數へ盡して漸く髣髴すべき靈妙な境界を通過したとは無論考へなかつた。たゞ胸苦しくなつて枕の上の頭を右に傾むけ樣とした次の瞬間に、赤い血を金盥の底に認めた丈である。其間に入り込んだ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても經驗の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である。妻の說明を聞いた時余は死とは夫程果敢ないものかと思つた。さうして余の頭の上にしかく卒然と閃めいた生死二面の對照の、如何にも急劇で且沒交涉なのに深く感じた。何う考へても此懸隔つた二つの現象に、同じ自分が支配されたとは納得出來なかつた。よし同じ自分が咄嗟の際に二つの世界を橫斷したにせよ、其二つの世界が如何なる關係を有するがために、余をして忽ち甲から乙に飛び移るの自由を得せしめたかと考へると、茫然として自失せざるを得なかつた。／生死とは緩急、大小、寒暑と同じく、對照の連想からして、日常一束に使

用される言葉である。よし輓近の心理學者の唱ふる如く、この二つのものも亦普通の對照と同じく同類連想の部に屬すべきものと判ずるにした所で、かく掌を翻へすと一般に、唐突なる懸け離れた二象面（フェーゼス）が前後して我を擒にするならば、我は此懸け離れた二象面（フェーゼス）を、何うして同性質のものとして、其關係を迹付ける事が出來よう。／人が余に一個の柿を與へて、今日は半分喰へ、明日は殘りの半分の半分を喰へ、其翌日は又其半分の半分を喰へ、かくして每日現に餘れるものゝ半分づゝを喰へと云ふならば、余は喰ひ出してから幾日目かに、遂に此命令に背いて、殘る全部を悉く喰ひ盡すか、又は半分に割る能力の極度に達した爲め、手を拱いて空しく餘（のこ）れる柿の一片を見詰めなければならない時機が來るだらう。もし想像の論理を許すならば、斯の條件の下に與へられたる一個の柿は、生涯喰つても喰ひ切れる譯がない。希臘の昔ゼノが足の疾（と）きアキリスと步みの鈍い龜との間に成立する競爭に辭（ことば）を託して、如何なるアキリスも決して龜に追ひ付く事は出來ないと說いたのは取も直さず此消息である。わが生活の內容を構成（かたちづく）る個々の意識も亦此の如くに、日每か月每に、其半宛を失つて、知らぬ間に何時か死に近づくならば、いくら死に近付いても死ねないと云ふ非事實な論理に愚弄されるかも知れないが、斯う一足飛びに片方から片方に落ち込む樣な思索上の不調和を免かれて、生から死に行く徑路を、何の不思議もなく最も自然に感じ得るだらう。俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云

ひ聞かさるゝものは、たゞ寒くなる許である。」と書いてゐる。

然し漱石がそれを不調和に感じると感じないに拘はらず、また不思議に考へると考へないとに拘はらず、自分が三十分間死んでゐたといふ事實を、漱石は認めない譯には行かなかつた。殊に漱石の肉體は、「肋の左右に横たへた手を、顏の所迄持つて來ようとすると、忽に持主でも變つた樣に、自分の腕ながら丸で動かなかつた」ほどに、急激に變化し、衰弱してゐた。假令是は「全く護謨風船に穴が開いて、その穴から空氣が一度に走り出したため、風船の皮が忽ちしゆつといふ音と共に收縮したと一般の吐血だから、夫であゝ身體に應へたのだらうと判斷」する事が出來たとしても、その急激な變化の奥にこそ、死の影は動いてゐたのである。急激な變化を認めれば認めるほど、端の者から聽かされたその事實を、漱石は事實として信じない譯には行かなかつたに違ひない。然もそれを事實として信じ得る爲には、漱石には經驗内容が缺けてゐたのである。經驗内容が缺けてゐるにも拘はらず、漱石はそれを信じない譯には行かないのである。其所に漱石は何か怖るべきものがあるといふ事を、豫感する。漱石は「たゞ寒くなる許である」と言つてゐるが、寒い事の嫌ひな漱石は、その後死の問題に就いて考へる度に、この謎の爲に頭を惱まさなければならなかつた。假令それは毎日柿を半分づつ喰ふ仕事と同じものであつたとしても、さうして漱石がさういふ事に就いて頭を惱ますのは馬鹿馬鹿しいとして、それを中途で打ち棄てて

しまふとしても、その不調和そのもの、不思議そのもの、謎そのものは、いつまでも漱石の頭に殘つて、漱石の解決を促がす筈である。

第二に漱石は、この大吐血によつて、是まで曾て經驗した事のない、竝びに是までの間に庶幾して得られなかつた、特別な心境を持つ事が出來た。漱石の驚くべく急激に變化した肉體は、全く血の氣を失つたやうな狀態から、刻刻に然し徐徐に血の氣を取り戻して行く途上に於いて、漱石を一種不思議な精神狀態に置いた。漱石は是をドストイェフスキが癲癇の發作に冒される時、或はその少し前に經驗する事を常とした、一種微妙の恍惚狀態に比して、ドストイェフスキのいふ「自己と外界との圓滿に調和した境地」とか、「丁度天體の端から、無限の空間に足を滑らして落ちるやうな心持」とかは、或はこんな心持ではなかつたのかと想像する。「余は當時十分と續けて人と話をする煩はしさを感じた。聲となつて耳に響く空氣の波が心に傳つて、平らかな氣分をことさらに騷つかせるやうに覺えた。口を閉ぢて黃金なりといふ古い言葉を思ひ出して、ただ仰向けに寐てゐた。難有い事に室の廂と、向ふの三階の屋根の間に、青い空が見えた。其空が秋の露に洗はれつゝ次第に高くなる時節であつた。余は默つて此空を見詰めるのを日課の樣にした。何事もない、又何物もない此大空は、其靜かな影を傾むけて悉く余の心に映じた。さうして余の心にも何事もなかつた、又何物もなかつた。透明な二つのものがぴたりと合つた。合つて自分に

残るのは、縹緲とでも形容して可い氣分であつた。／其内穏かな心の隅が、何時か薄く暈されて、其所を照す意識の色が微かになつた。すると、ヱイルに似た靄が輕く全面に向つて萬遍なく展びて來た。さうして總體の意識が何處も彼處も稀薄になつた。それは普通の夢の様に濃いものではなかつた。尋常の自覺の様に混雜したものでもなかつた。又其中間に横はる重い影でもなかつた。魂が身體を抜けると云つては既に語弊がある。靈が細かい神經の末端に迄行き亙つて、泥で出來た肉體の內部を、輕く清くすると共に、官能の實覺から杳かに遠からしめた狀態であつた。余は余の周圍に何事が起りつゝあるかを自覺した。同時に其自覺が窈窕として地の臭を帶びぬ一種特別のものであると云ふ事を知つた。床の下に水が廻つて、自然と疊が浮き出すやうに、余の心は己の宿る身體と共に、蒲團から浮き上がつた。より適當に云へば、腰と肩と頭に觸れる堅い蒲團が何處かへ行つて仕舞つたのに、心と身體は元の位置に安く漂つて居た。發作前に起るドストイエフスキーの歡喜は、瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭しても然るべき性質のものとか聞いてゐる。余のそれは左様に強烈のものではなかつた。寧ろ恍惚として幽かな趣を生活面の全部に輕く且つ深く印し去つたのみであつた。從つて余にはドストイエフスキーの受けた様な憂鬱性の反動が來なかつた。余は朝から屢此狀態に入つた。午過にもよく此蕩漾を味つた。さうして覺めたときは何時でも其樂しい記憶を抱いて幸福の記念とした位であつた。／ドストイエフスキー

の享け得た境界は、生理上彼の病の將に至らんとする豫言である。生を半に薄めた余の興致は、單に貧血の結果であつたらしい。」と漱石は書いて、その終に、「仰臥人如啞。默然見大空。大空雲不動。終日杳相同。」の五言絶句を添へてゐる。

漱石のこの恍惚狀態は、漱石の健康が段段囘復するとともに、漱石を訪れる事が次第に少くなつたには違ひない。然しその恍惚狀態に這入つたといふ「樂しい記憶」は、その後それを思ひ出す度に、漱石を「幸福」にした。同時に漱石は、その「樂しい記憶」を打ち毀されない爲に、胃腸病院に歸つて來ても、出來るだけ世事に心を勞する事を避けて、「からだの安靜」とともに「心の安靜」を守る工夫をした。殊に自然の好きな漱石は、此所にもそれが描き出されてゐるやうに、自然に對してゐれば、假令このやうな恍惚狀態ではないまでも、少くとも是に近い「幸福」を感じる事が出來た。漱石は「人よりも空、語よりも默」と言つて、「默然見大空」るのである。

第三に漱石が沁沁感じた事は、「左したる過去を持」つてゐない、「凡人」としての自分に、思ひがけず、世の中が親切を示してくれたのが、實に難有いといふ事であつた。漱石は「力を商ひにする相撲が、四つに組んで、かつきり合つた時、土俵の眞中に立つ彼等の姿は、存外靜かに落ち付いてゐる。けれども其腹は一分と經たないうちに、恐るべき波を上下に描かなければ已まない。さうして熱さうな汗の球が幾條となく脊中を流れ出す。／最も安全に見える彼等の姿勢は、此波

と此汗の辛うじて齎らす努力の結果である。靜かなのは相剋する血と骨の、僅に平均を得た象徴である。之を互殺の和といふ。二三十秒の現狀を維持するに、彼等が何れほどの氣魄を消耗せねばならぬかを思ふとき、看る人は始めて殘酷の感を起すだらう。／自活の計に追はれる動物として、生を營む一點から見た人間は、正に此相撲の如く苦しいものである。吾等は平和なる家庭の主人として、少くとも衣食の滿足を、吾等と吾等の妻子とに與へんがために、此相撲に等しい程の緊張に甘んじて、日々自己と世間との間に、互殺の平和を見出さうと力めつゝある。戸外に出て笑ふわが顏を鏡に映すならば、さうして其笑ひの中に殺伐の氣に充ちた我を見出すならば、更に此笑ひに伴ふ恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、最後にわが必死の努力の、囘向院のそれの樣に、一分足らずで引分を期する望みもなく、命のあらん限は一生續かなければならないといふ苦しい事實に想ひ至るならば、我等は神經衰弱に陷るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつゝあると迄言ひたくなる。／かく單に自活自營の立場に立つて見渡した世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社會は不正で人情のある敵である。もし彼對我の觀を極端に引延ばすならば、朋友もある意味に於て敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。さう思ふ自分さへ日に何度となく自分の敵になりつゝある。疲れても已め得ぬ戰ひを持續しながら、煢然として獨り其間に老ゆるものは、見慘と評するより外に評しやうがない。

／古臭い愚癡を繰返すなといふ聲が頻りに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚癡を繰返すのは、しみ〴〵さう感じたから許りではない、しみ〴〵さう感じた心持を、急に病氣が來て顚覆したからである。／血を吐いた余は土俵の上に仆れた相撲と同じ事であつた。自活のために戰ふ勇氣は無論、戰はねば死ぬといふ意識さへ持たなかつた。余はたゞ仰向けに寢て、纔な呼吸を敢てしながら、怖い世間を遠くに見た。病氣が床の周圍を屛風の様に取り卷いて、寒い心を暖かにした。／今迄は手を打たなければ、わが下女さへ顏を出さなかつた。人に賴まなければ用は辨じなかつた。いくら仕ようと焦慮つても、調はない事が多かつた。それが病氣になると、がらりと變つた。余は寢てゐた。默つて寢てゐた丈である。すると醫者が來た。社員が來た。妻が來た。仕舞には看護婦が二人來た。さうして悉く余の意志を働かさないうちに、ひとりでに來た。／「安心して療養せよ」と云ふ電報が滿洲から、血を吐いた翌日に來た。思ひがけない知己や朋友が代る〳〵枕元に來た。あるものは鹿児島から來た。あるものは山形から來た。又あるものは眼の前に逼る結婚を延期して來た。余は是等の人に、どうして來たと聞いた。彼等は皆新聞で余の病氣を知つて來たと云つた。仰向に寢た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み惡いと觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた。／四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、左したる過去を持たぬ男に、忙しい世が、是程の手間と時間と親

切を掛てくれようとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた。余は病に謝した。又余のために是程の手間と時間と親切とを惜まざる人々に謝した。さうして願はくは善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打壊す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。」と書いてゐるが、暖かな心に飢ゑ、さういふもののない世の中に住んでゐる事を到底堪へ難いと感じてゐた漱石は、此所で人人の示した親切を難有い事に感じ、それに比べては遥に不親切であるとしか思へない自分を省みて、自分も亦「願くは」このやうに「善良な人間になりたい」と考へるのである。

元より漱石は、社會人として生活する以上、社會人としての義務がある事を、よく承知してゐた。のみならず漱石は、自分に課せられた社會的義務は、人一倍正確に充たして行かなければ、じつと落ついてゐる事が出來なかつた。それだけに漱石は、否でも應でも、自分の意志を研ぎすまし、絶えず自分の心を緊張した狀態に置かなければならなかつた。同時に是までの、健康な漱石には、ある意味では活動そのもの、戰ひそのものに興味を持ち、丁度相撲が土俵に上ぼる時のやうに、心勇みをもつて自分の社會的義務に立ち向ふ、戰鬪精神も動いてゐたのである。然し漱石にはこの社會的義務の充足が、病氣とともに、單に重荷としてのみ、感じられるやうになつたらしく見える。九月二十六日の日記に漱石は、「〇病正に輕快に移らんとして、今更病を慕ふの情

に堪えず。本復の後はかゝる寛容ある、stress なき生涯、自己の好む儘の心の働きを盡して朝より夕に至る時間、朝夕余の周圍に奉侍して凡て世話と親切を盡す社會の人、知人朋友もしくは余を雇ふ人のインダルジェンス。――是等は悉く一朝の夢と消え去りて、殘るものは鐵の如き堅き世界と、磨き澄まさねばならぬ意志と、戰はねばならぬ社會丈ならん。余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず。」と書いてゐる。勿論漱石は、病氣が治り、健康が回復すれば、是まで通りちやんと義務は果して行く氣ではゐるのである。それでも、一度病氣をして「天賚（ブリス）」を感じた漱石は、この「天賚（ブリス）」に別れるに堪へないのである。

病氣は漱石に、人生を樂しむ事を敎へた。自分の意志を磨ぎ澄まし、自分の心を緊張させ、戰ひに戰ひを續ける生活よりも、「自己の好む儘の心の働きを盡して朝より夕に至る」生活の方が、どんなに幸福で、又どんなに高いかを敎へた。漱石は、健康を回復し、社會人としての生活を開始するやうになつてからも、なほこの「天賚（ブリス）」を忘れる事が出來なかつた。――『思ひ出す事など』は忘れるから思ひ出すのだと漱石は言つてゐる。それはその通りに違ひない。然し一面から言へば、忘れられないから思ひ出しもするのである。少くとも『思ひ出す事など』の基調をなすものは、この「天賚（ブリス）」への郷愁であつたといふ事が出來る。同時に漱石の爾後の一生も亦、この「天賚（ブリス）」への郷愁であつたと言つてもよかつたのである。

六〇　博士問題

然し漱石がいくらその「天賚（ブリス）」に耽つてゐたいと思つてゐても、漱石が東京に歸つて來るや否や、周圍の者が、社會が、漱石に働らきかけて、漱石に心の安靜を與へては置かなかつた。既に明治四十三年(一九一〇)十月三十一日、漱石が修善寺から歸つて來て二十日も立たない內に、漱石は胃腸病院から自宅の鏡子に宛てて、「きのふ御前から御醫者の禮の事に關し不得要領の事を聞かされたので今朝迄不愉快だつた。御前も忙がしい、坂元も忙がしい、池邊も忙がしい、澁川は病氣だから寐てゐるおれの考通り着々進行する事は六づかしいが、病人の方から云ふ「と」あんな事は萬事知らずにゐるか、さうでなければ一日も早く醫者にも病人にも其他の關係者にも滿足の行く樣にはやくてきぱきと片付く方が心持がよろしい。どうか今度其話をする時はもつと要領を得る樣に願ひたい。／今のおれに一番藥になるのはからだの安靜、心の安靜である。必ずしも藥を飲んでゐる許や寐てゐる許が養生ぢやない。いやな事を聞かされたり、思ふ樣に事が運ばな

かつたり、不愉快な目に逢はせられたりするのは、藥の時間を間違へたり菓子を一つぬすんで食ふよりも惡いかも知れない。昨夕も云ふ通り今のおれは今迄の費用のかたがはつきり就いて、病室の出入がざわ〳〵しないで、朝から晩迄閑靜に暮す事が出來て、（自分の隨意に一人で時間を使ふ事）さうして日々身體が回復して食慾が増しさへすれば目前はまあ幸福なのである。病人だから勝手な事をいふが、實際さうだよ。／……／世の中は煩はしい事ばかりである。一寸首を出してもすぐ又首をちゞめたくなる。おれは金がないから病氣が癒りさへすれば厭でも應でも煩はしい中にこせついて神經を傷めたり胃を傷めたりしなければならない。しばらく休息の出來るのは病氣中である。其病氣中にいら〳〵する程いやな事はない。おれに取つて難有い大切な病氣だ。どうか樂にさせてくれ　穴賢」と書いてゐる。同じ日の日記には、「○風流の友に逢ひたし。人生だの藝術だの何のかのといふものには逢ひたくなし。／○今の余は人の聲よりも禽の聲を好む。女の顔よりも空の色を好む。客よりも花を好む。談笑よりも默想を好む。遊戲よりも讀書を好む。願ふ所は閑適にあり。厭なものは塵事なり」・「○余の病中のプログラムを打ち毀して、其損失を償ふて餘りある樣な友人なら余はいつでも驩迎する。余はかくの如き友人を多く持たない事を甚だ口惜く思ふ。」とある。弟子たちが見舞に來て、未熟な人生論だの藝術論だのを振り廻すのは、當時の漱石にとつては、二重の意味で苦苦しい事だつたのに違ひない。修善寺病中の費用その他

を、社の方では社の費用として支出する氣でゐるのに對して、漱石の方では當然自分が負擔すべきであるとし、然も間に立つて是までですべてを取りしきつて來た澁川玄耳が病氣で、話がなかなか片づかないのも、きちんとした事のすきな漱石にとつては、不愉快な事だつたに違ひない。そのうち例の博士問題が起きて、漱石は又別な不愉快を經驗しなければならなかつた。

この事に就いては、明治四十四年(一九一一)二月二十四日の『東京朝日』に掲載された、漱石の談話筆記『博士問題』が、詳しい經過を述べてゐる。――「實は博士會が五六の人を文學博士に推薦するといふ事は、新聞の雜報で一寸見た計りで、眞僞も分らず、一兩日を過しました。すると突然明日午前十時に學位を授與するから文部省へ出頭しろと言ふ通知が、留守宅へ(夜遲く)來たのださうです。左樣、家のものは慥か夜の十時頃とか云つてゐましたが、大方其時下女が夜中郵便函でもあけて取り出したのでせう。それで其翌日の朝電話で、本人は病氣で出られないと云ふ事を文部省へ斷つたさうです。其日の午後妻が病院へ來て通知書を見せたので、私は初めて學位授與の事を承知したのです、無論代理は出しませんでした。私は其夕方すぐに福原君に學位を辭退したいからと云ふ手紙を出しました。すると私の辭退の手紙と行違に、其晩文部省から――エ、と證書と言ひますか、何と言ひますか――學位を授與すると云ふ證書を、小使――家のものは小使と云ひましたが、私は實際誰が持つて來たか知らない――に持たせて宅の方へ屆けて呉

れたのです。夫は早速福原さんの手許迄返させました。辭退の出來るものと思つて辭退したのは勿論の事です。私は法律家でないから、法律上の事は知りません。たゞ私に學位が欲しくないと云ふ事實があつた丈です。學位令が勅令だから辭退が出來ないと云ふんですか。そんな法律の事は少しも知りません。然し勅令だから學位令を變更するのが六づかしいと云ふなら、私にも解るが、博士を辭退出來ないと云ふのは、何んなものでせう。何しろ文部省から通知して來て文部大臣が與れるから、唯文部省丈けの事と思つてゐました。文部省の人々に御面倒な御手數を懸けるのは好くないとは思ひましたが、已を得ませんでした。」といふのが、それである。その福原鐐二郎に宛てた手紙といふのには、二月二十一日附で、「拜啓昨二十日夜十時頃私留守宅へ(私は目下表記の處に入院中)本日午前十時學位を授與するから出頭しろと云ふ御通知が參つたさうであります。留守宅のものは今朝電話で主人は病氣で出頭しかねる旨を御答へして置いたと申して參りました。／學位授與と申すと二三日前の新聞で承知した通り博士會で小生を博士に推薦されたに就て、右博士の稱號を小生に授與になる事かと存じます。然る處小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡つて參りましたし、是から先も矢張りたゞの夏目なにがしで暮したい希望を持つて居ります。從つて私は博士の學位を頂きたくないのであります。此際御迷惑を掛けたり御面倒を願つたりするのは不本意でありますが右の次第故學位授與の儀は御辭退致したいと思ひます。

宜敷御取計を願ひます。　敬具」と書いてある。

それがどうなつたかは、三月七日同じ『東京朝日』に掲載された、漱石の談話筆記『博士問題の成行』を引用するのが、一番便利である。――「博士事件に就て其後の成行はどうなつたと仰しやるのですか。實はそれぎり何うもならないのです。福原君にも會ひません。芳賀君抔から懇談を受けた事もありません。文部大臣は學位令によつて學位を私に授與したにはしたが、もし辭退した時には何うすると云ふ明文が同令に書いてないから、其場合には、辭退を許す權能を有してゐないのだと云ふのが、當局者としての福原君の意見なのですか。成程さうも云はれるのでせう。然しそれでは恰も學位令に博士は辭する事を得ずと明記したと同樣の結果になる樣ですが、實際學位令には辭する事を得ずとも又辭する事を得とも何方とも書いてないぢやないですか。甚だ不行屆きですがまだ學位令を調べてゐません。然し慥かさう云ふ風に聞いてゐます。　偖何方とも書いてない以上は、辭し得るとも辭し得ないとも自分に都合のよい樣に取る餘地のあるものと解釋しても可くはないでせうか。すると當局者が自己の威信と云ふ事に重きを置いて「辭する事を得ず」と主張すれば、私の方では自己の意志を楯として「辭する事を得」と判斷しても構はない事になりはしませんか。／又夫程重大なものならば、萬一を慮つて、（表向き學位令に書いてある通りを執行する前に、一應學位を授與せられる本人の意思を確める方が、親切でもあり、又

御互の便宜であつた樣に思はれます。兎に角に當局者が榮譽と認めた學位を授與する位の本人ならば、其本人の意思と云ふものも學位同樣に重んじてよささうに考へます。／私は當局者と爭ふ氣も何もない。當局者も亦私を壓迫する了簡は更にない事と信じてゐます。此際直接福原君の立場としては甚だ困られるだらうとは思ふけれども、明治も既に五十年近くになつて見れば、政府で人工的に拵へた學位が、さう何時迄も學者に勿體ながられなければ政府の威信に關すると云ふ樣な考へは、當局者だつてさう鋭角的に維持する必要もないでせう。實は先例があるとか無いとか云はれては、少し迷惑するので、私は博士のうちに親友もありますし、又敬愛してゐる人も少くはないのですが、必ずしも彼等諸君の轍を追うて生活の行路を行かねばならぬと迄は考へてゐないのであります。先例の通りに學位を受けろと云はれるのは、前の電車と同じ樣に、あとの電車も食付いて行かなければならない樣で、丸で器械として人から取扱はれる樣な氣がします。博士を辭する私は、先例に照して見たら變人かも知れませんが、段々個人々々の自覺が日增に發展する人文の趨勢から察すると、是から先も私と同樣に學位を斷る人が大分出て來るだらうと思ひます。私が當局者に迷惑を掛けるのは甚だ御氣の毒に思つてゐるが、當局者も亦是等未來の學者の迷惑を諒として、成るべくは其人々の自由意思通り便宜な取計をされたいものと考へます。猶又學位令に明記がない爲に、今回の樣な面倒が起るのならば、この面倒が再び起らない樣に、ど

うか御工夫を煩したいと思ひます。學位令のうちには學位褫奪の個條があるさうですが、授與と褫奪が定められて居ながら、辭退に就て一言もないのはちと變だと思はれます。夫ぢや學位をやるぞ、へい、學位を取上げるぞ、へい、と云ふ丈で、此方は丸で玩具同樣に見做されてゐるかの觀があります。褫奪と云ふ表面上不名譽を含んだものを、是非共頂かなければ濟まんとすると、何時火事になるか分らない油と薪を脊負された樣なものになります。大臣が認めて不名譽の行爲となすものが必ずしも私の認めて不名譽となすものと一致せぬ限りは、いつ何時どんな不名譽な行爲(大臣のしか認める)を敢てして褫奪の不面目を來たさないとも限らないからです。」

かうして漱石が辭退した博士號の問題は、當局の方でその辭退を認めるとも認めないともはつきりきまりのつかないうちに、二ケ月近くを經過した。漱石は四月十五日に、朝日文藝欄に『博士問題の成行』と題する一文を掲載して、その後この問題がどうなつて行つたかを世間に報告する。それによると漱石は、四月十一日になつて上田萬年と芳賀矢一との「好意的の訪問」を受け、この二人を通じて自分の意見を當局に傳へた結果、その日の午後に福原專門學務局長が來訪し、福原は漱石に「文部省の意志を告」げ、漱石は福原にその「所見を繰返」し、結局「相互の見解の相互に異なるを遺憾とする旨を述べ合つて別れた」のださうである。翌十二日福原は漱石に、「復啓二月二十一日付を以て學位授與の儀御辭退相成度趣御申出相成候處已に發令濟につき今更

御辭退の途も無之候間御了知相成度大臣の命により別紙學位記御返付旁此段申進候敬具」といふ書簡を送り、漱石はそれに對して、翌十三日、「拜啓學位辭退の儀は旣に發令後の申出にかゝる故、小生の希望通り取計ひかねる旨の御返書を領し、再應の御答を致します。／小生は學位授與の御通知に接したる故に、辭退の儀を申し出でたのであります。夫より以前に辭退する必要もなく、又辭退する能力もないものと御考へになられん事を希望致します學位令の解釋上、學位は辭退し得べしとの判斷を下すべき餘地あるにも拘はらず、毫も小生の意志を眼中に置く事なく、一圖に辭退し得ずと定められたる文部大臣に對し、小生は不快の念を抱くものなる事を茲に言明致します。／文部大臣が文部大臣の意見として小生を學位あるものと御認めになるのは已を得ぬ事とするも、小生は學位令の解釋上、小生の意思に逆つて、御受けをする義務を有せざる事を茲に言明致します。／最後に小生は目下我邦に於る學問文藝の兩界に通ずる趨勢に鑑みて、現今の博士制度の功少くして弊多き事を信ずる一人なる事を茲に言明致します／右大臣に御傳へを願ひます。學位記は再應御手元迄御返付致します。敬具」といふ返事を書いた。「要するに文部大臣は授與を取り消さぬと云ひ、余は辭退を取り消さぬと云ふ丈である。世間が余の辭退を認むるか、又は文部大臣の授與を認むるかは、世間の常識と、世間が學位令に向つて施す解釋に依つて極まるのである。たゞし余は文部省の如何と、世間の如何とに拘らず、余自身を余の思ひ通に認むるの自

由を有して居る。／余が進んで文部省に取消を求めざる限り、又文部省が余に意志の屈従を強ひざる限りは、此問題は此より以上に纏まる筈がない。從つて落ち付かざる所に落ち着いて、歳月を此儘に流れて行くかも知れない。解決の出來ぬ様に解決された一種の事件として統一家、徹底家の心を惱ます例となるかも分らない。／博士制度は學問奬勵の具として、政府から見れば有效に違ひない。けれども一國の學者を擧げて悉く博士たらんがために學問をすると云ふ様な氣風を養成したり、又は左様思はれる程にも極端な傾向を帶びて、學者が行動するのは、國家から見ても弊害の多いのは知れてゐる。余は博士制度を破壞しなければならんと迄は考へない。然し博士でなければ學者でない様に、世間を思はせる程博士に價値を賦與したならば、學問は少數の博士の專有物となつて、僅かな學者的貴族が、學權を掌握し盡すに至ると共に、選に洩れたる他は全く一般から閑却されるの結果として、厭ふべき弊害の續出せん事を余は切に憂ふるものである。余は此意味に於て佛蘭西にアカデミーのある事すらも快よく思つて居らぬ。／從つて余の博士を辭退したのは徹頭徹尾主義の問題である。此事件の成行を公けにすると共に、余は此一句丈を最後に付け加へて置く。」と漱石は言つてゐる。

漱石が博士を辭退し、それに就いて文部省と漱石との間に暫くの間ごたごたが續いた事は、世間の耳目を聳動し、贊否さまざまの批評を惹き起した。ある者は是を痛快だと言つて褒め、ある

者は是を神經質に過ぎると言つて嗤つた。然し是は恐らく漱石にとつて、意外な事だつたに違ひなかつた。既に漱石自身「徹頭徹尾主義の問題である」と言つてゐるやうに、是は漱石にとつて、當り前の事を當り前にしたまでに過ぎなかつたからである。現に漱石はこの翌月、五月十八日から二十日に亙つて、『文藝委員は何をするか』といふ題目の下に、官選文藝委員を製造する筈になつてゐた、文藝院の設立に關して自分の意見を述べ、文藝委員に選まれた者は、假令誰であらうと、普通の文士の資格を離れて、突然國家を代表する文藝家となつたやうなものである。それが箇人的であるべき筈の文藝の世界に君臨して、最終の審判者であるかの如くに振舞ひ、某々の作品に榮譽を與へて恥ぢる事がないならば、文藝は行政上に都合のいい作物ばかりになつて、人人の自由と獨立とは失はれ、文藝の發達はとまつてしまふ、從つて文藝院のやうな不自然な制度、偏頗な劃一を將來する虞のある制度には、自分は反對であると言つてゐるが、是も亦漱石が博士を辭退したと、同じ主義から出たものに外ならない。七月十四日の『學者と名譽』も同樣な趣意を取り扱つたものである。帝國學士院が木村項の發見者木村榮の功績を表彰したのは結構な事で、その事自身には何の異議もない、然し木村榮の功績を表彰する事によつて、木村榮の上のみに光輝が赫奕とする結果、外の者の功績を暗がりに置いてしまふやうな事になるとすれば、學士院は不公平な偏頗な所置を堂堂と勿體をつけて世の中に公表するに等しいもので、道義的に言つて、

不都合極まる所行を敢てするのに異ならないと漱石は言つた。漱石から言つた不都合な事は、これらの人工的な制度が、不公平で、偏頗で、個人の自由と獨立とを害する結果を將來し易いといふ點にあつたのである。

漱石のこの主義は、何も博士問題が持ち上がつた後に、漱石によつて立てられたものではなかつた。漱石は明治四十二年(一九〇九)六月十五日の『太陽』に、『太陽雜誌募集名家投票に就て』を掲げ、其所で、文藝家としての投票に第一位を得た自分が、何故にその賞としての金盃を受ける事を欲しないかの理由を説明し、「同じ文藝でも多趣多樣である。文藝上の作物も亦多趣多樣である。團子を串で貫いた樣に容易く上下順序が付けられる譯のものではない。苟くも筆を執て文壇に衣食する以上は、余の如きものでも、相當の自信と抱負のあるのは勿論である。その自信あり抱負ある點に於ては敢て何人にも讓らぬ丈の覺悟は已惚にもせよ有してゐる。けれども、(西洋の大家は暫らく云はずとして)現代日本の諸作家たるもの、何れも同樣同程度の覺悟はある筈である。のみならず余は實際是等の諸君の如何なる作物に接しても、到底余の及ぶ能はざる點を認め得ない事は少い。して見ると我々は畢竟平地の上に散點すべき人間である。將棋の駒の樣に積みかさねらるべきものでは無からう。人の肩の上に乘るのは無禮である。且危險である。人の足をわが肩の上に載せるのは難儀である。かつ腹が立つ。何方にしても等級階段をつけられて一

直線に竝ぶべき商賣とは思へない。相撲は別物である。あれは相手があつて勝負を付けなければ立ち行かない家業だから仕方がない。文藝家の作品は單獨な作品として立派に通用する。もし比較する必要があれば其道の人が出て相互の複雜な特長を明かにすれば夫で濟む。文藝の批評家は相撲の行司の様に勝負を名乘る必要は毫もない」。「今日開明の世に於て、人々自意識を有して、己れを評價し得る自由を與へられつゝある以上は、成るべく此自由を奪はない様にするのが正當である」。それにも拘はらず「多數の聲を借りて間接に此自由に壓迫を加へる手段になり易い。」投票によつて、他人の意志などには御構ひなしに極めてしまつた事に盲從するのは、「余の平生の主義と反するから、折角の光榮を擯ひながら、その紀念とも見るべき贈品を受ける事が出來ない」と言つてゐる。明治四十年（一九〇七）一月一日の『讀賣新聞』に掲載された『作物の批評』でも、同じ主義から出發したものである。のみならず漱石は、明治二十五年（一八九五）のホイットマン論に於いても、箇人の自由と獨立と、自然と平和とを高唱した詩人としてのウォルト・ホイットマンを、十分なインフェールングを持つて論じてゐる。明治三十四年（一九〇一）九月二十二日、漱石はロンドンから鏡子に宛てて、「先達御梅さんの手紙には博士になつて早く御歸りなさいとあつた博士になるとはだれが申した博士なんかは馬鹿々々敷博士なんかを難有る様ではだめだ御前はおれの女房だから其位な見識は持つて居らなくてはいけないよ」と書いてゐる。この主

義が漱石の生活と、截つても截れない關係に於いて結びついてゐる事は、大正三年（一九一四）の漱石の講演『私の個人主義』に就いて見ても、明白である筈である。

六二　再度の潰瘍

漱石は退院して自分のうちへ歸つてから、暫くの間は、何もしないで靜養してゐた。明治四十四年(一九一一)三月十八日鈴木三重吉に宛てて漱石は、「近來ぐづ〳〵で勉强もせず遊びもせず退院後は小康を貪ると申す有樣自分でもいやになる事あり」と書いてゐる。三月三十日戶川秋骨宛の手紙の中には、「拜啓退院後一寸御禮の爲め參上可致の處あたまも身體も自由にならず未だに失敬致居候」とある。然し四月になると、身體の具合もずつとよくなつて、方々出あるく事が出來るやうになつた。四月二十九日中勘助宛の手紙には、「小生病中はわざ〳〵御見舞をいたゞき候處其後どうかかうか本復目下は歸宅諸方飛び廻り居候につき御安意被下度候」と書いてある。

身體の具合がよくなつて見ると、漱石の第一に考へなければならなかつた事は、自分の義務——新聞に小說を書かなければならない自分の義務——だつたらしい。漱石の日記の中に、明治四十四年五月九日から十二月十五日まで一纏めになつたものがあるが、その日記が五月九日から

始まつてゐるといふ事その事が、既にその時分から漱石が、もうそろそろ小説の材料を蒐集して置かなければならないといふ氣になつてゐた事を示唆するやうである。もつともこの日に漱石は、妹婿鈴木禎次のうちの婚禮披露の宴會に招かれて行つてゐる。それが相當派手な宴會だつたので、漱石は後日の爲にその席の模樣を書き記して置かうと思ひ立ち、自然日記は五月九日に始まる事になつたのかも知れない。然しその後ずつと、相當間斷なく、日記は續いてゐるのである。少くとも是を機會に、漱石は材料を集める氣になつたものに違ひない。――事實またこの日記に書かれてゐるものは、『彼岸過迄』の中だの『行人』の中だの、『明暗』の中だのにまで利用されてゐる。漱石の日記の中で、是ほど漱石の小説に材料を澤山供給してゐる日記もないと言つて可いくらゐである。

もつともある意味から言へば、この年ほど漱石にとつて多事な年もなかつた。漱石は六月三日に、生れて始めて雅樂を見てゐる。六月十七日には長野縣教育會から賴まれた講演の爲に、長野に向かつて立ち、修善寺で自分の傍につききりについてゐてくれた森成麟造が、鄉里で開業してゐるのを高田に訪ひ、直江津から諏訪の方を廻つて、六月二十一日の夜歸つて來てゐる。六月二十二日には、歐洲留學から歸朝した寺田寅彥がたづねて來てゐる。六月二十八日には大學へ行つて美學會の爲に講演をしてゐる。七月十日には、何十年ぶりかでラファエル・フォン・ケーベル

を訪問してゐる。七月二十一日には中村是公を訪ねて、一緒に鎌倉に遊びに行つてゐる。八月には『大阪朝日』から頼まれて、明石・和歌山・堺・大阪で講演する爲に、十一日に東京を立つてゐる。然も漱石は、大阪で講演を濟ませるや否や、再び潰瘍の爲に倒れて、今橋三丁目の湯川胃腸病院に入院してゐる。是は然し修善寺の場合ほど劇烈なものではなく、九月半ばには東京に歸る事が出來たが、然し歸つて間もなく漱石は痔の療治に、神田錦町の佐藤病院に通ひ始め、それがなほりそくなつた爲に、到頭翌年の春までも其所に通ひ續けてゐる。十月末には池邊三山が辭職した。漱石もそれにつれて辭職しようとしたが、是は三山初め外の幹部の慰留によつて思ひ止まつた。十一月二十九日には五女のひな子が急死した。——

漱石を講演會にひつぱり出さうとする『大阪朝日』の計畫は、大分前からの事であつた。明治四十一年（一九〇八）の夏、比叡山で夏期講習會を催す際にも講師に頼まれたが、漱石は是を斷つた。然し幾度も斷わるのは氣の毒だといふ氣もあつたに違ひないし、病氣をして長く義務を怠つてゐるといふ自覺も是を助けたに違ひないし、既に長野で講演してもゐるのだから、漱石は思ひ切つて今度の講演の依頼を引き受け、八月十一日に東京を出發、八月十三日明石・八月十五日和歌山・八月十七日堺・八月十八日大阪の順で、『道樂と職業』・『現代日本の開化』・『中味と形式』・『文藝と道德』と講演してあるいた。『道樂と職業』では、漱石は、人間の仕事には、他人の爲

にする職業と自分の爲にする道樂と二た通りの仕事がある。學問だの藝術だのに携はる者は自分本位の道樂を仕事とするものである。從つてさういふ仕事に携はる人に對しては、「己を捨てなければ立ち行かぬ様に強ひたり又は否應なしに天然を枉げさせたりする」やうに仕向けるべきではないとともに、さういふ仕事に携はる人は、「己を捨てゝ世間の御機嫌を取り」結ぶやうな了簡を起すべきでなく、「己の爲にする結果卽ち自然なる藝術的心術の發現の結果が偶然人の爲になつて、人に氣に入つた丈の報酬が物質的に自分に反響して來」るだけで滿足すべきであるといふやうな事を說き、『現代日本の開化』では、現在日本人のやつてゐる事は、內發的ではなくて、外發的である。西洋の文明がどしどし押し寄せ、「機械的に變化を餘儀なくされる爲にたゞ上皮を滑つて行き、又滑るまいと思つて踏張る爲に」、みんなが神經衰弱にならざるを得ないやうになつてゐる。それに對して我我はどうすれば可いか。殘念な事には、自分には是ぞといふ名案がない、「只出來るだけ神經衰弱に罹らない程度に於て、內發的に變化して行くが好からうといふやうな體裁の好いことを言ふより外に仕方がない。」と言ひ、『中味と形式』では、形式は中味の爲に存在する、形式があつて中味があるのではない。從つて中味が變れば、形式も變らなければならない。「內容の變化に注意もなく頓着もなく、一定不變の型を立てゝ、さうして其型は唯だ在來あるからと云ふ意味で、又其型を自分が好いて居ると云ふだけで、さうして傍觀者たる學者の樣な態度

を以て、相手の生活の内容に自分が觸れることなしに推して行つたならば危ない。」と警告する。然し中で最も注意を惹くのは、最後の大阪での講演『文藝と道德』である。漱石は此所で、三度目に、更に深く、自然主義に對する自分の理會を表白してゐるからである。殊にこの講演は、初め長野縣教育會で『文藝と教育』の題下で講演され、次いで大學の美學會で『文藝と道德』の題下で講演され、大阪ではそれが三度目に手懸けられただけに、漱石の頭の中で幾度も錬り直された講演でもあつたのである。さうして漱石は、是とともに、自然主義の問題から離れる。

漱石は此所で、ロマンティックな道德とナテュラリスティックな道德とを對立させ、文藝上の流派の對立を、その根本のイデオロギーの對立として把握し、ある意味ではロマンティックな道德よりもナテュラリスティックの道德の方が、進歩した道德であるといふ事を指摘する。さうして文藝に於いても、ロマンティシズムの作品は「人の氣を引立てるやうな感激性の分子に富んでゐるには違ないが、どうも現世現在を飛び離れてゐるの憾みを免かれない。妄りに理想界の出來事を點綴したやうな傾があるかも知れない。よし其理想が實現出來るにしても之を未來に待たなければならない譯であるから、書いてある事自身は道義心の飽滿悅樂を買ふに十分であるとするも、其の實己には切實の感を與へ惡いものである」。是に反してナテュラリズムの作品には「如何に倫理上の弱點が書いてあつても、其弱點は卽ち作者讀者共通の弱點である場合が多いので、必竟する

に自分を離れたものでないといふ意味から、汚い事でも何でも切實に感ずるのは吾人の親しく經驗する所であります。……元來自分と同じやうな弱點が作物の中に書いてあつて、己と同じやうな人物が其所に現はれて居るとすれば、其弱點を有する人間に對する同情の念は自然起るべき筈であります。又自分も何時斯う云ふ過失を犯さぬとも限らぬと云ふ寂寞の感も同時に之に伴ふでせう。己惚の面を剝ぎ取つて眞直な腰を低くするのは寧ろさう云ふ文學の影響と言はなければなりません。若し自然派の作物でありながら斯ういふ健全な目的を達することが出來なければ、夫こそ作物自身が惡いのであると云はなければならない」。その意味で亦、ロマンティシズムの作品よりナテュラリズムの作品の方が、一歩進んだ作品であるといふ事が出來ると、說く。——是は言ふまでもなく、自然主義の中のロマンティックな精神、もしくは理想主義的精神の高調である。同時に是は日本の當時の自然主義の作品に、最も缺乏してゐた精神の高調である。從つて是は亦、モーパサンやゾラによつて唱道された自然主義の作品にも、最も缺乏してゐた精神の高調である。さうして是は、言はば、新しい、漱石自身の自然主義であつた。この自然主義の背後には、熾烈な道義心が燃えてゐる。この自然主義の彼方には、高邁な理想が懸つてゐる。高慢で、輕薄で、遜る事を知らない、私に充ちた人間から、「己惚の面を剝ぎ取」る意味で、此所には現實の暴露が豫想されてゐるが、然しこの現實の暴露は、單に人間を畜生の域に引き下げる爲にのみ、存在す

るのではなかつた。反對にそれは、人間を神的なものに引き上げる爲に存在する。

自然主義の自然は元來、天地山川の自然から來る。少くとも漱石が熟知してゐる英國文學史上の自然主義の自然は、それであつた。バーンスやウォーヅウォースが自然主義者であつたのは、自然を愛して人間を憎んだからである。同じ意味で漱石は、自然を愛した。然も漱石は、修善寺で病んでから、更に深くこの自然を愛し出すとともに、この自然の如くにあり得ない人間を厭ひ出した。勿論漱石には、初めから人間の私を厭ふ心持が強かつたのである。それが『猫』・『野分』・『虞美人草』を經て、『それから』・『門』に移るに及んで、女性を憎む事から男性を憎む事の方へ、男性を憎む事から自己を憎む事の方へと傾いて行き、ひつくるめては人間全體を厭ふ傾向を示した。然しそれが極めて顯著になつて來たのは、特に修善寺大患以後の事である。漱石は自然を愛すれば愛するほど、人間を厭はなければならなかつた。人間は、自然がさうである如くには、無私であり得ない。自然がさうである如くには、自然であり得ない。自然主義の自然を人格に翻譯し、意味を與へ、道德の中に導き入れて來れば來るほど、漱石は、自然を高いものと感じ、それと一つになり得ない人間を厭はしいものと感じなければならなくなつた。然も人間を厭はしいものと感じるのは、心の奥に人間をよりよくしたいといふ希望があるからである。その點で當時の文壇の自然主義のやうな自然は、漱石にどうしても出て來やうがなかつた。例へば當時の文

壇の人間の自然主義者は、性慾生活を、人間の自然であるとして、露骨に描寫した。然しそれは漱石にとつて、自然ではなかつた。漱石の自然は、人間がその性慾生活を營まんが爲に私だらけの動物になる、その私を、もしくはその動物である事を、醜しと映し出す自然なのである。その點で漱石の自然は、自然であるとともに、神であつた。

この『文藝と道德』は、それ自身として意味がある事無論であるが、然しそれよりも、漱石が是から先き書くもののイントロダクションとして、更に意味があるやうに思はれる。漱石の爾後の作品は、すべてこの線に沿うて發展して行くのに外ならないからである。是を機會に漱石が自然主義の事を論じなかつたのも、一つにはその機會がなかつたからかも知れないが、然し一つには是だけ言つてさへ置けば、あとは自分の作品が說明すると思つたからかも知れない。——

それはともかく漱石は、かうして講演してあるいてゐるうちに、八月十七日の堺講演の時から、少し胃の具合が惡い事を感じ出した。十月十三日森成麟造に宛てて漱石は、「拜啓夫からは大無沙汰を致しました。先達は大患後一週年の時日を御忘れなくわざ〳〵電報を賜はり候處實は御耻しいかなあの時は大阪で又々やつつけて入院してゐたのです。／どうも矢張り自分の咎なのでせう、誰を恨む譯もないが、事情を御話しますとね、大阪の社から講演をたのまれて明石和歌山堺大阪の四ケ所で喋舌つたのです、其堺あたりから少々腹が妙になつてこいつはといふ懸念も起り

ましたがもう一つだと思つて大阪を片付けて宿屋で寐てゐると何も食んのに嘔吐を催ふしてとう〳〵胃をたゞらして夫から血が出ましたので驚ろいて湯川胃腸病院へ這入つて三週間程加養して夫から東京へ歸つて又々須賀さんにかゝりました。すると何の因果か歸京の翌日から肛門周炎とかいふ下卑た病氣になつてとう〳〵切開しました。夫が惡性なので三週間後の今日もまだ細い穴が塞がらない所があつて膿が出るのです。／右の譯であの電報に對しても梨の礫の御無沙汰といふ譯で今日迄打過ぎましたのは甚だ申譯がありません。須賀さんの御蔭で胃は殆んど平癒しました。其方は安心して下さい。」と書いてゐる。

漱石が、自分の宿である今橋四丁目の紫雲樓に寐てゐて、どんなに苦しんだか、又どういふ風にして湯川胃腸病院に入院したか、丁度その當時の日記が缺けてゐるから、精しい事は分からない。ただ『行人』の中の三澤が、大阪の宿屋に泊つてゐて胃に惱み、近所の病院に入院する所が、恐らくこの時の體驗を書いたものに違ひないと推定されるのみである。新聞社からの打電で、やがて鏡子は東京からやつて來た。鏡子からの打電で、松根豐次郎は四國から、小宮豐隆は九州から、東京への歸途大阪に立ち寄つたが、もうその時は漱石は元氣であつた。もつとも『行人』の三澤の言ふ所によると、三澤は大した事にならない爲に入院したのださうである。漱石も多少そんな氣で入院したものかも知れない。病院の模樣、病室からの眺め、患者の種類など、殆んど

『行人』に書かれてゐる通りである。

然し去年の修善寺の一週年にもならないうちに、又血を吐いて入院したといふ事實は、漱石に、情ない氣を起さしめたのみならず、死が更に自分の目近に迫つて來た事を自覺せしめ、死に就いて眞面目に考へ、眞面目に死と對決する必要を感ぜしめたものに違ひない。一度きりの大病なら、健康が回復しさへすれば、忘れる事もあり得る。死との對決も、一日のばしにのばして置く氣にもなるかも知れない。修善寺から歸つて來た時の漱石は、死にかかつた事の恐れよりも、生き返つた事の歡びの方を、餘計感じてゐたやうにも見える手紙さへ書いてゐるのである。然しその同じ病氣が二度繰り返されたとなると、いくら健康が回復しても、またいくら反抗的な心持になろうとしても、結局自分の胃にはひびが入り、早晩自分は是で命をとられなければならない人間であるといふ事を、沁沁感じない譯に行かないに違ひない。「どうも矢張り自分の咎なのでせう、誰を恨む譯もないが」といふ言葉の奥には、無限の心細さが高鳴つてゐる。然も漱石は、それだけでは濟まなかつた。漱石には痔瘻があつた。それはその當時醫者にはまだ分からなかつたのか何か、「肛門周炎」といふ名がついてゐるが、それを切開してもらつても、經過が惡く、漱石は、一日置きではあつたが、いつまでも病院に通つてゐなければならなかつた。それを漱石は「何の因果か」と言つてゐる。然し漱石の「因果」はそれでもまだ盡きなかつた。十一月二十九日、漱

石は五女ひな子の不思議な死によつて、運命から更に手ひどく打のめされる。

漱石は十二月三日の日記の中に、「○生きて居るときはひな子がほかの子よりも大切だとも思はなかつた。死んで見るとあれが一番可愛い様に思ふ。さうして殘つた子は入らない様に見える。／○表をあるいて小い子供を見ると此子が健全に遊んでゐるのに吾子は何故生きてゐられないのかといふ不審が起る。／○昨日不圖座敷にあつた炭取を見た。此炭取は自分が外國から歸つて世帶を持ちたてにせめて炭取丈でもと思つて奇麗なのを買つて置いた。それはひな子の生れる五六年も前の事である。其炭取はまだどこも何ともなく存在してゐるのに、いくらでも代りのある炭取は依然としてあるのに、破壞してもすぐ償ふ事の出來る炭取はかうしてあるのに、かけ代のないひな子は死んで仕舞つた。どうして此炭取と代る事が出來なかつたのだらう。／○昨日は葬式今〔日〕は骨上げ、明後日は納骨明日はもしするとすれば逮夜である。多忙である。然し凡ての努力をした後で考へると凡ての努力が無益の努力である。死を生に變化させる努力でなければ凡てが無益である。こんな遺恨な事はない。／○自分の胃にはひゞが入つた。自分の精神にもひゞが入つた様な氣がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思ひ出す度に起るからである。」と書いてゐる。三女の榮子が赤痢に罹つた時、「小供の病氣を見てゐるのは僕自身の病氣より餘程つらい。しかも死ぬかも知れないとなるとどうも苦痛でたまらない。もしあの子が死んで一年か二年

かしたら小說の材料になるかも知れぬが傑作抔は出來なくても小供が丈夫でゐてくれる方が遙かによろしい。」（書簡第四三〇號）と書いたほど、情に篤い漱石の事である。この打擊が漱石にとつて自分の病氣よりも、もつと堪へ難い打擊であつた事は、想像に餘りある。

六二　文藝欄の廢止

漱石が『門』を書いてゐる間、『門』を書き了へて胃腸病院に入院してゐる間、退院して修善寺に轉地し、其所で吐血し、徐ろに體力が囘復して行くのを待つてゐる間、修善寺から東京に歸り、再び胃腸病院へ入院してゐる間、――およそ一年近く漱石は、文藝欄の編輯を直接監督する事が出來なかつた。不得已漱石はそれを、森田草平と小宮豐隆とに一任しなければならなかつた。然し漱石は、草平にも豐隆にも、安んじて一任して置けない、心元なさを感じ續けた。未熟で、狹隘で、感情的な彼等は、何をするか分からなかつたからである。

既に明治四十三年(一九一〇)三月十一日漱石は野上豐一郎に宛てて、「蒼瓶がジョナリズム(自然派攻擊)の非難を書いた時、楚人冠が新聞界で自分のやつてゐるジョーナリズムの意味にとつて反駁した事がある。其時僕はストーブの前で君あんな事を書くと君と僕と喧嘩してゐる樣に世間で思ふよ。かくなら文藝欄のうちへ書かないかと云つたら、楚はうんさうかと云つてゐた」と

書き、更に追書きして、「森田のやつこが楚人冠へ答辯をかいた時は僕に原稿を檢閲す〔る〕ひまを與へずにすぐ社へ持つて行つた。あれを僕は書き方がよくないと叱つた位だ」と言つてゐる。同じ年の三月十八日には、漱石自身筆をとつて『草平氏の論文に就て』を書き、森田の原稿が「後れた爲通讀の機會を得ずして、すぐ直接に編輯へ廻されたため、つい斯云ふ事を公けにいふ樣になつた」が、自分の立場はかういふ立場であると、森田の「論文」の中に出て來る、漱石の立場に對する誤解を、一掃する事に努めてゐる。七月十八日の日記には、「○森田が昨日生田の原稿を持つて來たのをいけないと云つたら、無斷でそれを社へ廻して仕舞つた。癪に障るから自分で書いてひる迄に社へ持たしてやつた。」と書いてある。是は草平が、外に原稿がないといふ事を理由に、強ひて生田長江の原稿を掲載しようとしたので、漱石が怒つて、入院中は安靜にしてゐる必要があつたにも拘はらず、筆を執つて『文藝とヒロイツク』を書いた事をさすのである。のみならず漱石は、そんな原稿がないからなんて生意氣をいふなら、俺が毎日書いて、一週間でも二週間でも續けて見せると言ひ、その翌日は『艇長の遺書と中佐の詩』、その翌日は『鑑賞の統一と獨立』、その翌日は『イズムの功過』といふ風に、一週間ほど、ほんとに立て續けに書き續けた。是は草平が詫を言ひ、外にちやんとした原稿も集つて來たから、無事に納つたが、その後漱石は修善寺に行き、修善寺で寐込み、十月半ばまでは東京に歸つて來る事も出來なくなり、歸つ

て來ても當分の間は、漱石の氣持が、文藝欄の事などに頭を使ひたくないやうな氣持であつた爲に、明治四十三年はずつと、無事に濟んだ。一方草平の方から言へば、漱石から小言を言はれればこそ、漱石がいけないといふ事でも無理にして見たくなるので、自分が全責任を脊負つて文藝欄を編輯しなければならない段になれば、寧ろ漱石の旨を體しすぎる位に體して、原稿の選擇にも愼重を期する氣になるのかも知れない。

然し漱石の健康が囘復し、『思ひ出す事など』をぽつりぽつりと書き始め、勢ひ新聞も進んで手にとるやうになり、文藝欄にも眼を通し出すと、漱石の默つてゐられない事が、次ぎ次ぎに出て來た。明治四十四年(一九一一)一月三日漱石は草平に宛てて、「正月早々苦情を申候。われ等は新らしきものゝ味方に候。故に「新潮」式の古臭き文字を好まず候。草平氏と長江氏はどこ迄行つても似たる所甚だ古く候。我等は新らしきものゝ味方なる故敢て苦言を呈し候。朝日文藝欄にはあゝ云ふ種類のもの不似合かと存候」と小言を言ひ、更に一月五日にも同じ森田に、「小言を豫期して書かれてはたまらない。あんな書方は「新潮」式だから「新潮」式と申すにて古臭き故に古臭きに候／石井のをくれと云はれてすぐ日取をかへてあしたに出した動機が――文藝欄にとられては厭だといふ了簡なら玄耳は氣の毒な男なり。君たしかにさう思ふか」と書いてゐる。是は草平が一月三日の文藝欄に『吾等は新しきものの味方なり』といふ題の、まつたく『新潮』式の文

章を書き、自分を「新らしきものの味方」として名乘りを上げ、漱石を暗に古いと言はない計りの文章を書いた爲に、漱石が怒つたのである。然も草平がそれに答へて、小言を言はれるだらうとは思つたが、敢て書いたのだなどと言つて寄越したので、漱石はなほ怒つたのである。漱石のこの肝癪は、なかなか納まらなかつた。一月六日阿部次郎に宛てても、漱石は「御風邪の由御大切に可被成候。五日の拙稿御ほめに預かり難有候、小生老人を以て自ら居り大兄青年を以て自ら任ず、左すれば小生の書いたものが一回だも君の氣に入るは、却つて小生の若き所を曝露したるに等し。呵々。／趣味は年に從つて變ず、永き年を通じて融通の利く趣味を有するものは其人の幸福に候。二十五の時は二十五の趣味、三十の時は三十の趣味丈ならばあまりいき苦しく候。」と書いてゐる。一月二十日坂元雪鳥宛の手紙の中には、「獨乙へ手紙を出す。英國へたよりを書く。森田に小言を云ふ。知らぬ人の書翰に禮の返事を出す。それや是やで今朝は病院も大分多事、長い御返事も出來ない。小宮は歸つた朝すぐ芝居へ行つたさうだ。大将どう云ふ了見かな。」とある。二月十三日森田草平宛の葉書には、「衞藤東田の「新ラオコーン」に就て」とか云へるもの前後三回に渡りて興の覺めたるものかな。出來得る限り以來こんなもの沒書可被成候。又ロマンチズムと云ふ言葉ありやクラジツクとも云ふや／原稿料送ルニ及バズ」とある。二月十四日同じ森田草平宛の葉書には、「長耳生のカペルマン音樂會評中に曰く雀羅孟求を囀るに似たりと。／雀羅と

は雀を捕る網の事なるべし。アミが囀るとは不可思議千萬に候。又孟求と云ふもの見たる事なし。蒙求の誤ならん。君が書けるにや東がかけるにや。好加減な事ハヨス方ガイヽ」とある。二月二十四日小宮豐隆宛の手紙の中には、「女に對する戀が徹底とか猛烈だとか云ふ分子さへあれば戀で、其他のわるい處があつても戀だと云ふのは勝手だが是丈が戀だと思ふのは間違だよ。／君の云ふ事は好惡の區別であつて戀になるならぬの問題ぢやない。茶が好きなものを見て何でもブランデーの樣にヒリツカなくては飲料でないと云ふのは可笑しいぢやないか。／武者小路のは不徹底ぢやない、あれ程徹底する事は君にや出來ない、只內氣で亂暴を働かない丈である。そこに初心の可愛らしい處があるのである。あれを眞山青果流にやつて見ろ猛烈かも知れないが其一面には下劣な處が出來る。／一體君は口で徹底とか何とか生意氣を云ふが其實を云ふ「と」不徹底な男である。さうして不徹底の好所を了解せぬ男である。／武者小路のヒーローに何等下劣な所ありや、たゞあゝ云ふ戀と思ふべし。戀の一種類と思ふべし。さうして其特所に同情すべし」とある。三月二十二日森田草平宛の手紙には、「小宮が君の代りに文藝欄をやる事を社に話してさうして君の小說を獨立した人間のそれと同價に買ふ事を僕は決して拒んだ事はない、否寧ろ僕の方からさうしたら何うだと云ひ出した位だ、さうすればたゞ必然の勢君が小說を濟ましてから又もとの文藝欄に立ち戻る事が不慥になる（むしろ出來なくなる）と云ふ危險がある丈である。此危險を冒

す氣なら僕は君の原稿を五圓で買つてやつてくれと社に要求しても宜いと小宮に云つたのである、それが否なら文藝欄に關係をつけて置いて原稿料を少なく貰ふより外はあるまい、／小宮は何うしても先生を承知させると云つたとか、さうして僕の前では丸で理窟らしい事は無論、殆んど何も云はなかつた、それなら分り切つた事を繰り返して押し懸ける必要もなささうなものだ／君は僕の意に從ふといふ、それは難有い、然し君も小宮も僕の云ふ事を尤もとは口外しない、たゞ僕の云ふ事でそれに背けば今の處物質的に損だからまあ云ふ事を聞かうと云ふ様な調子に見える、僕はいやだね、人を強るのは否だ、僕が無理を云ふなら抗辯しても構はない、此際已を得ないから感心はしないが意に從つて置かう抔は甚だ癪だよ　艸々」とある。

一度生死の境を彷徨したあと、漱石は自分のやうな平凡・尋常の人間の爲に、世間が暖い同情を寄せてくれ、ある者は時間と勞苦とを無視してさへも自分の爲に働いてくれた事に對して、深い感謝を懷くとともに、世の中に生きてゐる事を頼もしく感じ出した。自分は平凡・尋常の人間である、自分の願ひはたゞ「善良な人間」として生きるにある、「藝術だの何の」と口先きばかりで利いた風な事を言つて、ただの「善良な人間」として、地味に世の中を暮して行かうと志さない人間は、厭ふべき已惚に眩まされて脚が地につかない、夢遊病者のやうなものに過ぎない。――さう考へて漱石は、弟子どもの傾向を寧ろ嫌惡を以つて眺めた。然し草平や豊隆は、漱石の

その心境が、いかに尊いものであるかといふ事を、理會する事が出來なかつた。大病以前の漱石は、自分等と一緒になつて藝術を論じ、自分等を高めるやうな議論を、自分等とともに上下してくれた。然るに大病以後の漱石の話は、何か平凡なものになつてしまつた。少くとも自分達を高めてくれるやうなものがなくなつてしまつた。是は漱石が大病の爲にその若若しさを失つて、すつかり老ひ込んでしまつた爲に違ひない。――彼等はさう判斷して、漱石を老人扱ひにし、或は「老」と呼び或は「翁」と言ひ出した。殊に草平は『煤煙』を書いて一躍文壇に名をなしてゐた際である。草平は藝術に於いて、師を凌ぐ鼻息の荒さを、内に藏してゐたかに見えた。豐隆は豐隆で、その刺激の强い『煤煙』にかぶれ、漱石の作品にもましてそれを愛する氣になつてゐた際だつたから、刺激に生きる事、徹底して生きる事、統一を求めて生きる事などと、當時流行のオイケンの哲學まがひのモットーを後ろ盾に、漱石に當り、何か自分達だけが「新しいもの」の味方一で、漱石は古く、漱石と會つて話をするのも、漱石を刺激して漱石を新しくする爲だなどと、思ひ昂つた、大それた意氣込を示してゐたのである。それが漱石に通じないでゐる筈がない。通じれば漱石が不愉快に感じない筈がない。

實際漱石は、修善寺から歸つて來てからは、或は一面會謝絕にて御出の時も碌々口もきかず、定めし御氣に障る事と存候へども病氣の我儘序に當分御許容被下度候。實際只今の小生の唯一の

樂は只一人で其日を暮す事に有之候。」(四三・一〇・二〇)といひ、或は「何事もたゞ閑靜なるが今の小生に取りては結構に候。本など取り散らし讀み居候。人に逢ふより本を讀む方遙かにうれしく候。日本の雜誌はいやに候。小說もいやに候。」(四三・一〇・三一)といひ、或は「當節は小說も雜誌もきらひにて、日本書はふるい漢文か詩集の樣なもの然らざれば外國の小六づかしきものを手に致し候夫がため文海の動靜には不案內に候。其方却つてうれしく候。新聞も實は見たくなき氣持致候」(四三・一一・二一)といひ、或は「だれと酒を飲んだとか、だれと藝者をあげたとかいふことは一々報知して貰はないでも好い。其末に悲しいとか、濟まないとか云ふ事は猶更書いて貰はないで可い。余は平凡尋常の人である。凡ての出來事を平凡尋常の出來事として手紙に書いてくれる人を好む。」(四三・一二・一三)といひ、平凡・尋常の、自然で素直で純なものを愛し、我が角突き合ひをしてゐるやうな、文壇の蒸暑さは無論の事、およそ我だの私だのが出しやばつて我は顏をしてゐる世界の出來事には、耳を貸すのも厭な心持で生きてゐたのである。草平や豐隆などが自分の所へ來て氣燄を上げるのみならず、朝日文藝欄に據つて、何か天下でも取つたやうな氣持になり、自分の周圍をさへ照せるかどうか分からない、行燈のやうな智慧をもつて、十分天下を照す事が出來ると己惚れてゐるのを見ては、漱石は苦苦しくもあれば氣の毒でもあつて、出來ればそれを彼等に反省させ、また出來れば彼等の過誤を矯正して、正しい道に連れ

戻してやりたいと思つたものに違ひない。漱石が『鑑賞の統一と獨立』を書き、『イズムの功過』を書き、『好惡と優劣』を書き、その他『博士問題の成行』の中で、「余が進んで文部省に取消を求めざる限り、又文部省が余に意志の屈從を強ひざる限りは、此問題は此より以上に纏まる筈がない。從つて落ち付かざる所に落ち着いて、歳月を此儘に流れて行くかも知れない。解決の出來ぬ樣に解決された一種の事件として統一家、徹底家の心を惱ます例となるかも分らない。」と書き、或は講演『中味と形式』の中で、オイケンの哲學を批評し、或は『彼岸過迄』の序の中で、自分は「たゞ自分らしいものが書きたい丈である」と言つてゐるのなぞ、無論當面の目的とする所は、その問題に對する自分の立場や自分の意見を明らかにする點にあつたのには違ひないが、然しそれとともに、是を書く漱石の心の奥では、是によつて弟子どもが、もつと高い立場、もつと廣い視野から、世界を眺め、自己を眺めて、人生をもつと地道に確實にあるいて行く事を希望する心が、動いてゐる事を、見遁す譯には行かないのである。

然し草平でも豐隆でも、それで自分を反省したり、自分を矯正したりしようとするやうな、神妙な心持を持つてはゐなかつた。例へば道樂息子が肚の中で、うちの親爺は舊弊で頑固で手がつけられないなどと考へながら、その小言を聽いてゐるやうに、彼等は漱石の言ふ事は、頭から受けつけなかつた。從つて漱石の言ふ事は、少しも彼等の心に沁み込む事がなかつた。是が漱石の

炯眼に看過される筈がない。漱石は訓戒が有效である爲には、その訓戒を受ける相手が、丁度訓戒を受けるに適切な階段に立つてゐる必要があるといふ事を沁沁經驗しながら、是は一つは、文藝欄などといふものがあつて、若い者を有名にした事が、若い者を毒する大きな理由になつてゐるのだと、考へ始めざるを得なかつた。

その上文藝欄に對する社の編輯部の態度も、漱石に餘り好い感じを與へなかつたやうに見える。記事が輻湊して來ると、編輯部の方では、とかく文藝欄を休んで、その空間にその記事を持ち込んだ。編輯部から言へば、文藝欄に漱石の文章が載る事は歡迎しても、若い者が文壇といふ、社會のほんの一局部の、更に一局部に就いて、何か偉さうに氣燄をあげてゐるのを、さうさう尊重する氣にもなれたかつたに違ひない。從つて文藝欄は、新聞とはおよそ緣の遠い、閑文字に充ちたページで、若い者が原稿料をとつて勝手な熱を吹く場所だといふ風に、反感をもつて眺める事はなかつたとしても、必要の場合には、どしどし其所へ喰ひ込んで行つても構はない場所だつたのに違ひないのである。然し編輯部の意見はともかく、さうして文藝欄が絶えず壓迫を受けてゐれば、漱石が好い心持がしないのは、當然であつた。然し編輯部の無遠慮はそれだけには止まらなかつた。旣に新聞に文藝欄が設けられた以上、文藝に關係のある原稿は、一切文藝欄擔任の漱石の檢閲を經るのが、順である。現に明治四十二年(一九〇九)十一月二十九日漱石が中島六郎に

宛てた手紙の中には、「元來編輯會議では文藝欄を設けないでも藝術文學の批評はやるのだからさう云ふ種類のものをまとめて小生の管理の下に該欄中に收めたらよからうと言ふ相談故、強く抗議を申込めばやめさせる事も出來候へどもあれはたゞ雜報の筆がすべつたもの位に見逃しても差支ないと存候是亦漸次改良の積故さう一時に御立腹なく完成の機迄御見屆願上候」とあつて、文藝欄創設の當時は、行く行くその種の記事は、漱石の管理下に置かれる方針だつた。然し漱石は毎日社に出る譯ではなかつたし、漱石が『門』を書いたり、病氣をしたりしたせゐもあつて、是は「漸次改良」されるどころか、いつまでも同じ狀態が續き、直接社の方へ持ち込まれた原稿や、社の方から勝手に直接に賴んだ原稿で、文藝に關係のあるものが、漱石に相談なしに、文藝欄と同じ面に掲載され、どうかするとそれを掲載する爲に、文藝欄を壓迫し、文藝欄を休載する事も、屢あつたのである。草平や豐隆はその度毎にそれを氣にし、編輯に談判して、以後こんな事のないやうにしてくれと、漱石に迫つた。漱石も勿論それを快よくは思はなかつたが、然し漱石には社内の事情も分かつてゐるのだから、さうさう若い者の言ひなりになつて、編輯に強硬に談判する譯にも行かなかつた。結局漱石は、若い者をなだめながら、自分をもなだめるより仕方がなかつた。明治四十四年(一九一一)四月十九日小宮豐隆に宛てて、漱石が「御不平御尤に候。然し越後記と南歐の何とかいふものと文藝欄を脊負ひ込んだページだと思つて見ればまあ仕方が

ない。あれでも佐藤は充分骨を折つた積かも知れないよ。呵々。僕は柏亭の様な記事の出るのを喜ぶから柏亭を壓しても文藝欄で幅を利かさうといふ氣はない。たゞし上下をきるのはよくないが、そんな例はいくらもあるのだらう」と書いてゐるのなど、その一例である。然し「僕は新聞でたのまれて滿韓ところ〴〵といふものを書いてゐるが、どうも其日の記事が輻輳するとあと廻し「に」される。癪に障るからよさうと思ふと、どうぞ書いてくれといふ。だから未だにだら〳〵出してゐる。」(四二・一一・二八)と言ふほどの漱石である。それが不愉快でない筈がない。既に自分が十分不愉快である所へ持つて來て、弟子どもが不愉快の尻を自分の所へ持ち込み、それを斷えず宥めてゐなければならないとすれば、漱石は自然文藝欄などといふものがあるからいけないのだといふ氣に、ならないとは限らないのである。

のみならず明治四十四年(一九一一)十月に至つて、主筆の池邊三山が辭職した。是は心臟が惡くて職に堪へないといふ理由になつてゐるが、それもあつたには違ひなかつたとしても、ほんとの理由は別に何かがあつたらしい。それは、白瀬中尉の南極探檢を後援するしないで、當時の社長村山龍平と意見が合はなかつたからだともいふし、部下の幹部、弓削田精一以下の連中と政治上の意見が合はなかつたからだともいふし、木村久壽彌太から友人として金を借りて家を建てたのを、三菱に買收されたといふ噂を立てられ、それを憤慨してやめたのだともいふし、いろいろ

說があるやうであるが、どれがほんとの理由か、はつきりした事は分からない。ただこの辭職には何か自然でないものがあつたに違ひないと想像させるものは、漱石が三山とともに辭職する氣になつてゐる事である。漱石は外の者から事情をきいて見て、何もさうさう意地を張り通す必要もなささうだと感じ、一旦は思ひ止まつたが、然し十一月一日には正式に辭表を提出した。弓削田精一によると、漱石は弓削田に、池邊も弓削田も共に自分の入社した時に關係のある人である、その二人が喧嘩をしてゐるのは面白くないから、仲直りをしたらどうだと言つたのだといふが、それが聽かれなかつたので、或は辭表を出したのかも知れない。然しこの邊の經過も、どうしてどうなつて行つたものか、杳として分からない。元來漱石の入社の意志を最後に決定したものは、社長の村山龍平ではなくて、主筆の池邊三山である。その池邊が辭職する以上、自分も止まつてゐたくないといふのが、本來の漱石の肚だつたのではなかつたかとも思はれる。

明治四十四年（一九一一）の日記を見ると、十一月十七日の條に、「〇昨夜弓削田來不在、一昨夜松山來。」とある。弓削田は、勿論池邊の下で政治部長をしてゐた、弓削田精一である。松山は、池邊の後に主筆となつた松山忠二郎である。十一月十九日の條には、「〇昨日妻が机の前へ來ていふには「あなたなぞが朝日新聞に居たつて居なくつたつて同じ事ぢやありませんか」「仰せの如くだ。何の爲にもならない」と答へた。すると妻は「たゞ看板なのでせう」と云つた。余は「看板

にもならないさ」と答へた。出たいといふものを何だ蚊だと云つて引き留めるにも當るまいと思ふが、其處が人情か義理か利害か便宜かなのだらう。」とある。十一月二十日の條には、「〇十八日に弓削田が來て考へ直せといふから辭表を撤回したら今朝池邊から夫を送り届けて吳れた。松山が午後來るといふ電報をかける」とある。十一月二十二日野村傳四に宛てた手紙の中には、「東京の社でも少々ごたく\があつて僕もとうく\出やうとしたがみんながとめて吳れるのでまあ思ひとまつた、僕見たやうに横着をしてゐて夫で不平がましく出るの引くのといふのは實際義理知らずのやうでもある。」とある。『池邊君の史論に就て』には、三山が『東京朝日』の地位を棄てたあと、半ばは痔に惱んでゐた漱石を見舞ふため、「半ば彼の地位の變動が余に及ぼし得べき影響について掛念するため、好意上必要上平生よりは屢」漱石の家を訪づれたと書いてある。三山は在職中、漱石の事を始終念頭に置いて、漱石の「地位のために進退を賭する覺悟でゐた」のだといふ。その事實を漱石は、三山の歿後、人からきいて知つたのには違ひないが、その意氣は漱石に通じてゐた。漱石が三山の爲に辭職しようとしたのもこの三山の意氣だつたのに違ひないし、漱石が辭職を思ひ止まつたのも、或は主として三山のこの意氣だつたのかも知れない。——かうして漱石は、一旦提出した辭表を撤回したが、然しそのごたごたの最中に、やめる事に決定された文藝欄は、そのまま廢止されてしまつた。

明治四十四年十月二十五日漱石は小宮豐隆に宛てて、「原稿を返して呉れといふ端書は拜見したが、二十四日には社へ出る必要があるので夫迄でいゝと思つて返事を上げなかつた。／所で今度ある意味から森田にやめて貰はなければならない事になつた。森田が居なくなれば文藝欄の編輯者の問題が出る譯だが、僕は少し思ふ處があつて文藝欄を廢止する相談を〔編〕輯部の人として仕舞つた。今迄は色々御世話になり又是迄骨を折つたものを放棄するのは惜しいものであるが、社全體の紙面の改良や原稿の選擇に就いて僕が何か無遠慮の事を云はうとすると、どうしても僕が先づ是丈の犧牲を拂つて置かなければならない。文藝欄を維持する積なら維持はいくらでも出來る、又改良も出來る。然しさうすると他人の領分へは口を出し惡くなる。僕は今度池邊君が退社したに就て或は自分も出やうかと考へたが殘る人々から事狀を聞いて見るとさう意地を通す必要もないから居る事にした。のみならず自分の直轄してゐる文藝欄の棒を永久流して仕舞つた。是は僕が猶將來に朝日をより好くし得る見込を抱いた爲であつて、決して自分の地位を安固にするため他人の云ふ通りになつたのではない。夫は君にどう思はれても構はないが、向後到底僕の發見し得る「朝日」の點々に於て改善の見込が立たないとなつたら、多分僕はやめるだらうと思ふ。／夫からもう一つは文藝欄は君等の氣焰の吐き場所になつてゐたが、君等もあんなものを斷片的に書いて大いに得意になつて、朝日新聞は自分の御蔭で出來てゐる抔と思ひ上る様な事が出

來たら夫こそ若い人を毒する惡い欄である。君抔にそんな了見はあるまいが、近來君の行爲やら述作に徵して見ると僕は何だか心細くなる樣な點もある。あれで好いつもりで發展したらどうなるだらうと云ふ氣が始終つけまつはつてゐる。要するに朝日文藝欄抔があつて、其連中が寄り合つて互に警醒する事はせずに互に挑撥し合ふのも少しは毒になつてゐるだらうと考へる。それで文藝欄なんて少しでも君等に文藝上の得意場らしい所をぶつつぶしてしまつた方が或は一時的若や森田の藥になるかも知れない。／僕は向後文藝上の事に關して君等の援助を仰がなければならない場合が澤山あるだらうと思ふ。現に援助を仰ぎつゝあるのに、こんな事を云ふのは甚だ失禮でもあり諸君も氣を惡くするかも知れないが實際昨今の僕はさう感ずるより外に仕方がないのだから、漱石は本當にしか感じてゐるのだと思つてくれ給へ。さうし〔て〕笑ふとも怒るともして呉れ玉へ。／玉稿は同封で歸す。あの端書の書き方抔を兎角申すのは何だか小八釜しい様だが「闇から闇へ」抔いふ文學的形容詞は用ひない方が穩當であらう。殊に「夫は堪へられない」に至つては讀む方では一種厭な感じがする。自分の書いたものが自分の豫期した時間内に新聞に出ないのは不愉快には違ひない。又其原稿がどうなつたか分らないのも不平には違あるまい。けれども夫に堪へられないといふのは自分の書いたものがたも〳〵重大な論文で、夫を掲載しない新聞が左も〳〵不德義で、之を草した自分は左も〳〵大家である樣に讀まれる。以上の諸條項を備へな

いで猶且つ下らない事に堪へるとか堪へられないとかいふのは一種のセンチメンタリストか或は片寄つた文壇の流行語を故意に使用するコンヱンショナリストである。／僕の近來の君に注意したい點は道德的にも藝術的にも此手紙のうちに含まれてゐると思ふから、とくにそれを長く說明したのである。／原稿は五回分丈社に回つてゐた。僕は自分から請求して、悉くそれを持ち歸つた。理窟から云へば掲載の有無に拘はらず原稿料を拂はなければならない。が僕は君等が單に原稿料をとる爲にのみ書いてゐると思はれるのが厭だから、わざ「と」請求しないのである。以上」と書いた。——明治四十二年十一月二十五日から始められた朝日文藝欄は、かうして、滿二年たたないうちに廢止されてしまつた。漱石が自分の「うちへ出入する」若い者の爲にもと考へて設けた文藝欄は、自分の「うちへ出入する」若い者を毒する機關のやうなものになつて、漱石から「ぶつつぶ」されてしまつた。漱石はきつと遺憾だつたに違ひない。然し漱石が自分の主宰する文藝欄を「ぶつつぶして」まで、その反省を求めようとした若い弟子どもは、漱石の衷情に動かされるより前に、ますます漱石から離れて行く傾向を示した。この事は漱石にとつて更に遺憾な事だつたらうと思ふ。

然もさういふ事の最後に來たものが、五女ひな子の死だのである。

六三 『彼岸過迄』

漱石は『彼岸過迄』を、明治四十五年(一九一二)一月一日から四月二十九日まで、百十九回に亙つて新聞に連載した。さうしてその中に五女ひな子の死んでから御葬ひまでの一部始終を、ありのままに書き込んだ。是は實に美しい文章である。元より『彼岸過迄』は、是までの小説と違つて、獨立した短篇をいくつか集めて一つのものに纏まり上がる筈の小説であつた。此所にひな子の死を書き込んだ『雨の降る日』の一篇が插まつてゐる事は、構成的に別に不都合でない事、『風呂の後』が『彼岸過迄』の發端となつてゐる事が不都合でないのと同樣である。然し『彼岸過迄』が『須永の話』に來て初めて本筋に這入つた感じを與へ、且つ『須永の話』がある爲に『彼岸過迄』が、初めて漱石の名に値ひする小説になつてゐるといふ點から言へば、内面的な構成の上からは、『風呂の後』も『停留所』も『報告』も『雨の降る日』も、すべて餘計なものであると、言ふ事が出來なくもない。それをしも漱石が敢てしたのは、一面から言へば漱石に「面白い

もの」を書かうといふ氣があつた爲であるし、一面から言へば漱石に、ひな子を失くした悲哀をどうにでもして書きとめて置きたい氣があつた爲なのだらうと思はれる。せめてさうでもしなければ、漱石は自分の悲哀のやり場がなかつたに違ひないのである。

漱石は『彼岸過迄』を連載するに先だつて、一回分を序文に盡した。その序文の中で漱石は、「實をいふと自分は自然派の作家でもなければ象徴派の作家でもない。近頃しば〳〵耳にするネオ浪漫派（ローマンは）の作家では猶更ない。自分は是等の主義を高く標榜して路傍の人の注意を惹く程に、自分の作物が固定した色に染附けられてゐるといふ自信を持ち得ぬものである。又そんな自信を不必要とするものである。たゞ自分は自分であるといふ信念を持つてゐる。さうして自分が自分である以上は、自然派でなからうが、象徴派でなからうが、乃至ネオの附く浪漫派でなからうが全く構はない積である。／自分は又自分の作物を新しい〳〵と吹聽する事も好まない。今の世に無暗に新しがつてゐるものは三越呉服店とヤンキーと夫から文壇に於る一部の作家と評家だらうと自分はとうから考へてゐる。／自分は凡て文壇に濫用される空疎な流行語を藉て自分の作物の商標としたくない。たゞ自分らしいものが書きたい丈である。手腕が足りなくて自分以下のものが出來たり、街氣があつて自分以上を裝ふ樣なものが出來たりして、讀者に濟まない結果を齎すのを恐れる丈である。／東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購讀者は實に何十萬といふ多

數に上つてゐる。其の內で自分の作物を讀んでくれる人は何人あるか知らないが、其の何人かの大部分は恐らく文壇の裏通りも露路も覗いた經驗はあるまい。全くたゞの人間として大自然の空氣を眞率に呼吸しつゝ穩當に生息してゐる丈だらうと思ふ。自分は是等の教育ある且尋常なる士人の前にわが作物を公にし得る自分を幸福と信じてゐる。」と言つてゐる。是は言ふまでもなく、漱石の大病の體驗と關聯し、弟子たちとの體驗とも關聯する。元來文壇を無視して出現し、また文壇的である事を陋としてゐた漱石は、段段文壇的に固陋に無反省に驕慢になつて行く弟子たちに愛想をつかし、それらとの絕緣を宣言するやうな、この序文を書くのである。漱石は此所で、自分は「主義を高く標榜して路傍の人の注意を惹く程に、自分の作物が固定した色に染附けられる事を欲しないといふ。自分は又「自分の作物を新しい／＼と吹聽する事も好まない」といふ。自分は「凡て文壇に濫用される空疎な流行語を藉て自分の作物の商標としたくない」といふ。ただ「自分は自分である」。自分は「たゞ自分らしいものが書きたい」と念じてゐるのみである。從つて自分は是を「恐らく文壇の裏通りも露路も覗いた經驗」を持つてゐない、「全くたゞの人間として大自然の空氣を眞率に呼吸しつゝ穩當に生息してゐる」筈の、「教育ある且尋常なる士人」の爲に書いて、文壇や文壇的な人の爲に書くのではないといふ。——是は勇ましいけれども、何か淋しい宣言である。

漱石がかうして何十萬といふ新聞の一般讀者を念頭に置き、それらの讀者の頭に沁み込むやうに自分の問題を小說に書きほごして行かうとする以上、漱石が「成るべく面白いものを書かなければ」ならないと感じるのは、殆んど當然の事であつた。勿論漱石は「たゞ自分らしいものが書きたい」「手腕が足りなくて自分以下のものが出來たり、衒氣があつて自分以上を裝ふ樣なものが出來たり」するやうな事があつてはならないと、念じてゐる作家である。いくら「成るべく面白いものを書かなければ」ならないとは感じても、「自分らしいもの」をへしまげてまで、讀者の機嫌をとり結ばうなどとは、決して考へはしなかつた。殊に漱石は新聞に小說を書き出してから、絕えず新聞小說といふものに就いて考へ、新聞小說は一回一回に何等かの意味で山を持つとともに、全體としては全體の山を持つてゐなければならないなどとも言ひ、それを是まで實行しては工夫し、實行しては工夫して來てゐるのである。その爲め漱石が此所で「なるべく面白いものを書かなければ」と言つたからと言つて、羽目を外すやうな事もない筈であつたが、然し是を明治四十年（一九〇七）八月六日、漱石が『虞美人草』を書いてゐるさ中に、小宮豐隆に宛てて、「僕が洋行して歸つたらみんなが博士になれ〳〵と云つた。新聞屋になつてからそんな馬鹿を云ふものがなくなつて近來晴々した。世の中の奴は常識のない奴ばかり揃つてゐる。さうして人をつらまへて奇人だの變人だの常識がないのと申す。御難の至である。ちと手前共の事を考へたらよか

らうと思ふがね。あんな御目〔出〕度奴は夏の螢同様尻が光つてすぐ死ぬ許だ。さうして分りもしないのに虞美人草の批評なんかしやがる。虞美人草はそんな凡人の爲めに書いてるんぢやない。博士以上の人物卽ち吾黨の士の爲めに書いてゐるんだ。なあ君。さうぢやないか。」と書いてゐるのに比べると、正に隔世の感があると思はれる。氣を負つた、反抗的な、さうして精神的貴族を以つて任じてゐる漱石の姿は消えて、「全くたゞの人間として大自然の空氣を眞率に呼吸しつゝ穩當に生息してゐる」「敎育ある且尋常なる士人」としての漱石が、さういふ「士人」をのみ相手に生きて行かうとしてゐるからである。然も漱石は、此所で「なるべく面白いものを書か」うとする點では寧ろ失敗しても、「自分」を多すぎもせず少なすぎもせず、丁度ありのままに表現する事に於いては、輝かしい成功を收めた。自分は精神的貴族でもなんでもなく、ただの尋常平凡な人間に過ぎない。自分の道は、この平凡尋常な人間としての自分を、多すぎもせず少なすぎもせず、丁度ありのままに表現する所にあるといふ地味な、謙虚な、然し搖がない認識が、初めて眞に藝術家としての漱石の基礎を据ゑたのである。『彼岸過迄』を轉機として、更に嚴密に言へば、『須永の話』を中心とする一群を轉機として、漱石の小說は、俄然として高くて深い光芒を放ち始める。例へば嫉妬を取り扱ふにしても、また疑惑を取り扱ふにしても、『彼岸過迄』以後の把握は、是までの概括的であり抽象的であるのに比べて、遙に箇體的であり具象的であり、機微に

觸れ深刻を極める。一口に言へば、漱石の爾後の作品は、漱石の內面の嚴肅な告白となり始めるのである。

是までの漱石には、言はば、まだ己惚があつた。――少くとも作家として、まだ度胸が定まらない所があつたやうに見える。漱石には、作中の人物と自分とが同一視される事を、嫌ふ所があつた。『それから』の代助でも、また『門』の宗助でも、漱石の分身だつたには違ひなかつたが、然もさうして漱石は事實それらの人物の中に自分を打ち込んで書いて行つたには違ひなかつたが、然もこの同一視に對する嫌惡が障壁となつて、漱石とそれらの人物との間には空隙が生じ、それらの人物が十分具體的に且つ十分箇體的にならないのを、どうする事も出來なかつた。從つて漱石に、代助に於いて、また宗助に於いて、その見ともない所、齒痒い所を描き出さうとする意圖があつたのだとしても、その意圖は十分到達される事がなかつたのである。然るに『彼岸過迄』に來て、その己惚が、卒然として拂拭されてしまつた。漱石は須永と一つになつて、須永を通して、須永とともに、自分の醜さを人人の前に披瀝し始める。

例へば『松本の話』の中の、須永の「世の中と接觸する度に內へとぐろを捲き込む性質(たち)」であつた。須永は「一つ刺戟を受けると、其刺戟が夫から夫へと廻轉して、段々深く細かく心の奧に喰ひ込んで行く。さうして何處迄喰ひ込んで行つても際限を知らない同じ作用が連續して、彼を

苦しめる。仕舞には何うかして此内面の活動から逃れたいと祈る位に氣を悩ますのだけれども、自分の力では如何ともすべからざる呪ひの如くに引つ張られて行く。さうして何時か此努力の爲に斃れなければならないといふ怖れを抱くやうになる。さうして氣狂の様に疲れる」。――須永は自分のこの「執濃い油繪」のやうな性質に、愛想をつかしてゐるのである。それだから須永は「一筆がきの朝貌」のやうな女中の作の顔を見て「尊とい感じを起」すのである。然し須永が「一筆がきの朝貌」のやうな世界に憧がれれば憧がれるほど、須永の中の「執濃い油繪」のやうな世界はますます執濃く拘泥し、須永の中の「執濃い油繪」のやうな世界が執濃く拘泥すればするほど、須永はますます「一筆がきの朝貌」に憧がれなければならない。然もそれら二つのものは、須永の中で更に一つの大きなものに綜合される事がなく、従つて二つのものは二つのものとして別別に存在し、その爲め須永は絶えず苦しみ通さなければならないのである。

言ふまでもなく是は、漱石自身の苦悩であつた。漱石は既にこの問題を、『門』の中ででも取り扱つてゐる。然し『門』ではこの問題は、言はば、物によそへて提出された。物によそへる手續きは、この問題の直接性と原本性とを減殺する。のみならず自分の過去の罪に追はれて安き心のない宗助が、「風碧落を吹いて浮雲盡き、月東山に上つて玉一團」といふ世界に憧がれて、禪寺の

門を潜るといふのと、生れつき「執濃い油繪」のやうな性質を持たされてゐる須永が、「一筆がきの朝貌」の世界を「尊とい」と感じ得るものを衷に持つてゐながら、――寧ろそれを「尊とい」と感じ得るものを持つてゐるといふ事その事の爲に、苦しまなければならなかつたといふのとは、同じものではない。『門』の宗助の苦惱は、宗助の過去の罪によつて規定される。それだけ宗助の苦惱は特殊な苦惱である。それにも拘はらず、宗助の苦惱は、その灸所に來て反つて抽象的で一般的なものになつてしまつた。『彼岸過迄』の須永の苦惱は、須永の生れつきによつて規定される。その他、須永の境遇によつても、規定される。それだけ是は、一般にアッピールしにくさうに見えるにも拘はらず、把握されたものが具體的であり、箇體的であり、それが化粧も僞裝もなしに、まともに、直接描き出される爲に、二つの魂の相剋し合ふ姿が、客觀的に、彫塑的に活きて動いて、特殊のままで普遍なものになつてゐるのである。

のみならず漱石は須永のこの性質に配するに、「最も恐れない一人」としての、千代子の、純粹で一本氣な性質を以つてした。さうしてその二人の間に、戀愛とも親愛とも片のつかない、不思議な愛情を成立させ、その爲め須永に疑惑だの嫉妬だの、須永自身が認めて醜だとする、いろんな經驗を經驗させた。是は正に漱石の、男性としての自分自身の彈劾であるとともに、女性としての千代子の禮讃である。この戀愛に於いて、罪あるものは、男であつて女ではない。須永の

「執濃い油繪」のやうな性質が、この戀愛を、合ふ事も出來なければ離れる事も出來ない、不思議な、苦しい戀愛とするのである。須永は自分の性質を醜であると認めざるを得なかつた。然も須永は、その醜なる性質が、自分の持つて生れたものの中から、必然に出て來たものである事をも、同時に認めざるを得なかつた。從つて須永は、自分を憎むとともに自分を憫み、千代子を尊敬するとともに千代子の爲に怖れ、進む事も退く事も出來ない、窮所に追ひ込まれてしまふのである。——是は恐らく漱石が大病の後に、自然と親しみ、一人を樂しんで生きてゐるうちに、反省の眼を自分の心の上に注ぎ、自然との對照に於いて、自分の中にはその自然に値ひしない醜いものが、到る所に巣喰つてゐる事を發見し、ひと事どころではなく、まづ自分自身の事を、改めて考へ通さうとした結果であつたのに違ひない。漱石が自分を尋常平凡な人間であると考へ出したのも、必ずこの自分の中の醜の認識から出發する。さうして漱石は、この、決して嬉しい認識とは言へない、寧ろ餘儀ない認識の上に自分の立場を置いて、此所から自分の藝術の建て直しを試みようとするのである。

小說を書く事が、自分の胃を惡くする事、自分の精根を枯らす事であるといふ事を、漱石が知らないでゐる筈はなかつた。その上漱石は自分に最も近い弟子たちに愛想をつかしてゐた。池邊三山は主筆をやめてしまつた。自分の痔はなほりそくなつて、いつまでも病院通ひが續く。ひな

子は死んだ。のみならず漱石は小説で自分の中の醜いものを抓羅剔抉しようとする。とすれば、漱石が『彼岸過迄』を書くのに、そんないそいそとした心持で是に立ち向ふ事の出來ないのは、當然である。初めの內漱石は、どうしても氣のりがしなかつた。明治四十四年(一九一一)十二月十五日の日記に、漱石は、「〇今日から小説を書かうと思つてまだ書かず。他から見れば怠けるなり。終日何もせざればなり。自分から云へば何もする事が出來ぬ位小説の趣向其他が氣にかゝる也」と書いてゐるが、十二月二十八日長谷川萬次郎宛の手紙には、「愈小説をかく事と相成候へども健康を氣遣ひ日に一回位の割にて龜の子の如く進行する積に候」と書いてある。明治四十五年(一九一二)一月二十八日鳥居素川宛の手紙の中にも、「病餘自分の健康を氣づかひわざと毎日一回分の小説外か書かざる爲め其日其日に追はれ落付きかね候」とある。然も漱石は二月九日笹川臨風に宛てて、「打明けた御耻づかしき處を申すと目下御承知の小説に追はれ一日後れると社の方で一日休まねばならぬ始末にて大弱りの處に候　過日時々休んで呉れと申し叱られ候木曜の面會日などは殆んど書き損はぬ許り危うき思を屢繰り返し居候尤も旨い具合に行けば一夕の餘裕位はとれ可申れど十二日は朝のうち參る人ありひるから四時位の間には小生の痩腕にては一回書き上げる事覺束なく候へば或は失禮致す事に相成るべきかと存候」と書いてゐるのである。「小生の痩腕」といふ言葉には、或は謙遜の意味があるとも取られる。然し此所では恐らく漱石は、謙

遙でもなんでもなく、ほんとに自分の腕を「痩腕」としか感じられなかつたのに違ひないのである。二月九日といへば、既に『停留所』の二十八九回目くらゐな所、卽ち『彼岸過迄』を書き出して、凡そ五十日近くに達してゐる時分であつた。さうした際にもなほ漱石が自分の腕の事を「痩腕」と言はなければならなかつたといふ事は、いかに漱石が進まない氣持を無理に引き立て、苦しみ苦しみして『彼岸過迄』を書いて行つたかといふ事を、示唆するもののやうにも思はれる。然もこの月の二十八日には池邊三山が死に、丁度日課の一回分を書き終へてゐた漱石は、三山の家に出かけて行きさへもするのである。

それでも書き込んで行くうちには、段段氣分もその方に向ひ、是まで漠然と動いてゐたものに、はつきりした姿を與へる愉快も伴つて、漱石は『彼岸過迄』を書く事を、それほど重荷に感じなくなつた。三月二十一日漱石は中村蓊に宛てて、「段々春暖の候好い心持に候毎日小説を一回づゝ書いてゐると夫が唯一の義務の樣な氣がして何にも外の事をせず早く切り上げて遊んだり讀書をしたりするのが樂みに候／「雨の降る日」につき小生一人感懷深き事あり、あれは三月二日（ひな子の誕生日）に筆を起し同七日（同女の百ケ日）に脫稿、小生は亡女の爲好い供養をしたと喜び居候」と書いてゐる。是は悲しい「喜び」である。然し悲しくてもなんでも、それが「喜び」であつた事には間違ひがない。肚の中に溜つてゐたものを、排泄する事の出來た「喜び」である。

四月六日野村傳四宛の手紙の中には、「四月の樣に遊ぶ事の多い月に小説を書くのは甚だ無風流の至り來年からは注意してやめに致したい。」とある。四月二十五日橋口五葉宛の手紙の中には、「本日漸く小説を書き上げ候につきひまになり候故其内伺ひ可申候」とある。然し四月二十七日野上豐一郎宛の手紙に、「此二三週間は又胃に酸が出て運動すると形勢不穩故成るべく靜養の工夫致し候　夫に神經もよろしからず閉口致し候。けれども根が呑氣な性分故まあどうかなるだらうと存居候。然し大兄の方は漫性的のものでなき故成るべく一時に癒して置く事必用に候出來る丈轉地でも何でもしてゆつくり損失を取返す御工面可然と存候老生如きは損をすれば損のし損まことに心細く候」とあるやうに、漱石は四月の始めごろから、胃の具合が惡く、それに神經もピリピリして、少し困つたらしい。勿論是はどつちも大事に至らないで濟んだが、然しいくら要心するといつても、じつと坐つてゐて、頭を使ふ仕事である。どうせ胃に惡いにはきまつてゐる。殊に問題が問題であるだけに、漱石の打ち込み方も違ひ、從つて漱石の神經も極度に緊張しなければならなかつたのだらうと思ふ。「老生の如きは損をすれば損のし損まことに心細く候」といふ言葉の奥には、死の問題を初め、あらゆる問題を、のつぴきならず考へ通さなければならない、ぎりぎりの所へ押し詰められて行く漱石の「心細」い姿がまざまざと感じられる氣がする。

六四　明治天皇崩御

明治四十五年（一九一二）七月三十日明治天皇崩御、即日改元されて大正となつた。

漱石が明治天皇を敬愛しまつつた事は、日本國民の分として當然の事である。然しそれとともに漱石には、もつと箇人的な理由もあつて、一層切實に明治天皇を敬愛しまつつた。明治天皇の踐祚は、慶應三年（一八六七）正月九日である。漱石は慶應三年正月五日に生れてゐる。翌慶應四年（一八六八）八月には卽位の大禮が行はれ、九月八日には明治と改元、一世一元の制が定められ、漱石はこの天皇の治下に、明治とともに成長して來てゐるのである。漱石の一生の惱みも歡びも、鬱屈も勝利も、すべてこの天皇の治下の、明治とともにあつた。然も日本が、德川の桎梏から拔け出て、日清・日露の戰ひを經て、世界的な舞臺に自主獨立の地步を占め、男らしく堂堂と生き、最も輝かしい歷史を編み上げる事が出來たのは、明治天皇の聖德の光被に外ならなかつた。日露戰爭の意義に刺激された漱石が、同じ意味で、明治天皇の聖德に刺激されずにゐる筈がない。そ

れだからこそ漱石は、明治四十五年七月二十五日、陛下の御不例に關して、橋口貢に宛てて、「聖上御重患にて上下心を傷め居候今朝の様子にては又々心元なきやうに被察洵に御氣の毒に存候」と、眞實を籠めて日日の報道に憂慮し、崩御のあとでは、『法學協會雜誌』の囑を受けて、『明治天皇奉悼之辭』を書いたのみならず、或は八月八日森圓月へ宛てて、「明治のなくなつたのは御同様何だか心細く候」と書き、或は御大葬に際して、「奉悼　御かくれになつたあとから雞頭かな」・「奉送　嚴かに松明振り行くや星月夜」といふやうな句まで作つたのである。

漱石は眞實を愛した。自分がさう感じもしないのに、さもさも大袈裟にそれを感じた如くに裝ふ事を、漱石は虛僞として排斥した。同じ森圓月宛の手紙の中で、「國民は此度の事件にて最もオベツカを使ふ新聞に候オベツカを上手の編輯といへば彼の右に出るもの無之候　いづれにしても諸新聞の天皇及び宮庭に對す〔る〕言葉使ひ極度に仰山過ぎて見ともなく又讀みづらく候」と言つてゐるのも、漱石に眞實に陛下の崩御を哀悼しまつる情があつて、それが「諸新聞の」「極度に仰山過ぎ」る「言葉使ひ」によつて、汚がされるやうな氣がしたからである。それだけ漱石の、陛下の崩御に對する奉悼の言葉には、眞實が溢れ出て、人を撃つものを持つてゐる。例へば『法學協會雜誌』の『明治天皇奉悼之辭』である。漱石は是を編輯委員の山田三良から依頼され、頼まれた翌日とかにこの原稿を持つて行き、自分は響きだけがあつて意味のない、從つて西洋の言葉に

は翻譯の出來ないやうな文字は、一つも使はなかつた、ただ率直に誠實に、奉悼の意を表現したと言つたといふが、勿論此所には「諸新聞の「言葉使ひ」の「極度に仰山過ぎて見ともなく又讀みづらい」のに對して、自分は自然な率直な言葉使ひで遙に切實に奉悼の意を表して見せるといふ意氣込みが、——卽ち賤しむべき時勢に逆行しようとする、漱石の反抗的精神が、漱石の中に働いてゐた事實を見遁す譯には行かないには違ひないが、然しその反抗的精神は結局漱石の中に、眞實に陛下の崩御を悼み奉る、美しい感情が動いてゐたといふ事を證明する以外の何ものでもあり得ないのである。事實漱石は、いくら賴んだ人が山田三良であつたからと言つて、何等かの形式でこの感情を公けにしなければゐられないやうな氣持になつてゐるのでなければ、まるで自分に關係のない『法學協會雜誌』のやうなものに、その代表者として、奉悼之辭などを書く事を引き受ける筈がない。換言すれば、それほど深く漱石は、明治天皇の「德を懷ひ」「恩を憶ひ」、崩御を悼むの情に堪へなかつたのである。「御かくれになつたあとから雞頭かな」も、漱石のこの無限の遺恨を表白する。

漱石は翌翌大正三年（一九一四）の『こゝろ』の中で、明治天皇の御病氣竝びに崩御といふ事件を、作中の重要な事件として用ひた。『兩親と私』の中では、大學を卒業して田舍の兩親の所へ歸省した「私」が、父と相談して卒業祝ひに客を呼ぶ事にしてゐたのを、明治天皇が御病氣だと

いふ報知が、新聞を通じて知れ渡つたので、「まあ御遠慮申した方が可からう」といふ父親の言葉で、無期延期されるのを始めとして、「ことに陛下の御病氣以後」じつと考へ込んでゐるやうに見えた父親が、毎日新聞の來るのを待ち受けて、自分が一番先きにそれを讀み、讀んでしまふとそれを「私」の所へ持つて行つて、「おい御覽、今日も天子樣の事が詳しく出てゐる」とか、「勿體ない話だが、天子さまの御病氣も、お父さんのとまあ似たものだらうな」だとか、「然し大丈夫だらう。おれの樣な下らないものでも、まだ斯うしてゐられる位だから」だのといふ所や、崩御の報知が傳へられた時、父親はその新聞を手にして、「あゝ、あゝ」と言ひ、「あゝ、あゝ、天子樣もとう／＼御かくれになる。己も……」と言つたきり、あとを言はなくなつた所や、「私」がまた東京へ向けて出發しようといふ間際になつて、急に湯殿でひつくり返つた父親が、その後小康を得て床についてゐるうちに、乃木大將の殉死が報ぜられ、その後どうかすると父親が「乃木大將に濟まない。實に面目次第がない。いへ私もすぐ御後から」などといふやうな囈語を云ふやうになる所が書かれるとともに、「先生と遺書」の中では、先生の經驗として、「すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな氣がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き殘つてゐるのは必竟時勢遲れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白（あから）さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合

ひませんでしたが、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯ひました。／私は殉死といふ言葉を殆んど忘れてゐました。平生使ふ必要のない字だから、記憶の底に沈んだ儘、腐れかけてゐたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思ひ出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新らしい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。／それから約一ケ月程經ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書齋に坐つて、相圖の號砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知の如く聞こえました。後で考へると、それが乃木大將の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は號外を手にして、思はず妻に殉死だ殉死だと云ひました。／私は新聞で乃木大將の死ぬ前に書き殘して行つたものを讀みました。西南戰爭の時敵に旗を奪られて以來、申し譯のために死なう〳〵と思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覺悟をしながら生きながらへて來た年月を勘定して見ました。西南戰爭は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう〳〵と思つて、死ぬ機會を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。」といふ事が書かれる。先生は、

それから二三日して、到頭自殺する決心をするのである。

勿論是は小說であつた。漱石自身が經驗した事實を、そのまま書いたものではなかつた。從つて是は漱石が、自分の小說の筋を發展させる必要上、空想でかういふ場面を作り上げたのだと言へば言へなくもないものである。それはその通りに違ひないとしても、然し是を貫ぬく感情は、――父親が毎日新聞を見て「天子樣の御病氣」を我事のやうに御案じ申し上げた事も、また「あゝ、あゝ、天子樣もとう／＼御かくれになる」と感じた事も、「乃木大將に濟まない」といふやうな氣持になつた事も、また先生が、明治の精神は「天皇に始まつて天皇に終つたやう」に思ひ、「最も強く明治の影響を受けた」自分たちが、陛下の「後に生き殘つてゐるのは必竟時勢遲れだといふ感じが烈しく」胸を打つたといふのも、乃木大將が「三十五年の間死なう／＼と思つて、死ぬ機會を待つてゐたらしい」心持に同情し、乃木大將のやうな人にとつて、「生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へ」たといふのも、――すべて漱石が現實に體驗した所のものだつたのに違ひないのである。その事は既に、漱石の手紙が證明してゐる。

勿論漱石は『こゝろ』の中の先生のやうに、それだからと言つて、自殺しはしなかつた。然し漱石の眼の前に、死は常にあつた。この死を乘り超えなければ、自分は結局どうする事も出來な

いのだといふ氣が、常に漱石に襲ひかかつた。のみならず漱石は、『こゝろ』の先生が言つたやうに、「自由と獨立と己れとに充ちた現代」に生きて、特にさういふ若い者に取り卷かれて、自分のやうなものは「時勢遲れだ」、自分のやうなものの出る幕ではなくなつたと、感じた事がないとは言へなかつた。「自由と獨立と己れとに充ちた」ヤンガー・ジェネレーションが、自分に追隨する事のない淋しさである。勿論漱石は、いつまでも自分を「時勢遲れだ」と感じ通しもしなかつた。その點で漱石の實際と作品とが相違を持つてゐる事は言ふまでもないが、然し漱石が、陛下の崩御と乃木大將の殉死とを機會に、自殺といふやうな問題を沁沁考へて見たのではないかといふ事も、決して想像され得ない事ではない。先生が「生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へ」たといふ事の奥には、先生が「生きてゐた三十五年」の方が遙に苦しいとして自殺を選む動機が指示されてゐるが、先生の惱みと本質的には同じ惱みを惱んでゐた漱石は、恐らく先生と同じやうに「刀を腹へ突き立てた一刹那」の苦しみに耐へた方が、苦しみの程度が輕いに違ひないとは感じながら、なほ生き續ける事を決心したのに違ひないのである。さうして『行人』を書き、『こころ』を書き、『道草』を書き、『明暗』を書いたのである。

然も明治天皇によつて象徴された明治が、天皇の崩御とともになくなつた事は、漱石にとつて、

なんとしても償ひ難き大きな空虚だつたのには違ひなかつた。

六五 『行人』

『彼岸過迄』を書いたあと、漱石は引き續き胃に酸が湧き且つ神經の昂ぶる事を覺えて、落つかなかつた。その爲め漱石は、書をかいたり、畫をかいたり、詩を作つたりして、過激な運動をする事なしに、自分の氣持を轉換し、自分の氣持を鎭靜させる事を計つた。言はば漱石は、自分の中の「執濃い油繪」のやうな性質を、「一筆がきの朝貌」の世界に遊ばせる事によつて、宥め、賺し、もしくは洗濯し、其所から徐徐に抜け出る事を試みるのである。然し漱石の中の「執濃い油繪」のやうな性質は、漱石が容易く其所から抜け出すべく、あまりに深い所に根を下ろしてゐた。のみならずこの性質は、漱石の人生把握を徹底的なもの精到なもの深刻なものにして、浮薄な曖昧な輕佻なものにしない根本の理由でもあつた。その長所を保存しつつ、其所から抜け出すといふ事は、漱石にとつて、容易ならざる難事業であつた。然し難事業でもなんでも、漱石はそれに取り掛らなければならなかつた。それを放置すれば、事實漱石は、須永が恐れてゐるやう

に、氣が狂ふかも知れないのである。須永は旅に出て、その飬えたぎつた頭を冷さうとする。漱石は、書をかいたり、畫をかいたり、詩を作つたりして、それに風を入れる。漱石はまた旅行をする。

〖人行〗

もつとも漱石の旅行は、須永のやうな、一人飄然として出かけて行く旅ではなかつた。この年の旅行は、必ずと言つて可いほど、中村是公と一緒であつた。然し是公から誘はれるままに、或は鎌倉に出かけ、或は鹽原から日光・輕井澤・上林・澁などへ出かけて行つたのも、漱石に旅に出て、自分の中の「執濃い油繪」のやうな性質から、暫くでも解放されたい要求があつたからである。是は言ふまでもない。然も漱石は、旅に出て、自分が愈病人で、到底一人前の活動の出來ない人間であるといふ事を、沁沁感じなければならなかつた。かうして漱石には、旅行の樂しみは、一先づ封じられた貌になつてしまつた。

大正元年(一九一二)八月二十六日漱石は輕井澤から鏡子に宛てて、「小生も別段の障りもなく身體は至極無事なれば御休神被下度候日光で馬にのり中禪寺に登り夫からすぐ引き返し候節は馬の動搖のため胃に酸出で瓦斯を釀し多少の苦痛あり少々心配致候も一日安眠の後は平生と異なる所なく便通の如きは却つて東京に居るよりも快く候」と書いてゐる。是は實際はもう少し具合が惡かつたのを、鏡子に安心させる爲に、わざとかういふ風に輕く書いたものかも知れない。それ

ともその後何かあつたものか、九月一日大谷繞石宛の手紙には、「小生去月中旬より旅行昨日漸く歸京御手紙を拜見致候實は金澤の方は全く知らぬ地ゆへいつか行つて見たく思ひ居候ひしも今度は信野兩州にて立ち歸り申候からだが惡いと人並の活動も出來かねつれにも心配をかけ甚だ腑甲斐なき事のみに候」とある。のみならず漱石は、去年の秋から持ち越しの痔瘻がちつとも治ほらないので、九月の末にはその手術を受け、一週間入院したが、然し退院してからも、暫くの間は床に就いてゐなければならなかつた。漱石は自分の身體を病氣の巢窟であるかの如くに考へ、ひどく心細く感じたものと見えて、十月十二日には橋口貢に宛てて、「追々菊もよろしく成候秋になるとまだ生きてゐたのを嬉しく思ひ申候沙市邊の景色も夢になりと遊覽致し度候」と書き、十一月九日皆川正禧に宛てては、「大病後どうしてもからだが丈夫にならないやゝともするとやりそこなふ是では長生は無論かうやつて生きてゐてもまあ癈人のやうなものである」と書いてゐる。是は勿論鹽原から上林・澁へかけて旅行して來た結果だけからいふのではなく、例へば寺田寅彦とフューザン會の繪を見に行つたあとで「胃がつゝぱつて弱り」其後「人間並に行動す〔る〕のがいやになり」「兩三日人間を辭職」したりした爲もあつたには違ひないが、然し自分の「ひゞが入つた」胃が絕えず自分に惹き起す苦痛の事を考へれば、日一日と心細い氣がするとともに、この問題を——死の問題を、どうにか片づけなければ立つてもゐてもゐられないやうな、落付かない

氣持になるのは、當然であつたと言つて可いであらう。そのうち段段約束の期限が迫つて、漱石は『行人』を書き始めるのである。

然し漱石は事實はなかなか『行人』を書き始めなかつた。十一月九日皆川正禧宛の手紙の中に、「此夏は信州から野州の方を旅行して歸つてから愚圖々々してゐるうちに又小說を書かなければならない譯になつてもうそろ〳〵書き出さなければならない。」とあるが、十二月一日中村蓊宛の手紙に、「拜啓毎々御手紙ありがたく候實は昨三十日夜漸く一回認め社へむけ發送致置候氣も乘らず自信もなく如何にも書きにくゝ候是が百回以上になるかと思ふと少々恐ろしく候小生の考では創作は天下の根氣仕事の一なるべくと存候／……／……／返す〳〵御心配のみかけ御氣の毒に候是と申すも小生の創作に對する興味やら考やら强ひて複雜なものを鮮やかにまとめんとする無駄骨折やさうして最後に來る面倒くさゝやらがかたまつたものと御勘辨願度候」とあり、追書に「今日もからは休み候樣子もし小生の爲めとならば實以て恐縮大兄に對しても社に對しても無申譯次第小生は如何なるまづきものをかいて世間の物笑ひとなつても筆を執らねばならぬ義理合と相成候御心安く御擱筆道體御加養是祈候」とあるやうに、やつと十一月三十日になつて第一回を送る事が出來たほど、是を書く漱石の氣は進まなかつたのである。

それには外にも理由があつた。それは言ふまでもなく、漱石の孤獨感である。大正元年（一九

一二)十月十二日、漱石が『行人』を書き出す凡そ二た月前、漱石は阿部次郎に宛てて、「拜復葉書をありがたう「門」が出たときから今日迄誰も何もいつて呉れるものは一人もありませんでした。私は近頃孤獨といふ事に慣れて藝術上の同情を受けないでもどうか斯うか暮らして行けるやうになりました。從つて自分の作物に對して賞贊の聲などは全く豫期して居ません。然し「門」の一部分が貴方に讀まれてさうして貴方を動かしたといふ事を貴方の口から聞くと嬉しい滿足が湧いて出ます。私は此滿足に對して貴方に感謝しなければ義理が惡いと思ひます。私は私が喜んであなたのアプリシエーションを受けた事を明言する爲に此手紙を書きます。/「彼岸過迄」はまだ二三部殘つてゐます。もし讀んで下さるなら一部小包で送つて上げます。夫とも忙しくて夫所でなければ差控ます。」「門」同樣の鑒賞を强ひる故意どらしき行爲を避けるためわざと伺ふのです。」と書いてゐる。同じ年の十二月四日、卽ち『行人』を書き出してから五日目に、漱石が津田青楓に宛てた手紙の中には、「私も趣味はあると自信してゐる結果人も是非自分に一致したければ不都合だと思ふ事がありま[す]然し十人十色だから社會の色彩が豐富なのでせうとも思ひます。/此間あなたの知らない人が來てあなたと齋藤與里君とを並べてあれで氣が合ふだらうかと聞きましたから私は其人にとても合ふまいと答へました。其終りに藝術家といふものは孤獨なものだと云つて聞かせま

した。藝術家が孤獨に安んぜられる程の度胸があつたら定めて愉快だらうと思ひますあなたはさう思ひませんか。／私の小説を讀んで下さるのは難有いどうか愛想を盡かさずに讀んで下さい。私は孤獨に安んじたい。然し一人でも味方のある方がまだ愉快です。人間がまだ夫程純乎たる藝術〔家〕氣質になれないからでせう。」とある。同じ年の十二月二十六日沼波武夫宛の手紙の中には、「大兄は自己を孤立と仰せられ候が孤立の意味はよく承知致居候小生もあなたに劣らぬ孤立ものに候」とある。大正二年（一九一三）三月二十二日戸川秋骨宛の手紙の中には、「小説御讀み下さる丈にても難有き仕合せことに今回はことの外の御賞美にあづかり嬉しき限に候近來は自分の書いたものを朝新聞で讀んで自分で滿足か不滿足を感ずる丈にて天下に味方は一人もなき心持に候へどもつゞまり相つかず不得已毎朝筆を運び居候次第御ほめにて恐縮致候」とある。

勿論漱石は、自分が自分を卑しくし、媚を他人に呈しさへすれば、自分の周圍は忽にして賑やかになる事を知つてゐた。然し「虚に乘じて君の同情を貪ぼるやうな我儘を起して今度の作物の上にも「門」同樣の鑒賞を強ひる故意とらしき行爲を避けるため」わざと『彼岸過迄』を送る事を差し控へ、まづそれを讀むか讀まないかを訊いて見るほど、その方面では潔癖であつた漱石は、假令「天下に味方は一人もなき心持」で淋しくて堪らなくても、他人から自發的に積極的に働きかけて來るのでない限り、自分の孤獨は自分一人で始末して、決して他人を賴みとはしまいと、

はつきり覺悟してゐるのである。まして自分の身を落してまでも他人に求めようとするなどといふ事を、漱石は男子として潔しとしなかつた。然しそれだけ漱石の孤獨は一層孤獨にならざるを得なかつた。『行人』の一郎は、妻に愛想をつかし、弟に愛想をつかし、父や母に愛想をつかし、わが手わが足さへも自分の思ひ通りにならない淋しさに、宗教か死か狂氣か、自分の落ちて行く先は、この三つのものしかないといふ、ぎりぎりの所にまで追ひつめられる。漱石はこの孤獨を突き拔ける爲に『行人』を書いたのだと言つても可いのである。

もつともこの種の題材は、漱石自身言つてゐるやうに、「强ひて複雜なものを鮮やかにまとめ」ようとする仕事であつた。殊にこの種の題材は、作者に多少でも己惚や氣の弱さや勝手が働くと、主觀的になり感傷的になり、客觀的に形象化される事がなくなり、從つて人に迫る力を喪失する。緊張した氣魄と冷徹な反省とがなければ、全然不可能の仕事である。それだけ漱石の病弱な肉體にとつては負擔が重すぎたと見えて、漱石は『行人』を書いて、まだすつかり完結しないうちに、又しても潰瘍の爲に倒れてしまつた。

漱石は初め『歸つてから』を書いて、それで『行人』全體の幕を閉ぢる氣でゐたらしく、大正二年(一九一三)二月二十六日山本松之助に宛てて、「小生小說「歸つてから」と申す分濟み次第あとのを掲載せねばならず候」と言つて、そのあとに掲載する小說に就いての相談を始めてゐる。

二月二十六日は丁度『歸つてから』の第一回が新聞に揭載された日である。當時漱石は恐らくあと三十回、三月一杯くらゐで、自分の書かうと考へてゐる事が、書き悉せるものだと思つてゐたに違ひない。三月二十二日、漱石のあとに小說を書く事になつた、中勘助宛の手紙に、「小生の小說中々濟まず自分も困り大兄にも御氣の毒に候或は來月へ出るやも計りがたく候。」とある所を見ても、漱石が、四月に少しかかる位で、自分の小說は兎も角完結させる事が出來ると思つてゐた事は確實である。然るに事實は漱石は、その三月ももつと押し詰つてから潰瘍で倒れ、暫く床に就いた上で、四月二日に起き上がつて續きを一回分書き、更にその翌日も一回書いたが、そのあとで再びどつと倒れ、到頭五月の半ばごろまでは、手紙一本書けないやうな狀態に置かれてしまふのである。その四月二日漱石は山本松之助に宛てて、「拜啓まだ原稿を書くと頭がふら〳〵し。立つと足がふら〳〵し。胸も時々痛みますが。今日ためしに一回かきました。是があとずつとつゞくとよう御座いますがあとが危險ですからあなたの方の都合の出來るまで少し溜めて置いて出す譯には參りますまいか。まだ流動物で俊寬の如く存在致居候」と書き、その翌日は「啓上今日も一回書き候間御送申候此分にては終局までつゞけて書け可申候無御遠慮御連載願候　匆々」と書いてゐる。その後いつまで書き續けられたかは分からない。然し『歸つてから』は第三十八回の四月七日で一時中絕され、そのあとに中勘助の『銀の匙』が連載される事になつた。漱石が病

床から起き上つて、初めて外出したのは、五月二十八日麹町の富士見軒で催された、池邊三山の追悼會である。五月三十日漱石は森成麟造に宛てて、「森成さんあなたが手紙をくれた時は私はうん／＼云つて寐てゐました夫で返事も何も上げませんでした昨今漸く人間らしい氣分になりましたから御返事を致します病名は例によつて例の如くです、見事な血便が出ました丸で履墨の如く鮮なものでした。けれども今度も亦癒りました。御醫者は須賀さん丈でした。」と書いてゐる。

漱石は起き上がりはしたものの、なほ用心しなければならなかつた。のみならず死の問題は、いよいよ濃厚に漱石の頭の中に暗い影を落し出した。前年の十一月九日には、漱石は「是では長生は無論かうやつて生きてゐてもまあ癈人のやうなものである。」と言つてゐた。然るにこの五月三十日には、漱石は松山忠二郎に宛てて、「軸物の御注文にはちと辟易致候實以ての悪筆折角頼まれゝば耻曝しを覺悟の上にて依頼者の芳志を空うせざるをつとむる丈の事に候若し御入用とあれば何枚にても書き可申候然し御承知の通りの病軀いつ死ぬか分らぬ故全くの處記念と覺召被下度候／だから若し生きて居れば今にうまくなつた時書き直さうといふ山氣あり從つて表装は御無用に候」と書いてゐる。「長生」が出來ない所ではない、また「癈人」どころではない、自分は「いつ死ぬか分ら」なくなつたのである。漱石の心持は次第に暗くならざるを得なかつた。六月二日森圓月宛の手紙に、漱石は「却說病氣の方は御蔭を以て又々人間世界に暫時立ち還る事と

相成候先づ尋常人に近き行動をとる事を心掛居候間乍憚御安心被下度候」と書いてゐる。六月十日高濱虚子宛の手紙には、「ホト、ギスは漸次御發展の由是亦恭賀小生も何か差上度所存丈はとうから有之候へども身體やら心やら其他色々の事情のためつい故人に疎遠に相成るやうの傾甚だ無申譯候四十を越し候と人間も碌な事には出合はずたゞ斯うしたいと思ふのみにて何事もさう出來し事無之耄碌の境地も眼前に相見え情なく候」とある。六月十八日勝又和三郎宛の手紙には、「私の病症は先年と同じく潰瘍です血が澤山下りました。生きてゐますがいつ死ぬか分らないと思つてゐます。」とある。八月七日大谷繞石宛の手紙には、「小生もどうかかうか露命をつなぎ居候」とある。八月二十九日野村傳四宛の手紙には、「私も變りはない病後の身體もどうかかうか一先づ落付いた〔か〕らもう少しは生きられさうです。」とある。

漱石は病後、一つにはかういふ暗い心持から逃がれ出る爲、また一つには病後の自分の身體をいたはる必要もあつて、多くは家に籠つて、書をかき畫をかいて、その日その日を暮した。是は、大正二年五月三十日漱石が林原耕三に宛てて、「實は少々畫に凝つて他事を閑却遂に失敬尤も碌な畫はかゝず只凝る丈也」と書いてゐるのを初めとして、六月十一日津田青楓宛の手紙の中の、「私はもう畫を切り上げやう〳〵と思ひながらま〔だ〕書いてゐます今度來たら又見て忠告をして下さい此間色々いつて貰つたので大變利益を得ました。といふと畫がかけるやうで可笑しいです

が、近頃は中々かけますよ三日に一つ位傑作を拵えては一人で眺めてゐます、水彩畫展覽會の方も見ました。小杉未醒のスケツチが面白う御座いました。どの畫を見ても下手な自分と比較すると偉大ですどうして日本にこんな奇麗な畫をかく人が澤山あるかと驚きます」といひ、七月二日同じ津田青楓宛の手紙の中の、「畫は二三日前からやめました。あまりすさむと外の事が出來ないと思つて紙の盡きたのを好機として切り上ました。其後かいた傑作は今度御歸になつたら見て下さい。どうも鼻もちのならない自畫像があります。」といふ時期を經て、七月二十日同じく津田青楓宛の手紙の中の、「油繪の繪具を買ふ事が出來ます。いつか一所に行つて買つて下さいませんか。油繪をかいて見やうといふ心持はまだ起らないのですから決して急ぐ必要はないのですからあなたのいつでも氣の向いた時で結構であります。」といひ、七月二十六日同じく津田青楓宛の手紙の中の、「此間の撫子は大に手を加へ候夫から紫陽花を一枚描き候今日も何かと思ひ候へども何うも描く材料なく御やめに致候」といひ、七月三十日鈴木三重吉宛の手紙の中の、「小生の油繪は例によつて物〻騷〻たる有樣に御座候」といひ、九月二日津田青楓宛の手紙の中の、「今日の朝日新聞の文藝と云ふ六號活字に夏目漱石氏津田青楓氏について油畫を研究中だ、同氏は青い色が大變すきで如何なる惡緣か畫を描かずにはゐられないさうだとありました、此惡緣をつくつたものはあなたでせうか私でせうか、此間社のものが來たから油畫を見せてやりました　それでこ

んな事をかいたものでせう　俗人だから下手なのに得意で見せるとでも早合點したのでせう」といひ、九月十五日寺田寅彦宛の手紙の中の、「畫は一寸中絶に候其後の傑作もいかものばかりに候行人を書き上げてから又描かうかと存候」といふのがあつて、『行人』は九月十五日の新聞に『行人續稿について』が發表され、翌十六日から『塵勞』の第一が掲載され始める。

　さうは言つても漱石は、事實は書をかき畫をかく事を、中止してしまひはしなかつた。『行人』を書いて行く合間隙間に、漱石はやはり以前のやうに、畫をかいたり、畫を見てあるいたりした。十月三日松根東洋城宛の手紙の中には、東洋城を通じて漱石に書を懇望して來た人の所へ、漱石が書をかいて送つたといふ事が書いてある　十月九日村上霽月宛の手紙には、橋口五葉からもらつた北京の紙といふのに、氣紛れに墨竹を三枚かいたから、一枚を津田青楓に、一枚を湯淺廉孫に、一枚を霽月に送る旨が書いてある。十一月二十五日相生由太郎宛の手紙には、三越から屆いた絖六枚に「分らぬものをのたくらせ」た旨の通知がある。十一月十五日『塵勞』が五十二回をもつて完結を告げたあと、漱石が更に熱心に畫に凝り出したのは、言ふまでもない、漱石が油繪をかいた時期こそ短かかつたが、水彩繪具を使つてかく漱石の南畫風は、かうして漱石にとつて、なくてはならない、一つの表現機關となるのである。同時にそれは、漱石の人生觀・藝術觀の上に、特殊な影響を與へるものになるのである。

漱石は十一月三十日門間春雄に宛てて、「拜復あなたの覺えてゐる畫はまだありますがあれは上げられません。下手なひどい畫ですから。長塚がはゝゝと笑つた意味はまづいものをよく臆面もなく懸けて置くといふ意味からです。私はたゞあの趣丈が好なのです。それで記念のためまだ仕舞つてあります。畫が御望みならひまな時に何かかいて上げますが私のは畫といふよりも寧ろ子供のいたづら見たやうなものです。その小供の無慾さと天眞が出れば甚だうれしいのですがたゞ小ぎたない所丈が小供で厭味は大人らしいから困ります。書でも畫でもかきたれないと一通りのものは出來ず。又書きなれると黑人くさくなつて厭なものです。從つてどうして好いか解りません　正岡の書の批評をした事はもう忘れてゐました。あなたの手紙を見ても思ひ出せません。人に書をやると正岡の事どころではありません自分の品位のあやしいので恐縮する丈です此間人に自分の書を見せたら顏眞卿の肉筆の玻璃板と比べて見て丸で比較にならん程顏眞卿は尊く見えるといひました」と書いてゐる。十二月八日津田青楓に宛てて、「今日上野の美術協會にある平泉書屋古書畫展覽會といふのを見に行きました夥しい點數です大變面白い私は文展よりもどの位面白かつたか分らないあなたも是非入らつしやい必ず參考になります、中には畫は面白くても贋物らしいのが隨分あります中には本當かも知れないがちつとも難有ないのも澤山ありますもらつても掃溜へ棄てたいのさへ交つてゐます然し好きなものになると堪らないのです。買はうとすれば

買へるのだがとても寄りつけまいと思つて聞いても見ませんでした、私は生涯に一枚でいゝから人が見て難有い心持のする繪を描いて見たい山水でも動物でも花鳥でも構はない只崇高で難有い氣持のする奴をかいて死にたいと思ひます文展に出る日本畫のやうなものはかけてもかきたくはありません。」と書いてゐる。十二月十二日漱石が第一高等學校で講演した『模倣と獨立』も、同じやうな主意を敷衍したものである。漱石は特に好んで南畫風をかき、南畫風を見、その世界の中に自分の頭を浸けるとともに、その世界の美しさを認識し、それを自分自身の生活の上にも、自分自身の藝術の上にも、滿遍なく光被させたいと切望する。『塵勞』で一郎が庶幾する世界も亦、この世界であるのに外ならなかつた。

大正二年(一九一三)六月三日漱石は厨川白村に宛てて、「行人御高覽にあづかり感謝あとは單行本につけるか新聞に載せるか未定に候大して長くなければ新聞に出すまでもなくと存候」と書いてゐる。自分が書きさしたまま中絶の姿になつた『行人』の事である。漱石がその先きをどうしようかと、考へずにゐる筈もなかつたが、然し當時はまだやつと床を離れて、方方に見舞の禮狀を書かうといふ元氣が出た計りの時である。小說の續きなど到底考へる氣にならず、從つて漱石はそれが長くなるものやら短くてすむものやら、見當もつかなかつたのだらうと思ふ。そのうち漱石は段段に『行人』の結末に就いて、工夫を凝し始めた。六月十一日に漱石が津田靑楓に與

へて、「私はもう書を切り上げやう〳〵と思ひながらま〔だ〕書いてゐます」と言つてゐるのは、漱石が自分の頭の方向を轉換して、『行人』の先きを考へなければならないとは思ひながら、まだそれが思ふやうに行かない事を物語つてゐるものであり、七月二日同じ津田青楓に與へて、「書は二三日前からやめました。あまりすさむと外の事が出來ないと思つて紙の盡きたのを好機として切り上ました。」と言つてゐるのは、漱石がいよいよその方向轉換を實行に移し始めた事を意味するものに相違ない。然るにその『行人』の先きを考へ續ける段になつて、漱石はそれを書くに必要な、自分の心持が、まだ十分熟しきつてゐない事に氣がつくのである。『行人』を『歸つてから』だけで打ち切るとすると、『行人』は、主人公の一郎が、自分の妻に愛想をつかし、自分の弟に愛想をつかし、自分の父母に愛想をつかし、理解されない淋しさの中にいらいらして生きてゐるといふ事實は分かつても、それが一郎のどういふ要求がどう滿たされる事がないからさうなのであるか、讀者に十分に通じない處がある。その爲には、作者は、一郎の内部に立ち入つて、時計の内部構造を示しでもするやうに、其所に動いてゐる機構を、整然と、讀者の眼の前に列べて見せる必要があつた。然も作者がそれを實行し、一郎が自分を取り卷くすべての人間に愛想をつかす理由を明白にし、人人の十分な同感を得る爲には、作者自身が一郎から離れ、一郎の要求が正しいか正しくないかを批判し、同時に一郎はどうすればその淋しさから脱却する事が出來るか

といふ、言はば一郎の救濟の見込を示唆し得るほどの、高い立場に身を置く必要があつた。その爲には、言ふまでもなく作者は先づ、自分自身の問題として、死の問題を考へ通し、自分の性質を考へ通し、どうすれば自分は自分の孤獨から突き拔ける事が出來るかといふ事を、精到に深切に檢討して見る必要があつた。

七月十八日漱石は中村蓊に宛てて、「拜復／からについての御手紙拜見致候實は先達より何人にも沒交渉にてしかも小生には大いに必要な事のために頭を使ひ居り夫がため人のためには一切何事をなすの勇氣も餘裕も無之「から」の事も存じながらつい其儘に相成居候。行人の原稿などは人の事にあらず自分の義務としてもまづ第一に何とか片付べきを矢張まだ書き終らざるにてもしか御承知願上候勿論社會とも家族とも誰とも直接には關係なき事柄故他人から見れば馬鹿もしくは氣狂に候へども小生の生活には是非共必要に候。それに何とか區切をつけぬうちは中々カラ處の騷でなく全く不人情な話ながらカラ抔はどうでもよく(小生には)相成居候。貴兄よりは怪しからぬ次第なれど小生には當然の事と覺召し被下度候／……小生は元來不親切な人間に無之候へども目下は人に親切を盡してゐられぬ位自分が大切に御座候其意味は大兄には通じ申す間敷候へども大兄をしばらく小生と客觀視して想像せば人の事どころではないといふ場合のある事も多少思ひ當る御記憶も想像も出來可申候。時機參り候節はカラを忘れる小生に無之又君を忘れる小生

にあらざる事は君の小生を忘れざると同じ事に候。」と書いてゐる。是は中村蓊が、自分の『殼』の出版の周旋を漱石に頼み、その結果がどうなつたかに就いて氣を揉み、頻に催促してよこした手紙に對する返事である。勿論この「社會とも家族とも誰とも直接には關係」のない、然し漱石の「生活には是非共必要」な事が何であつたかは、此所に具體的な説明がないから、精確な所は分からない。然し『行人』の一郎が『塵勞』で體驗した事、卽ち「一擊にして所知を亡ふ」と言つた香嚴の世界に憧がれ、生死の難關を突破して絕對の境地に這入りたいと焦りながら、其所にどうしても到達する事の出來ない惱みを考へ併せて見るならば、當時漱石が自分の「生活には是非共必要」な事と言つたものが何であるかは、凡そ想像する事が出來るだらうと思ふ。勿論是が十日や二十日の思索で片づく問題であるとは、旣に漱石自身が考へてゐなかつたのに違ひない。然し、自分の現在の狀態に滿足する事が出來ず、その爲め居ても立つてもゐられない心持にされてゐる者にとつて、自分の一切を擧げて思索と反省とに集中すれば、自分が凡そどういふ方向にどう進んで行けば、自分の目下の境遇から拔け出る事が出來るかといふ、相當具體的な方針が立ち、それによつて、ともかく自分の生活に一往の段落をつける事は出來た筈である。事實また一往の段落がついたからこそ漱石は、七月二十日津田青楓に答へて油繪の繪具を買つても可いと言つたものに違ひないし、八月七日大谷繞石宛の手紙に、「是から行人の續稿をかき夫にて此夏を終

るべく候」とあるやうに、『行人』の續稿を書き繼ぐ氣にもなつたに違ひないのである。

然し漱石は、前にも言つたやうに、なかなか『行人』續稿に筆をつけなかつた。八月二十九日野村傳四宛の手紙には、「新聞はなまけてゐます。追つけ行人のつゞき「を」書いてしまつて夫から新しいものでも書く事になるでせう。」とある。是は漱石が、新しく買つた繪具で油繪をかく事に凝り出した爲ででもあるが、それよりももつと根本的な事は、一往の段落がついた筈の自分の生活の方針が、その後なほ頻にぐらついて、漱石に安んじて筆をとる氣持を與へなかつたせゐだらうと思ふ。漱石は九月一日沼波武夫に宛てて、「啓始めて確信し得た全實在は頂戴した其日に讀みました私は何より先にあなたの意氣とあなたの心持とに感服致しました近頃は小説も評論もいくらでも出ます然しあゝいふ方面の事はだれも考へてゐません、所があゝいふ方面の事は窮所迄行くと是非共必要になつて來ます　人の事ではないみんな自分の頭の上の事です　私はあゝいふ意味の事で切實な必要を感じつゝいまだ未程の地に迷つてゐます　どうかしなくてはならないがどうもなりません　平生斯うだと思ひ詰めた事もいざとなるとがらりと顚覆します、全く定力が足りないからだと思ひます」と書いてゐるが、漱石は「平生斯うだと思ひ詰めた事もいざとなるとがらりと顚覆し」、自分の「定力が足りない」事を痛切に感じなければならないやうな氣がするので、『行人』續稿に手をつけたくても、到底手をつける事が出來ないのである。然し漱石は十月

五日和辻哲郎に宛てて、「私は進んで人になついたり又人をなつけたりする性の人間ではないやうです。若い時はそんな擧動も敢てしたかも知れませんが今は殆んどありません、好きな人があつてもこちらから求めて出るやうな事は全くありません、內田といふ男が來て先生は枯淡だと云ひました。然し今の私だつて冷淡な人間ではありません。あなたに冷淡に見えたのはあなたが私の方に積極的に進んで來なかつたからであります。／私が高等學校にゐた時分は世間全體が癪に障つてたまりませんでした。その爲にからだを滅茶苦茶に破壞して仕舞ひました。だれからも好かれて貰ひたく思ひませんでした。私は高等學校で敎へてゐる間たゞの一時間も學生から敬愛を受けて然るべき敎師の態度を有つてゐたといふ自覺はありませんでした。從つてあなたのやうな人が校內にゐやうとは何うしても思へなかつたのです。けれどもあなたのいふ樣に冷淡な人間では決してなかつたのです。冷淡な人間なら、あゝ肝癪は起しません。／私は今道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません、冷淡で道に入れるものはありません。／私はあなたを惡んではゐませんでした、然しあなたを好いてもゐませんでした。然しあなたが私を好いてゐると自白されると同時に私もあなたを好くやうになりました。是は頭の論理で同時にハートの論理であります。御世辭ではありません事實です。だから其事實丈で滿足して下さい。」と書いた。この手紙は、九月一日沼波武夫宛の手紙と呼應

して、漱石の當時の心持の動きを明白に指示する。然も漱石は此所で、自分が「道に入らうと心掛けてゐ」る事を、初めて公言してゐるのである。人がさういふ事を正直に他人に公言し得る爲には、その人の中に相當堅固な、その方面へ向ふ覺悟が出來てゐる事を預件とする。然もその堅固な覺悟の確立こそ、漱石が『行人』續稿を書き始め、且つ書き終るに、なくてはならない、唯一の動力だつたのに外ならなかつた。

漱石は十一月三十日門間春雄宛の手紙で、「小供の無慾さと天眞」とが自分の畫に出れば可いと思ふのに、「小ぎたない所丈が小供で厭味は大人らしい」のだから不愉快である、一體「書でも畫でもかきなれないと一通りのものは出來ず。又書きなれると黒人くさくなつて厭なもので」ある、「從つてどうして好いか解」らない、途方にくれる計りであると言つてゐるが、それでも「生涯に一枚でいゝから人が見て難有い心持のする繪を描いて見たい山水でも動物でも花鳥でも構はない只崇高で難有い氣持のする奴をかいて死にたい」(十二月八日津田青楓宛)と希望し、その方向に向つて精進した。然しそれは漱石の畫に於ける念願のみではなかつた。さういふ畫がかける爲には、人は無慾と天眞との塊りにならなければならない。同時に畫の上にそれが表現されるやうに、藝術家としての自分の技巧を、自分の人間に隷屬させなければならない。この事は從つて藝術家としての精進を必要とするとともに、人間としての精進を必要とする。漱石は、自分自身の

中からあらゆる慾と邪氣と厭味とを捨て去つて、眞に「崇高で難有い氣持のする」人間になり得る爲に、「道に入らうと心掛け」るのである。是は言ふまでもなく、『行人』の一郎の願ひであつた。同時に是は漱石の所謂「則天去私」の道であつた。

漱石は『行人』の『歸つてから』までの間では、言はば、一郎の中に這入り、一郎とともに惱み、一郎とともに喘ぎ、一郎とともに求め、一郎とともに憤つた。然し『塵勞』では漱石は、一郎の中に這入るとともに、一郎の外に出て、Hさんの立場から一郎を眺め、一郎の何所を何うすれば、一郎をその苦惱から救ふ事が出來るかを考へた。Hさんは、「私は天下にありとあらゆる藝術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ盡して、少しの研究的態度も萠し得ない程なものを、兄さんに與へたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間斷なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、必竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。だから絕對に物から所有される事、卽ち絕對に物を所有する事になるのだらうと思ひます。神を信じない兄さんは、其處に至つて始めて世の中に落付けるのでせう。」と書いてゐる。漱石は自然に親む事によつて、また書をかき畫をかき、いい書を見、いい畫を見る事によつて、少くとも一時的にでも、「一擊に所知を亡ふ」と言つたやうな世界を把握する事が出來てゐるのである。それがHさんの口から、一郎の心を落ちつかせる一

つの方法として、二郎の前に開陳される。同時にHさんは、「兄さんは鋭敏な人です。美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎて、つまり自分を苦しめに生れて來たやうな結果に陷つてゐます。兄さんには甲でも乙でも構はないといふ鈍な所がありません。必ず甲か乙かの何方かでなくては承知出來ないのです。しかも其甲なら甲の形なり程度なり色合なりが、ぴたりと兄さんの思ふ坪に嵌らなければ肯がはないのです。兄さんは自分が鋭敏な丈に、自分の斯うと思つた針金の樣に際どい線の上を渡つて生活の步を進めて行きます。其代り相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで來て吳れなければ我慢しないのです。然し是が兄さんの我儘から來ると思ふと間違ひです。兄さんの豫期通りに兄さんに向つて働き懸ける世の中を想像して見ると、それは今の世の中より遙に進んだものでなければなりません。從つて兄さんは美的にも智的にも乃至倫理的にも自分程進んでゐない世の中を忌むのです。だから唯の我儘とは違ふでせう。」と言つて、一郎の他人に對する要求が、少しも無理でない事を理解しながらも、その要求がとりもなほさず一郎を苦しめる所以のものである事を指摘し、從つて一郎を苦惱から救ひ出す爲には、結局一郎をしてその要求を撤回せしめるより仕方がないと考へる。然も一方ではHさんは、さういふ事が「人間として出來得る仕事で」あるかどうかを疑はなければゐられないのである。さうしてHさんは、結局一郎は宗敎に赴くより外に道はないと結論する。

然し一郎は、漱石と同じやうに、抽象的な、空漠とした神を信じる事が出來なかつた。從つて一郎はHさんに向かつて、「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」・「車夫でも、立ん坊でも、泥棒でも、僕が難有いと思ふ刹那の顔、即ち神ぢやないか。山でも川でも海でも、僕が崇高だと感ずる瞬間の自然、取りも直さず神ぢやないか。其外に何んな神がある」と言ふ。已むを得ずHさんは、一郎が「お貞さんを宅中で一番慾の寡ない善良な人間だ」と言ひ、「あゝ云ふのが幸福に生れて來た人間」で「自分もあゝなりたい」と言つた言葉を賴りに、「君は其お貞さんとかいふ人と、斯うして一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」と質問する。然し一郎は、「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位惡くしたか分らない。自分が惡くした妻から、幸福を求めるのは押が强過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天眞を損はれた女からは要求出來るものぢやないよ」と答へる。

　此所で漱石が、自分の生活が他人に要求する所が多ければ多いほど、心の落つきは得られないといふ立場から、一郎を批評してゐる事は、明白であつた。一郎に最も缺けてゐるものは、無慾である。また必ず「考へ」なければゐられないといふ意味では、一郎には天眞が缺けてゐたとも言へるかも知れない。一郎もその事に氣が付いてゐる。それだから一郎は、自分がお直に對して持つた要求が過大でありすぎた事を反省し、「自分が惡くした妻から、幸福を求めるのは押が强過

ぎる」事を認め、更に新たな立場からお直に對しようとする心構へが出來てゐる事を、表白するのである。――「慾の寡ない善良な人間」とは、畢竟自分を平凡尋常な人間であると、しつかり認識してゐる人間を指すものに外ならない。他人に對して過大な要求を持たず、よし持つてもそれから超越し、「平凡尋常な人間」として、常に感謝の心を忘れる事なしに、生きたいといふ事は、既に漱石が修善寺の大患以來、『思ひ出す事など』でも『彼岸過迄』でも、直接・間接に表白して來た所であつた。然しそれが實生活の上では、漱石の思ふやうに、實行に移される事がなかつた。漱石の中では、依然として私が蔓り、我が首を擡げ、『行人』の中の一郎のやうに、どうしても自分の方が正しくて、他人は間違つてゐるといふ、是非の念を拋棄する事が出來なかつた。漱石は此所で、その問題を、ぎりぎり押し詰める。さうして自分の中の「要求」と「慾」とを思ふさま跋扈させつつ、自分の中の非凡と自分の中の平凡とを嚙み合はさせ、最後に到つてそれらのものを爆破させてしまはうとするのである。

六六　夫婦の問題

漱石は是までの小說で男女間の戀愛を數多く取り扱つて來てゐる。然し夫婦關係を前景に押し出し、それを主題として全篇を構成してゐるものは、割合に數が少ない。『猫』には苦沙彌夫婦の生活がある程度書かれてゐるが、是は多くの場合、刷毛ついでに一刷毛なすつて行つたやうな書き方であつた。『野分』には所天の仕事に全然理解を持たない妻君が描き出される。然し此所で力點の置かれてゐるのは所天である。妻君は言はば「所天を理解しない妻君」の型として描かれ、所天は妻君の無理解なぞには御構ひなく、超然として自分のしたい事をして行く。その點で『門』は、夫婦關係を主題とする唯一のもののやうにも見えるが、然し是も、社會の片隅に追ひやられた二人が、荒い、寒い外の風を、互ひに抱き合つて堪へて行くといふ事の方に力點があつて、『行人』とは全然その趣きを異にする。その點で『行人』は、漱石の作品の歷史から言つて、破天荒の作品である。漱石は此所で、嘗て『猫』の中や『野分』の中で、寧ろ祕かに觸れて來た

問題を、主題として取り上げ、それとまともに格鬪し、格鬪の結果を我我に報告しようとするのである。此所には漱石の是までの夫婦觀の總決算があるのだと言つて可い。

『猫』第十一の中で迷亭が、「親類はとくに離れ、親子は今日に離れて、やつと我慢してゐる様なものの個性の發展と、發展につれて此に對する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくては樂が出來ない。然し親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない譯だから、最後の方案として夫婦が分れる事になる。今の人の考では一所に居るから夫婦だと思つてる。夫が大きな了見違ひさ。一所に居る爲めには一所に居るに充分なる丈個性が合はなければならないだらう。昔しなら文句はないさ、異體同心とか云つて、目には夫婦二人に見えるが、內實は一人前なんだからね。夫だから偕老同穴とか號して、死んでも一つ穴の狸に化ける。野蠻なものさ。今はさうは行かないやね。夫は飽迄も夫で妻はどうしたつて妻だからね。其妻が女學校で行燈袴を穿いて牢乎たる個性を鍛え上げて、束髪姿で乘り込んでくるんだから、とても夫の思ふ通りになる譯がない。又夫の思ひ通りになる様な妻なら妻ぢやない人形だからね。賢夫人になればなる程個性は凄い程發達する。發達すればする程夫と合はなくなる。合はなければ自然の勢夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晚迄夫と衝突して居る。まことに結構な事だが、賢妻を迎へれば迎へる程雙方共苦しみの程度が增してくる。水と油の様に夫婦の間には截然たるしきりがあつ

て、それも落ちついて、しきりが水平線を保つて居ればまだしもだが、水と油が雙方から働らきかけるものだから家のなかは大地震の様に上つたり下がつたりする。是に於て夫婦雜居は御互の損だと云ふ事が次第に人間に分つてくる。……」といふやうな事を言つて、今のやうな文明の趨勢だと、夫婦は別居しなければ納まらないやうになると論じてゐる。同じ『猫』第十一の中で、苦沙彌がトマス・ナッシの本を持ち出して、其所に書いてある「古來の賢哲が女性觀」といふのを、人人に讀んで聞かせる。——「アリストートル曰く女はどうせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災少なし」・「或人問ふ、如何なるか是最大奇蹟。賢者答へて曰く、貞婦」・「或人問ふ、妻を娶る何れの時に於てすべきか。ダイオジニス答へて曰く青年は未だし、老年は既に遲し。」・「ピサゴラス曰く天下に三の恐るべきものあり曰く火、曰く水、曰く女」・「ソクラチスは婦女子を御するは人間の最大難事と云へり。デモスセニス曰く人若し其敵を苦しめんとせば、わが女を敵に與ふるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜となく彼を困憊起つ能はざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無學を以て世界に於る二大厄とし、マーカス、オーレリアスは女子は制御し難き點に於て船舶に似たりと云ひ、プロータスは女子が綺羅を飾るの性癖を以て其天禀の醜を蔽ふの陋策に本づくものとせり。ヴレリアス嘗て書を其友某におくつて告げて曰く天下に何事も

女子の忍んで爲し得ざるものあらず。願はくは皇天憐を垂れて、君をして彼等の術中に陷らしむるなかれと。彼又曰く女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや、避くべからざる苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の誘惑にあらずや、蜜に似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の呵責と云はざる可からず。」——勿論漱石の全部がかういふ婦人觀や結婚觀を懷いてゐたのでない事は、確實である。然し漱石の一部に、是と響きを合せるものがあつた事は、爭はれない。現に明治四十年(一九〇七)七月二十三日漱石は野間眞綱に宛てて、「夫婦は親しきを以て原則とし親しからざるを以て常態とす。君の夫婦が親しければ原則に叶ふ親しからざれば常態に合すいづれにしても外聞はわるい事にあらず／……／細君は始めが大事也。氣をつけて御し玉へ。女程いやなものはなし。」と言つてゐる。

勿論かういふ考へ方が、『行人』を書くまで、そのままの形で、漱石の頭の中に動いてゐたかどうかは、疑問であつた。少くとも漱石は『三四郎』ででも『それから』ででも『門』ででも『彼岸過迄』ででも、全然違つた方面から、女を取り扱つてゐる。殊に『彼岸過迄』に至つては、男の醜さと女の美しさとを對照的に取り扱つて、「恐れない女と恐れる男」といふ言葉を作つてさへもゐる。從つて漱石當時の女性觀もしくは夫婦觀は、明治四十年(一九〇七)の『虞美人草』前後とは、隨分變つて來てゐると考へる方が、遙に正しいらしくも思はれる。然しその根本に於い

て漱石の考へ方は、以前と同じやうに、ペシミスティックなものだつた。ただそのペシミスティックな考へ方が、異性だけでなく、同性に對しても、特に自分自身に對して最も濃厚に現はれる爲に、以前ほど際立つて、女性憎惡の色彩を帶びる事が少くなつた相違があるのみである。

『行人』の一郎は、Hさんが言つてゐるやうに、自分がかうと思つた針金の樣に際どい線の上を渡つて生活の歩を進め、相手も同じ際どい針金の上を踏み外さずに進んで來る事を要求する。然も二郎に從へば、一郎の妻のお直は、「決して溫かい女ではなかつた」が、然し「相手から熱を與へると、溫め得る女であ」り、また「持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で隨分愛嬌を搾り出す事の出來る女であつた。」とあるやうに、此方から「熱を與へ」もしくは「手加減」を加へるのでないと、「溫め」る事も「愛嬌を搾り出す事」も出來ない種類の女なのである。生憎一郎は「己は自分の子供を綾成す事が出來ないばかりぢやない。自分の父や母でさへ綾成す技巧を持つてゐない。それ所か肝心のわが妻さへ何うしたら綾成せるか未だに分別が付かないんだ。此年になる迄學問をした御蔭で、そんな技巧は覺える餘暇がなかつた。二郎、ある技巧は、人生を幸福にする爲に、何うしても必要と見えるね」と言つてゐるほど、人間としては、自然のままに成長して來た人間であつた。その上「手加減」をしたり「綾成」したりするといふ事は、自分の立つてゐるレベルから、一段も二段も低いレベルの方へ、自分から下りて行くとい

ふ事である。その事は一郎にとつて、倫理的にも知的にも、到底堪へられる事ではなかつた。一郎は「此年になる迄學問をした御蔭で、そんな技巧は覺える餘暇がなかつた」といふが、然し事實は一郎は、假令「餘暇が」あつたとしても、「そんな技巧」を覺える事を、潔しとしなかつたに違ひないのである。一郎から言へば、夫婦の關係は、さういふ「技巧」を用ひるのでなければ「幸福」になれないといふやうな、そんな不合理な關係であるべき筈ではなかつた。美的にも知的にも倫理的にも、レベルの低い所に立つてゐる者が、素直に、謙虛に、レベルの高い所に立つてゐる者の方へ、渾身の勇を揮つて、高まらうとするのが當然であつた。

然しお直は、一郎と同じレベルの上に立たうと努力しないのみならず、冷淡に構へて、一郎の世界を理解しようとさへもしない。のみならずお直は、自分でいつのまにか鍛え上げた「牢乎たる個性」に從つて、一郎の思はくなどには貪著なく、自分のしたいままの事をどしどし實行して行くのである。お直は、二郎から「兄さんに丈はもう少し氣を付けて親切にして上げて下さい」と言はれても、或は「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。是でも出來る丈の事は兄さんに爲て上てる積よ。……」と答へたり、或は「……妾馬鹿で氣が付かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れないけれど、是で全く出來る丈の事を兄さんに對してしてゐる氣なんですもの。——妾や本當に腑抜なのよ。ことに近頃は魂の抜殼になつちまつたんだから」と言つたり、或は

「妾のやうな魂の拔殼はさぞ兄さんには御氣に入らないでせう。然し私は是で滿足です。是で澤山です。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積です。其位の事は二郎さんも大抵見てゐて解りさうなもんだのに……」と言つたりして、端から見ればちつともさう見えないにも拘はらず、自分は「是で全く出來る丈の事を」してゐると信じ、自分が是で滿足してゐる以上、相手も是で滿足して然るべきであると考へ、それ以上ちつとも反省して見ようともしなかつた。從つてお直には、なぜ自分の所天が機嫌が惡いのかが、分からないのである。恐らくお直は、所天が機嫌が惡いのは、ただ自分が所天の氣に入らない――世俗の所謂相性が惡くて氣に入らないのだ位にしか考へてゐないのに違ひなかつた。從つて所天の氣むづかしさが愈昂じて、母親やお重までが、どうもこのごろは少し變だと言ふやうになつても、お直は二郎に向つて、「男は厭になりさへすれば二郎さん見たいに何處へでも飛んで行けるけれども、女は左右は行きませんから。妾なんか丁度親の手で植付けられた鉢植のやうなもので一遍植られたが最後、誰か來て動かして呉れない以上、とても動けやしません。凝としてゐる丈です。立枯になる迄凝としてゐるより外に仕方がないんですもの」と言つて、自分の薄命を嘆くより外の事は――例へば愛の鍵をもつて所天の胸の中から愛を取り出し、それに浴する事によつて所天にも自分にも朗らかな世界を用意しようとするやうな、そんな積極的な事を試みようなどとは、夢にも思はないのである。さうし

てお直は、ただ「凝としてゐ」た。辛抱強く「立枯になる迄凝としてゐ」た。それが二郎には、「彼女は男子さへ超越する事の出來ないあるものを嫁に來た其日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき牆も壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。彼女の今迄の行動は何物にも拘泥しない天眞の發現に過ぎなかつた。／或時は又彼女が凡てを胸のうちに疊み込んで、容易に己を露出しない所謂しつかりもの丶如く自分の眼に映じた。さうした意味から見ると、彼女は有り觸れたしつかりもの丶域を遙に通り越してゐた。あの落付、あの品位、あの寡默、誰が評しても彼女はしつかりし過ぎたものに違ひなかつた。驚くべく圖々しいものでもあつた。／或刹那には彼女は忍耐の權化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない氣高さが潜んでゐた。彼女は眉をひそめる代りに微笑した。泣き伏す代りに端然と坐つた。恰も其坐つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた。」といふ風に、いろいろに見えるのである。一郎も恐らくお直に對して、二郎のやうに感じ、どれがお直の本體か分からない氣がしてゐたに相違ない。

一郎はHさんと一緒に旅に出て、旅先きで、自分がお直に手を當てた時の事を話し、「一度打つても落付いてゐる。二度打つても落付いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張

り逆らはない。僕が打てば打つほど向はレデーらしくなる。そのために僕は益無頼漢（ごろつき）扱ひにされなくては濟まなくなる。僕は自分の人格の墮落を證明するために、怒を小羊の上に洩らすと同じ事だ。夫の怒を利用して、自分の優越に誇らうとする相手は殘酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遙に殘酷なものだよ。僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して吳れなかつた〔か〕と思ふ。抵抗しないでも好いから、何故一言でも云ひ爭つて吳れなかつた〔か〕と思ふ。」と言つてゐる。一郎はこの場合、自分の頭ではどう理解する事も出來ないもの、自分の力ではどうする事も出來ないもの、何か鐵の扉のやうなものに突き當つた氣がしたに違ひない。然もこの「鐵の扉」こそ、すべての場合に、最後に一郎が突き當り、さうして跳ね返され、それが繰り返されて、一郎を狂氣の如くにいら立たせるもの――お直の野獸性、迷亭の言葉を借りれば、道理ではどうしやうもない、お直の「牢乎たる個性」であるに外ならなかつた。一郎はお直の道理に戾つた言動に、苦しみ苦しんだ揚句、どうにもその苦しさの遣り場がなくなつて、お直に手を當てる。手を當てるとともに一郎は、自分で自分の人格の墮落に氣がついて、更に苦苦しい心持を經驗する。然るにお直は泰然として、その拳を受ける。お直が泰然としてゐればゐるほど、一郎は、自分をして相手に手を當てしめるに至つたものは相手であるにも拘はらず、卽ち非はお直にあるにも拘はらず、反つて非は自分にあると思はなければゐられなくなる。現にその證據を自分で見てゐる

事が、どう考へても堪らないのである。然もそれらのあらゆる苦苦しい心持を經驗させるものは、所詮お直に外ならないのだから、一郎は自然お直を、恐るべき且つ憎むべき存在と考へない譯に行かなかつた。さうして一郎は、「向ふでわざと考へさせるやうに仕向けて來るんだ。己の考へ慣れた頭を逆に利用して。何うしても馬鹿にさせて呉れないんだ」と言ひ、もしくは「おれが靈も魂も所謂スピリツトも攫まない女と結婚してゐる事丈は慥だ」と言はない譯に行かなかつた。

勿論女には「靈も魂も所謂スピリツトも」なんにもない、女の持つてゐるものは肉體だけであるといふ見方も、成立ち得ない事はない。然し「人間」を尊重し、自己を尊重する一郎は、女を、お直を、さういふ動物のやうなものとして見る事を欲しなかつた。欲しないといふよりも、出來なかつた。女を、お直を、動物のやうなものとして見るといふ事は、所詮男を、自分を、動物のやうなものとして見るといふ事である。それは漱石から言へば、人間に對する大きな冒瀆であつた。一郎が「自分が鋭敏な丈に、自分の斯うと思つた針金の樣に際どい線の上を渡つて生活の歩を進めて行」く代り「相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで來て呉れなければ我慢」が出來ないといふのも、所詮は一郎が相手の「人間」を、自分の「人間」を尊重する如くに、尊重し、相手の中に自分と同じやうに理非を辨へ、正邪を分ち、曲直を知り、美醜を心得てゐるものがあるといふ事を、豫想してゐるからである。然るに相手の「人間」は、生きてゐるのか死

んでゐるのか、分からないほど、「人間」らしい振舞を示さないのみならず、「人間」としてはさういふ反應を示す筈がないやうな、思議すべからざる反應を示すのである。それだから一郎は、「考へ慣れた頭」で考へて考へて、いらいらし、結局は死か宗教か狂氣か、三つのうちの一つを選まなければならない窮所に追ひ詰められる。

然し漱石は最後の窮所に來て、一郎の爲に一轉機を用意した。さうして漱石は一郎がこの道をあるく限り、死にも狂氣にも陥る必要がない事を暗示しようとした。是は宗教とは言ひ得られないのかも知れないが、少くともそれに通じる筈の道――慈憐をもつて他人を包まうとする道である。相手を許さうとする道である。一郎はHさんに、「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位惡くしたか分らない。自分が惡くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天眞を損はれた女からは要求出來るものぢやないよ」と言ふ。是は他人を責める前に、まづ自分を責めようとする意味で、一郎がお直に差しのべた、意味の深い、和解の手であつた。――然しこの一郎の述懷は、具體的には、どういふ事を意味するのであるか。是は、一郎がお直をスポイルしたと、言つてゐるだけではないのである。「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。」と、一郎は言つてゐるのである。是は何故であるか。遺憾な事には、この事に就いて漱石

は、それ以上の事を何も言つてゐない。ただこれに似た言葉を漱石は、嘗て『虞美人草』の甲野さんに言はせてゐる。甲野さんが糸子に向つて、「あなたは夫で結構だ。動くと變ります。動いてはいけない」・「えゝ、戀をすると變ります」・「嫁に行くと變ります」・「夫で結構だ。嫁に行くのは勿體ない」などと言つてゐるのが、それである。「戀をすると變」るといふ事が、戀をする事によつて人間が私の塊りになるといふ事を意味するものならば、漱石は既にその事を『彼岸過迄』の須永に於いても、『心』の先生に於いても描き出してゐるのである。然し女が何故に結婚すれば、「何んな人の所へ行かうと」、必ず「夫のために邪になる」のであるか。是も戀の場合と同じやうに、女がその爲め私の塊りになるからであるか。私の塊りになるとすれば、何故にさうなるのであるか。

それは私によくは分からない。然し是は或は漱石が、結婚生活に附隨する性慾生活の事を頭の中に置いて、物を言つてゐるのではないかとも思はれる。夫婦の間を結びつける性慾の問題は、夫婦關係を理窟では律する事の出來ない、イルラチオナールなものにする。一郎の場合に卽して言へば、一郎とお直との關係を道理に叶つたものにする前に、反つて渾沌たるものにする。その面だけで觸れてゐる限り、お直が一郎の學問にも見識にも人格にも敬意を拂ふ事がなく、ただの男性としてのみ愛するといふ事も、可能である。それをさして一郎は、「何んな人の所へ行かう

と」、結婚すれば女は、必ず「夫のために邪になる」と言つたのではないか。漱石は『道草』の中で、夫婦關係が極度に緊張したあと、お住が病氣になる所を書いてゐる。健三はそれを氣の毒に思つて愛撫する。愛撫によつて緊張は解かれるが、然し暫くすると、亦その緊張が始まる。健三とお住との夫婦關係は絶えずその經過の連續であつた。然もその經過には性慾の問題が潜んでゐる事を、見遁す譯に行かない。大正五年(一九一六)四月二十日前後に書かれたらしい漱石の日記の中には、「○夫婦相せめぐ　外其侮を防ぐ／○喧嘩、不快、リパルジョンが自然の偉大な力の前に畏縮すると同時に相手は今迄の相違を忘れて抱擁してゐる／○喧嘩。細君の病氣を起す。夫の看病。漸々兩者の接近。それが action にあらはるゝ時。細君はたゞ微笑してカレシングを受く。決して過去に溯つて難詰せず。夫はそれを愛すると同時に、何時でも又して遣られたといふ感じになる。」と書いてある。この「自然の偉大な力」を直ちに性慾と解釋してしまつて可いものかどうかは分からないが、然し漱石は、その「自然の偉大な力の前に」自分の相手に對する反撥が畏縮して行く事を注意すると同時に、「今迄の相違を忘れ」て相手を抱擁する事に注意し、相手をカレシングの中に包んで、それを「微笑して」受ける相手を「愛すると同時に、何時でも又して遣られたといふ感じになる」事に注意してゐるのである。『行人』の中の『歸つてから』第二十八には、「風呂から上りたてと見えて、蒼味の注した常の頰に、心持の好い程、薄赤い血を引き寄

せて、肌理の細かい皮膚に手觸を挑むやうな柔らかさを見せてゐた」お直が、一郎の不斷著を持ち、芳江の手を引いて、書齋に這入つて來る場面が描かれる。是は勿論二郎が、「嫂が兄に對して是程家庭の夫人らしい愛嬌を見せた例を知らなかつた。」と言つてゐるやうに、お直にとつて前例のない仕草であり、また同じ二郎が、「此愛嬌に對して柔げられた兄の氣分が、彼の眼に強く集まつた例も知らなかつた。」と言つてゐるやうに、お直が不斷かういふ「家庭の夫人らしい愛嬌を見せ」てさへゐれば、一郎の氣分はあのやうに苛苛しないでも濟む筈だといふ事を指示する場面であるには違ひなかつたが、然しそれとともに此所では、そのお直の愛嬌が「肌理の細かい皮膚に手觸を挑むやうな柔らかさ」に包まれてゐたといふ敍述も、無意味につけ加へられてゐるのではないやうに思ふ。お直を片意地だと感じ、お直を殘酷だと感じる一郎は、「自然の偉大な力の前に」自分の相手に對する反撥が畏縮して行く事を感じ、相手から「手觸を挑」まれたあとでは、きつと相手を「愛すると同時に叉して遣られた」と感じたのに違ひないのである。然も自分をして「叉して遣られた」と感ぜしめる相手は、自分が自分の意志によつて妻として迎へたお直であつた。そのお直は自分の所へ迎へられて來さへしなかつたら、決して自分に「叉して遣られた」と感ぜしめなかつた筈である。從つて假令一郎が「叉して遣られた」と感じたとしても、その「叉して遣」る者は一郎自身ではあつてもお直ではなく、言はばお直は、一郎の所に來たから、

一郎からスポイルされ、一郎に「手觸を挑むやうな」事になつてしまつたのである。一郎がさういふ風な考へ方をし得る人間であるといふ事は、例へば一郎が、客の前で『景清』に似た女の話をする父の言葉に關連して、性慾に關する反應の上で、男と女との相違を述べる、進化論的な立場に就いて考へて見ても、明白であつた。

勿論この事は、私の忖度に過ぎない。漱石がそれに就いてはつきりした説明を下してゐない以上、それは精確には分からないとするのが、ほんとである。ただ然し漱石が夫婦關係をかういふものだと考へてゐたと假定しても、それは漱石があながち性慾を否定してゐるといふ事を意味するものでない事は、無論である。それどころかもし漱石の「自然の偉大な力」といふ言葉を、そのまま性慾を意味するものと解釋するならば、漱石は性慾を否定する前に、是非もない事實として、是を畏敬しようとさへもしてゐるやうなのである。然も人間に性慾の問題がある限り、もしくは夫婦の關係に性慾の問題が隨伴する限り、夫婦の關係は兎角私なしには進行して行く事がないといふ事を、漱石は認めざるを得なかつた。又それだけに夫婦の關係は複雜を極め、道理のみによつては到底解決し切る事が出來ない事も、亦認めざるを得なかつた。一郎が、自分はお直をどの位惡くしたか分からない。そのお直から幸福を求めようとする自分は、蟲がよすぎるといふ點に氣がついたといふ事は、悲しい認識には違ひなかつたが、然しこの事は、單に一郎にお直を

許さうとする心構へが出來た事を示唆するのみならず、自分が進化論的事實から脫却する事が出來ない、大きな、根本的な事實を認めて、自分と相手とを共通の弱點の上に立てつつ、お直を許さうとする心構へが出來た事を物語るものであつたと、解釋する事が出來るのである。

六〇 『こゝろ』

漱石は『行人』で、自分は正しいが、相手は正しくない、自分は高い所に立つてゐる、低い所にゐる相手は當然自分の方へ附いて來べきであるといふ立場に立つて、少しも妥協しようとしない、さうしてその爲め一人で苦しみのありたけを苦しまなければならない一郎を主人公として、小説を書いた。それに續く『こゝろ』では漱石は、自分を世間に顏出しも出來ない罪人だと意識してゐる先生を主人公として、奥さんがいかに全力を擧げてその心を暖めようとしても、竟にそれが出來ず、先生は竟に冷え凍えて死んでしまふ所を書いた。『行人』と『こゝろ』とは、著しい對照をなしてゐる。然もこの著しい對照は、漱石にとつて、自然ででもあれば、必然ででもあつた。「道」に入らうとした漱石には、自分を正しいとする煩惱のありたけを發揮し悉したあとで、今度はその煩惱の醜さを、何所からも我の芽の出やうがないほど、深刻に剜り出して見なければ、どうしても落つかいてゐられなかつたのである。

『行人』を書いてしまつてから、漱石はずつと書だの畫だのをかき續けた。大正三年（一九一四）四月十日漱石は津田青楓に宛てて、「私もあなたと同じやうに何かやりかけて油がのる時分に止める都合になるのが殘念です、畫もいやになる迄かいて夫から又文學なり批評なりに移つて行きたいと思ひます小說ももう書き始めなければなりません、夫で畫はやめました」と書いてゐる所から想像すると、恐らく漱石はそれまで、假令毎日ではないとしても、もう畫をかくのはやめようなどとは考へる事なしに、書や畫をかき續けてゐたものらしい。然し漱石は、四月十日に「畫はやめました」とは言つたが、事實畫をやめはしなかつた。勿論新しい小說の布置結構に大體の眼鼻がつくまでは、畫をかく所ではなかつたのに違ひない。漱石は自分の頭をそつちの方へ向ける爲に、いろいろ苦心した事は、例へば三月二十日大谷繞石に宛てて、「拜啓御新著頂戴難有う存じます私はガルスヲーシーといふ人のものを讀んだ事がありませんからあれをすぐ通讀しましたあれは全體として大陸ものゝやうな氣がします、あのうちの二つか三つには感心させられました私はまた小說を書かなければなりません書く前には氣分をそちらへ持つて行く必要があります夫には誰の小說でも讀んでゐるうちに自分も自然創作的氣分に侵されてくるやうになるのです、私はガルスヲーシーを讀む時さういふプラクチカルな考を懷いてゐました、さうして讀んで了つたら幾分か自分の目的が達せられたやうに思ひます偶然ながらあなたの御蔭です御禮を申上ま

す」と書いてゐるのでも、知れる。然し構想も大體きまつてしまひ、いよいよ小説に筆をつけ、毎日日課のやうに午前中をそれに潰すやうになつてから、漱石は午後を、書だの畫だのをかき、もしくは書だの畫だのを見て廻る事で費した。漱石は五月三十日津田青楓に宛てて、「海だか湖だかある繪を御注意通り直しました大變好くなつた積です、今度見て評價して下さい私は軸にして殘して置かうかと考へてゐます」と書いてゐる。七月十一日同じ津田青楓に宛てて、「私は自分の書いた山水と黑猫と夫から酒渇愛江清の五字一行ものを表裝しました今度見て下さい、黑猫が一番わるいやうです　酒渇は中々上出來です　山水は今かけてあります、」と書いてゐる。八月九日橋口貢宛の手紙には、「御惠贈の拓本は頗る珍らしく拜見しました　あれは古いのではないのでせうが面白い字で愉快です、私は今度の小説の箱表紙見返し扉一切合切自分の考案で自分で手を下してやりました其内の表紙にあれを應用致しました出來上つたら御目にかけませう」とある。『こゝろ』は四月二十日から八月十一日まで、百十回に亙つて新聞に連載され、漱石は八月一日に是を脫稿したが、脫稿後は義務を果したあとの心輕さから、書畫の世界に更に一倍深入りして行つたやうである。

漱石は半折の南畫風淡彩の山水を都合十枚かき、そのうちの八枚は、悉く自分で表裝させ、自分で箱書して、保存した。それは大正二年秋の『崖臨山水圖』・『南山松竹圖』をもつて始まり、

大正二年冬には『閑來放鶴』があり、大正三年五月には『煙波縹緲』があり、同じ年の十一月には『孤客入石門圖』と『一路萬松圖』とがあり、大正四年の三月には『秋景山水』、十月には『靑嶂紅花圖』、十一月には『山下隱栖圖』、十二月には『花開水自流圖』といふ風に、漱石は『行人』續篇以後ずつと大きなものに手を著けて、大正五年に及んだ。漱石には書畫が道樂であつたには違ひなかつたが、その道樂は漱石の必然となり、それなくしては生きてゐる氣にも、小說を書く氣にも、到底なれなかつたのではないかと思ふほど、漱石にとつて、必要なものとなつた。

大正五年(一九一六)二三月の比に書かれたらしい漱石の「斷片」の中に、「〇ある藝術家ノ述懷として小說中に出す／(1)刺戟ガ強烈ナルヿ(2)實生活ノ反映としてウンザリスルヿ(3)心に餘裕ガナキヿ、從つて不安ナルヿ／(4)俗ツポイ事／夫で自由、安穩、平和を求める、――繪畫は一番それに近い。ドラマチツクナ繪畫は(人情ガカツタ)成功スルものが少ナい。其理由は不明ナレドモ脚本や小說の本質を冒スカラジヤナイダラウカ、吾人は繪を別の方面カラ眺めるからぢやないだらうか。畫の本質を全然異つた所に置く爲ぢやないだらうか。(カラクテリスチツクを表現する現代的繪畫ノあるものは如何といふ質問も起つてくるが)。然ラバ其畫の本質とは何ぞやと云はれると困る。／つまり生活に飽いたものが田舍へ引き込むのと同じで、自然、と人間、傍觀的態度で見る。無關心で賞翫する)を愛するといふ氣分が取も直さず繪を愛する氣分ぢやないだらうか。

／所が小説や脚本の藝術の强烈サニ辟易して繪に逃れるとすると其所に又人間臭いいやな所が出てくる。人に賞められたくなる。人と競爭したくなる。仕事それ自身は平穩な刺戟を持つてゐるが其仕事と世間との交渉になると矢張り俗ポクツテ煩ハシクツテゴタ〳〵してゐて、塵埃ダラケデ仕方ガナイ」とある。勿論漱石は、「人に賞められた」かつたり「人と競爭した」かつたり、その意味で「世間」と「交渉」して、畫をかいたのではなかつた。從つて漱石は、自分の畫が「俗ポクツテ煩ハシクツテゴタ〳〵してゐて、塵埃ダラケデ仕方ガナイ」事を、それほど嘆ずる必要はなかつた。漱石はただ、自然と人間（傍觀的態度で見る。無關心で賞翫する）とを愛する氣分から、さうして戯曲や小説の「刺戟が强烈」で、「實生活ノ反映としてウンザリ」させられ、「心に餘裕ガナ」く、「俗ツポ」くなるから、「自由、安穩、平和を求める」爲に、畫をかいたのである。この事は漱石が、嘗て『草枕』で描いた、畫工の態度を思ひ出させる。然も『草枕』の畫工と此所の漱石との相違は、その態度を實生活の全面に行き亙らせようとするかしないかの點にあつた。『草枕』の畫工は、實生活に於いて、泣いたり笑つたりするのには厭厭したから、せめて旅をしてゐる間でも、この態度で貫ぬいて見ようといふ氣で、那古井の溫泉場に出かけた。といふ事は、那古井の溫泉場から浮世に歸つて來れば、畫工は亦泣いたり笑つたりの、人情の世界に這入る事が豫想されてゐるのである。然し此所の漱石は、絕えず畫をかき書をかく事によつて、自分の心

の「自由、安穩、平和を求め」、それによつて自分の生活全面を、人情の世界から超越させようとする。『草枕』の畫工は、人情の世界から超越したい要求は持つてゐるが、それは到底不可能の事だと考へる。不可能の事だと考へればこそ、せめて旅の間でも、其所から超越して生きたい希望を抱くのである。此所の漱石は、その不可能の事を、可能にしようとする。それが可能であると考へるのでなければ、漱石は到底實生活に堪へる事が出來ないのである。それほど漱石は、自分の中の「執濃い油繪」のやうな性質の爲に、惱まされ續けてゐたのである。大正三年（一九一四）三月二十九日漱石は津田青楓に宛てて、「まだ修善寺に御逗留ですか　私はあなたが居なくなつて淋しい氣がします面白い畫を澤山かいて來て見せて下さい金があつてからだが自由ならば私も繪の具箱をかついで修善寺へ出掛たいと思ひます　私は四月十日頃から又小説を書く筈です私は馬鹿に生れたせゐか世の中の人間がみんないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押して行きます、丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ事です自分でも厭な性分だと思ひます／……／世の中にすきな人は段々なくなります、さうして天と地と草と木が美しく見えてきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます」と書いてゐる。

『行人』で、自分の我を押し詰められるだけ押し詰めて、それを爆發させてしまつた漱石は、

さうして見ても、自分は自分の孤獨から救はれる事がなく、世の中に住む事が一層堪へ難く感じられて行つたやうに見える。勿論漱石には、美しく見える「天と地と草と木」とがあり、漱石は「犬をたよりに生きてゐ」る事が出來た。また漱石には、同じ日の手紙に「皿と鉢を買ひました。もつと色々なものを買ひたい。藝術品も天地と同じ樂みがあります」と書いてあるやうに、他人が創造した美しさの中に、自分の心を浸す事は、自分が創造する美しさの中に遊ぶのと同じやうに、生き甲斐を感じる、歡びであつた。然し漱石には、いくら「天と地と草と木」とが美しく見え、またいくら他人の創造した藝術品が美しく見え、最後にいくら自分の創造する畫や書の世界が自分に無上の歡喜を用意しても、それだけでは、どうしても足りないものがあつた。それは言ふまでもなく、人間である。人間の愛である。自分の注文に叶ふ、人間の愛である。

四月十四日漱石は寺田寅彥に宛てて、「近頃は人を尋ねずあまり人も好まず何だかつまらなさうに暮し居候小說も書かねばならぬ羽目に臨みながら日一日となまけ未だに着手不仕候是も神經衰弱の結果かも知れず厄介に候」と書いてゐる。漱石の欲してゐたものは、いつまでも渝る事のない、暖かな人間のハートであつた。然も漱石には、それが與へられる事がなかつた。與へられても漱石は、その永久性を信じる事が出來なくなつてゐるのである。從つて漱石は「何だかつまらなさうに暮し」てゐるより、仕方がなかつた。然し漱石は、それだからと言つて、たゞ「つま

らなさうに暮し」てゐる事だけに、立ち止まつてゐる事が出來なかつた。『行人』の一郎のやうに、他人に注文計り出してゐるのでは、竟に自分の滿足する機會はないに違ひない。他人に注文計り出してゐるのは、結局自分を何所までも良いと信じ、正しいと信じてゐるからである。自分は高い所にゐる、然し相手は低い所にゐると信じてゐるからである。この考へ方を逆に、假令相手は自分より高い所にゐるとは考へないまでも、自分が高い所にゐると考へるのは畢竟自分の己惚に過ぎないのだから、自分のこの己惚を徹底的に碎き去つてしまひ、さうして自分は事實は低い所にしか立つてゐない人間であるといふ事を、沁沁自分で認識するならば、自分は他人へ注文を出すどころではなく、反つて同病相憐れむ意味で、他人と和解の手を握り合ふ事が出來るに違ひない。――漱石がかういふ考へ方をしたかどうかは分からないが、少くとも『こゝろ』で漱石は、さういふ心持を表現する。漱石は一方では自然の美しさや藝術の美しさを、自分自身の上に深切に作用させるとともに、自分の全意志を奮ひ起して、自分自身の中の私を叩き潰し、自分自身は世間に顔向けも出來ない罪人のやうな、無價値なものとして世間に立ち、其所から新しい世界が芽生えて來るのを、徐ろに待つてゐようとするのである。『行人』の主人公と『こゝろ』の主人公とは、極端と極端とに立つ人間ではあるが、それらの對蹠的な人間を動かして、竟にじつとしてゐるに堪へざらしめるものは、漱石の底ぬけの淋しさであつた。換言すれば底ぬけの淋し

さが漱石を驅つて、極端から極端へ、地獄の上の一足飛びをさせるのである。

『こゝろ』の先生は孤獨空冷の生活を送つてゐる。奥さんがそれを見かねて、先生の懷に跳り込み、自分の暖いハートで先生を暖めようとする。是は丁度『行人』のお直とは、正反對の女性である。然し先生は堅く自分のハートを閉ぢて、奥さんのハートを受けつけない。私が若若しい熱情を傾けて、奥さんに代らうとする。是も先生は許容しない。さうして、「かつては其人の膝の前に跪づいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです。私は未來の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥ぞけたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未來の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と獨立と已れとに充ちた現代に生れた我々は、其犧牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう」と言ふ。――この先生の言葉は、漱石が若い弟子どもによつて嘗めさせられた、苦い經驗を背景としてゐる。然も此所では漱石は、自分のその苦い經驗は、自分の至らない所から來てゐるので、相手が惡いのではないといふ風に考へようとさへもしてゐる。「自由と獨立と已れとに充ちた現代に生れた我々」といふ言葉の中には、若い弟子どもの行爲が寧ろ自然で、もし自分に、弟子どもの「自由と獨立と已れと」を包んでなほ餘りある位の、偉大があつたなら、當然弟子どもをいつまでも自分の「膝の前に跪づ」かせて置く事が出來た筈だといふ、反省が含まれてゐる。是は大きな慈悲である。

さうして漱石は、この大きな慈悲の世界に踏み入る事の出來るために、『行人』の一郎のやうに、すべての自分の持つてゐたものを片端から失つて行つた人間ではなく、初めから何ものをも持つ事を許されなかつた、即ち誰よりも先に、まづ自分自身に愛想をつかしてゐる人間を、此所で描き出さうとするのである。私は先生の事を、「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出來ない人」と評してゐるが、然し先生にそれが出來ないのは、先生に「愛し得る」能力があり、「愛せずにはゐられない」必然があるにも拘はらず、自分には愛する事は許されてゐないといふ、怖ろしい運命の認識が働いてゐるからである。

先生は嫉妬の爲に、自分の最も親しい友人を裏切つた。先生にとつて、人間の世界を最も美しくする愛が、同時に人間の世界を最も醜くする嫉妬と不可分離に絡み合つてゐる爲に、自分の裏切りを忘却しない限り、人を愛する事も、人から愛される事も、到底不可能なのである。然も先生にとつて、愛なしにはこの世は、竟に生きて行く事に堪へない世界であつた。先生は結局、自分の罪を告白して、それによつて私に何等かの點で利益を與へる事によつて、せめてもの自分の生存に意義あらしめた上で、死ぬより外はなかつた。先生にとつて、さうして「生きてゐた三十五年」の方が、「刀を腹へ突き立てた一刹那」よりも、苦しかつたのである。かうして先生は自殺

する。

嫉妬の問題は、漱石が『彼岸過迄』以來、絶えず問題にし續けて來たものであつた。それは漱石が愛を重要視し、愛なしには人生は無意味であるとまで考へてゐたにも拘はらず、愛ほど私の作ひ易いものはなく、愛ほど人間を非人間的に、動物的に、醜くするものはなく、またその意味で愛ほど人間を人間らしく生きしめる上に、必要であるとともに、邪魔になるものはないと考へてゐたからである。「こゝろ」の中の先生は、「とにかく戀は罪惡ですよ、よござんすか。さうして神聖なものですよ」と、私に訓へてゐる。漱石は自分の中に動く愛を、淨め、深め、高めようと精進すればするほど、その愛の中に根を張る私が、考へられ得るあらゆる形で、自分の眼の前に現はれて來るのを、悲しい驚きを以つて眺めなければならなかつた。然もさういふ私を掘り悉す事は、漱石にとつて、現實的に、自分の愛を淨め、深め、高めて、自分以外のものを大きな慈悲で包む事の出來る唯一の道であつた。漱石は、不斷にこの一路に沈潛し、また不斷にこの一路に徹底しようとする。

六　四度び胃潰瘍

『こゝろ』のあとを漱石は、志賀直哉に書いてもらふ手筈にしてゐた。然るに志賀はどうしても書く事が出來なくなつたと言つて來た。已むを得ず漱石は、鈴木三重吉の發案を容れて、新進の作家に十回もしくは十二回讀み切り程度の短篇を書いてもらひ、それを十人位列べて出すといふ事にした。人選の相談には鈴木三重吉と小宮豐隆とが與り、且つ訪問したり手紙を書いたりする、雜務をも引き受けた。かうして大正三年七月二十二日までには、鈴木三重吉、武者小路實篤、長田幹彦、小川未明、田村俊子、里見弴、久保田万太郎、青木健作、谷崎潤一郎、野上八重子、後藤末雄の十一人が書くといふ事にきまつた。是は後に顔觸れに多少の變更はあつたが、ともかくかういふやうな顔觸れで、短篇が次ぎ次ぎに『こゝろ』のあとに連載される事になつた。然も是は、一往原稿を漱石の所で纏め、漱石がそれに眼を通した上で、社の方へ屆けるといふ原則になつてゐたのである。

然し漱石は忽のうちにこの仕事に厭氣がさしてしまつた。それは作家達の多くが、約束の期限を守る事がなく、初めは何月何日までに出來ると堅い約束をして置きながら、その期限が來ると、病氣になつたり、まだ書けなかつたりする爲に、紙面の變化を考へて、初めにちやんと附けて置いた順序が狂ふのみならず、なんの音沙汰もないものには催促の手紙を出さなければならなかつたり、已むを得ない事情のある人には約束の期限を約束し直さなければならなかつたり、約束し直してもなほ原稿を寄越さない人には、また催促の手紙を出さなければならなかつたり――約束が約束どほり履行されない不愉快、催促する事を心苦しく思ふデリカシー、それにも拘はらず催促しなければならない煩はしさ、さういふ事が積り積つて、漱石は到頭九月四日にはその仕事を、社の方へ一任してしまふのである。その日漱石は山本松之助に宛てて、「拜啓短篇の原稿をまとめる事を社の方でやつて頂きたいと思ひます今迄とくに來るべきで來ないのは長田と久保田です。長田は心臟ケイレンだとかいつて二三日待つてくれといつたのがもう餘程前になります夫からどうしたか知りません久保田は九月二三日迄に是非くる筈でまだ來ません。私はかう人に催促をするのが厭になりました／其外に谷崎は九月十日の約束です夫から里見は九月一杯にかく事を八分通り受合つてゐます是等はもし來たら此方から差上ます／つぎに出すのを武者小路か高濱との御注文でしたが私はまだ雙方とも懸合ません、武者小路君はすでに出たし長いものをかく種がある

か分らないからです高濱は近頃小説には遠かつてゐますし其砌は旅行中でした。／あとのものに就ての心當りは少々ありますが是はあなたの方で御極めになりたい人があるなら私を省略して直接に御極め下さい」と書いてゐる。自分の藝術的な名譽は犧牲にしても、約束の期日は嚴守するといふ主義の漱石が、原稿は催促され出してから書くものだと考へてゐるやうな文壇の作家たちと、初めて直接に交渉したのだから、漱石は恐らくあきれもし、愛想もつかし、不愉快にもなつたのだらう。その餘波で漱石は、これらの短篇群の次ぎに出る筈の長篇小説に關しても、なるべく自分が直接交渉の任に當りたくないやうな口吻を洩しさへもしてゐる。然も漱石はその後間もなく、また潰瘍の爲に、床についてしまふのである。

今度も漱石はいつから寐込んだか、はつきりした所は分からない。大正三年（一九一四）九月十六日に漱石が笹川臨風に宛てて、「病氣の御見舞狀をうけ難有存じます　今日やつと起き上つて此手紙をかきます　床はまだ上げず　然し今度のはいつもの病氣ではなくひどい胃カタールです」と書いてゐる所から想像すると、或は九月の八日か九日ごろか（漱石は九月七日の夜までは手紙を書いてゐる）に寐込んだものではなかつたかとも思はれる。然も此所には「胃カタール」と書いてあるが、實は「胃カタール」ではなく、いつもの潰瘍で、漱石はその後また「一ケ月以上」寐込んでしまふのである。寺田寅彦の十月四日の日記には「夏目先生の病を訪ふ。快方に向へる

由なれど衰弱甚し」とあり、十月十七日漱石が中勘助に宛てた手紙には、「君は知るまいが僕は其後煩つてまだひよろ／＼してゐる」とあり、十月二十四日森成麟造宛の手紙には、「病氣は例の通りのものです約一ケ月以上かゝつて漸く起きました」とある。一度寐込んで、もうよからうと思つて起き上がると、又どつとやられて、「一ケ月以上」も床に就いてゐなければならなかつた點で、是は丁度前年の『行人』を書いてゐた時分の潰瘍と、同じ經過をとつて現はれたもののやうである。もつとも漱石は十月二十七日には、ともかくもなほつて、病中に送つて來た中勘助の小說を、二日がかりで讀んでしまふほどの、元氣を示してゐる。十一月に這入つてからは、漱石は再び畫をかき書をかく事に親しみ出した。

十一月五日漱石は森成麟造に宛てて、「森成さんいつか私に書をかいてくれといひましたね私は正直だからそれを今日書きましたあなた許りので［は］ありません方々のを一度にかためて書いたのです一日の三分一程費やしましたあなたのは御氣に入るかどうか知りませんが私の記念だと思つて取つて置いて下さい」と書いてゐる。十一月八日笹川臨風に宛てて、「其後は御無沙汰を致しました　たしか去年の事と思ひますがあなたは私に何か書いてくれと云はれました其時私は傑作が出來たら上げませうと答へました　傑作は無論出來ませんが約束を履行しやうと思つてあれから一枚書いたのです然し拙いので上げる氣にもなれないので其儘にして置いたのです此間病氣

をした時に御見舞を頂いた後私は永らく寐てゐました　起きてから十日目頃に今迄頼まれた書を諸方へ送らうと思つて一度に片付けました約束[は]十五六枚あつたでせう其内去る人の自壽の詩に次韻したものを注文で書く義務があつたのですが外のものはまあ好い加減に胡麻化したのですが其一枚が何う書き直しても書けない爲めとう〳〵大變な時間を潰して仕舞に腰がいたくなりました、今御贈りする五絶は其時序と云つては失禮ですがまあ序に書いたのです無論豫約の通り傑作とは參りませんが何だか差上げないと氣が濟まんから御笑覽に供します私は多病でいつ死ぬか分らない人間ですがもし生きてゐればもつと旨くなつて貴兄に御滿足の行くやうなものを書き直してあげて前債を償ひたいと思つてゐますがいつ死ぬか分りませんから拙くてもまあ是を差上げて置く事に致しますどうか御納め下さい」と書いてゐる。——漱石は明治四十三年(一九一〇)以來、毎年のやうに胃潰瘍で倒れてゐる。さうしてそれは、大抵、小説を書いてゐる途中か、小説を書いた直後の事である。漱石にとつて、小説を書く事が自分の命を縮める事だつた事は、明白であつた。然し小説を書く事は、漱石にとつて、必然であつた。繪畫が必然である如く必然であつた。從つて漱石は、商賣換へを勸める人があつても、決してそれには耳を假さなかつた。漱石は依然として小説を書き續け、また依然として潰瘍に倒れ續けた。漱石は、それも亦已むを得ないと覺悟はしてゐたにしても、心細かつたには違ひない。『行人』の途中で倒れたあと、書をか

いてくれといふ松山忠二郎に對して「御承知の通りの病軀いつ死ぬか分らぬ故全くの處記念と覺召被下度」と言ひ、「だから若し生きて居れば今にうまくなつた時書き直さうといふ山氣あり從つて表裝は御無用」だと言つて、その注文を引き受けた。此所でも漱石は、殆んど同じやうな事を言つてゐる。然しその同じやうな、森成麟造宛の手紙の中の言葉や、笹川臨風宛の手紙の中の言葉は、松山忠二郎宛の手紙の中の言葉に比べて、更に讀者の心に沁み込むものを持つてゐる。此所の言葉には、もつと透明な感じがあるとともに、もつと淋しい感じがある。

もつともこの事は、漱石が死を恐れてゐたといふ事を、物語るものではなかつた。勿論死を恐れない人間などといふものは、あまり澤山はないに違ひない。然し漱石は、『行人』の一郎が言つたやうに、生死を透脫する方向に、自分の頭を向けてあるいて來てゐる。それが當時どれほどの成績を齎らしてゐるかは、精確に知る由もないとしても、少くとも漱石が觀念的には、死を怖れない境地に到達する事が出來てゐた事だけは、明らかであつた。松浦嘉一の『木曜會の思ひ出』によると、大正三年十一月十二日漱石は木曜會の席上で、「死が僕の勝利だ。僕が死んだら葬式なんか、どうでもいゝよ。只みんなから萬歲を稱へて貰いたいね。何んとなれば死は僕にとつて一番目出度い、生の時に起つた、あらゆる幸福な事件よりも目出度いから。」・「が、自殺するほどの大膽さはないね。又自ら手を下して死ぬといふことは拙いから。」・「このライフ、人々が云々

する理想とか、イズムとか、哲學とかいふものは死に比べたら、吹けば飛ぶやうなものだね。けれど死は絶對です。死ほど人間の摑み得るものの中で確かなものはない。」と言つてゐる。この筆記は多少透徹を缺く憾みがなくもない。然し十一月十四日漱石は林原耕三に宛てて、「拜復私が生より死を擇ぶといふのを二度もつゞけて聞かせる積ではなかつたけれどもつい時の拍子であんな事を云つたのです然しそれは嘘でも笑談でもない死んだら皆に柩の前で萬歲を唱へてもらひたいと本當に思つてゐる、私は意識が生のすべてであると考へるが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分「は」ある、しかも本來の自分には死んで始めて還れるのだと考へてゐる　私は今の所自殺を好まない恐らく生きる丈生きてゐるだらうさうして其生きてゐるうちは普通の人間の如く私の持つて生れた弱點を發揮するだらうと思ふ、私は夫が生だと考へるからである　私は生の苦痛を厭ふと同時に無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ、だから自殺はやり度ない　夫から私の死を擇ぶのは悲觀ではない厭世觀なのである　悲觀と厭世の區別は君にも御分りの事と思ふ。私は此點に於て人を動かしたくない、卽ち君の樣なものを私の力で私と同意見にする事を好まない。然し君に相當の考と判斷があつて夫が私と同じ歸趣を有つてゐるなら已を得ないのです、私はあなたの手紙を見て別に驚ろきもしないが嬉しくも思へなかつた寧ろ悲しかつた君のやうな若い人がそんな事を考へてゐるかと思ふと氣の毒なのです。然し君は私と同じやうに

死を人間の歸着する最も幸福な狀態だと合點してゐるなら氣の毒でもなく悲しくもない却つて喜ばしいのです」と書いてゐる。是を基礎とした上で、この筆記を參酌するならば、我我は漱石の當時の心境の、凡その所を髣髴する事が出來る。

漱石は、理想とか主義とか哲學とか、およそ人間が工夫し案出した一切のものは、死といふ事實の前には、吹けば飛ぶやうな無意味なものに過ぎないと考へる。死は絕對である。絕對の事實である。從つて人間のあらゆる營みも、この絕對の事實から出發しない限り、意味をなさない。卽ち人間のあらゆる營みは、死を目ざして進み、死によつてのみ完成され得るものとして、形づくられなければならないのである。然しその、死によつてのみ完成される筈の、生の營みとは、何であるか。漱石は死を、死があらゆる生物の當然の歸結なるが故に、生物を支配する大自然の意志の發露に外ならないと考へる。從つて死を目ざして進む事は、自然に隨順して生き、天に則つて生きる事であると考へる。然しそれは、例へば老子の言ふやうな、無爲にして化すといふやうな、生き方をさすのではなかつた。反對にそれは、生きてゐるうちに、死によつて完成される筈の自分の生活を、自然に隨順し、天に則つて、洗ひ淨めつつ、死による完成の準備をする生き方である。Hさんの言ふ所によれば、『行人』の一郎は、「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、何うしても安心は得られない。すべからく現代を超越すべしといつた才人は兎に角、

僕は是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」と言つたといふが、さうして「兄さんの絶對といふのは、哲學者の頭から割り出された空しい紙の上の數字ではなかつたのです。自分で其境地に入つて親しく經驗する事の出來る判切した心理的のものだつたのです。／兄さんは純粹に心の落ち付きを得た人は、求めないでも自然に此境地に入れるべきだと云ひます。一度び此境界に入れば天地も萬有も、凡ての對象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在するのだと云ひます。さうして其時の自分は有とも無いとも片の付かないものだと云ひます。偉大なやうな又微細なやうなものだと云ひます。何とも名の付け樣のないものだと云ひます。卽ち絶對だと云ひます。さうして其絶對を經驗してゐる人が、俄然として半鐘の音を聞くとすると、其半鐘の音は卽ち自分だといふのです。言葉を換へて同じ意味を表はすと、絶對卽相對になるのだといふのです、從つて自分以外に物を置き他を作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる掛念も起らない」」、自分の求めてゐるのはさういふ絶對の境地だと言つたといふが、漱石はその「生死を超越」した玲瓏透徹の世界、絶對卽相對・相對卽絶對の世界に這入り得る爲に、自分の生活の方向を、かういふ、死との和解の方向に向けて行くのである。

漱石にとつて、人間が生きてゐるといふ事は、「持つて生れた弱點を發揮する」事に外ならなかつた。然も是は畢竟「弱點」であつた。從つてそれは、いくら「持つて生れた」ものだつたにし

ても、またそれが刈つくし根こぎにするには、人間が一生かかつても足りないほど、無盡藏のものだつたにしても、決然として刈つくし根こぎにされなければならない筈のものであつた。漱石は全力を擧げてこの「弱點」の殲滅に從事する。然しこの「弱點」は、人間の「持つて生れた弱點」なるが故に、漱石が全力を擧げてその殲滅を計つても、竟に盡きる期がない。漱石の「厭世」は、其所から出發する。然も人間が死ぬといふ事は、人間が大自然へ歸るといふ事である。人間は死とともに、「持つて生れた弱點」から解放される。人間の力では、人間の「持つて生れた弱點」は到底殲滅しやうがないとすれば、然もこの「持つて生れた弱點」は殲滅されなければならないものであつたとすれば、所詮人間は、死によつてそれから解放される事を、待つてゐるより仕方がない。――漱石はその角度から、自分と死との和解點を把握する。自分が自分の一生を賭して、自分を自分の「持つて生れた弱點」から解放しようとするにも拘はらず、自分はその仕事を完成する事が出來ない。それを事實上完成してくれるものが死である。その意味で死は、畢竟自分の意志の完成者であり、自分の意志の遂行者である。この「意志」によつて、漱石の生と死とは一貫し、漱石の死は漱石の生の完成者となる。然も死は、漱石の「意志」の完成者なるが故に、また漱石の勝利である。漱石が「皆に柩の前で萬歲を唱へてもらひたい」と言つたのは、この意味に外ならないのだらうと思ふ。

六九　『私の個人主義』

大正三年(一九一四)十一月二十五日、漱石が『こゝろ』を書き上げてから凡そ五ケ月目、漱石は學習院の輔仁會から頼まれて講演をした。その筆記に手を入れたものが、『私の個人主義』である。是は漱石の箇人主義がどういふ性質のものであるかを説明した上で、金力と權力とに最も近づき易い位置にある學習院の生徒たちに、世の中に出てからどういふ事を考へてその金力と權力とを行使すべきであるかを説いたものである。然しこの講演で最も興味の深い部分は、漱石が、自分の箇人主義がどういふ性質のものであるかといふ事を、巨細に説明した部分であつた。是は漱石の全生活の摘要のやうなものである。當時學習院の軍事敎官をしてゐた某が、漱石が箇人主義を說くと言つて、眼角を立てて聽いてゐたが、あとで、あゝいふ箇人主義なら結構だと言つて、漱石の言ふ所に贊成したといふ話が、今日坊間に傳はつてゐる。

漱石は此所で、自分が大學を卒業した當時の事から、自分の『文學論』の成立、自分の文壇生

活を述べて、自分の箇人主義がどういふ性質のものであるかを具體的に示した後、それをかいつまんで、「もつと解り易く云へば、黨派心がなくつて理非がある主義なのです。朋黨を結び團隊を作つて、權力や金力のために盲動しないといふ事なのです。」と言ひ、「夫だから其裏面には人に知られない淋しさも潛んでゐるのです。旣に黨派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行く丈で、さうして是と同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばら／＼にならなければなりません。其所が淋しいのです。」と言ひ、更にその淋しさを說明して、「私は意見の相違は如何に親しい間柄でも、何うする事も出來ないと思つてゐましたから、私の家に出入りをする若い人達に助言はしても、其人々の意見の發表に抑壓を加へるやうな事は、他に重大な理由のない限り、決して遣つた事がないのです。私は他の存在をそれ程に認めてゐる、卽ち他に夫丈の自由を與へてゐるのです。だから向ふの氣が進まないのに、いくら私が汚辱を感ずるやうな事があつても、決して助力は賴めないのです。其所が個人主義の淋しさです。個人主義は人を目標として向背を決する前に、まづ理非を明らめて、去就を定めるのだから、或場合にはたつた一人ぽつちになつて、淋しい心持がするのです。」と言つてゐる。

漱石は、明治四十三年（一九一〇）七月の『鑑賞の統一と獨立』の中で、「余は近來若い人々と接觸して、近代の作物又は現今の日本で出版になる創作に就いて批判的の意見を交換する事が多い。

中には運よく一致する事がある。たまには首尾よく先方で余の評價を容れてくれる事がある。けれども左樣容易く埒のあかない時が往々ある。さうして雙方とも下らないで分れて仕舞ふ。そんな時に余はどうしても余に反對する若い人の評價が間違つてゐて、自分の方が正しい氣がしてならぬ。或場合にはあれの云ふ事は飛んでもない誤謬だと確信する事もある。新聞雜誌に出る月々の創作に對する批評などに關してはことに此感が深い。余は此等の評壇を擔任する專門家に對して惡意を抱くがためにことさらに自白するのではないが、稀にはよくあんな事が云へたものだと思ふ事さへあつた。／此心持の底には彼より我の方が、評價に於て優つてゐるといふ自信がある。彼も正じかるべき筈であるし、我も間違つて居らぬと公平に主張するよりも、彼は自家の見地を棄てゝ我に從ふのが當然だといふ斷定がある。少くともさう云ふ希望がある。それ所ではない、彼にして我ほどの鑑賞力があつたなら必ず我に一致するだらうにと云ふ己惚がある。一言にして蔽へば、作物の評價には統一がありたきものである。又統一があるべき筈であるといふ氣に充ちてゐる。然らざれば文壇は滅茶々々だと云ふ感がある。紛糾支離の結果どうなるだらうといふ恐れが潛んでゐる。／昔は他の權威に堪へぬ結果、自己の舌で冷暖を味はねばならぬと主張して、人は人、我は我の極差別觀を立てようとした余が、夫で正鵠を得たものと思ひ過ごした今日迄も立脚地を立て直す必要も見認めないのに、自身はいつか冥々のうちに自分一個の批判を大なる權

威として他の鑑賞力の上に被らさうと冀つてゐた。しかも夫は正しい事と信じてゐた。」と書いてゐる。此所にも無論箇人主義者としての漱石の反省があるにはあるが、然し此所には寧ろ「彼にして我ほどの鑑賞力があつたなら必ず我に一致するだらうに」といふ自信の下に、鑑賞を自分自身によつて統一したい、熾烈な希望が燃え立つてゐる。人に自分の考へる如く考へさせたい、人も自分の感じる如く感じるべきであるといふ、活潑な要求が働いてゐる。それが『私の個人主義』へ來ると、淋しい諦めとなつて、「我は我の行くべき道を勝手に行く丈で、さうして是と同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばら／＼にならなければなりません。其所が淋しいのです。」と言ひながら、「黨派心がなくつて理非がある」道理の世界に生きようとするのである。

漱石が此所でかういふ事を言ひ得る爲には、爾後四ケ年間を費さなければならなかつたのだと言ふ事が出來る。少くとも是は、漱石が『行人』を書いてしまひ、また『こゝろ』を書いてしまひ、自分の心の淋しさのどん底を突き拔けて來た後でなければ、敢て言ふ事が出來なかつた言葉だつたのに違ひないのである。漱石は此所で、淋しくてもなんでも、自分は理非の世界、卽ち道理の世界に生き通すのだといふ事を、人人の前にはつきり宣言する。『行人』の一郎は「他(ひと)の存在をそれ程に認め」「卽ち他に夫丈の自由を與へ」る事が出來なかつたから、あのやうに煩悶しな

ければならなかつた。『こゝろ』の先生は、自分の行く道を決定するものは道理の世界より外にはないと承知してゐながら、自分の過去に於いて、道理の上からどうしても許す事の出來ない罪を犯してゐた爲に、自らを殺さざるを得なかつた。換言すれば『こゝろ』の先生は、道理の世界を榮えしめる爲に、道理に戻つた自分自身を殺すのである。『こゝろ』の先生は、「他の存在をそれ程に認め」「卽ち他に夫丈の自由を與へ」るのみならず、自分自身の「存在」を認め、自分自身の「自由」を持つ事を許されない人間として、人を愛し得る人、人を愛せずにはゐられない人であるにも拘はらず、自分の懷に飛び込んで來るものを、手をひろげては抱き締める事の出來ない人であつた。その意味で『行人』の一郎には自己を肯定する心があり過ぎ、『こゝろ』の先生には、自己否定の心があり過ぎた。その二つのものの綜合のやうなものとして、この講演が生れて來るのである。

愛は人と人とを結び付ける代りに、箇人的なものになり易い。向背は多く「人を目標として」決せられる。然し道理は、人を超えたものである。道理に從ふ爲には、ある場合、人は、自分の最も愛する者をも、踏みにじつて進まなければならない。それは名狀する事の出來ない淋しさである。然し道理に從ふといふ以上、人はその淋しさに堪へるだけの、覺悟を立てなければならない。漱石は晩年、自分の娘が突然片眼になつて現はれて來ても、ああさうかと言つて見てゐられ

るやうな人間になりたいと言つてゐたが、漱石のやうに「愛し得る人、愛せずにはゐられない人」が、その淋しさに堪へて、道理に從つて生きる覺悟を立てたといふ事は、いかに漱石がその愛の爲に惱まなければならなかつたかを指示するとともに、いかに漱石が道理を以つて貫ぬく事によつて、その愛を淨化したい希望に燃えてゐたかを物語るものであると思ふ。道理を以つて貫ぬかれた愛は、言はば佛陀の愛であり、神の愛であり、天の愛である。漱石の這入らうとした道とは、外の言葉で言へば、佛陀の慈悲の道だといふ事も出來るのである。

七〇 『硝子戸の中』

『硝子戸の中』が新聞に出だしたのは、大正四年(一九一五)一月十三日の事であり、出了つたのは、二月二十三日の事である。是は三十九回に亙る、一回もしくは二回、長くて三回で讀み切りの小品を集めたものであるが、漱石の書いた小品の内で、是ほど透明な感じのするものは、外に類がない。殊にそのどれにも通じて、底を流れる寂しさと悲しさとが、全體にしつとりした味を與へて、不思議に複雜な魅力となつてゐるのは、恐らく漱石の心持が、段段高く深くなりまさつて行つてゐる證據なのだらうと思ふ。

其所で漱石は、再び死の問題をとりあげた。――「不愉快に充ちた人生をとぼ〳〵辿りつゝある私は、自分の何時か一度到着しなければならない死といふ境地に就いて常に考へてゐる。さうして其死といふものを生よりは樂なものだとばかり信じてゐる。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の狀態だと思ふ事もある。／「死は生よりも尊とい」／斯ういふ言葉が近頃では絕

えず私の胸を往來するやうになつた。／然し現在の私は今のあたりに生きてゐる。私の父母、私の祖父母、私の曾祖父母、それから順次に溯つて、百年、二百年、乃至千年萬年の間に馴致された習慣を、私一代で解脫する事が出來ないので、私は依然として此生に執着してゐるのである。／だから私の他に與へる助言は何うしても此生の許す範圍内に於てしなければ濟まない樣に思ふ。何ういふ風に生きて行くかといふ狹い區域の中でばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向はなければならないと思ふ。既に生の中に活動する自分を認め、又其の生の中に呼吸する他人を認める以上は、互の根本義は如何に苦しくても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釋するのが當り前であるから。」と、漱石は言つてゐる。更に語をついで漱石は、「とても回復の見込みのつかない程深く自分の胸を傷けられ」「同時に其傷が普通の人の經驗にないやうな美しい思ひ出の種となつて其人の面を輝かしてゐ」る相手に向つて、「凡てを癒す「時」の流れに從つて下れ」と助言し、死よりも生を選めと助言した自分に就いて、「斯くして常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出來なかつた。しかも私にはそれが實行上に於る自分を、凡庸な自然主義者として證據立てたやうに見えてならなかつた。私は今でも半信半疑の眼で凝と自分の心を眺めてゐる。」と言つてゐる。

是は、漱石自身も言つてゐるやうに、明らかに矛盾であつた。然し是は、已むを得ない矛盾で

あつた。漱石は林原耕三に宛てた手紙の中ででも、自分は「無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ」から、「自殺はやり度ない」と言つてゐる。同時に自分は「生より死を擇ぶ」氣持にはなつてゐるが、「此點に於て人を動かしたくない、卽ち君の樣なものを私の力で私と同意見にする事を好まない」と言つてゐる。といふ事は、漱石が、この考へ方は自分にとつては必然であつても、一般的に必然であるかどうか分からない、他人にまでそれを押し廣める事は、愼むべきであると考へてゐたといふ事を意味する。それは人間には、誰にでも、所謂「生きんとする盲目の意志」があり、よほど特殊な事情でもあるのでない限り、この意志に彈壓を加へるといふ事は、到底不可能な事であるといふ事を、漱石がよく承知してゐたからである。勿論漱石には「生きんとする盲目の意志」をそのまま肯定して生きるといふ事は、苦痛であつた。苦痛であるからこそ漱石は、死を絕對であると考へ、其所から死を「人間として達し得る最上至高の狀態」とも考へなければゐられなくなつてゐるのである。ただ是は、漱石の觀念の世界に於ける出來事であつて、漱石の現實の世界に於ける出來事ではなかつた。現實の世界では、漱石の觀念の世界が、それを欲する欲しないに拘はらず、漱石の「生きんとする盲目の意志」が、奧深い所から漱石を支配する。それだから漱石は「無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭ふ」と言つて、自殺を否定するとともに、他人に對しても、假令死がその人にとつて好ましく見えるやうな場合でも、その人

に、生きよと勸めるのである。漱石の惱みは、漱石の觀念の世界が、漱石の現實の世界を、十分支配し得ないといふ點にあつた。然し是は、當時の漱石にとつて、それ以上どうする事も出來ない、矛盾であつた。漱石は更に深く道に入らうと努める外はないのである。

然も漱石は、その女の人が「先生に送つて頂くのは光榮で御座います」と言つた時に、「本當に光榮と思ひますか」と眞面目に反問し、「思ひます」とはつきりした返事を受け取つたあとで、「そんなら死なずに生きて居らつしやい」と助言したと、書いてゐる。是は恐らく漱石が、人間に、他人の好意や親切に對する感謝の心持が動く限り、その人にとつて世界は住み甲斐のある世界である、從つて、その人は當然生きてゐるべきであると考へてゐた所から出た言葉なのだらうと思ふ。然し漱石自身には、他人の好意や親切や――愛に對する感謝の心持は十分にあつても、それに値ひする他人の愛が、決して見出される事がないのである。『こゝろ』の先生は、許され難い罪を犯した爲に、自分には、他人の愛を受ける資格がないのだと言つた。然るに漱石は、その他人の愛の永久性を信じる事が出來ないのである。『こゝろ』の私のやうな、純眞な青年が、全幅の精神を傾けて自分の胸の中に跳り込まうと逸つても、漱石は、先生と同じやうに、未來の侮辱を受けない爲に、もしくは未來のもつと大きな淋しさを避ける爲に、今の淋しさに堪へたいと言つて、その私の誠を受けまいとするほど、人間の愛の永久性を信じる事が出來なくなつてゐるの

である。それならそれでよかつた。然し漱石は、一方では、愛したくてたまらないのである。また愛が受けたくてたまらないのである。然し事實は事毎に、それが不可能である事を、漱石に證明する。漱石は結局この生の世界に執着する心を押へて、自分の目前に迫つてゐる死の世界との和解を志さなければならなかつた。さうしてもなほ生の世界は、漱石を牽いて已まないのである。——是は或は「生きんとする盲目の意志」の變容に過ぎないのかも知れなかつたが、ともかく此所にも漱石の矛盾があつた。

然し漱石は、この矛盾から來る內面の摩擦を、寧ろ自然が自然に調和してくれるのを待つて、無闇に焦り苛立つて、一日も早く一つのものに綜合しようとはしなかつた。それは漱石が、例へば何とか主義といふやうな名前を振り翳して、無理に人生を一つのイズムに統一しようとする生き方を陋としてゐた爲もあつたには違ひないが、それよりも、その矛盾が、どつちも漱石にとつて拔き差しのならない必然から來てゐる爲に、一朝一夕で調和され得る性質のものでない事を、漱石がよく承知してゐた爲だつたのに違ひない。然もその矛盾を矛盾として指摘し、あれほど死を「人間として達し得る最上至高の狀態だ」とまで考へる自分が、どうして自分ででも生き他人にも生きる事を勸め得るのかと、「半信半疑の眼で凝と自分の心を眺めてゐる」と告白してゐるといふ事は、漱石がこの矛盾に堪へられないでゐる事を物語るものである。同時に漱石がそれを

「半信半疑の眼で凝と」眺めてゐるといふ事は、その矛盾に對する漱石の態度が、錬れて、餘裕を持つてゐる事を暗示する。

漱石は死を生の中に織り込み、生を死の中に織り込み、かうして相互に反撥し矛盾する二つのものを、一つのものに連接させたいと希つた。「則天去私」はその事を可能にする唯一の道であつた。「則天去私」の道が成就し、漱石の「生きんとする盲目の意志」が、道理によつて馴致され、常に道理に從つて動くやうになるならば、恐らく漱石の生と死とはなだらかに繋がり合ふ事が出來たに違ひない。愛の問題に就いても、同じ事が言はれ得る。然し一人の人間の仕事として、この仕事は、容易ならぬ大事業であつた。觀念は出しやばつても、現實は是に伴はない。多少の鍛錬は出來たつもりでゐても、すぐそのあとでは、自分の高みはがらりと顚覆する。『硝子戸の中』の第三十九の中で漱石は、「私は今迄他（ひと）の事と私の事をごちや〳〵に書いた。他（ひと）の事を書くときには、成るべく相手の迷惑にならないやうにとの掛念があつた。私の身の上を語る時分には、却て比較的自由な空氣の中に呼吸する事が出來た。それでも私はまだ私に對して全く色氣を取り除き得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の衒氣がないにしても、もつと卑しい所、もつと惡い所、もつと面目を失するやうな自分の缺點を、つい發表しずに仕舞つた。聖オーガスチンの懺悔、ルソーの懺悔、オピアムイーターの懺悔、——それをいくら辿つて行つても、

本當の事實は人間の力で敍述出來る筈がないと誰かゞ云つた事がある。況して私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云ひ得るならば、——頗る明るい處からばかり寫されてゐただらう。其處に或人は一種の不快を感ずるかも知れない。然し私自身は今其不快の上に跨つて、一般の人類をひろく見渡しながら微笑してゐるのである。今迄詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐるのである。」と書いてゐるが、此所には何か辯解がましい心持がある。然もそれは、他人に對する辯解であるよりも、寧ろ自分自身の中にある或心持に對する辯解である。さうしてその或心持こそ漱石を驅つて、更にその矛盾の調和へと深入りさせる、動力をなすものであつたやうに思はれる。事實自分の仕事が挫折しても顚覆しても、更に勇氣を振つてその仕事を遂行させようとするものが漱石の中に住んでゐるのでない限り、漱石は、「もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の缺點」を、次いで書かれた『道草』で、縱横に剔出する事の出來る筈がたいのである。

七一　『道草』

漱石は『道草』を書き出す前に、京都に遊びに行つた。是は、純粋に遊ぶ事を目的とした、旅であつた。漱石は大正四年（一九一五）二月十四日に『硝子戸の中』を書き上げたが、三月九日に、京都郊外の深草に居を移した津田青楓の所へ、「御安着の由結構です僕も遊びに行きたくなつた小説は四月一日頃から書き出せばどうか間に合ふらしいのです夫で其前なら少しはひまも出來ると思ひますまだ是非行くとまで決心もしてゐませんが大分心は動いてゐるのです、然し行くとすれば矢張り京都のどこかへ宿をとつてさうして君の宅へ遊びにでも出掛る譯になるのでせうが、そんな黠についてもし君の心に餘裕があるなら注意してくれませんか、僕は京都に少々知人があるが大學の人などに挨拶に廻るのも面倒だから人に知られないで呑氣に遊びたいのです其邊は御含みを願ひたいのです、まだはつきりともしないのに既に取極めたやうな事をいつて自分でも變です。／畫を見てもらふ人がゐなくなつたので少々困つてゐます　以上」と書いてゐる。津田青

楓は西川一草亭と相談の上、宿を京都木屋町の北大嘉にきめ、漱石がいつ來ても可い準備をした。漱石は三月十九日東京を出發した。

京都では漱石は、西川一草亭、津田青楓の案内で、或は一力の大石忌へ行き、或は三年坂の阿古屋茶屋へ行き、或は磯田多佳、野村君、梅垣きぬ(金之助)などに紹介され、或は一草亭の去風洞を訪ひ、或は深草に青楓居を訪ひ、黄檗に赴き宇治に向ひなどして、三月二十二日まで席暖るに遑のないほど遊び廻つてゐたが、二十日に一寸痛んだ胃が、二十三日には段段惡くなり、二十四日にはどうも工合がよくないので、到頭明日の、二十五日には歸らうと決心する事になつた。然しその明日の二十五日が來て見ると、胃の痛みが愈劇しくなつたので、漱石は豫約した寢臺を斷つて、到頭寐こんでしまつた。然もこの二十五日には、高田庄吉の所へ片づいてゐる姉のふさが危篤だといふので、漱石の所へ電報が來るのである。その日の日記に漱石は、「歸れば此方が危篤になるばかりだから仕方がないとあきらめる。」と書いてゐる。漱石は津田青楓と一緒に奈良へ遊びに行く計畫を立ててゐたが、それも無論中止になつた。

もつとも今度の病氣は、それほど重態ではなかつた。三月二十八日漱石は鏡子に宛てて、「病氣もほぼよろしく候色々な人に世話になり候、ことに津田君と津田君の兄さんと御多佳さんの世話になり候津田君は寐てゐるうち始終ついてゐてくれました、姉は氣の毒をしました、歸れない

でゐるかつた」と書いてゐる。然し、重態ではなかつたが、病氣は一度だけでは濟まなかつた。『漱石の思ひ出』によると、もう大抵良いから歸るといふので、西川一草亭だの津田青楓だの、いろいろ世話になつた人達を磯田多佳の所に招いて、一緒に夕御飯を食べた所、その晩又惡くなつて、到頭磯田多佳の所に寐こんでしまつたのださうである。みんなが驚いて鏡子へ電報を打つた。鏡子はすぐやつて來た。漱石はそれほど惡かつたわけではなかつたといふが、それでも三月三十日から四月八日までは、日記が空白になつてゐる。そのあとは、鏡子が來たのを機會に、京都を見物させた上で、四月十六日の夜行で、漱石は東京へ歸つた。

京都に滯在してゐるうちの、三月二十一日の日記に、漱石は津田青楓に、「自分の今の考、無我になるべき覺悟を話」したと書いてゐる。恐らく同じ大正四年の夏のころと推定される「斷片」の中には、「〇大我は無我と一ナリ故に自力は他力と通ず」といふ言葉があり、また恐らく同時代の別な所には、「〇心機一轉。　外部の刺戟による。又内部の膠着力による。／〇一度絕對の境地に達して、又相對に首を出したものは容易に心機一轉が出來る／〇屢絕對の境地に達するものは屢心機一轉する事を得／〇自由に絕對の境地に入るものは自由に心機の一轉を得」といふ言葉がある。無我とは我を無くする事である。私を無くする事である。然も我といひ私といひ、人生に於けるすべての醜は、結局「生きんとする盲目の意志」とともにあるものである。我を無くし、

私を無くしようとする事は、從つて、この「生きんとする盲目の意志」を殺戮しないまでも、それが盲目的である事から理性的である事へ、高め淨めようとする欲求であるのに外ならない。然も神を自分の外に置くと、自分の內に置くとの差別なく、他力と自力との區別なく、自分の心を自分で自由に支配する事の出來る人間は、換言すれば心の赴く所に從つて矩を踰えずに生き得る人間は、「自由に心機の一轉を得」て、圓滿無礙に生活する事の出來る人間でなければならない。『行人』の一郎が庶幾した「絕對の境地」は、此所でも亦漱石によつて問題にされてゐる。さうして漱石は、「一度」と「屢」と「自由に」といふ言葉を用ひて、自分の前途がまだまだ遼遠である事を思ひ、自分の精進になほ一層の拍車を加へようとしてゐるかに見える。同じころの「斷片」に漱石は、「〇猫が庭の木立の下に寐てゐる。椅子に腰をかけた私を見てゐる。姿勢は落付拂つてゐる。然し呼吸がはげしい。自分に似てゐる」と書いてゐるが、まつたく漱石は、ぽつねんと『硝子戶の中』に閉ぢ籠つてゐても、また木屋町の宿屋で、長い春の日を書畫に明かし暮ししてゐても、頭の中には、實に切迫した動亂を藏してゐたのである。

四月十八日、京都から歸つて來た翌日、漱石は鬼村元成に宛てて、「私は禪學者ではありませんが法語類（ことに假名法語類）は少し讀みました然し道に入る事は出來ませんたゞの凡夫で恐縮してゐます」と書いてゐる。また四月二十二日富澤敬道へ宛てては、「私はあなたよりいくつ年上か

知りませんがあなたが立派な師家になられた時あなたの提唱を聽く迄生きてゐたいと願つてゐます其時もし死んでゐたらどうぞ私の墓の前で御經でも上げて下さい又間に合つたら葬式の時來て引導を渡して下さい私に宗旨はありませんが私に好意をもつてくれる偉い坊さんの讀經が一番ありがたいと考へます、」と書いてゐる。自分を平凡尋常な人間であると、しかと思ひ込み得るといふ事は、我の強い人間にとつて、容易に成就する事の出來る心構ではない。いくらその心構が出來てゐても、何所かに少しでも隙がありさへすれば、突如として我は其所から芽を吹き出す。修善寺大患以後、それを押へ、もしくはそれを吹き切る爲に、『彼岸過迄』を書き、『行人』を書き、『こゝろ』を書いて來た漱石は、大正四年(一九一五)のこの時分になつて、やつと心底から自分を「ただの凡夫」であると考へ、「あなたが立派な師家になられた時あなたの提唱を聽く迄生きてゐたいと願」ふほど、謙虚の心持になる事が出來たのかも知れない。少くともこの心境が漱石の中に、搖ぎなく据ゑつけられてゐるのでなければ、漱石は『道草』の題材を、『道草』が現在あるやうな態度で取り扱ふ事が出來なかつた筈である。

然し例へば五月三日磯田多佳に宛てて漱石が、「御多佳さん「硝子戸の中」が屆かないでおこつてゐたさうだが、本はちやんと小包で送つたのですよ。さつき本屋へ問合せたら本屋の帳面にも磯田たかといふ名前が載つてゐるといつて來たのです。私はあの時三四十冊の本を取寄せて夫に

一々署名してそれを本屋からみんなに送らせたのだから間違はありません。もしそれが屆いてゐないとするなら天罰に違ない。御前は僕を北野の天神樣へ連れて行くと云つて其日斷りなしに宇治へ遊びに行つてしまつたぢやないか。あゝいふ無責任な事をすると決していゝむくひは來ないものと思つて御出で。本がこないと云つておこるより僕の方がおこつてゐると思ふのが順序ですよ。それはとにかく本はたしかに送つたのです。然し先年北海道の人に本をやつたら屆かないといふので其人に郵便局をしらべさせたら隅の方にまぎれ込んでゐた例もあるからことによると郵便局に轉がつてゐるかも知れない。もう一冊送る位は何でもないけれども屆かない譯がないのに屆かないのだから郵便局にひそんでゐやしないかと思ふのですが、それを問ひ合せる勇氣がありますか。もし面倒なら端書をもう一遍およこし、さうしたらすぐ送ります。」と書いてゐるのや、五月十六日同じ人に宛てて、「あなたをうそつきと云つた事についてはどうも取消す氣になりません。あなたがあやまつてくれたのは嬉しいが、そんな約束をした覺がないといふに至つてはどうも空とぼけてごま化してゐるやうで心持が好くありません。あなたは親切な人でした夫から話をして大變面白い人でした。私はそれをよく承知してゐるのです。然しあの事以來私はあなたもやつぱり黑人だといふ感じが胸のうちに出て來ました。私はいやがらせにこんな事を書くのではありません。愚癡でもありません。たゞ一度つき合ひ出したあなた――美くしい好い所を持つて

ゐるあなたに對して冷淡になりたくないからこんな事をいつ迄も云ふのです。中途で交際が途切れたりしたら殘念だから云ふのです。私はあなたと一ケ月の交際中にあなたの面白い所親切な所を澤山見ました。然し倫理上の人格といつたやうな點については雙方ともに別段の感化を受けずに別れてしまつたやうに思ふのです。そこでこんな疑問が自然胸のうちに湧いてくるのです。手短かにいふと、私があなたをそらとぼけてゐるといふのが事實でないとすると私は惡人になるのです。夫からもし夫が事實であるとすると、反對にあなたの方が惡人に變化するのです。そこが際どい所で、そこを互に打ち明けて惡人の方が非を悔いて善人の方に心を入れかへてあやまるのが人格の感化といふのです。然し今私はあなたが忘れたと云つてもさう思へないやつぱりごま化してゐるとしか考へられないのだから、あなたは私をまだ感化する程の德を私に及ぼしてゐないし、私も亦あなたを感化する丈の力を持つてゐないのです。私は自分の親愛する人に對してこの重大な點に於て交渉のないのを大變殘念に思ひます。是は黑人たる大友の女將の御多佳さんに云ふのではありません普通の素人としての御多佳さんに素人の友人なる私が云ふ事です。女將の料簡で野暮だとか不粹だとか云へば夫迄ですが、私は折角つき合ひ出したあなたに對してさうした黑人向の輕薄なつき合をしたくないから長々とこんな事を書きつらねるのです。私はあなたの先生でもなし敎育者でもないから冷淡にいゝ加減な挨拶をしてゐれば手數が省ける丈で自分の方は

樂なのですが私はなぜだかあなたに對してさうしたくないのです。私にはあなたの性質の底の方に善良な好いものが潛んでゐるとしか考へられないのです。それで是丈の事を野暮らしく長々と申し上げるのですからわるく取らないで下さい、又眞面目に聞いて下さい。」と書いてゐるのやと突き合せて、かういふ「たゞの凡夫で恐縮してゐます」と言ふやうな、自分を無價値と考へる謙虛な考へ方と是とが、どう繋がるかといふ疑問が起り得るかも知れない。一つは「道に入る事は出來ません」と言つてゐるのに對して、他は善惡曲直の別を說いて、相手を自分の高みへ引き上げようとしてゐるからである。

然し事實は是は、矛盾でもなんでもなかつた。漱石が「道に入る事は出來ません」と言つてゐるのは、言はば相手によつて代表されてゐる、道に向かつて物を言つてゐるのである。然し礒田多佳に物を言つてゐる場合は、「美くしい好い所を持つてゐる」相手が「空とぼけてごま化してゐるやう」なのが、自分を汚ごしてゐるやうで、殘念でならないから、それを注意し、それを改めさせたいと思ふからである。漱石が自分でいくら「道に入る事は出來ません」とは言つてゐても、漱石には正邪曲直善惡美醜を判斷する能力が、ある種の人人よりは、多分にあるといふ自信がある。この自信は、己惚ではなく、事實の正しい評價から來てゐる。道理に從ふ生活を生活しようとする以上、自分の周圍に道理に戻つたものと、公平に判斷され得るものが存在する以上、それ

が道理に戻つたものである事を、少くとも相手に指摘してやる事は、道理に從つて生きようとする者の義務である。假令それを義務として遂行しないまでも、相手に對する高い愛から、人はそれをしないではゐられないに違ひない。漱石は「私はあなたの先生でもなし教育者でもないから冷淡にいゝ加減な挨拶をしてゐれば手數が省ける丈で自分の方は樂なのですが私はなぜだかあなたに對してさうしたくないのです。私にはあなたの性質の底の方に善良な好いものが潜んでゐるとしか考へられないのです。」と言つてゐる。漱石は多佳の底を流れる「善良な好いもの」を愛した。それだから「この重大な點に於て交渉」する事なしに、「中途で交際が途切れたりしたら殘念だから」、敢て言ふ氣になつたのである。相手に對する愛がなかつたら、漱石は必ずこんな事は言はなかつたに違ひない。

もつとも六月十五日、漱石が『道草』を書いてゐる途中、漱石は武者小路實篤に宛てて、「御手紙を拜見致しました。私はたしかにあの文章を見ました。然し少しも氣になりませんでした。それは自分のものでないからかも知れませんが、あゝいふ所へ出るものは好加減な出鱈目に近い事が多いといふのが大理由かと思ひます。然し間違はだれしも嬉しくはありません、ことにあなたのやうな正直な人から見れば厭でせう。それを神經質だと云つて笑ふのは、其うらにある正しい氣性を理會し得ないスレツカラシの云ふ事です。私はあなたに同情します。／……／私もあなた

と同じ性格があるので、こんな事によく氣を惱ませたり氣を腐らせたりしました。然しこんな事はいつ迄經つても續々出て來て際限がないので、近頃は出來る丈これらに超越する工夫をして居ります。私は隨分人から惡口やら誹謗を受けました。然し私は默然としてゐました。猫を書いた時多くの人は飜案か、又は方々から盜んだものを並べたてたのだと解釋しました。そんな主意を發表したものさへあります。／武者小路さん。氣に入らない事、癪に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く澤山あります。それを淸める事は人間の力で出來ません。それと戰ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものならば、出來る丈そちらの方の修養をお互にしたいと思ひますがどうでせう。／私は年に合せて氣の若い方ですが、近來漸くそつちの方角に足を向け出しました。時勢は私よりも先に立つてゐます。あなたがそちらへ眼をつけるやうになるのは今の私よりもずつと若い時分の事だらうと信じます。以上」と書いてゐる。この立場からすれば、漱石は多佳を責めるより前に、許すべきであつたといふ說も成り立ちさうである。然し漱石から言へば、許すといふ事は、是非曲直の區別を曖昧にするといふ事ではなかつた。殊に道理を以つて愛を貫ぬき、さうする事によつて、愛の淨化を意圖してゐる漱石である。自分に親しく、自分の愛してゐる者が、自分のした事の是非曲直も知らずに、渾沌として生きてゐるといふ事は、漱石にとつて到底堪へられない事であつた。〃漱石はそれを指摘する。ただ忘れてならない事は、漱石が指摘するの

は、相手を愛するが爲だといふ事である。愛するが爲に漱石は、相手に曲は曲、直は直、是は是、非は非と、はつきりしたけぢめを付けて見せようとするのである。「ゆるす」「ゆる」さないの問題から言へば、漱石は、初めから「ゆる」したいのである。――相手の是非曲直に對するはつきりした判斷を持つた上で、それを越えて相手を許し得る爲には、人は、自分も亦所詮は相手と同じもの、相手が「たゞの凡夫」であると同じやうに、自分も亦「たゞの凡夫」であるに過ぎないといふ、深切な反省に裏打された、同病相憐む心を、慈憐の心を、胸に蓄へてゐる事を必要とする。是は言ふまでもない事である。然も『道草』を貫ぬく心は、正にこの心に外ならなかつた。

漱石は此所で、自分が最も惱み、自分が最も我を發揮し、それ故にまた自分が最も愛著を持つてゐるとも言へる期間、卽ち漱石がロンドン留學を卒へて東京に家を持つた明治三十六年から、『猫』を書き出してから暫くの間、明治三十八九年ごろまでの自分の生活を中心として、それに、それまでの自分の生ひ立ち、親戚關係、生活氣分、嘆きや歡びや苦しみや樂みや惱みや憤りや、その他必要なもの一切を盛り込んで、赤裸裸な自分の自敍傳を書いた。さうして漱石は、過去から現在(『道草』に於ける)に亙る自分の行爲を、驚くべく冷嚴に批評して、現在自分が到達してゐる、心境の高みを示した。

『硝子戸の中』で漱石は、自分の病氣がまたいつ爆發するか分からない狀態にあるにも拘はら



大正四年七月（早稲田南町の書齋南縁）



早稲田南町の書齋（右）の入口と客間（左）の入口

ず、目下は小康を得てゐるのを、人から訊かれて、癒つたとも言へず、また癒らないとも言へず、從つて「何うか斯うか生きてゐ」るとより返事のしやうがなかつたといふ事を書いてゐる。然るにある友人から「繼續」といふ言葉を教へられ、それが實に適切に自分の現下の狀態を表現するものであると考へ、その後は必ず「病氣はまだ繼續中です」と答へる事にしたといふが、漱石はその敍述に引き續いて、「繼續中のものは恐らく私の病氣ばかりではないだらう。私の説明を聞いて、笑談だと思つて笑ふ人、解らないで默つてゐる人、同情の念に驅られて氣の毒らしい顏をする人、——凡て是等の人の心の奥には、私の知らない、又自分達さへ氣の付かない、繼續中のものがいくらでも潜んでゐるのではなからうか。もし彼等の胸に響くやうな大きな音で、それが一度に破裂したら、彼等は果して何う思ふだらう。彼等の記憶は其時最早彼等に向つて何物をも語らないだらう。過去の自覺はとくに消えてしまつてゐるだらう。今と昔と又其昔の間に何等の因果を認める事の出來ない彼等は、さういふ結果に陷つた時、何と自分を解釋して見る氣だらう。所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂彈を、思ひ〳〵に抱きながら、一人殘らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないで、仕合せなんだらう。／私は私の病氣が繼續であるといふ事に氣が付いた時、歐洲の戰爭も恐らく何時の世からかの繼續だらうと考へた。けれども、それが何處から何う始ま

つて、何う曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、繼續といふ言葉を解しない一般の人を、私は却て羨ましく思つてゐる。」と言つてゐる。『道草』の結末には、「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も續くのさ。たゞ色々な形に變るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」と、健三が「吐き出す様に苦々し」い口調でいふと、お住が「おゝ好い子だ〱。御父さまの仰しやる事は何だかちつとも分りやしないわね」と言ひ言ひ、幾度か赤ん坊の頬ぺたにキッスをする所が描かれる。一度起つた事はいつまでも「繼續」する。人間の苦惱は、さういふ因緣が幾本も幾本も絡まり合つて、ある時はよぢれ、ある時はもつれ、それが絕えず首枷となり足枷となる所から來る。健三はそれを知つてゐるから、事件が片づいたと言つて喜んでゐるお住の様子が腹立たしく、自分の考へを「吐き出す様に苦々し」く相手の顏に投げつけるのである。然しお住は、そんな事は譯の分からない理窟としか考へず、殊に「吐き出す様に苦々し」く投げつけられて見れば、反抗心も起つて、その言葉の奥にある意味などてんで考へて見ようともせず、只管目前の赤ん坊の愛に浸らうとするのである。

此所に漱石の人生觀の一部があるとともに、此所に漱石が『道草』で、健三の「今と昔と又其昔の間」の「因果」を追求しようとした、意圖の漏洩がある。同時に此所には亦、漱石の理會されない淋しさの一部が表現されてもゐるのである。勿論漱石は此所では、『行人』の一郎の場合の

やうに、健三と一緒になつて、自分の理會されない淋しさを、天下に向かつて訴へてはゐない。『道草』では、健三が理會されなくて淋しい如くに、お住も亦ある意味で理會されなくて淋しいのである。健三がお住を「しぶとい女」だと感じると同じ程度に、お住は健三を權柄づくで人を押へつけようとする強情我慢な人間だと感じてゐる。その、互が互に對して持つ不平と不滿と反撥と憎惡とを、漱石は一一丁寧に檢討して、その病根が何所に潛んでゐるかを、丹念に、又はつきりと指摘する。此所では健三は、漱石の分身なるが故の、依怙贔屓を受けてゐない。また此所ではお住は、健三から憎まれてゐる如くに、漱石からは憎まれてゐない。お住は、『行人』のお直のやうに、謎として投げ出されてゐるのでもなく、『こゝろ』の奥さんのやうに貞淑そのものとして描き出されてゐるのでもなく、普通の感情と普通の肉體といくらかの強情といくらかのヒステリと又多少の虛僞と多少の技巧とを持つた、當り前の人間として描かれる。然し漱石はお住の道理はお住の道理として、はつきりそれを認めるのに吝かではないのである。同じやうに漱石は、洋行から歸つて敎師を勤め、傍ら自己の仕事に沒頭して、妻子は自分について來るべきで、自分は妻子の方へ下りて行くべきではないと考へながら、相手の要求を充たしてやるよりも前に、まづ相手が自分の要求を充たすべきであるとして、淋しさに苛苛してゐる健三を、少しも假借する所なく、その理と非とをはつきり區別して、讀者の前に提示するのである。――自分を主人公と

し、自分の閲歴を殆んどそのまま此所に盛り込んで、是ほど身贔屓なしに、客觀的に、また感傷なしに、自己を眺め、把握し、描寫するといふ事は、自らの上に十分の鍛錬と工夫とを加へた魂でなければ、到底よくし得る事ではない。漱石の「無我になるべき覺悟」は、漱石の「則天去私」の覺悟は、決して無駄には立てられなかつた。

然し人は、道に深入りすればするほど、その道を測り知るべからざるほど深いものと感じ、從つて自分のその道に入る事が愈淺いやうに感じる事を常とする。漱石も「則天去私」の道、「無我になるべき覺悟」に深入りすればするほど、ますます精進の必要を感じ、異常に緊張しては、造次顚沛にもこの事に思ひを潛めたものらしく見える。大正四年（一九一五）夏ごろの「斷片」の中で、漱石は「○生よりも死、然し是では生を厭ふといふ意味があるから、生死を一貫しなくてはならない、（もしくは超越）、すると現象卽實在、相對卽絕對でなくては不可になる」「それは理窟でさうなる順序だと考へる丈なのでせう」「さうかも知れない」「考へてそこへ到れるのですか」「たゞ行きたいと思ふのです」といふ對話を記錄してゐる。大正四年十一月ごろの「斷片」には、「(8)生死ハ透脫スベキモノナリ回避スベキ者ニアラズ。毀譽モ共通リナリ。」といふのがある。又同じ時期らしい「斷片」の中に、「○動物をいくら研究しても動物にはなれない」といふのがある。漱石は、考へては打ち毀し、考へては打ち毀ししながら、自分の考へを打ち堅めつつ、徐徐に前

進する。此所で「生よりも死」と言ふのでは「生を厭ふといふ意味がある」、生死を一貫もしくは超越しなくてはならない、卽ち「生死ハ透脱スベキモノナリ囘避スベキ者ニアラズ」と漱石が言つてゐる言葉と、漱石が『硝子戸の中』で、自分自身の矛盾を指摘してゐる言葉を比較するとき、我我は漱石の、少くとも觀念の世界に於ける、前進を具體的に認める事が出來ると思ふ。此所では、曾て死に向つて和解の手が差し伸べられたと同じ意味で、漱石によつて、生に向つても和解の手が差し伸べられてゐるのである。「生を厭ふ」是までの立場から、漱石は「生を厭ふといふ意味があ」つてはいけないといふ、新しい立場に移らうとする。さうして「相對卽絶對」・「現象卽實在」と見得る立場に移らうとする。是は言ふまでもなくゲーテが『ファウスト』第二部の最後で Chorus mysticus に合唱せしめた、地上の一切のものは單なる比喩に過ぎないといふ詩句の思想と同一の思想を表現するものである。勿論漱石がその境地にまだ到り得てゐない事は、漱石が「たゞ行きたいと思ふのです」と言つてゐるのでも知れる。然し少くとも漱石が、漱石自身の必然に促がされて、さういふ境地に到達したいと、必死の努力を續けて來た事だけは、爭はれない。死は私のない天に歸る事である。その意味で死は、私から脱却しきれない、生よりも尊いものである事は、言ふまでもない。然しもしその生が「單なる比喩に過ぎない」ならば、——天の「比喩」であり、天への復歸を促がす天の模寫であるならば、その生の中にも我我は、生の

醜さとともに、何等かの點で天を宿してゐる美しさを發見する事が出來る筈である。その意味で「相對卽絕對」・「現象卽實在」の境地は、狗子に佛性を見る境地でなければならない。さうしてその境地に悟入する事が出來るならば、人は「生を厭ふといふ意味」なしに、生と死とを一つのものに貫ぬく事が出來るに違ひない。――漱石はその境地を庶幾する。

漱石がその境地を庶幾するのは、勿論漱石の必然から來てゐる。然し漱石をしてさういふ境地の存在を、具體的に想像せしめる手蔓となつたものは、恐らく漱石の書畫の世界である。更に嚴密に言へば先人の高い書畫の世界である。殊にこの方面で漱石を動かしたものは、良寬だつたらうと思ふ。

漱石が良寬の書に傾倒し、良寬の書を學び、良寬の書を持ちたがつてゐた事は、既に大正三年（一九一四）一月十八日山崎良平に宛てて、「拜啓良寬詩集一部御送被下正に落手仕候御厚意深く奉謝候上人の詩はまことに高きものにて古來の詩人中其匹少なきものと被存候へども平仄などは丸で頓着なきやにも被存候が如何にや然し斯道にくらき小生故しかと致した事は解らず候へば日本人として小生は只今其字句〔の〕妙を諷誦して滿足可致候上人の書は御地にても珍らしかるべく時々市場に出ても小生等には如何とも致しがたかるべきかとも存候へども若し相當の大さの軸物でも有之自分に適〔當〕な代價なら買ひ求め度と存候間御心掛願度候右御禮旁御願迄　匆々頓首」

と書いてやつてゐるのでも、およそ想像する事が出來る。然も同じ年の十一月五日森成麟造宛の手紙には、「良寛はしきり〔に〕欲いのですとても手には入りませんか」とあり、大正四年〔一九一五〕十一月七日同じ森成麟造宛の手紙にも、「時々先年御依賴した良寛の事を思ひ出します良寛などは手に入らないものとあきらめてはゐますが時々欲しくなりますもし緣があつたら忘れないで探して下さい」とあり、大正五年〔一九一六〕三月十六日三度び森成麟造に宛てて、漱石は「拜復良寛上人の筆蹟はかねてよりの希望にて年來御依賴致し置候處今回非常の御奮發にて懸賞の結果漸く御入手被下候由近來になき好報感謝の言葉もなく只管恐縮致候／良寛は世間にても珍重致し候が小生のはたゞ書家ならといふ意味にてはなく寧ろ良寛ならではといふ執心故菘翁だの山陽だのを珍重する意味で良寛を壁間に掛けて置くものを見ると有つまじき人が良寛を有つてゐるやうな氣がして少々不愉快になる位に候／さて良寛の珍跡なるは申す迄もなく從つて是を得るにも隨分骨の折れる位は承知致候所で是はどうしてもたゞで頂戴致すべき次第のものに無之故相應の代價を乍失禮御取り下さるやう願ひ上候御依賴の當初より其覺悟に有之候旨は其節旣に御話し致し候とも記憶致し居候へば誤解も有之間敷とは存じ候へども念の爲故わざと申添候たゞし貧生囊中幾何の餘裕あるかは疑問に候へば其邊は身分相應の所にとゞめ置き度是も御含迄に申上候／其外に拙筆御所望とあれば何なりと御意に從ひ塗抹可仕良寛を得る喜びに比ぶれば惡筆で耻をさらす

位はいくらでも辛防可仕候」と書いてゐる。同じく四月十二日漱石は四度び森成麟造に宛てて、「拝啓御上京の節は何の風情もなく失禮致候良寛和歌につき結果如何と案じ煩ひ居候處木浦氏手離しても差支なき旨の御報何よりの好都合に候十五圓だらうと百圓だらうと乃至千圓萬圓だらうともと〳〵買手の購買力と買ひたさの程度一つにて極り候もの其他に高いの安いのといふ標準は有り得べからざる品物に候へば幸身分相應の代價にて讓り受ける事相叶ひ候へば有難き仕合せに候此點につき大兄の一方ならぬ御盡力と木浦氏の所藏割愛の御好意とを深く感謝致し候／代金十五圓は荊妻に命じ爲替と致し此中に封入差出申候につき御落手被下度候早速經師屋を呼び兩幅とも仕立直し忙中の閑日月を得て良寛の面影に親しみ可申候」と書いてゐる。かういふ傾倒のし方は、漱石にとつて稀有の事である。是まで漱石は、詩歌・戲曲・小説といはず、あらゆる藝術品を、それぞれの美しさに於いて認め、その美しさを愛しはしたが、いつまでもそれに執著を持ち、いつまでもそれから影響を受け、もしくは自發的にそれを學ばうとするやうな事は、一度もないと言つてよかつた。然し良寛の書は、例外である。漱石は既に「良寛ならでは」とまでも言つてゐる。のみならず漱石は、あからさまに良寛の書を學んでゐる。大正三年(一九一四)七月の「酒渴愛江清」の一行もの(書簡第一六〇五號)など、まるで良寛そつくりの字である。あれほど自由と獨立とを愛した漱石が、良寛に對して是ほどの傾倒を示したといふ事は、まつたく驚くべき事

であつた。

是は無論漱石が良寛の詩を讀んで、良寛の心境の高さに欽慕の情を寄せたによるには違ひないが、然しそれよりもより以上に漱石を動かしたものは、良寛の書——漱石の所謂「難有い崇高な感じ」を文句なしに起させる、良寛の書だつたのである。書が藝術であるかないかといふ事に就いては、人によつていろいろ議論が岐れるには違ひない。然し漱石にとつてさういふ議論は、どうでもよかつた。ただ良寛の書が、良寛の「自己の表現」として、「難有い崇高な感じ」を起こさせる、その倫理的な高さが、何にもまして嬉しかつたのである。漱石は大正五年(一九一六)五月末、自分の手帳の中に、「〇倫理的にして始めて藝術的なり。眞に藝術的なるものは必ず倫理的なり。」と書き込んでゐるが、この「倫理的」といふ言葉の意味は、恐らく良寛の書が人に與へる感じを背景に置く時、最も適切に汲みとる事の出來る、獨特なものを持つてゐると思ふ。

三二　『明暗』

大正四年（一九一五）十一月九日ごろ、漱石は中村是公と一緒に湯河原へ遊びに行き、十七日に東京へ歸つて來た。然るに十二月の末、元日組み込みの原稿を書く筈になつてゐた漱石は、リューマティスに惱み、到頭それが書けさうもなくなつたので、十二月二十五日山本松之助に宛てて、「拜啓御約束の元日組込のものを今日書かうと思つて机に向つて見ましたがどうも御目出度いものとなると一向趣向が浮びませんので甚だ御氣の毒ですが去年の例にならひ正月上旬迄延ばして下さい大阪もあてにしてゐるでせうから是はあなたから宜敷御取なしを願ひます／私の正月から書くものゝ名は點頭錄といふ題で漫筆みたやうなものです」と書き、更に「リヨマチで腕が痛みますつゞけて机に凭る事が出來ません」と追書した。その『點頭錄』が新聞に載つたのは、一月一日から一月二十一日までの間の九回で、第一回は「また正月が來た」、第二回から第五回までは「軍國主義」、第六回から第九回までは「トライチケ」であつた。漱石はもつとずつと書き續ける

氣でゐたらしかつたが、然し大正五年(一九一六)一月十九日松山忠二郎宛の手紙に、「拜復御案內有難く候小生去冬以來風邪の氣味にてそれが爲か左の肩より腕へかけて鈍痛はげしくリョマチか肩の凝か知らざれど兎に角醫者の手に合はず困り入候現に原稿などをかくのが非常の苦痛と努力に候去年以來約束の相撲見物丈は原稿より骨が折れない故どうか斯うか今日迄繼續致候も愈となれば是も欠席の覺悟に候此際の御案內甚だ無禮ながら我儘を申せば聊か苦痛の氣味に有之候久しく諸君と會せざる故かういふ好時機を利用したきは山々なれどどうも坐つて居られさうにもなく候相撲は後ろへ寄りかゝり脊中をしきりに動かしどうにか斯うにか持ち應へ居候も夜中は痛みの爲安眠の出來ぬ始末に候」とあるやうに、リューマティスの痛みがいつまでもなほらない爲に、到頭漱石は一月二十八日に、再び湯河原の中村是公の所へ行き、其所に二月十六日まで滯在して、原稿の先きは書き續けなかつた。二月十八日山本松之助に宛てて、漱石は「私はリョマチで轉地を致しまして二十日ばかり留守にしました一昨十六日晩歸りました點頭錄をずる／＼べつたりにして濟みません　轉地中に稿をつぐつもりでありました所先方に知つた人があつて一所にのらくらして居たものだからつい御無沙汰を致しました　歸つてからあとをどうしたものだらうかと考へてゐます　谷崎君のあとの小說は書かなければならないのだからそれ次第とも考へますが同君のものは大體の所何日頃迄つゞきますか　一寸伺ひます　それによつて準備を致しますから御面

倒でも教へて下さい」と書いてゐる。

然し是は、事實はリューマティスでもなんでもなく、痛みは糖尿病から來るものである事が、後に眞鍋嘉一郎の診察によつて、明らかになつた。さうして漱石は、四月十九日から七月上旬までかかつて、糖分も減り、腕の痛みもとれ、眞鍋嘉一郎のお蔭で、半歳に近い苦痛から、やつと解放される事が出來た。漱石は嘗て明治四十一年（一九〇八）に一度糖尿病だと言はれ、驚ろいて醫者に尿の檢査をしてもらつた事がある。然しその時は糖が二プロツェントとかしか出ないといふので、今の所問題にするがものはないと言はれ、その時はそのまま放置してしまつた。それが十年を隔てて再び現はれ、神經痛となつて漱石を苦しめたのである。

漱石は、糖尿病の手當を受ける一方で、『明暗』を書いた。もつとも漱石は、その手當を受けてゐるうち、五月七日ごろから五月十六日ごろまでの間、胃の具合が惡くて、寐込んでゐる。五月六日鬼村元成宛の手紙には、「私は始終からだ［が］惡くて困りますまあ病氣をしに生れて來たやうな氣がします　是から又小説を書くので當分忙がしくなります」とあり、五月二十一日山本松之助宛の手紙には、「拜啓此間中から少々不快臥牀それで小説の書き出しが豫定より少々遲くなつて濟みませ［ん］谷崎君の二十日完了の筈のものが二十四［日］迄延びたのも夫が爲の御斟酌かと存じ恐縮してゐます此分では毎日一回宛は書けさう故御安心下さい」とある所から想像すると、

漱石は丁度是から書き出さうと思つてゐる矢先に寐込んで、豫定よりも十日以上も遲れて筆を執つたもののやうである。然も漱石が『明暗』を書き始めた日が、二十日であるか、それとも十九日であるか、その精確な所は、是だけの材料では推定する由もない。ともかく『明暗』が新聞に載り始めたのは、五月二十六日からの事である。

漱石は四月二十日、恐らく自分の病氣がリューマティスではなく、糖尿病であると宣告されたあとで、眞鍋嘉一郎に宛てて、「老境に近くと段々色々の故障ばかりにて甚だ心細き次第に候」と書いてゐる。五月二日野村きみに宛てては、「私は病氣をしに生れて來たやうなものですから始終どこかわるいのです然し今は起きてゐます」と書いてゐる。五月六日、胃の具合が惡くなつて寐込んでしまふ直前に、鬼村元成に宛てた前掲の手紙にも、同じやうな事が書いてある。七月十五日厨川白村宛の手紙には、「私は始終病氣です。但起きてる時と寐てゐる時とある丈です。／上田敏君が死にました。十三日に葬式がありました。人間は何時死ぬか分りません。人から死ぬ死ぬと思はれてゐる私はまだぴく〳〵してゐます。」と書いてある。漱石のやうに病氣ばかりしてゐるのでは、實際「私は始終病氣です。但起きてる時と寐てゐる時とある丈です」と言はなければならない氣がしてゐたに違ひない。それでもこの時分には漱石は、心に多少のゆとりが出來て、死といふ事をも、病氣といふ事をも、ある距離をもつて眺める事が出來るやうになつてゐたもの

らしく思はれる。少くとも漱石は、例へば『門』を書いたり、『彼岸過迄』を書いたり、或は『行人』を書いたりした時とは違つて、『明暗』を、心勇みではないまでも、厭厭書いて行くやうな事はなかつたのである。

八月五日漱石は和辻哲郎に宛てて、「此夏は大變凌ぎいゝやうで毎日小説を書くのも苦痛がない位です僕は庭の芭蕉の傍に疊み椅子を置いて其上に寐てゐます好い心持です身體の具合か小説を書くのも骨が折れません却つて愉快を感ずる事があります長い夏の日を藝術的な勞力で暮らすのはそれ自身に於て甚だ好い心持なのです其精神は身體の快樂に變化します僕の考では凡ての快樂は最後に生理的なものにリヂユースされるのです。贊成出來ませぬか。」と書いてゐる。八月十八日久保賴江宛の手紙の中には、「小説をほめて下すつて有難う。何だか馬鹿に長くなりさうで弱ります。然し此夏は大變凌ぎやすいので書くのに骨が折れないで仕合せです。」とある。八月二十一日久米正雄・芥川龍之介宛の手紙には、「僕は不相變「明暗」を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。中々出來ません。厭になればすぐ已めるのだからいくつ出來るか分りません。あなた方の手紙を見たら石印云々とあつたので

一つ作りたくなつてそれを七言絶句に纒めましたから夫を披露します。久米君は丸で興味がないかも知れませんが芥川君は詩を作るといふ話だからこゝへ書きます。／尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗雙雙三萬字。撫摩石印自由成。／(句讀をつけたのは字くばりが不味かつたからです。明暗雙々といふのは禪家で用ひる熟字であります。三萬字は好加減です。原稿紙で勘定すると新聞一回分が一千八百字位あります。だから百回に見積ると十八萬字になります。然し明暗雙々十八萬字では字が多くつて平仄が差支へるので致し方がありません故三萬字で御免を蒙りました。結句に自由成とあるは少々手前味噌めきますが、是も自然の成行上已を得ないと思つて下さい)／……／勉強をしますか。何か書きますか。君方は新時代の作家になる積でせう。僕も其積であなた方の將來を見てゐます。どうぞ偉くなつて下さい。然し無暗にあせつては不可ません。たゞ牛のやうに圖々しく進んで行くのが大事です。文壇にもつと心持の好い愉快な空氣を輸入したいと思ひます。それから無暗にカタカナに平伏する癖をやめさせてやりたいと思ひます。是は兩君とも御同感だらうと思ひます。／今日からつく／＼法師が鳴き出しました。もう秋が近づいて來たのでせう。／私はこんな長い手紙をたゞ書くのです。永い日が何時迄もつゞいて何うしても日が暮れないといふ證據に書くのです。さういふ心持の中に入つてゐる自分を君等に紹介する爲に書くのです。夫からさういふ心持でゐる事を自分で味つて見るために書くのです。日は長い

のです。四方は蟬の聲で埋つてゐます。」とある。今から考へると、是は或は漱石の生理狀態が異常に健康を示す、丁度灯が消える前に一度ぱつと明るくなる、あの狀態に比すべきものだつたのかも知れない。ともかく漱石は、いつもあれほど嫌つてゐた夏を、勿論その夏は冷しくて凌ぎよかつたとしても、少しも苦痛と思はないのみか、寧ろある歡びをさへ感じて暮し、いそいそと『明暗』を書き續けて行つてゐるのである。

もつとも漱石は、自分の小說が、いつまでたつても終りさうもないのに屈託し、早く是をきりあげたいと思はないでもなかつたやうにも見える。八月十八日久保賴江に宛てて、「何だか馬鹿に長くなりさうで弱ります。」と書いてゐるのにも、それが窺はれる。八月二十四日芥川龍之介・久米正雄宛の手紙の中に、「牛になる事はどうしても必要です。吾々はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。僕のやうな老猾なものでも、只今牛と馬とつがつて孕める事ある相の子位な程度のものです。／あせつては不可せん。頭を惡くしては不可せん。根氣づくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか與へて吳れません。うん〳〵死ぬ迄押すのです。それ丈です。決して相手を拵らへてそれを押しちや不可せん。相手はいくらでも後から後からと出て來ます。さうして吾々を惱ませます。牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すの

ではありません。」とあるのにも、それが窺はれる。勿論この手紙は、八月二十一日の手紙の　然し無暗にあせつては不可ません。たゞ牛のやうに圖々しく進んで行くのが大事です。」に照應し、是から文壇に打つて出ようとする二人の若い作家の爲に、特に漱石が強調しようとした、極めて適切な助言であつたには違ひなかつた。然し此所で漱石が自分を、今の所では「牛と馬とつがつて孕める事(こと)ある相の子位な程度のもの」だと評してゐる所などに、ともすると『明暗』を早く切り上げたがる、自分の心の奥の焦りに對して、漱石が非難的な反省を加へてゐる、機微を察する事が出來る。のみならず漱石が、芥川や久米に對して、牛になれと強調してゐる事その事の中に、我我は、漱石自身が、『明暗』の重荷を早く下ろしてしまひたい希望を押へて、泰然と腰を据ゑ、いつまでかかつても、がつしりと『明暗』と取つ組んでゐようと、覺悟をきめた事を、讀みとる事が出來るやうな氣もするのである。是は勿論漱石の藝術的良心と漱石の生活活力との問題に歸著する。然し漱石にこの根氣を與へたものの一部に、漱石が『明暗』を書く傍ら、書をかき畫をかいたのみならず、漢詩を作つたといふ事と、前年の秋ごろから漱石に接近し始め、次第に漱石に潑剌たる情熱を浴びせかけるに至つた『新思潮』の同人、芥川龍之介・久米正雄・成瀨正一などの一群の、ヤンガー・ジェネレーションがあつたといふ事とを、見遁がすわけに行かない。

　漱石が、嘗て漱石の周圍に集つて來た、多くの文學上の弟子達に愛想をつかして以來、漱石は

その方面で、觀念的には孤獨極まりない生活を續けてゐた。勿論その後といへども漱石を敬慕し、漱石に傾倒し、漱石の木曜會には繁繁出入しないまでも、漱石に宛てて自分の感情をまともに浴びせかけるやうな手紙を書いて、漱石を動かした青年は、澤山あつた。內田百間の如きがさうである。和辻哲郎の如きがさうである。然し修善寺大患以後の漱石は、『こゝろ』の先生のやうに、「愛し得る人、愛せずにはゐられない人」であるにも拘はらず、ある距離を置いて相手を愛しても、決して相手を「抱き締める事」をしなかつた。漱石が「抱き締め」ない計りにした弟子どもは、森田草平でも鈴木三重吉でも小宮豐隆でも、すべて漱石から背いて去つたからである。のみならず豐隆の如きは、漱石に手紙を書いて、自分は思想的・藝術的には先生と意見を異にするが、自分はいつまでも先生の弟子である、どうか他人行儀に扱はないでくれといふやうな、生意氣で、蟲の可い事さへ、漱石に言つてやつてゐるのである。それに對して漱石は、大正二年（一九一三）十一月二十五日、「君の手紙は全然勘ちがひです。手紙の中に「です」とか「ません」とかいふ敬語を使ふのはあまりぞんざいに書きたくないからです。……／僕は偶像でないから君等が批評は何とも思はないそんな事を心配して一日も暮せるものぢやない。ヂスイリュウジョンとか人と人との隔りとかいふ哲學は別問題であり又人間に普遍的な問題だから何も手紙に就てのみ云々する必要はあるまいと思つて其方は云ひません。さういふ事を手紙の書きぶりから出立して云々する

のは馬鹿々々しいのです。僕にも色々わるい所があるが、君は時々今いつたやうな馬鹿々々しい所を露出する男のやうに思はれます。」と答へたが、然しさういふ手紙を受取つて漱石が『こゝろ』の先生のやうに、自分の「頭の上に足を載せさせやうとする」「侮辱」と感じなかつたとは保し難い。それだけ漱石は、淋しかつた譯であるが、その漱石の自分自身への護りを、いくらかでも緩めさせ、漱石の懷へ跳り込んで行つたのが、『新思潮』の同人、殊に芥川龍之介と久米正雄とだつたのである。勿論大正四五年の漱石は、明治三十八九年の漱石ではなかつた。のみならず漱石と芥川龍之介や久米正雄などとの年齡の相違は、漱石と明治三十八九年ごろの弟子との年齡の相違に比べて、相當の距離があつた。その他いろんな點を計算に入れて、漱石の心の傾き方が、昔の弟子たちに對する心の傾き方に比べて、可也違つてゐた事は爭はれないが、然し大正四五年の漱石が、相手に是ほどの心の傾きを示したといふ事は、當時の漱石としては異常の事に屬する。漱石は八月二十四日の手紙で、「此手紙をもう一本君等に上げます。君等の手紙があまりに潑溂としてゐるので、無精の僕ももう一度君等に向つて何か云ひたくなつたのです。云はゞ君等の若々しい青春の氣が、老人の僕を若返らせたのです。」と言つてゐる。漱石は芥川だの久米だのの若若しい愛を受けて、ほんとに若返り、何か世の中に生きてゐる事が、賴もしいやうな心持にもなつたものだらうと思ふ。一ノ宮の海岸に避暑に行つてゐる芥川と久米とに、漱石が、八月二十一

日・八月二十四日・九月一日・九月二日といふ風に、立て續けに長い手紙を書き、然もその手紙の内容が、いかにも樂しさうに潑剌としてゐるのは、最も鮮かに漱石のこの心持を反映する。漱石が、かういふ若い人たちから、自分の『明暗』が正當に評價され、正當に敬愛されてゐるといふ事を、信じてゐたかどうかは分からないが、ともかくかういふ青春の氣に滿ちた青年が、心を躍らせつつ自分の作品を讀んでゐるのだと想像する事は、漱石にとつて、心丈夫な事だつたには違ひないのである。

『明暗』に描き出されてゐるものは、私の塊りとしての人間であつた。誠實と誠實と、自然と自然とをもつて觸合ふ事なしに、我と我と、打算と打算と、體裁と體裁とをもつてのみ觸れ合つてゐる限り、人と人との間には闘爭があるのみで、平和と安寧と幸福とは、竟に獲られない。然もその、我と我と、打算と打算と、體裁と體裁とのみをもつて觸れ合つてゐるのが、津田とお延との夫婦關係である。その夫婦關係の中に津田の友人の小林と、津田の妹のお秀と、津田が世話になつてゐる吉川の夫人とが這入り込んで來て、二人の摩擦を一層堪へ難いものにする。お秀には、津田とお延とに對する、正しい批評がある。然しお秀は、兄に對する身贔屓と、嫂に對する小姑的な反感と、自分達夫婦とは全然違つた生活樣式を持つてゐる、兄夫婦の生活樣式に對する無理解とから、津田を憎むとともに、更により以上に、お延を憎んでゐる。吉川夫人の勝氣と放

漫と無神經とは、同じやうに津田夫婦に對する、特に津田に對する正しい批評を持つてゐながら、また同じやうに津田を庇ひ、お延を憎み、お延がそれをどう受けとるかなどといふ事には何の貪著もなしに、津田の爲に、いきなりお延の上に荒療治を加へる事を計畫する。小林も亦津田の缺點が何所にあるかを、はつきり知つてゐるのである。さうして津田が其所から抜け出るのでない限り、津田は竟に救ふべからざる人間になつてしまはなければならないといふ事も、ちやんと承知してゐるのである。それにも拘はらず小林は、津田が裕福に暮し、好い女房を持ち、それを要領よく操縱してゐるのだと想像して、津田に反感を持ち、のみならず落魄して職業にありつく事が出來ず、妹をうつちやり放しにして、朝鮮くんだりまで落ちて行かなければならない、自分の不幸な運命に不平と不滿を懷き、その事に直接の責任があるかのやうに、常に津田に毀傷的に働らきかけようとする。――『明暗』では、人人のかういふ關係から出て來る、いろんな言語動作が描き出されるのである。さうしてその言語動作の奥に潜む私が――打算と技巧と支配慾と見榮と無神經と無反省と反感と毀傷と虚僞と我慾とが、丹念に掘り出され、容赦なく笞うたれるのである。漱石がこの世界に深く這入つて行けば行くほど、漱石が「大いに俗了された心持にな」るのは、當然であつた。殊に漱石は、大正三年(一九一四)一月十三日畔柳芥舟宛の手紙で、「僕は自分で文藝に携はるので文藝心理を純科學的には見られない。又見ても餘所々々しくてとてもそん

なものに耳を傾ける氣がしない。僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります。僕にはそれが一番力強い説明です。若しそこに不完全なものがあればそれは心理現象そのものゝ複雜から來るので方法のわるい點からくるとは考へられません。」と言つてゐるやうに、すべてを「自分の心理現象の解剖」といふ基礎の上に置いて、ものを書いて行つてゐるのである。漱石が『明暗』で、人人の私をあらゆる心の隅隅に亙つて剔抉してゐるといふ事は、所詮自分自身の心の隅隅に潛り入つて、其所に潛んでゐる私を、明るみへ引き搯り出して來るといふ事に外ならなかつた。それは無論漱石にとつて、それらの私から超越する爲の、必然な、餘儀ない手段ではあつたが、然しそれだけに漱石が、その爲め「大いに俗了された心持にな」る事も、亦已むを得ない事であつた。それを漱石は、午後の日課として漢詩を作る事によつて、綺麗に洗ひ淨めようとする。

漱石は、子供の時分から、漢詩文の世界に親しんだ。前にも述べたやうに、漱石が二十三四で作つた漢詩は今日までも殘つてゐる。それが縷のやうに續いて、漱石は熊本時代には、多少の漢詩を作つてゐる。それはその後ある部分『草枕』の中に利用されたが、漱石は明治三十三年（一九〇〇）英國留學の途に著く時、七言律三首（そのうちの一首の一部分は『虞美人草』の中に利用されてゐる）に感懷を託したぎりで、その後十年間、全然この方面に指を染める事がなかつた。然るに明治四十三年（一九一〇）の夏、『門』を書いたあとで、漱石が胃腸病院に入院し、其所にお

よそ一月半ほどゐて、今日退院するといふ七月三十一日に、偶然の機會から、漱石は再び漢詩をとり上げた。七月三十一日の日記に漱石は、「〇一昨日森圓月の置いて行つた扇に何か書いてくれと賴まれてゐるので詩でも書かうと思つて、考へた。沈吟して五言一首を得た。／來宿山中寺、更加老衲衣、寂然禪夢底、窓外白雲歸。／十年來詩を作つた事は殆んどない。自分でも奇な感じがした。扇へ書いた。」と書いてゐる。恐らく是がきつかけとなつたものであらう、（勿論漱石の當時の心持が必然にそれを要求したには違ひないが）、漱石は修善寺大患後、溫泉宿の三階に寐てゐる時も、胃腸病院に歸つてからも、俳句とともに漢詩を作り、是を『思ひ出す事など』の中に挿んで、發表した。然し是も、それほど長くは續かなかつた。大患から囘復した漱石は、博士問題の事や朝日文藝欄の事や信越旅行の事や、明石・和歌山・堺・大阪講演の事や、大阪での再度の潰瘍の事や、その他の事で、とても漢詩なぞ作つてゐる、心の餘裕を持つ事が出來なかつたらしい。然も漱石は、それから一年半計りの間隔を置いて、明治四十五年（一九一二）五月二十四日に、『春日偶成』と題する、五言絶句を十首計り作つた。是は漱石が『彼岸過迄』を書き上げて、「此二三週間は又胃に酸が出て運動すると形勢不穩故成るべく靜養の工夫致し候　夫に神經もよろしからず閉口致し候」と書いてゐる四月二十七日以後凡そ一ケ月、また「昨[原]日はわざ〳〵御斷りの手紙を差上候處今日午前に至り不圖自畫自贊試みたく相成生れて初めて畫をかき候然る所我

[暗明]

ながら見上げた出來榮に有之大に喜び此手紙と同便にて差出候間御受取り願候。繪は最明寺殿が後向になつてあるいてゐる所と御承知被下度候。斜に出てゐるものは杖にて決して刀には無之。山妻は侍が帶劍の姿と間違候間念のため説明を加へ置候。」と書いた五月二十八日の、四日前の事である。漱石は、小説を書いてしまつたあとの、胃の不安と神經の緊張とを、靜養する事によつて取り去り、精神的にも肉體的にも重荷を卸したやうな心持になつて、再び漢詩を採り上げたものではないかと思はれる。その後漱石は、ぽつりぽつりと漢詩を作り始める。同時にぽつりぽつりと畫をかき書をかき始める。

元來書と畫と詩とは、切つても切れない關係に立つものである。殊に漱石の好んでかいた南畫風では、詩の趣を畫にして見ようといふ氣も起り得るし、畫の趣を詩にして見ようといふ氣も起り得る。賴まれて書をかくにしても、自作の詩を書く方が氣持が可いに違ひない。自畫贊でも、詩の方が俳句よりも、遙に適切に感じられる場合も多い。かうして漱石は、例へば横山大觀に自作の詩を書いて贈り、また例へば平元德宗に自作の『妙雲寺觀瀑』を書いて贈り、また例へば『題自畫』の詩を幾つか作るやうになつた。漱石が大正二年の秋から始めた、半折の淡彩山水は、十幅のうちの四幅は、漱石自作の詩の贊を持つてゐる。もつとも後には漱石は多くの小品を試み、從つてその方面の必要から作られた詩は、それほど數が多くはないのであるが、それでも大正三

年、四年、五年へかけて『題自畫』の詩がいくつかはある。他人の畫にたのまれて讃をした詩もいくつかある。かうして漱石は『明暗』執筆の當時まで來るのである。然もその『明暗』は、私の塊りの角突き合ひとして、百鬼夜行のやうな人生の姿を、克明に浮彫にして見せようとするものであつた。

大正五年(一九一六)三月下旬ごろに書かれたものらしい「斷片」の中で、漱石は「己は臆病かも知れない。鷹揚でないかも知れない。然し正しいのだ。正しいものとして正しくないものを打ち倒さうとするのだ。故なく他を損ふものを嫉むから、そんなものはどうして「も」打ち懲らさなければならないといふ氣がむら〳〵と湧いて出て、この己を不安にするのである。己の落付のないのは巡査や探偵が眼を皿のやうにして良民を害する惡者を捕へやうと一生懸命に氣を遣つてゐるやうなものだ。」と書いてゐる。是は須永のいふ「執濃い油繪」のやうな性質と連絡する。漱石は、須永と同じやうに、自分の中の「執濃い油繪」のやうな性質に愛想をつかし、「一筆がきの朝貌」のやうな世界を憧憬するが、然しその「執濃い油繪」のやうな性質こそ、一面から言へば、漱石を漱石たらしめた原動力でもあつたのだから、それを無理に「一筆がきの朝貌」のやうなものにしてしまふ事は、到底出來る事ではなかつたし、よし出來たとしても、それは結局漱石を根本から破壞してしまふ事にしかならない筈であつた。それを漱石は、自分でも承知してゐた。

従つて漱石は、『明暗』に於いて、その「執濃い油繪」のやうな性質に、はつきりした方向を與へて、それを自在に活躍させる。外の言葉で言へば、漱石は此所で自分をはつきり道理の世界に据ゑた上で、「正しいものとして正しくないものを打ち倒」す爲に、「眼を皿のやうにして良民を害する惡者を捕へやうと一生懸命に氣を遣」ふのである。かうして漱石の眼は餌物を覘ふ隼の如く鋭く、漱石の頭は餌物に跳りかかる豹の如く素早く、人間の惡を、人間の私を追究する。漱石の心は、巡査の如く、探偵の如く、不安になる。それだけ漱石の中の、「一筆がきの朝貌」の世界に憧がれる心は、悩まなければならなくなつて來る。假令漱石の中に、さういふ心が動いてゐなかつたとしても、それほど鋭く、それほど素早く、捕捉され剔抉された人間惡の塊りは、人間である事の慘めさを、自分の眉間につきつけるものとして、刹那に眼を蓋ひたくなるやうな氣持を起こさせるに違ひない。然も漱石は、既に腰を据ゑて、是が非でもこの仕事を、なし遂げようと覺悟してゐるのである。漱石の中の「一筆がきの朝貌」に憧がれる心は、必然に自分自身を表現する、表現機關を求めなければならないのである。さうしてその爲め漱石によつて選み上げられたものが、漢詩であつた。漢詩は漱石にとつて、ある意味から言へば、窒息する事なしに、人間の心の海の底深く潜り入る事を可能にする、潜水衣のやうなものであつた。

勿論『明暗』を書く漱石の心は、高く且つ清かつた。高く且つ清かつたればこそ漱石は、あの

平凡尋常な生活の中から、あれだけの「百鬼夜行」を掘り出す事が出來た。大正五年（一九一六）十一月十日漱石は、鬼村元成に宛てて、「先達の手紙は拜見難有う御座います大して御世話もしないであんな丁寧な御禮を云はれては痛み入ます然しそれが縁になつて修業大成の御發心に變化すれば私に取つて是程滿足な事はありません。私は日本に一人の知識を拵へたやうなものです。富澤さんも略あなたと同樣の事を云つて來ました。坊さん方の奇特な心掛は感心なものです。どうぞ今の決定の志を翻へさずに御奮勵を祈ります。私は私相應に自分の分にある丈の方針と心掛で道を修める積です。氣がついて見るとすべて至らぬ事ばかりです。行住坐臥とも虛僞で充ち〳〵てゐます。恥づかしい事です。此次御目にかゝる時にはもう少し偉い人間になつてゐたいと思ひます。あなたは二十二私は五十歲は二十七（原）程違ひます。然し定力とか道力とかいふものは坐つてゐる丈にあなたの方が澤山あります。」と書いてゐる。また十一月十五日富澤敬道に宛てては、「變な事をいひますが私は五十になつて始めて道に志ざす事に氣のついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると大變な距離があるやうに思はれて吃驚してゐます。あなた方は私には能く解らない禪の專問家ですが矢張り道の修業に於て骨を折つてゐるのだから五十迄愚圖々々してゐた私よりどんなに幸福か知れません、又何んなに殊勝な心掛か分りません。私は貴方方の奇特な心得を深く禮拜してゐます。あなた方は私の宅へくる若い連中よりも遙かに尊とい人達です。

是も境遇から來るには相違ありませんが、私がもつと偉ければ宅へくる若い人ももつと偉くなる筈だと考へると實に自分の至らない所が情なくなります。」と書いてゐる。漱石はこの十一月二十二日死病の床につき、十一月二十八日と十二月二日と再度の大内出血の爲に、到頭十二月九日死んでしまふのであるが、その死病の床につく間際まで、このやうに、自分の「行住坐臥ともに虚僞で充ち〳〵てゐ」るのだと言ひ、只管自分の至らない事を恥ぢ、「私がもつと偉ければ宅へくる若い人ももつと偉くなる筈だと考へ」、それを他人の前に、然も自分よりも遙に若い、自分の子ほどの若い人の前に披瀝して憚らなかつたほど、漱石の心は高く且つ清かつたのである。然し不幸にして『明暗』は、未完結のままで終つた。『明暗』は表向きの解決を持たず、中に動く人物が、すべてそれぞれの私の種種相を展開させつつ、沒落もしくは爆破の危機へとずり落ちて行く過程だけしか描き出されず、從つて此所では漱石の、その高く且つ清い心に映じた人間の醜惡の表現が主になつて、その高く且つ清い心そのものの高さと清さとを存分に發現させる餘地がなかつた。それは纔に淸子によつてその片鱗を閃めかせてゐるかに見えるが、それも作者にさういふ意圖があつたものかどうかさへも、今となつては分からない。ただ漱石は、漢詩に於いてそれらの心の爲に、自分自身の世界を直接に發現させる、場所を用意した。

漱石は嘗て『猫』の一系列とともに『倫敦塔』・『幻影の盾』・『薤露行』の一系列を書いて、自

分の中の二つの心に、それぞれ適切な表現の場所を與へ、後にそれを一つのものに綜合した。丁度それと同じやうな事が、『明暗』と漢詩とに於いて試みられる。『明暗』の淸子が、その綜合を司どる役目であつたかどうか、それともまたその綜合は『明暗』以後の作品に俟つべきものであつたかどうか、それは何とも推測する餘地はないが、然し漱石の中の二つの心が、此所でも亦二つの系列の作品を生んだといふ事は、『明暗』が漱石の是までにない大仕掛な作品であり、殊に是までの作品とは違つて、偏頗なしにあらゆる登場人物の心の中に潛り入つて、其所からそれぞれの私を摑み出して來ようとされてゐる事とともに、注目すべき現象であると思はれる。書だの畫だのは、漱石にとつて、樂しみだつたには違ひない。然しそれだけではなほ足りないものがあつて、漱石を漢詩に驅り立てたのではなかつたかとも考へられる。漱石は小說だの戲曲だのでは、その性質上どうしても「刺戟ガ强烈」で、「實生活ノ反映としてウンザリ」し、「心に餘裕ガナ」く「從つて不安」で、「俗ツポ」くなつてしまふと言つてゐる。それだから漱石は、「自由、安穩、平和」を兇出する事の一番多い繪畫を愛するのだと言つてゐるが、然しそれだけではなほ足りないもの――例へば繪畫には時間の經過がなく、從つて心持の變化を表現するのに不便があり、場面に變化を與へるのにも自由でない所から、一面では最も繪畫に近く、一面では繪畫にない自由を持つてゐるといふやうな意味で、漱石は或は漢詩を採り上げたのではなかつたか。勿論漱石は

『明暗』當時書も畫も全然やめてしまひはしなかつた。然し漢詩を作り出してからは、漱石は寧ろその方により多くの精力と時間とを費した。漱石が書畫の爲に日課として割り宛てた時間は、大正五年（一九一六）には、瀧田樗陰が玉版箋だの唐墨だのをかつぎ込んで來る、面會日の木曜の午後だけだと言つて可かつたが、然し漱石は、漢詩には多く午後から夜までへかけての時間を使ひ、八月十四日から十一月二十日へかけて七十五首、殆んど毎日のやうに詩を作つてゐるのである。

漱石の詩が描き出してゐる世界は、さまざまであつた。例へば「雙鬢有絲無限情。春秋幾度讀還耕。風吹弱柳枝々動。雨打高桐葉々鳴。遙見半峰吐月色。長聽一水落雲聲。幽居樂道狐裘古。欲買縕袍時入城。」といふやうな、世情からはまだ十分脫離しきつてはゐないまでも、なほ閒逸の趣きに充ちてゐるものもある。また例へば「兩鬢衰來白幾莖。年華始識一朝傾。薰蕕臭裡求何物。蝴蝶夢中寄此生。下履空階淒露散。移牀廢砌亂蟬驚。清風滿地芭蕉影。搖曳午眠葉々輕。」といふやうな、それとは違つて、何か突き詰めた心持が一方にあつて、それを自然の美しさの中に眠らせる過程が描き出されてゐる感じのものもある。また例へば「詩思杳在野橋東。景物多橫淡靄中。緗水映邊帆露白。翠雲流處塔餘紅。桃花赫灼皆依日。柳色模糊不厭風。縹緲孤愁春欲盡。還令一鳥入虛空。」といふやうな、五色の雲の縹渺たる中を潛ぐつてゐるとでも形容したい、柔ら

かで、暖かで、淋しいけれども快い、美しい世界を表現したものもある。その他「東風送暖暖吹衣。獨出幽居望翠微。幾抹桃花皆淡靄。三分野水入晴暉。春畦有事渡橋過。閑草帶香穿徑歸。自是田家人不到。村翁去後掩柴扉。」だの、「山居日々恰相同。出入無時西復東。的皪梅花濃淡外。朦朧月色有無中。人從屋後過橋去。水到蹊頭穿竹通。最喜清宵燈一點。孤愁夢鶴在春空。」だの、「素秋搖落變山容。高臥掩門寒影重。寂々空舲橫淺渚。疎々細雨濕芙蓉。愁前剔燭夜愈靜。詩後焚香字亦濃。時望水雲無限處。蕭然聽隔林鐘。」だの、感じに似たものも違つたものもあるが、すべて漱石の住んでゐる世界の、清高幽雅を物語らないものはない。然も一方では漱石は、例へば「絕好文章天地大。四時寒暑不曾違。夭々正晝桃將發。歷々晴空鶴始飛。日月高懸何磊落。陰陽默照是靈威。勿令碧眼知消息。欲弄言辭墮俗機。」だの、「絹黃婦幼鬼神驚。饒舌何知遂八成。欲證無言觀妙諦。休將作意促詩情。孤雲白處遙秋色。芳艸綠邊多雨聲。風月只須看直下。不依文字道初淸。」だの、「飣餖焚時大道安。天然景物自然觀。佳人不識虛心竹。君子曷思空谷蘭。黃耐霜來雜菊亂。白從月得野梅寒。勿拈華妄作微笑。雨打風翻任獨看。」だの、自然の美しさに味到する事は言說の外にあつて、「文字に依らずして道初めて淸し」といふやうな哲學を、方方で說いてもゐるのである。是は『思ひ出す事など』の中の「人よりも空、語よりも默」と脈絡する漱石の考へ方であるが、然もこの詩の中には、漱石が『明暗』を書いてゐる事その事に對する非難も、

恐らくは籠められてゐると解すべきではないかとも思はれる。それは例へば、「非耶非佛又非儒。窮巷賣文聊自娯。採擷何香過藝苑。徘徊幾碧在詩蕪。焚書灰裏書知活。無法界中法解蘇。打殺神人亡影處。虚空歴々現賢愚。」だの、「休向畫龍漫點睛。畫龍躍處妖雲横。眞龍本來無面目。雨黑風白臥空谷。通身遍覓失爪牙。忽然復活侶魚蝦。」だの、「吾失天時併失愚。吾今會道道離吾。人間忽盡聰明死。魔界猶存正義臞。擲地鏗鏘金錯劍。碎空燦爛夜光珠。獨呑涕涙長躊躇。怙恃兩亡立廣衢。」だの、「元是一城主。焚城行廣衢。行々長物盡。何處捨吾愚。」だの、「元是太平子。寧居忘亂離。忽然兵燹起。一死始醫飢。」だの、すべて自分が棄て切れないでゐる私を、高い所から眺めて、芭蕉の所謂「機關を踏み破つて」無分別の世界に這入るのでなければ、竟に心の落ちつきは得られないと言つたやうな意味を說いてゐる詩とつき合せて考へれば、その關聯はもつと明瞭になつて來るのではないかと思はれる。實際漱石は、大正五年(一九一六)十月十八日森圓月に宛てて明月の大字を贈つてもらつた禮を言つた序に、「あの字はいま一息といふ所で止まつてゐます。だから其所を標準に置いて嚴格にいふと大半といふよりまづ悉く落第です。然し私はあれを見て輕蔑するのではありません、嗚呼惜いと思ふのです。今一息だがなと云ふのです。あの字は小供じみたうちに洒落氣があります。器用が祟つてゐます。さうして其器用が天巧に達して居りません。正岡が今日迄生きてゐたら多分あの程度の字を書くだらうと思ひます。正岡の器用は

どうしても抜けますまいと考へられるからです。／……／良寛はあれに比べる〔と〕數等旨い、旨いといふより高いのでせうか、寂嚴といふ人のはまだ見ませんから何とも申上かねます。」と書いてゐるが、器用だの才氣だのを自分の中から抜いてしまつて、天眞の域に達したものでないと頭を下げる事が出來ない、從つて是非の境を踏み破り賢愚の世界を擺脱した世界に這入り、「一死始めて飢を醫やす」事を冀ひ、いくら努力してもなほ努力が足りない事を恥ぢつつ、それに向つて精進を續けてゐたのである。

もつとも漱石が十一月十三日につくつた「自笑壺中大夢人。雲寰縹緲忽忘神。三竿旭日紅桃峽。一丈珊瑚碧海春。鶴上晴空仙翮靜。風吹靈草藥根新。長生未向蓬萊去。不老只當養一眞。」や、十一月十九日の「大愚難到志難成。五十春秋瞬息程。觀道無言只入靜。拈詩有句獨求淸。迢々天外去雲影。籟々風中落葉聲。忽見閑窓虛白上。東山月出半江明。」や、殊に十一月二十日の「眞蹤寂寞杳難尋。欲抱虛懷步古今。碧水碧山何有我。蓋天蓋地是無心。依稀暮色月離草。錯落秋聲風在林。眼耳雙忘身亦失。空中獨唱白雲吟。」などに至つては、作者の私は悉く脱落し、作者は淸空な氣體となつて天上し、其所から神神しい微妙な音樂となつて、再び地上に下りて來る、不思議に高く且つ淸い世界が表現されてゐるやうである。漱石は十一月二十二日幾度も嘔吐を催した末、胃の痛みをじつと怺へ、書齋の絨毯の上につつぷしてゐたが、鏡子が這入つて來て床に就く

事を勸めた時に、今辭世の句を考へてゐた所だと言つて、それぎり床に就いてしまひ、辭世の事についてはその後誰にもなんとも言はなかつたさうであるが、然し特にこの十一月二十日夜の七言律の如きは、漱石のさういふ辭世を必要としないほど、漱石の世界の絶頂を示し、その意味で漱石の生活の最後の締め括りをつけてゐるものであると、言つて可いと思ふ。ゲーテの『ファウスト』の最後の場面では、天使たちから救ひ出されたファウストの靈が、天使たちに護られつつ、天界の層を幾層もくぐつて、聖母のそばへ連れて行かれる。漱石の、「眼耳雙忘身亦失。空中獨唱白雲吟。」は、何かそのファウストの靈の天界の旅を思ひ出させるものを持つてゐる。然も漱石は、西洋人が、すべての罪から淨められて、聖母とともにある事を幸福であると感じる、その同じ感じを、全然違つた立場から、全然違つた方法で、表現する。然も漱石は、聖母ではなく、天を相手としてゐるだけに、淸空な感じに於いては、更に勝れてゐるやうな氣さへするのである。

それにしても遺憾極まる事は、漱石の『明暗』が、竟にその結末に達しない事であつた。津田が溫泉場で、嘗て自分を棄てて去つた淸子に會ひ、ほんの一言か二言、言葉を換はすだけで中斷されてしまつたこの小說は、この小說の場面の作り方並びに人物の性格上、到底『ファウスト』の天上界の出來事のやうな結末を見出す事は不可能ではあつたが、それにしても、少くとも觀念的・幻想的には、この境地にまで到達してゐた漱石が、吉川夫人のお延に對する荒療治があつた

後で、お延と津田と淸子と吉川夫人との關係をどう始末して見せるかによつて、その境地からの人事への特殊な働らき掛け方がはつきりして來る筈であり、從つて漱石の到達してゐたこの境地の、更に具體的な姿が、我我の眼の前に示される筈だつたといふ氣もするのである。『行人』の一郎は、自分は自分に定められた女と結婚してゐるのでない爲に、お直は自分に冷淡であり、また自分に殘酷なのではないかと疑惑する。さうして二郎に、パウロとフランツェスカとの例を引いて、お前はお直を、お直はお前を愛してゐるのではないかとさへも言ふ。『三四郎』にエピソードとして取り扱はれ、『それから』に主題として取り扱はれた、鐵が磁石に牽かれるやうな戀愛は、『行人』に來て、かういふ特殊な形となつて、一郎を惱ます種となつた。淸子と津田との戀愛が、漱石によつて、さういふ戀愛として受胎されてゐたものかどうかは、分からない。然し「淸子」といふ名前と、淸子が溫泉場の一室で津田に示す、自然で天眞で、包み隱しのない淸らかな態度とを考へ合せる時、漱石が淸子に於いて描き出さうとした女性が、漱石の理想の女性、例へばダンテに於けるベアトリーツェのやうなものではなかつたかと、想像されなくもないのである。然しそれが『明暗』の津田にとつて、ファウストに於ける聖母のやうなものになる筈であつたのかどうか、その邊の事になると、まるで想像の手がかりがない。我我はただ未完結の『明暗』を抱いて、勝手な臆測を試みてゐるより仕方がないのである。

三三 死

漱石は大正五年（一九一六）十一月十九日大谷繞石に宛てて、「拜啓昨日山鳥が到着致しましたので何處から來たのかと思つたら大谷正信といふ札が付いてゐました。何うも有難う御座います。私は貴方の事を忘れてゐるのに貴方は私の事を考へて下さるのみならず時々魚だの鳥だの御菓子だのを頂戴するのは勿體ない事です。尤も忘れるといつても記憶に消されてしまふ譯ではないのだから御容赦を願ひます。」と書いてゐる。「勿體ない事です」といふ感謝の言葉は、他人に對して容易に使へる言葉ではない。然し漱石は此所でそれを使つてゐる。是は漱石に、人の親切に對して感謝する念と、人が自分に是程親切を盡してくれるのに、自分はとかく相手の事を思ひ出す事がない、それは人の親切に對して寔に申譯もない事であるといふ自責の念とが、更に深まつてゐた事を證明する。さうしてこの事は漱石の、當時の、私を滅する修業の深さと、密接に關聯する。卽ち漱石は、是ほど人生に對して、寡慾になつてゐたのである。然もこの「山鳥」（鵯の粕漬）

を漱石が胃ごとたべたといふ事が、漱石の今度の潰瘍の一つの誘因だといふ事になつてゐるのである。

もつとも今度の潰瘍の誘因だとされてゐるのは、是一つだけではなかつた。漱石は自分の弟子の山田繁子から、妹の江川久子が辰野隆と結婚するに就いて、是非その披露の宴に列席してくれと頼まれ、十一月二十一日に築地の精養軒に出かけ、其所で食卓につけてあつた南京豆の鹽煎を頻にたべた。それが他の一つの誘因だとされてゐる。それは正にその通りだつたに違ひないのだらうが、然し事實はもつともつと前から、漱石の內部では、漱石の知らないまに、爆發の準備が十分調へられてゐた所へ持つて來て、かういふ誘因があつたから、それであんな大事になつたものだらうと思ふ。第一漱石は、いつも厭厭夏を過ごし、夏はよくイリタブルになり、胃を惡くするのが習慣のやうになつてゐた。それが、いくらこの年の夏は涼しかつたとは言つても、あんなに快よく執筆してゐたといふのからが、慥に異常だつたのである。漱石は、別に南京豆を喰つた譯でもなく、鶉の粕漬を喰つた譯でもなかつたが、『それから』を書いたあと、『門』を書いたあと、『彼岸過迄』を書いたあと、『行人』の途中、『心』を書いたあと、すべて胃の爲に惱んで寐こんでゐる。『道草』のあとでは寐こまなかつたが、その代り、それを書く直前に、京都で寐こんでゐる。のみならず漱石は『明暗』を書き出す前にも、十日近くは寐てゐるのである。恐らく漱

石の胃は、漱石が緊張し集中して作品にとりかかるや否や、多量に酸を分泌して、いつでも胃壁を腐蝕する用意を整へてゐたものに違ひない。然も漱石は『明暗』を書き出してから、勿論書をかき畫をかき、詩を作り、展覽會を見に行つたりしてはゐたものの、既に半歳以上、この仕事に沒頭して來てゐるのである。南京豆はなくても、又鶫の粕漬はなくても、爆發はそのうち必ず來たに違ひなかつた。

漱石は精養軒から歸つた夜、胃の具合が面白くない事を感じたが、その翌日、十一月二十二日にはそれがますます惡くなつて來たやうに思はれた。それで、朝のうち洗腸してもらつたが、それでも一向具合がよくならないので、日課の『明暗』にも手をつけず、書齋の絨毯の上につつぷしてゐた。それを、下女が晝の持藥を持つて來て氣がつき、鏡子に告げたので、鏡子は早速床を展べさせ、漱石を寐かしたのださうである。その夜少し嘔吐があつた。激烈な痛みもあつた。もつとも吐血はなかつた。翌二十三日は木曜で面會日ではあつたが、是は無論來客を斷つた。この日は午後の一時と午後の四時と、二回の嘔吐があつて、二回目のには僅かに血線が交つてゐた。その後次第に胃痛が加はり、嘔吐が是につぎ、漱石は殆んど絶食してしまつた。然し是はいつもの事である。從つて漱石はいつもの病氣の時のやうに、不機嫌さうに默つたまま寐てゐて、ともかく二十八日まで來た。二十八日の晝間は大變心持が可いといふので、僅かながらも液體の食物

を擴つたが、その夜十一時半ごろになつて、今まですやすやと眠つてゐた漱石が、急にむくりと起き上るや否や、頭を掻きむしるやうにしながら、「頭がどうかしてゐる。水をかけてくれ、水をかけてくれ」と、呻るやうに言つた。鏡子は、漱石が頻に頭・頭といふので、頭が變になつたのではないかと、咄嗟に考へたのだといふが、然しともかくこのままではいけないと思つたので、大急ぎで横に寐かせると、漱石はそのまま「うん」と言つたつきり、人事不省に陷つたのださうである。それで大騒ぎになつて、看護婦を呼ぶ、女中を起す、傍にあつた藥罐を引き寄せて水を含ませる、その水を頭からじやあじやかける。さうかうするうちに、漱石はやつと息を吹き返した。そのうち醫者が來てカンフル注射をしたりゲラティン注射をしたりする。到頭その晩はみんなまんぢりともしなかつた。さうしてそれは大きな內出血があつたのだと、診斷された。その大きな內出血とともに漱石は輕い腦貧血を起し、その爲めくらくらとして來たので、自分の頭がどうかしたのだと思ひ、早く水をぶつかけてくれと言つたものらしい。——是が第一の大內出血であつた。

二十二日に漱石が具合が惡くなつた時、かかりつけの近所の醫者以外、誰を主治醫として呼ぶかといふ問題が起つた。漱石が糖尿病の療治をしてもらつてゐるうちに、今度具合が惡くなつたら來てくれと約束したから、眞鍋を呼べと言ふので、眞鍋嘉一郎が主治醫といふ事になつた。眞

鍋は松山の中學で漱石の教へを受けて以來、漱石がロンドン留學から歸朝するまでは會はず、歸朝しても、往來で會ふだけで、うちを訪問する事は遠慮してゐたので、眞鍋が大正三年（一九一四）歐洲大戰が勃發するとともにドイツ留學を斷念して歸朝するまで、歸朝しても人を送つて新橋の驛で漱石と落ち合ふまでは、二十何年、殆んど落ちついて漱石と話をする機會を持つ事が出來なかつたのである。二十八日の內出血があつてから、容態が險惡であるといふので、眞鍋は宮本叔と南大曹とを呼んで、三人合議の上で治療に全力を悉す事にした。然し漱石自身は、自分がそれほど險惡な狀態にゐるとは氣がつかなかつたらしく、寐てゐても『明暗』の事を氣にし、まだ二十回分位は先きが書いて送つてあるから、大丈夫だとは思ふが、もう一週間筆を執らずにゐるからといふので、當時すぐ近所に住んでゐた社員の坂崎坦に來てもらひ、まだ二十日くらゐの餘裕はあるが、萬一の爲に病氣で寐てゐるどいふ事だけを社の方へ話して置いてくれ、そのうちには起きて書ける事と思ふ、なに今だつて書かうと思へば書けない事はないが、醫者がとめるに違ひないから書かずにゐるのだと言つて、山本笑月に病臥の通告をした。實際漱石は寐てゐても、氣が氣ではなかつたらうと思ふ。恐らく病間には『明暗』の事ばかり考へてゐて、醫者が許しさへすれば、今にも筆を執つて書きたいと思ふほど、『明暗』の場面や人物がはつきりと眼の前に浮き上がつてゐたに違ひない。

さうかうしてゐるうちに十二月になつた。一日は具合がよく、漱石は極く少量ではあつたが、液體性の食物さへとつた。もつとも一日と二日とには各三回の排便があつて、それはいづれも血便だつたといふが、それは二十八日の內出血の結果に外ならなかつた。二日の日の午後三時半ごろ、丁度眞鍋が診察に來てゐる時に、漱石は便器にかかつてゐた。その時漱石のいきみさうな氣配が見えたので、眞鍋は「あつ」と言つてそれを制しようとするひまもなく、漱石はうんといきむと同時にくらくらとなつて、再び人事不省に陷つてしまつた。漱石がいきんで下腹部に強壓を加へた爲に、二回目のひどい內出血が來たのである。勿論漱石は、ゲラティン・オピウム・カンフルなどの注射で、間もなく息を吹き返した。然し、この第二回目の內出血は、致命的のものだつた。その後も食鹽水の注射をする。オピウムの注射をする。ゲラティンの注射をする。四日・五日・六日と段段形勢は持ち直したが、何か食餌を與へなければ、榮養が續かない、榮養を續けて送り過ぎると、傷の癒著が遲れる、然も浣腸するとずつと血便が出續けるといふので、醫者は隨分所置に困つたのださうである。然も漱石の腹部は、ひどく膨れ上がつて來た。排便も全くなくなつた。それで他働的に排便が行はれたが、出て來るのも出て來るのも、すべて血便であつた。

漱石は六日ごろには、極く少量の液體がとれるやうになつた。然し七日には、心臟の力が弱り、脈の狀態が惡く、細且つ頻になり、八日には益惡化して行つた。勿論十二月二日以後は、絕對安

靜が申し渡され、醫者以外は何人も病室に入る事を許されなかつたのである。病室は、板の間に絨毯を敷いた書齋の隣の、疊を敷いた應接間が、それに當てられてゐた。森田草平、鈴木三重吉、野上豐一郎、小宮豐隆、內田百間その他の弟子たちは、十一月二十八日以來、順番をきめて、いざといふ時の用意に、二人づつ夜詰をしてゐたが、是も無論病室に入る事は出來なかつた。醫者が病室を出て、茶の間へ這入つて來る度每に、容態がどうなつて行つてゐるかを、間接に聽く許りである。然も十二月の八日の晚には、眞鍋は、もう絕望であると、宣告した。カンフル注射などを試みても、殆んど反應がなくなつたのださうである。

八日の夜は然し、好い鹽梅に變化がなかつた。九日は土曜である。子供たちの學校をどうしようかと、眞鍋に相談すると、土曜は半日だから構はないだらうといふ。それで子供たちは、みんな學校へ出された。然しそのあとで容態がどうも思はしくなくなつた。午まで持つかどうか分からないといふので、すぐ子供たちの所へ、それぞれ迎ひが出されたが、その車がなかなか歸つて來なかつた。其所へ長女と一緒の學校へ行つてゐた二女の恒子が、心配で學校にゐる氣がしなかつたといふので歸つて來る。近所の早稻田小學へ行つてゐた四女の愛子も歸つて來る。すぐ病室にやると、愛子がいきなり、わつと泣き出した。それを鏡子がたしなめると、漱石は眼を瞑つたまま、「いいよ〳〵、泣いてもいいよ」と言つたのださうである。長女の筆子を女子大學の附屬ま

で迎ひに行つた車は、途中で轉覆した爲め、歸つて來るのがひどく遲れたが、それでも筆子に怪我もなく、そのままその近くの車で歸つて來た。そのうち長男の純一、次男の伸六も歸つて來る。みんな揃つて午ごろ病室に這入つて行つた。曉星の制服を著た純一がバタンと音を立てて枕元に坐ると、漱石はぱつと眼をあいて、純一を見て、にやつと笑つたのださうである。そのうち中村是公が來た。鏡子が案內して枕元に坐り、中村さんですよと言ふと、漱石は「中村誰」と訊き返した。中村是公さんだといふと、「あゝよし〳〵」と言つた。そのうち宮本叔がやつて來た。

漱石の容態が絕望ときまつた時、鏡子は眞鍋に、どうせ絕望ときまつてゐるのなら、もう注射をするのはやめてくれ、さうして安樂に死なせてやつてくれと賴んだ。それで眞鍋は注射を控へてゐたが、宮本は來るや否や、そんな今から絕望するのは早すぎる、前の修善寺の時も注射で助かつた、醫者としては命が續いてゐる限りは病氣と戰ふべきであると言つて、注射を勸めたので、みんなもう一度勇氣を振つて、注射で病氣と戰ひ始めた。そのうち高濱虛子が來て病室に通る。虛子が夏目さんといふと、漱石は「はい」と答へた。僕高濱ですがといふと、「有難う」と答へた。

そのうち漱石は非常に苦しみ出し、自分の胸をあけて、早くこゝへ水をぶつかけてくれ、死ぬと困るからと言つたかと思ふと、人事不省に陷り全く意識を失つてしまつた。急を聞いて茶の間に集つてゐた弟子たちは、病室に駈けつけた。駈けつけて見ると、もう鏡子が筆をとつて末期の

水を漱石の唇につけてゐる。子供や弟子たちも順順にさうして漱石の唇を霑ほしたが、その時の漱石は、頰から顎へかけて髯だらけになつた蒼い顏を仰向け、眼を高い所に虛ろに注ぎ、吐逆の、引く息ばかりが目に立つやうな息をして、枕元に誰がゐるといふ事どころではなく、自分が今死んで行きつつあるのだといふ事さへも意識には上らない、朦朧とした意識狀態にゐるとしか思へなかつた。それまでじつと漱石の脈をとつてゐた眞鍋が、漱石の手をしづかに漱石の胸の上に返し、御臨終でございますと言つて、頭を下げた。午後六時四十五分である。この日寺田寅彥は、同じ胃潰瘍に罹つてうちに寢てゐたが、漱石危篤の報を受けとつて、病軀を押して見舞に來た。然し無理に病室に押し入る譯にも行かないので、悄然として子供部屋の壁にもたれてゐたが、胃の具合が惡くなつて、到頭漱石の顏を見ず、四時ごろ歸つてしまつた。

丁度そのころ鏡子は、漱石の寫眞をとつて置きたいと言ひ出した。寧ろ殘酷にも思はれるこの申し出しには然し、それ相當の理由があつた。瀕死の病人の寫眞をとると、病人が持ち直す事もあるといふ事が、一部に信じられてゐるのださうである。それで寫眞師が呼ばれ、寫眞が撮られた。然し醫師が匙を投げてしまつた漱石は、勿論持ち直さなかつた。漱石がなくなつてから、津田青楓が松根東洋城から賴まれて、漱石の死に顏をかいた。是は大正十二年(一九二三)の震災で燒けてしまつた。その夜森田草平の發案で、新海竹太郎にデス・マスクを取つてもらふ事になつ



大正五年十二月九日歿前

た。新海竹太郎は水でといた冷たさうな石膏を漱石の顔一杯に塗つて、型をとつた。是は後に二面のブロンズに鑄出され、一面は漱石のうちに保存され、一面は朝日新聞社に寄贈された。

漱石の遺骸は鏡子の發意で、翌十日、鏡子の弟中根倫、漱石の兄直矩の子夏目小一郎、小宮豊隆が附き添つて醫科大學に送られ、長與又郎執刀の下に、解剖に附せられた。その報告は、長與又郎によつて、十二月十六日の日本消化機病學會で講演され、その筆記は、翌大正六年(一九一七)三月三十日發行の『日本消化機病學會雜誌』第十六卷第二號に發表された。

漱石の葬儀は十二月十二日青山齋場で行はれた。漱石は五女ひな子が死んだ時にも、眞宗の寺を嫌ひ、殊に夏目家累代の菩提寺本法寺を嫌つて、其所と關係が出來る事を欲しなかつた。然し外に好い方法もなく、御葬ひだけを其所でするといふ事にして、柩を其所へ運び經を上げてもらひ、落合の火葬場から持つて歸つた御骨は箱に入れたまま、埋葬するまで、是を本法寺に預けた。然るにその後漱石が雜司ケ谷に墓地を買つて、御骨をとりに行くと、本法寺の方では、頻に何か愚圖愚圖言つて、容易にそれを引き渡さうとしない。仕舞には辯護士を賴んで表沙汰にするとまで言つて、やつとそれを取り戻したといふやうな事件があつた爲に、漱石は愈本法寺を嫌ひ出した。それである時何かの話の序に、鏡子が、あなたが亡くなつたら御葬ひをどうしませうかと訊いたら、漱石は、まあ禪宗の御經なら聽いても可いと言つた。それでは宗演を賴まうかと言つた

ら、いいだらうと答へたとかいふので、葬儀には導師に宗演を頼む事になつた。その爲め松根東洋城が鎌倉まで出かけて行つた。宗演は喜んでそれを引き受け、葬式の前に一度友人として靈前に燒香したいと言つて、前日わざわざ早稻田まで來て、燒香した上で、文獻院古道漱石居士といふ戒名を書いて行つた。同時に自分が上京する時には、いつでも其所に泊る事にしてゐる、小石川茗荷谷の至道庵道雲寺が、白隱禪師に緣のある寺だとか言つて、それを紹介し、佛事は爾後其所で營む事にした。漱石が生前、自分が死んだら棺の前で經を讀んでくれと頼んであつた、神戸の富澤敬道、鬼村元成は、約束のとほり神戸からやつて來て、漱石の所に滯在し、十二日の葬儀の折は無論、一七日の間、御經を上げて歸つて行つた。遺骸は落合の火葬場に運ばれ、翌十三日に骨上げがあり、二十八日に埋骨式があつた。雜司ケ谷の墓地で、ひな子が葬られてゐる隣である。もつとも是は後に移されて現在の所に、一周忌に間に合ふやうに、改葬され、且つ墓が建てられた。墓は鏡子の妹婿鈴木禎次の設計で、書は菅虎雄の筆である。

まだ二十回くらゐは先きが書いてあるから大丈夫だと思ふと漱石が言つた『明暗』は、漱石の死後なほ五日續き、十二月十四日に至つて絕えた。漱石は恐らく十一月二十一日の午前中に『明暗』第百八十八回を書き了り、明日書くのは第百八十九回であるといふ事を忘れない爲に、自分の原稿紙の右肩に、小さく189と書き留めたが、その日は辰野隆の結婚披露に參列し、翌日からは

寐込んでしまつたので、凭り馴れた紫檀の卓の上に、寂然として置かれた原稿紙の右肩の、小さな189が、眞の絶筆となつてしまつたのである。

昭和十三年六月二十五日印刷
昭和十三年七月一日第一刷發行
昭和十三年十月十五日第三刷發行

夏目漱石

定價貳圓五拾錢

著者　小宮豊隆（こみやとよたか）

發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎

精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店

電話九段(33)　一八七番　一一八八番　一八九番　一一八〇番　一〇二二番（小賣部專用）
振替口座東京二六二四〇番

（寺島製本）